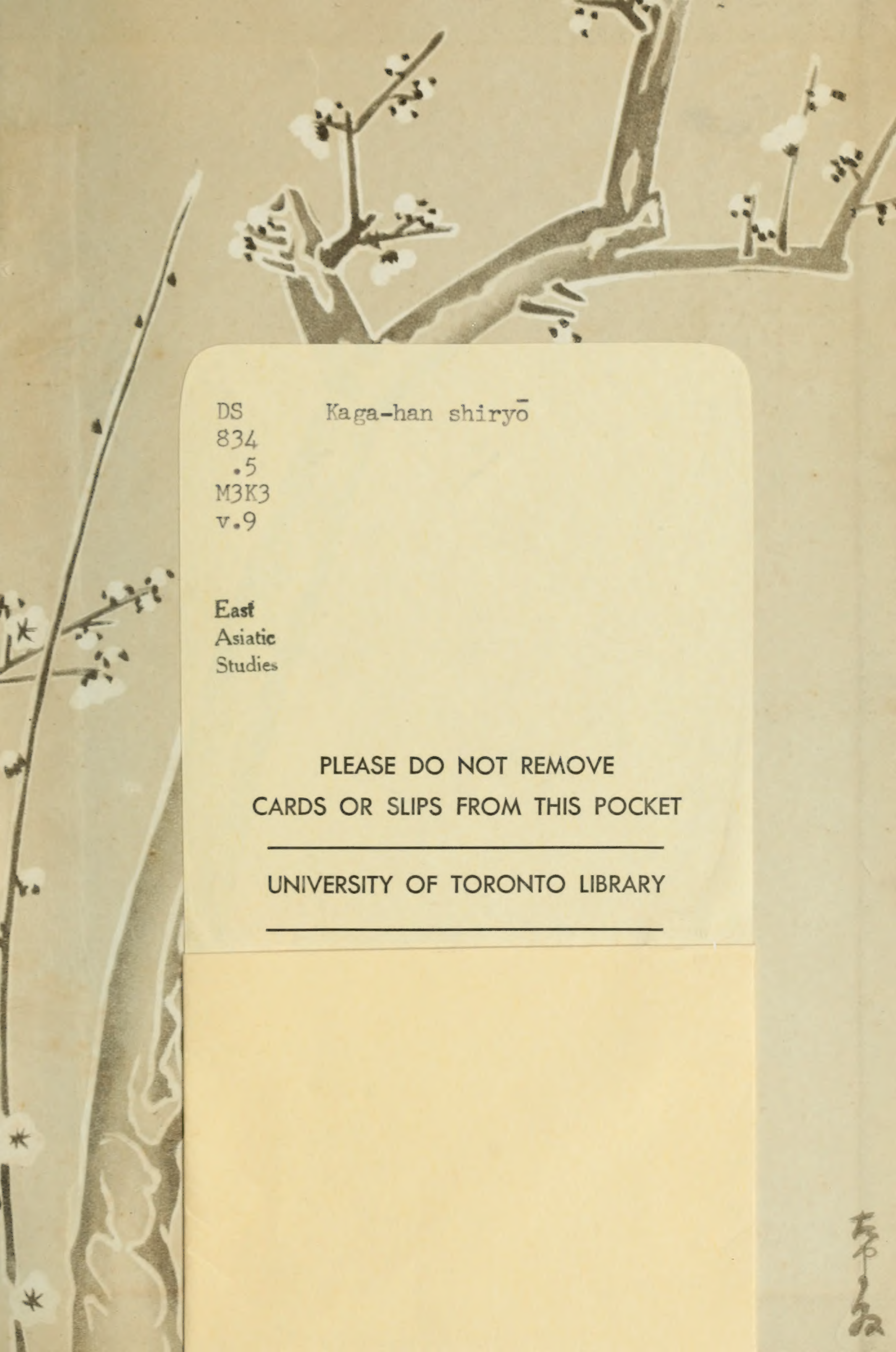




加賀藩史料

第九編

自安永四年
至天明八年

加賀藩史料第九編

安永四年

正月朔日。前田治脩登營して年頭の禮を行ふ。

〔大梁公手記〕

正月元日吉。天氣好、風無之静、甚長閑。か様成氣色はいまだ不覺由誰彼も申す。

一、目覺丑半刻之事。湯に入、髮爲結之。

一、髮相濟次第直に裝束、かな色腰明茶之無地のしめ・赤色小紋麻半上下着用。於居間祝膳に居る。奥小將兩人に而給仕相勤む。獻立は例歳之通極り居るゆゑ不記也。右相濟、裝束直し候事。

一、卯刻供揃に而、卯中刻登城之事。

裝束　鐵色之直垂・烏帽子・末廣爪紅（松竹梅鶴龜之繪）

裝束は六つ三部にいたし候へば、心都に相濟丁度宜位也。已來とも以此格可爲規矣。懷中は、鼻紙袋は不懷中、守り袋までを懷中する。尤内ぶところ宜。手紙少々、是又内ぶところへ入

御機嫌は前田重教のなり

に而宜候。其外袂等へは一切何も入不申事。此處吳々念入候而宜候事第一之心付候事は、少刀之こひぐちはなはだ可改候。前夜より逸角・十郞左衞門内、小將共へ立合改候樣急度申付置候へ共、裝束附仕廻少刀帶候時、猶又逆樣に振抔いろ〳〵に致候而相改、心許なき事聊無之樣に精誠念を入候而帶候事。

右出宅前、於常席六郞太夫呼、今日之御機嫌相伺處、益御機嫌好被爲入候段申す。將亦只今登城仕候段も申上る。夫より直に登城之事。

一、尾張黃門・水戶相公登城之事。尾張羽林は明日登城之由。部屋住は二日に而候由之事。

一、獻上之太刀目錄は坊主共跡より持參、部屋に而予側に指置也。

一、御禮前目付衆部屋へ來り、御禮之列見置候樣被申、帳面爲見被申。御三家之次に予名前有之。鳥渡一覽、令承知旨申演候而宜候也。

年始御禮之次第式　御白書院也。

一、御三家・連枝等大廊下へ寄せ候上、御三家櫻之間へ被出を聞、予も櫻之間に着座す。大廊下に奏者番衆列居、前を通り候節中座會釋。太刀目錄は坊主共跡より持來り、予側に指置候を前に置、字頭を向うへなして、太刀はがたを手前へなして乘せ置くべし。列立候うへ、稍暫間有之、御黑書院之方より目付衆一人被參、しつ〳〵というて大廊下之方へ行、其次同

朋頭一人、是又同大廊下之方へ行と、程なく老中順々被參候時、御三家之太刀目錄奏者番持出、雁之御杉戸之際に扣る。月番老中請取る。此時御三家右御杉戸之際へ寄る。太刀目錄老中披露段々御禮。畢而御左之方御敷居之内に着座。水戸同斷。水戸御禮之内、奏者番一人雁之御杉戸之際へ着座を見請、予太刀目錄持、右奏者番之際に扣る。其内水戸太刀奏者番引候と、老中會釋有之と、直に太刀目錄乳長程に持出、目錄直す。其上に太刀はがたを手前にして置、少し後すさり、御敷居より二疊目正眞中程に而謹而御禮。不斷はひたひの疊に付候を規とす。烏帽子に而は、烏帽子之先之方疊に付候を規とすべし。夫より自分左之方へ少しひらき立候而、御正面通り御敷居之外へ出る。此往來御簾有之間、烏帽子の少しもさはらざる樣進退肝要也。うつむき過候と、ゑぼしの後ろの方きは立候ゆゑ、却而さはる故、頭なすゑ、至而少しうつむく心に而、全躰身を沈め腰に而かゞみ候事第一の心得也。いつ迚も此趣にて宜。御敷居之外鯉之御杉戸之方、御敷居之外より三尺計こなたに而手をつき候而、老中之方を烏渡伺候而、御敷居之内へずり込也。水戸とずりつき着座する故隨分心得すべき也。御敷居之内へずり込候而直に平伏、上意之有無次第直に頭を少々上。大躰始終疊より一尺五・六寸位に頭を下げ居候が宜候也。其内に予持參之太刀奏者番引之と、直に御前へ御吸物御引渡、御土器御換、土器出ると御三家・予にも御吸物出る。御三家は三方、予は足打也。何れも白木也。御吸物は兎之由也。一切盛有之。御給仕人前へ被直候時、膳に手を添輕く戴く貌。此時烏帽子の先之方、土器にとかくあたる

物也。隨分其心得可有之候事。夫より上樣御箸被爲取、御吸物御祝之御樣子を御三家伺被居、予も少々御上段之方を伺居る。御祝被遊候を見請、御三家箸を被取、御吸物を持、箸を御吸物にそへ、箸を口へ鳥渡付候眞似を被致、予も同然。とかく御三家を見習候が宜。夫より又箸を納む。尤平伏して居る內御盃被爲取、一獻被召上、御加有之。其御盃御三方に乘之、御下段中央に置時、尾張黃門吸物をわきへよけ、御正面にすゝみ頂戴、一獻請、加有之。御盃を被持、鯉之御杉戶之外へ被退、したみ有之時、老中一人右御杉戶之外へ被向、御盃被請取、御三方に乘之、御酌御前へ指上時被出、御盃御取上之時謹而平伏有之。夫より歸座之時、吳服臺御下段中央たてに直之時、尾州被出、御上段へ向ひ御禮申上らる。此時持出候人吳服臺之際に平伏。尾州御禮相濟復座之時、直に御勝手へ引之。右御盃御加有之、御三方に乘之、御下段之中央に有之時、水戶被出。此時予とひつつき着座故、膳に直垂之引等障候而は如何故、被出候時少々予膳を下之方へずらせ置宜候。是より水戶御盃頂戴之次第尾州之通り、何之相替儀無之繁重故不記。相濟歸座之時、予膳を予前へ直し置宜候也。右御盃御加有之、御銚子之口へのせ、中央に御酌扣有之を見請、御敷居之外へ後ずさりに出立上り、御正面より御敷居之內へ入る。此時も惣躰身を沈め、御酌之少しこなた三尺不足計よりずりすゝみ候時、御酌（長柄銚子之事也。）を被出。此時右之手に而御盃を取、少し跡へすさり、兩臂をつき謹而頂戴す。

此時も烏帽子之先之疊につき候を規とす。御盃は額へつくつかざる之境をよしとす。夫より向うへ手出候て、極めて御盃に烏帽子之先があたる也。甚心得有之ところ也。此處猶更而日より相考證べき也。扨右之通頂戴、夫より御銚之方へ少々向ひ、尤御盃兩手に而持、臂之付不付之程にして出す。御酒はつぎ候眞似迄なり。夫より又少々正面に向ひ、兩臂つき、口へつくかつかざる之位にしてよし。尤隨分頭をひきくいたし宜候也。御酒をつぎ申而戴候事は一圓無之事。最初戴候時迄也。甚此處も心得有之事也。隨分覺悟有之事也。夫より御盃右之手に持、手左之方へ少々ひらき立上り、御正面より御敷居之外へ出、最前能出候節之通りを右、御敷居之こなた二尺計より御敷居之内へすり込、直に御盃を右之袂へ入候事。此時左之手に而右之直垂之袖口を持、不目立様いたし候事肝要也。隨分落不申樣氣遣致可申也。此時呉服臺出る。持入下に座付候を相圖に、又御敷居之外へ最前之通り後之方へすり出、立上り御正面御敷居之外際に而座付、御敷居之内一疊目へすり込平伏御禮。夫より又後之方へすり出復座、右進退同然也。呉服臺引之、夫より御前之御吸物等段々引之。畢而御三家・子之膳段々引之。是又引候節、御三家之進退を見請、順候而宜候也。不殘引候而、月番老中御盃頂戴之御禮條々言上之。上意有之。老中御取合、尤此間何れも謹而御禮。右御取合畢而御三家之方を伺ひ、被退候様子に候はゞ、見計次第子より御敷居之外へすり出、退去、中座膝をつき

両手つき御時宜有之。頭は疊より一尺より卑く下げ、夫より立上り直に退出す。御三家・予跡より引續退出、大廊下之中程見計ひ着座、御三家先へ被通、予は是より御三家之跡より引續退出す。直垂之引は、虎之間御縁御三家被上候を見請見計ひ、片脇へ寄り手間不取候樣に上候が宜、御三家と引續さがり申事。末廣は、櫻之間へ御禮前寄候節、坊主共之内に渡置候而宜候事。退出之節請取、腰にさし宜候事。

右に相調候通に而、作法不殘渡事無之。是已來以此記可爲規矣。

正月六日。老臣長九郎左衞門を叙爵せしめたる報金澤に達す。

〔政隣記〕

正月六日、從江戸爲御使御使番不破和平、舊臘廿二日江戸發、今六日金澤到着御使勤之。是諸大夫御願之通被仰出候に付、長九郎左衞門儀叙爵被仰付、大隅守と御改之御使也。

〔御年表〕

正月七日長九郎左衞門連起拜大隅守。中村彌三郎口宣爲御使、正月十五日江戸發足、二月十八日江戸に歸。

二月廿一日大隅守發足、三月四日江戸着。廿八日江戸發足、四月十日金澤歸着。

正月七日。前田治脩登營して七草の祝儀を行ふ。

正月七日卯中剋供揃ニ而、辰剋前登城之事。装束元日拝領之熨斗目・花色小紋長袴。

一、尾張黄門請、水戸忌中ニ而不出、尾張中将迄登城也。

一、於御黒書院御禮也。次第月次之通、何之相替儀少しも無之。今日は年内押詰官位被仰出候面々、右御禮御黒書院にて有之。御禮之順ハ御三家・予・備前、夫より今日官位御禮等之人々也。此處随分不間違様可心得也。

今日者大廣間之面々等登城無之故、其儀也。依之御禮相濟、いつもは御白書院之後御納戸かまへ之方を通り退出いたし候へども、今日はやはり大廊下通りニ而候事。其餘何之相替儀無之事。已来とも此圖式を以可露見矣。

安永二癸辰之春今日登城之節ハ、御禮前部屋へ目付衆御列帳持参、予ニ為見被申、一覽之上承知之旨申候也。今日は其儀無之、列は尤御三家之次也。此儀目付衆之時々了簡次第と相見候。若列帳不見候とも、予はいつ迄も御三家之次とさへ心得候へば宜候。外何ぞ御禮有之とも右之通り也。然なから、もし相替候事有之候へば、目付衆より申談可有之と存候。無之候へばいつ迄も右之通心得候而宜候事。乍去猶又登城之上相考、様子次第に目付衆或は同朋か表坊等之内へ見計尋候而可然也。左候へば猶更丈夫也。予入大廊毎事聞之。右諸不可忘。是

第一之意得也。

寄せ之内、今日大納言様出御之旨、池田筑後守側へ被來演述也。當例も部屋へ來り演述也。

然處右之通りとかく其時之樣子次第と見ゆる。是又爲心得記也。

一、殿中何之相替儀無之、隨分御靜謐。

一、西丸へ登城謁。奏者番當日御祝詞申上候。

夫より直に退出也。兩丸共大廣間・御白書院いまだ御簾懸り有之。是は十五日迄有之樣子也。

御黑書院は無之。無益なる事ながら爲心得記置也。

正月廿四日。能美郡澤村の十村源次、百姓持分の七木伐採を自由にすへき意見を上申す。

〔御高御仕法記〕

口上之覺

能美郡之内所々御林并百姓持山、其外居屋鋪廻り御田地土居畝に生立申七木類、惣而御締方之儀者、先年より別宮御奉行御兼役に而、與力衆度々御廻村嚴重被仰渡、其往還並松之分石川郡山廻り中取噯仕來申趣に御座候。就夫御林往還並松之外、都而百姓持分之七木類前々より之樣子奉考申處、押立御用木に御伐取被成候儀も無之候。依之右百姓持山田畠畦畝之儀者

勿論、野毛川原一村切其村方江御引渡、勝手次第剪取候様被仰渡候者、村々稼之筋にも罷成、別而御郡之内より諸材木・板類ホ多出来仕賣出可申に付、他國・他領よりも買込不申而も御國用指支無御座、畢而入銀にも相成可申哉与奉存候。左候得者自然に稼之潤色も有之候故、其村領之内相應之儀者、御役銀指上候而も難有御請可仕与奉存候。尤御扶持人並許之十村等立會、一村之境塲見計を以、何村より何程々々与定銀に相極置、散小物成銀之振合を以其寄答取立上納仕候にてハ、乍少分累年之儀に御座候間、乍恐御益方にも相成可申哉与奉存候。就中野毛・川原等百姓之勝手次第木苗植付、随分林立候にて以來其者へ可被下候。且右持分之竹木、人々勝手に剪取可申旨、萬治年中御書立を以被仰渡、其後毎度御觸出被為成候得共、林等相仕立候而も、元來七木御縮方嚴敷、畢竟百姓勝手宜時分伐取申儀も難成、其時々御断申上、御役人衆御出御剪渡願之節も、十村中殊更に詮議仕候に付、彼是相泥ミ申旨尾も可有之儀に御座候間、右之通被仰付候者、百姓持山に不限、總躰只今迄在來り申七木類は不及申上、彌以後木苗ホ多植付林立候得は、往々稼之仕入に罷成候故、おのづから人々せり込、七木類大切に相仕立可申儀与奉存候。其上若御用之剌者、相塲を以御買上被為成候而も、是又御差支無之儀に奉存候。尚更御詮議之趣も御座候はゞ、重而可申上候間、先任御尋乍憚存付之趣安豊書仕、御内々上之申候、以上。

未正月廿四日　澤村源次

木梨助三郎様

奥村左太夫様

正月。金澤の町人木屋孫太郎藩の財政整理に關する意見を上申す。

〔木屋孫太郎上書〕

御勝手方之儀に付、御益にも相成可申哉与存付候事共、恐多儀に御座候得共、御時節柄之事故、御取上げも被爲下候者、口達にても夫々申上度存候に付、品々書上申帳。

一、當町方等より段々先納銀幷上米等仕候所、仕法之通無御相違被返下、一統難有、別て米商賣方潤色にも相成候儀と奉存候。併次第に御かゝり入高相増、御運び六ヶ敷罷成候御容子に相見え申候。尤全御返濟に付、跡御用も可成に相調、奉恐悦候。

一、寅年以來先納上米、去八月より暮迄御引當米、惣御渡高凡三十萬石計与奉恐察候。此内段々御かゝり返し二十萬石餘も御調達出來仕候哉。去年は不作に付御取箇御減少之年柄に御座候へば、元利御渡高程御かゝり上被遊候ても、御運びは六ヶ敷様に存候。尤於大阪前々御借銀高凡六萬貫目に相成候儀も、御家之御手厚き所に歸服仕候故与存候。於御當地に、御上之御勝手振大體を人々相計、自然と氣請惡敷、御調達方繰合不宜罷成候。此上御かゝり上は六ヶ敷

可有御座候。

一、江戸表にて、舊冬金子御調達出來仕候儀風聞仕候。此儀も當座御用方相辨候處は宜儀に御座候得ども、御當地或は大坂より御仕送金銀之内にて御返濟可被遊儀と存候。尤右御かり返しにも可相成候得共、やりとり被遣候内利足銀等相懸り、何れ之道御不足相立申儀に奉存候。

一、大坂當年中踏御目當も被爲遣候旨、御廻米之御内意も奉承知候。御米高相損候所甚六ヶ敷可有御座存候。併米・銀之内御才覺を以可也に御手も合可申哉。右御廻米に付、何卒大坂御調達も出來仕候様にと存候へども、中々一方の御防ぎに相成候程之銀高御調達とては不奉存候。譬ば七萬石之御廻米代銀凡三千貫目計。

内

八百貫目計　諸方・内町御故法御渡高

千百貫目計　去暮御調達銀并辰巳ニ等へ御返濟銀

二百貫目餘　京都・大坂屋敷御入用高

〆二千百貫目餘

殘八百貫目計　江戸又は御國に御下銀之分

右殘銀之外に、新調達七・八百貫目計も濱方・辰巳屋等にて出來可仕哉。右出來仕候ても、千六・七百貫目ならでは銀子相調不申候。濱方・内町共に急には人氣も直り申間敷与存候。如何程人氣宜敷相成候ても、銀高御かゝり入之儀は相見え不申候。惣銀主も御指間之躰奉存居申事故、急には氣請も直り申間敷与奉存候。

一、江戸・大坂共に氣請宜成、御調達出來仕候共、中々御手支無御座程には相調申間敷候。畢竟は御かゝり入無御座御勝手に相成不申候ては、御益と申處には行屆不申与奉存候。最早當未秋より來申之年へ越候御繰合、以之外六ヶ敷期に至候樣に奉恐察候。

一、當町幷粟崎・本吉等米・銀惣御かゝり入高、凡一萬貫目餘に茂相成居可申奉存候。莫大之御かゝり上に御座候得ども、是迄騷動も不仕候。此所は乍恐御奉行樣御仕法宜敷故と奉存候。其仔細は、前々町方御用銀千貫目之割符被爲仰渡候得ば、町中騷ぎ質屋も商賣を止、餅も搗不申、煠も揚不申、繕り普請も不仕、ひそ〳〵と仕候。然處當時は、餘程之銀高御かゝり上に御座候得共、御實儀之御取扱故歟、人氣も損じ不申候。尤惡評書捨物等武士・町共に徘徊候得ども、此儀は大公儀之御容子にて引くらべ候得ば、當時御勝手方松平右近將監樣を初、田沼主殿頭樣・河井越前守樣次郎兵衞之事也。等を惡口仕狂歌等樣々御座候内、ちよんがり坊主之曲節に作り候を、御旗本衆御うたひ被成候樣相成、御縮り方ゆるみ申候故、御加增・御敍爵等被仰付、御

威光付候様に被遊候儀、世上に奉存候事に御座候。既に近國越前などにても、百姓御城下へ押寄申儀、其外御用銀等被仰渡候に付、武士・町共に騒々、右躰之悪口に御座候得共、御役人中に御威光御付置被遊候故、御用方も相辨、却て騒動も不仕候。他國にては五・七年目程には、様々之異變起り申儀に御座候。於御國は、銀札以來二十ヶ年計に相成候得共、隙掲・株拂相止候程之儀無御座處、難有儀に奉存候。

一、御家中十五石宛御除知之分は、當年は被返下候御約束之由、武士・町ともに難有儀に御座候。併是迄餘程之御米高御かり上に御座候へども、左のみ御上之御益に相成候形も相見え不申候へば、被返下候後は眼前之御指支与相見え申候。尤御家中之御取箇に御損毛と申は無御座候。御上には近年御貸米等打續候御損毛に御座候。右十石宛之除知は、御上御損毛之處にも消え申儀与存候。先年は大坂御米直段六・七十目、御當地三・四十目位之米相場故、御家中半納・未納御召等未に被成御付、御廻米に相成候處、皆上之御徳用与相成申候。近來は御損毛而已打續候へば、御家中より上り候右御除知之分は、米直段宜所にて考相候得ば、御家中に御損毛は無御座与存候。

一、右之品々書立上候趣にては、御勝手方御取續御運び難相調事而已申上候様に可被思召候得共、此末御借銀方相增候ても、可也に御辨は可被遊候哉。私式之愚案にては、右躰之御振

合与相見え、乍恐安堵不仕、既に去八月より以來、上米等に付ても辛勞至極成御用共与奉存候。是迄御かゝり入之分、御改法等御詮議も御座候て、何卒御勝手も相直り、御領國も富み繁昌仕候樣にと、朝暮奉念願候儀に御座候。就夫私儀先年江戸表ゟ罷越候砌、大公儀御勝手方御役人之内御心易仕候方御座候に付、御勝手方之御振合承申候處、有德院樣御代初之砌は以之外御指支にて、諸方より御用米・御用銀等可被爲仰付御詮議に御座候處、有德院樣思召を以、御儒者方へ御内分被爲仰渡、大き成御勝手之仕法行屆可申儀、古書等にて心付候はゞ可申旨に付、御儒者方御詮議之上、論語之内、道千乘之國敬事而有信節用而愛人使民以時与申所を書抜被指上、右三言之内御勝手御仕法には、節用かけ申候ては御續相成不申候。節は竹之節にて、分限を御極被遊候事と、おひさく思召候ては不宜候間、惣御物成に段々節を御付置被遊、割り合割付置。夫々御手當等厚く被仰付可然段、御儒者方より被申上候由。此儀御尤に御聞請被遊候哉、夫より御内密を以、松平左近將監樣・大岡越前守樣・神尾若狹守樣、此御三人ゟ御内談之上、諸役場幷に御臺所其外金銀出入有之所々へ被仰渡、年々入用十ヶ年分を書付御取上げ被遊、當りと申儀を御付被遊、一ヶ所切に一ヶ年之御入用分銀を御定被成、其役場々々ゟ御渡切に被遊候由。其外御益之筋、諸役人より心付候儀を右三人ゟ相寬、段々節を付候旨に御座候。勿論右當りと申儀にには樣々御工夫御座候。口達にて不申上候ては難相分

儀に存候。右諸役場切に御入用御割付被遊候儀も、御物成御取箇・米直段幷に豐凶之儀共、十ヶ年平均を以一ヶ年之當りを御付、不時御物入之備へも有餘御座候程に御立被遊、圖り合御割付被遊候事故、大公儀之御勝手方は申儀無御座候樣に相成候段。尤右諸役場一ヶ處切に御入用高當御割付被遊候以後は、其役場々々之御役人より分限を越え申候御用は隨分御斷被成、御役人之働に相成候由。且又先御役人より歸御役人御入用方に當りを被付、減少も不仕候ては勤功も無御座候樣に相成、當時は何れ之御役場にても、役所附之金銀夥敷出來仕候由に御座候。既に頃年大火之砌、御老中は十三萬兩御貸渡、其外見附・升形等之御普請並等茂、御詮議之上、役所々々之御有餘銀を以、御手當被遊候段承及申候。

一、近年御勝手方、先納・上米等にて御遣ひ付申候樣に存候。前條に茂申上候通、御奉行樣等御見濟方筋合宜敷被爲仰渡候故、一統歸服仕居申候得共、元來金銀拂底之御國故、右之外氣請はやく損じ申候。既に越前表などには、二萬兩餘之御用金、是を度々御取立に御座候。右割合を以圖り候得ば、於御當地は七萬兩計（此銀凡四千五百貫計）之御用銀は出來可仕儀に御座候得共、往古より千貫目より餘計之割付無御座候。然ば御國より江戸仕送等茂可也に出來仕候共、段々御領國之金銀拂底に罷成可申と存候。何卒御領國へ金銀入込候樣にと奉念願候。別而當町方手廣く商賣仕候樣に御工夫茂可有御座儀と奉存候。御先代樣より御國法も御座候て、御制

禁之品々多、交易之道は甚不通用に御座候。交易之道不通用にては、御國不繁昌に罷成、御不益与存候。其仔細は、御國之穀物幷に産物等他國ゟ交易仕候得ば、御國方之利潤に御座候。他國之穀物・産物を御國ゟ買入候ても、衰微之筋には相成不申儀与存候。譬ば他國豐年にて御國方凶作之節は、他國にて下直成處之物を御國へ入、不足を補ひ申候。勿論御國之商人損不仕候得ば、御益与存候。加越能之御大國与、他國之小大名様方之御領地与引競べ見申候得ば、他國よりは格別金銀之通用不宜、別て當町は金銀餘計に可有御座候處、勢州・尾州・薩州其外他國にては身元宜敷町人夥敷、京・大坂・江戸等ゟ出店等仕候。於御國は左様之取組も相成不申、渡世に仕儀は御家中へ取替銀仕、利足等を申請、或は半納・本納御米を取扱仕候迄にて、他國より利潤を取入候交易少く御座候様に存候。太閤様・權現様には大坂・江戸繁昌之御工夫専に被遊、惠すれども不費と申所にて、敢て金銀御貸渡も無御座、剰御取立は嚴敷御座候得共、唯交易之道自由に被仰付候處にて、御惠みは相濟居申候与存候。尤交易自由に被仰付候儀には、品々御支へ等可有御座候得共、御當地富み候筋を御益と御立、諸事御聞届不被遊候ては、指閊多儀与存候。

一、近年大坂米穀下直にて、御國方高直に御座候。是以後御廻米等も御仕法相改り候上にては、其年柄之米直段等御引合、隨分御國にて御拂米に被爲仰付候はゞ、當町潤色にも罷成可

申ニ有候。當時之御廻米は、大坂にて御かり入被遊度爲に被仰付候樣に相見え申候故、色々工夫も仕候得共、建物にも不仕、銀子調達も仕兼候儀に御座候。

一、御當所諸場・諸役所金銀御取扱無御座樣に御仕法御立、操廻之書替を以銀子ニ御立、夫々出入被仰付、尤御除銀等は正銀を以御土藏へ五百目包に仕相納候はゞ、百目に付二分宛之入目、五・七ヶ年目には銀子にて二・三千貫目計も御德用に可相成御仕法も御座候。此儀は御尋も御座候はゞ、別段に相調指上申度候。

右之趣共、頃日上米等不才覺に付ニ少分仕詰候之間、年々ヶ樣にては如何相成行可申哉与任存候相調申候。何分此末御用方之儀、如何樣とも被爲仰渡候通相働申度、不顧恐奉書上候、以上。

乙未正月　日　　　　木屋孫太郎

二月朔日。前田重教、治脩と共に本年初めて騎射を行ふ。

〔大梁公手記〕

二月朔日

一、馬場へ罷出候樣ニ而被仰出、裝束之儀高右衛門へ承合處、馬乘はかま迄に而宜候由申す。依之其通に而罷出る。御馬見所へ直に上り候樣被仰出、上る也。其内御出被遊、段々御さし

や被遊、予へも被仰付、相済、彼是稍久御咄等被遊候事。七半時過御居間へ御入御禮申上る。

且又予も跡より居間へ入る也。

二月朔日夕御騎射書

千　有　三杖尺五寸射張　御

各胴着・行縢・笠着二篇目より弓籠手袴・笠着

羽　喰　五杖射張　坂井仲丞

安鹿毛　同　山本左次馬

千　久　御

玉　水　予

吉栗毛　五杖射張　戸田五左衛門

深津黒　御

安鹿毛　同　關屋齋宮

宮井青　同　有田正右衛門

栗糟毛　同　細川團右衛門

本栗毛　同　有田伴右衛門

小川黒　御
尾花　予
團栗毛　同　岡田助太夫
青毛　御
羽くひ　同　岩山主計
栗糟毛　同　明石儀左衛門
鼠栗毛　御
安鹿毛　伊藤津右衛門
團栗毛　圓屋齋宮
御先立　團七兵衛
日記　佃久太夫
　　青木内藏頭
指引　武田喜左衛門
已上

右は當年初而依記之畢。

九郎は寳生大夫

御装束は最初より御弓籠手・御はかま・御笠也。予は玉水迄乗る也。

二月八日。前田治脩の生母壽清院の二十五回忌法會を寳圓寺に修す。

〔政隣記〕

二月八日於寳圓寺壽清院様廿五回御忌御法事有之。御寺詰人熨斗目着用。

二月十五日。前田重教能樂安宅延年舞を演ず。

〔大梁公手記〕

二月三日

一、安宅延年之舞一件、當月二日暮比九郎出、段々存念之趣萬右衞門へ直に申聞候由。卽猶又覺書も持參候由に而相渡候由也。病氣押而罷出候段申候由。顏もはれ足も引候樣子に相見え候旨、萬右衞門申候由權左衞門咄す。

一、安宅延年之舞、九郎より別紙之通申上候。此通に候へば餘り御にくゝも不被爲在候由。扶持方取上候儀も先見合可申。去ながら此上予了簡次第沙汰有之樣被爲思召候由。卽九郎書付被渡下、御請は無用と被仰出故不指上候なり。卽右覺書左に記す。

安宅延年之舞御傳授致度思召に付、被仰出候御書付之趣奉拝見候。延年之舞之儀は、嫡子之外は不相傳候樣にと先祖より申傳置候。依之代々嫡子之外者右之項之部披見不仕候。秘

郡十江國部平右衛門にて河合三郎右衛門と共に十村なり

書翰子計へ相續仕候。私儀當家養子之儀御座候間、先祖ニより申置候通別而相守申度存念御座候。乍然御家之儀は、御代々御厚恩之御儀御座候間、萬端格別に相心得罷在候之様にと養父九郎より申聞置候。先祖申置之申、養父存念之申、右兩端之趣に而私儀此度之御請甚以當惑仕候。依之御傳授申上候儀は奉恐御免度候。奉恐入候得共、御人拂に而被聞召候はゞ、仕形等御咄には可奉申上候。右之所被爲聞召分候様願奉存候、以上。

二月二日

二月十九日

七半時比、只今御仕舞被遊候間拜見可仕候。安宅を被遊候へに、延年之舞之御仕形被遊候。猜謡を被遊候節は、聽之ひとつより御仕形を被遊候間、變而被爲仰出候。其心得仕候而拜見可仕旨、萬右衛門を以被仰出。甚御内々之事故、權左衛門へ可申聞旨御意之由也。

二月十六日。先に幕府領羽咋郡千路村の百姓邑知潟の新開を出願したるを以て、是日以降加賀藩領沿岸の肝煎等幕吏川井越前守の取調を受く。

〔國事雜記〕

覺書

一、河合三郎右衛門・揚子兩人、并諸組より肝煎惣代 肝煎中之内四人、但深江村平兵衛・國井

村三郎左衛門・千田村作兵衛・酒井村喜三郎此四人、何れも未正月十五日金澤表出立、罷下り候所、道中深雪に而罔り之通難參、同廿九日江戸表高澤平治右衛門殿御小屋迄罷越候所、拙子共并右肝煎四人共御詮議之品有之、御小屋に御指置難被成候に付、則會所より御指圖に而、江戸本鄕四丁目上總屋市左衛門方に旅宿御申付置候付、拙子共儀前々より御小屋に罷有候に付、其段急々申上、何卒今般も御小屋に御指置被成候樣申上候處、此度は格別御詮議之品有之、難成旨平治右衛門殿御申聞に付、則右廿九日より市右衛門方に何れも罷越居申候。

一、二月十六日川井越前守樣御屋敷へ御呼出に付、拙子共には御聞番平田三郎右衛門殿御指添、千路村之者共并肝煎四人には、御預け所懸り太田三郎左衛門殿御指添御越被成候處、同日八つ時分拙子共并肝煎四人、千路村之者共御呼出、則右兩人も御指添御吟味所に御出被成候所、越前守樣等御出、右人々御受取之旨被仰渡、三郎右衛門殿・三郎左衛門殿にに御座に御立御歸り被成候。拙子共等は相殘り居申候所、又々御呼出一通り御吟味有之、暮合過何れも罷歸り候。委細御吟味之趣は別書記有之。

但、右御吟味所に御出之刻は、平田三郎右衛門殿・太田三郎左衛門殿次に而脇指御取、無腰に御成被成候。拙子共も次に脇指置、無腰に而罷出候所、右御兩人は緣に御入、拙子共は右緣之下に又低き緣有之、其前に罷有之。肝煎中之儀は白地右之上に罷有候。其後御吟

白地は白洲なるべし

味之節ハ右之通ニ候。
一、三郎左衛門殿・三郎右衛門殿ニも、御式臺口ニ而刀御取、御家來へ御渡、脇指迄ニ而御通り被成候。拙子共儀も右之通ニ而、刀ハ美吉・長藏へ爲持置候。
但、三郎右衛門殿等御兩人ハ御座敷へ御通り、拙子共儀ハ諸國御大名方御役人或ハ御代官衆之御使人等御達御溜り被成候二階有之、其所ニ溜り居申候。御吟味毎度出候節も、右溜り之間ニ罷有候、火鉢・たばこ盆出申候。茶ハ出不申候。辨當ハ持參、其所ニ而給申候事。

[岡部舊記]

今十六日川井越前守様御宅ニ而、漁師等十五ヶ村惣代・肝煎共四人、并私共兩人御呼出、御引渡相濟、何も退候様ニ被仰渡、尚暫有候處、根岸九郎左衛門様并而御呼出、御吟味之趣左ニ奉申上候。
一、肝煎共ゟ被仰渡候者、十五ヶ村入會潟陸ゟ湊ニ相成、魚ヲ蒙鎮漁業之、御前千路村人數七百人計り之者共渡世仕來候ニ付、右潟廻も新開ニ仕度旨、尤私領方ニハ新開も多出來仕候由、右千路村より訴出候。指圖申儀在間敷旨被仰渡候。
此御答、魚猟ハ十五ヶ村入會ニ而仕候得共、土地之儀者其村領切銘々より支配仕來申候。尤新田之儀、寛文・元祿年中之古新開ニ而、享保九年新開高ハ應之儀ニ御座候。只今御尻切ハ

候而は領境も混雜仕、十四ヶ村之者必至与迷惑仕候哉旨申上候。

一、前段之通申上候所、重而被仰渡候者、獵魚入會潟に候間、千路村願之趣指障り可申樣無之筈。殊に御高出來いたし候得者、國之寶土民之ため。勿論領境混雜仕儀は無之、御料・私領入交候而も相障り申儀は無之段被仰渡候。

此御答。肝煎共一往申上候得共、道理御与聞え兼候付、私共方より申上候者、年久敷村々、境切に諸事支配仕來申候。猶又延寶三年土方河内守樣御領之時分、御境塚被仰付、双方百姓納得證文帳取遣仕置、領境相守り來申候。左候得者、潟之儀は陸之境に見渡可申旨申上候所、右納得證文帳可指上旨被仰渡候に付、則上げ申候。

一、右證文帳御見受之上被仰渡候は、證文帳用立不申候。獵入會に候得者、千路村願に相障可申樣無之旨被仰渡、右帳面之儀者御寫取御返可被成旨に而、御預り置に御座候。且又古書物等有之候はゞ今之内出可申、追々出候而は請取不申旨被仰渡候。

一、大知川之儀、垣内田村領之内ゟ掘替候得者、只今迄之川筋よりは間數も纔に而、村方之爲に相間申旨被仰渡候。

大知川は邑知川

此御答。肝煎共よりも申上候者、左樣御座候而は、垣内田村御田地之儀者勿論、人家にも相障り、其上隣村千田村・尾長村等御田地用水等必至与指間申旨申上候處、左樣之中立に而は難

譯立旨被仰渡候。

一、新開高之儀者、御關條文に小前帳に而も可有之間、可指上旨被仰渡候。

此御答。新開之儀者、下之證文ヲ申もの相渡り居申候。只今持參不仕候間、國元ゟ申遣指上可申旨申上候。

一、前段相記候、延寶三年双方納得帳に指添候繪圖可指上旨被仰渡に付、追而指上可申旨申上候。

一、御領所千路村組頭幷百姓之儀ニ、御私領村肝煎共より先に御呼出御吟味有之、其樣子相知不申候。御私領肝煎共御吟味之節者、千路村之者共一座に御吟味被仰付候。

右今十六日根岸九郎左衛門樣御吟味之品、并御答申上候趣書上申候、以上。

未二月十六日　　河合三郎右衛門

岡部平右衛門

高澤平次右衛門殿

乍憚小紙を以申上候。

當十六日川井越前守樣御宅へ、參代・肝煎共四人幷私共兩人、千路村之者共御呼出に付、御聞番平田三郎右衛門殿・御領々所御扱許太田三郎左衛門殿御指添に而、越前守樣へ御越御引

渡相濟、右御兩人は御返に而、村方之者共幷私共兩人先退座仕候樣被仰渡、扣罷有候所、重而御呼出、根岸九郎左衛門樣御吟味之趣、指上候書付寫別紙上之申候。御吟味方六ヶ敷御樣子、氣毒奉存候、以上。

未二月十八日　河合三郎右衛門

岡部平右衛門

御改作御奉行所

御郡御奉行所

追啓申上候。高澤平次右衛門樣には御指添無御座候、以上。

能登國本江村外十五ヶ村惣代

三郎左衛門

平兵衛

作兵衛

喜三郎

十村　河合三郎右衛門

十五ヶ村は羽咋郡九ヶ村鹿島郡六ヶ村

岡部平右衛門

右宿本鄕四丁目

上總屋　市右衛門

右之者共召連、明廿九日四つ印可罷出者也。

〔岡部舊記〕

六月二日金澤着、同暮六つ過御用番迄到着之御案内仕、翌三日御改作奉行・御郡奉行・御算用場御奉行樣等相廻り、翌四日御場へ罷出候所、御算用場御奉行樣方御列座に而、御用儀之趣夫々御聞、始終心勞仕候段御挨拶御座候而、先歸宅仕休息候樣に被仰渡、退座仕候。御改作所・御郡所よりも右之通に而、何れも心勞仕候段御挨拶御座候而退座仕候。五日御殿に相廻り、六日には兵五郎先達而相返し、拙子儀は七日歸宅仕候。河合氏も同事に罷歸り申候。

二月二十日。能登所口町奉行、十村等の盜賊改方事務に關して命す。

〔岡部舊記〕

其方共組下百姓共之內、賊躰之心掛有之者令見聞候者、早速封紙面を以可申斷候。

一、被盜物有之節、役所へ呼出候而者、村方難儀之事に候條、質屋より假寄之品申出次第、向寄裁許十村へ達紙面を以、被盜人相向候節可申渡候條、其手筋之被盜人極候者、青村を以

可申越候。手合に而相濟候分者、取噯之儀十村迄可申渡候。

一、令般門前村・走出村等之振合之儀者、隨分十村手合に而可遂詮議候。其上にも不得止事儀者、此方ゟ可申斷候。

一、拙者盜賊改方爲御用罷越候節、食事等御定之通、一汁一菜輕く相認可指出候。於旅宿之儀、申渡之筋有之呼出候者共有之候而茂、不指支所を可申付候。其外之儀者、假令見苦敷候而も尤不苦候條、左樣に可相心得候。

一、雨降等之節送迎之村役人等、雨具等勝手次第相用候樣可申渡候。賢作法躰之儀者、不相欠樣可相心得候。

右之通可得其意候、以上。

安永四二月廿日　　有賀甚兵衛　印

奧兩御郡十村中

門前走出は鳳至郡

二月二十日。能登所口町奉行、藤内の盜賊改方事務に關して令す。

〔岡部舊記〕

奧兩郡所々藤內共、盜賊改方を申立、夜中提灯等を燈し、或は短脇刺等を差、役人等之宅に而茂無謂踏込候族有之由及承候。ヶ樣之儀者、藤內不相應沙汰之限に候。前々も如申渡候、

盗賊改方之儀ニ準使ニ相心得、役筋ヲ申立右躰之族無之様可相心得候。尤脇指提灯等之儀堅不相成儀ニ候條、已來心得違候者於有之者曲事ニ可申付候。隨分廻方無懈怠相心得、賊躰之族、暨旅役者・諸浪人可相改旨、急度可申渡候。右之趣見廻之節可申渡候得共、先其方共より可申渡置候、以上。

安永四二月廿日　　有賀甚兵衛　印

奥兩御郡十村中

二月廿三日、前田重教本郷邸に於いて手妻を演ぜしむ。

〔大梁公手記〕

二月廿三日、手妻いたし候もの於式臺被仰付候間見物可致旨、萬右衛門を以被仰出、難有仕合奉存段御請申上ル。

一、右手妻被仰付候故、鬢屋之事蔦之間に相成候由。近習頭共席へは廊下溜懸候而往來、下は胎内くゞりにて藝人往來之圖りにいたし候旨、昨日十郎左衛門言上之。おく小將并居間方こども、溜りはよききゝ候而外にいたし候由。御間輪、今早朝より取懸り候。よなかに而は丕丞申付候由。十郎左衛門と兩人に而間關等いたし候旨、綿田言上之。近邊廻り一統見物、表向は當番切見物被仰付候旨、丕丞申渡候由。是亦同人言上之。朝五時前より取かゝり、九時比

御見物は前田重教

出來之樣子也。藝人共は中之口よりは上り不申、表小將どもの溜り之後邊より上り候由。餘り人多にも無樣子之由、是又同人言上之。

二月廿三日於敷舞臺番付

京土產富貴の花生。山雀の餌落手妻。八筋かけ繩ぬき手妻。たすき繩の手妻。白紙櫻花手妻。雀の首きり。鹽衣須磨のおりかけ片手人形。

右田中龜文。長うた長島庄次郎。笛田中傳次。鼓木村左市。三絃杵屋市五郎。後見中山新市。

中入

八つくさり繩ぬき手妻。白紙鳩になる手妻。風流紙ぬき手妻。幣そく働手妻。天狗つぶて小石手妻。灰水に入て濡ざる手妻。釣花生手妻。洒宴車。雛形をどり人形。祝言手猿劒烏帽子。

右田中龜文。長うた寺島庄五郎。ふえ田中傳次。鼓木村庄市。三絃杵屋市五郎。後見中山新平。

以上

右御縮入內下り御見物有之。予見物所も狹間戶入縮之趣に成る。去どもやはり表向也。近邊之者どもは新廊下之方に居る也。尤屛風に而しきり、表之者と不混樣に申付る。

梅八郎の流刑に處せられたるは明和八年四月廿九日に在り

二月廿四日。梅八郎流刑を宥免せらる。

〔政隣記〕

二月二十四日左之通。

　　　　是前中將樣御表小將也　梅　八郎

右八郎儀不届之趣有之、流刑被仰付置候得共、其節御宥免、從配所被召返、御知行高如元五百石被下可被召仕旨、從中將樣被仰進、此段可申達旨被仰遣候條、可被申渡候事。八郎元組御馬廻へ被指加之。

右之通段々結構至極之儀仰出候間、自今急度相慎、顯泰公相勤候儀肝要之事に候條、此儀も可被申聞候。

八郎せかれ吉之助儀、一類へ被預置候儀御宥免被成候條、此段可被申渡候事。

　　二月二十四日

〔政隣記〕

翌安永五年四月十五日、先達て指出置候先祖以來被下置候御判物・御印物被返下候段、頭吉田茂平より御用番奥村主人殿被仰渡、御渡に付、八郎布上下着用押付罷出候樣申談、於茂平宅相渡、御請書付に茂平以連書上之、兩組頭宅へ爲御禮相勤候樣申談候事。

但、御用番等御宅へは不及相勤候段も申談候事。

二月。領内の社寺に命じて德川家治の爲に厄拂の祈禱を行はしむ。

〔加賀古文書〕

白銀十枚　御目錄　石動山天平寺

白銀五枚充　御目錄　白山・倶利伽羅長樂寺

右今年公方樣御厄前年に付、當三月幷寒中、來年御厄年に者正・五・九月幷寒中、右三ヶ所においで御祈禱被仰付候。依之御目錄之通被遣候條、御祈禱執行有之、寛永四年之通可被相心得候事。

二　月

三月三日。金澤香林坊より出火し餘煙城内に及ぶ。

〔政隣記〕

三月三日夜五時過、香林坊橋高町家より出火之處及大火、廿軒計燒失。右に付各登城之處、二之御丸風下に而吹付候に付、從御城代御指圖有之、諸手合人數段々入防之、河北・石川御門外迄揃有之。御大小將も御番頭同道御玄關前迄相集り候處、手明之家來共奥之口之方ゟ防に廻し候樣、御城代御指圖に付、御橫目足輕指添相廻防之。其内鎭火、御城代御指圖之上各

本件は安宅延年の舞に關するものなるべし

退散。且右に付御暁様迄池高之御亭に御立退、鎭火之上御反。御供笠間宅左衞門・御大小將三人等。火元石浦町近江屋金次郎也、井波屋八郎兵衞講。

三月十二日。前田重教寶生大夫の傳授書を却下せしむ。

三月十三日

一、寶生大夫一件に付被仰出候趣覺書、萬右衞門持參之由に而三宅持參及披見。對更此趣宗老共申聞、翁蓮會議申上度候旨可申上置旨同人へ命。覺書左に記。

嘗寶生大夫每度御用之節被召候へども、病氣之由申立、其時々全罷出候儀無之。今度御傳授物之儀被仰入候處、乍承知伎致是申立及延引、彌三郎等を以被仰入候巳後漸罷出御傳授申上。其節右壁書相認指上候樣御直に被仰入、重而萬右衞門を以及被仰渡候處、奉畏候段御請仕、又候及延引、每度御催促被遊候處、持病之差引打臥罷在候由に而段々及延引、此間辻平丞よりも以紙面及催促候處、昨十一日可差上旨申上、今日寶生彌五郎を以上候へども、前段之首尾甚不埒之趣に思召候。依之右覺書は御用無御座、封之儘可相返旨被仰出、御彌五郎へ相返申候。當春指上候紙面之內にし、代々奉蒙御高恩候御家柄之儀、大切奉心得候樣委文申聞候段申上置候。然處年頭にも不罷出、尤病身之事に候へ者、不沙汰之段は其通にも思召候得共、萬端先九郎等之勤方ゟ上甚致相違、被是塵言之至法外之仕形共、不

持之儀思召候。右之趣に候間、是已後中將様御用は被仰付間敷旨御意御座候事。

二月十二日

一、昨日被仰出候事故、日付は十二日と有之也。此覺書は今日萬右衛門持參す。已後爲晴不審記之畢。

三月十五日。前田治脩登營して阿蘭陀人を觀る。

〔大梁公手記〕

三月十五日

一、今日之御機嫌相伺處、益御機嫌好被爲入候段申す。將又只今登城仕候段を申上る。夫より直に登城之事。

一、尾張黄門・水戸相公・紀伊相公登城之事。尾張羽林は斷也。

一、於御黑書院御禮月並之通、次第何之相替儀無之候事。

一、御三家退出之節、於殿上間阿蘭陀人見物有之退出之處、直に予入り代り一覽す。坊主共毛氈敷側に居る。尤予が供する也。一覽之内文筆五枚爲書、初而見物す。通詞は三人と見ゆ。

廊上下着用して側に扣る也。暫一覽直に退出す。ちうじやく門に至る頃、丁度御三家駕籠に被乘、供之者共取上り候時節無頼之調子也。直に駕籠に乘る也。

御機嫌は前田重教のなり

三月十六日。能登の漁民が獲たる海鼠は凡て之を所口の鹽屋淸五郎に賣渡すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

能州出來之煎海鼠、所口町鹽屋淸五郎請負を以、長崎御用相勤來候處、近年諸國に對し候而者、淸五郎大坂賣登薄く候故、去年於大坂に長崎御用俵物方役人相咎致迷惑候。元來能州出來煎海鼠之儀者、右淸五郎一人請負に而致賣買候處、近頃者猥に相成、潛に致直賣買候者共有之、煎海鼠拂底に而、自ら大坂賣登も指支候間、前々之通煎海鼠之儀は、淸五郎に賣渡可申候。尤賣請候儀有之候而も、同人より買請、都而直賣買無之樣仕度段申斷候。若直賣買いたし候者有之、淸五郎承出候はゞ、相咎及斷に申筈に候條、煎海鼠出來之浦々に、其旨相心得、以來直賣買等不仕趣嚴重可被申渡候、以上。

午十一月六日　　御算用場

年午は安永三

高澤平次右衛門殿

榎尾左膳殿

右紙面之趣得其意、末々迄不相洩樣可申渡候、以上。

未三月十六日　　榎尾左膳

能州四郡十村中

三月。羽咋・鹿島二郡に猥に蠟燭を製造販賣するを禁す。

〔御郡典〕

能州所口町蠟燭座　四郎兵衛
久兵衛

右之者共羽咋・鹿島兩御郡蠟燭座相勤罷在候。然處近年御預所に而出來之蠟燭、右兩御郡之内江持參に而潜に致賣買候故、右兩人之手代共蠟燭持參候而も聢々敷不相求候に付、自然与商賣方薄く相成、及迷惑に候。蠟燭之儀者前々より御定も有之候處、近頃者甚猥に相成申候間、是以後右之族無之樣仕度旨、兩座之者共より相願候に付、有賀甚兵衛添紙面を以被申聞候。無據趣に付承屆候條羽咋・鹿島兩御郡之内に而右之族無之樣可被申渡候。以來猥成儀有之候はゞ、兩座之者共相咎可申候間、嚴重可被申渡候、以上。

午十一月　御算用場

高澤平次右衛門殿
槻尾左膳殿

右之趣得其意、末々迄不相洩樣可申渡候、以上。

午は安永三年

未三月　　　　　　　　　　櫻尾左膳
　　　　　　　　　江戸御用　高澤平次右衛門

羽咋・鹿島兩御郡十村中

四月十三日、前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

四月十三日、上使御老中松平周防守殿を以、御國許へ之御暇被仰出、御例之通白銀等御拜領。從大納言様も上使御老中阿部豐後守殿を以被蒙上意、御例之通御拜領物有之。

〔大梁公手記〕

四月十三日。九つ七部五りん上使松平周防守被參。昌平橋之附人來り次第表へ出候事。大書院に居り、夫より備州初數寄之方へ被出候を見請、使者之間杉戸之際に出懸る。本郷三町目附人乘次第階上へ出懸、先供之見付へ折曲り懸り候を見請、直に階を下り、草履をはき、向うより乘り候程を考、門内より外へ向ひ、右之方しきみ之外に出向ふ。上使駕籠より被出、予前へ來り中腰會釋。予は兩手を膝之下へさげ、頭も傾候而さげる也。夫より上使之左之方へより先立す。敷附も左之方より草履をぬぎ上り、大書院へ誘引。是よりも皆奏勤之節上使之作法に相替儀無之。其内奏聞之節に拜領物無之故、上意拜聽、直に上使下へ被下と、予も

夫に隨ひそろ〳〵と下り對座になるなり。御暇之節は拜領物上段際に飾有之。依之上意拜聽、夫より拜領物に向ひかろく手を添頂戴。尤頭は疊に付、とくと頂戴いたし候が宜。餘りはやきは、外より不敬に見ゆる也。其內に上使は下被申候也。小書院へ誘引等之樣子、相伴、或は持參之品々等、是又參勤之節之通、何之相替儀聊無之候。

上意之趣覺書にして持參、坊主共之內へ被渡、長佐受取越す。卽左に記す。

上意之趣は、

松平加賀守（これは覺書也、依而名乘有之。）

國許ゟ之御暇被下、拜領物被仰付、近々御目見可被仰付候。

此通り演述也。上意之御請。

以上使國許ゟ之御暇被下、拜領物仰付、重疊難有仕合奉存候。

右御請之儀、上使申演之內には近々御目見可被仰付旨有之、左候はゞ其趣も御請に可申演儀歟と太郎左衛門等穿議申付處、必申演候には及間敷。是は上使之演述に而、上意に而は無之候間、前段之通迄申演宜旨申故、其趣に相極畢。然ば巳來幾萬年未永く無際限、此格之通可有之者也。其餘之進退丕事等例之通り也。

一、西丸八つ三部五りん、大納言樣より上使阿部豐後守被參、次第前之通何之相替儀無之。上

意之趣に、是亦覺書持參、上意之趣はきと申演不分明故、覺書有之候はゞ乞請度旨長佐迄申候へ共、從彼方被遣候儀に而、私共より違而申出候事は難成旨申由。依之予承候通りを及御請也。退出之節小書院次之間に而使中より被出、長佐に被相渡、長佐より越す。依之左に記申候。

上意

松平加賀守

御暇に付大納言様より拜領物被仰付。

上意之御請

以上使拜領物被仰付、難有仕合奉存候。

右之通申演。御暇に付之申事はきと不承故、承候通りを應候而及御請也。已來は隨分御請前に右覺書被相渡候様、養長等へ申聞爲取計候様可致候也。此儀は重而之節間番共へも爲遂會議可申事。拜領物之儀迄同様に而被事。

四月十五日。前田治脩登營して就封の辭見す。

〔德川實紀〕

四月十五日。臨時朝會あり。松平加賀守治脩就封のいとま給はる。松平陸奥守重村を始め參覲廿六人。

〔大梁公手記〕

四月十四日晝過、田沼主殿より奉書到來、左之通。

明日五半時登城暇之御禮可被申上候、以上。

四月十四日　　田沼主殿頭
板倉佐渡守
松平周防守
松平右京大夫
松平右近將監

松平加賀守殿

家來二人御目見被仰付候間、召連可被罷出候。

四月十五日

一、今日之御機嫌相伺處、益御機嫌好被爲入候段申す。將又只今登城仕候段を申上ぐ。夫より直に登城之事。

一、今日月次御禮登城之人々は無之候事。

一、予一人御暇之御禮也。其餘陸奥初何れも參勤之御禮也。

御機嫌は前田重教のなり

一、御禮目付衆部屋へ來り、今日御禮之習禮可致旨申、直に竹之御廊下へ行。尤大廣間之面々例之通列座有之、奏者番衆被參、一篇習禮有之、宜旨被申。夫より又部屋へ入居候事。

一、追付寄候樣、目付衆部屋へ被來而遠也。此面曾見合、大廣間之衆大方被參候上參り候か宜也。竹之御廊下之やつこ上に着座有之宜候。尤下座之樣子にもよるべし。猶其時之樣子見計可有之事也。御鎖口之際知有之と、大目付羽目之間之方より來り、奏者番之後に列座、是を見請座を何れもすへる、二疊になる。老中列座有之時目付衆會釋有之。予すゝみ奏者番肝煎之側に扣る。出御上段御着座。老中手を被上候時、奏者番御緣頰へすゝむ。此時肝煎會釋有之、御緣頰月次之御禮席に而御禮、松平加賀守と披露之。夫ゟへと上意有之、御左之方御敷居之内に着座平伏。此時、此間は段上使國許へ之御暇被下、拜領物被仰付難有奉存旨、月番老中言上之、致歸國緩々休息致す樣にと上意有之。懇之上意之趣難有奉存段、月番老中言上之。賜馬之上意、御鷹・御馬拜領難有奉存旨月番老中言上之。畢而退去之事。退候節、御禮人之獻上物之尺堆も無之故、其前後に心を配り、不相障候樣にいたし退候事。此處随分心懸候而宜候事。部屋へ參り候道筋は、御白書院之備樓・間大廊下右之通り也。部屋へ入居候內、段々御禮相濟候分一人々々被參、直に退出有之。

右不殘相濟、曾有之土屋長三郎被參、追付退出候樣被申。孔雀之御杉戶之邊に而曾見合、黑

鷺御杉戸に例之通老中列座を見請出、中程に平伏額を疊に付申演候趣。
今日於御黒書院御暇之御禮申上候處、御懇之蒙上意、御鷹・御馬拜領仕、家來之者二人御
目見被仰付、重疊難有仕合奉存候。
申演候ゝ、月番田沼申上ませうと被申、少し後へすさり申樣に進退いたし候時、
宗門之儀念入候樣之事。
參勤之節道中人多無之樣之事。
月番演述有之。此時は額を疊に付、只無言に而はつと請申迄に而隨分宜候事。夫より退去、
直に退出いたし申事。
一、西丸へ登城、奏者番へ例之通於白書院御緣頰謁す。
今日登城、於御黒書院御暇之御禮申上候處、御懇之蒙上意、御鷹・御馬拜領之、家來之者
二人御目見被仰付、重疊難有仕合奉存候。
右申述、於部屋燒飯たべる。これは坊主共へ申候へば、聞番共へ申持參いたし候也。湯を乞
候へば卽持參す。御室燒之奇麗成丸き形之茶椀也。白木之臺にすゑ、足打八寸也。ふたは杉
ふた。甚きれい、杉之匂ひふん然たる次第。湯も隨分宜。替りも最初之通りにいたし、持參
す。卽相待候へば、召上り御數寄屋方のゝにて御座候旨申す。何程に而も無遠慮たべ候而つ

かへ不申事ニ部屋に而暁仮にて候者今日初而、丸渴も初而故記之畢。已来心得之ため也。何時に而も此心得こ而宜、西丸は此通り也。御本丸はいまだ無之故、様子いかゞしながら、替りたる事も有之まじきやと存候事。

一、下乘並老中門前、何れも御勤故其込合様子故有見合、大躰宜時分申上候様、坊主共を以間番共へ申聞置也。此間に御白書院へ行、御間之番等夫々有候事ながら再見。御鎗口或は帝鑑之間・ほどを廊下等にはそこらも見る。其内最早宜旨、間番共より坊主共を以言上之。直に夫より退出、老中・若年寄御勤之事。暫見合候故候、一向に甚静に而誰にも出逢不申、一段之首尾に而候事。往来ことも又神田橋通り、随宜、少々ごみ立候方、風一圓無之甚靜。

一、御勤に名乘に而口上書之通宜ミいふ迄也。老中はとくとつくばひ、若年寄は中腰より少し早く有之可然。猶可考。

四月廿一日、前田治脩江戸を發し歸國の途に上る。

〔政隣記〕

四月廿一日江戸御發駕。

〔御年表〕

御供西尾隼人明轅、御禮使前田主計孝博。

藥師村は河北郡

四月廿九日。前田吉德の女暢姫、名を祐仙院と改む。

〔政隣記〕

五月六日、暢姫樣御儀、兼而思召立候に付御名御改被成候趣、御兩殿樣ゟ御伺之上、前月廿九日御名祐仙院樣与御改被成候事。

右御用番奥村主水殿被仰付聞旨等御横目中演述。

五月二日。中川善五郎途上に於いて過言したる小者を殺害す。

〔日　記〕

中川善五郎

右三宅權左衛門組善五郎儀、一昨二日藥師村本興寺へ參詣仕罷歸候節、暮合頃高道町相通候所、小者躰之者行違候時分、慮外之仕形有之候に付、相咎候へ者過言申聞、其上手向申候に付、不得止事殺害仕候。則町役人共ゟ相斷預置、私宅へ罷越相斷候に付、檢使之儀書附奥書いたし、公事場奉行中ゟ相達、夫々取捌申候。他所においても右之仕合に付、今日御用番ゟ以紙面輕御達申置候。右爲御承知如此御座候。御廻可被返下候、以上。

五月四日　戸田靭負

同役中樣

五月四日。前田治脩金澤城に着す。

[政隣記]

五月四日、昨夜今石動御泊、今四日八時御歸城。御作法前々之通。且江戸表ゟ之御禮使人持組前田土計、御目見拜領物御例之通に而七時前發足。

[政隣記]

六月四日、今度御道中步御供之人々わ、今日於御次嶋布・金銀夫々御例之通拜領被仰付。

五月五日。前田治脩寶圓寺及び天德院に參詣す。

[政隣記]

五月五日、寶圓寺・天德院江御參詣。御供人、大當日之服布上下に而御供。

五月十五日。前田治脩金澤郊外大豆田に放鷹す。

[政隣記]

五月十五日、大豆田口江御放鷹。

五月廿三日。前田重教湯治の爲歸國の許可を幕府に出願す。

[續漸得雜記]

中將樣先年之御痛、今以御勝不成候付、御國許之温泉ニ御入湯御保養被成度候間、此節御國許ニ之御暇被仰出候樣被遊度候。御參府之儀は、御指圖御座候樣被成度趣御願書、五月廿三日御用番松平右近將監殿へ長谷川太郎兵衞殿を以御指出之事。

右前廉御內分御聞合候處、中將樣御直御願に候へば上使有之候趣、御奏者番上使に成居申由、江戸詰合御家老より申來。

五月廿七日。德川家治使を遣はして前田重教の歸國を許す。

〔三壽御譜〕

安永四乙未年御國許温泉へ御入湯之儀、從治脩公御願ひ所、五月廿七日上使御奏者番井伊兵部少輔正則を以て御暇を賜る。

六月朔日。前田重教登營して歸國の辭見す。

〔三壽御譜〕

六月朔日、依御本書御登城、謁見拜謝し給ひ、御懇の命ありて良馬を賜ふ。

六月七日。組外組の番頭等その軍役に關して伺書を呈出す。

〔正德至天保雜留〕

本文は前田重教のことに係る

安永六年五月十五日參照

組外御軍役出方等之儀、委敷先年より被仰出候趣も無之に付、同役不残詮議之上示談仕極、安永四乙未年六月七日相伺候趣、書上紙面扣。

但、右示談相濟候上、少々意味有之に付、六月四日中村久左衛門儀二之御丸に罷出、人持富田外記・御馬廻組頭三宅権左衛門担此節御軍役御内御用相勤候人々。両人に内意申達候。組外御軍役出方等之儀に付相伺申度趣有之候。重而儀ゆゑ各様迄内意得御意候段申達候處、一段可然段権左衛門申聞候付、左候はゞ同敷に書物に而差上申度段申入候處、尤其通り可然段権左衛門申聞候付、左様はゞ指上候節各様御両人之内可差上旨申達候而、同月七日佐藤久右衛門筆頭此節岩田猪右衛門ニ候而、江戸表御家老御印談、依入日書記之請ニ可、久右衛門ゟ差上之段日来ニ承申入ル。二之御丸に持參、富田外記迄以差上置候。書上紙面之調筆は中村久左衛門に候事。

書上紙面扣

組外四組、御弓番支配等私共御軍役之儀、先年より委敷被仰出候趣も無之、先同役共より相伺候趣も無御座候。私共本心付候に付今般奉伺候。

組外馬上之指物、金の小旗長さ五尺幅一尺、馬廻中此分に候。番頭は半より下に、面々支名又は紋名に而も、識ずし与見る申様黒く付べく候。

如此元祿十年園邊書御渡被置候節、御意之趣之由に而申傳候。此外に御軍役之儀何之被仰出

茂無御座候。其以後有澤故惣藏に承合候處、組外金小旗者前々之通、私共指物は四半に御改被遊候段申聞候由。是又申傳に而、慥成被仰渡は無御座候得共、此趣は明和八年書上置申候。當時私共指物御細工所ゟ相頼申候付、所持仕候茂四半に御座候。此儀幷組中指物幷麾等之樣子も、委細に被仰渡置候樣に仕度奉存候。

一、組外使役之儀、出立御定茂御座候樣にも申傳候得共、是又慥成儀承傳不申候付、今般奉伺候。御出陣等之砌、使役之儀兼而一組御預被遊候儀に御座候得者、其時に至相應之人品兼而心得置可申儀に御座候哉。左候はゞ一組に何人与申儀も、兼而相心得置申度奉存候。

一、組外之備旗之儀、御定も御座候樣に申傳候得共、是又慥成儀相知不申候。一組之内に旗を立可申儀に御座候哉。組中之内役旗を出し申身代之者は無御座候。御渡可被遊儀に候哉。左樣はゞ一組旗之樣子幷員數等、兼而相心得置申度奉存候。

一、私共御旗本御出陣之砌、御供に可被召連儀に御座候哉。又何時によらず、一組も二組も立離被遣候儀も可有御座候哉。兩樣之進退居所兼而承置申度儀に奉存候。私共一組を兩人ゟ御預け之處、元祿年中御親翰之趣に、私共儀は其職おもきわけ有之、平生も外に頭無之、萬端其方共さいばん仕、組頭におとらざる重職之由被仰渡候。此儀に付而備之進退、一組兩人の番頭、侍共之一備四十騎・五十騎に及候とても、一通り番頭□進退之心得に可有御座候哉。

外に一組之内一兩人計も、走廻指引仕候者其時に至可申談儀に候哉。此處兼而相心得罷可申、第一之儀に奉存候。愚多儀に奉存候得共、兼而心得之儀被仰渡置候樣仕度奉存候。

一、私共儀馬驗之儀如何可有御座候哉。御定に無之趣に候者、小馬驗一本宛爲持可申儀与奉存候。此儀も相心得罷申度奉存候。

一、私共組一組五十騎には及不申候。尤兼而一組侍中何人与申御定も無之儀、其時に至侍中子息等於出陣者、漸一組四十騎・五十騎に及申組も可有御座候哉。左候得者先四十騎内外之御備与奉存候。若一組之旗御渡之事に候得者、一組之内に旗を立可申儀に可有御座候哉。是又奉伺候。又一組之内に立申節は、何ぞ之下へ旗を出可申儀に御座候哉。此儀も兼而相心得置申度奉存候。

一、組中幷私共、上下之人高・知行高によりて役器之員數等、如何相心得可申哉。此儀者兼而組中へも心得不申入候而は、心之も無之儀に奉存候。此段兼而被仰渡置候樣仕度奉存候。小身之侍之儀に候間、役器等も一組之内少々ならでは出申間敷候哉。左候得者兼而組外之儀者、侍中人高も御定無之儀に御座候間、其時に到大躰騎馬相しらへ、夫に應役器相しらへ、不足之分此方より相伺、申下し可申儀にも可有御座候哉、奉伺候。

一、私共四組一・二番之次第、先年より慥に被仰渡候趣も無御座候。此方に而相心得置申趣

も御座候得共、不慥趣に御座候に付、同役共了簡一致不仕候間、非常之節彼是有之可申儀奉存候間、鬮取を以相定置申度奉存候。

一、私共組者役組之儀に付、常々私共幷組中之面々知行御普請役之儀取捌仕候者、家來之内一人宛相撰置申候。此者先年は御普請會所へ指出置、御馬廻組頭御普請方下奉行同事に相勤來候處、中古私共自分之宅に而、右御用主附爲相勤申候。此者之儀、幸人々心懸次第、騎馬之心得に而召連申度奉存候。左候得者、侍中小荷駄之裁許等、手廻にも可宜哉与奉存候。此儀勝手次第相心得可申哉奉伺候。右之趣私共兼而相心得置申度奉存候に付奉伺候、以上。

乙未六月七日

岩田勘右衞門　判
佐藤久右衞門　判
三輪藤兵衞　判
中村久左衞門　判
江守平馬　判
小谷兵左衞門　判
久世平助　判

六月八日。前田治脩、重教の歸國許可を幕府に謝する爲使者を金澤より

發せしむ。

〔政隣記〕

六月四日左之通

組外御番頭　岩田勘左衛門

中將様御國許温泉江御湯治、御願之通前月廿七日被仰出候に付、從加賀守様御禮使今日被仰付、同八日發、御例之通五日之内發に付、白銀五枚・御羽織一拜領。

六月十日。野村藤兵衛發狂して隣人を傷け直に自殺す。

〔大梁公御年表〕

一、六月十日前田圖書家老土谷瀬兵衛方江、隣家之野村藤兵衛与申者致亂心切込、土谷氏せがれ駒介・同兩親・片岡權佐與方等手負、藤兵衛即時に自殺。

六月十一日。金澤に於いて諸士に前田重教が湯治の爲歸國を許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

六月十一日、御用番前田駿河守殿より一昨日之依御觸爻、今朝五時過頭分以上布上下着用登

城、御帳に付栁之御間列居之處、御年寄衆御列座、左之通御用番御演述。依之御用番宅に爲御祝詞相勤候樣、例之通被仰談有之。

中將樣御國許温泉に御痛所爲御保養御入湯之儀、御願之通前月廿七日上使御奏者番井伊兵部少輔殿を以被仰出。且又同晦日依御奉書、當月朔日押而御登城被成候處、於御黑書院御湯治御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、其上御馬御拜領、重疊難有御仕合思召候。此段可申聞旨、從御兩殿樣被仰付候。

六月廿二日。今日以後諸役人を召し前年に引續き借知上納を諸士に慫慂せしむ。

〔政隣記〕

六月廿二日、御馬廻頭二人、御小將頭一人、御用人・御臺所奉行一人宛、同廿四日御儉約奉行不殘、廿五日組外御番頭・定番御馬廻御番頭一人宛、廿六日御射手・御異風裁許一人宛、聞番一人、御大小將橫目當番切二人、御細工奉行一人、右之通追々御前に被爲召候事。

但、廿八日所口・高岡・小松・魚津町奉行、新川御郡奉行、本吉湊裁許、廿九日新番頭・御步頭、加州・能州御郡奉行兩日共一人宛御前に被爲召。

御勝手御難澁、御要脚必至与御指支之御樣子奉承知候に付、當年より可被返下御借知、拙者

其之儀者今年も其儘指上度旨内存之趣、御勝手方御用之河内守殿・三左衛門殿・又兵衛殿へ申達置候。依之答にも御難儀被思召、被指上度面々も有之候はゝ可被申聞候。當年可被返下年限故、上納等多面々、別而小身等之面々は必當にも可被仕儀に候得共、只今に至指支候面々も可有之哉、押而者難申入候。乍然一統差上申儀に相成、被相渡候儀も如何可被存候。尤面々之指支之様子次第、只今迄上ヶ來候米高之儀を被指上候儀は不指支事に候。若又上納等多、手當必至与差支、難被差上面々は、尤無泥可被申聞候事。

六　月

右覺書を以、頭々より組々筆頭一兩人宛宅々ゟ相招申談、尤御大小將・御歩は御番頭・小頭を以、夫々之宅ゟ相招申談有之。

六月三日　定火消青山將監、金谷御殿附近の消防に關する心得を定む。

〔金谷御殿近邊火事之節定書〕

一、出火に而金谷御屋敷ゟ罷出候方向仙石町・松原町者不及申、堂形邊より石浦町・高岡町・南町・堤町・西町邊之火事之刻、早速可罷出候條、右之分金谷御屋敷近邊与可相心得事。

一、御殿ゟ者堂形、前々金谷御門より致往來候得共、居宅よりは七十間御門之方手寄宜候間、此方ゟ可罷越事。

我等は特監

一、請取所は惣人數罷越候者、七十間御門前新柵之外見はからひ纏を建、夫より段々行列之通並居可申候。御門内に入候儀者、其時々に至可請指圖候事。

一、請取所は罷出候節、御門番は申談案内者を乞請、金谷御殿迄使を遣、定番番頭衆之者同所御横目抔之内は、罷出候段可及斷事。

一、七十間御門之外、柵御門之内は者、纏並火消道具之外者入不申候間、持鑓・長柄者、馬与一所に、御門之外一所に集居可申事。

一、金谷近邊出火に候者、我等者請取所可罷出候間、先人數者一先火本は罷越火を防、仲間衆被出候者斷を申、御殿は惣人數集可申候。火之遠近によるべく候へ共、先者金谷は直に罷越等与可相心得事。

一、右方角附より遠方の火事に而茂、及大火候處、又者風筋悪敷候者、火本に罷在候共、火本を打捨、請取所は可罷出候事。

一、我等勤等に罷越、有合不申内金谷近邊出火に候はゞ、早速先人數指遣、我等は其先より直に可罷越事。

一、火本之樣子により、御殿は至て急火に候はゞ、非番之内に而も御殿は罷出、圖書殿・監物殿申談、樣子次第火本は可罷越事。

一、非番之内、行歩等に罷越候時に、金谷近邊出火及大火候者、七十間御門迄先人數之分罷越、將監儀非番之内故行歩に罷越候得共、御殿ゟ急火之躰御座候故人數之分罷出候。御指圖次第相心得可申与奉存候。御門前に相扣罷在候段、圖書殿・監物殿ゟ取次を以可申達事。

一、御門内ゟ人數を入申刻、横目役之内一人、行列奉行之内一人御門下に殘り、人數相改可申事。

一、金谷ゟ罷出候段、并罷歸候儀茂、御用番ゟ使者を以可申達事。

一、御郭の内に而、猥に高聲立申敷間候。口論がましき儀相慎、諸事堪忍仕、聊越度に成間違候。惣躰消口相評申故、火を防候儀自油斷に相成候。縱令消口に相立不申共、先防候事第一に心掛可申候。たとへば一方防留、又外に茂可防處有之候者、先其所ゟ懸り防可申候。最初の消口ゟ、外より續き建消口に相成候共、重而此方之消口に候段申斷に不及候。此外に如何樣之儀有之候共、右准相心得可申候。我等自分之儀に而者、爲端其儀に而存寄相立候儀者無之候條、末々迄其心得仕、諸事靜謐へ相心得可申候。且右之一件者、御郭内之事故、格別に申渡候條、末々迄嚴重に相心得可申事。

一、人數末々又者等迄、行列拔詐より見廻り、其所々に立置、人數引揚候時分、騒敷無之樣相心得可申事。

一、人數建置候內、自分之心得に而火之本見廻に罷越間敷候。其外何等之用事に候共、立騷申間敷候。火之本見分之儀有之候者、横目役等內一人罷越致見分、火之樣子可申聞事。

一、火之樣子により、御門內ゟ人數入候節は、御殿之横通土塀際に並居可申候。御廓內之儀者、萬端御横目中指引次第相心得申筈に候條、一統其旨を存、急火に成火之紛防候節、御廓之內あらし申間敷之事。尤猥がましき儀無之樣、急度相心得可申事。

一、御廓之內急火之節は、年寄中を初被出候間、失禮無之樣に相心得可申事。

右之趣可得其意者也。

乙未六月

本文は政隣記に七月十一日の條に記さる

七月十一日。在江戸の諸士に對し借知上納を免除すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

御勝手御難澁に付、各初組・支配之人々知行米之內指上度旨等、紙面被指出候。當時在江戸之人々は、差上度旨申聞候共、不及其儀に候條、夫々不相洩樣可被申談候事。

未七月

右御勝手方河內守殿御渡之旨等、定番頭より例文廻狀有之。

八月二日。前田重教、佃久太夫に指扣を命ず。

〔御冥雑記〕

中將様より被仰出左之通、八月二日於江戸織部御貸長屋に而申渡、其節御小將横目武田喜左衛門立會。

佃　久　太　夫

御不前儀、不屆之趣有之、思召不相叶候。依之急度指扣被仰付候旨被仰出候事。

久太夫事、最初被仰出候は、役儀御指除、肩衣指挽被仰付、組外へ被指加、急度指扣之被仰出候へども、指挽と申被仰渡是迄僉不申。且學士に被仰付候得ば、關はず、退塞に而も可被仰付哉之旨等、江戸に而申上候處、本文之通被仰出、追而思召も有之旨御意有之候。

〔御冥雑記〕

佃久太夫、江戸に而指扣居申儀前に記す通之處、指扣御免被成候。早速御國へ罷歸候樣可申渡旨、十月十七日從中將樣被仰出、則江戸御留守詰御家老左申渡。

八月二日。前田治脩石川郡宮腰に行歩を試む。

〔政隣記〕

八月二日、宮腰に御行歩。御供之者に西瓜被下之。

八月廿一日。金谷御殿七十間門內に伴ふ從者の數を城內二ノ丸の制に准ぜしむ。

〔政隣記〕

金谷七拾間御門內者三之御丸格に候得共、今般金谷御殿中將樣御座所に相成候に付而者、二之御丸格に供之者召連可申候。且又玉泉院樣丸に役所有之人々は格別、二之御丸ゟ罷出候人々、急御用之外は都而右兩御門往來指扣可申候事。

右御城代被仰渡候由、御横目より例文廻狀有之。

八月廿三日。前田重教江戶を發して歸國の途に上る。

〔御年譜〕

一、中將樣八月二十三日江戶御發駕、九月五日御歸殿。御供御家老篠原織部。

但、五月御暇被進候所、御痛所に付、御届之上八月迄御延引。

八月廿六日。長大隅守の家臣宮田吉郎兵衛、御馬廻組田邊忠左衛門を殺害す。

〔政隣記〕

本文は政隣記に八月廿一日の條に記さる

本藩の借出を爲したるに殆ど貸さられたる者は遂に無相應なり得ずれにせり

九月十五日、大隅守殿今日より御自分指扣。

但、右は前月二十六日大隅守殿家來宮田吉郎兵衛と申者、定番御馬廻御番頭田邊忠左衛門方へ罷越、式臺より入、三男勇三郎を切殺候に付、忠左衛門立合候處、忠左衛門にも三ヶ所深疵を爲負、嫡子八左衛門立合、吉郎兵衛を討留切害。忠左衛門右手疵平癒之御届相濟候上、今月十二日死去。右之趣に付而也。

八月、町・在に對して借銀を行ふべきことを告ぐ。

[岡部舊記]

御勝手次第御難儀至極に而、御取續難被成に付、段々御儉約之儀被仰渡、諸事御風俗とも御改可被遊趣に付、以來御取續之所諸者共色々注詮議候得ども、元來御取高與御入用方引合不申、自・他國御借銀不足之御勝手儀に而、累年御借銀打重り、何分にも御取續之御仕法相立兼候。併此儀に而、畢竟被成方も無之儀に候間、諸事御省略被成、以來御取續之御詮議可被仰付候。然所指當り御當用辨方無之行詰申趣故、御家中諸士とも一弐實加知行米之内茂相上候得共、於御當用御不足過分之事故、中々行届不申候。依之御郡方・町方御かり銀可被仰付より外無之段、各よりも被申聞候に付、詮議之上達御內聽候處、近年御領國一統困窮之躰に被爲及聞召、其上御難儀に付、在方・町方之者共可相渡品々御買物代に至迄時々渡方不全様子

且又以下本の儘

に而、末々致難澁候條、御かり銀は被仰付間敷候之間、幾重にも御儉約を以御運之道立候樣可取計旨被仰出候。誠に思召は一統難有儀ながら、前件之通最早御調達之工面も無之、手段盡申儀に候得ば、右被仰出之趣に而は迚も御取續之道難相立、如斯に而は却而三州之四民一統之困窮にも可成儀に付、此度は在方・町方御かり銀を以、一端御運方無御座候而者難成段、再往達而申上候處、乍御心外不被及是非旨被仰出候。此節諸役人存寄區々に而は、御爲に不相成事に候間、隨分致和順精誠を盡、末々之者共へも右等之御樣子爲致會得、御國恩を存付、一統致信服、御かり銀指上候樣有之度事に候。右御かり銀相調候得者、當時之御要用可也相辨、畢竟御勝手御取直之所にも至り可申候。且又近年金澤町先納銀等申渡、遠所之者共茂下に而取組有之躰に候處、御濟方未否不申渡、去年迄之振に而無之、懸組候者共彌可及難澁候得共致不背候樣、是又可被申渡置候。今般御かり銀は不容易事に付、如斯委細申渡候條、此旨所々町奉行・御郡奉行江得与可被申談候。御かり銀高者、右奉行手前大躰治定之趣各承屆、被申聞候上、猶更可示談候事。

未八月

八月。石川・河北兩郡内に於いて遊獵の爲雉子を捕獲することを禁ず。

[國事雜抄]

於石川・河北兩御郡之內、都而雌子殺生之儀、當分指止可申旨被仰出候事。

但商賣人之儀ニ指止申に不及候。

右之通御家中一統可有御申聞候事。

八　月

九月五日、前田重教金澤に着し金谷御殿に入る。

〔政隣記〕

九月五日八時過中將樣御着。依之二之御丸ハ終日布上下着用。且江戶ゟ之御禮使人持組三田村內匠、於金谷御殿御目見被仰付、二之御丸年寄衆於席紗綾二卷拜領、追付發足。從加賀守樣も、右御禮御使寄合神谷杢左衛門今日發足。

〔三守御譜〕

九月五日金澤御着、金谷御殿に御居住被爲在。

明和六年九月御出府ニテ當年に至りて東都に在ることゝ七年なり。安永五年十一月にて、閏月共二十ヶ月に相成る。依て五年十月御居延御願。同七年五月にて二十ヶ月に付、七年四月中村宗兵衛・國許被仰出御居延御願。同八年十月にて閏月共二十ヶ月に付、八年九月御國許御居延御願。加藤川左衛門役宅にて、九月廿四日相勤る。

安永五年十一月にては誤なり、[illegible]はりたる四年九月より記載したるなり

九月十三日。前田重教・治脩相伴うて金澤城内新築の諸室を觀る。

〔政隣記〕

九月十三日七時過御兩殿樣御同道、虎之御間・實檢之御間・表御式臺江御出。中將樣江始而御覽。

但、御式臺御番頭等不及列居、唐紙建切之事。

九月十二日。本年借知上納を請ひたる諸士以下に賞詞を賜ふ。

〔政隣記〕

九月十三日、一昨日御用番又兵衞殿依御廻文、今朝頭分以上布上下着用登城、御帳に付、柳之御間列居之處、年寄衆御列居、左之通御用番被申述。

當時御勝手甚御難澁之御樣子粗承知有之、知行米之内當一作指上候段達御聽、存入趣御喜悅被思召候段可申聞旨御意候。且又平士以下知行米等之内指上候人々江も可申聞旨被仰出候。

右當座之御禮申演相濟。且平侍以下は夫々頭宅に而申聞候事。

九月十五日。長大隅守その家臣の罪により指扣を命ぜらる。

家來は宮田吉郎兵衛なり本年八月廿六日の條參照

〔御夾囊記〕

大隅守家來、先日田辺忠左衛門せがれ之内を切ふせ、忠左衛門へも手を負せ候。重臣之者昵近之者を右首尾に候處、從大隅守何とぞ申達候品も可有之儀歟之旨等、九月二日御親翰を以御尋、當座之御請上之。右一件最初大隅守儀も、何共心外至極之儀与申聞候へども、致而達御聽候樣仕度とも不申聞、私共にも其心付無御座候付不申上候旨等、九月十二日申上候處、吉郎兵衛儀亂心之躰に候へども、御昵近重き役儀も被仰付置候者之宅へ忍入、三男を切殺、忠左衛門へ手疵を爲負、長騷動之處、何之儀も不申上候而相濟候儀候哉。忠左衛門致方に不行屆儀有之候はゞ、其段は別段之事に候旨御意。同月十五日に又御尋に付、此儀一昨日於別席大隅守申聞候は、家來儀御昵近殊に重き御役儀被仰付置候者へ對し、不屆至極之致形、其上忠左衛門儀も手疵不淺不仕合死去候段、於大隅守心外千萬恐入存候。自分に指扣罷在可申哉之趣等申聞候付、紙面出候樣申談候處、一昨日之日付にて昨日出之、自分指扣可申哉之儀は口上にて申聞候。今日ニ御逢候間遂示談候旨申上候處、ケ樣之儀日柄に懸り延引可有之儀にては無之、片時も早く沙汰可有之儀に候旨等段々御意。且御上より指扣之儀被仰渡候事には、各同席之儀御世話被成候。自分に指扣候旨申候へば、又品輕く候。此儀月番より申談候而は品重く意味も有之、其同席一類之内へ申談、夫より大隅守へ申談候而可然旨御意。本其旨申

上、右之趣安房守等示談之上、河内守へ申談、同日河内守大隅守宅ゟ罷越、右之趣申述、則自分指扣候付、一昨日出候紙面入御覽、右指扣候儀も申上、且紙面之内口達に申述候通と申儀は、自分に指扣罷在可申哉之旨申聞候儀に候旨も同日申上。右御用番迄御意也。御用番は又兵衛也。

御家來宮田吉郎兵衛儀、亂心之躰に而田邊忠左衛門宅へ罷越、不屆至極之儀に而、一昨日御紙面御出被成候付、各遂示談候。此儀に付御噂之趣も有之候間、自分に被指扣可然候。此段拙者より内々可申談旨、房州初被申聞候條、其御心得可被成候事。

九月十五日

私家來宮田吉郎兵衛儀、亂心之躰に而前月廿二日田邊忠左衛門於宅、同人三男勇三郎等ゟ爲手負、忠左衛門ゟも切付候首尾、先達而委細御承知之通御座候。然る處勇三郎には深手に而即座に相果、忠左衛門儀も右疵不致平癒、昨日死去之段致承知、御昵近殊に重き御役儀をも被仰付置候者へ對し、不屆至極沙汰之限成儀、於私別而心外至極之儀致迷惑候。尤亂心之儀に候へば、右吉郎兵衛せがれ等儀は急度申付置候。猶更口達に申達候通に御座候間、此等之趣各にも御示談之上、可然樣御指圖御座候樣致度候、以上。

九月十三日　　長大隅守

村井又兵衛樣

大隅守指扣候儀、御用番宅迄以紙面申越候に付、則諸紙面を以同日宅より申上、御近習頭へ諸紙面を以直に申上候也。中將樣へは御近習衆迄申遣、御橫目へも左之通申渡。

長大隅守儀、家來宮田吉郎兵衛与申者、田邊忠左衛門宅へ罷越、不屆至極之致形に付而、今日より自分に指扣罷在候。此段爲承知申達候、以上。

九月十五日　　　　村井又兵衛

二御丸當番御橫目中

〔御異雜記〕

大隅守自分指扣に不及候條、明日より出勤候樣可申渡旨、九月廿九日御意に付、尚吏伺之上左之通奉書を以申達。此奉書等之儀、此度之詮議に而、先例を以審議之趣は不見也。

御自分儀、自分指扣に不及候間、可被致出勤旨被仰出候條、可被得其意候、恐々謹言。

九月廿九日　　　　村井又兵衛

長大隅守殿

御指扣に不及段、以別紙申進候通に御座候。依之爲御禮、御用番宅迄追付御勤可被成候。尤今日御登城に不及、明日御出可被成候。若火事等有之御出可被成趣に候はゞ、無構御出座可被成候。右之趣に候間、御組之儀も今日御引請御取捌可被成候。河州へは御組引渡之儀申談

候條、左樣御心得可被成候、以上。

九月廿九日　村井又兵衛

長大隅守樣

右之趣中將樣へも申上。

九月廿三日。前田重教十一月上旬を以て江戸に赴かんとすることを告げ、次いで之を延ぶ。

〔政隣記〕

（九月廿八日は政隣記に記載の日附なり）

九月廿八日、中將樣來月下旬より十一月上旬迄に御發駕、江戸へ可被爲入旨、公邊御願は未相濟に付今月廿三日御內々被仰出、十月二日御家老前田圖書等御供も夫々被仰付置候處、御樣子有之御發駕暫御延引之段、同月十四日被仰出候事。

九月廿八日。鑓奉行の職を復し有澤才右衛門を之に補す。

〔袖裏雜記〕

乙未正月十二日到來御親翰左之通。

當家鑓奉行之事元祿以來闕役と存候。猶等閑にいたし置候而は、其役用眼目末々可忘失事候。

當時儉約中、諸事省略之折からに候へども、折節は吟味いたし不沿候而は不叶役者に候間、此度有澤才右衛門へ右本行可申付と存候付、各了簡承度如此候、以上。

正月五日

年寄中

被成下御親翰奉拜戴候。御當家――奉畏候。加藤重左衛門儀、元祿三年九月廿九日御持筒頭より御鎗奉行被仰付、正德三年三月廿七日病死仕候。其後不被仰付儀如何之趣に御座候哉与相考候へども、急に見當り不申候。天和三年二月廿二日北川庄右衛門・有賀甚六郎初而被仰付候。――御鎗奉行に役料貳百石、與力貳騎・足輕六人・小頭一人・小者四十人、小者四人自分仕之躰に而、小者四人迄自分仕与相見え申候へども、指急御請指上候事故、右與力等之儀得与相糺不申候。――如御意右御役筋忘失仕候而は如何敷御座候間、才右衛門被仰付に而可有御座候。左候はゞ、右役儀被仰付、役料は貳百石被下、與力・足輕等御預之儀は追而可被仰渡旨、被仰渡に而可有御座候哉。――いづれにも右與力等之儀は、舊例之樣子相知不申故、治定僉議之趣は難申上奉存候。御前には御存知被遊候はゞ、追而被仰出候樣仕度奉存候。御親翰御上包共奉返上之候、以上。

正月十三日　　本多安房守

村井又兵衞
前田三左衞門
横山河内守
奥村助右衞門
奥村主水
長大隅守
前田駿河守

〔袖裏雜記〕

有澤才右衞門御鑓奉行被仰付候付而は、與力幷足輕は召抱候に不及候。小者四十人之儀は御長柄小者支配可仕候。自分仕小者四人は召抱可申儀与御意。九月廿五日

右最初之被仰出前にあり。其後右奉行中絕之儀は何とか御樣子も有之哉与、段々被入御念御僉議有之候へども、留等何も無之、其段申上候付、彌可被仰付与御治定に而、右之通御意也。九月廿八日被仰付候也。

〔袖裏雜記〕

九月。大聖寺藩へ横目として篠原勘左衞門を派遣す。

篠原勘左衛門大聖寺ゟ被遣候付、神保舍人ゟ渡候覺書之振ヲ以、左之通調、同之通被仰出。

篠原勘左衛門ゟ

覺

一、於大聖寺御家老中席之所ゟ出座可有之候。

一、備後守樣御勝手、是以後御取賄之鼓形、御家老中初僉議之趣相違候上被承礼、存寄之品も有之候ハヽ可被申達候。雖被心得品も候はゝ幾度も被相尋、其評立候樣可被相心得候。元來極意心得之儀は、別紙に申談候通に候。

一、御勝手方等之儀は、河内守より委細申談之答に候。此儀に付被申越候品は、河内守迄可被申越候。

一、備後守樣御行狀等之樣子、且御家老中を初、諸役人取捌等善惡見聞有之候はゝ可被申越候。

右之趣可被得其意候事。

乙未九月

十月。肝煎給米と稱するの誤謬を正し肝煎扶持米の舊稱に復せしむ。

〔司農典〕

肝煎扶持米之儀、中頃より唱誤り肝煎給米与相唱候儀不可然存候。御様子有之事に候間、以來往古之通肝煎扶持米与相唱可申候。

右之趣組々百姓共江も可申渡事。

乙未十月　　改作所

諸郡十村中

十一月朔日。能登の十村等に百姓の行狀に關し諭すべき條目を示す。

〔御郡典〕

御郡中御法度之趣御條目、前々より無怠慢申敎候得ども、末々輕き者江不行屆儀も有之候歟、子弟等之成立不宜、年々不法之族有之候。是偏に御條目与して常々申合置候儀無之故に候。第一肝煎・長百姓心得怠り有之故に候。依之今般御條目之內、別而風俗宜敷相成候儀を抜出し、聞安覺安樣相調候條、村中家々に寫置、妻子兄弟江常々敎可申候。

一、御條目之第一忠孝之事に候。孝行与云は兩親又は祖父母に相隨、善惡によらす親之申事に任せ、少も親之心にさからひ申間鋪候。老たる者は敬ひ養ひ、安樂に暮し申樣可心懸候。子たる者父母に憂を聞しめざるを孝行の第一とす。其憂を聞しめざるといふは、我身之行跡を愼み、第一農業諸稼に心を盡し、朝暮親に仕る時は、奢もなく約にして遊樂に耽る事なく、

行跡宜敷者之取扱法有之者也。然る時は父母の心にも嬉しき事にあらずや。是則孝行といふ。然に不孝之者は、一旦の利口を以親の申事も不用、我儘に暮し、悪敷友に交り、一門の申事も猶又不用、遊樂に而已耽る事日々に増長す。假令親之申分非義にしても、子として不和随時は不孝行といふ。皆我意之成所にして、如何してか孝心を可有哉。不孝の者に佛神之惠み無之、何程働ても皆あらて、一生人の惜を受、終に家も離し申事迄成者也。能孝心を可相守事に候。

一、父母に不限、兄・伯父母之申分も同様に候。長に順ふといふは、兄又は伯父母之申分少しも悖らず不申事に候。一年に而も先に生れたる者には敬ひ順ふを孝行といふ。父母無之迚も兄弟妻子睦敷、家内之申分無之、和順を第一とする時は、商賣も手廻能、親之譲を全請繼を以孝行之本意とすべし。我身婦のをも不受、人之謗りも不請、行跡宜敷を一入心懸、是に背くは我意のなす處にして、不孝行とする事に候。

一、親に早く離れ、若年より家を請繼者は、一門又は古き手代の申儀悖ひ申間敷候。古き手代といふは、親之代より召仕ひ宜敷者に候得者、親同様に存、我意を立申間敷候。一門・友達・古き手代といふは、皆身の爲を存、行跡・掛竹方教る者に候間、和順いたし、家全持届可申候。譬其身利口に候共、一門・手代等不和に候得は、孝行とは不申候。

聞得はきこえなるべし

一、一門之事。其家之成立、其身行跡相互に申合置、隨分風俗宜敷樣可相心得候。一門之内少し之事に我意を立、和順いたし不申者近年多候。譬理分有之候而も、一人之所爲にして、外一門共より致和順候儀不聞儀は、必我意之甚敷より起り申事に候。左樣之儀無之樣可相愼候。惡事を工み申者は、人之後立に成、色々申教候者又多聞得申候。甚敷惡事に候。ケ樣之者は撰出、急度曲事に可申付候條、相愼可申事に候。

一、手代之事。其家に久敷被召仕時者、代替りに相成候へば必奢長するものに候。必相愼、若き主人に候はゞ不宜儀幾度も異見を加へ、不相用時者一門共に申達、急度異見を加へ可申候。其主人之爲を大切に存、如何躰に候共全其家を持屆さする樣心懸可申候。久敷養恩に候間、非義邪道之働無之樣可心懸候。則是を忠孝と云。

一、妻・娘之事。第一女は邪氣深く、親・夫と之申事も不用者に候。女性は我身を能せんと存る心絶ぬもの故、人を惡敷落しめ、我意を專らにする事不可有。一旦利口にして跡先之辨へなく、異見を請ても忽變じ、心服いたさゞるは誠之心薄き故にて候。父母舅姑に事る事親敷、朝暮心に悖ふべからず。慈愛を第一に可心懸。夫と有者は猶更大切に存、我儘之了簡を立間敷候。後家暮しに相成候時は、子幼少に候はゞ猶更夫に代り家を持屆申了簡第一に候。親・夫の申付置候儀、死後迄も一生可相守事肝要に候。女は誠薄く變じ易きものに候。人として

無信時には、何程佛神を祈り後世を願候而も、皆身に來り候事迄成事に候間、能々致可申候。

一、妻を迎る事、縁を以可致約束、輕者にても筋無之、密識之女を不可取迎。若無據筋合に而も、親・一門ゟ申遣、承知之上に候得者不苦、不致承知時者不相成候。夫婦は人倫之始に而、至而重き事に候。輕き者にても其禮義を相守可申候。又一生無妻に相暮し候も道に違申候。子之出生有を以孝行之第一とする也。歳若き者假初に出合申女に戯り約束定る故に、親・一門之中事も不用、人之謗りも不構不和に相成、終りは其身も難立程に相成候。然る時は孝行之道を絶、人倫之義も違ひ、行末何程善事を相行ひ發明成者に而も、人之用ひも薄て、家内も不治、皆是我意之甚敷より起る事に候。歳若き内には一旦相耽る者に候得共、約束に不及時は不苦候。或は妻をも離別する如き甚敷者有之候。又は外々に抱置、家内之暮しも等閑に致候抔、甚心得違之者多候。皆身を全く不持屆事、目前に不孝之第一に候。

一、下女之事は一と通り召仕候下女迄も、主人之氣に入たてをする者、必惡事有之者に候。奉公は親に仕へると同事に候間、何程も情に入被仕ものに候。唯假初之者に而も、主人・朋輩之品を取隠し申儀、堅く相慎み可申候。人之與ざるものを望心より起りて盗を致すものに候。我身に不與縁は、何程求候而も身に附不申候間、此處を存付候得者盗は不致ものに候。又は色を以召仕置候女は、觸吏十人の氣に入立朝暮心懸候様に相工み、氣に入候様致すものに候。

甚惡敷事に候。人之惡敷事を作り身の爲にせんとする心、百人の内大方同樣之ものに候。甚身之惡事を隱し、主人の目を忍び、大切に存る事なく、却而主人之爲に甚敷惡事も不厭能樣申成、人之誹りも不構、氣に入候得者宜敷与計存、人の噂無實事迄申作り、虛言を以人を誑す者有之候。併女之中事氣に入候得者、惡事も善事与存、虛言も實と存る故、人々噂而已にて信實之儀無之、男之習ひ色に迷ひ愛に被引申より起りて、是皆女之惡事にして、我身之爲而已心懸、主人を大切に不存より起る故、內輪に申分不絕、和順之形無之故、子も及難儀に、親子之間も不和に相成、子は孝を盡しても孝之道も難立、親は子に恩愛を語れども慈愛とも不思故に、末々全く其家に被召仕候女は無之者に而候。其身之難儀与存候事、多く例し有之事に候。此處を能心付相嗜候樣、別而下女共へ可申教候。

一、手代・下男之事。一度主人与賴申者に對し、少も非義邪魔成事有之間敷候。主は親与同事に候。主之申付不相背、隨分奉公大事にいたし情に入可相勤候。扶持を請身を被養候得者、假令無理成義有之候而も其恩を存、烈敷勤方に而も、無二心主を恨る心なく可相勤候。其家を立退外へ參り候而も、心立惡敷者全き事者無之者に候間、彼是了簡を立申者皆我意に而不宜事に而候。一度主人与存候得者、其家全く一生被召仕を本意と存、主人之申付大事に相勤候得者、終には立身出世致事に候。我身難儀与存候はゞ我意之なす處与存、難儀を忍相勤事

第一奉公之道に而候。佛神之惠みと言事も、大事に相勤る心有る時は惠みも有之候。第一本公之嗜は忠之事に候。主人之物朋輩之品に而も、必取隠し不申樣常々心得可申事に候。

一、親兄弟之事。子弟有之時は、親兄其身之行跡可爲第一候。子弟惡敷成候にて、親兄之心得不宜故に候。見習聞習申者に候間、隨分相愼可申候。其身惡く候にて、子弟之教何を以可申聞哉。習よりも調子申候者、常々之見習にて善惡見得申候。人之手本に成候間、諸事相愼申樣可心懸候。子弟は慈愛を以養育致事に候。然に輕者、幼少之子に而も無故事に打たゝき、邪見成事有之候。必得之所爲に多有之候。子程愛之深き者は無之、子を思ふ程親は孝を盡こ古今之習にてに候處、其子に不慈のふたもいたし候者、何与してか孝行之可有之哉。子を不思は、鳥類畜類にも劣りて、皆邪見之なす業に候間、ヶ樣之者は嚴重に罰を行ひ可申候。堅無之樣敎可申候。其上我子を如思、人之子に而も愛を懸可申事に候。人之子を打擲き致者有之候。是も同事に候。堅く可申付候。ヶ樣之族有之は、他之支配に付而も數儀、不敎より起り申候。常々能可申敎候。

一、子弟之事。男子は十五・六歲之時惡敷友に附交り候得者、一生善者には難相成候。親ニ申事は何としてもあまへ申故不聞入ものに候間、能友を撰、少も家業に成事を爲習、遊樂に暮し不申樣可心懸候。第一遊び之內に而も博奕之友に不可交、女色は若き內少しは有之事に候。

相名染不申樣友を賴可申候。孝行之道朝暮敎立可申候。友に成者も人を敎立る事に候間、隨分宜敷樣仕立申を心懸与すべし。人は耻といふを存候は宜敷候。耻を耻与不存付時は人に難相成候。輕き者力業をいたし付不申時は、成長之後も稼不相成候。輕き者之子は惡事而已見習申故、盜業多有之候。人之物を盜取候得ば罪に被行与は乍存、必其氣指に移る事歎ヶ敷事に候。是皆貧敷故に其氣指移る事に候間、盜取候而も我物に成る事行末必無之ものに而候。近所之者にも被疎、終には乞食同事に相成候得者、佛神之罰与存、假初にも人之物盜不申樣敎立可申候。其身さへ働候へば、一日之食事は有之事に候間、幼少より只居申者は、隨分相稼申樣敎可申候。

一、輕き者共親子口論いたし、親を打擲き我儘を申者有之候。不孝之甚敷事不及申に。ヶ樣之者有之は其所之耻辱に候間、役人共能敎立可申候。或は騙局を言、人之物をたらし取、又は酒を好口論而已に日を立申者多く候。ヶ樣之者は撰出、相嗜候樣堅可申敎候。皆我儘より起り、耻を不存者共に候。不敎して罰するは道にあらず候故、相改候歟不相改歟得与可申敎候。

一、商内物或は銀子指引不埒之者多。借用之事は可有之儀に候得共、返濟滯候儀、無據物入相重り難濟に付候而は、先之者も可致承知。左樣之儀も無之、色々申立いたし不致返濟候はど、かたり同事之仕形に候。其上及催促候へば無法之仕形いたし、又は打擲き抔に及候事、

[illegible]は膈なるべし

かゝり者よりは甚悪敷事に而候。人に物を乍借返濟不埒にいたす事、其身貧乏に成候而之了簡に成見可申候。不宜風俗人々心付候得者、相直り可申事に候。

一、輕き者酒に醉候得者、口論いたし打擲き、互に疵付候事度々有之候。其上人に隔り合候而、相答候得者酒に醉申与遁れ申候。沙汰之限に候。酒を給候共相慎可申事。

右條々第一忠孝之志相勵ミ事に候。孝心無之候而は、外に善事与言は無之候條、此々條を掲申渡候間、第一肝煎身分得与相改、百姓共ゟ申渡、村中五人組之者共能申教、組切相集り此々條を寫取、人々所持いたし、朝暮親子兄弟打寄咄合候樣可心懸候。教といふは常々幾度も能耳に振不申時は、全取行不申候間、常々有度事に候。肝煎共随分心懸呼寄、子弟家來共ゟ能々可申渡候。尤其者之宅々ゟ罷越教候得者、妻子等相慎申事に候。役人役懸り之者には、猶更不心得に而は猥敷事に候。人々申合、家來末々迄も可申教候。末々不行屆候はゝ、役人之不心得与存候間、一統相守可申候。村中皆々教に隨ひ申時は、其段御上ゟも可申上候。大切之儀与存、風俗宜樣心懸可申候。

右之趣組々一統可申渡候、以上。

安永四年未十一月朔日　榎尾左膳
高澤平次右衛門

能美四郡十村中

〔御郡典〕

安永五年申二月十村芹川村兵助組下右書立寫添廻状。

槻尾左膳殿去冬御郡廻之節、別冊御ヶ條書御渡に付寫取、村々肝煎中には一往爲讀聞置候得共、此度村廻致候序、猶更一統へ申談寫帳も相達候間、村役人中不及申に、執筆も相叶申者は寫置、常々取扱、相互人道之事申談有之樣致度候。

一、當時之人氣己を高振は世柄与存候。村役人中始老年之面々、右樣之儀不宜与相心得、其合を以物事可被申談儀には、本文御ヶ條忠孝之道を基与被成、我意を誡め之御趣意与存候。就夫に心得違ひもいたし候而、子は御教之御文躰を親は覺居、親へ御示教之事は子より不孝之引足しに致し、其外長幼主下も是に准じ、人は之御教を我身勝手之御文躰迄を覺候樣成行可申哉与致心勞候。御奉行衆ヶ樣御教訓、聖代同樣之御儀与難有奉存候。御ヶ條之内一句に而も、己を愼み道理を覺候樣可爲本意候。別而當拾六ヶ村當時組親之小生、父祖之依勤功役茂相續、蒙御恩惠相勤申儀に候間、各は萬事申談候儀も御法全く行屆、人々慮を省き實に赴き、末々迄能相治り候樣心懸、御治道之永久を奉祈念居申候。仍而此條目人別生涯相守り、後々迄も傳へ申樣心得可被申、愚役之儀も可申入ため致添書候、以上。

丙申二月　　　　　　　　　　芹川村　兵助

白組十六ヶ村中

十一月十一日。前田重教放鷹を行ふ爲越中に赴く。

〔政隣記〕

十一月朔日、中將樣今月中旬頃越中筋ゟ爲御鷹野可被爲入旨被仰出、今日御供人夫々被仰渡。但從者、頭分は鑓・草履取・乘馬・背籠 雨籠乘用 挾箱・竹馬、若黨一人より四人迄之内、且乘替馬勝手次第。平士は鑓・草履取・挾箱・竹馬・駄荷馬幷荷擔し一人、且駄荷馬ハ勝手次第。若黨一人より二人迄之內。右之内減少ハ勝手次第。小身之人々は、成たけ減可申候。將又武器は鎧持不申筈。御道中之內、都て江戸御往來之節御定書之振ニ被仰出候。物頭以上、旅宿にて幕打可申候。平士は馬持身上も不及牽馬旨等、津田源兵衛・坂井要人より廻狀有之、附今月十一日御發駕与翌二日被仰出。

〔政隣記〕

十一月十一日朝五時不足御供揃に而、中將樣越中筋ゟ爲御泊御放鷹御發駕。同月廿日八時頃御歸殿。但御供人一統難儀し付不申筈に、御發駕前津田平兵衛より廻狀有之。

〔覺書〕

一、十一月十八日今日従中將樣被進候鴨一羽拜領。右羽がいは指上候樣被仰出、十九日出席之刻持參指上候。此間越中ゟ御鷹野に中將樣被爲入、右御獲物被運候內。

一、十一月二十日中將樣御歸殿。

〔恭豐大人手集〕

今年は御兩殿樣被爲入候故、私共晝夜無寸隙相勤申候。中々手に合不申、取込申候。中將樣每日〱御鷹野御出、町家に御休被遊候節は、御道筋御宿詰も御座候。四人共に懸廻り、一向に食事も忘れ申程之事に御座候。一日之內に兩度御出之儀も御座候。御休所より俄に被御出、終日御鷹野も御座候。右樣之節は御供人中御賄、急に支配我々申付候事も御座候。手に汗にぎり續申事而已に御座候。犀川油車室屋次右衛門と申方ゟ不斗御休所被仰出、此間御川狩之節は、いつも〱此者方へ被爲入候。大樋町端に茂御休被遊候。淺野町末釜屋彌吉方にも御休、并に宮腰口町端茶屋にも御休、犀川之上覺源寺ゟ茂此間兩三度御休被遊候。覺源寺と室屋次右衛門方とには御膳所も相立、朝晝御膳も被召上候故、私共も言外氣を張申候。扨々烈敷事に御座候。氣色合には大躰宜御座候。

中將樣當十一日頃越中魚津邊迄御鷹野御出御座候由、昨日被仰出候。日數十四・五日茂被爲入候筈に御座候。此間私共も暫肩を休め可申と存じ奉候。併備後守樣當四日江戸御發駕、十

四・五日頃當地へ被爲入、尤御止宿御穿鑿も御座候ゑに御座候。兎角何やかや取込申事計御座候。〔以後略〕

十一月五日　　櫻尾甚太夫

加　八郎右衞門様

十二月六日。藩侯放鷹の際城下の商店に屛風を建てゝ敬意を表する等のことなからしむ。

〔國事雜抄〕

御鷹野御出之節、御通筋町方商賣之品取片付、屛風建候儀爲指止候樣に被仰出候。商之品其儘指出候樣に、夫々御申渡可被成候、以上。

十二月六日　　中村萬右衞門

高畠木工様

十二月七日。足輕の貸羽織着用に關する規程を定む。

〔國事雜抄〕

覺

合紋羽織
一、御城中警固御用。

黒羽織
一、蓮池御出之節警固御用。

同
一、坂下御馬ゟ御出之節警固御用。

合紋羽織
一、御忌日御寺方警固御用。

黒羽織
一、御鷹野御出之節御附人使役裁領御用。

合紋羽織
一、粟ヶ崎御亭警固御用。

同
一、盆中御寺方並野田御墓警固御用。

同
一、火事之節半途見。　付札、只今迄之通之事。

同
一、喧嘩之節警固。　付札只今迄之通之事。

同
一、公事場渡御刑法者引渡之節警固。　付札、只今迄之通之事。

同
一、観音並佐那武祭禮之節警固。　付札、只今迄之通之事。

同
一、他國御使者之節御城中御寺方警固並御先立。　付札只今迄之通之事。

同
一、御姫様方御出之節御先立並警固御用。

同
一、御法事並御施行之節警固御用。

一觸、御横目所より申來諸向警固御用。

一同、備後守様江戸御往來御登城並御寺方御參詣之節警固御用。　付札、只今迄之通之事。

〻

御領國之内に都而何御用に而も足輕共に御貸羽織被指止候に付、割場奉行に遂僉議候處別紙寫之通右奉行申聞候間、則付札申渡候に付、得承知相違之候條、町足輕之儀も右之通可被相心得候、以上。

十二月七日　　　　　　　　　　横山河内守

高畠木工殿

十二月廿六日。御扶持人十村及び十村の座列を定む。

〔司農典〕

無組御扶持人

組持御扶持人

無組御扶持人並

組持御扶持人並

平十村

右座列之儀、僉議之上達御聽に候處、右之通被仰出候條、以來如斯相心得可申事。

未十二月廿六日

篠島庄兵衛
堀田次兵衛
久田忠左衛門
加藤八郎右衛門
石丸彌市郎
遠藤次左衛門
齋藤金兵衛
井上九左衛門

十二月。十村等に命じ百姓の耕作を勵むべきことを諭さしむ。

諸組御扶持人・十村中

〔司農典〕

耕作之儀十村共随分致入精、來年出作之儀茂年之内より遂詮議、夫々相後れ不申樣、無油斷勢子を入可申候。凶年不作之儀者乍不及是非儀、手入等もぬけ不申、情力を盡候上之儀に候

得者、誠に心外千萬ものに候得共、何となく等閑成所々も有之躰に相聞、今年抔御難儀至極之御勝手振に候得共、格別之御詮議を以、過分御借米も御貸渡被成候。何れも冥加存付、無油斷耕作出情いたし候様各被相心得、十村共等へも締當可被申渡候。右之趣申談候様、河内守殿被申聞候條、可被得其意候。十村共之内にも心得違之者共も有之、下々難儀も不顧、奢侈之族も有之躰に候。以來内意被相糺、品寄可被爲沙汰候、以上。

十二月

別紙之趣、横山河内守殿御算用場奉行中に被仰談候由に而、本行中被申聞候に付相達之候。尤油斷有之間敷候得共、行狀等之所尙更嚴重可相慎候。別紙被見後可相返候、以上。

十二月　　　　改作奉行

諸郡十村中

閏十二月八日、郡方に對する藩の支拂を停止することを告ぐ。

〔國事雜記〕

御要脚必至與御指支之上、今年御郡方過分之御貸米等に而、諸事御手當大致相違、誠に御難儀至極之時節に付、毎歳御引當米を以町方等へ被渡下候御家中書上銀等御用捨、并當夏御借米代殘銀暫相渡、御延引之儀一統申渡候。各支配所之者共へ可相渡分、少銀之儀にも候處、猶

更遂詮議候得共御難澁相重、可取計手段無之、不得止事御淀之儀申渡候條、此段各より取計可被申渡候、以上。

閏十二月八日　　　御算用場

高澤平次右衞門殿
槻尾左膳殿

右之通申來候條、得其意、夫々可申渡候、以上。

槻尾左膳
高澤平次右衞門

能州四郡十村中

閏十二月十日。表方坊主小島淸久金澤城二ノ丸奥納戸の灰吹金を盜みたることを白狀す。

〔政隣記〕

今年十一月上旬、二之御丸奥御納戸役所に有之候灰吹金五つ、表方坊主小嶋淸久盜取、才川橋爪白銀屋伊兵衞に、新堅町縫屋吉郎右衞門を賴賣拂候段、今月十日於改方大藪勘右衞門宅、淸久及白狀禁牢、吉郎右衞門等も禁牢。其外右灰吹金取扱候者共、夫々預等に相成。翌十一

今月は閏十二月

日右清久、錢金ゟ因當ゟ失ひ候田舎宿・出合女其夫勢夫々並等に相成、貰受候金銀等不殘取揚に相成、翌年六月十三日公事場ゟ引渡に相成、安永九年六月廿七日清久生胴に被仰付、吉郎右衞門等先達而牢死之事。

附、右灰吹金五つ之内一つ商賣人より取揚置、翌安永五年五月十九日大藏揚右衞門二之御丸ゟ持參、御用部屋横濱部右助ゟ渡之。

閏十二月十五日。金澤城に煤拂及び追儺の儀を行ふ。

〔政隣記〕

閏十二月十五日御煤拂、御規式前々之通。

同夜當番御規式御例之通。會所奉行一木與右衞門御年男相勤、昇備物御例之通。且又表御式臺御當番後前面に付、御眞砂因前之儀相知不申に付、御横目中より御城代ゟ御玄關扉いかゞ致置候哉之旨御達申候處、御倹議之上御開き置、御提灯燈し候事に被仰渡。

閏十二月十八日。前田重教明年年頭の賀を受けざることを告ぐ。

〔政隣記〕

閏十二月十八日、左之通御用番被仰渡候旨等、御横目中より例文之廻狀有之。

中將樣來年頭御禮被請間敷旨被仰出候條、獻上目錄は一統元日指上候間、正月朔日日付に

て、當廿日より廿八日迄之內、御奏者所に可指出候。且又御太刀馬代幷御禮錢指上候段、只今迄頭等より戶田與一郎等迄及案內候得共、是以後不及案內候事。

閏十二月十八日。斃牛馬ある時は必ず革多に通知すべきことを命ず。

〔筒井舊記〕

近年御郡方斃牛馬有之砌、其時々先々皮多共に屆不申、潛に埋置、或者川に流捨申族之者多有之躰粗相聞、不屆之至に候。跡々御定之通、向後急度相守、斃牛馬有之候節、其向寄に而皮多共へ早速及斷可申候。尤以來押隱埋置等致申者有之候はゞ、早速公事場へ及斷候樣、皮多共に申渡置候。若以後右之通隱便に取計申族之者於有之者、公事場嚴重に咎可申付候條、此旨夫々急度可被申渡置候、以上。

閏十二月十八日　　伊藤內膳
奧野主馬
永原求馬

高澤平次右衛門殿
槻尾左膳殿

閏十二月二十日。菜種不作なるを以て木實油を輸入販賣せしむべきこと

を告ぐ。

〔政隣記〕

閏十二月廿日左之趣御用番被仰渡候旨等、例文之廻狀を以御横目中より申談有之。

當年菜種不出來に付、木實油他國より取寄爲致商賣候儀、先達而御達申上、御聞屆に御座候。右木實油者食物に難用、燈火に而已に給候儀も不宜旨等、町奉行紙面に御用番御歪書之事。

是歳、木遣狂言所々に行はる。

〔政隣記〕

今年八月以來ヨリ狂言与申名目に而、淨瑠璃芝居宮腰・春日へ追々興行、附、翌年五月以來松任町・山之上村ニも追々興行有之。

右御用番御聞屆に而、町會所（春日・山之上村除キ）且改方より縮方役人指出候樣被仰渡有之。

〔恭豐大人手控〕

今年は御當地にも春日社に芝居ノ眞似仕候處、言外珍敷事故、毎日々々見物群集仕候由。此間一日、御殿式より女中共四・五人見物に參り申候。翌日より猶見物多成、朝六半頃參り候者は、暮歸り申躰に御座候。扨々けしからぬ事に奉存候。（前後略）

十一月五日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　槻尾甚太夫

加　八郎右衛門様

〔恭豐夫人手集〕

一、不思議成儀は、春日の小供狂言は随分見物御座候由に御座候。當二十七日迄御座候由。頃日は朝速く參る者は入不申樣に御座候。此外相替申儀無御座候。

十二月廿三日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　槻尾甚太夫

安永五年

正月二日。年頭御禮人の序列に關し新例を開く。

〔政隣記〕

正月二日、御馬廻頭奥村滿兵衛頬本復に付、今日年頭御禮申上、二番座御禮人之上に列し御禮申上。先年頬本復人は、高列も其日之當り御禮人之次に列し候趣に被仰渡有之候得共、今日御用番御僉議之上、頭分は頭分、平侍は平侍兩段に而、列高き者も其日之御禮人之跡に付等に以來相成候段、御横目中申談候事。

正月二日。前田重教金谷御殿に於いて乘馬初の儀を行はしむ。

〔政隣記〕
元日并二日御裃帽子等、都而御規式等前例之通。
同日金谷にては御乘馬初有之。右御用御馬場奉行岡田助太夫相勤候に付、金谷御殿於御次拜領物被仰付。

正月二十日。前田重教御供人の作法に關して諭す。

〔政隣記〕
正月廿日、左之通中村萬右衛門を以て被仰出、當番御横目より夫々申談。
中將様御供人、御左より御跡へ下り候者は、又御左より可罷出候。御右より御跡へ下り候者は又御右より可罷出候、御左より下り御右より罷出候儀等は、堅仕間敷候事。

正月。用水の修理及び管理に關して十村等に諭す。

〔司農典〕
覺
一、惣而用水之儀、干旱普請いたし修理、冬水を流、或は堤も干旱に普請有之、春水を溜置候得ば、水引遅干損不多候。右修理等手後に致し、水溜仕懸候得ば、水引早く候而干損多候。元來干損村々之儀は、冬水を隨分無油斷取入不申而者、照續候砌別而不作に相成可申候。此

儀は村肝煎等度々廻りいたし入情、冬水取入候儀肝要に候。
一、用水見分致遅滞候得者、自ら植付最中に見分に懸り可申所々も可有之候。左様成所々は、材木幷鳥足道具拵等いたし用水取入候得ば、餘程日間も後れ、先達而植付候分も、諸用水に障入、手入彌相後れ、畢竟不作之基に候。且亦遅致植付候所に者、俄嚴敷養を以作立候得ば、俄出來候而虫附にち痛に相成、自ら不熟に相成可申候間、用水致見分、急速用水普請、無油斷早速水仕懸候儀專一に候。
一、用水普請之儀、近年上は請負人相立、右請負人より銀子割合を以、下請負人江段々又おろし致候故、下々請負人少銀を以普請いたし候故、自ら麁抹に相成候躰も相聞え候條、左様之所穿鑿、普請丈夫に有之候様可申付候事。
一、用水見分相後れ候得者、普請自ら植付之頃にも至り候村々可致出來候。然ば其村々者、水取入を專一にいたし候儀に候得者、普請善悪も不顧、水取入候事迄相心得候村々も有之候。且亦普請手後れいたし候得ば、自ら麁抹に成、相堪へ不申事に候事。
一、普請銀渡方も遅刻候得ば、下々其間之利足相懸り致迷惑候。且亦手代共肝煎等大勢之事に候得ば、其内にも私曲ヶ間敷儀を心懸候者も可有之候。随分心を付糺可申事。
右之品々尤油斷は無之儀に候得共、爲念申渡候條、隨分心を付入情に相勤候儀肝要に候。若

右之族有之、外より役開候而者、致其分に難行事。

右之條々無油斷急度可相守者也。

丙申正月　　　　改作奉行

能州御扶持人・十村中

正月。百姓をして農事に勵精せしめ、その監督を手代等に一任することなかるべきを十村等に諭す。

〔司農典〕

御勝手御難澁之儀者、末々迄粗可致承知事に候。第一近年打續不作、就中去年莫大之御損毛に而、過分御借米も有之、別而御勝手御難澁至極に相成、拙者共取捌茂致當惑居申儀に候。養民之爲に候得者、以來共何程御借被成候而も阻みなき事に候得共、右之通之御勝手損に而、御國用之數心外、取計之所も不行屆候。左候得者近年段々かじけ百姓可取立樣無之候。併元來御領國之儀は、御改作以後時構之御仕法に而、四民共安穩に相暮し候に付、連々心得違之者共、御仁政にあまへ風俗を取失候族も有之候故、右何程御惠み被成候而も、耕作之助に不相成候。如此候而者往々衰窮相募可申候。畢竟養民之根元、行狀を相改候所に可有之候。然其自分々々を不顧、下を而已相親し候而者、却而不心服之基に候條、上に居る者少しも奢侈

之躰無之、實義を以取捌、其志押移り候様相心得候はゞ、下々に至り可申道理に候條、急度心底を相改、御國恩を存付、人々之業を大切に可相勤事專要に候。左候得ば百姓共、荒田を起し候より皆濟迄、毛頭無油斷耕作手入等怠り不申、全く致御收納候様可相心得儀、御扶持人共を始嚴重可被申渡候。十村共之內、曁手代共之內には、別而不屆之者も有之段兼而及承候。畢竟十村共致世話を不申、手代共に萬事を預置候に付、自ら致度儘之儀出來、下々之痛みに相成候躰に候。是等之根元者、召仕候十村共之油斷より事起り申儀に候。ケ様之族以來急度相心得、於不相改に者、不屆之者共綿密に相糺候上、嚴重之及沙汰に候條、此旨相心得候様可被申渡、十村共百姓介抱之儀は不及申に儀に候得共、餘り手ぬるく相當り候而者、出作之處油斷も可致出來候。ケ様之所者專ら十村共之取計に可有之儀に候間、隨分十村共人品を可被相撰儀肝要与存候事。

正　月

別紙之通、河内守殿被仰渡候條、得其意可申候。且亦諸郡共御扶持人、廻り口之儀無油斷相廻り可申候。御郡に寄流例に相心得、然与怠緩之躰も有之様に相聞え、萬一右躰之儀有之候得者、甚以心違に候條、堅固に相心得、廻り口無怠慢相廻可申候、以上。

中　二　月　　　　改　作　奉　行

二月六日。前田重教百歳以上の男女調査を命じ、尋いで小者又市を召し見る。

〔政隣記〕

二月六日、今年百歳餘之者男女共御尋之旨、戶田與一郎を以從中將樣被仰出候段、御横目より例文之趣狀有之。

但同月廿一日、御大小將組御算用場横目稻垣源太左衞門家來小者又市与申者、今年百四歳に付、源太左衞門より書出有之候處、金谷御殿に今廿一日指出候樣、戶田與一郎より源太左衞門に迄來書、則指出候處、又市儀於御馬場中將樣御前近く被召出、又市に行年之謂等十五枚被仰付、其外色々御尋有之。且食量御尋に付、只今以五合餘も被下候旨申上。魚鳥抔も給候哉御尋に付、尤何にても被下候旨申上。歩行も松任邊迄罷越候儀成候哉御尋に付、尤不指支旨。其外夫々御請申上候上、御前退候處、三十人頭を以爲目一貫文被下之候事。

二月十二日。小松城に於ける時鐘を每半時に撞くことゝす。

〔小松舊記〕

時鐘は一時々々に爲撞來候得共、安永五年二月十二日より半時々々に爲撞候事に相成、町奉行内藤善太夫より、御城番前田主殿・奧村中務、御馬廻御番頭古屋孫市・池田左兵衛ゑ、其趣通知相成たり。

二月十三日。前田重教當廿一日を以て越中に放鷹せんことを豫告し、次いで之を延期す。

〔政隣記〕

二月十三日、中將樣越中御鷹野當廿一日御發駕与被仰出、都而去冬之通に付略記。附十九日御延引被仰出。

二月十五日。前田重教放鷹の爲能美郡小松に至り、十八日金澤に歸る。

〔政隣記〕

正月十六日、津田平兵衛・武田喜左衛門より廻狀出之。中將樣來月中旬頃小松邊御泊御鷹野、昨十五日被仰出候處、二月七日、同月十五日御發駕与被仰出。都而越中御鷹野之通、頭分鎗一本・持馬等、物頭以上旅宿幕打に不及、平士御供外にては乘馬、馬持以下は御貸馬渡り候等之旨。此外越中之通。

〔政隣記〕

二月十五日、暁七時御供揃に而中將樣小松ゟ被爲入。同十八日晩五時頃御歸殿。同日於寺井村、鶴一御拳に而御鷹被爲掛候。

〔舊　記〕

安永五年二月十五日。

中將樣能美郡ゟ鶴御鷹野に被爲御入、朝御餌所松任笠間屋六郎右衞門方、御晝所寺井村伊左衞門方ゟ被爲入、夫より御鷹野三ヶ日小松御止宿、同十六日御鷹野御晝所伊左衞門方、十七日御日柄に付爲御行歩伊左衞門方ゟ御出被爲遊、御晝所被仰付、同十八日御鷹野下江村領に而鶴一羽御拳に懸り、同伊左衞門方御晝御膳所被爲仰付候。其時御機嫌不斜、依而即時に被仰出、御歸城被爲遊候。此節伊左衞門家地に大木の五月躑躅有之候所、御用之由御用人頭中村萬右衞門殿ゟ以被仰出候。依而金谷御殿ゟ上ニ道中、宰領御手木之輩二人來、勤被致候。同日嶋田村領並松一本御目に留り、是亦金谷御殿ゟ上る。數百人宿次人足、御郡人足に而上ル。

但追而人足賃被爲下候事。

一、此時伊左衞門方、御晝所四度百姓相勤申候。附り、十五日御入來被爲遊候時、祝賀儀

を揭并赤飯等、惣御供御人数ゟ出す。其節御獻上物あん取餅木具二重入指上申候。并手取川筋海老・ごり、切桶に入御獻上仕候。右海老御意に被爲入候由に而、御歸國以來每度御用に付、其時々朝日村・向川原村より捕揚、金谷御殿ゟ指上申候。六月に至御用無御座候。同十九日御畫所相勤申爲御禮、伊左衛門儀澤村源次同道に而出府仕、御付御用人初、御郡・御改作兩御奉行所等ゟも罷出る。且白銀五枚・金子五百疋拜領被爲仰付候。此拜領之内、金子は躑躅代と被仰付候事。

〔覺　書〕

一、二月十九日今日鶴之御披、金谷御殿ゟ罷出頂戴、御能拜見被仰付候。

二月十六日。六ヶ年前養父定番御馬廻中吉次郎兵衛を殺害の上自害したる治右衛門に生胴の刑を宣告す。

〔袖裏雜記〕

明和八年四月九日朝、定番御馬廻中吉次郎兵衛養子治右衛門儀、養父次郎兵衛を殺害、并下女指殺、其身自害仕相果候。逆罪至極之者に付、於存命は生胴に可被仰付者候へども、死骸之儀は不被及貪着候。乍然逆罪之者故葬等之儀は難成候條、右之趣一類ゟ可申渡候。且又津田猪之助家來中吉忠左衛門儀、不埒之趣有之候付急度遠慮申付置候樣、其御猪之助へ申渡置

候。治右衛門手前落着被仰付候上ハ、次郎兵衛家財ニ御貪着無御座、一類共了簡次第取捌儀候間、忠左衛門儀不被及御貪着候條、遠慮申付置候儀相宥候様申渡可然之由僉議、安永二年十月奉伺候處、未被仰出旨去年六月申上候處、治右衛門儀養父を殺害幷下女指殺、其身自害、逆罪至極に付、右伺之趣ニハ候へとも、養父を致殺害候證迹無之候。親殺と申ハ至而重き事、若外よりの所為ニ而、追而相知候時ハ如何敷候間、追而可被仰出旨被仰出候。尤治右衛門所為無相違證跡ハ無之候へとも、次郎兵衛横死之節検使申渡、御横目松田清左衛門・平田三郎右衛門見屆候處、次郎兵衛儀寝所ニ伏罷在候ヲ切付候躰ニ而、額ニ一ヶ所疵口四寸計、其邊貳尺一・二寸計之拔身刀血付有之。下女ハ寝所より起上り候而を、右之かひなへ切付、外ニ疵見不申。夫より治右衛門儀、其身三疊敷之部屋ニ入候躰、右所ニおいて壹尺八・九寸之脇指を以、右之方より二・三度指込刎切候哉与相見え、血付候脇指夜着之上ニ捨置、其身ハ薬之間なかし之邊ニ倒罷在候。水を呑候躰ニ而、手桶・柄杓等ニも血付居申候。右之通夫々見屆、治右衛門儀之所業與相見え候付、治郎兵衛等親類其儘指置可申候。小者幷内儀ハ、治郎兵衛一類之者へ相預ケ申旨、清左衛門等申聞候。先例も有之候付、重而御横目四人共罷越、逐検使可申旨申渡候處、御横目足軽四人召連罷越、重而逐見分候へハ、治右衛門自害之躰相違有之間敷と、御横目四人共同意申聞。右御横目足軽を以、次郎兵衛居屋敷繪圖幷土藏・玄關・小者部屋迄爲

致見分候處、疑敷筋見當り不申候。忠右衛門等へ申談、土藏之内等自然紛失之品有之候哉、且又書置有之哉と爲相改候處、紛失書置之品見え不申旨、忠右衛門等申聞候。小者染内へも尋候處、一向疑敷筋等無之旨、始終之趣村田直右衛門等書付出之。右之趣に而、治右衛門所爲之躰に極り候上は、次郎兵衛死骸は勝手次第葬可申候。治右衛門死骸は逆罪至極之者之儀、鹽詰に爲仕、菩提所へ預置候樣申渡、小者染内於公事場尋候所、疑敷品相聞不申旨申聞候趣等、其節及言上置候通に候。右之趣には候へども、怪敷樣にも聞候付、盜賊改方佐藤勘兵衛へも承糺候樣申渡、色々承糺候へども、外に疑敷樣子承出不申旨等申聞候。今年に而五ヶ年候へども何之儀も聞え不申候。御横目四人見分之上右之通之上は、治右衛門所爲に無紛相聞候間、先達而奉伺候通落着被仰渡可然と、十一月廿日伺候處、翌年二月十二日僉議之通落着可申渡旨被仰出。

翌年は安永五年なり

〔袖裏雜記〕

前に記す中吉之一件落着、二月十六日左之通申渡。

中吉故次郎兵衛養子　治右衛門

渡邊半兵衛に

右治右衛門儀、養父次郎兵衛を殺害幷下女指殺、其身致自害相果候付、死骸致鹽詰寺へ預置

可申旨、其品申渡置候ニ、給右衛門儀逆罪至極之者に付、於存命は生胴に可被仰付者に候へども、死骸之儀は不被及御貪着候。乍然逆罪之者故、葬等之儀は難成候條、右之趣一類共ゟ可被申渡候事。

丙申二月

駿河守殿ゟ

津田猪之助家来　中吉忠左衛門

右忠左衛門儀、同姓定番御馬廻中吉次郎兵衛憂死之砌、養父忠右衛門申談、次郎兵衛宅へ罷越候處、次郎兵衛所持之道具之内忠左衛門方ゟ取除候趣等不埒之至に付、忠左衛門儀急度遠慮申付候様申渡置候へども、今般次郎兵衛養子喜右衛門死後落着申渡候間、忠左衛門儀遠慮申付置候に不及段、猪之助ゟ可有御申渡候事。

丙申二月

二月廿五日。藩の財政窮乏するを以て諸士に借知上納を命ず。

〔政隣記〕

二月廿五日、申談儀有之候條、今日五半時登城候様、御用番大隅守殿より昨廿四日依御廻文、頭分以上登城之處、檜垣之御間於二御間、年寄衆·御家老中御列座、大隅守殿左之通御

演述。

累年御勝手御難澁之上、近年打續御領國作毛不熟、莫大之御損毛有之、於地・他國夥敷御借銀高に相成候に付、御勝手方并於年寄中席も、御運び之儀種々遂詮議候得ども、最早可被成様も無之、如此にて者御公務等も御指支、大切成場に至候。依之以來御勝手爲御取直之、諸事御倹約は勿論、御家中知行米之内御借知被仰付に而可有御座候。去々年迄之振合に而者過分之御不足有之、御圖り高出來兼候間、高相増候樣可有之趣等、具達御聽候處、近年御家中より御借知被仰付、困窮之事に候得者、御救をも可被仰付時節に候處無其儀、却而又御借知被仰付候儀、何とも御心外之至御辛勞被遊候。外に工面者有之間敷哉与再往被仰出候趣共有之候に付、精誠遂僉議候得共手段無之、其趣申上候處、左候得者不被及是非に儀に候間、百石以上十五石宛、百石以下よりは十石宛之圖りを以御借知可被仰付旨被仰付候。段々御詮議有之候得共、不被得止事有之通に候條、各被得其意、其旨人々致心服、家内仕送方等を始嚴重遂倹約、御奉公指支不申樣取計之儀肝要之事に候條、此段組・支配之面々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々は、其支配にも相達候樣申聞候事。

口達之趣

御勝手御難澁至極、御公務等も可被指支趣に付、御家中知行米之内御借知被仰付候段、別紙

疊書之通に候間、可被得其意候。右に付御家中之面々儉約之儀は、追而可申渡候事。
附記、半知之人并隱居・部屋、且又遠慮等之人々御借知無之。但御借知被仰渡候上、遠慮等被仰付候人々は、先取立候事之旨、五月廿一日御算用場觸有之。

二月。百姓の手上高を奬勵し及び切高の方法を濫らしめざるべきことを十村等に諭す。

手上高とは百姓より草高の増加を申出づるものをいふ

〔筒井舊記〕
諸郡村々之內、連々石擡等取除、畦畔等廣け場所、百姓共より手上高願出候分者勿論に候。左樣成品々百姓共會得爲致、隨分手上高爲致候儀役筋第一之儀に候。尤油斷者無之筈に候得共、御時節柄之儀に候間、別而相聽手上高爲致候儀、彌油斷有之間敷候。

切高とは田地を賣却するをいふ

一、切高いたし候節、其百姓之持高歩數打立、田畑上中下割合致取遣候儀御法に候所、村々より近年御法亂候儀有之候樣相聞候條、以來者右之度御法之通相守可申候。
一、右切高候節、村々より御法之通致候得者、田地所々に相分、双方不時手之由を申立、坪切に致、上田之坪計切渡、或者畑高等引候而、假令草高一石田地步數百九十歩相當可申所に、百八十歩なとで無之地不足之地を切渡、或者百九十歩切渡茂有之、或者我儘申募り、田畑歩當在姉に相渡不申、殘り高少分に相成候而も、却而田地餘計有之者も出來候由。左樣得者、

一村之內に而も高善惡有之樣相成候儀も可有之候。右致方に付、大高持に而も作德米少き者も有之、小高持にても作德米多き者も有之、色々不同に而、內外不釣合にして及難澁、或者作倒等に相成候者も數多有之由。右之族に付、田地割之年限に至り候得者、最前不道之仕形に而歩數在躰に不相渡して、小高に而も田地餘計有之。或者其村之內別而地味宜敷田地而已を作居候者等、田地割之儀迷惑に存候に付、元來當村歩數餘り有之候間、手上高願出可申抔こ邪曲之申立致候に付、殘り百姓共其所に恐、數十年來田地割致し得ざる儀も有之樣相聞候。然者不法之筋に而も申勝之樣に相成、御法猥、我意募可申基に候。元來田地割之儀、過不足善惡平均申儀に候所、本意失ひ候族沙汰之限に候。且又右之趣不得止事十村方へ及斷候得者、十村方に而委細承り、其筋は相解候得共、手上高之儀者御益之筋故、尤地餘計無之村、邪道之願与存付ながらも、其所に相泥手上高申付候得共、右之致方に付終百姓作倒、持高無是非村中へ請細縣作与相成、村方難澁与罷成候。何れにも百姓不所存より相起事に候。右之趣に而手上高願出候者、一向承屆間敷事に候。右躰之邪曲之儀有之候にゞ、本人者勿論村役人共迄も急度曲事可申付候。此段村々不相洩樣嚴重に可申渡候。尤村廻之節猶更村々百姓共呼付等、急度可申渡候。勿論以來切出高有之節、村役人共罷出、前條如御法切渡可申候。以來等閑に致置、右之族に而出入致出來、或者外より洩聞候にゞ、裁許之十村爲越度者也。

安永五年申二月　　　　　　　　　　　　改　作　奉　行

　　　　信州郡郡御扶持人・十村中

二月。藩の財政困難なるを以て百姓等の益〻耕作に精勵すべきことを告ぐ。

〔國部舊記〕

近年御勝手御難渋之上、去年以來打續作毛不熟に付、御時節に茂不顧過分之御貸米被仰付、彌御難渋相重り、當時必至与御指支に候。萬一當年不作に候得ば、御借等被仰付候儀も難被成程之御時節に候。左候節は御上御難渋之儀は勿論、最早四民成立申儀も無之事に候條、此處相考、末々迄茂致和順、當年豐作に相成候様致度事に候。尤天災之儀は、如何相成候而茂不及是非儀に候得ども、農業不情、惣下人等不行屆故作毛不熟相成候而は、前段之趣に至候儀大切至極之場所に候條、何茂思慮を廻し取計之儀肝要之儀に存候、以上

　申　二　月　　　　　　　　　　　　改　作　奉　行

　　　　諸郡御扶持人・十村中

二月。前田重教刑罰執行に關する諸藩の實況を徵す。

此の項は幕府のことに係る

巻目之上

　安永五申二月承合中將樣へ差上候紙面寫

一、敲放之刑

一、入墨之刑

右両刑之内、入墨は享保五年二月、敲放は同年四月有徳院様御代より御仕置初り候旨、町附與力脇部仁左衛門より申越候。

一、火あぶり之刑

右御三家様方に而は御用ひ被成候。尤火あぶりより重き御刑法は無御座由、御城付衆より被申越候。

一、はりつけ

一、入墨

右松平薩摩守殿衆承合候處、磔より重き刑法無御座候。入墨与申刑は用ひ不申候由。

一、入墨

一、敲放

右松平越前守殿衆承合候處、入墨ニ相用ひ申候。追放ニ其定有之候へ共、多分相用ひ不申候旨。

一、はりつけ
一、入　墨

右安藝守様衆承合候處、磔より重き刑被行候儀不申候。入墨ニ御用ひ之由。

一、はりつけ
一、入　墨

右細川越中守殿衆承合候處、當時磔より重き刑相用ひ不申候。入墨は尤用ひ申候由。

一、松平陸奥守殿衆承合候處、役方より可及返書旨申來、其後兩三度申遣候へども、未返書差越不申候。到來次第可申上候。

申　二　月

三月三日。徳川家治の日光社參中に於ける下街道の旅行に關し注意を與ふ。

〔政隣記〕

三月三日、左之趣定番頭より例文之廻文を以申來。

當四月日光江就御社參に、下海道旅行之儀、松平越前守殿・榊原式部大輔殿御樣子聞番より承合、其上にて日光御用懸り御目付河野吉十郞殿承合候處、三月中往來は指支間敷旨御申聞之由、聞番申聞候。右之趣に候間、四月江入候ては旅行難相成旨江戶より申來候に付、爲心得申達候旨、御用番御覺書を以被仰渡候事。

徳川家治の日光社參はこの年四月十三日以降廿一日までの間にあり

三月二日、量器檢査の爲樽屋藤左衞門の手代を巡回せしむべき幕府の通牒を受く。

本文は幕令なり

〔郡方古例集〕

桝之儀、東三十三ヶ國、樽屋藤左衞門方桝之外無判之桝遣候儀堅停止に候所、所々に而相用、近來別而無判之桝多有之由相聞、不屆に候。追而樽屋藤左衞門方より桝改之者相廻可申候間、急度相守、無判桝相用申間鋪候。若於相背者可爲曲事事。

大目付

右之趣東海道・東山道・北陸道・丹波・但馬・丹後、都合三十三ヶ國、御料者御代官、私領者領主・地頭より可被相觸候、以上。

二月

右之通可被相觸候。

田沼主殿頭殿御渡被成御書付寫一通相達候間、被得其意、簪之儀者松平對馬守殿方ゟ可被申聞候、以上。

安永五年三月三日　　大　目　付

御名殿　留守居中

三月六日。御郡奉行及び改作奉行に兩役の事務を兼ねしめ毎郡一人を派遣して農事を監督せしむ。

郡奉行及び改作奉行共に平常は金澤に在るもの安永六年三月廿八日の條參照

〔岡部舊記〕

御郡奉行・改作奉行兩役打込申談、當分兼帶被仰付、一郡ゟ兩人宛引越、今年中罷越、十村等夫々耕作等致出情可申候。累年引越詮定之儀は、追而被仰出、作躰之儀時々可及言上候。

一、御郡奉行・改作奉行兩役打込、一郡宛主附相勤候之趣右之通に候。近年御國打續作方不熟に而、過分之御損毛に付、第一十村共諸願等度々金澤表へ罷出、數日致逗留候故、自ら作方勢子ミ入候儀も不行屆、且右之趣に而何角入用茂可相懸儀に付、先今年右之通御郡々へ罷越居候而、御用方承屆候様被仰出候。然上者十村共と隨分致入情、稼作滿納之儀專一に心懸候様に、兩役之人々可取計旨可被申談候事。

右被仰出之趣、河内守殿被仰渡候段、御算用場奉行より被申聞候。先奉行割方并引越所之儀

者、追而被仰渡次第早速可申渡候條、左樣可相心得候、以上。

丙申三月六日

御郡奉行

改作奉行

諸郡十村新田裁許・山廻中

新川　荒木善太夫　木村次右衞門　　礪波　九里幸左衞門　遠藤次左衞門

射水　山岸八郎右衞門　石丸彌一郎　　奥郡　槻尾左膳　堀田治兵衞

口郡　高澤平次右衞門　井上九左衞門　　能美　芝山織人　久田忠左衞門

石川　木梨助三郎　篠嶋庄兵衞　　河北　寺西清助　齋藤金兵衞

〃

右御郡々江御引越覺書、御改作所より相渡申に付、寫相廻申候。尤御引越所之儀未被仰渡無御座候、以上。

三月十六日　　口郡詰番

〔毎日帳書拔〕

安永五年三月六日

御算用場奉行ゟ

御郡奉行・改作奉行兩役打込申談、當分掌帶被仰付、一郡ゟ兩人充引越、今年中罷越、十村等夫々耕作爲致出情可申候。累年引越治定之儀は、追而可被仰渡候。作躰之儀時々可及言上候。

一、右之通打込相勤候に付而は、改作奉行被下足輕兩人相增、御郡奉行之通五人充可被下候。

一、當時金澤に罷在相勤候御郡奉行・改作奉行之分は、今般御郡々ゟ詰切り相勤候に付而は、地廻り當り會所銀知行當、改而御貸可被下候。

一、當分御貸屋之儀は、百姓家等御借り上げ御渡可被成候。

右之通被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

三　月

三月十二日、能美郡に於ける百姓持山及び垣根の七木伐採は御郡奉行にて許可することを許す。

〔御高御仕法記〕

能美郡御林木之外、百姓持山・垣根等七木類、百姓共不及斷自分に伐苅いたし、一ヶ年に三貫五百目宛運上銀差出旨、十村書附に各奥書を以被指出候に付、段々遂詮議候上、能美郡之儀者各別に承屆候條、向後運上銀爲相立、不致伐苅而不叶七木之分は、其時々御郡奉行切に而承屆、十村手前に而相糺、縮方相立候樣に可被申渡候、以上。

丙申三月十二日　　横山河内守

木梨助三郎殿

寺西清助殿

右御林之外七木、毎歳運上相立申度等之願、河内守殿に御達申候處、御詮議之上願之通り被仰渡候に付、以來七木伐取候節、別宮奉行より役人不及請候條、伐取不申而不叶節は、其方共負數等遂詮議、拙者共へ相斷候上承屆可申候。尤槻・欅至而大木之分者、前々之通り可相心得候、以上。

木梨助三郎　印

寺西清助　印

寺井村平吉跡組裁許　源次

土室村半兵衛跡組裁許　與右衛門

今江村　庄　蔵

若松村孫右衛門先祖裁許　小四郎

壇田村　三郎兵衛

若松村　兵　助

澤　村　源　丞

波佐谷村　豊　治

〔御高御仕法記〕

能美郡御林木、只今迄御自分被致支配候ニ付、百姓持山・垣根等七木類も支配有之候處、今般御詮議之筋有之、能美郡之分御林之外、百姓持山・垣根等七木類伐取之節、百姓共より御自分江不及断、其時々御郡奉行切ニ而承届、十村手前ニ而相糺締方相立候様ニ可申渡旨、横山河内守殿より御郡奉行へ御申渡。尤當場江も御申聞、右之趣御自分江も可申談旨御申聞候條、可被得其意候。御林之分は只今迄之通、御自分支配有之筈ニ候條、是又被得其意、百姓持山七木類伐取之節、御林木与混雑無之候様ニ御郡奉行江被示談、事多ニ無之御林締方相立候様ニ可被取斗候。尤此段御郡奉行江も申談置候、以上。

三月廿二日　御算用場

右紙面之通小幡勘太夫へ申渡有之旨、御算用場より拙者共に申談有之候に付、爲心得寫相渡置候條、可得其意候、以上。

小幡勘太夫殿

芝山織人 印

久田忠左衛門 煩

能美郡十村中

三月廿八日。諸士古借の會所銀を帳消にすることを廢す。

〔政隣記〕

三月廿八日、左之趣定番頭より例文之廻狀有之。

會所銀古借被下切之儀、是以後被指止候。銀高は先只今迄之通御貸渡、江戸御供人は百石に五百目宛、常交代人は四百目宛、地廻は三百目宛、別證文を以御貸渡。返上方等之儀は追て會所奉行へ可申渡旨、横山河内守殿等御覺書を以被仰渡候事。

四月四日。徳川家治の日光社參中。下街道を經て發送する荷物に關し注意を與ふ。

〔政隣記〕

四月四日、前月廿四日江戸發之飛脚來着、左之趣申來。

今般日光御社參、通御以前より御成中、町奉御出立之儀問合有之候得共、區々に而とくと難相知候。然共四月に入候ては、荷物類かさ有之品は御關所にて支候躰に相聞え候に付、御用所より之證張箭も常認にては成間敷に遂僉議候條、諸向御用狀も延置不支分は成限り延し置、至而無據儀に成だけかさびくに認候樣諸役人に可申談旨、御家老衆被申渡之由、御横目より申談有之。

但、三月廿九日出より四月十九日出迄本文之通に候事。

四月十一日。江戸詰の諸士以下に給する扶持方及び人數を減少すべきことを豫告す。

〔政隣記〕

四月十一日、江戸詰人御扶持方・人數御減少等之趣、左之通横山河内守殿等被仰渡候段、定番頭より例文之廻狀有之。

一、年寄中江戸表に相詰候節御扶持方、知行高により其時々僉議之事。

一、御家老役五千石以上者五千石當り、但五千石より以下は知行當り之通。

一、若年寄・人持二千五百石以上は二千五百石當り、但二千五百石以下は知行當り之通。

一、頭分は十五人以上之人々都而上下十五人、但十五人以下者只今迄之通。但手替足輕役有之分は、手替足輕共十五人召連可申事。

一、平士四百五十石以上都て十二人、四百石以下者只今迄之通知行當り。

一、右相減候儀者當七月朔日より之事。

一、道中召連候人數は、只今迄之通知行當り相渡候事。

一、御扶持方割者只今迄之通り、百七十目定直段に而被下候事。

右之通達御聽相極候事。

丙申四月

付札、定番頭江

御勝手近年御難澁之內、別而去年より甚御指支に付、今般萬端御省略に而、當分江戶詰人御扶持方之儀、別紙之通相極被仰出候條、可被得其意候。衣服等を初萬端省略之儀者、前々度々被仰渡置候儀有之候得共、猶更諸事儉約之儀嚴重に相心得可申候。此段諸頭幷支配有之人々江、不相洩樣夫々可被申談候事。

丙申四月

四月十五日。前田治脩本年參覲の期を豫告す。

〔政隣記〕

四月十五日、當御參勤御發駕五月十一日、御着府同廿三日と、今日被仰出。

四月十五日。表小將辻織人不屆を以て在鄕を命ぜらる。

〔政隣記〕

四月十五日、左之通被仰出、今夜頭辻平丞於宅申渡。

金谷御表小將　辻　織　人

不屆之儀有之在鄕被仰付、當越候迄は一類に御預。

〔政隣記〕

九月廿一日左之通。

御知行百石　辻　織　人　せがれ

右織人儀段々不屆有之、越中大浦村に在鄕被仰付置候得共、知行之內百石せがれに被下置候旨被仰出。

四月十九日。儉約の實行に關する前令を勵行すべきことを告ぐ。

四月十九日魚津在住・今石動等支配・寺社奉行・公事場奉行・御算用場奉行・定番頭・御馬廻頭・御小將頭・聞番並組頭・町奉行・新番頭・御歩頭・大組頭・御持弓筒頭・御留守居物頭・御射手・御異風裁許・江戸御廣式物頭並等・御奥小將御番頭・御表小將御番頭・組外御番頭・定番御馬廻御番頭・御臺所奉行・御細工奉行・御役御免之頭分・隱居・御近習御用筆頭、且御用番一人宛御呼出、於檜垣之御間年寄衆御列座、御用番奥村主水殿左之御書立御渡。并於御席御馬奉行等五奉行・御年寄衆支配三之一被下置候平侍・三十八人頭・坊主頭筆頭・御用番一人宛御呼出、是又左之御書立御渡し。

御家中倹約之儀、前々被仰出之趣申渡候通に付、今更改而被仰渡にも不及事に候得共、年暦を經候得ばおのづから致忘却、猥に相成、次第に懦弱之風に押移候。畢竟跡々被仰渡之趣無違失堅相守候得ば、萬端事調候儀に候。因茲今般享保十四年共に申渡候要文等迄相調可申渡旨就被仰出候。別紙を以申渡候通に候條、此旨組・支配之面々は可被申渡候事。

申四月

御家中之人々倹約之儀、前々より被仰渡置候通に候。今般一統御借知被仰付候事に候へば、猶更嚴重遂倹約、勝手取續御奉公相勤候儀肝要之事に候。第一文武之志薄、風俗不宜候故、

得上辞情にかゝはられ、無用之費共多く候。假令其志有之者とても、一統之風儀におされ、其置晴候事も二段に成候等に相聞候間、只今迄之風俗者自今急度相改可申候事。

一、衣服之儀、先年より被仰出有之候得共、心得違之者も有之躰に相見候間、絹・紬より宜品者一圓用ひ申間敷候。頭々之面々を初、御小將・御馬廻等も、御番所・役所抔には木綿衣服着用之儀可爲尤候。袴・羽織等も准之、衣服を用ひ候儀勿論之儀に候。御步並以下不及申、猶以其心得可仕候事。

但、有來候衣類を指止、俄に絹衣等之支度仕候而は却而費之筋も候條、當分は只今迄之品を用申儀不苦候。速々を以本文之通相心得可申候事。

一、於江戸御供・御使・御給仕等相勤候節も、前段に准並服着用可仕候事。

一、近年男向に衣服着用之人々も相見得候へ共、女中之衣類華麗之至に候。畢竟父・夫等不覺悟之儀に候間、衣服着用爲仕可申候。召仕候女共迄急度可申付事。

一、町人・百姓并妻子等、衣服を初、近年華美に相見得候條、自今急度相改候様、奉行・支配人より可申渡候事。

一、醫師等衣服之儀前々より被申渡候、奢侈之躰相聞候間、無忘却隨分事輕取計可申候。但隨部に著者之、看与名付長袖之內品々出し候族も相聞候間、是又可爲無用事。

一、茶之湯之參會右に准じ、猶更至而輕く可仕候。勿論器物抔取集候儀者甚費成儀に候條、堅可爲無用事。

一、婚禮支度之儀、可成程萬端輕く可仕候。且又今以妻女を指置候家作料等遣候約諾仕者も有之躰に候。一向左樣之風俗に而者有之間敷候事。

一、鷹所持之儀、前々申渡置候通之事。

一、家作等も隨分輕く可仕候事。

一、葬式・法事輕く可仕候事。

一、一通音信贈答一向無用、祝儀物等取遣不仕候半而不叶儀者、かろき干肴之類用ひ可申候。且又他國往來之節爲餞別參會、又者發足前音信物、竪土產之品、堅無用に可仕候事。

一、三月之雛、五月之菖蒲甲、至而麁相成を用ひ可申候事。

一、一季居奉公人男女給銀之儀、跡々相觸候より輕召置申候事。右品々者儉約之基に候段、跡々より每度申渡候通に候。今般之儀者格別萬端致省略候儀專要候事に候條、被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配にも不相洩樣可被申聞候事。

中　四　月

四月廿一日。前田重教越中に放鷹す。

〔政隣記〕

四月七日、越中筋へ御泊爲御鷹野、中將樣當月二十一日御發駕、同廿九日御歸り今日被仰出。

〔政隣記〕

四月廿一日、曉七半御供揃に而、越中筋へ爲御鷹野中將樣被爲入候處、同月廿四日夜九時頃御歸殿。

四月廿八日。後桃園天皇の痲疹御平癒を祝する爲幕府に發遣すべき使者を命ず。

〔政隣記〕

四月廿八日、禁裡御痲疹に付、御酒湯之上爲御祝儀江戸表へ之御使者御用に付、當年江戸詰番御大小將長瀬多膳へ被仰付。但御發駕前迄に御樣子不申來に付、五月十一日發足に而御同驛止宿候處、御旅中へ御酒湯相濟候段申來、從御旅中爲御使御先へ發出。

今月上旬以來痲疹流行、諸向御番引多。右流行諸國一統、他邦は二・三月以來流行之云々。

本文は京都への使者なるべし、月日不詳

〔御年表〕

禁裡御麻并御酒被爲掛候御祝儀御使、芝山十郎左衛門被仰渡。

四月廿九日。前田治脩及び重教、徳川家治の日光社參終れるを祝し使者を金澤より發せしむ。

〔大梁公御年表〕

一、四月十三日公方樣(家治公)日光江御社參御發輿、廿一日還御。依之御祝儀御使有澤才右衛門、從中將樣佐藤久右衛門、兩人共廿九日金澤發足。

四月。百姓の風俗を質素にし及び物價を低廉ならしむべきことを郡方に命す。

〔御郡典〕

今般一統儉約之儀申渡置候通に候。夫に付近年百姓共并妻・娘を始華美、其外諸事奢侈之躰相見候。百姓共農業を心懸、晝夜相勵可申儀に候條、奢侈之族無之樣嚴重可被申渡候。

一、諸色直段之儀、跡々より高直無之樣申渡置候處、當時米直段に引合候而者、一兩年は諸物以之外高直に候。御領國產物者、所々より賣出候節高利を貪り候故、夫に準じ致賣買候者

判を貰り候に付、右之筈に候。諸物直段等之儀者、正德五年十月・享保元年二月具に申渡候通、被得其意、遂吟味下直に相成候樣可被申渡候。

右之趣御郡方所々奉行等ゟ不相洩樣被申渡、最寄夫々可申渡旨可被申聞候、以上。

四　月

別紙之通御用番主水殿、御覺書を以御申聞候に付、寫相達候條被得其意、夫々不相洩樣最寄可被申渡候、以上。

四　月　　御　算　用　場

高澤平次右衞門

井上九左衞門

五月十一日　前田治脩金澤を發して江戸に向ひ、その從者痲疹に罹るもの多し。

〔政隣記〕

五月十一日、九時前御發駕、廿四日御着府。但流行之痲疹に而御供御斷申上候人々數有之。御供御免、本復之上御跡より發足出府。河地才記も痲疹に而、御跡より同月十八日發足出府。御大小將吉屋彌五郎は痲疹に而御發駕前病死。御持弓頭吉田忠左衞門は御弓押に而御供之

處、發出後麻疹相煩、今月十七日於越後關川驛病死。右兩人之外死亡は無之。附、自分儀も此度初詰、於江戸役付御供・御給事、於御道中は御表小將加人歩御供蒙仰有之候處、八日より麻疹に付御供御斷申上、十七日酒湯、翌十八日御番頭河地氏同道に而發足。詰中無異儀。御供人之內三之二計は、七日・八日・九日・十日頃に酒湯、十一日御供に而罷越候處、詰中多分無異儀、少分は痢病、或眞頭痛等之病人有之。自分廿八日江戸參着。

〔御年譜〕

御供御家老松平大貳。

〔螢廼光〕

安永五年麻疹時行、されども人損はなけれども、餘毒疾瘡の如くにして久しく難儀する人多し。

六月八日。前田重教營業者にあらざる者の淺野川及び犀川にて漁撈するを禁ぜしむ。

〔政隣記〕

六月八日、淺野川・犀川共商賣人之外者、當分魚殺生爲相止候樣、中將樣より被仰出候段、若年寄中中聞之旨等、御用番前田駿河守殿より御廻狀出。

六月十二日。大小將組の諸士儉約の實行を約す。

〔政隣記〕

六月十二日、前々月十九日儉約之筋被仰渡候御書立之趣に付、諸組共追々頭々より組等之人々ゟ申談、今日御大小將頭より之申談方左之通。

御書立二通前記之通に付略之。

御家中儉約之儀に付、別紙御書立兩通、四月御用番主水殿御渡被成候。然處享保十四年儉約被仰出候以後、延享三年・寛延二年段々嚴重儉約被仰出も有之。右年暦之頃より、當時は世柄も違人々驕誇、其上御借知も有之候得ば、必至与支申時節、省略之儀ヶ條を以被仰渡有之樣仕度。右類等も寛延二年被仰出候趣を以、拙者共存寄僉議之趣御年寄衆ゟ相達置候處、今般之儀は格別爲端致省略候儀、吉凶之事等被仰渡候得共、都而相應り、裝束等之儀も其內に有之、致省略候指支不申旨、當月御用番長大隅守殿被仰渡候。此上は人々隨分無油斷、內外共儉約之儀嚴重可被相心得候。尤當組に而は、兼之得之參會等遠慮可有之筈に候。各被得其意、右御書立之趣等、六組御小將中組切各於御宅筆頭ゟ御申談可有之候。御用番支配・當分支配とも、右に准御申談可有之候、以上。

六月十二日　　御用番　中村左兵衛

御番頭連名殿

右談方諸組共大同小異之事。

六月廿八日。前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。

〔徳川實紀〕

六月廿八日、臨時朝會あり。松平加賀守治脩をはじめ、參覲七人。

六月廿八日。御郡奉行兼改作奉行に役用の金子を支給することを定む。

〔異本三守御譜〕

是年御郡奉行・改作奉行當分打込兼帶相勤候樣に被仰渡。

覺　　郡觸

一、白銀十枚充　　四百五十石以上

一、金小判十兩充　　四百四十石より三百石迄

一、同十五兩充　　二百九十石より二百石迄

一、同二十兩充　　百九十石より百石迄

右御郡奉行・改作奉行當分打込兼帶相勤候に付、爲役用右之通毎歳被下候條、改次第可被相渡候、以上。

丙申六月廿八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　横山河内守

森田負衞殿

神保舍人殿

小塚牛右衞門殿

御郡奉行・改作奉行當分打込兼帯相勤候樣に被仰渡候に付、人用も懸り候間、役用被下候樣に被致候旨、先達而被申聞候趣達御聽、別紙之通被下候條、此段夫々可被申渡候事。

申六月

六月。この頃又所々に木遣狂言流行す。

〔坂井信記〕

一、當年木やり狂言与名付、宮腰等におゐて事有之候所、頃日所々に右躰之事興行与及承候間、別而當膝どもも心得違茂出來可申哉、若申分杯出來候而者如何与存候。當時何等之御樣子茂有之候而御聞届候哉、其儀者難計候得共、人々可相守筋者ゆるみ不申樣に致度、拙者どもも寄合候而者種々に此事申合候儀に候。近き頃者其場所において喧嘩等も有之沙汰、其外品々浮説なかにも申ならし候事不可然候。假令他組いかゝ躰之儀候とも、當組懸隔左樣之沙汰に不簡樣に致度候樣、御人々御心得之事に三候へ共、猶拙者共内存之趣申談候條、被得其意、

家來等、心得違無之様可有御申付候。表立申談候儀もいかゞと、内分覺書を以申談候。右之儀に付而は、御年寄衆へ拙者共より申達置候儀茂有之事。

六　月

木やり狂言等有之に付、心得違茂出來可申哉与、御馬廻中一統へ拙者共内存申談候趣、則別紙覺書一通相達候條御請取、其御心得有之、同組衆へ御自分より内々可有御傳達候。先々封じ物に而被相廻候様に御申談候様に与存候。此段相招可申達候處、御番引に付以紙面申達候、以上。

六月廿一日　遠田三郎太夫

栂三郎左衛門殿

追而申入候、役懸之面々幷三の一、舊宅迄も不相洩様、且在江戸等之面々は代判迄可被相達候、以上。

遠田三郎太夫は御馬廻頭なり

〔螢廼光〕

安永五年宮腰幷金澤春日山に芝居興行、松任にも興行して、役者皆小松の者也。

六月。金澤卯辰八幡社内の角力禁止せらる。

〔政隣記〕

翌年は安永五年

網猟もち江鳥黐・投網は禁制

翌年六月以來、卯辰於八幡社內角力興行有之。他國者角力取高野川・丸島・鷲ヶ岸等申者入込有之候處、改方ゟ召出之上、御國外ゟ追出に相成候事。

九月廿一日。前田重教越中に放鷹す。

〔政隣記〕

九月十日、中將樣越中へ爲御鷹野、當月廿一日御發駕之被仰出、則廿一日朝被爲入、廿八日晝過御歸殿。

但、萬端當四月之通与被仰出候事。

十月七日。狩獵の方法に關する從來の禁令を守るべきことを告ぐ。

〔國事雜抄〕

從前網・黐る・等御停止に候處、近年猥に相成、不得埒之者も有之、右殺生道具往來持參之者も有之躰に候。且又右保川並金くさり川等も、舟にて投網打候儀、九月朔日より三月晦日迄、是又御停止に候處、猥に相成候樣子に候。以來右躰之儀無之樣、嚴重に可申渡旨被仰出候條、御家中之面々等家來末々迄、右之族無之樣一統夫々可有御申觸候事。

十月七日

十月ヵ　能美郡の十村等猪・鹿を驅逐せんが爲鐵炮の貸與を請願す。

〔御高御仕法記〕

近年山方村々一統猪・鹿多徘徊仕、作物踏荒し、百姓中以之外難儀迷惑仕候。勿論冬中深雪に相成候へば、近在村々申談随分追拂候得ども、春に至又々相集、苗代并蒔物抔仕申以後、領内谷々晝夜番仕、随分追拂不申而は難成。左候得者自然与農仕事・稼等も手おくれに相成、村々困窮仕申候。尤御郡之内釜清水村小四郎組、澤村源丞組、若松村孫右衛門先組、波佐谷村文兵衛跡組之儀は、遠山奥御公領御境に罷在、跡々より獵師鐵炮御渡置被成候に付、右之者共相雇爲討捕申儀も有之候へども、年中之儀、其上何茂百姓に御座候得ば、其村方領内之番等仕、多分遠方ゟ被雇罷在申者も無之、旁相顧居申内彌急点に合不申候。猪・鹿之儀は餘村より鐵炮に而追拂候故、自一夜之内にも多相集申に付、彼是近邊之内鐵炮所持仕罷在、早速打捕追拂候様仕度旨、今江村庄藏組、埴田村三郎兵衛組、若松村兵助組、寺井村平吉跡組、土室村半兵衛跡組、片山入村々之分谷合・田畠等累年踏荒、一向作物仕付も難成族に而、百姓中次第困窮至極仕候間、何卒此五ヶ組十村中手前ゟ、獵師鐵炮一挺宛御渡被下候様段々相願申候。左候はゞ猪・鹿徘徊仕申村方ゟ相渡、追拂次第右鐵炮取揚置、御締方之儀者嚴重爲相守可申候間、本願申通被仰付被下候はゞ忝可奉存候、以上。

午十月　　　二曲村　典右衞門
　　　　　　澤村　源次
　　　　　　今江村　庄藏
　　　　　　參同水村　小四郎
　　　　　　埴田村　三郎兵衞
　　　　　　若杉村　兵助

木梨助三郎殿
奥村左太夫殿

十二月六日、領内に於いて猪を捕獲するものに米を賞賜す。

〔岡部舊記〕

近年猪多相成、田畑喰荒候由及承候。依而是以後猪狩捕候ば、一疋に米一斗宛爲御褒美被下之候條、狩捕候猪之尾夫々奉行江可相達候。尤猪不依大小、狩捕候ば右之通被下候條、隨分狩捕候樣可申渡候。已上。

十二月六日　　　堀田治兵衞　印
　　　　　　　　榎見左膳　印

この碑今存し表面に梵字を記し安永六年二月廿五日金剛佛子義道書とあるのみ本文奉行數人の名を刻む以下は誤なり

朱書

但、如斯に而尾指上候處、其後耳一疋分二つ宛指上候樣に被仰渡、耳上申候事。

〔三州奇談〕

天心豈測り知らんや。安永三・四年の頃は、北越の嶺々野猪多く渡り來て田畑を損ふ。山畔の土民甚だ憂とす。是に依りて國君村々に猪を狩らせらる。一頭を得る者に幾何の米を與へんと命ありて、早く猪を捕へ盡さんとす。幸哉天も是に荷擔ありけん。同五年・六年大雪ふりて、此猪ども居を失ひ路を誤ちて、里民の爲に悉く得られて、終に一疋も殘るものなく、此害を消したり。此事を司る人數人、仰を承りて是を吟味ありしに、遠路より猪を運ぶに人力の勞ありとて、尾のみ斬りて是を證とし、褒美の米を渡さる。里民悅び貪り、人々競ひて數日に數千の野猪を捕り盡して、一時に奉行所に積重ぬ。扨事終りて、其尾數千を燒きて塚となし、梵字を彫りて石碑を立て、一杯の土をかき寄せて、塚目印の石を壺の形とし、僅に奉行數人の名を刻む。其中に何の金平といふ人あり。この人武門に秀名あればにや、其邊の里民金平塚〳〵と呼ぶ。功の一人に歸するや、人の號へはあやしきものなり。其地は竹の橋の前なる山、東方の路邊に在り。

明和二三年とあるは誤なり

大樋道場といふも誤なり

〔螢邇光〕

一、明和二・三年に頭龍・越にて猪鹿して狩り捕りし事有。兩耳と尾を切て證として員數改、一疋に米二斗宛被下し也。此時初て田畑荒来るを遁ㇾ下、今に例と成れり。其數千の耳・尾、僧侶に命ぜられ供養有之。後大樋村道場御刑法場の傍に石碑建て、今に其塚あり。

御先代町方へ渡しありけり。二日講といふに、屋敷樹木に鳥の巣を懸さすべからず、子を抱かび巣立迄取捕ふべからずと見えたり。今猪に供養ありて碑を立てられしに、誠に恩鳥獸におよぶ難有御政道にあらずや。

十二月十一日。前田重教年頭の禮を受けざることを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十一日、左之通御用番被仰渡候旨等、觸頭より例文廻状有之。

中將樣來年頭御禮被爲請間敷旨被仰出候。獻上之目錄は、正月朔日目付にて、當廿日より廿八日迄之内御奏者所へ差出、金銀は御進物所へ指出候樣。

十二月。能美郡大長野村等に於いて明年引網の季節に至るまで營業にあらざるもの、狩獵を禁止す。

能美郡
大長野村
小長野村
野田村
荒屋村
長野田村
平面村

右者鶴泊之所々に付、來年引鶴之節御用に候條、右於所々唯今より引鶴相濟候迄、殺生御停止之旨被仰出候條、御家中之面々等家來末々迄、不相洩樣一統夫々可有御申觸候事。

申十二月

別紙若年寄中より之紙面寫相越之候條、被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之内茂許有之人々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可存傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月十五日　　奥村主水

正月は安永六年

能美郡

大長野村

小長野村

野田村

荒屋村

長野田村

平面村

右村々鶴泊り之所々に付、來年引鶴之節被仰出候迄者、殺生御停止被仰出置候へども、猥に其鶴驚相止及難儀候に付、今度能美郡に鶴追見之者仰付、鶴泊り之障りに相成不申樣に爲申談合、村々銘節にも儀者爲殺生御免被成候條、被得其意可被申渡候事。

丙申十二月

右之通り加州御郡奉行台申渡候。乍然郡宴中之面々等江、先達而御申觸之通殺生相成不申候間、心得違無之樣に一統可有御申觸候事。

是歳。能美郡遊泉寺鑛山を開發す。

白稼は澤村源次

〔兎鷄綱〕

一、百二十九匁　遊泉寺村領銅山地元見替銀。文政六年より改而被仰付。

一、三石五斗　同銅山續御引揚に付地子米。同斷。

一、十二石五斗　遊泉寺村鴨川村銅山續水下銅水懸り御償米。同斷。

右遊泉寺銅山安永五年より白稼、天明年中より休山、文化年中より又取懸り、産物方手合に相成、文政六年より御次金山に被仰付、地元被下銀等其筋より改而御渡し。

安永六年

正月十五日。金澤堀川町の町人等石川郡粟ヶ崎村藤右衛門の家に至り銀子借用を強請す。

〔政隣記〕

正月十六日石川郡粟ヶ崎村藤右衛門方に、堀川町々人躰之者大勢罷越、當時諸物高直及難澁候間銀子借度旨申に付、手代出懸合候上、一人へ一貫五百文宛貸渡證文取受置候。然處翌日以來連日人多に罷越、同樣に申に付、一人に米一斗宛貸渡候處、次第に人數增、夥敷群集及騷動候に付、致御締候樣改方長屋多七郎に被仰渡候に付役人指出、不足之分割場より加入足

輕二十人受取、堀川筋等爲相廻候處下旬ニ至相止。

正月十八日。當時在江戸の大小將は藩侯の歸國に供奉するもの丶外詰延たるべきことを命ず。

〔政隣記〕

正月十八日、於御勝手方御席左之御覺書駿河守殿御小將頭へ御渡。但其外新番頭・御歩頭等へも同斷。

當時江戸表に相詰罷在候御大小將、御歸國御供趣之外ニ交代被指止、直ニ御留守中詰延被仰付候旨被仰出候條、右之趣を以役附相しらへ、相伺可被申候事。

酉 正 月

正月廿二日。百姓・町人の子にして盲人たるもの丶支配に關する幕府の令を傳ふ。

〔御觸并御返書留〕

都而百姓・町人之倅盲人ニ候ニ付、檢校仲間之弟子に成、夫々之渡世致修行、第一官位をも心懸候等之處、近年檢校之弟子ニ不相成趣ニ付、從公儀相渡候御書付等寫相越之候條、被得其

意、御組等幷與力且又御家來末々まで可有御申渡候、以上。

酉正月二十二日

本多安房守　印

前田駿河守　印

松平右近將監殿御渡候御書附寫一通相達候間、被得其意、答之儀者小野日向守方に可申聞候、以上。

十一月八日

大目付

松平加賀守殿

留守居中

安永五年なり

大目付に

都而百姓・町人之悴盲人に候はゞ、檢校仲間之弟子に成、夫々之渡世致修行、第一官位を心懸候等之處、近來檢校之弟子に不相成、琴三味線等・針治導引を渡世之種に致、或は仕官之身と相成、脇指抔を帶し候類之盲人多相成候趣に相聞候。以來百姓・町人之悴之盲人、琴・三味線等・針治導引を渡世にいたし、又者武家に被抱候而も、市中に住居いたし候ものは勿論、主人の屋敷內に罷在候とも、右家藝を以他所をも相稼候ものは檢校の支配たるべき事。

一、武家諸臣之悴之盲人に而も、市中に住居いたし、琴三味線等・針治導引を以渡世いたし

候分は、是又検校之支配になるべき事。

但、武家出生之盲人、他ゟ養抱市中に罷在候とも、稽古場を拵弟子集杯致間敷、若弟子集いたし候はゞ主人之方相断、検校之支配受べし。

一、百姓・町人之倅之盲人に而も、琴三味線等・針治導引を以渡世不致、親々手前に罷在候而已之もの、幷武家ゟ被抱、主人之屋敷又は主人之在所ゟ引越、他所之稼も不致分は制外たるべき事。

右之通可相守旨、不洩様可被相觸候、以上。

十一月

正月廿四日。中村求之助その小者を殺害す。

〔日記〕

私家來小者三内与申者、今日七時前私用事之儀、勝手方家來朝倉八郎左衛門儀於臺所申渡候所、及過言候に付、不屆之段叱申付候處、且而承知不仕候に付、致打擲候樣申付候處、八郎左衛門鼻捻を持相向候へば、其儘逃申候故、追詰小者部屋、手に而胸ぐらを取候へば、即而八郎左衛門ゟ手向、押倒鼻捻を奪取申候。其所へせがれ求之助追續罷出候へば、鼻捻振上、是又手向候故、不得止事求之助手討に仕候。如御法檢使之儀、公事場御奉行衆へ被仰達可被

下候、以上。

丁酉正月廿四日　　中村才記判

富田九郎右衛門殿

右寺嶋藏人諸組中村才記書付之通に御座候間、檢使之儀可被仰渡候、以上。

富田九郎右衛門　印

永原求馬殿

伊藤内膳殿

奥野主馬殿

原五郎左衛門殿

二月廿一日。前田重教能美郡に放鷹し二十五日を以て歸館す。

〔政隣記〕

二月二十一日、前月二十四日、能美郡御泊御鷹野に今月二十六日頃中將樣可被爲入旨、都而去年春之通ニ被仰出置候處、今朝御發駕、二十五日御歸殿。

〔舊記〕

安永六年二月廿二日能美郡ゟ中將樣鶴御鷹野に御出被爲遊、御畫所伊左衛門方に被仰付候。

同廿三日御晝御膳所及被仰付、兩日共小松京町久津屋彌平次方御止宿に而御座候時に、廿三日大嶋村領に而觀御事に驪り申に付、廿四日に御機嫌宜彥通御歸城被爲遊候。但右廿三日御晝所之内、露地に而御茶抄鐵炮被爲遊、其上に而登場拵置候樣中村萬右衛門殿を以被仰渡、早速右場出來爲致候。

一、御指篭竹　一本、長二尺五寸、但白紙に而張上申候。

一、御火入唐津　一つ

一、御揚　一脚

〆三品

右は御火之間防も有之候に付、二月廿四日俄御歸城被爲遊候に付、小松御旅館に而、奥御横目讚邊新助殿・御同役秋原市右衛門殿を以、右之御遊具之品々、伊左衛門方へ御預被爲成候間、重而御用之節可被仰遣旨被仰渡に付、是を奉預置申候。

一、御鷹野御晝所相勤之間、金の屏風一双花車番夫之人形彩色有、繪師不知。右者御座間に建置候所、御意に被爲入、金谷御殿に指上候樣被仰渡候に付、夫々指上置申候。翌月無程御返し被爲遊候。併此屏風程經而、天明三年二月英姬君樣保科肥後守樣に御嫁入御用に付、重而指上候樣被仰出候に付指上候、右屏風料銀二十枚被爲下之候事。

三月十日。犀川・淺野川の漁撈禁止を七月晦日まで解除す。

〔政隣記〕

三月十日左之趣、御用番長大隅守殿より御廻文出。

犀川・淺野川御留川に被仰付置候得共、此節より七月晦日迄御用無之段被仰遣候由、若年寄中申聞候事。

三月十三日。西永治兵衛江戸より野郎を伴ひ歸りたるを以て御預に處せらる。

〔大梁公御年表〕

一、三月十三日夜御算用者西永助五郎せがれ治兵衛、江戸表より野郎を召連歸る。依之助五郎に御預。

三月廿五日。前田治脩就封の暇を受く。

〔三守御譜〕

三月十六日、暑氣御痛、四月中旬にも御暇被仰出候而は、御旅中にて暑氣催時分にも相成候間、四月へ入御暇被下置候樣にと御願書付、松平右京大夫へ御指出被成候處、同廿二日御番

被召呼、岡田太郎左衛門罷越候處、先達て御書御指出候に付て、近々上使被成下、來月朔日御暇之御禮被仰上候御沙汰之旨内意被仰聞。同廿五日上使松平周防守を以て御暇被仰出、西丸より同部豐後守を以て御拜領物等如御例。

三月廿五日。淺野川靜明寺火災に罹る。

〔政隣記〕

三月廿五日夜九時前、淺野川靜明寺近邊より出火、同寺不殘燒失。

三月廿八日。改作奉行と郡奉行とを兼務し毎郡二人出張在住する制を廢して古格に復す。

安永五年三月六日の條參照

〔異本三壽御讀〕

是年御郡奉行・改作奉行打込兼帶相勤候樣去年被仰渡候處、被指止、古格之通御郡奉行・改作奉行一式之勤方に被仰渡。去年御郡奉行兼帶ニ付相兼、且御郡奉行・改作奉行御手足役、兩人之趣相心得候樣被仰渡。

付札、御算用奉行江

三州御郡々へ御郡奉行・改作奉行兩役打込兼帶被仰付、一郡へ兩人宛引越候條、去年一作故河内守より申渡候通に候へ共、右之趣に被指止候條、古格之通御郡奉行・改作奉行一式之勤

方夫々申渡候。御締方等嚴重相しらべ候樣可申渡旨被仰出候條、此段兩奉行へ可被申渡候。且又改作之御法專一に相守、耕作手入等之儀晝夜心掛手拔無之樣、長百姓初末々迄致得心農業入情候儀、十村・肝煎等へ急度申渡候樣、改作奉行へ可申渡旨、是又被仰出候條被得其意、右奉行中へ可被申渡候。改作奉行古格之趣被仰付候に付て者、格別之趣を以小谷與左衞門・岡田是助儀、當分改作方役所ゟ罷出申談候等に候條、此段改作奉行へ申聞、古格錯亂無之樣可被相心得候事。

酉三月二十八日

付札、御算用場奉行ゟ

今般郡分主付之儀相止候に付て、改作奉行御郡々へ引越有之候人々、此表へ早速罷歸り、御郡奉行は前々之通、面々之御貸家に罷越住居いたし候樣に可被申渡候。且又每歲被下銀相止、御郡奉行・改作奉行被下足輕茂前々之通に相心得候樣、夫々何申談候事。

酉　三　月

三月廿九日。金澤に於いて夢想によりて得たりと稱する茶釜を觀覽せしむるものあるを以て之を禁止す。

〔政隣記〕

三月上旬泉野出町茶店酒屋伊兵衛妻ども申者、三度迄逢夜に、於御門前々様なる茶釜可求旨夢想に付、夢之趣相尋候所、夢之通無違茶釜、山田屋彌三兵衛店に有之候に付、相求上箱致し置、人々に爲致見物、參物語致し候處、聞傳候而大勢群集。依之二十九日右夫婦改方へ呼出候而、右釜爲致見物候儀停止に申渡有之。

四月朔日。前田治脩登營して就封の辭見す。

〔徳川實紀〕

四月朔日、月次の拜賀例の如し。松平加賀守治脩就封の暇賜ふ。

四月六日。御郡奉行兼改作奉行たりし木梨助三郎その職務を謬るを以て自分指扣を行ふ。

〔袖裏雜記〕

木梨助三郎儀、石川郡御郡奉行并改作奉行兼帶主附被仰付置候處、去年一統以之外不作に候へども、石川郡之分に茂厚中に逢々御請仕候處を以、拜領米も被仰付候へども、元來極難之者共、多年餘り高も出來、當春出作指支、無是非重而相願候筋も御座候。十村共手前如在は無之候へども、不辨弱之手役職違失仕候段、是以畢竟私取捌方行屆不申故与迷惑奉存候。委

三月は安永七年

批取はへぎとりなり

由に御算用場奉行中迄申達候。依之自分に指扣可申哉之旨紙面、頭戸田治兵衛添書に自分指扣罷在候様可申渡哉之旨調出。助三郎儀二萬千石餘手餘り高出來之儀等、取捌不宜候間、相糺追而可伺。依之追て被仰出有之迄は、先自分に指扣罷在候様、今六日治兵衛へ申渡候旨、四月六日江戸へ申上。

〔袖裏雜記〕

前冊に記す木梨助三郎事、先達て僉議之趣相伺候、如何と三月廿日御意に付、頭共・御算用場奉行よりも御免之儀每度申聞候間、自分に指扣罷在候に不及、役儀に御免被成候段申渡可然旨申上候處、其通と御意。

四月六日」金澤城西町口門外に訴狀を貼布するものあり。

〔袖裏雜記〕

當月六日割場奉行罷出、西町口御門續下懸塀之角柱に訴狀躰之物張有之候由。右御門番人及断候。如何心得可申哉之旨申候付、前々御城外類に右躰之儀有之候へば、割場奉行より相届批取候様申渡、御城に取揚、夫より御用番に相達候例も有之候付、批取指出候様申渡、御横目足輕指添可然候間、右奉行より直に御横目中に相達候様申談候處、則右之品批取、割場奉行紙面を添指出、何も申談遂披見候處、右之品宛所御横目と有之候間、御横目取捌可申儀に

覺書の日附文と相違す壹ゝに井

候間、割場奉行ゟ相返、御横目ゟ達候様可申哉之旨等、御横目より内分以ゝ申聞候へども、最早披見後故、右奉行ゟ難返、外夫所ゟ達御横目ニ格別之儀故、御横目ニ可渋處、其儀不心付不行屆候付、其段御横目へ申聞、右之品割場奉行詰所而其相渡、右間違之趣私共ゟも及言上候段申聞候。御横目よりも委曲可申上ニ奉存候等、四月八日言上之。右訴状ニ、御馬廻笠間新左衛門不行狀等之儀段ヶ書立候品也。不行状之趣ニ、娘共奉公に出し、其伯母權五郎方にて亂行、賣女召寄候等之趣也。

四月十日。前田治脩江戸を發して就封の途に上る。

〔御年譜〕

一、四月十日江戸御發足、同廿三日御歸城。

〔御年表〕

四月十日江戸御發駕、廿三日御歸國。御供大音帶刀厚曹。御道使多賀左兵。

四月十一日。前田重煕の二十五回忌法會を金澤寶圓寺に執行す。

〔政隣記〕

四月十一日、於寶圓寺謙德院樣二十五回御忌御法事。

四月廿三日。前田治脩金澤城に著す。

〔政隣記〕

四月二十三日。江戸御發駕、今二十三日朝五半時御歸城。且昨夜今石動御泊、同夜四時過御發駕也。御作法都而前々之通り。江戸表ゟ御禮之御使人多賀逸角御目見、於御年寄席御羽織・御卷物拜領、披露御大小將。

五月十二日。前田吉德の三十三回忌法會を寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

五月十二日、昨今於寶圓寺御法事護國院樣三十三回御忌、來月今日御相當之處御取越御執行有之。

附、十八日寶圓寺ゟ御大小將渡邊源藏御使にて、當十一日・十二日護國院樣御法事相濟、依之御招請も可被成候處、其御儀無之に付被遣候旨之御口上に而、燒饅頭一箱・狗脊一箱・御茶一箱被遣之。

五月十四日。家老松平大貳、同役と不和なるを以てその役儀を除かる。

〔袖裏雜記〕

五月十四日組頭安房守宅において左之通申渡。

松平大貳

御自分儀、思召有之候付、役儀被指除候旨被仰出候。

右呼出者左之通紙面遣候也。

御自分儀、御用有之候條、直ニ私宅江可有御出候、以上。

五月十四日　　本多安房守

松平大貳殿

右大貳役儀被指除候ニ付、同役之御家老ニ不相、江戸詰中ト旅情貪之取捌有之躰。且富田外記・三宅權左衛門等御小屋江招、相伴ニ御醫者佐々正倫・内藤尚良・有澤良長・久保定能替々罷越、御用談之由ニ而、右人々次之間へ退候へども窺聞候儀も有之躰。且外記御小屋へも大貳折々罷越候由。其御用談之品、相詰大音帶刀何之儀も承知不致、前々も右之様之由等、同役よりも内々御用番江相達候趣も有之、旁右之通被仰付候也。

五月十五日。組外組の番頭等再びその軍役に關して伺書を提出す。

〔正德至天保雜留〕

安永六丁酉五月重而相伺候紙面扣。　調役中村久左衛門

組外四組幷御用番支配、雙私共御軍役之儀、先年より委敷被仰出候趣も無之、先同役共より奉伺候趣も無御座候得共、奉心付候趣御座候付、安永四年六月奉伺候。其後被仰出も可有御座候哉与見合罷在候得共、今以何之被仰出も無御座候。何卒私共兼而相心得置申度儀奉存候間、先達而奉伺置候趣、被仰出被下候樣に仕度重而奉伺候、以上。

丁酉五月十五日

三輪藤兵衛
中村久左衛門
小谷兵左衛門
久世平助
村田助三
荒木善太夫

右十五日二之御丸御次に罷出、富田外記に相達候處、御近習頭を以可差上旨、外記申聞候に付、先達而三宅權左衛門を以差上候趣に付、差上候段相答候處、此度外に演述之趣も無之儀に候はゞ、御近習頭を以可差上旨申聞候付、左候はゞ此度外に御達申品も無之候間、御近習頭を以可指上旨相答、神田十郎左衛門を以指上候事。但三輪藤兵衛役引仕罷在候に付、中村久左衛門持參致候事。

五月十六日、能美郡大長野村等に於ける狩猟禁止を解除す。

〔御觸并御返書留〕

別紙若年寄中より之紙面寫相渡之候條、被得其意、組・支配之面々へ可被申渡候、組等之内裁許有之人々にも、其支配へも相達候様被申聞、夫同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月十六日　　村井又兵衛

能美郡大長野村
小長野村
野田村
荒屋村
長野田村
平面村

右六ヶ村爲泊之所々に付、殺生御停止被仰出置候得共、最早不及其儀候旨被仰出候條、御家中之面々等一統夫々へ可有御申觸候事。

酉五月

五月廿七日。年寄中の藩侯と對談する際の作法に就きて諭す。

〔袖裏雜記〕

年寄中御用有之御前へ被爲召御長談之内、御役人罷出御用有之候節は、退去仕候ても不苦候間、左樣之節は富田外記等迄、中山儀右衞門等内罷越、其段相達候へば通達仕候。且又何ぞ用事等有之節は、勝手次第退去可仕候。右之趣故、最初御前に被爲召候節も、御用有之候はゞ、相揃候而罷出候に不及候。此段相達置候樣に御意之旨、五月廿七日外記演述。

此頃年寄中御前に罷出候節、進退尊敬過、御用談之障に成、御前にも御窮屈に被爲在候間、寛かに可仕旨被仰出。御家老中にも、准候而相心得候樣可申談旨被仰出。則御家老中へ五月二十八日申談、猶其程合は外記等と示談有之樣申談。

五月。木遣狂言金澤卯辰八幡社内に行はる。

〔政隣記〕

五月、卯辰八幡にてきやり狂言有之。

〔御年表〕

今年卯辰八幡・寺中社・中村三ヶ所芝居有之所、盆後相止。

六月五日。前田治脩、老臣の政務に關して謁見する際筆硯を持參すべきことを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

年寄中御前へ罷出候節、硯・料紙持參可宜。品ゟ御意有之時書記可然旨、六月五日御意。

[illegible]

私曰、但此後折々持參之事も有之、扣子も持參候事も有之。但近年ニ御硯御側ニ被差置、御筆之品有之時ニ、是ニ而調候樣御意ニ而、大方御硯ニ而相調候也。

七月三日。前田治脩、歸國の際供奉に勵精したる諸士を賞す。

〔政隣記〕

七月三日、今度御道中ル御供無御怠相勤候人々わ、今日於御次八講布等夫々前々之通ゟ以被下之。

是月は大盡なり

七月晦日。犀川・淺野川等の漁撈を禁止す。

〔政隣記〕

七月晦日、左之通御用番奥村助右衞門御廻狀出。

犀川・淺野川其大橋より下魚殺生當分御停止、右保川・金くらひ川其外堀々ニ而投網打申儀、

是以後堅御停止与重而被仰出。且又石川・河北兩御郡に而雉子殺生指止候樣被仰出置候得とも、前々より御免場之分者、是以後御免之段、若年寄中申聞之事。

八月三日。前田重教の生母實成院の十七回忌法會を實成寺に行ふ。

〔政隣記〕

八月三日、實成院樣御十七回忌に付、今朝於實成寺御法事有之。御兩殿樣御參詣昨日被仰出、今朝御供人揃候處御延引被仰出。

八月五日。前田治脩老臣に命じて博奕を爲したる諸士の處置に關し議せしむ。

〔袖裏雜記〕

盗賊改方長屋多七郎手合に而、御射手根來三右衞門長屋借町人與兵衞与申者召捕吟味之處、盗賊之儀并博奕いたし、連中諸士等之内、定番御馬廻福田彌八郎・同不破源太夫・源太夫弟彌右衞門、組外山本青太夫・同岡田元右衞門・元右衞門弟主計、本組與力佐久間五郎兵衞・久世幸左衞門・幸左衞門弟幸助參會仕旨申顯。其段多七郎達御内聽候付、言上紙面八月五日被渡下、前々之振合御尋に付、寶暦十三年主計町白銀屋與左衞門博奕侍中等同類有之、改方より達御

内證、私共へも内々申聞候付、與左衛門等口書には侍中迄名書、別紙に名書調出可申候。口書には盗取候金銀等博奕に遣失候与迄認可申候。右口書公事場へ引渡候様可申渡候。右奉行へ引渡候にて、同組御吟味之儀著前々之様子も有之節に聞候間、御難題に成不申工面に取計可申と奉存候。右之趣に候へば、與左衛門等手前御吟味之節、心得之儀公事場奉行へ内々被仰出も有之可宜与奉存候旨等申上候處、於公事場逐吟味、博奕同類共公事場において尋様等、紙面之通に心得、奉行共へ内々可申渡候。従御前分而被仰聞御數候。右吟味之内、表向へ難題儀は達御内聽候様可申渡趣等被仰出候付、其趣公事場奉行等へ申渡候。今般多七郎よりも上に私共へ何之儀も不申聞候間、與兵衛口書には博奕同類御家人之分相省、名書別に調、私共へ内々相達候様被仰渡に而可有御座候。於公事場吟味之方其心得之儀、御前より可被仰渡哉、私共よりも可申聞哉之旨、翌六日申上候處、多七郎へは申上候趣之通、御直に可被仰出候、公事場奉行へは御用番より吟味之心得可申聞旨、翌七日御意。

九月十二日、藩侯祖先の法會を執行する際鳴物等を遠慮せしむる件に關して議す。

〔袖裏雜記〕

御先祖様方御法事之節、鳴物等三日遠慮有之候。於公儀御法事之節鳴物等遠慮無之間日數三

日と歟、御鷹出候儀も輕み申樣相成間敷哉、僉議可被聞召旨從中將樣被仰出に付、於公儀は御法事中普請・鳴物・祭禮・法事等不及相止旨被仰渡候へども、御家之儀は往古何卒被仰出も有之候哉、其儀は相知不申候へども、御代々鳴物等遠慮被仰渡候舊例に候處、今更御省略如何歟、前々之通被成置候方可然と僉議。御鷹指出候儀輕み申儀は、若年寄方に而遂僉議奉伺候樣申談候趣、九月十二日申上。

九月十九日。前田重教越中に放鷹せんとすることを豫告し、次いで之を延期す。

〔政隣記〕

九月十九日、來月中旬中將樣越中筋に御鷹野被仰出。

但、十月七日御延引被仰出。

九月廿一日。新田畑開發に關する幕府の令を傳ふ。

〔司農典〕

於國々に新田畑開發之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結相越之候條、被得其意、御郡奉行等にも可被申聞候、以上。

丁酉九月二十一日　　本多安房守

前田兵部殿

神保舍人殿

小幡半右衛門殿

松平右近將監殿御渡候御書付寫一通相達之候條、答之儀者松平對馬守方ゟ可被申聞候、以上。

九月七日　　大目付

松平加賀守殿　留守居中

大目付ゟ

國々ニおゐて新田切開發之儀、一領一國之内ニ籠り有之場所者、從公儀新開不被仰付。萬石以下知行之分同斷之事。

但、一村一給ニ無之分、郷ニ而も一給ニ而取廻ニ候内ニ有之候地所同前之事。且村々之地先ニ不及申ニ、山野・芝地・原地并秣場・海川之附洲・寄洲、其外右類之場所、御料者勿論、他領之地先少しニ而も入交有之分者、私領ニ而開發不相成、從公儀新開被仰付候。尤新田畑之儀ニ付而者、享保七寅年被仰出も有之候得共、猶更右之趣以來違失無之樣可被相心得

候。

右之通可被相觸候。

酉 九 月

九月廿九日。御醫者小瀬甫元、公事場奉行より預けられたる小者を脱走せしめたるを以て遠慮を命ぜらる。

〔御異雑記〕

御醫者小瀬甫元家來小者長助与申者、當十一日盗賊改方より差出候樣申越、其段中川八郎右衛門より甫元へ申渡候處、十一日朝可差出致支度候内致逐電行衛知不申處、改方手合に而召捕、同廿二日朝甫元へ渡付、公事場御用番原五郎左衛門宅に廿三日朝長助差出候樣申渡。尤夫迄は甫元へ差預候段、支配人へ五郎左衛門より申遣候處、廿二日夜取逃し、甫元不念之至に付、御用儀之外外出不仕樣に先申渡置候旨、支配人紙面等出之。准例明和六年十二月御算用者木村權五郎於江戸出奔之節、召連候家來小者久藏、翌年二月廿一日夜權五郎養父木村專助方へ立歸候處、專助其節腰痛難儀、其上召仕候家來も不在合旨に而、久藏召捕不申趣等書付出候處、欠落人之儀は御法も有之事候へば、如何樣にも致樣可有之儀。殊に權五郎行衛之儀も相尋可及斷處無其儀、剩經數日及斷候段重々不念之至に付、同年十月より遠慮被仰付候。

令檢甫元等聞之致方、其上前々從公事場預之者取逃候節は、其番人等於公事場吟味之上、申分に寄り禁牢申付候由候間、甫元遠慮被仰付、せがれ大庵儀は外出不仕樣可申渡儀在、九月廿八日伺之處、九月廿九日伺之通被仰出。

九月。小作等、親作に對し非分の申懸を爲すを禁ず。

〔司農典〕

寶暦八年別紙之通一統ゟ申渡置候處、小作其高主ゟ對し年々何角申立、不埒之族有之躰相聞候條、右先年より申渡候趣を以、夫々嚴重可申渡候。致請作候節作用来高等相極置候而者以後に至り彼是申立、高主ゟ損料を懸申族も有之躰、不屆之趣に候條、是等之儀茂猶更急度可申渡候。且亦高主に對し、小作の者共指引合等之儀に付、大勢連に而罷越候儀不相成儀に候處、近年猥に相成、弁當指引合等之儀に付大勢連に而罷越候躰相聞候。以来者指引合等右高主ゟ小作之者共罷越候節、一兩人宛罷越可申候。大勢罷越候はゞ、其節々役人ゟ斷可申候。若無謂大勢罷越候においては、理非無構急度可申付候。自然高主非分申懸候はゞ、其節役人ゟ相斷、理を糺可申候。右之段夫々申渡、是以後嚴重相心得候樣急度可申付者也。

酉九月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

本文は幕令なり
午は安永三年

九月。幕府より米價向上したるを以て圍穀を廢すべき命を受く。

〔筒井舊記〕

大目付ゐ

去午年米直段下直に付、御料所に而も圍籾被仰付候に付、萬石以上之面々茂、分限高一万石に付千俵圍籾被致候樣申達候所、追々米相場引上り候に付、御料所圍籾之儀も被指止候間、萬石以上之面々圍籾之儀も、此節勝手次第取計候樣可被致候。

九月

右之通可被相觸候、以上。

十月五日。昨今兩日金澤天德院に於いて前田重靖の二十五回忌法會を修す。

〔政隣記〕

十月四日・五日、於天德院天珠院樣二十五回御忌御法事御執行。兩日共御參詣。

十月八日。奉公人出替の期を終冬に於いてすべきことを命ず。

〔司農典〕

御郡方家來出替り之儀、前々より十一月末に至り相極來候處、御郡に寄近年猥に相成、秋初
より出替り等致候類も有之候に付、肝煎作方等手間にも相成候樣及聞候條、以來は家來出替
り之儀、前々之通終冬に至り相極可申候。且亦奉公人ども、無謂暇貰申度段達而申聞候者も有
之候はゞ、當場に相斷可申候。急度可申付候。此段不相洩樣夫々可申渡候、以上。

酉十月八日

諸 郡 改 作 所

十月十一日。能美郡今江潟・木場潟等に於いて諸士の漁撈を行ふを禁ず。

〔政隣記〕

十月十六日、左之通御用番安房守殿被仰渡候旨、御横目より例文廻状有之。

能美郡今江潟・木場潟、并梯川上者佐々木伊藤潰より之限、下は安宅水戸口共川筋不殘、并水
戸先海之内八十三間三方共、今江村・向本折村・下牧村之獵場被仰付置、先規より運上銀指上、
獵師之外者右於獵場殺生不相成處、往古より之格合に候處、猥に相成、獵師共致難儀候に付、
獵師之外者殺生不相成趣、享保年中御家中一統申渡候處、近年又々猥に相成、殺生人多入込、
其獵師共致迷惑候段御郡奉行申聞候條、是以後右於獵場、御家中之人々等殺生堅無用之事。

十月十一日

十月廿八日。能登に於いて民俗淳樸なる諸村を調査上申せしむ。

〔筒井舊記〕

羽咋郡生神村之儀、先年より就中村方一統致和順、末々迄も人氣淳直に成來候趣、此以前被爲聞召上、右村肝煎江御扶持被下置、村方江茂米錢等拜領被仰付候。然所生神村隣村牛下村・領家村・七海村之儀も、おのづから人氣宜敷、村方一統致純熟候に付、奇特之儀に被思召、是又先達而米錢等拜領被仰付候。右樣之儀者其村方幷村役人は勿論、裁許之人々迄も、規模之儀冥加に叶申事に而、粗此方共迄も□儀に候。然者外々にも右同樣に一統致和融候村方有之間敷ものに茂なく候間、常々得と見聞之上、若右躰之村方於有之は、爲知有之樣致度候、以上。

酉十月二十八日　　槻尾左膳

高澤平次右衛門

能州四郡十村中

十月廿九日。江戸に於いて大小將石黑佐七郎等無刀にて木挽町の芝居を觀覽したるを以てその罪を議せらる。

氏の姓未明かならず

〔續漸録記〕

江戸に詰居在候御大小將之内、石黒佐七郎・江口織江今ハ伊織・新番山本伊右衞門三人同道に而、芝居に而大小さし預、木挽町へ之居見物に罷越候樣子、御横目足輕芝居に而得与相尋、其段及言上候付、先例等御尋、的當不見當。實暦二年二月江戸詰御大小將淺加九兵衞・中村久兵衞・安達猪三郎・松原孝右衞門不慥有之旨當座被仰付、御大小將組被除、九兵衞に御馬廻、其餘三人組外被仰付候。其節不慥之趣仰出無御座候へとも、右四人共遊所へ罷越候故与取沙汰承申候。右四人共、二月六日夜俄に御國へ之御暇被下、翌七日江戸發立、同十八日金澤歸着、廿一日前段之通申渡候。寛延三年十一月成田長太夫・堀久五郎――。今般佐七郎等三人之内、伊右衞門は大酒仕、行狀も不宜段兼而承及候。佐七郎・伊織は何之儀も承不申。御横目足輕得与承請候へとも、右三人に相違無之故猶更御糺可被成哉。無刀に而芝居之段品重く候而、相違無之候はゝ遠慮可被仰付哉。伊織は無是に候。定番御馬廻瓜生善太夫三男伊兵衞――前田十左衞門今ハ源右衞門――、此度伊織手前御答に候はゝ、親伊織も同時に可有御座旨、十月廿九日申上。

十月。侍代官の沿革を調査して諮問に應ふ。

〔河合録書〕

御公領は藩候直接の領所をいふなるべし

安永六年侍御代官之譯を御尋に付、相しらべ書上申覺。

明暦元年五月二十八日金澤御城二の丸に而、御公領御代官付高付之覺。石川・河北分。

一、四千二百九十三石八斗四升七合　中　孫右衛門
一、八千二百二十七石一斗一合　千田與右衛門
一、九千七石二斗六升二合　河北孫左衛門
一、七千二十八石　宿通り　勘四郎
一、二千九百九十三石四斗四升六合　同　人
一、二千六百六十八石　宿通り　間兵衛
一、一万三千八百五十二石七斗九升一合　大村伊兵衛
一、三千三十一石九斗八升七合　山本又四郎
一、二万三千十二石一斗九升九合　木村甚左衛門
一、五千九百三十八石九斗七升　小塚長兵衛
一、二千七百九十七石二斗九升五合　小泉庄兵衛
川島長三郎

一、六千七百二十三石七斗五升九合　　笹嶋豊前

一、八千四十二石四斗一合　　高山甚兵衛

坂井十兵衛

一、三千三百七十四石三斗八升一合　　大篠村兵右衛門

一、千九百三十九石　　御所村

津幡宿通り

一、三千四百八十七石　　大熊

北中條宿通り

〆

右之通明暦元年五月二十八日金澤御城二の丸に而、石川・河北兩郡御公領御代官付高付之通覺書御座候。右侍代官之分万治元年迄御勤、同二年より御代官付村無御座候。木村甚左衛門殿に寛文五年迄御代官御勤來候。

十　月

十一月十四日。本年四月福井藩より交渉せられたる越中境關所通行の件に關し回答の覺書を江戸の吏に發送す。

〔國事雑抄〕

一、御領分境川御關所、松平越前守家中致往來候節、馬上・駕乘・歩行立之者、都而かぶり物を取、駕乘は戸を開き、是迄致通行來り候間、以來共右之通相心得候事。

但、帶刀以下は下乘・下馬之事。

右越前福井御留守居大井彌十郎、江戸表に而此方樣御聞番岡田太郎右衞門ゟ指出候書立之事。

松平越前守殿御留守居大井彌十郎罷越、私共ゟ懸合可申旨に付罷出候處、此方樣御領分境御關所、越前守家中之者致往來候之節、馬上又は駕籠に乘り候者歩立之者共、都而かぶり物を取、駕乘之者戸を開、作法能仕罷通候筈之處、末々心得違之者有之躰に付、猶又前々之通相守候樣に、急度以來之儀家中一統可申渡候。尤帶刀以下之者は下馬・下乘可仕候。然處近年は帶刀之者ゟ下馬・下乘仕候樣に、御關所御番人中御申聞、前々之振与は致相違候事ゟ有之、御關所通り掛り彼是及問答候內手間取、旅行之者共難儀仕候。以來是迄之通、帶刀以上之者は馬上・駕乘之儘御通し御座候樣、御關所へ被仰渡置候樣致度御座候。此等之趣私致參上各方爲懸合、御家老中迄御通達御座候樣に致度之旨、越前守家老共申聞候由彌十郎申聞候に付、委細御演述之趣致承知、家老共ゟ申聞、國許ゟ相達、夫々相糺、追而可及御挨拶旨申入相返

申候。別紙覺書致持參候に付指出之申候、以上。

四月九日　岡田太郎右衞門

大音帶刀様

松平大貳様

越前守殿御家來之人々下通江戸往來之節、其表御關所にて下馬・下乘之儀、前々之振与致相違候事も有之、御關所通りも掛り候是及問答候內手間取、盛日之者其難儀仕候。以來是迄之通り、帶刀以上之者は馬上・駕乘之儘通り候樣に致度旨、何方御留守居聞番迄申聞、覺書を以持參候に付、國許へ相達夫々相糺、追而可及御挨拶旨申入候由。大音帶刀等迄岡田太郎左衞門紙面を以申聞、覺書も指出候に付、則右貳通等兩通指越候條、御關所之格式等前々より撰被相糺、委細可被申越候。其趣を以重而聞番よりあなたに御留守居迄相達候樣に可申遣候、以上。

五月八日　村井又兵衞

高田市右衞門殿

覺

一、越前福井御家中當御關所往來之節、往古は下馬・下乘にて相通り被申候旨傳承仕候。只今

に而も福井より江戸江被相通候節は、過書持參被致、下馬・下乘に而相通し來り申候。

一、中古以來江戸表より被相向候刻は、病氣抔被申立乘用等に而相通し申候處、其後者病氣之申立も無之、馬上・駕乘に而相通り被申候。尤中古乘用に而被罷通候儀者、當時私共覺不申。其後往古之通下乘等に而被相通候樣、時々申達候得共、聞入茂なく無法に被相通候。其内にも下馬・下乘に而叮嚀に仕被相通候面々茂御座候。近年は大勢に而改方に相障り申候故、御格合之通に相改相通し申候。

一、右御家中之人々近年は別而大勢罷通り被申候。其節番人共より何れ之御家中与相尋申處、何之返答も不仕人々茂有之。或は越州迄相答、又跡勢を待合、三・四十人計も一集に固り、理不盡に罷通り關破り同事之躰に御座候に付、無是非番人共罷出、引返夫々相尋相通し申候。勿論右之内侍中・茶堂方・坊主・足輕・小者等入交、尤馬上に而かぶり物之儘參り懸り申に付、夫々御格合之趣申入候而も承知不仕、我まゝに口上等迄も緩怠至極に而、一躰越前表に權式を取、問屋前抔通行同樣に相見申候。併左樣之儀を心外に存、彼是申上候譯に而は全く無御座候。則髻髮・惣附等委細に御帳面に相記申事故、馬上等に而者甚指支申候。

一、右躰之族に而被相通候に付、御帳面も其差別可記樣も無御座、甚指支迷惑仕候。

一、御關所御帳面之儀は、諸國より往來之人々國郡村等相尋、勿論僧俗男女或者山伏・神主、

寺庵之往持等は其等繰迄も相尋、夫々書譯、何月何日何之刻与相記申候。暨諸國御家中之儀も、侍分交名或は渡嗣・足輕・小者迄も夫々書分、是又右同樣に相記申候。

一、諸國之御家中幷京都宮樣方等御役人中に而も、御關所通行之刻は前々より下馬・下乘に而相通申御格に御座候。然處越前福井御家中に限り馬上・駕乘に而相通申御定、中興に而も無御座候。

一、右御家中福井より江戸表へ被罷越候節は、則あなに御役人鈴木藤十郎より之過書持參に而、尤下乘かご・物も取り、御關所前相應之作法躰に而相通り申候。勿論今以右之通りに御座候。則過書之寫一通相添上之申候。

一、夫々年五月福井御家老本多修理被相通候刻、御關所御格式之趣、并かなに御家中之面々馬上等に而、其上かご・のり物之儀御向御座候面者、御關所御格合并御國法に相違仕、改方等に其指支茂惑仕候旨申達候處、御承知に而、則家來中へ御申付、不殘かご・のり物を爲取相通被申候。其後被相向候人々にも右御格合之趣申達、かご・乘物を爲取、下馬・下乘に而相通申候。且又前月二十八日、御家老岡邊左膳上下五十人に而下通りより被相向候處、自身は乘用之儀盤龍戸左右其間、家來之人々は下乘、尤かご・物爲取、作法躰も宜敷致相通候。其外當春より被相通候人々ともも、右之通も御關所御門外より下乘、かご・物抔も取り相向被申候に付、

彼是手間取茂無御座、改方にも相障り不申候。

右は福井御家中當御關所通行之儀に付、每々振合幷御關所御格式之趣、書記指出候樣に被仰渡候旨承知仕、則相調上之申候、以上。

酉　五　月　　東方喜太夫

川口彌三左衞門

濟田宇左衞門

高田市右衞門樣

越前守樣御家中之人々下通江戸より致通行候節、此表御關所に而下馬・下乘之趣、前々振合致相違候事も有之、御關所通掛り彼是及問答候內手間取、旅行之者共難儀仕候。已來是迄之通帶刀以上之者は馬上・駕乘之儘通候樣致度旨等、あなた御留守居大井彌十郞罷越、關番中迄申聞、覺書も致持參候に付、右覺書岡田太郞左衞門帳面相添指上候に付、兩通共被遣之、委細御紙上之趣本得其意候。然ば越前守殿御家中、往古は人數も少く、下馬・下乘・步行立之者都而かぶりものを取、御關所は相向罷通候處、中古以來近年に罷成候而人數多く通行仕、其上馬上・駕乘・步立之者末々迄もかぶりものを取不申御關所へ相向、勤番之者共より相咎候得共返答も急に不仕、理不盡大勢罷通、尤人數高相尋候得共員數難知抔与申聞、御關所前混雜

仕、改方甚指支申候。尤罷通候侍中了簡により、下馬・下乗に而罷通り候衆も有之候。中古より馬上・駕乗之儀被相通候衆も御座候に付、今般其儀を改て下馬・下乗之儀申渡候謂柄に而も無御座、馬上等之人々家来末々ニ至ルまでも物着通し、事之外不作法之趣共御座候而、改方に指支申候間、自是迄登下馬・下乗、御國格并御國法之趣等申談相通申候。またなにに而も中古之趣を例に被致度様子にも相見申候。且又帯刀以上之衆、指定り馬上・駕乗之儀相通候り申儀者、此表御格合には無御座候。猶又かぶり物之儀は、越前守殿御家老被罷通候節、自然着用有之候共取被申御格合に御座候。左様侍者以下之分は不残かぶり物取申趣に御座候處、近年別而猥に罷成、まゝ笠かぶり物取不申、差而不作法之儀共有之候に付、無是非時節、かぶり物も為取、人數も相改相通申段與力等申聞候。此方より被是通行之節に罷成申儀は全く無御座候。福井之御家中之人々江戸表へ罷通候節に、御關所前下馬・下乗に而罷通申候。右之趣等に付、先達而與力より紙面取立證候儀も御座候之間、私儀出府仕、其節委細可申上与奉存候得共、先此度指上申候。猶与詮議仕候處、別紙之通相違も無御座段申聞候。猶更近々私儀出府仕候間、其節委細申上度奉存候。まなに行之御見合被下候之様にと仕度奉存候。右御答申上度有増如此御座候、以上。

五月十五日　　　　　　高田市右衛門　判

村井又兵衛様

越前守殿御留守居江迄聞番より可申述趣。

加賀守領分越中境所、あなた御家中之人々被致往來候節之儀に付、先達而大井彌十郎殿御出、岡田太郎左衛門迄御演述御覺書之趣致承知、國許江申遣夫々相糺候處、往古は右關所被相通候人數も少く候處、中古以來近年に相成御人多く通行之内には、末々かぶり物も取不被申族も有之、關所前致混雜、改方も行屆不申候に付、時により無是非呼返し申候而、人數相改申候族も御座候。此方より無是通行之障に相成候儀は曾而無御座候。則當四月御家中小林又右衛門殿御通之節、關所之樣子被相尋候に付、其節役人共右等之趣委細御咄申候由に御座候。先年公儀御目付松平賴母樣・大河內善兵衛樣其外前々巡見上使御通り之節抔も、御家來中は下馬・下乘に而通行有之。且又以前榊原式部大輔樣御國替之御家中通行に付、從公儀御附御家老衆に乘用之儘被相通候段、先達而彼方より申來候樣成儀も有之。其外平生上方筋宮樣方等御家中に而も、都而馬上之儘に而通行は無之候。尤あなたにも末々心得違之衆も有之躰に付、急度以來之儀御一統可被仰渡旨、先達而彌十郎殿御申聞被入御念儀に御座候。其節被遣候御覺書之趣も遂僉議可申候得共、前段之趣に而、關所役人往古より之振を以相勤來候事に御座候間、容易にも難申渡候故、猶又得与遂僉議中に而可有御座候條、先是迄之振に御心得候樣

致度候。右先達而之御挨拶等、此等之趣貴樣迄宜申遣候樣、國許家老共より申越候事。

右壁書之通申遣候趣聞番に可申渡旨、江戸在役前田圖書迄十一月十四日出に申遣候事。

十一月二十日。十村等隱田及び餘田の意義に關する諸問に答ふ。

〔郡方舊記〕

隱田・餘田兩樣之分御尋、未得其意申候。御郡々數讀仕候處、御檢地之節御竿御田地相極申分は、隱田と申にて可有御座と奉存候。且又御檢地之上出高に相成申分は、餘田と申に而可有御座与奉存候。此儀被仰付御入等無御座候得共、御郡々人々右之通相心得罷在申候。右御尋に付書上申候、以上。

酉十一月

澤村 源次
淵上村 源五郎
高松村 彌八郎
荻谷村 平右衞門
中居村 三右衞門
天正寺村 伊三右衞門
五十里村 庄助

田中村　角兵衛

御改作御奉行所

右小紙之趣、御改作所より稲舟村丈左衛門ゟ被仰渡、諸郡聞合申上候様に御意有之。則役所にて諸郡御扶持人詮議之上、如斯小紙安永六年酉十一月二十日御場に上る也。

十一月廿五日。石川郡本吉に火災あり。

〔政隣記〕

十一月二十五日本吉湊より出火、翌二十六日朝五時頃鎮火。烈風に而家数三百軒計焼失。且二十六日夜右跡火より重而燃出、曉天に至鎮火、家数□軒焼失。

十二月十五日。中村萬右衛門知行を加増し人持組末席に列せらる。

〔袖裏雑記〕

此御付は前田清脩よりなり

中村萬右衛門、御加増人持末席へ被加候時に如何与、中將様より被仰進候趣被仰付に、先例享保九年八月六日大野木舍人御加増五百石先知都合千六百五十石、成瀬内匠ゟ御加増五百石先知都合千八百石、兩人儀松雲院様御近習之御用久々情に入、全相勤候付御加増被下候。人持組に被仰付、兩人共只今迄之役料は被指除之旨被仰渡候例。并遠田勘右衛門、松雲院様御代正德四年父不門於江戸隱居、爲家督被召出、御知行無相違三百五十石被下之、護國院様御

部屋附御大小將、享保二年御大小將御番頭、同四年御側小將御番頭、同九年御加增貳百石御持弓頭、同十年組頭並御近習、開田橋部等勤方之通可相勤旨被仰渡、同十二年定番頭、元文五年人持組御加增五百石先知都合千五十石、延享四年十月隱居、せがれへ被下置候新知三百石爲隱居料被下之、剃髮名髙哉ト改、寬延三年病死。且又於江戸富永數馬、松雲院様御代以來數十年來御近邊之御用其外多役相勤、近年及極老、度々江戸へも相詰、對數相勤骨折候付、御加增知五百石被下之、人持之末席へ被加候段、於御前寶曆九年五月十五日被仰渡、但座列津田八郎上ニ被仰付、只今迄之役料被指除候段ハ年寄中席において申渡候例。又戸田與一郎之例ニモ十一月十八日申上。

〔袖裏雜記〕

中將様ヘハ被仰進候趣被仰出有之、左之通十二月八日伺之處、伺之通當十五日可申渡被仰出。

御加增

一、貳　百　石　　中村萬右衛門

先知都合八百石

萬右衛門儀、久々中將様近邊之御用烈敷情ニ入相勤候付、如斯被仰付。

右役料共千百石と思召候旨被仰出有之付、千百石に御座候。前々御加増迄申渡候時は、役料は持成に付不申渡旨之御請あり。

十二月十七日。老臣前田三左衛門・奥村助右衛門叙爵せらる。

〔三守御請〕

十二月十七日、前田三左衛門直方・奥村助右衛門尙寛叙爵。三左衛門は土佐守、助右衛門は河内守と改めさせらる。

横山河内守・前田駿河守卒する故也。此時御在國に付御名代前田大和守殿。

十二月十九日。徳川家治の前田治脩に贈れる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

十二月十九日寒氣御尋之宿次御奉書、且御鷹之鶴、去十三日江戸發、今日到來。御請使御馬廻頭佐々木孫兵衛同二十二日發。

十二月廿四日。郡方の者は十村等の送狀あるに非ざれば町方に居住又は奉公し得ざることを告ぐ。

〔岡部舊記〕

御郡方之者、向後町方・寺社門前地に家を求、或は致借宅渡世之者、十村并肝煎承届、送り紙面遣不申分は居住爲仕不申。御郡地に致奉公候者も、主人之送紙面に而は不致承知、都而居在所並肝煎之者より之送を以指置候樣致度。御家中奉公人唯今迄奉公いたし來り候者格別、御郡方村々より新に奉公仕候者は、十村等承届無之者は召置不申樣仕度候。尤唯今迄奉公致來り候者たりとも、村々へ呼返候儀、跡々之通可相心得儀に御座候。猶更御詮議御座候而、夫々被仰渡御座候樣仕度候、以上。

酉十一月十六日　　御用番　堀田次兵衛

同　　齋藤金兵衛

御算用場

右之通相達候處、御算用場より御用番へ達有之候處、夫々御聞届、御家中等一統被仰渡在之候條、御郡方夫々不相洩候樣急度可申渡候。則寫相廻之候、以上。

酉十二月廿四日　　改作所

諸郡御扶持人・十村中

十二月。前田重教、垜場に鶴形の的を置かしむ。

[舊記]

安永六年十二月、前月御鷹野之節被仰付候菜場に輕く日覆致置候樣、御郡奉行芝山織人樣より被仰渡、則鶴形御的一つ此時に相渡申候。

安永七年

正月四日。本鄕邸附近の火災に加賀藩の火消役等大に活動す。

〔大梁公御年表〕

一、正月四日江戸御上屋敷御近火、火消役一番天野小太郎、二番富永小右衛門大働之由。松江次郎兵衛御先乘に而落馬死去。

正月五日。能役者の年頭拜賀に着用する衣服に就いて令す。

〔袖裏雜記〕

寶生源五郎等先年於江戸相願、のしめ着用仕、去春金澤に而ものしめ着用仕候付、其節諸橋權之進等よりものしめ着用之儀相願候へども、先御聞屆無之候處、列下之者のしめ着用、列上之者着用不仕候而は如何敷迷惑候付、此度着用爲仕度旨町奉行より達而相願之趣、若年寄中迄紙面出、年寄中へ內談有之、源五郎等は相願只今迄着用之事、江戸御役者は格別、於御當地は品重き儀、着用不仕方と申達、其段若年寄方より寛。源五郎とても金澤にては着用難

成趣に而も可有之哉。就夫源五郎には、去春從中將樣よりのしめ拜領被仰付候付、左之通可申渡哉与伺。（被仰出之趣も有之に付、年寄中より之伺なり。）

但、源五郎養父發宮ものしめ致着用候由也。且又竹田權兵衛家には、江戸金春大夫同家に而、於江戸重き御能儀御能も勤、御知行も被下置、格別之趣を以往者よりのしめ着用也。（伺之趣事長し、約して要に記す。）

竹田權兵衛外御手役者、於御國はのしめ着用無之筈に候。右之外にも寶生源五郎儀は、於御當地身分に付自他之無差別、從中將樣御のしめ拜領被仰付候由候間、源五郎は着用爲仕可申候。其餘之者共は、源五郎振に而拜領仕者は其段承屆、爲致着用可申候事。

但、拜領之のしめ着用は格別、尤拜領仕候者とても、自分紋付之のしめ着用は無用之事。

右伺之處、去々年春江戸御役者共のしめ着用指留候へば何之際も無之處、其節若年寄方僉議未熟之被思召候旨等、段々被仰出、畢竟左之通被仰出也。

御手役者之分、年頭御禮申上候節のしめ着用之儀は、猿樂別段之者之儀候間、町奉行願之通着用之儀難御賞着候間、のしめ着用仕度者は勝手次第之旨可被仰渡思召候。金谷にも右之思召之御樣子に付、前段之通可被仰渡思召候間、今一往各僉議可有之事。

町役者之儀は、肝煎支配仕町人之名目に候間、無用可被仰渡候。

右之通被仰出候付、僉議之趣は先達而申上候通候へども、被仰出之上は此通に而可有御座旨、

卽日正月四日申上。

〔國事雜鈔〕

町奉行ヘ

御手役者之分年頭御禮申上候節、熨斗目着用之儀、猿樂別段之者之儀に候間、各願之通無御

貪着候條、熨斗目着用仕度者は勝手次第之段被仰出候。

但町役者之儀者、肝煎支配いたし、町人之名目に候間　無用之段被仰出候事。

右安永七年正月五日被仰渡。

正月八日。追儺の儀式を二ノ丸御殿に行ふ。

本文は奥村榮實の手記に係る

安永七年追儺之御規式、故河内守調置候一卷、當時之御年男勤向と違候付、左に寫之。

〔袖裏見聞錄〕

安永七戊戌歲正月八日

一、舊臘以來御城代安房守儀、痛所有之出座無之候。今晚御例之通追儺之御規式有之候處、

安房守儀右痛所に而難致登城間、助之儀當月御用番河内守まで今晝以紙面賴來り候に付、右

紙面河内守より御近習頭を以入御覽出候上、御横目へも承知に爲見置候事。

但、今晩追儺之御規式有之に付、前々之振を以、一昨七日御用人御臺所奉行・御横目へ一通充發書、安房守出仕無之に付御用番河内守より相渡候事。

一、御城代安房守助御用番河内守、如先例今晩七半時頃登城、前々之通御規式懸り候御役人・定番頭を初、同刻頃何も登城之事。

一、今晩追儺之御規式、御年男會所奉行高畠權太夫初而相勤る。

一、河内守登城之上、今晩追儺之御規式に付罷出候人々之名書、定番頭指出。

一、今晩追儺之御規式に付、御年男を初御役人等何も相揃候旨御横目申聞に付、御近習頭神田十郎左衛門を以其趣、且御規式爲初可申哉之旨申上候處、追付以同人爲相初可申旨被仰出候付、追儺之規式相初候様御横目へ申渡、御城代方御用相勤候與力共へ、御居間之御規式相初候ほと爲知候様申聞置候處、追付相初候由に付、河内守儀御居間書院二之間御縁頰とのさかひ御敷居之内着座、相待罷在候事。

但、定番頭并同御番頭・御横目、檜垣之御間御廊下御居間書院へ之御廊下ざかひ之杉戸外に着座いたし罷在候。河内守御居間書院へ罷越候節、其所にて及挨拶罷出候跡より、定番頭等各杉戸之内之御廊下御居間書院御縁頰之杉戸之外に扣へ罷在候。御横目は御居間書院御廊下に相詰る。

一、御年男高畠權太夫儀、初めに御居間御規式相勤、其次に同二之御間、其次に御膳所、其次に御居間書院上之御間迄、其次に柳之御間、其次に同二之御間、（但三之御間は御規式無之。）其次に表御式臺、其次に御臺所相勤。

一、右御規式相勤候御間之內、御居間より御膳所迄相勤候內は、河內守儀御居間書院二之間に相待罷在候。御膳所相勤濟候上、御居間書院御廊下之方より同二之御間、夫より上之御間御年男罷出る。此時河內守儀、同所二之御間之上へ罷出る。（上之御間御敷居之際也。）

但、御年男權太夫右御廊下に而、坊主小頭持參之大豆之升を採上て御間へ罷出る、坊主小頭は、右ます之大豆を升共に箕に入、尤箕之內にも大豆あり。御年男權太夫先へ御坊主小頭手燭を持參、右御居間書院上之御間あきの方に置之、權太夫御間之眞中へ着座、右之手にて大豆を一握とり、福は內と一聲唱へ、握たる大豆を右手燭且あきの方之御襖へ抛、又其次に右之通、其次にはやはり右之手に而大豆を一握とり、左之方へ頭（カウベ）をねぢ向、後を強く見張、あきの方を背きて鬼は外と一聲唱へ、握りたる大豆を御襖へ抛。尤其外御間々々不殘右之通也。但御襖無之所に而は强抛計也。

一、夫より坊主小頭手燭とり、權太夫之先へ立、其次より權太夫、其次より右升を箕に入坊主小頭、其跡より河內守差添、柳之御間へ至る。其間御居間書院續之御緣頰より檜垣之御間

御縁頬之境杉戸之外より、右坊主小頭持參之芥之筥に入候を御詰方與力請取、如最前權太夫次につき持參候。御居間書院御縁頬之杉戸之外に扣罷在候定番頭等且御横目も、河内守跡より隨ひ罷越。御柳之御間上之間にて權太夫御規式相勤候事、前之但書之通に而、河内守は二之間上之間之際に罷在、定番頭等は右御間御縁頬に相罷在。同二之間に而相勤候節も同前、河内守は三之間之際へ少退罷在、定番頭等は如前。

一、夫より御式臺に而權太夫御規式相勤候節は、河内守は御規式相勤候御間之内に罷在、定番頭等は御縁頬に罷在。右濟權太夫儀は御臺所へ罷越御規式相勤る。河内守は不差詰、御式臺切に而年寄中席御用番座へ罷越候事。

一、右河内守差詰候毎御間、定番頭等下に罷在御城代方附與力共相詰候事。

一、二御丸御規式權太夫相勤濟候上、金谷御殿へ權太夫罷出御規式相勤る。濟候上並而二之御丸へ罷出候事。

一、金谷御殿御規式相濟、權太夫二御丸へ罷出候上、定番頭・同御番頭・御横目、檜垣之御間二之間御縁頬之方に列居、御横目下に少シ引離罷在。且又御用人一人（安見[illegible]）、同所上之間若年寄中居之方へ寄、二之間御敷居際に罷在候事。

一、右列居宜候段、御城方與力申聞、河内守儀檜垣之御間御縁頬より上之御床際より上之間

へ入、御床際横疊より三疊目中に着座。其所へ御年男權太夫、八寸に御祝之大豆を載持參、（尤敷紙有之、熨斗相添、炭も相添、几又土器之かけも相添。箸・さじ等なし。）河內守前に差置頂戴之、下に置候所へ、年寄中席相勤候坊主之內出原林昌罷越、懷中より御祝之大豆と御城代方附與力之調置候包紙を出し、腰に指居候新扇子を出し、八寸に有之大豆を右扇子を開きすくひ、（熨斗・炭・土器共）包紙之內へ入、又包、河內守請取懷中之、右坊主へ、定番頭等へも遣候樣にと申付、則坊主八寸を取、定番頭之前に差置之、則頂戴之。夫より段々順に御橫目迄頂戴（但是自分之扇子を出し、懷中より紙を出し包、懷中す。）夫より坊主右八寸を引、定番頭筆頭より青木儀兵衞、今晩御規式御首尾能相濟恐悅之至奉存候旨申聞、河內守席へ歸座、右定番頭等大豆頂戴之內、御年男高畠權太夫へ御目錄之通御用人より渡す。其時河內守より今晩御規式相勤候付、御目錄之通拜領物被仰付段申渡。權太夫頂戴退、御用人も退候事。

　但、權太夫八寸持參退候節、差留御目錄相渡候事。

一、今晩御規式御首尾能相濟申候。御年男高畠權太夫儀御目錄相渡候處、拜領物被仰付難有仕合奉存候段申聞候。今晩安房守罷出不申候付、私より申上候と申趣紙面に調、御近習頭神田十郎左衞門を以上之候節、金谷御殿御規式も御首尾能相濟候段口上に而申上候事。

一、右申上濟候上、河內守退出之事。

一、今晩河內守初御規式に付罷出候人々は、不殘熨斗目・半上下、御年男は始終熨斗目・長上

御結納とは前田市勘との婚儀に就いてなり

下之事。

正月九日。大聖寺侯前田利道の女俊姫疱瘡に罹るを以て之を問はしむ。

〔政隣記〕

正月九日、俊姫様就御疱に、大聖寺ゟ御使御大小將青地求馬被遣、今夜發足。

但、途中常歩、御使書左之通。

大聖寺ゟ罷越、備後守様御家老中へ可申達趣。

俊姫様當四日より御熱被成御座候處、六日より御疱瘡之旨、彌御順症に被成御座候哉、年寄中より猶更相伺御様子申上候様、從御南殿様被仰出候旨、委細に御様躰被申聞候様、年寄中申聞候に付罷越候段申達、相伺可申候。

右申達、未御結納御祝儀も不被爲濟候に付、御近習之者を以俊姫様ゟ御口上不被仰進、御遣物も不被遣候。尤御用有之候者被申越候様各迄可申達旨、年寄中迄被仰出候段可申達候。

正月九日　御使 御大小將

右今夜五時發之處、雪中路次差支、十日夕七時前大聖寺ゟ參着、御館ゟ暮六半時頃罷出御使勤之。同夜九半時頃大聖寺發出、十一日七時過歸着、直に御城ゟ出、當御番頭笠間早太同道御次ゟ出、御容躰書宮等御近習頭ゟ以上之。金谷御殿へも罷出言上。夫より御用番奥村河内

守殿御宅にも罷越、御案内仕候事。

但、俄之御使に付被下金之儀、頭不破半藏より願之處、同月廿一日金一歩二十切被下候旨、

前田土佐守殿半藏に被仰渡、則求馬に申渡有之。

二月五日。前田治脩參覲の期を令し、後これを延ぶ。

〔政隣記〕

三月五日、當御參勤御發駕三月下旬与今日被仰出候處、三月五日、同月廿七日与被仰出。

二月十八日。指抯を命ぜられたる十村の鍬手米及び代官口米の支給手續に就いて令す。

〔司農典〕

十村等指抯申渡候者、鍬手米幷代官口米渡方之儀、近年猥に相成候躰に相聞候條、享保八年

申渡置候通相違無之樣可相心得候、以上。

戌二月十八日　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月。十村等にその職分に關する心得を諭す。

享保八年十二月廿六日の條參看

〔司農典〕

御領國御扶持人・十村役儀全く相勤申人々之儀、代々役儀相續被仰付候趣大切之儀に存候。勿論隨分入情仕申故之事に候得共、尚更御改作之御法專一に心懸相勤不申而者、組下御郡一統心服仕、農業稼無油斷出情仕、都而御縮方之筋行屆可申樣無之候。此所各能心付、役筋之心懸專一に存候。年若成十村并許分之者共、作躰善惡之見分、且秋に至り立毛甲乙、豐凶・山役等之變事之地元町間歩數之見分等、平生心懸無之而者細見難成事に候。十村役之儀は、右見分不委候而者心外闕。方不順に相成。一組之取計に不限全相勤申內、拙者共詮議之上奉願、縱者御扶持人役被仰付候。左候得ば嘸口組を初、惣而一郡之取治、猶亦見立有之候而者他郡ゟ濟ニ申儀に候處、若平生不心得候而立毛見立方不順有之候而者、是亦不輕事に候。新田裁許之儀も、作見分仕儀役筋第一之義。山廻り之人々年來全く相勤申內、十村同等有之候得者御取立被成、元來百姓之儀作物見分等閑無之筈に候。先づ御扶持人・十村何れも役筋無怠、平生之心懸有之儀肝要之事に候。尤見立檢地・打役等之儀は、御扶持人役筋之專儀に候間、年若成人々劝者之御扶持人等ゟ常々口談之上、餘事を捨役柄之要々致鍛錬、彌勤方無抹殺之樣可相心得候。此段一統承知有之、各并名代之者共連名請紙而指出可申事。

一、年若成者共役筋之儀不案內に候者共、御郡宿老之可爲遣度候間、平日年若之者ゟ寄々可

有教訓者也。

戍　二　月　　　　　　　　　改　作　奉　行

能州御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

二月。新開見分又は地改檢地の際田地の面積を隱蔽するを禁ず。

〔司農典〕

新開所見分之節、新田を古田之方ゟ片寄候而指預、新田を狹め爲及見分、致下免に候者共も有之樣子洩聞樣。以來右之族有之者ゟは、新田預り候者早速可致訴人候。訴人之者ゟ右新田を可被下候。若隱し置外より相知候はゞ、本人同罪可申付候。尤新田取揚可申事。

一、從前々地改有之檢地等入候節、村に寄私曲を構、自分田地之内隣村へ、檢地入候間預置、土地を狹め、檢地相濟候上取戻し候族之者共も往昔有之候樣承傳候。若以來右之趣に而隣村ゟ地預等いたし候者有之候はゞ、預り候者早速當場ゟ可相斷候。右預り地之分預り人ゟ被下、其上に而御褒美可被下候。若本人与馴合斷及延引、且又預り地を致同心隱置候者、急度本人同事曲事に可申付候。尤裁許十村幷村役人之分も可爲同罪候條、ヶ樣之儀心を付急度相糺可申候。右之趣夫々嚴重申渡、村々より請紙而取立早速指出可申候、以上。

戍　二　月　　　　　　　　　改　作　所

口郡・奥郡御扶持人十村中

三月朔日。前田治脩出仕の時刻に遅れたる諸士の謁見を許さず。

〔政隣記〕

三月朔日、出仕之面々五時迄に罷出候人々迄御目見可被仰付、右刻限より遅く罷出候人々には御目見被仰付間敷旨被仰出、五時迄に登城之人々迄、柳之御間に列居一統御目見有之、遅く罷出候人々は御帳に付退出之事。

同日御歩人之内、御使番御馬廻組井上覺角初て御目見、御馬廻組成田長太夫嫡孫承組雅樂助六半時揃に候處、右刻限不罷出候に付、相背候様被仰出、今日御目見不被仰付候事。

〔袖裏雜記〕

左之通可申渡哉之旨、三月六日伺之處、翌七日伺之通被仰出。的當之例無之付、御横目へ爲尋候處、先例不見當、謙德院様御代廟堂出仕之面々揃刻限遲く候付、罷出相揃候人々迄御目見被仰付、遲く罷出候者は御目見不被仰付、御帳に付罷歸候へども、是はちと様子も違候旨申聞候。品は違へども、享保十七年正月宿繼御奉書を以御鷹之鶴御拜領、爲御禮伊藤彦兵衛を以御勤に付、夫々御書被遣候處、安藤對馬守殿より之御書、御文言に、御香一種被上之段有之候。西御丸よりは御香獻上無之筈之處、右之通相調候段不念至極之儀、御前にも御氣之毒に

被思召候。依之急度可被仰付候へども、其段は御用捨被成候條、向後之儀随分心を附、入念相勤候様に可申渡旨、拙者共迄被仰出候段、御右筆久能吉太夫ゟ御家老中列座に而申渡之、畢而右之通被仰出候。畢竟校合之節心付可申事に候。向後は猶更入念相勤可申旨申渡候。右相済候以後、御右筆中何れも召寄右之趣申聞、是以後彌入念相勤様申渡有之候。且又右御書遠田勘右衛門見届不念之仕合に被思召候。向後猶更入念候様可申渡旨、拙者共迄被仰出候段、勘右衛門へ申渡候。將又寶暦十二年富田主税――今般逸角・長太夫――迷惑至極仕候。指扣候様可申渡哉。ヶ様之例も無之故及内談候旨、當二日遠田三郎大夫・戸田治兵衛罷出申聞候付、追而可及差圖旨申渡置候趣等之伺也。三月十五日兩人とも御目見可被仰付前日被仰出。

戸田治兵衛ゟ

井上逸角

右逸角儀、當朔日御使歸之御目見就被仰付候、六半時罷出候趣申渡候處、刻限取違遲く罷出、御目見不被仰付候。先以油斷至極成儀に付、急度御咎可被成候へども、其段は御用捨被成候。右之趣可申渡旨被仰出候事。

遠田三郎太夫ゟ

成田長太夫

右長太夫儀孫承雅樂之助儀、當朔日初而御目見就被仰付候、六半時罷出候樣申渡候處、長太夫儀別番に付同道人相賴置候處、間違及遲々、刻限相おくれ候付、御目見不被仰付候。先以油斷至極成儀故、急度御咎可被成候へども、其段は御用捨被成候。右之趣可申渡旨被仰出候事。

三月朔日。江戸に於いて大小將谷猪左衛門醉狂し、尋いで組外組に加へらる。

〔袖裏雜記〕

三月朔日夜六時過、内外廻り御横目足輕林平兵衛・鈴木小助南筋廻り、會所奉行一木與右衛門御貸屋前少過候處、跡より何者か追懸、高木かと聲を懸候付、見候處、御大小將谷猪左衛門に候。其方は何者ぞと平助肩を持引候付、内外廻りと之者と申達候處、退き又罷越、役人にても御横目足輕にても言者無之、何にても申聞候儀有之候はゞ可申聞、此方は數酒仕居申と申、刀之柄に手を懸候躰過酒之躰に付、御尋之者にては無之、私とも申上候儀は無之旨申なだめ退候處、又跡より罷越、平兵衛を後より兩手にて抱候付、振放候へば、是を給候樣にと申、蕃椒之粉紙に包候を平兵衛口に押入候付、取捨候處、又刀に手を懸歩み拔懸に候付、随分申なだめ罷通候。外に二・三人も見え候へども、誰とも申儀難分、猪左衛門に付きと見請候由、即刻私御貸屋へ右兩人罷越申聞候。猪左衛門平生行儀見聞不仕、每度大酒仕儀は承候由、江戸詰

御横目上月數馬言上紙面御渡、僉議御尋に付、寶暦二年沙加九兵衞等、安永二年富田矢次兵衞等之例を引、蟄居被仰付にて可有之哉与、三月廿八日伺之處、右例當り不申と思召候旨等段々被仰出、猪左衞門頭山本久左衞門へも御尋之處、過酒之儀一向存不申、平生人品等替儀無之旨。上月數馬ゟも尙更御尋之處、先頃之後取沙汰も不承旨等申上候。然ば一旦之事、外に悪敷儀無之間、遠慮等之不及御沙汰、御着府之上御國ゟ御返、思召有之候付當組被指除候段被仰渡可宜哉と思召之旨、四月廿日御意に付、御意之通にて可有御座候。思召有之と申儀、前々頭分以上には有之候へども、平士に右之被仰渡見當り不申候間、左之通にて可有之哉与同月廿四日伺之處、伺之通と御意。

谷　猪左衞門

右御大小將組被指除、組外ゟ被加之。

三月五日。前田治脩再び參覲の期を定め後之を延ぶ。

本文は參覲の事に係る

〔政隣記〕

三月五日、同月廿七日与被仰出候處、同廿二日就御痔疾に暫御延引与被仰出。

〔登城之節等心得〕

一、安永七年三月廿七日御發駕之筈に候所、御脚氣御痛被遊候に付、其段公邊ゟ御屆有之、

金谷御殿は前田重教の居る所

御登城御延引に相成候に依而同四月朔日・十五日皆御目見不被仰付、諸仕に而相濟。(是後尚御延引等度有之略す。)

三月十四日　大小將組林左平太金谷御殿に於いて小諸を試驗せられ、翌日御膳奉行を命ぜらる。

〔政隣記〕

三月十四日、御大小將林左平太江、何にても覺候小諸一番可被仰付候條、金谷御殿に指出候樣一昨日被仰出、今日則於御舞臺小諸被仰付。

但、翌十五日金谷御膳奉行に被仰付。

三月　能登の十村大澤村内記等民俗淳樸の村里を調査したる結果を上申す。

〔筒井旧記〕

村方一統致和順人氣淳直に而、羽咋郡牛蝉村同程之村方有之候はゞ書上可申旨仰渡、奉得其意候。淳順不仕寺中村方者無御座候得共、一統和順人氣淳直に而書上可申程之村方無御座候。爲其書付を以御斷申上候、以上。

安永七年三月　　鵜川跡組其大澤村　内　記

上戸村　眞　頼
飯田折戸跡組共稲舟村　丈左衛門
高澤平次右衛門殿
槻尾左　膳殿

四月六日。前田重教産穢ある近侍の士に一日の遠慮を命ず。

〔政隣記〕
中將樣御近習之人々、是以後産穢一日遠慮引爲仕可申旨被仰出候事。

戊戌四月六日

別紙之通中村萬右衛門を以被仰出候。御歩並以上之人々出生有之節、妻腹・妾腹之差別紙面に調指出可申候。血荒・流産有之節も一日遠慮引之等に御座候。右之内御承知被成、御組之内中將樣御近習之人々御談可被成候、以上。

四月八日
岡田勘太夫
坂井要人
園田一兵衛
諸頭御用番宛所樣

四月十三日。前田治脩重ねて參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

四月十三日御道中奉行ゟ左之御覺書、御供之御家老御渡之事。

御容躰今以留々不被遊、長途之御旅行難被遊候間、當月中江戸御參府無御覺束被思召候に付、今暫御保養、來月上旬迄之內御發足被成度段、御老中方ゟ以御使札被仰達、御使者明日發足被仰渡候旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

　　四月十三日

四月十九日。前田治脩參覲の期を定む。

〔政隣記〕

四月十九日、來月朔日御發駕与被仰出。

四月廿四日。前田治脩寶圓寺等の祖廟に參拜す。

〔政隣記〕

四月廿四日、六半時前之御供揃に而寶圓寺・天德院・野田惣御廟參。

四月廿五日。前田治脩參覲延期に付隨從の士に扶持方の中勘を貸渡すべ

きことを告ぐ。

〔政隣記〕

四月廿五日、御發駕相延御供人難澁之趣被聞召候。依之御扶持方代中勘に廿日分御貸渡可被成旨被仰出候。渡方者於江戸足揃御扶持方等一集に相渡可申候。返上方者追而可申渡候。且近き頃迄に追々俄に御供被仰渡候人々は、右之趣に相當り不申候得ども、是又俄に被仰渡候に付而者難澁之趣も可有之に付、各別之趣を以一統之通御貸渡之段、御供之御家老中御覺書を以御申渡之事。

四月廿七日。年寄村井又兵衛領内山林の産物調方主附を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

四月廿七日又兵衛御居間へ被召、御領國山林之産物しらべ方主付被仰付候。只今迄御留に相成候品に而も、御益に相成候儀有之候者、賣出候儀御ゆるし可被成候。乍然御益のみを相考、外之障に成候儀を構不申樣に有之候而は難成事に候間、其考も有之候樣にと御意に付、奉畏候。右産物夥敷儀故如何相しらべ可然哉、得与思慮仕、追而奉伺候品も可有御座旨及御請、退去。

五月朔日。前田治脩金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

五月朔日夕八半時御發駕、津幡御泊。

〔御留中留抜書〕

五月朔日

一、朝七半時御目覺、御料理御祝被遊、御服紗着・御布上下にて金谷御殿ゟ被爲入、中將樣御對顏、御披別旁御料理等御祝、御暇乞被仰上、四半時前御歸、御廣式ゟ被爲入、智仙院上ゟ居候に付白銀三枚可被下旨被仰出。

御旅裝束被召替、御居間書院ゟ御出、中將樣御使者被爲召御直答、詰引外記、年寄中一切、求馬・大炊一切、御家老・若年寄一切被爲召、一先御居間ゟ被爲入、外記被爲召、其次御近習頭被爲召(尤御右之節出候に付無之候、請引等役)、求馬・大炊より御廣式ゟ被爲入、御居間ゟ御出被遊、御供相廻宜旨申上、御熨斗御祝、夕八半時御發駕。御居間書院御廊下迄御先立若年寄。

一、中嶋政陸、少引離御擬仙並居罷在。中將樣御使者(御近習頭、中將樣御使者兼帶)御發駕之節に、御居間書院より檜垣之御間ゟ之取繕之御廊下先、御杉戸際ゟ罷出、御前樣御使者茂右御使者より少引離罷出。

一、御近習頭一人御式臺敷附ゟ罷出、外記其外御近習頭等御式臺際上端に罷出、中將樣御近

習頭、非番之面々、(戸田有柔出所) 少引離塀遊門、虎之間入口御廊下ゟ罷出、御意有之。

一、實檢之御間際ゟ備後守樣御使者罷出有之、御奏者番右御使者与申上、御會釋有之。

一、柳之御間御番人相招、左之覺書を以申渡。

奥御納戸方

南御土藏方

御書物方

右御鍵箱前々之通受取被置、右奉行斷次第時々可被相渡候事。

五月朔日

五月十四日。前田治脩江戶に着す。

〔御年譜〕

一、五月朔日金澤御發駕、同十四日御着府被遊。御供御家老本多刑部・西尾隼人。御步頭小堀金五右衛門(兼御近習頭)。

〔三守御譜〕

五月十四日御老中御勤。

五月廿五日。德川家治使を遣はして前田治脩の參覲を勞せしむ。

〔[illegible]守御譜〕
五月廿五日、上使板倉佐渡守。

五月。風至郡皆月浦破損船裁許牧野金藏、大坂の幕吏に與へたる書狀の不都合を詰責せらる。

〔袖中雜記〕
篠原勘左衞門に

皆月浦破損船裁許　牧　野　金　藏

右金藏儀、當五月、佐渡國去酉年御貢米積請候大坂御城米船遭難風、能州輪島浦へ致間入候付、大坂船割御代官辻六郎左衞門殿ゟ紙面を以及案內候處、右紙面文法不都合之趣有之、六郎左衞門殿より手代玉井權兵衞等を以、大坂詰人岡田平亦ゟ被相答候趣有之、則其段御算用場奉行より金藏に申遣、紙面爲調替、藤田兵部より挨拶之紙面指遣、最初之紙面与取替、內分に而相濟候。右之趣相達御詮儀處、金藏儀公儀御役人衆へ懸合之紙面に候間、得与先例承合入念可申處、未熟之至候。急度御尤可被仰付候へ共、此度之儀は御宥免被成候條、自今何御用之品に而も入念可申旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

右不都合は啓上仕候を致啓達候、御城米を圓字不致、役を役、其外仕を致、無御座を無之等

御名は加賀守

也。兵部より挨拶紙面之要は、御手代衆を以御内意之趣委細承知仕、御尤之儀奉存候。則家老共へも内々相達申候處、近頃不都合之趣、何分自私宜御挨拶申上候樣申聞候。右難船方役人之儀は、毎歳別人申渡、廻船通行之間浦所に爲相詰、三月より九月頃迄一作に爲相勤候故、今度御用初而相勤申候付心得違、右之族に御座候間、今般之儀は御宥恕被下候樣仕度奉存候。金藏へも心得違仕、不都合之紙面指上候旨相咎遣、先達而之紙面爲調直進上仕候間、最前之紙面御返被成候樣仕度奉存候。表立家老共ゟ被仰付候而は、御名ゟも相達申儀。左候而は右金藏儀咎可申付儀に御座候條、何分御聞濟御座候樣仕度奉存候。――と六月廿一日日付にて申遣候也。此返書は態与不被致旨に而、詰人岡田平丞迄、被入御僉議紙面取替進候旨等口上にて、其段平丞等より申越候也。

六月朔日。前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。

〔德川實紀〕

六月朔日、月次の拜賀例のごとし。松平加賀守治脩・松平土佐守豊雍參覲す。

七月四日。割場奉行駒井五左衞門非行あるを以て減知逼塞を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

割場奉行駒井五左衞門、惣組小頭より賴母子取立、其外支配之者より借銀仕、彼是負之取

割有之、同役之内より心得違之旨等申入候得ども、承引不致趣、同役より同所御横目へ内々申達、且外評も不宜趣、委曲右御横目より言上紙面被渡下、僉議可被聞召旨被仰出に付、表向よりも五左衛門手前御尋有之候ては品彌重く、相手之手前も御咎無之ては難成候間、其儀無之、役儀被除、閉門被仰付、御免之節自分知二百石之内百石計御減少か、又に百石御減少遠塞歟、評議之内被仰付にて可有御座候。的當之之例無之、明和七年村上采女、明和九年大橋助三例を引、申渡左之通兩端に伺之、遠塞百石減知可被仰付旨七月四日御意。

湯原典膳

駒井五左衛門

五左衛門儀、不相應之儀有之候段被聞召候付、役儀被指除、閉門被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

前札、五左衛門儀――聞召候付、自分知二百石之内百石御減少、知行高百石に被仰付、遠塞被仰付候旨被仰出候條――

閏七月十九日。仙石内匠の子石門先に肩衣を用ひて金谷御殿に登りたるを以て之を停止せらる。

〔袖裏雜記〕

六月十七日、金谷御殿において頭分以上之嫡子御能拜見被仰付候處、仙石內匠せがれ右門肩衣懸罷出候付、戸田與一郎等より右之趣內々申聞、段々僉議之上、左之通可申渡と閏七月四日伺之處、同月十九日伺之通被仰出。

中川八郎右衞門等へ

前田伊織等並之人々嫡子肩衣着用先例相尋候處、伊織紙面に各紙面を添被指出候。先年岡嶋故市郎兵衞等及指圖候儀も、市郎兵衞等了簡切之躰に而、御斷仕候儀とも不相聞候。既に右並より轉役被仰付候へば、肩衣懸不申儀候間、自今嫡子肩衣爲懸候儀遠慮可然候條、此段可被申談候事。

右伊織紙面には、元祿九年加藤故刑部嫡子故主水肩衣之儀、岡嶋故市郎兵衞等へ尋候處、爲致着用候樣指圖有之旨。仙石故庄左衞門同並に被仰付候時分申送り、則仙石內匠も無息之內肩衣着用仕候。享保廿年山崎故庄兵衞等より、庄左衞門へ無息之人々肩衣着用有無之儀被尋候付、右之段申達候處、僉議も有之樣子に而、左候はゞ只今迄之通爲致着用候段被申聞候舊例を以、其以後同並之人々嫡子肩衣着用仕來候旨也。八郎右衞門等手前には紛失帳之內に而不知由也。

閏七月廿五日。村方に於いて請酒を營業とすることを禁ず。

〔司農典〕

近年於村々之中ニ、請酒等之商賣いたし候者多有之、且於御郡々に囃子時行、及難儀ニ候者共多有之様相聞。右等之儀從前々御停止之儀ニ候處、近年猥ニ相成、商人同事之心得之者共有之躰ニ候。以來右之族於有之ニ者、急度曲事ニ可申候條、請酒商賣等之儀相止候様村々嚴重申渡、請紙面可指出候者也。

閏七月廿五日　　　　改作奉行

能州御扶持人・十村中

八月廿五日。前田治脩、重教の男兒を擧ぐる時は之を世嗣とするの意あることを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

九月四日、到來之御覺書左之通。

此度金谷被召仕候婦人之內、懷孕有之候。就夫御出生御男子ニ候へば不及申、我等嫡子ニ願候含而之內存ニ候。尤外々此例數多有之候。いまだ御出生前ニ申達候儀いかがに存候へども、御男子御出生之上ニ、指懸願候儀も可有之と存候に付、豫此段內々申聞置候、以上。

八月廿五日　　　　加賀守

九月九日。前田治脩江戸表の經費缺乏を會所奉行に告げたる書金澤に達す。

〔袖裏雜記〕

御勝手御難澁、江戸表御入用必至と御指支に付、會所奉行高畠權太夫ゟ御親翰渡、金澤へ被遣之、本多刑部等より御指つかへ之樣子委細申含被遣。九月九日參着、御用番河内守宅へ參出、右之趣荒增演述。覺書も持參に付明日御城へ持參、委細申聞候樣申渡。御親翰等爰に略す。

年寄中

九月十二日。前田重教の子齊敬金澤に生る。

〔大梁公御年表〕

一、九月十三日酉ノ刻於二之御丸若子樣御出生、重教公御妾江戸人 敎千代樣と奉稱。奥村河内守尙寛墓目御用相勤。

九月十五日。赤尾本平父の仇を復す。

〔大梁公御年表〕

明和五年七月七日の騒擾

一、九月十五日朝浪人赤尾本平（廿五歳）親之敵を討立退候。翌十六日本平兄飯田惣介、前田大炊（孝）屋敷邊ニ而自害。委曲別記あり。

〔御興雑記〕

九月十五日朝本組與力堀長太夫宅へ、何者とも不知踏越、長太夫を打果立退き候處、其後前田大炊屋敷腰に而自害仕候、割場附足輕飯田惣助と申もの壽説に、きこ〳〵たのもしき弟にて候。神妙可産本望、千秋萬歳目出度申納候等と有之。右長太夫を殺候は、惣助弟之躰に而、其名前ニ不見故相糺候處、浪人に而赤尾本平と申由町奉行より申聞。且申渡、人相書し爲出、一統相觸。其後江戸へ申上。本平親は長太夫に被切殺候者也。（此時分借銭も親之重打續き申はかりて候也）

〔千宥抄〕

赤尾子か報讎

爰に金澤に堀豊左衞門といふ者あり。（義力士、二百石）家貧窮にして牢人赤尾丹右衞門といふ者の家を借り二同居したりけるが、兎角借屋賃を與へざりければ、丹右衞門より度々是を催促すれば、却而慝をなし丹右衞門を罵る故、忍んで是を爭す。頃は明和戊子の事なるに、夏も過志闌秋も近き程なれば、人々利の爲に奔走する折節、赤尾堀に對ていひけるは、吾主家より少の祿を受て妻子五・六人を養ふなれば、渡世且て難艱也。是に依て足下に家をかし、借屋賃を

受て柴薪の助とも爲んとす。然るに足下やちんを贖ず。我是に依て其事をいへば、却て罵り怒り給ふこそ遺恨なれ。我も貧窮に至りて人の貧窮をも察し侍れば強て責じ。然ども少しはあはれを發し、借賃を少し成とも與へ給はゞ妻子の悦びならん。今日や柴薪の價を渡し度侍れば、願くば少しにても借賃を賜へといふ。堀是を聞て、我今一錢の貯へもなし、與へ難しとすげなく言けるにぞ、赤尾重ていひけるは、貯へのなきには是非なしといへども、今更の事ならば追てといふて待もせめ、幾度も斯く言給ふなれば、待とても賜ふ期あらじ。此上は我家を去りて外へ移り給へ。さあらば外人を借家致し、家賃の全からん事を願ふ。すみやかに退給ひたらば我悦ならんといひけるに、此時堀勃然と大に怒り、汝匹夫吾を耻しむる事過たり、何ぞ是を忍んとて、明晃々たる刀を以て雷光のごとく切付ければ、赤尾其所を退く隙もあらばこそ、一刀の爲に肩を傷る。堀がせがれ長太夫父が側に在けるが、是を見て、同く刀を拔て赤尾をずた〳〵に切る。赤尾が妻子此光景に狼狽て、家を出て逃れさる。堀此由を訴へければ、檢使來りて其始終を調ぶ。堀は、赤尾が過言し耻しめたる故に刄傷に及ぶと答ふ。されば堀は與力たり、赤尾は陪臣なれば、言の過たる無禮なり。假令陪臣にりとも、刀を帶る者の拔合せざるも不覺成者也とて、赤尾が誤となり、堀には何の障もなく事濟けり。然るに赤尾が子四人あり。兄を宗助といひ、弟を本平といふ。二人は女子也。其頃は何れも

幼稚にぞ有けるが、母に従て月日を送る。母は寡と成て、貧苦困窮の中に子を養ひけるが、次第に子供人と成て、兄は足軽となり、弟は武家に仕へて在けるが、彼弟本平は慷慨の者にて、常に父が事を思うて憤をなしけれ共、いまだ施すべき謀もあらず。隙に乗して武術を学びて年を重ねけるが、堀覺左衛門病に罹りて死し、せがれ長太夫家を継ければ、本平是を恨み、力たりなば父子ともに并て是を討べきに、死たれば是非に及ばずと賜後悔す。或日兄の宗助に逢うて言けるは、我等が父の讐を打侍らんと思ふは如何といふに、宗助曰、さればこそ吾も斯く思ふといへども、彼長太夫は武術勝れたり、吾等如きの及ぶまじ。却て討れなば亡父の恨をそふに似たり。汝も我も剣術を熟せずんば討つ事難かるべし。本平が曰、人の命は旦暮を期せず、長太夫病て死なば臍を咬とも及ばじ。父の仇は共に天を戴すといふなれば、はや〳〵討ずんば有べからずとて、不興なる顔色にて宗助に別れ出去ける。去程に本平は、是より日夜彼長太夫が往来する道にまち窺けるが、且て長太夫を得ず。長太夫此様子を伝聞ければ、病と称して引籠りける。是に依而家を出ざる也。本平思ふは、いつ迄待とても吾音信を聞ばこゝは通るまじ。所詮彼が家に行て討べしと思ひ、頃は安永戊戌九月十五日の暁に、本平旅よそほひしたゝめ、利剣を挿び帯て、直に長太夫が家に至りて見るに、未夜の明ざれば戸ざして有けるを、ほと〳〵と敲ければ、内より答ふ。暫くして婢女の出で戸を開き、誰や

安永は明和なるべし

と問ふ。本平が曰、我少急事有て來れり、主人はいづれにありや。下女が曰、寢屋に臥ておはすと答ふ。本平が曰、さらば起して我に逢させよ。火急成事待れば後にとは言難し。下女是を聞て内へ入る。本平は下女が跡に從うて歩み行、長太夫が臥たる側に至り、足を以て枕を蹴飛し、大に呼つて曰、赤尾丹左衞門がせがれ本平、今日親の仇を討に來りたり。此事汝覺有べしといひも果ず、一刀を以て肩を伐つ。長太夫も流石の者なれば、起立て刀を取り拔んとする所を、また一刀を首元に加へければ、此きずに依て、働事能ず。心は撓まずといへども聲も揚得ず。本平は得たり賢しと、かへす刀に咽喉を刺止て堀が家を出で、いづくへか去けん行方しらず成にけり。其時菅笠を堀が家に殘し置て有けるが、一通の訴書を記して笠に挾み有けるとぞ。これに復讐の趣を認め述たりけり。是に依て遠近に其沙汰を傳へたり。去ば兄宗助是を聞、弟に先を越され本意なければ、我時もあらんと待たりしが斯の仕合。今更何の面目有てか世の人にまみえん。義なくんば死するにしかずと、金城の追手の御門近き所にして、刄に伏して死けり。但宗助此所にて死たるは、少謂あれども憚りて略す。

〔寢覺の螢〕

安永中金澤與力苗字失す。長太夫と云ふ者、足輕赤尾何某より銀をかり、其差引の事にて赤尾を殺害す。是長太夫の非道なりと風評す。然れ共食祿無恙勤仕す。赤尾何某に男子二人・女子一

人あり。成長して兄は横山山城守殿に勤仕す。弟本平といへるもいづれにか仕へしと見えたり。妹は町家へ嫁入して、近き頃まで存命なりし。扨弟赤尾本平、年來武藝を修行し、共に天を戴かざるの趣意、屢兄へ云すゝめけれ共兎角を言て不果。弟本平、迚も兄は本意を遂る志なきことを思ひけむ。或日旅束にて、明六つ頃長太夫が宅へ行しに、婢女ひとり起て火を吹付る處なり。本平婢女に云、長太夫に急用有て來れり。起し與よと云。婢女諾して閨へ行ける跡に、引續て寝所へ踏込、聲を上て、吾赤尾本平と云者なり、先年我父は汝が膽手に懸り非業の死を遂たり。讐を報ん爲來れり。尋常に勝負せよといふを聞、長太夫心得たりと起上らんとするを、左の肩先より右の脇腹迄一討にし、靜にとゞめをさし、閨の障子に赤尾本平父の敵を討て御當地を立退ものなりと、太々と書て行方なく落失たり。兄は此沙汰を聞、面目なく哉思ひけん、其夜前田大炊殿塀の下に扇子を敷て自殺せり。頸紋の眞似したりと其頃笑へり。兄弟一所に此敵討せば美名なるべきに、犬死せしは口をしき事なり。

赤尾を殺せし砌、中島恒久其役を司る人の屋敷に行、赤尾をころせしに甚長太夫の非義なり。然るに長太夫祿其儘に、役も前のごとし。是不直なる政道なり。赤尾の妻子嘸口惜しく、又上をも恨べし。都て敵討はかゝる事にて起るもの也といふ。其頃曉の次第を語、此上もし敵討あらば國の美名なりと。恒久答て、吾聞所とは大に異なり。敵討あるは其國の恥辱なり。

借は貸なり
安永四年七月十五日は明和五年七月七日なるべし

其故いかなれば、政道正しからざるが故なり。既に赤穗四十七士の讐討も、內匠頭殿に切腹にて、吉良殿は官祿前のごとく出頭せり。此御政道の不直に非ず哉と。果して後此敵討あり。

〔三州良民言行錄〕

赤尾本平

赤尾本平者。藩士小川直右衛門臣赤尾丹右衛門之次子也。兄宗助爲飯田某所養。爲弓手歩卒。丹右衛門中年喪妻。時本平等幼。身居劇職。不能育成二子。乃提而就主之廡下而居焉。因借家於堀長太夫。長太夫放而不償其僦直。家漸損破。亦棄而不問。丹右衛門苦憤之。因俾趣而去。長太夫故不肯去。三四强之猶自若也。安永四年七月十五日。丹右衛門抵長太夫。坐定語及家事。長太夫傲然言他。旁若無人。丹右衛門不勝積忿。拔刀擊之。長太夫弟直右衛門趨來。翼而擊之。力鬪良久。丹右衛門兵力已羸。遂爲二人所害。本平時十三。哭踊忿怨。以爲。彼夫也實不可共戴天者也。然吾之孱弱。猶違邑鬪之勇。反獲害死何益。自是潛思專攻刀法。長太夫微伺知之。警身甚嚴。本平之友嘗歸自江戶。訪本平。齎一握土與之曰。此是荒人神祠冢上之物也。昔在曾我氏兄弟殺工藤祐常。以報父之讎。後人義二子。立祠而祭之。世傳。人之間其仇者。恒懷斯土則必遂其志云。吾故竊爲子獲而少見志云。本平謝而受。然亦無甚喜色。其人失望而去。一日卯辰山（山在于都城東）佛寺大會人衆。僧在壇上說法。本平注疑問質諸僧。其略曰。人爲

天明七年は安永七年なるべし

其親報仇。身死家亡者。與其臨窓而奉親之祀者。於孝義孰爲是。僧揮麈而辨曰。是理最難。夫報仇者。已遂我志者也。雖然使亦讐我。則彼我同苦於修羅道。不若爲死者修冥福。由是使死者生乎天堂。而得諸快樂。孝莫大於此矣。本平聞卒擧服僧之言。長太夫傳聞之。竊笑謂。怯哉豎子。夫事以密成。語固泄而敗。彼以其所羞於志詢于人。安於廣人稠坐之中之爲。蓋彼以之掩已之怯。而杜絶人口之計也。亦無足慮者。自此解嚴稍寛。天明七年赤丹右衞門之死已十三年矣。七月十五日爲忌辰。本平爲祭享。禮盃甚至。遂擇時日將擊仇人。越九月十五日黎明。本平衣緇衣。襲短服。脚負簏蓑。如上山者。往新堀。（在金澤城之隣小立野）至長太夫家呼門。女厮開門。本平紿爲謁。曰我日與主人有採菌之約而來也。以此告之。女厮入。本平陰從而詳之。長太夫傾聞女厮之言。有怪色。本平直進。抗聲曰。我是赤尾丹右衞門之次子也。汝忘賊害我父乎。今報汝仇也。汝起而戰。長太夫譁然覺之。將起不得起。本平遂跨長太夫上。乘彼刺之。絶喉殪之。本平乃解緇衣之襲，悠然臨跡而亡。不知所之。兄宗助聞之惴惴。則且自盡郡城端門之外。

〔又新齋日錄〕

記復讎之事

某藩騎吏。堀長伏枕旬餘。一日請且有客。稍相知某急求謁者。奚奴應以病。强請。固辭謝將

七月五日とするは非なるべし

本文誤脫なるべし

閏七月とするものは非なるべし

閉。直排投厠下。提劒叱曰。女不記乎。爲自刑久之。長蹴蓐且起而不能。昆吾一照。與咄々群蹵厠下。客便走出。事起倉卒。擧室沸劇。其妻執偃月逐之。稍而赴親戚俺友。以待處分。初長之父役東都之日。從客之父貣錢。既而過期。數債不入。一日來偪苦謝焉。不可。奮腕捽長。長弟直刺蹵之。或曰有其子在。子其備焉。曰死備奚爲。事上令下。坐賊云。其二子僅十歲左右。招拾自資。及稍長先爲卒伍。弟本平自責爲傭。備歷寒苦。十有三年。今玆戊戌七月五日。卒有今事。長弟先以病死、故及本平。兄聞之。且喜且泣曰。於乎。天而後之。謂之何。卒自決云。君子曰。尊卑者服也。果乎則亡。尊不可保以厭卑。卑不可以不加尊。早乎服之不可以怙也。

〔御年譜〕

一、閏七月浪人赤尾本平儀、父敵本組與力堀長太夫を討、直に出奔。但本平兄割場附足輕、右之趣承之自殺。

九月十九日。前田重敎の女藤姫金澤に生る。

〔大梁公御年表〕

一、九月十九日今度御誕生之若子樣御七夜御祝、二之御丸に而御能。同夜金谷御殿において御女子樣御誕生。藤姫樣御事。

九月廿七日。赤尾本平の人相書を町奉行に提出す。

〔國事雜抄〕

一、年齢二十五歳

一、出生小川直右衛門旧家來、淺野川々除町に罷在候赤尾丹右衛門与申者に而、先年本組與力堀豊左衛門殿子息同苗長太夫殿被致殺害相果候者せがれ。

一、中せい、少しひくき中肉、面躰鼻筋通り、色淺黑き方。

一、額高き方、月代薄き方。

一、口常躰。

一、齒並揃ひ、唇常躰。

一、耳常躰。

一、當月十四日夜明朝白山ゟ參詣仕候旨に而、私方ゟ罷越候節之衣類、上に黑木綿無紋、裏千種色之袷を着し、木綿嶋さへし小紋之股引・脚絆仕、大小を帶し、菅笠持參仕候。帶並下着等之儀者相知れ不申候。

右私妻弟赤尾本平人相書、並衣類附如此御座候、以上。

戌九月二十七日　　　　十間町　大浦屋與三助

九月廿八日。頭分以上の士に前田重敎の子齊敬の出生せしことを告ぐ。

〔政隣記〕

九月廿八日、御用番奥村河内守殿より一昨日依御廻狀、今日五時頭分以上布上下着用登城、御帳に付、柳之御間列居之處、年寄中・御家老中御列座、左の趣御用番御演述。依之年寄中等に廻勤、御祝儀申上候事。

今般中將樣御妾腹に御男子御出生被成、御大慶に被思召候。此段何も可申聞旨、拙者共迄御書被仰下候事。

誕辰は九月十三日なり

今般御出生之御男子、御名敦(ミチ)千代殿与被稱候。殿付に唱候樣中將樣より被仰出候事。

敦千代は後に齊敬と稱す

十月四日。赤尾本平脫走せるを以て捕縛を命ず。

〔政隣記〕

十月四日、御用番奥村主水殿より御觸有之、左之通。

前月十五日朝浪人者赤尾本平与申者、本組與力堀長太夫を切殺候而逃去候に付、本平人相書を以見合次第召捕、公事場奉行に及斷可申旨等之事。

十月十九日。穢多非人の取締に關する幕府の令を受く。

〔筒井舊記〕

大目付ゟ

近年穢多・非人等之類風俗悪敷、百姓・町人へ對し法外之働致、或百姓躰に紛旅籠屋・煮賣小屋等ゟ立入、見咎候得者六ヶ敷申懸候得共、百姓・町人等者外聞に拘致用捨置候故、法外致増長、就中中國筋之穢多・非人・茶筅之類、盗賊惡黨者之宿、又者盗もの之致世話趣も粗相聞、既に穢多共申合村々へ立入候者も、追々引廻死罪等御仕置申付候得共、風俗不相直由之取沙汰有之候。惡黨事致候者ハ勿論、百姓・町人に對慮外致候歟、百姓・町人躰に紛敷者ハ嚴敷御仕置申付證、並而穢多・非人・茶筅之類ハ嚴敷申渡置、相背者有之候ハヽ、御料ハ御代官より手代・足輕差出召捕、御勘定奉行ゟ可相達、於私領茂右に准可申候。若捨置候場所有之候ハヽ、最寄御代官より手代・足輕遣し召捕可有之候。於然者其地頭之可爲不念者也。

右之通御料・私領不洩樣可被相觸候、以上。

十　月

田沼主殿頭殿御渡候御書付之寫一通相達候。被得其意、答之儀者正木志摩守方ゟ可被申聞候、以上。

十月十九日　　大　目　付

十月廿七日。前田治脩、老臣に書を與へて齊敬を世嗣とすることの同意を重教に求めしむ。

〔袖裏雜記〕

十一月五日夜到來御親翰左之通。

今般敎千代誕生之儀、誠目出度恐悅之至候。兼而拙者存念各にも申入置候通に付、此度敎千代事拙者嫡子に仕度內存之趣、段々相願候處、御聞屆可被遊御內意被仰下、叵有奉存候。依之表向各を以相願候。早速御聞屆之段被仰出候樣仕度候。此等之趣金谷に罷出宜可被申上候、以上。

十月廿七日　　加　賀　守

本多安房守殿

長　大隅守殿

前田土佐守殿

奥村河內守殿

奥　村　主　水殿

村井又兵衛殿

尙以各相揃被出候儀も如何に候間、安房守參上被申上候樣にと存候。若指支候はゞ月番罷出可被申上候、以上。

右に付十一月七日安房守金谷御殿へ罷出、中村萬右衛門を以、從加賀守樣被仰進候趣御座候。御親翰も持參仕候。御前へ罷出本伺度旨申上候處、追付御用之御間へ御出罷出候樣萬右衛門申、則出候而、今般數千代樣御儀加賀守樣御嫡子樣に御願被成度趣、私共迄御親翰を以被仰下候。則入御覽申候。何卒御許容被遊候段被仰進候樣仕度奉存旨申上候處、則御覽之上、被仰進候通何之思召も無御座候間、加賀守樣思召に可任候。且又數千代樣御成立之所は御計ひ難被遊候間、此段宜可申上旨御意に付、奉畏旨等御請申上退き候處、重而萬右衛門を以、右御成立之處御計ひ難被遊候間、此所得と可申上由被仰出。

求馬・大秋等は在金澤せり

十月廿七日。前田治脩老臣等に齊敬を世嗣とすべく幕府に出願せんとすることを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

求馬・大秋〔十一月六日〕御家老中・若年寄中〔同廿日〕内々申談。

數千代樣御儀、加賀守樣嫡子樣に御願被成度趣、中將樣ゟ被仰進候處、何之思召も無御座候

御聞届は前田重教に係る

間、加賀守様可被任思召候。御成立之所は御計ひ難被成旨、御返答被仰進候。此段内々可申談旨被仰出候事。

右は左之御親翰に付而也。

此度教千代事嫡子願之儀、表向御聞届被仰出候上、無程公邊に可願出存念に候。然上は萬端勝丸殿同事之振合候條、兼て夫々しらべ置被申、伺之品も候はゞ追々可被申越候。且又勝丸殿之節、同席中之内より奥村故伊豫守右用主付、并家老共之内より本多故圖書・前田故々修理用向勤候様承及候。今般も右之振にて可有之儀と存候。しかし其節は何とか御様子も有之候而、右之振にも候哉。此段一往尋申候。猶又各了簡承度候。早速可被申越候。將又勝丸殿誕生之砌、右主付等或頭分・抱守等被仰付候振見申度候。委敷書付可被指越候。

一、此度教千代嫡子に願候儀、求馬・大炊并家老共にも内々被申聞可然存候。在江戸家老共には、尤於此表直に可申聞候。將又惣躰品重き儀は、組頭には前廉内意申聞候事も有之様におぼえ候。左候はゞ公邊に願出候すこし前に、各より内意申聞可然哉。但此一件は其儀には不及事候や、任心付候申達候、以上。

十月廿七日　　加賀守

年寄中

右御親翰之當座之御請品無之故案に略す。

十一月七日。前田齊敬を様付にすべきことを命ず。

〔政隣記〕

十一月七日、左之通御用番長大隅守殿被仰聞候旨等、御横目廻状有之。

教千代殿、向後様付ニ唱候様、從加賀守様被仰出候事。

前田宗辰の歿延享三年十二月八日

十一月十二日。前田宗辰の三十三回忌法會を執行す。

〔覺　書〕

一、十一月十二日、今日大應院様三十三回御忌御取越御法會拜禮被召出候。

十一月十五日。前田治脩、齊敬を世嗣とするの請を容れられたることを重教に諭せしむ。

〔袖裏雜記〕

十一月廿四日夜到來之御親翰左之通。

教千代儀、拙者嫡子ニ仕度旨、今般表向否ヲ以相願候付、當月七日金谷ゟ安房守參上、御前ゟ被罷出、拙者紙面を以被申上候處、願之趣御聞屆、拙者可被任了簡段御意之旨。就夫委曲

紙面之趣承知いたし候。先以願之通早速被仰出、其上段々御懇之御諚之趣、誠叵有奉存候。此段重而金谷に罷出、何分宜取計可被申上候、以上。

十一月十五日　　加賀守

本多安房守殿

長　大隅守殿

前田土佐守殿

奥村河内守殿

奥村主水殿

村井又兵衛殿

猶以此度茂、尤安房守参上可被申上候。若指支候はゞ、月番罷出被申上候様にと存候、以上。

右十一月廿七日安房守金谷へ持参、萬右衛門へ渡上候處、段々被入御念候御儀に被思召候。此段宜申上候旨被仰出、御親翰は同日御状箱へ御入、御封印を以萬右衛門を以被返下、御書添は不被遊旨被仰出。右之趣委曲十一月廿八日御請に申上。

〔袖裏雑記〕

十一月廿二日。與力小石專左衛門父子の流刑を宥免す。

安永元年四月十日の騒参照

被是爲大赦は前田重教の公子出生及び前田宗辰の三十三回忌の際なるべし

與力小石專右衛門せがれ九太夫、親之罪によつて遠嶋被仰付置候處、御免被仰付度趣、從中將監被仰進候由、御內々被仰出僉議被仰付候付、明和九年石川御門三番組御番、右專右衛門・原田吉郎兵衛等相勤候處、四月十日當番之節、町人中屋市郞左衛門と申者料理獻立等可申談ため御番所ゟ呼寄、且新番人之者共より七日・十日菓子・酒等取寄給候。菓子等取寄候は勿論、御用にても御城中ゟ町人無札にては御門往來不相成御定に候處、自分之用事に御番所迄罷出候樣右町人ゟ申談、御番所ゟ呼寄候。然處安武治左衛門心付、無札之者に候間早速相返候樣申聞、相返候儀等、重々不屆至極之者に付、段々御僉議之上、右兩人御知行被召放遠嶋可被仰付旨、其外夫々以御加筆被仰出候。吉郞兵衛は安永四年五月致病死候。專右衛門父子は相殘り居申候。武部右門・青木內藏太流刑御免之近例も候間、今般被是爲御大赦、專右衛門幷せがれ九太夫共御宥免被成候ては、以後之障にも相成不申可然。足輕以上苗字有之者は、せがれ一向何も不存候ても、親同刑に被仰付候御格之旨等、十月廿九日申上候處、兩人共御免可被成旨被仰付候に付、左之通申渡。

覺

永原將監與力

小石專右衛門

能州嶋之内曲村ゟ流刑被仰付置候。

右專右衞門嫡子
小石九太夫

同所須曾村ゟ流刑被仰付置候。

右專右衞門儀、不屆至極之儀有之に付而流刑被仰付、嫡子九太夫儀も親之依罪遠嶋被仰付置候へども、今般彼是爲御大赦兩人共流刑御宥免被成候條、此段可被申渡候。尤御城下ゟ罷出令居住候儀勝手次第之旨、是又可被申聞候、以上。

戊戌十一月廿二日

大隅守　織部
江戸　隼人　帶刀
八矢　圖書
江戸　刑部　又兵衞
主水　河内守
土佐守　安房守　各印

封印にて認、木地箱入割場ゟ遣、以早飛脚遣之、歸には常歩に可申付旨申渡。

十一月廿五日。原田吉郎兵衞病死の後流刑を赦免せらる。

〔袖裏雑記〕

前に記す小右専右衛門父子共流刑等御免に付、原田吉郎兵衛も同刑故、病死はいたし候へども、母等も居候故、御宥免に候はゞ其段申聞度旨、支配人内々申候付、十一月廿五日左之通申渡。

中川八郎右衛門ゟ　　明組與力　原田吉郎兵衛

右吉郎兵衛儀、不届至極之儀有之に付而、能州嶋之内ゟ流刑被仰付置候。今般従是爲御大赦流刑御宥免被成候。然所先達而致病死候故、不被及其御沙汰候。此段一類之者ゟ可被申聞置候事。

十一月廿五日

十一月。金澤竪町に魚鳥市場を設く。

〔大梁公御年表〕

一、十一月竪町に市再び立。毎月十日・十三日・廿日・廿三日。無程相止。

〔温故集録〕

或曰、享保年中までは魚市場は犀川・淺野川・兩所に建たり。犀川は竪町の入口にて、其頃町

名を魚屋町と呼べり。淺野川は袋町なり。享保年中兩市場を廢し一ヶ所となし、近江町を魚市場とすと。舊傳に云、袋町に新保屋次郎右衛門とて往古以來居住せり。此者國初以來藩公御膳所用の魚鳥を調進す。瑞龍公高岡御在城の頃、魚鳥野菜の御用承りけるに依て、高岡に其邸宅を所持し、魚鳥等を双方へ運送するに依て、市場も袋町に建たりしかど、御膳所用の魚鳥をたくはへる穴近江町あるが故に、袋町にては不辨利なりとて、遂に市場を近江町に移したりと云。按に堅町の魚屋町は、今片町より堅町へ入る入口邊にて、武家昆目集に元祿三年三月十六日新堅町より出火し、本堅町・魚屋町・水車等燒失と見え、同六年の士帳に、立町・魚屋町後ハ柿木畠など記載し、又立町市札近所、或者立町市札より一丁計上足輕町などとある市札は、則魚屋町なる魚市場の立札なるべし。尤享保以前は魚鳥のみならず、野菜物の市も建たる故に、此地に市札を建置たるならん。年譜に安永七年十一月堅町に再び每月十日・十三日・廿日・廿三日市を立、但無程止とあり。

十二月七日。前田重教の子齊敬の生誕を幕府に屆出でその年齡を增して三歳とす。

〔袖裏雜記〕

數千代樣御出生被成御座候段、當七日御川番ゟ御屆之節、御歳當年御三歳に被爲成候旨御達

被遊候旨、十二月廿八日日附刑部等より申越。

十二月十八日。前田治脩、重教の子齊敬を世嗣とすべき幕府の許可を得。

〔三守御書〕

十二月十一日數千代様御儀御養子被成御嫡子被成度段御願書御指出被成候處、同十八日御登城御願之通被仰出。

御白書院於御縁頬老中列座、御願之通被仰出皆御用番松平右京大夫演述。翌年正月三日御弘、此時より松平之御稱號、且是以後之御指合勝丸様御同様に候旨被仰出。

十二月廿二日。郡方に命して婚禮の家に石礫を投ずることを禁ず。

〔筒井舊記〕

婚禮之砌石打候儀堅く御停止之處、近年猥に相成、外廻り締り之戸豐垣等迄打崩亂行之仕形、其上娘差遣候先方之家居を石打等いたし候様子相聞候。婚禮之儀者大禮に候所、無禮之仕形、人倫之法相失候儀、拙者共之教不行屆ゆ歟甚至に候。右亂行之仕形、遠方より仕候儀者有之間敷候。同村・隣村之者共之仕儀。左候得者同名共幷隣村之者に祝詞を演候儀人道に候所、却而亂行之仕形門戸を打崩候儀、無益費を不顧、第一禮儀取失候儀沙汰之限りに候。此儀平生父兄之子弟を教候事無之、村役人共及同名共申教候儀怠り候故ゆ被存候。以來急度申教、向

更行届候迄は、婚禮有之砌は村役人共其家向・隣等に相詰罷在、不法之者有之候はゞ誰々与申儀見届、十村中ゟ相斷可申候。十村中よりも手代等相廻見屆可申候。此段急度末々迄申渡可置候。如此申渡候上、若違背有之者於有之者、急度可申付候。品により役人等茂迷惑可申付候、以上。

戊十二月廿二日

槻尾左膳

高澤平次右衛門

能州四郡十村中

安永六年八月五日參照

十二月廿五日。博奕を爲したる諸士等處刑せらる。

〔袖裏雜記〕

前冊に記す根木三右衛門長屋借與兵衛一件、與兵衛儀多七郎より公事場へ引渡、遂吟味、大賊其上博奕度々いたし候付、不被及赦之御沙汰、追而斬罪之段、當三月落着被仰渡候。先達而多七郎より御用番へ出候博奕同類名書、豐公事場御横目木村三藏等より與兵衛手前博奕同類交名之樣子尋候趣、公事場奉行指出候。依之右同類御家中之人々御咎之儀、先例寶暦十三年白銀屋與左衛門博奕同類御咎被仰付候趣を以、左之通僉議。

定番御馬廻　福田彌八郎

組外　山本吉太夫

右兩人ハ常々不行狀、其上白銀屋與左衛門と博奕等仕候付、閉門被仰付、御免之節彌八郎ハ八十石之内三十石、吉太夫ハ二百石之内百二十石御減少、自今急度慎可申、尤如御格遠慮、其後遠慮御免候處、嗜不申、與兵衛と博奕非宿仕、不屆至極候間、御知行可被召放哉。

組外　岡田元右衛門

本組與力　佐久間五郎兵衛

同　久世幸左衛門

定番御馬廻　不破源太夫

源太夫弟同居御馬廻　得田彌右衛門

右五人之内、元右衛門・五郎兵衛・幸左衛門ハ博奕非宿仕候。源太夫・彌右衛門ハ博奕連中之由ニ而、先年與左衛門等分も宿非連中之無差別閉門被仰付、御免之節減知ハ多少御座候間、今般も元右衛門等ハ常々不行狀之段被聞召候へども、相慎申儀ニ可有之哉与御猶豫被成置候處、相嗜不申、不屆之至ニ被思召候。依之閉門被仰付候段被仰渡ニ而可有御座、御免之節減知多少ハ其砌可申上候。但公事場奉行出候名書之内、元右衛門ハ出合不申由與兵衛申候旨調、多七郎より出候名書ニハ其段不調。且與兵衛口書之紙面ニ、元右衛門へ五百目餘負候旨調候。

左候へば連中無相違躰に候。且又多七郎より出候名書には、久世幸左衛門と有之、公事場奉行より出候名書には久世幸助与調候。幸助は幸左衛門嫡子に候。父子共常に不行狀之由相聞候。元右衛門手前相違有之に付、尚更不破源太夫・得田彌右衛門・右元右衛門・同人弟數馬手前、覺書を以多七郎ゟ尋候處、源太夫・彌右衛門兩人共不行狀、不埒之參會相止不申躰に候旨。元右衛門は博奕等に交り、其身連中に成候躰は不聞候へ共、柔弱成生質に而、弟數江申分に任、遊樂之宿等仕候躰。外邊は指而不行狀之沙汰不承旨。數江は博奕參會仕躰之旨等紙面出候。右覺書に而者、元右衛門連中に相成候躰は相聞不申候へども、其家を司り博奕宿等爲仕候段不埒候間、閉門可被仰付哉。但右之通生質之者候間、逼塞被仰付に而可有御座哉。

岡田元右衛門弟　岡田數江
山本吉太夫せがれ　山本半藏
久世幸左衛門せがれ　久世幸助
安房守家來　内本佐左衛門

右數江等三人、先年白銀屋與左衛門一巻之時分も、無息之者は御貪着無御座、跡目之節減知被仰付候者等も有之候間、此度も不被及御貪着、追而之御僉議にて可有御座哉。此内吉太夫せがれ半藏儀は、吉太夫御知行被召放候へば、是に而相濟申候。安房守家來佐左衛門儀は、

爾々不行狀等之儀有之、一兩度咎メ申付、相宥申者ニ候へば、右之族有之間敷とは難申候故、得与相糺候上、急度咎可申付与存候内、去年十月病死仕候付、不及跡目等之沙汰、其分ニ仕置候。福田彌八郎等下前被仰付候御樣子ニ隨、追而及沙汰候存寄之旨申聞候。右之通ニ而候へども、此度元右衛門弟數江等ニ甚不埒至極之儀故、尚更先例考候處、寶暦十三年深尾安左衛門——此度數江・幸助親兄下前嚴重御咎被仰付候へば、左候ハヾ彌八郎等初左之通可被仰渡候哉。

金森忠太夫ゟ

福田彌八郎

右彌八郎儀、常々不行狀ニ付、先年閉門被仰付、御免之節親類等被仰付、自今急度相慎候樣被仰渡置候處、今以相嗜不申、段々不行狀之趣被聞召、不届之至ニ付、御知行被召放候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

戊戌十二月廿五日

山本吉太夫

組外御番頭ゟ

右同文言。

戊戌十二月廿五日

荒木善太夫江

岡田元右衛門

右元右衛門儀、常々不行狀之段被聞召候へ共、相愼申儀も可有之哉与御猶豫被成置候處、相嗜不申、不屆之至に被思召候。依て逼塞被仰付候旨被仰出候。

同人弟　數　江

右數江儀、常々不行狀之段相聞え候。無息之儀愼申儀も可有之哉与御猶豫被成置候處、相嗜不申、不屆之至候條、急度相愼罷在候樣可申付旨、數江兄元右衛門へ可被申聞候。

右之趣可被申渡候事。

戊戌十二月廿五日

佐藤半五右衛門江

不破源太夫

右源太夫儀、常々不行狀之段。此間元右衛門と同事。依之閉門被仰付候條、此段可被申渡候事。

戊戌十二月廿五日

原五郎左衛門江

得田彌右衛門

右同文言。

戊戌十二月廿五日

中川八郎右衛門等ゟ

本組與力　佐久間五郎兵衛

同　　　　久世幸左衛門

右兩人常々不行狀之段相聞え候へども、相構申儀も可有之哉と御猶豫被成置候處、相嗜不申、不届之至候。依之閉門被仰付候。

久世幸左衛門せがれ　幸助

右幸助儀（數江縫殿支）相續申儀も可有之哉と、其分に被成置候處、――可申付旨、幸助親幸左衛門へ可被申聞候。

右之趣夫々可被申渡候事。

戊戌十二月廿五日

右之通遂會議候旨、七月廿八日伺之處、元右衛門に逼塞、其外會議之通に十二月十五日被仰出、夫々十二月廿五日申渡。

是歳、前田重教、諸士・農吏を召してその演能を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

三月廿二日當春以來人持・頭分・定役・平侍・御大小將、追々三人或五人宛、中將樣御能於金谷御舞臺拜見被仰付。此後御馬廻・定番・組外等御歩並以上、且人持組子息二・三男迄頭分同斷、幷寺社方等迄追々拜見。

〔政隣記〕

十一月、前記三月廿二日記之通、於金谷御舞臺中將樣御能、平士嫡子・二三男幷舍弟等迄も追々拜見被仰付。

〔岡部舊記〕

中將樣御能被爲遊、御家中者勿論、御郡方之者共、安永七年九月より十月頃迄、十村之せがれ・新田裁許山廻父子、幷肝煎・組合頭・御扈・御鹽藏相見役・傳馬肝煎・舟肝煎・馬問屋・問改役・他領隣村改役・御鹽問屋・御肴肝煎・巢鷹捕揚人・御收納御藏番人・先年十村役等相勤候者之子孫等迄、追々拜見被仰付。三州御扶持人十村・平十村自身之者ども一統、同八年正月廿一日拜見被仰付。御場所者、於金谷御殿御白洲拜見被仰付候。自分十村共之儀、御能拜見後金谷御式臺より奥之御間において、御赤飯頂戴被仰付。

是歳、鳳至郡内保村の肝煎宗次郎の子、父に代りて入牢を請ひたるを賞しその罪を免ず。

〔郡方舊記〕

一、内保村氏神大王宮林之儀に付、惣持寺と申分に及び、公事場において御吟味有之。肝煎宗次郎儀入牢被仰付候處、元來病身に付悴市十郎代牢相願候に付、御郡奉行より公事場へ御達有之。孝心之趣御用番へ御達有之候處、親宗次郎儀出牢被仰付、御郡御奉行御預、せがれ市十郎儀及代牢旨、公事場より被仰渡候事。右は安永七年の事也。

安永八年

正月二日、前田治脩齊敬を養子とする願の許可せられたることを諸士に告ぐ。

〔政隣記〕

正月二日豊従江戸御使、御歩奉行御近習御用有澤才右衛門眞幹參着、直に登城、年寄中等に之御使勤之。七日發歸府。

〔政隣記〕

勝丸は前田宗辰

正月三日、昨日御用番横山求馬殿依御廻文、頭分以上布上下着五時登城、於御表式臺御帳に付、夫より柳之御間に列居之所、御年寄衆・御家老衆御列座、求馬殿左之通御演述。依之爲御祝詞、右登城之面々御年寄中等に廻勤有之。

舊臘十七日御老中方御連名依御奉書、翌十八日御登城被成候所、於御白書院御緣頬御老中方御列座、敎千代樣御儀御養子に被成、御嫡子に被成度段御願之通被仰出候旨、御用番松平右京大夫殿御演述被成、難有被思召候。此段何茂に可申聞旨、拙者共迄以御使札被仰下候事。

正月八日。前田齊敬松平氏を冒すことを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目に

敎千代樣御儀松平之御稱號、幷是以後之御振勝丸樣御同樣に候條、此段一統可被申談候事。

正月八日右觸、同組河地才記殿（于時御大小将御番頭也）より到來。

正月八日。陪臣沖武平次を斬りたる伊崎與一兵衛の處分に關して稟議す。

〔袖裏雜記〕

遠田三郎太夫組伊崎與一兵衛、舊臘二十八日七時頃勤より歸宅之節、於居屋敷横何者共不知脇指を拔切懸候付、主從仕、岡嶋與三左衛門居屋敷腰に而切留候。右之者小谷兵左衛門家來

この詮議の結末明ならず

神武平次ゟ申者之段、喜四兵左衛門罷出見分之上申聞、檢使公事場奉行ゟ申達候。與一兵衛二ヶ所手疵ヲ負候。途中之儀以之外騷、喧嘩之躰ニも相聞の、御横目藤岡平左衛門・池田三郎兵衛、喧嘩追掛者役佐久間與左衛門罷出、尤三郎太夫も卽刻罷出、同役小塚半右衛門も罷出候旨等三郎太夫紙面。右之趣兵左衛門よりも紙面出。武平次儀兼亂心有之躰ニ相聞え候由、檢使與力申聞候旨、其場ゟ指出候家來坪内藤覺ゟ申者申聞候。先以乍亂心、對御前恐入右之族迷惑仕候趣等紙面ニ、主水紙面を添出之。兵左衛門儀自分ニ指扣罷在可申哉之旨申聞候。如何可申渡候哉指圖有之候樣仕度由申聞之。依之准例享保七年三月十一日夜――宮崎彦長太夫――社又安永四年八月二十六日大隅守家來宮川吉郎兵衞――今般武平次儀ハ、不圖亂心之躰ニ而於途中切懸、與一兵衞ハ手疵を負、對御前恐不屆至極ニ候へども、兵左衞門ハ無如在心外之儀、是以後ニ樣之儀有之間敷ものにも無之、勿論其時之樣子ニ寄申儀ニ候へども、大音帶刀家來之例、右享保之例ニ准、兵左衛門儀自分ニ指扣罷在候ニは及申間敷ゟ何も遂僉議候。乍然大隅守家來之例も有之付、自分指扣に不及段は未申渡候。猶更被仰出次第之旨正月八日伺。

正月十三日 浪人澤阜忠平彫刻の技を以て御大工並に召抱へらる。

〔袖裏雜記〕

正月十三日、左之通御作事奉行へ申渡。

一、五人扶持　　御國出生浪人　澤阜忠平

右之者細工宜敷仕、彫物別而宜敷仕候付、御知行右之通被下之、御大工並に被召抱候。

右前廉御僉議等不見、江戸より被仰出に而申渡候也。

正月廿二日。御馬廻頭等諸士の困窮を救護する爲借知解除等の方法を講ぜんことを求む。

〔安永天明間御用留〕

當十七日御内談之品、別紙之通相調、今日御用番求馬殿、於御別席口上を添御達申候處、御同席御示談可被成旨被仰聞、御受取被成候。則扣相廻申候。御寫取御廻可被返下候、以上。

正月二十二日　　奥村滿兵衛

同役中様

御家中之人々年々勝手難澁至極仕候處、去暮など之爲躰甚之指支、漸越年仕、上納等も先手を合候様子に御座候故、當時飯米等にも必至と支申面々も御座候様子相聞え申候。人々隨分遂儉約、勝手之運びも不自由に御座候事故、おのづから無用之費は不仕筈に御座候得共、諸品高直にも相成候故歟、心外指つまり當惑仕候族御座候。尤數多之御家中に御座候故、不慎

心得違之面々も有之儀、是又申に不及儀ながら、品々を分候而者、人別に罷成候儀に御座候。乍然御難澁之處に而は、當時御救も不被仰付而ニ、御奉公之指障も出來可仕程に奉存候。乍然御難澁至極之御勝手振、一統奉恐察候上者、何かも可奉願時節にて無御座候事故、人々其覺悟仕候間、一人夫急之才覺なとにて不顧前後事ともにて彌勝手之痛に罷成、收納米も不殘宜輪に相成、並早才覺之手立も無之儀共數多御座候。一統之風俗に候へは右樣にも御聞及可被成事、此御評議之筋も可有御座候得共、御難儀之御時節御心外之御儀にも御座候。乍慮外私共にも奉察罷在候得共、何とぞ御家中成立之御吟味可有御座時節に候と、私共示合申候故、乍推參申上候。何分にも被成方も無御座御儀に御座候者、當時指上候御借知幷御城御造營方人足賃銀之儀、御用捨被成下候樣に仕度奉存候。御借知も最早八ヶ年に罷成、人足賃銀も十八ヶ年に相成申候處、爲指御責詰も無御座候得は、指上候臟も無御座儀に御座候。ヶ樣之儀に而も何とぞ被遣下候ニて、又當分安氣も可仕儀に御座候。御借知拆急に可被遣下御沙汰も無御座候者、責而當時之借銀・買掛銀等書上に被仰付、當時之御借知を右之方除知と成とも被仰付被下候はゝ、又當驅も相凌候間、以後之運びも出來可仕候。當時町・在之奢侈甚敷相聞え申候旁、書上抔被仰渡候者、ものも御縮方にも相成可申哉とも奉存候。御難澁之御樣子共奉承知なから、如此無是非申上候儀は、難默止時節と御推量被下、何分にも各別御詮議之上、いつれと

か御憐愍之御沙汰奉願度紙面を以申上候。御勝手方御主付ゟ可申上筋にも可有御座候得共、一通り之願ニ違、御政道之意味も含候而申上度儀に付、御表向ゟ相願候、以上。

正月二十二日　　同役連名　無判

御用番様

正月廿二日。徳川家治、前田治脩に鶴を贈る。

〔政隣記〕

正月二十二日、於江戸上使御使番小田切喜兵衛殿を以、御鷹之鶴御拜領。

正月廿五日。徳川家治、前田治脩が齊敬を世嗣としたるを以て祝儀を贈る。

〔三守御譜〕

正月廿五日、教千代様御儀、舊臘御養子等御願の通被爲蒙仰候爲御祝詞、上使御奏者井上河内守を以、被爲蒙上意、御卷物十・一種一荷、西丸よりも同人を以て一種一荷、重敎公へ一種一荷、西丸より一種、教千代公へも一種一荷、西丸より一種御拜領。

〔徳川實紀〕

正月廿五日、松平加賀守治脩に、奏者番井上河内守正之御使して、巻物十・一種一荷、大納言殿より一種一荷を賜ふ。これは去る冬治脩請ふまゝに、養父肥前守重教が子數千代利博をやしなひて、嗣子とせしを賀せらるゝなり。數千代利博には一種一荷、大納言殿より一種、肥前守重教にもおなじく賜はる。

利博は齊敬の前名

正月廿七日。高辻胤長の使者金澤に來り前田齊敬に近衛内前の女を婚約せしむべき希望を述ぶ。

宰相に高辻

[御實纂記]

高辻殿御家司川瀨彈正・奧田右衛門儀、爲御使己亥正月二十七日金澤大浦屋幸右衛門方迄參着。翌二十八日前田大炊宅迄罷越付候處、近衛准后様姫君數千代様へ御縁組之趣申述候付、同席中へ相達僉議之上、左之通二月四日に大炊宅へ兩人相招申述。

舊臘數千代殿加賀守殿養子に被致候段、近衛准后様被聞召候而、姫君幸君様と申御方、當年二歳被爲成候、右御方數千代殿に御縁組御懇望に付、御取持之儀從准后様廣橋儀同様を以、宰相様へ御賴被仰入候。依之各爲御使者被遣御口上、且從宰相様御書中之趣、委曲承知仕、則同席共へも相達候處、重き儀に付只今否之御請者難申上御座候。追而加賀守殿へも相達、從是可申上候。右之趣何分宜御取計被成被仰上候様仕度奉存候間、此段宰相様へ可然御申上

候樣仕度候事。

右之趣江戸に申上、重而如何可申遣哉之旨、二月二十二日伺之。

二月四日

正月廿八日。前田治脩登營して齊敬を世嗣とするの許可を得たることを謝す。

〔三守御譜〕

正月廿八日重教公より御禮之御獻上物以御使者被上。公も前日老中連名之奉書に依て廿八日御登城、於御白書院御禮被仰上、御懇之上意あり。數千代公にも御名代備後守樣を以て御禮被仰上。

二月六日。前田治脩、齊敬を世嗣としたるを以て徳川家治等の物を給ひたることを諸士に告ぐ。

〔政隣記〕

二月六日、昨日御用番大炊殿御廻文、今朝五時頭分以上布上下着用登城之所、於柳之間御年寄衆・御家老衆御列座、左之通御用番御演述。依之今明日之内御用番御宅に、登城之面々御

祝儀に罷出。

敎千代様御養子就被仰出候、前月二十五日上使御奏者番井上河内守殿を以、中將様・加賀守様・敎千代様ゟ從兩御丸品々御拜領被成、且又從中將様御禮之御獻上物、同二十八日以御使者首尾能被指上、加賀守様に者前日御老中方御連名依御奉書、同日御登城被成候所、於御白書院御禮被仰上、御目見之被蒙上意、敎千代様にも御名代備後守様を以御禮被仰上、重疊難有被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨被仰出候事。

右御弘之御拜領物左之通。

公方様より　　　御巻物白縮緬十・臺居干鯛一箱・御樽一荷

大納言様より　　干鯛一箱・御樽一荷

公方様より敎千代様ゟ　干鯛一箱・御樽一荷

大納言様より敎千代様ゟ　干鯛一箱

公方様より中將様ゟ　干鯛一箱・御樽一荷

大納言様より中將様ゟ　干鯛一箱

二月七日。前田齊敬病むを以て治脩より慰問の使者金澤に着す。

〔政隣記〕

二月七日、前月敎千代樣御滯之儀、加賀守樣達御聽、爲御見廻御近習御使番原田又右衛門ゟ早打御使被仰付、當日江戸發、今日七時頃到着御使相勤、八日朝發出、早打に而歸府。附、御醫師佐々正益ゟも早打被仰付、正月二十九日朝江戸發、今月三日晝參着之所御快然に付、四日朝發早打に而歸府。御合力醫藤井貞三ゟも早打被仰付、同日夜江戸發、今月四日朝參着。

二月十五日。前田齊敬の爲に侍醫を銓衡せしむ。

〔御裏雜記〕

敎千代樣御滯に付、被仰出之趣有之、左之通京・大阪詰人ゟ紙面遣之。

於京都堂上方を初町方にて、當時致發興候小兒醫師誰々に候哉、承合度儀有之候間、御用奉候町人大森三郎兵衛等を初、樣子存知又は承及候醫師有之候哉、被相尋可被申聞候。則被承合趣、別紙覺書に相調相越申候。尤急度事立候て被承合候儀にては無之候間、其心得候而、內々にて潜承合候樣可被相心得候。

一、右は指急候品に候間、無油斷夫々早速被申談、何こぞはやく被申越候樣にと存候、以上。

二月十五日　　前田大炊

江守助左衛門殿

氏家八郎兵衛殿

覺

一、當時京・大坂にて、堂上方等を初町方にて發興いたし候、醫學宜敷小兒醫師は誰々に候哉之事。

一、年齢・人品・行狀等之樣子承度候事。

一、右之内何方より被合力等も有之候哉之事。

一、學才之樣子之事。

一、若此方樣などへ被召抱儀なども有之候はゞ、同心可仕候哉。左候はゞ御充行は何程計に候はゞ同心可仕候哉。被召抱儀に候へば、尤金澤迄早速相越申儀に候。妻子も引越、金澤住居たるべき事。

但、先年大坂より中村故正伯被召抱候節は三百俵に候間、其心得を以承合被申候。

一、天脈等相診、禁裏之御用相勤候醫師は、被承合候に不及候事。

右之通大抵書記候間、此趣を以被了簡、不急度早速承合可被申越候事。

〔御用雜記〕

前に記す京都等小兒科之事、京都よりの返書に、當時發行之小兒科武川幸順・大津賀仲安・白

水田良・松下昌哲・兒玉立策・石川洞廣・小野元安・三宅宗達・井上玄廣・皆御國に引越は御斷申旨申候由等返書あり。

二月二十日。此頃所々に枳椇の核の如きものを降らす。

〔政隣記〕

二月二十日前頃より、所々に枳椇の核の如き物降、子共拾之。越中筋には猶多く降候由。

二月廿一日。前田重教、徳川家治より贈られたる樽肴を披露す。

〔政隣記〕

二月十九日、今度御拜領之御樽肴、明後二十一日於金谷御殿御披に付、掛り之頭分以上熨斗目、御小將等服紗小袖上下着用。頂戴人年寄衆・御家老衆・若年寄衆并定番頭・御用人・兩御近習頭・兩御廣式物頭、右夫々於御能拜見所頂戴被仰付候筈之旨、佐々木孫兵衛夫々に申談御作法書左之通。

二月二十一日今度御拜領之御樽肴、并敎千代樣御拜領之御樽肴御披に付御作法。

一、千鳥之御廊下に年寄中・御家老中・若年寄一所に並居、御能御前後之内御出、御目見被仰付御意可有御座候。

一、御能相濟御居間に被爲入、御熨斗上之、御拜領之御酒・御肴御頂戴可被遊候。

枳椇はけぽのなし

一、敷千代樣御頂戴之御酒・御肴、御廣式ゟ相廻可申候。

一、年寄中・御家老中・若年寄御見物所夫之於御間頂戴被仰付、戸田與一郎等內罷出御意可申述候。

但、御酒之內御近習頭御使、御意可申述候。

一、御兩殿樣御近習頭并見所ニ而頂戴之內、御近習頭御使御意可申述候。

一、定番頭・御用人・兩御廣式物頭。右御近習頭頂戴相濟候上於同所頂戴被仰付候。頂戴之內御近習頭御使御意可申述候。

一、御近習平士并新番頂戴就被仰付候、與御舞臺於御見所頂戴之事。

一、右御用ニ而相詰候御大小將御番頭・定番御馬廻御番頭・御横目・御臺所奉行ゟも頂戴被仰付候。御給事御步之事。

一、年寄中・御家老中・若年寄、給仕大小將之事。

一、頂戴之頭分以上、給事大小將之事。

一、頂戴之人々一統熨斗目・半上下之事。

一、一統平士以下服紗小袖・上下之事。

一、給事人何茂服紗小袖・上下之事。

一、二番目御能之内より段々頂戴被仰付候。

右御用主付津田平兵衛・池田読平・岡田助太夫・園田一兵衛・山本九郎太夫。

右御用に付相詰候人々、御大小將御番頭奥村彌左衛門・同御横目篠島平左衛門・御臺所奉行久田平右衛門。

一、御拜領之干鯛出之、御盃引落、御酒二篇、御吸物・干鯛戴出る。御八寸と引替、御銚子・御吸物盛替、二篇目御銚子御重引、三篇目御銚子、畢而御吸物引之。

右者年寄中等頂戴。定番頭以下御重引之代御取肴・卷鯣出之、八寸引之事。

但、御近習頭分以上三切に頂戴之事。

一、頂戴御禮戸田與一郎等に可申述候事。

一、加賀守樣に之御禮富田外記に可申述候事。

一、致千代樣に之御禮戸田與一郎等に可申述候事。

右は兩御近習頭之御禮。

一、御用に付罷出頂戴之御大小將御番頭等之御禮は、津田平兵衛・池田読平内請可申事。

一、平士頂戴人御禮は御膳奉行請可申事。

自分は津田政隣

二十一日、一昨日記之通今日於金谷御殿御拜領之御樽肴御披有之、自分儀も御給事御用申談

有之に付、卯刻右御殿ゟ出、午刻下ゟ歸候事。

二月廿一日。江戸在府の御大小將御番頭・同御横目を詰延とすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月廿一日、御大小將御番頭松原元右衞門・同御横目村田團助御在府詰之處、當御留守ゟ詰延被仰付候に付、左之覺書富田外記より被相渡候由。

當年御留守詰は、御番頭・御横目詰延之儀、今年は御格別御省略にて詰延被仰付候得共、今年切之儀に候。以來之例には相成不申候。此趣當年順番之御番頭・御横目ゟ、無急度申聞置候樣御申聞之由、赤井外記ゟ可申聞旨、御意に御座候事。

二月廿八日。皇子降誕を賀し奉る爲使者を金澤より發せしむ。

〔大梁公御年表〕

一、今年皇子御降誕御祝儀使者佐藤勘兵衞、二月廿八日發足。

二月廿八日。前田治脩江戸發駕の期を定め次いで之を延期す。

〔政隣記〕

是月は大盡なり

二月廿八日、當御歸國江戸御發駕三月十三日与被仰出、御留守詰之人々今月下旬迄に追々發足。附、大納言樣薨御に付御發駕相延。

二月晦日。徳川家基薨去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

二月二十四日大納言樣薨御、金澤ゑは同晦日に告來、普請・鳴物・諸殺生遠慮日數ハ追而可被仰渡旨、御用番前田大炊殿御廻狀出。

三月六日、御用番村井又兵衛殿より普請ハ三月七日迄、鳴物・諸殺生ハ同月十四日迄遠慮之旨、御廻狀出。

附、御法號孝恭院殿。

〔御馬廻頭手留〕

大納言樣御不例之所、御療養不被爲叶、去廿四日薨御之段今日申來候。普請・鳴物等遠慮之筈に候。日數之儀ハ追而可申渡候條、被得其意、組・支配之人々ゑ可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々ハ、其支配ゑも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月晦日　　前田大炊

御馬廻組頭中殿

大納言樣薨御に付、普請・鳴物等遠慮日數之儀、追而可申渡旨先達而相觸候通に候。普請は今七日迄、諸殺生・鳴物等は當十四日迄遠慮可仕事。

右之通組・支配之面々え可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月七日　　村井又兵衞

御馬廻組頭中殿

右とは德川家基の薨去の事に係る

三月二日。前田重教金澤より使者を發して德川家基の薨去を弔せしむ。

〔御年表〕

右に付、中將樣より御使前田還角、三月二日發足。

三月八日。前田重教諸藝に精しきものを召して之を觀る。

〔政隣記〕

一、三月八日揚弓能射候者、碁・將基宜き者金谷御殿え被召出御覽。筒井恒右衞門弟子之内玉川小源太・中村才記せがれ求馬之助、於御舞臺試合被仰付御覽、齋藤金平居合も御覽。

三月十一日。前田重教槍劍に秀でたるものにその技を演ぜしめ、又坊主に命じて乘馬せしむ。

〔政隣記〕

一、三月十一日金谷に鎗術關知太夫弟子岡道、劒術矢嶋金藏・半井五郎左衞門被爲召、於御舞臺夫々御覽。高畠權太夫居合も同斷。

一、同日於金谷御馬場、坊主共十八人に乘馬被仰付、何も一集に乘候樣被仰出候に付、無是非乘候處、十八人共初而之乘馬に乘候所、御馬十八疋之內には曲せ馬も有之駈出し、落馬或は畔落され、馬と馬喰合・畔合、多分落馬之由に候事。

三月二十日。前田重教能を演じ天德院及び寶圓寺の住僧をして觀覽せしむ。

〔政隣記〕

三月廿日、金谷御舞臺にて御能、天德院・寶圓寺に拜見被仰付。

三月廿二日。前田齊敬眼疾に罹る。

〔政隣記〕

三月廿二日、穀千代様頃日御腹氣御痛、御胎毒御差之故ニ云々。

三月廿四日。山科杏安を前田齊敬の侍醫と定む。

〔續漸録〕

前に記す小兒科之事、重而京都請人ニも山科一安次男杏安事を三月廿四日申越、則被爲召診被仰付候也。一安は禁裏御用勤今年七十九歳、嫡子信安も禁裏御用勤今度五十五歳、杏安は右御用未勤由也。今年四十三歳。一安祖父は山科理安法印、松雲院様御代被召抱、六百俵被下、御國に引越御用勤、御恩村も于今所持之由一安申候旨。

三月廿七日。前田重敎石川郡宮腰に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

三月二十七日、夕方從に宮腰筋ゟ中將様御鷹野。此末度々御鷹野有之。

春。山村に火を發すること多し。

〔政隣記〕

早春より深山に殘積雪無之、天氣多分快晴至極に而、陽氣甚しく候に付、深山之木々摺合火發出、山木燒、山火事度々有之候事。

四月二日。小松城番奥村中務京都に出奔す。

〔政隣記〕

四月十日、人持組、領二千六百五十石内千十石與力知、居宅小尻谷高、四十三歳、奥村河内守殿組奥村中務征央、當時小松御城番前月より在小松。之所、今月二日より出奔之躰に候得ば、隱密に尋候得共行衛不知に付、今日表立及御斷、家來七人尋に出。御城番之事故是非尋出之不申而は難叶事与云々。然處京都に罷在候に付、今月十七日連歸候處一類に御預也。

四月十二日奥村中務出奔躰に付、御城番同役前田主計今日發出罷越。

四月四日。前田重敎能を演じ天德院及び寶圓寺の雲水をして之を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

四月四日、寶圓寺天德院之黑衣僧不殘に、於金谷御舞臺中將樣御能拜見被仰付。

安永九年四月四日の條參照

四月十二日。前田重敎能を演じ桃雲寺の住僧をして之を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

四月十二日、金谷にて野田桃雲寺に御能拜見被仰付、取次御大小將、給事新番也。二汁五菜

御料理被下之。御番附左之通。

高　砂　御　鶴　榮　御　西王母　御　蜻　通　和田市郎兵衛

四月十三日。前田重教石川郡粟ヶ崎に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

四月十三日表過より粟ヶ崎邊御舟御鹿野、昔頭金谷に御歸殿。御餌柄鶉・鳥二十七有之。

四月十四日。前田治脩、德川家基の遺物を受く。

〔德川實紀〕

四月十四日、孝恭院殿遺留の品として、備前國康光の御さしそへを本城に奉る。また方々にも頒ちたまふ（中略）。松平加賀守治脩に大和國包俊の御差ぞへ云々。

〔政隣記〕

四月十四日、上使若御年寄酒井石見守殿を以、大納言様御遺物包俊之御小脇指御拜領、但箱入白鞘。

四月十六日。前田重教金澤郊外淺野筋及び大豆田筋に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

四月十六日辰之刻御出、淺野筋御放鷹、午刻御歸殿。夕方大豆田筋御放鷹。御餌柄都合鶉十五有之。

四月十八日。前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

四月十八日、上使御老中田沼主殿頭殿を以、御國許ゟ之御暇被仰出、御例之通御拜領物有之。

四月十九日。前田重教金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

四月十九日夕方大豆田口御放鷹、暮頃御歸殿。御餌柄鶺九・水鷄二・鶉一有之。

四月廿一日。前田治脩登營して就國の辭見す。

〔御年表〕

四月廿一日、御禮。

〔德川實紀〕

四月廿一日、臨時の朝會あり。松平加賀守治脩就封の暇給ふ。

四月廿二日。前田治脩江戸を發して就封の途に上る。

〔政隣記〕

四月廿二日。江戸御發駕、五月四日御歸城之筈に候處、六日御歸城に相成候事。

但、境より御泊相延、如本文。

四月廿五日。前田重教金澤大豆田筋及び淺野筋に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

四月廿五日五時過より大豆田御放鷹。御獲物鶉三鴨一。夕方重而淺野筋御放鷹、鶉六有之。

四月。寺庵にして施物・寄進を貪るものあるを戒む。

〔御郡典〕

近年達所寺庵且那之内死去有之節、取置之儀申越候得者、布施物等貪り、或は兼而申談置候寄進割符等致延引候杯与申立、右割符銀等不指出内者死亡畢取置旨申、數日及遲滯に、且那共致迷惑候族も有之。其外年忌等志候茶湯執行之儀も、右同様之趣。亦者平日仕職寺且那不和順等之儀を申懸、相賴候法會令遲滯候寺庵有之由、粗相聞候。都而施物并寄進物等は、且那共身元相應人々の可任志に筈之處、押而化同事に何より難題を申懸、金銀を貪り候儀、境界之本意を致忘却候仕形、不埒之至に候。然共此度者人別不相糺候。自今右躰之族無之様、一統可被申觸候。若以來心得違之寺庵有之候はゝ、御郡奉行より揃者共に及斷に候様、夫々申

談候條、屆於有之に者承糺候上嚴重可致沙汰事。

亥　四　月

近年遠所寺庵旦那共之內死去人有之節、取置之儀申談遣候得者、布施銀等を貪り、取置致延引、村方旦那共迷惑いたし候族有之候旨及承候に付、今般遠所寺庵觸頭に別紙之通申渡候。以來死亡取置等爲及遲滯に候族有之候にゞ、夫々可及屆旨、村役人共に御申渡置候樣に与存候。乍然寺庵に嚴重申渡候迚、村方之者共等旦那寺に對し麁略之仕形無之樣、兼而御申渡置候樣致度存候。畢竟寺院者、旦那共より之懇志を以致相續候事に候へば、等閑に成行候而者自然与及衰微に、甚迷惑いたし候儀に御座候。是等之趣、譯而御郡奉行等にも夫々御申渡置候樣致度候。則寺庵觸頭に申渡候覺書寫一通指進之申候、以上。

四　月　四　日　　　　　　横　山　又　五　郎

御　算　用　場

五月朔日。本日以降前田齊敬の爲城內に建つる幟を拜觀せしむ。

〔政隣記〕

四月廿五日、敎千代樣御のぼり七十間御門內に建候。來月朔日より五日迄御家中幷町方共男女見物、男子は十五歲以下、七十間御門より入、金谷御門に出候事。

右中村萬右衛門申聞候由、御横目中廻狀有之。

〔日記〕

覺

發千代樣御のぼり、七十間御門内に來月朔日より相建、男女見物被仰付候事。

但、男子は十五歳以下九歳之者迄相通候事。

一、右見物人當御門より入、金谷御門へ爲行拔候事。

一、御門下爲固足輕定番頭組足輕四人宛相勤、御場合紋羽織着用、其外御門内所々時宜指出候事。

一、見物人供之若黨・小者、御門内へ爲召連申間敷事。

但、草履取一人は相通可申事。

一、御のぼり相建候内は、御門大扉爲閉置可被申事。

但、御昇建除候而開可申事。

右之趣可被得其意候事。

四月廿七日

御横目所へ相渡候書抜。

御供は津田政隣

御覽は前田重敎

一、御のぼり相建候內、七十間御長屋御門幷金谷御門御番人布上下着用之事。
一、見物人道心・比丘尼躰之者、常躰之女に而も至而見苦敷風躰之者は、御門入申間敷候事。
一、見物人供之若黨・小者、七十間御門前に而殘、御門內爲召連申間敷事。
一、御のぼり朝六時過相建、七時仕廻可申事。
一、御兩殿樣初御出之節、前方御刻限相知候はゞ、見物人指留、御門內に入罷在候者門外ゐ可出。若急に御出之節、見物人御門外ゐ出候はゞ、可致混雜候條、居成作法能爲致蹲踞候事。

四　月

〔政隣記〕

五月二日、今日御供に付御式臺より御文庫口ゐ相廻候節、前月記に有之御昇り見物仕。埋御門前御堀端に建御甲二十七頭、御弓十五張矢共。御幟は桐に鳳凰幷吹貫、又大幡之上鶴大さ三間に二間計、以上三本。御堀端堀之上に御物見出來、是より御覽。

五月二日。前田重敎金澤郊外千日町附近に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

五月二日晴。千日町口御放鷹、晝頃御歸。御仰柄鷺一・鶴二・水鶏二、御筒にて鴨一。夕方も御鷹野之筈に候處、御供も揃候上御延引。

五月四日。前田重教金澤郊外七ヶ屋口に放鷹を行ふ。

[政隣記]

五月四日朝、七ヶ屋口御船御鷹野。御獲物鶴五・鵠一・水鶏一。夕方ゟ御出之筈に付、御供揃候所御延引被仰出。

五月六日。前田治脩金澤に着す。

[政隣記]

五月六日、前月二十二日江戸御發駕、昨夜津幡御泊、今朝六半時頃御歸城。御作法前々之通。江戸表ゟ之御使土坂兩左衛門御目見。其後於御年寄衆席、御例之通御羽織一・白紗綾二卷拜領、披露御大小將。其上に而追付發出。

五月九日。大聖寺侯前田利精金澤城に登る。

[政隣記]

五月九日八半時頃備後守様御登城、此方様御目柄に付御料理不被進、御作法別冊諸御作法書之内に有之候通に付略す。今般者御家督後初而之御歸邑御登城に付、御太刀馬代（先達而御使者山本新五左衛門持參、御次御奏者番出。）御持參。且金谷御殿ゟ御出、奧之口御式臺階上台中村萬右衛門・岡田助太夫・不

破和平罷出、岡七兵衞箱段之上に罷在御先立仕、加賀守樣御溜之間ゟ御誘引仕、御刀直、御大小將階上右之方戸際に罷在、御跡より指添。於御溜御茶等、御給事御大小將。於松之間中將樣御對顏有之。御往來共中村萬右衞門御先立仕、無程御歸、御送等如最前。且七十間柵木御門より爲御禮御立戻、御口上最前之御溜に而被仰置、追付御退出。御往來共御送迎等最前之通。但御先立等岡田助太夫。且御太刀馬代御持參二之御丸之通、先達而御使者持參。(御口上兩度共中村萬右衞門承之。)取次岡田助太夫。御退出後御旅宿ゟ御使者、中將樣より茂御使者津田平兵衞を以粕漬鯛被進之。

五月十三日。前田重教金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

五月十三日朝、大豆田口ゟ中將樣御鷹野。御獲柄鷂十・鶉三有之。夕方ゟ御出之筈に候所、於御途中御延引被仰出。

五月十六日。前田治脩、重教を二ノ丸御殿に招請し能を興行す。

〔太梁公御年表〕

一、五月十五日金谷御殿ゟ御前御招請。十六日二之御丸ゟ中將樣御招請、三汁九菜、翁立御能有之。

五月十六日。前田重教金澤郊外千日町附近に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

五月十六日夕、千日町ゟ上下通所々中將様御鷹野。御獲物鵠一・水鷄一・白鷺一・鶴二、御鐵炮にて青鷺一御打留。御異風武藤固兵衛（御露習勤由）ゟ青鷺被仰付候處、打留。

五月十九日。前田重教石川郡宮腰に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

五月十九日朝、宮腰筋ゟ中將様御鷹野。御囘獲鵠二・水鷄一有之。夕方御出御延引。

五月廿七日。前田重教幼年の男子の將棊を指す者及び女子の碁を圍む者を求む。

〔國事雜抄〕

九歳之男子將基指に申者。御家中並與力、寺社方年寄中・御家老中等家中之分。

右從中將様御尋に御座候旨、中村萬右衛門申聞候間、御組・御支配へ御達、且又御組之内裁許有之面々ゟも、不相洩候様申談、右之歳に而將基指て候者有之候はゝ、中村萬右衛門等へ各様ゟ直に御達可被成候、以上。

御　横　目

五月二十七日

十五歳以下之女子碁を打申者。平侍より與力・御歩、並寺社方年寄中等家中之分。

右從中將樣御尋に御座候旨、中村萬右衛門申聞候條、御組・御支配へ御達、且又御組等之内

甚許有之面々へも相達候樣御申談、右之歳に而碁を打候者有之候者、中村萬右衛門等へ各樣

より直に御達可被成候、以上。

五　月　　　　　　　御　横　目

六月四日。定番御歩三田村太右衛門、同組中尾平左衛門を傷く。

〔政隣記〕

六月四日黄昏、長町一番町・二番町之間御荷川際にて、定番御歩三田村太右衛門、同組中尾平

左衛門之右之手を肩先より切落し候所、平左衛門宅に罷歸、長町也。太右衛門は野口子助長町也。物見

下にて自殺す。依之檢使之御横目中等僉議には、太右衛門儀何之届も不申聞、其上未打留自

殺に付亂心に相成。平左衛門申分は、右之手被打落無詮方候に付、我宅に歸候段申聞候由。

精神慥成由之事。出役御大小將横目今井恒右衛門。

六月七日。前田重教金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

六月七日、中將樣今日額大豆田口御鷹野。御獲物無之。御鐵炮にて鷺一御打留。

六月廿三日。前田齊敬初めて金澤城二ノ丸に入る。

〔政隣記〕

六月二十三日、數千代樣今日始而松坂通二之御丸ゟ被爲入、御表式臺御敷掛之前に詫敷、其上に而御乳被召上、押付金谷ゟ御歸。御往來共更御式臺、御供之頭吉田清太夫（定番御馬廻御番頭 會所奉行兼帶）等、其外女中數多也。當番御大小將御番頭・御大小將、御歩之並下之方に列居、御歸之節表御式臺前御白洲ゟ出御踐。

六月廿五日。金澤高道より火を失す。

〔政隣記〕

六月二十五日晴、丑の八刻、高道木小家より出火、段々本通りゟ燒拔、卯の四刻鎭火。二百軒餘燒失、内百九十軒餘ハ不足家也。

七月六日。前田齊敬に對する作法に就いて令す。

〔政隣記〕

七月四日、數千代樣御支國前幷御出之內ゟ御出之節、勝丸樣御出之節之通相心得可申哉之

旨、横濱善右衛門を以奉伺候處、其節之通何も御玄關前ゟ不及罷出候。詰所々々に作法能可罷在候。御小將中は御式臺ゟ罷出可申候。御歩横目御玄關邊ゟ相廻、猶更作法等可申付旨同人を以被仰出候事。七月六日。

右御横目中より夫々申談。但觸出は無之。

七月十二日。前田治脩寶圓寺・天德院等に詣づ。

〔政隣記〕

七月十二日朝、寶圓寺・天德院且御廟・如來寺・野田惣御廟ゟ加賀守樣御參詣。

七月十三日。諸士の子弟等狼藉不行狀を以て處分せらる。

〔袖裏雜記〕

御家中之面々并町家婚儀整候砌、近隣より礫打、帶刀人も入交り、連夜不法之族有之躰。元來常々面躰をかくし異躰之風俗に而夜行仕、并群集之場所において狼藉仕者共有之、御締方差障候。帶刀人御家中之人々粗交名知候者も御座候。右狼藉等之儀、頭・支配人へ内々爲心得直に申談候儀も候へども、先相扣へ、輕き者は盜賊改方より咎め候。其響に候哉當春以來は靜に候。右狼藉不行狀等之人々、第一八嶋彥太郎・瓜生左守・神保又兵郎・廣田十五郎・廣田十太郎・第二片岡吉之助・村田仙助・日置傳兵衛・廣瀨茂太夫・水野五郎左衛門、第三奥泉幸助に

候て産太郎等人をかたらひ掛取悪行等仕躰は聞え不申候へども、夜行仕人に障り、或群集之場所等へ罷越、長屋等へ入込、何癖事やかましく申入、拂方等不仕、吉之助等も右に准じ候。幸助は不行跡に而、家内之賄方等も不宜、人をも悪敷道へ引入そこなひ候躰に相聞え候。右之外も悪敷者相聚え候へども、為指儀に而無之旨、當三月改方長屋多七郎御用番迄申聞。且衣服・帶并等華美、右裡打候儀間出も有之様にて、多七郎紙面出之。産太郎等名書も別紙出候付、衣服等之儀迄而相觸可然、産太郎等手會迄會議候處、三田村内匠與力水野故庄兵衛三男水野五郎左衛門、前田三九郎家来廣田十郎兵衛せがれ廣田十五郎等手前之儀、只今迄ケ様之者御断方申達候先例見當不申候。五郎左衛門は明和五年七月十二日夜寺島藏人門前に而、渡邊安兵衛小者を投殺害候節、總是不埒之趣に付、親庄兵衛へ被預置、不爲致外出様申渡置候へども、同八年大應院様廿五回御忌御大赦之砌御免被成候段申渡、別に覺書を以右彼是不埒之趣に付、庄兵衛代々に顯候儀に勿論、御家人、養子等に遣候儀も難成趣支配人へ申渡候。庄兵衛病死代未召抱候付、斷方申渡著無之候間、五郎左衛門又は十五郎等是以後振舞仕候はヾ、改方より爲候様申渡可然、産太郎等手前は左之通申渡可宜て遂會議候旨、六月十七日伺之處幸助は遠寒、其外伺之通て七月四日御意。同月十三日夫々申渡。

稲垣源太左衛門台

八島彦太郎

彦太郎儀、常々不行狀之段相聞え候、無息之儀愼申儀も可有之哉と御猶豫被成置候處、相嗜不申、不届之至候條、小松表江呼寄置、爲致外出不申樣に、彦太郎兄猪三郎江可被申渡候事。

小松御馬廻　八島猪三郎

右猪三郎弟彦太郎儀、常々不行狀之段相聞江候付、爲致外出不申樣に申渡候。御家中之人々子弟成立之儀、常々被仰出候趣も有之候へば、加異見相愼候樣可仕處、疎略之至に候。依之遠慮被仰付候條、此段可被申渡候事。

佐藤半五右衛門江

瓜生左守

左守儀、常々不行狀之段（彦太郎同文。）不届之至候條、爲致外出不申樣に、左守兄治兵衛へ可被申渡候。

定番御馬廻　瓜生治兵衛

右治兵衛弟――遠慮被仰付候條――。

金森忠太夫江

神保又五郎

又五郎儀、常々――。

定番御馬廻　神保幸左衛門

右幸左衛門次男又五郎――遠慮――。

篠原勘左衛門ゟ

片岡吉之助

吉之助儀――

御馬廻　片岡伊左衛門

右伊左衛門弟吉之助――遠慮――。

中川八郎右衛門ゟ

同組與力村田太郎右衛門厄介人

村田仙助

仙助儀――。

日置傳兵衛

傳兵衛儀――。

日置餘所左衛門

右餘所左衛門弟傳兵衛――遠慮――。

青木治左衞門に　　廣瀨儀左衞門

儀左衞門儀――。

廣瀨兵左衞門

右兵左衞門次男儀左衞門――遠慮――。

金森忠太夫に　　奥泉幸助

幸助儀常々不行狀之段被聞召候へども、相愼申儀も可有之哉と、御猶豫被成置候處、相嗜不申、不屆之至被思召。依之逼塞遠慮被仰付候條、此段可被申渡候事。

七月十五日」堀樗庵、前田重教の御醫師として召出さる。

〔補與雜記〕

七月十五日左之通可申渡旨被仰出。

一、五人扶持　　堀樗庵

御醫師被召出、御扶持方如此被下之、町奉行支配被仰付、奥田橘庵格に被仰付。

右中將樣御前被召、御用之品有之に付而被召出候也。

御用の品とは將棋の對手とせられしなり

前中納言は徳川重倫

〔袖裏雑記〕

一、瑞樹姫ひでよ様に御縁組申上候。此迄先例なし。

七月十八日。前田重教、その子斉敬を紀伊侯徳川重倫の女と婚約することを議す。

〔袖裏雑記〕

七月十八日、御用番御用有之御前へ被召候節、左之趣も常増御意之上、後剛以外記可被仰出旨御意之上、追付外記富田也持参也。

前中納言様御嫡様偏敷様御事、敦千代様へ御縁談被仰合度旨、中納言様より御内意之趣被仰進候由に而、委細従御前様中將様へ被仰遣候。御重縁之儀御大慶思召候付、加賀守様へ御内意被仰進候付、御承知被遊候段被仰遣候。御答は御前様より中納言様へ被仰進候様被成度段被仰進候事。

七　月

七月廿一日。藩の財政困難なるを以て江戸・京・大坂の詰人に詰延を命ず。

〔典制定〕

定番頭ゟ

當時御勝手方御難澁、渡り方指支に付、江戸・京・大坂等詰人、當秋交代に相向候もの來春迄詰延可申候。

右之趣得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。且又組等之内裁許――申渡候樣可被申聞候事。

亥七月　廿一日相渡

七月。前田重教及び治脩の齊敬と途上邂逅の際に於ける作法に關し令す。

〔政隣記〕

御兩殿樣於御途中敎千代樣ゟ御出合之節、御兩殿樣御行なりに御駕籠之戸明け申に不及候。

敎千代樣御駕籠は御行通り被遊候迄おろし置、御駕籠之戸明け申には不及候。

敎千代樣御駕籠に而無之節は、御抱申女中進退仕可罷在候。右之節御兩殿樣御供人は、進退仕罷通可申候。雨天に候得ば笠取可申候。中押より末々御供人者蹲踞可仕候。

敎千代樣御供人者、御兩殿樣御通行被遊候迄蹲踞可仕候。

右之通當分相心得候樣被仰出候事。

七　月

右御横目中より夫々申談有之、且藤姫樣御出合之節も右に准じ候趣、是又申談有之。

八月四日。前田利常の女龜鶴姫の百五十回忌法會を經王寺に營む。

〔大梁公御年表〕

一、八月四日、妙院殿百五十回御忌於經王寺御執行。

八月十九日。前田宗辰の生母淨珠院江戸兩國橋邊に行歩す。

〔政隣記〕

八月十九日、兩國橋邊に爲行歩、淨珠院樣四時前より被爲入、夜五時御歸。但兩國橋邊御借座敷に而、御近習之女中に身振聲色等被仰付、御供に出候御表向之人々も茂見物被仰付。

八月廿二日。前田齊敷の誕生祝を延期すべきことを議す。

〔續更雜記〕

數千代樣御誕生御祝之儀、先達而被仰出候處、彼是指つかへ御延引被成置候。今般御宮參被成候間、御宮參之節、御誕生・御養子御宮參被爲候而御祝可被仰付ゝ被思召候。尙更遂僉議可申上旨、八月十七日以御左衞門被仰出、宜敷議候處、御入用指支候付御延引之儀八月廿二日申上。

但、御入國御祝に至而重く候へとも、今以御延引に候間、右に可被准ゝ之趣等申上。

八月廿八日。馬廻組の士陸田孫六知行を召放さる。

〔政隣記〕

八月二十八日於金澤左之通被仰渡。

御知行被召放、十人扶持被下之、一門共之内ゟ引取、急度縮所ゟ入置候樣被仰出。

御馬廻組二百石　陸田孫六

付、去年亂心自害仕損候に依也。

八月。本年の秋縮に對し百姓等の異議を挾むべからざるを告ぐ。

〔岡部舊記〕

御郡之内海邊近き村々領之内、早物に虫付少々有之躰相聞候處、一統虫痛与申ならし、作躰宜敷所も同樣に百姓ども申觸候樣相聞、少々之虫付を彼是申觸候儀甚不埒之趣。其上早稻・中稻之儀ハ元來少分之歩數、每歲指出候帳面に而相顯居申儀。尤見立等之節茂相省申御定之儀ハ、一統承知之通りに候。然處頃日宜敷潤いたし、中稻等も行直、晩稻之儀ハ別而無難に在之躰に相聞え候條、秋縮之節不心得之百姓共彼是難澁を申立、秋縮相難申儀在之間敷儀も難計候條、當年之儀ハ何茂取治、甚心得も可有之儀に存候。此儀譯而不申含候而茂、油斷ハ在間敷事に候得共、當時御勝手甚御難澁之儀、何れも本承知罷在候儀に候間、別而粉骨を盡、

何分にも相働、早速秋縮請書付并皆済注進有之様相心得可申候。人々働之厚薄、當年等之取納に相顕申事に候間、随分油断無之様可相心得事に候。

右之趣拙者共存寄申渡候事。

子八月　　　　　　　　　　改作奉行

口郡・奥郡御扶持人・十村中

九月十八日。前田齊敬及びその妹藤姫金澤觀音院に宮參を行ふ。

〔政隣記〕

九月十一日、左之通於金澤御横目觸有之。

敷千代様等御宮參之節、辻々警固足輕指出置、參懸候者は十五歳以下は勿論、十五歳以上に而茂御道之障に不相成様、作法宜指置可申候。御道筋町方并外より參候者に而も、女并十五歳以下之男子は見世之内に指置可申候。且又御當日御城中御歩並以上服紗小袖・布上下着用、御廣式向平士以上熨斗目着用、猶又觀音院近邊に居宅有之坂中見通候家は、御社參中戸障子建置可申旨等、一つ書略記す。

〔政隣記〕

九月十八日金澤快天。今日敷千代様御宮參、御供人朝五時金谷御殿に相揃、同半時過同所御

廣式より松坂、夫より御風呂屋口切手御門通り、土橋御門堀端より、三之御丸河北御門、大手尾坂御門より中町、前田大炊殿横之事也、尾張町・橋場町・大橋、夫より觀音院江御社參。御歸り尾坂御門下迄最前之通、夫より奥村監物門前より修理谷坂、前田内藏助門前より奥村河内守宅江九時前被爲入、七時前御歸。御道筋内藏助前より柵御門江御入、石川御門より土橋江御出、夫より最前之通に而金谷江御歸被遊候。御供人二之御丸江御呼出、檜垣之御間二之間に而、御兩殿樣御意之趣左之通河内守殿演述、御目錄被渡之。

教千代樣今日御宮參御供等相勤、大儀に思召候。依而御目錄之通被下之候。

御意之趣同斷、御目錄は御用人渡之。

藤姫樣御供人江御意之趣拜領物右同斷。

藤姫樣御供揃五半時に而九時前御出、金谷御廣式より七十間御門、博勞町より尾張町、大橋より觀音院江御社參。御歸最前之通に而、西町口御門江御入、御宮御門・土橋御門より切手御門御通り、二之御丸御廣式江御立寄、八時頃金谷御廣式江御歸。

一、河内守宅御先詰西尾隼人・富田外記玄關敷附江出、門外町家前江河内守幷奥村主水本出迎。且從教千代樣河内守江御盃被下之、御腰物等拜領被仰付、家老・用人御通懸り之御目見被仰付。

數千代様より觀音院ゟ

白銀十枚・昆布一籠・御樽一荷、以上寶前ゟ御備。金百疋山王ゟ御詣御最花、觀音院へ紗綾二卷。

穆姫様より左之通

白銀三枚・行器一荷・御樽一荷、以上寶前ゟ。昆布一折・金百疋山王ゟ御參詣御最花。白銀二枚觀音院ゟ被下。

御札・守・洗米・神酒、觀音院より數千代様ゟ被上之。穆姫様ゟ茂同斷。

十月十七日。前田吉德の女結仙院雜司ヶ谷の會式に詣づ。

〔政隣記〕

十月十七日辰五刻結仙院様御出、雜司ヶ谷日蓮宗寺々會式飾物等爲御見物、酉二刻御歸。

十月。金澤城松坂門通行の規程を嚴守すへきことを命す。

〔日　記〕

付札、御横目ゟ

松坂御門往來之儀は、急切御用之節格別、常役所等ゟ罷出候節も、宅手寄に而致往來候人々も有之躰に相聞候。右御門往來之儀、近年御改も有之候處、猥に相通候儀に而者無之筈に候。

此度拙者共迄御噂之趣も有之候に付、改申渡候條、右御門致往來候人々嚴重相心得、御用之外は一切往來有之間敷候。是以後猥に往來有之人々可相糺候條、此段夫々可被申談候事。

十　月

十月。栗田十郎兵衛が惣髪を止めんとの五ケ年前の請願を許可す。

〔袖裏雜記〕

一、三輪藤兵衛等組栗田十郎兵衛、先年髪惣結願、願之通被仰付候處、其以來眼氣痛、其上衂血發し、折々寒之氣味も有之難儀に付、可成儀候はゞ月代剃申度旨、紙面を以申聞候。自由ヶ間敷、例も承及不申候へども無據儀、不苦候はゞ爲願申度旨藤兵衛等內談、先年前田故式部之例を引、式部願之趣とはちと相違に候へども、氣色に障、勤仕之懈怠にも相成申儀に候へば、無據聞え候間、爲願可然と僉議之趣、十月廿八日申上。安永四年

〔袖裏雜記〕

一、十月安永八年月切物之內、栗田十郎兵衛頭痛等有之、寶暦八年奉願髪惣結仕候所、眼氣痛、寒之氣味御座候付、さかやき剃申度願書付指出候旨、頭大野仁兵衛紙面。但安永四年重而さかやき剃申度願候付、別紙書拔之通奉伺、其後被仰出無御座候。願之趣自由ヶ間敷聞え申候へども、頭手前に而段々相糺、病氣之樣子相違も無之、無據相聞候間、願之通可被仰付儀と僉

議伺之處、何とも自由がましく聞え候へども、斷紙面之趣に候へば願之通に存候旨御加筆。

十月。能登四郡より猪・鹿驅逐の爲に要する火藥の下附を求む。

〔國事雜記〕

能州四郡共猪・鹿猥多に付、御貸鐵炮三十五挺之焔藥二百斤、安永七年相願候處、過分に付難被仰付旨被仰付、尋問不申候間、大概作物植付候而取入迄之焔藥大圖可書上旨、御郡所より被仰渡候に付、僉議之上左之通書上る。

大圖

御貸鐵炮數三十五挺

一、五萬四百放　三月より十月迄日數二百四十日、組一日一夜平均六放之圖り。

此焔藥目形六十五貫五百二十目。但一放し一匁三分つもり、斤にして三百二十七斤程。

亥十月　能州四郡

十一月十三日。後桃園天皇崩御の報江戸に達す。

〔政隣記〕

十一月九日主上崩御、江戸へは十三日に相知れ、同日大御目附衆より御書附を以、十七日迄萬端遠慮之由申來る。依之御横目所より小屋觸有之。但右に付火消方冊廻りは出不申事。

〔政隣記〕
十月十九日、圭上前御十一月九日与御弘有之候得共、實は今申刻也与追而承之。

十一月十三日。小幡右膳、禁止區域に於いて鳥構場を設けたるを以て戒飭せらる。

〔御馬廻頭手留〕
小幡勘太夫せがれ右膳儀、石川郡大桑村領之畠之内に有之候松木に、はりい木結付名札を付、鳥構場を切立置候に付、御鳥見之者見付、名札等下させ爲持遣候段及斷候。野田山峯よりこなたは御留場之儀、其上御郡奉行にも斷におよばす構場切立候段、不調法千萬之儀に候。急度相咎申候得共、鳥構候儀は見屆不申由に付、其儀には不及候條、以來之儀急度相心得候樣被申渡、叱置可被申渡候事。

昨日大音帶刀殿より御申談之儀有之候條、私儀可致登城旨依御紙面、則致登城候所、私組小幡勘太夫せがれ右膳儀、石川郡大桑村領之内畠中松木に鳥構場切立置候趣に付、別紙寫之通帶刀殿御渡に付、勘太夫幷せがれ右膳召招、別紙之趣急度申渡候。先以心得違之趣不調法之至に御座候所、重き御咎も無御座、於私忝儀に御座候。右爲御承知致廻狀候。御順達可被返下候、以上。

十一月十四日　　　　　　　　　　　　岡田主税

同役中様

十一月十六日。本郷邸前の棄兒を收容す。

〔政隣記〕

十一月十六日夜亥剋、本郷四丁目辻番向に當歳之男子捨有之、啼候聲聞え候に付、辻番人見付候段及案内、聞番今村五郎兵衞夫々取計之。右子は當分御邸内明小屋之内に指置之、御門外之賤婦御雇に而乳為呑、尤晝夜指副介抱、側に御横目・足輕等勤番、前々如斯之由也。

〔政隣記〕

十一月二十八日、前記十六日に有之捨子に金四兩被附、今日平尾村百姓ゟ被下候事。

十一月廿一日。後桃園天皇崩御し給へるを以て本日以降領内の殺生・普請・鳴物の停止を命ず。

〔御馬廻頭手留〕

主上去九日崩御に付、普請・鳴物御停止之儀、從公儀相達候御書附到來に付、諸殺生・普請・鳴物、今廿一日より廿五日迄日數五日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配之人々ゟ早速可

被申觸候。組等之内裁許有之面々は、其支配にも申渡候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月廿一日　　　　　　　奥村河内守

奥村織兵衞殿

十一月八日。前田治脩金澤より使を發して後桃園天皇の崩御を弔し奉らしむ。

〔政隣記〕

十二月八日、於金澤左之通被仰付。

御先手物頭　大屋武左衞門

主上崩御に付京都江之御使、今八日發足。

十二月九日。前田治脩及び重教、諒闇に就き使者を柳營に登らしむ。

〔政隣記〕

十二月九日、今度主上崩御に付從金澤公邊江御伺之御使者、江戸に而仕立に相成、御居宅御用人佐竹五兵衞、從中將樣之御使同斷今井佐太夫江今日被仰付。

十二月十六日。特に明年より五ヶ年間の儉約を命ず。

〔政隣記〕

十二月十六日於金澤、御用番主水殿より被仰渡儀有之由に而、四時登城候樣、以御紙面一役筆頭等之内一人宛御呼出に付、則寺社奉行より御細工奉行迄夫々一人宛、三十人餘罷出候所、於檜垣之御間主水殿左之被仰出之趣被仰渡、一役々々迄一通宛御渡之。

御勝手向御難澁至極之御樣子各見聞之通に候。當時甚御指支に付而者、段々相達御聽候所、御儉約之儀者是迄段々被仰付候得共、猶更此上御格式をも御改、來年より五ヶ年之間萬端嚴敷御儉約可被仰付候條、何茂致會得何分出情有之、僉議之趣且改付候儀等、無泥年寄中迄相達可申候。此段一統申聞候樣、拙者共迄被仰出候事。

亥十二月

十七日右同斷、御馬奉行等役者之人々も一役一人宛御呼出、御用番主水殿被仰渡之趣、昨十六日同樣之事。但五十九人出。

〔袖裏雜記〕

今般五ヶ年之内嚴敷御儉約就被仰付候、寶暦四年公儀へ御屆之振等御僉議に付しらべ候處、右御屆一巻御用所に記有之、則寫入御覽。此趣に候へば急度御屆と申にては無之樣子に見え、

此度も御出府之上、御向寄之御老中江御内談被遊候上、指支不申候はゞ御届被成可然与、二月十六日申上。右寶暦四年留之要は、同年十一月御儉約被仰付候儀、御用番へ無急度可被仰達と左衛門尉樣江御内談有之處、御私用迄之事に候へば、御用番へ御届却而如何敷もの、ヶ樣之例も候哉之旨に付、元祿年中御届有之候樣子申達候處、御届は先御延引可然。しかし御間柄を被除、御内々左衛門尉樣迄被仰達置候工面に候はゞ、御同席方へも御通達可有之哉之旨取次之者申候付、同月十三日左之御口上書を、河地平左衛門儀左衛門尉樣へ罷越、岡田儀兵衛へ申述。

拙者儀近年打續過分之物入多、其上度々領分不作に而、勝手必至と難澁仕候。依之私用之儀嚴敷當分致儉約候。此段御聞置被下候樣に致度御座候。

十一月

十二月廿一日。本日以降二ノ丸御殿に餅搗を行ふ。

〔政隣記〕

十二月廿一日より廿六日迄、連日於御臺所餅搗。其餘は町店にて被仰付。現米百石餘也。

十二月廿八日。儉約に付來年頭の諸儀式を簡單にすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十六日は安永九年

十二月廿八日於金澤、左之御覺書御用番圭水殿尙々へ御渡。

來年より五ヶ年之間嚴敷御儉約就被仰付候、御議初御規式御島臺出、御囃子被仰付、御吸物被仰付候儀者被差止、常之御三方御銚子御取肴に而、御盃幷御流被仰付。其節大夫等少々罷在、小謡被仰付候積りに候。御前江者御吸物差上候筈に候條、可得其意候事。

〔御觸留〕

付札、御横目江

來年より五ヶ年之間年頭之御規式等も御省略に付、一統長袴着用之儀相止可申候。且又年頭よ始都而御禮人、并披露役等之面々、熨斗目上下等時々相改に不及、有來之用辨可申候。御目通見苦敷儀者、御咎者無之旨被仰出候事。

十二月

右之趣頭・支配人江被相達、組・支配之人々江不相洩樣傳達有之候樣可被申達候事。

別紙之通夫々可申談旨、御用番圭水殿被仰聞候條、被成御承知、御同役御傳達、御組・支配へ申談可被成候。且又御組等之內拔許有之面々江、其支配に茂不相洩樣御達候樣御申談可被成候、以上。

十二月廿八日　御横目

御馬廻頭衆中

十二月晦日。儉約に付年頭暑寒等の書狀往復を省くべきことを告ぐ。

是月は小盡なり

〔御觸留〕

年頭幷暑寒之見廻等勤合候儀、親類・緣者幷頭・支配人等之外、當分指止可申事。

一、在江戶等之人々江、年始・暑寒等に書狀往返之儀茂、右に准じ可申事。

右之趣頭・支配人江被相達、組・支配之人々江不相洩傳達有之候樣可被申達候事。

十二月

別紙之通夫々可申談旨、御用番主水殿被仰聞候條――、以上。

十二月二十九日　　御横目

御馬廻頭衆中

十二月。前田重教明年初老に達するを以て私に之を祝す。

〔袖裏小錄〕

安永八年十二月中將樣御內輪に而御賀之御祝有之に付、年寄中等江被仰出無之候へ共、其樣子何も承知之事に付、恐悅申上可然哉之旨、御用番より戶田與一郎等迄被及內談候處、御兩殿樣共に恐悅申上可然旨。且又金谷御殿頭分一統熨斗目・布上下着用之段も与一郎より申越

候付、何も示談之上御兩殿樣共に恐悅申上可然候。服之儀は熨斗目には及間敷候。既に數千代樣御宮參之節も、御宮參御用懸りの人々は熨斗目着用に候得共、其外は年寄中迄初服紗小袖・布上下着用に而候。然も其節は表立し御祝故、一統御祝も御座候得共右之通に候。今日之御祝には表向も顯し不申事に候得ば、御宮參之時さへ右之通候間、服紗小袖・布上下着用に而可然与僉議相極、右之通相極候事。

當日不罷出面々は、以紙面御祝詞申上候事。

十二月。金澤に於いて追剝流行す。

〔政隣記〕

今暮金澤諸侍等勝手大指支之所、町方不調達至極、諸人大困窮。依之追剝等所々に徘徊之事。

但、金谷御門外松原に而油賣を〆殺し、所持之錢盡取、何者共不知候事。

安永九年

正月朔日。前田治脩金澤城に於いて年頭の賀を受け、諸士をして半上下を用ひしむ。

〔政隣記〕

元日舊臘被仰出候通に付、一統半上下に而登城御禮申上。二日夜御謡初、小謡迄被仰付候儀等如前記。四日御射初・御打初、拜領物者夫々例年之通有之。御雜煮・御吸物等者不被下。御乗初御馬奉行ゟ御上下拜領、御賄料理者不被下之。十九日御具足御鏡併直も、切併にいし添於御幸所頂戴、御雜煮・御吸物等は不被下。右之外は都而前々之通に候事。

正月朔日。前田治脩使者を柳營に派して太刀を獻上せしむ。

〔政隣記〕

江戸、元日朝微雪、巳刻より快晴、餘寒强。今朝年頭御祝詞御太刀御献上之御使者、御小將頭不破半藏素袍・侍烏帽子着用登城。老中・若年寄衆ゟも御太刀馬代被遣、御使御大小將。今日より三日迄如前々大御門開き有之。且今朝六半時頃、御小人四・五人手桶に水入持參、御玄關御門等之屋根ゟ下より杓に而水打。火除之咒与云々。

一、今日より三日迄御門番足輕黑絹羽織着用、幕番所ゟ與力相詰。且御門支配頭三輪藤兵衞鎗幷與力鎗之驗を附、都合四筋番所横に飾有之。

今日御年賀之御客衆等に二汁五菜塗木具御料理出。

正月二日。前田重教使者を柳營に派して太刀馬代を獻上す。

〔政隣記〕

正月二日快晴、年頭爲御祝詞、從中將樣御獻上之御太刀馬代、爲組頭代御歩頭前田彌助素袍・烏帽子着用、殿中江持參。

今日爲御年賀御田之御客衆江者、一汁五菜之御料理出。三日も同斷。

正月十三日。十村等を召して吉祝の儀を行ふ。

〔司農典〕

當年頭御規式之儀御省略被仰出候處、御吉祝之儀者不相替御料理頂戴被仰付、其上拙者共御次に被爲召、別紙之通忠村五郎左衛門を以被仰出候。御先例も無之儀に候處、結構之被仰出、於禰者共ニ難有儀に奉存候。何れ及入情ニ存候。猶更是以後心懸候而、農業等專勢子ニ入可申儀肝要に候者也。

子正月十三日　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

追而別紙寫遣之候條、當病等に而御城ゟ不罷出者江も、同役者共より可申聞者也。

付札、改作奉行ゟ

御郡方役之様子、去年も御收納方とく相收候段、達御聽に候。是以後十村共役筋猶更相心懸、入情可仕候。今日何れも罷出候に付、此段可申聞旨御聲之事。

正月十三日

〔岡部舊記〕

一、安永九年正月十三日御料理一番之者共頂戴相濟候後、御扶持人・十村者暫相殘り候樣、御改作御奉行衆被仰渡、則中御式臺之向御ろうかに溜居申候處、二番之者共御料理頂戴相濟候時分、右溜居申者五人充、御改作御奉行衆右溜御杉戸之邊に御入、御呼出被仰渡候者、去暮作方も無難、御郡方ゟ靜謐入情申趣御聴御意之趣有之段、御用部屋志村五郎左衛門殿より被仰渡難有御儀、猶更入情相勤候樣に被仰渡、難有儀に候。二番座之者共も右之通五人充御呼出被仰渡候旨、則御書立左之通。

一番とは去年收納皆濟第一番の十村組をいふ

書立は前に掲げたり

正月十四日。大小將大島門十郎、前田治脩の寶圓寺參詣に供奉したる途上急死す。

〔政隣記〕

正月十四日、例年之通御裝束にて金澤如來寺ゟ御參詣。御供人之内御籠役御大小將大嶋門十郎、御參詣之節於石引町案り倒れ候に付、御供御番頭河地才記、蘇香丹用候得共開き不申に付、太田屋久兵衛与申町家ゟ入、御横目池田三郎兵衛申談、押足輕附置、町役人等ゟ申渡、醫師呼に遣候樣申含、才記御供仕罷越、御歸之節下馬邊にて言上仕候所、於御途中度々才記

迄右門十郎様子御尋被遊候。且上下御供御小將頭江守平馬、如來寺より直に右町まて罷越候所、奥村河内守殿醫師岡嶋元隣等三・四人も參り居候に付、僉議之上獨參湯三度用候得共開不申、灸・針之功も無之に付、門十郎家來ゟ駕籠申遣歸宅。右等之趣御歸殿之上才記より委曲言上。其後毎度御尋に付、今以開不申旨御近習御用志村五郎左衞門より申上候得ば、急早速頭共ゟ渡爲持遣候樣御噂之由にて、左之覺書を以、參十一本御番頭當番篠原與兵衞ゟ五郎左衞門被相渡候（表向拜領之趣にては無之旨申聞）に付、與兵衞當座之御禮申上、御横目申談、――寄附足輕に以註狀爲持遣候所、門十郎伯父今村儀兵衞より難有仕合、追付用可申旨申越候に付、其段志村ゟ與兵衞より相達、いまた開不申段達御聽候所、參相用可宜候はゞ、各へ相談、早速爲持遣候樣にとの御噂に候。

右門十郎よりの御禮、頭ゟ申達候之上、表向拜領之趣に相成候故、本來御近習頭ゟ御小將頭由本久左衞門宅ゟ、無急度頼申之内罷越御禮有之可然段、志村此内談有之候事。但、同夜末期之御禮相濟候上病死之事。附、門十郎享年三十三。

〔袖裏雜記〕

亡養父門十郎知行四百石之半知。

一、二百石　　　門十郎養子　大島富五郎

門十郎儀、於御供先煩出相果、不便被思召候。依之末期相願置候、新三左衛門次男富五郎儀、嫡女に聟養子被仰付、富五郎幼少に候へども格別之趣を以如此被仰付。

正月十六日。百姓等の賭の諸勝負を爲すことを禁ず。

〔司農典〕

御郡方之者共、農隙不申内者農具拵等、定りたる所業之品春より可相勵儀者、前々より申渡候通改作御法に候處、御法度を忘れ賭之勝負をいたし、百姓・子弟・奉公人迄も風俗不宜者も有之躰に相聞え、自今村々嚴重遂穿鑿、賭之諸勝負仕候者於有之に者、十村手前に而致縮置可申斷候。若忽かせに致置候はゞ、組親可爲越度候事。

右之趣組々急度可申觸候事。

子正月十六日　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

正月十九日。鏡餅直の祝儀に毎年の例を省略す。

〔政隣記〕

正月十九日、例年江戸・金澤共御具足之御鏡餅直御祝に付、御雜煮・御吸物・御酒當番人等に可被下所、舊臘被仰出候五ヶ年中之御省略に付、東・北共御鏡直候切餅二切宛にのし鮑相添

被下之。頂戴人は是迄之通與斗目・上下着用之事。

正月廿二日。前田齊敬疾むを以て河北郡倶利伽羅長樂寺に命じて祈禱を行はしむ。

〔加賀古文書〕

穀千代樣御儀御胎毒御發候處、一兩日御勝不被遊、第一御乳に而御疳氣強、御乳も上兼候付、從御兩殿樣御祈禱被仰付候。依而御祈禱料白銀十枚被遣候條、被得其意、當廿四日御祈禱開白、二夜三日被致執行、廿六日結願之上、同廿七日朝四時頃迄御札等前々之通被相認、拙宅迄可被致持參候。依而飛脚を以申達候、以上。

正月廿二日　三田村内匠

倶利迦羅長樂寺

正月廿四日。諸役人の言上紙面に麁紙を用ふべきことを命ず。

〔御郡典〕

諸役人より言上紙面、幷年寄中御家老中等始に指出候料紙之儀、前々麁紙を用可申旨被仰出も有之候へ共、人々不敬にも存候哉、今以宜敷料紙を相用ひ候面々も有之候條、是以後者御

用さへ相辨候得ば宜候條、隨分麁紙を相用可申候。右之趣頭・支配人ゟ被相達、組 支配之人々ゟ不相洩樣傳達有之候樣可被申達候事。

正　月

別紙之通夫々可申談旨、御用番大隅守殿被仰聞候條、御承知被成、御組・御支配御申談可被成候。且亦御組等之內御裁許有之面々者、其支配ゟも不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

正　月　　　御　横　目

御馬廻頭衆中

〔政隣記〕

正月廿四日、金澤にて左之通御用番長殿被仰聞候由、御横目廻狀有之。

左の通りとは前掲のものをいふ

正月廿八日、郡方の眞宗道場にして本山に寺號の許可を出願するものあるを停めしむ。

〔御郡典〕

御郡方に罷在候東末寺附道場共、本山ゟ寺號相願度旨に而、末寺看坊共より添狀致呉候樣申出候得共、先年拙者共役所より、百姓躰之者寺號願出候共、從本山不被免候樣可申達置旨、右看坊共ゟ申渡置候に付、今般も右之趣道場共ゟ看坊より申聞候得共、近頃頻に願出候故、

只今ニ而者個者共於役所ニ指障之儀も有之間籠置之旨、本寺看坊より相尋候。村方道場寺號を受、致剃髪小庵ニ而も結構在候者、後年ニ至り候而者寺庵同事ニ相心得、紛敷仕形も致出来、御領方ニても指障ニ候儀も有之候間、兼而本山江も致通達置候様ニ、先年申渡置候躰ニ候。近年ニ礪波郡千木村ニ罷在候道場助右衛門不届之仕形有之、寺庵出入ニ及、両本願寺縣合ニ相成、甚面倒之取扱共も有之、道場共寺號願之儀彌取次不申様、看坊共ゟ今般申渡候ニ元来御郡奉行支配を受候者、寺號を乞請、法衣を着用罷在候儀有之間敷儀、本々紛敷趣出来いたし候基ニ候間、諸郡ニ罷在候道場共寺號を請候儀不仕様ニ、御郡奉行中より夫々申渡有之可然存候。道場共申談、大勢強而願出候得者、看坊共ゟ取捌も自然行届兼候族も可致出来と存候ニ付、旁申達候條、諸郡奉行中ゟ御申談候様致度存候、以上。

正月廿八日　　中川八郎右衛門

御算用場

別紙之通寺社奉行申聞候ニ付、写相達之候條、致得其意、各支配不相洩様厳重可被申渡候、以上。

二月　　御算用場

高澤平次右衛門殿

槻尾左膳殿

正月廿九日。諸士の遺書を提出する際先祖由緒一類附を添付し又は添付を要せざる場合の規程を改む。

〔日記〕

付札、定番頭に

御家中之人々遺書指上候時分、先祖由緒一類附相添指出候へ共、明和六年六月申渡候通、向後は實子又は養子願相濟候者相願候時者、遺書に頭・支配人致添書指上、先祖由緒一類附繼立候に不及候事。

但、先祖由緒一類附帳寫者、一冊只今迄之通指出可申事。

一、末期養子願之時は、遺書幷先祖由緒一類附相指出可申候。

末期養子とは臨終に際し養子を定むるものをいふ

一、養子願之時も、前々之通先祖由緒一類附相添可指出候事。

右之趣可被得其意、組・支配之人々にも可被申渡候事。

子正月廿九日

正月。郡方に於いて開發したる新田の免合を增徴する方法を講ずべきこ

とを命ず。

〔司農典〕

諸郡先年より開發之新田、年數相重り申儀に付、所に寄若田同樣免相附可申候、其上場所不宜所も年數相立候得者、今程者免高も附可申等之處、熟躰存程にも無之候。尤何れも而所有之間數候得共、自ら僉議不行屆樣に相見得候條、今年より何れも入情有之、早春より新田方每度相廻り、五月下旬頃一統相廻り、作躰之樣子得与相考、人々手帳等も記置、六月中御扶持人等僉議之節、右手帳を以得与遂僉議之上、縱重村方ゟも申談、人々見込を以今年より格別に增免有之樣、隨分心懸可相勤者也。

子正月　改作奉行

諸郡新田裁許中

右之通新田裁許へ申渡候條、得其意、其方共よりも村方ゟ申談、新田地等尚更得与遂見分、免相等之儀遂詮議可申者也。

正月　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月朔日。御馬廻頭等上書して儉約の勵行に關し更に嚴令を發せんことと

切は節

後して本のまゝ

を求む。

〔安永・天明間御用留〕

御勝手向御難澁至極に付、御儉約者是迄段々被仰付候へ共、尙更此上御格式をも御改當年より五ヶ年之間萬端嚴敷御儉約可被仰付旨、舊臘一統被仰出、當年頭御規式等格別之御差略御禮人着服迄も御用捨之儀被仰出候に付、一統信服仕候躰に相見得申候。乍然如此迄に而は、四民共以後信用難計奉存候。此切無程嚴敷被仰渡之趣も可有御座儀と、日々奉待候へ共、今以何之御沙汰も無御座候。尤御上之儀に付而者、種々御詮議とも御座候御様子に候へ者、右御様子を奉恐察、御家中之人々相改候儀、逐一に被仰渡を相待申にも不及儀に御座候得共、御大家之儀故歟、左様に者行屆不申候。勝手之貧福によつて、間近き元三之頃之心持とは段々違、何も仕候而も人々之物數寄は相止不申候。舊臘より當春迄之被仰渡、御上萬端之御差略を奉驚候砌は、餘程世上之風儀も宜御座候得共、右申上候通人々早春之心持とは違申様に御座候。則ゆるみ申儀と奉存候。只今迄度々被仰渡も御座候得共、此度程歸服仕候儀は無御座候。然處後して何等之御沙汰も無御座候而は無詮御儀、此所私共甚以殘念に奉存候。惣体着服等も俄に改候様なる體に而、必竟又是迄之通に可相成との心得候爲体に而者、御上を不憚次第に御座候。右に付而は可申上儀も品々可有御座候へ共、巨細に調候得者長篇に罷成候に

付、先何れにも爲重之義御渡御座候樣仕度儀奉存候に付、其段迄ヲ申上候、以上。

二月朔日　　原　五郎左衞門

遠田三郎太夫

小堀牛右衞門

富田九郎右衞門

篠原勘左衞門

潟原典膳

奧村諸兵衞

岡田主稅

御使御用　中村左兵衞

本多安房守様

二月八日。中村萬右衞門、高田善藏の爲に殺害せらる。

〔政隣記〕

二月八日於金谷御殿中村萬右衞門を高田善藏儀切殺候一件左之通。

中村萬右衞門、實名貞、知八百石、金谷御近習御用御用部屋勤仕、年四十九歲、定番頭並。

高田善藏、實名種褒、領五百石、大小將組にて金谷御表小將勤方、年二十三歲、不破半藏組、當時半藏在江戸に付江守平馬支配、尤勤仕向は金谷御表小將御番頭支配也。

高田善藏儀、今八日、晝九時より可罷越御番に候處、四時過金谷御殿へ出候に付、何故早く出候哉と仲間之御表小將中等尋候處、少御用之趣有之早く越候段及答、一通り如例物談抔致し、暫有之御用部屋ゟ罷越、戸田與一郎等列座之內中村萬右衛門へ向ひ、於別席得御意度と申述に付、萬右衛門何御用に候哉と出候處、蝶之御間廊下にて善藏儀脇指迄拔、萬右衛門之右腰脇より突貫き、其儘に乘懸り留めも半刺候處へ、萬右衛門之立聲にて戸田與一郎等馳付押へ候故、留めは全く不刺。于時與一郎如何之趣与詞を懸候處、善藏血刀鞘に納之、御表小將橫目由本九郎太夫趣意相尋候處、答不分明に付御表小將溜へ同道いたし罷越候。其內支配頭江守平馬、同組御大小將御番頭河地才記罷越趣意尋候處、勤柄之儀に付各樣ゟ難申述段相答。依之御表小將御番頭・同御橫目立合、段々意恨之趣尋有之、其譯不詳知。但、極密を以趣意申聞候共、又私儀致亂心候而萬右衛門を及切害候外に意恨無之、全亂心と迄申聞候共云々不詳。

一、二之御丸へは御奧小將橫目岡田助太夫罷越、高田善藏儀中村萬右衛門ゟ切懸喧嘩、亂心之体にも相聞え候段加賀守樣ゟ言上、并當番御大小將御番頭齋藤與兵衛ゟ申聞、暨御表小將

御番頭武田喜左衛門よりも御用有之候條、追付金谷御殿へ罷越候樣、役名當番附之來狀に付、其役羽田源太夫を以言上、當番與兵衛罷越、其外御小將頭神尾伊兵衛・山本久左衛門追々被罷越、支配頭江守・同組河地ゟも爲知有之に付、如前記早速罷越、其外御大小將御番頭井上勘助・堀左平・奥村彌左衛門、御大小將横目中追々罷越、江守平馬より御兩殿樣ゟ言上有之。

一、同日七時過入持組竹田五郎左衛門ゟ善藏御預之儀、御用番安房守殿より內々申來。無程年寄中等御逆印之紙面を以、御預之旨被仰渡候に付、用意最中之處ゟ、安房守殿並江守平馬よりも紙面を以、御殿之儀に候間靑時も早く請取人可差越旨申來候に付、承知之及答。扨又五郎左衛門頭村井又兵衛殿ゟ內々を以、重き御預人之事に候間、自身金谷御殿ゟ罷越受取可申哉与御尋申候處、不及其儀候段御指圖に付、暮合頃左之通家來爲請取指越之。用人長田治郎右衛門并給人組之人へ等四人は、麻等爲持、裝束羽織・材織　石帶。罷越候節は足駄、請取歸候節は草鞋。二・中小姓五人・足輕十人・小者三十人。尤日來其草鞋也。右用人・給人は於金谷御殿善藏入有之候屛風圍之內迄罷通り、江守平馬より用人等ゟ相渡之、請取之果而何茂迎之者警固いたし竹田宅ゟ引取。善藏駕籠脇燈灯箱本四張、其外は竹田紋付二十張。中小將より小者迄不殘陣笠着用、番頭六半時竹田宅ゟ到着。追付主人五郎左衛門對面挨拶之處、善藏特之外落付たる躰に而、今朝より於御殿御屛風圍之內に居候之違ひ、心も延び〱仕抔と申候由。

無程料理出候處、飯二椀・汁二度替、其外相應に快く食し終り、戌之刻頃指添之家來、御袴御取被成候樣にと申入候處、何時と尋候付、最早四時に可有之と答候得ば、左候得ば御殿向、且五郎左衛門殿にも御仕廻と存候間取可申とて、袴取候に付、家來たゝみ候得ば、是は慮外抔と挨拶有之。其後番人等に是へ近く被寄候得と申、色々之儀江戸咄抔も有之、平生躰にて何も替りたる樣子無之候由。且又同夜曉方迄に、善藏着用之衣服仕立出來候に付、則着替有之候。其節家來之者、下之帶被越候樣にと申事何とやらん申兼、白紙二枚指出候處、夫と心得下帶外し、右紙に包出し候由。將又急成事に付、二間四方之座敷有之に付、其處板にて縮り致し、其續に鷹部屋有之候を板にて圍ひ厠に致し候由。別に九尺二間之縮所前々より拵有之に付、翌九日是を致修覆用ひ候事。

一、善藏ゟ菓子等出候ても、一つならで給不申、必彼是貧着無之樣にと毎度挨拶有之候由。

一、八日夜ゟ俄の事故、鐵網懸候火鉢いまだ出來不致候處、餘寒も強く如何致哉と家來共申候處、五郎左衛門申候は、善藏樣躰聊無禮有間敷候間、常之火鉢出し候樣にと就指圖、火多く入出之候由。

一、中村萬右衛門實は當座に相果候得共、御殿之事故大切之趣を以、駕籠にて宅ゟ歸候處、從御兩殿樣御意を以人參等拜領被仰付、其上にて死去之弘有之。同人宅ゟ横山求馬殿・御大

小將横目石川義平懐趣、手疵御見分之上、求馬殿萬右衞門返言御見屆有之候。末期養子中村才記二男繁四郎也。

一、近藤小守ニ・と高田角太夫同悴は、善藏一類に付指扣被仰付候處、無程指扣御免。兩人共中將様御近習也。

一、八日四半時頃より七十間原九郎組鹽町組迄・金谷富田九郎右衞門組南御門御番にて、御番人無交代候事。

一、同日年寄中等御城御退出、夜及深更候事。

一、善藏同日例もよりは裝束拵兩刀も宜敷を用ひ、萬端之外亂心とは相見え不申、都而覚悟至極に付、御僉議之趣段々有之候由。且同日善藏居間に左之歌張置之。

思ひ立死出の旅路は安けれどはへその森の露ぞかなしき

かりそめにおもて白露も消かゝる草葉の陰に月を待らん

一、高田善藏實は亂心にて無之候得共、多分亂心と申事に相成候處、支配頭江守平馬強て張込に付、段々御僉議之上喧嘩に相極り候。同組御番頭河地才記第一張込申達之趣有之に付、江守氏も大に張込御達申趣に付、喧嘩と相極り候由也。

一、八日以來十四日迄、年寄中等登城朝六半時、御退出は夜に入。依之御前御膳下被下候由之事。

一、右かりそめにの歌は、八日朝何となく善藏妾へ與へ候處、何心なく貰置候由也。

一、今月上旬善藏菩提所大乘寺ゟ不時に參詣。且心祝有之由申立、一類中を招致饗候由。將又善藏儀、此度用候脇指舊臘餇屋茂助ゟ、ねた刄合させ置候由。八日より二・三日以前より、宅に在合候節には香を焚、掛物床に懸、何やらん書寫之躰、八日出前には床に具足飾り、如例香を焚置候事。

一、中村萬右衞門寺は野町淨土宗大蓮寺、十一日夜丑上刻葬送。但家財は妻等ゟ被下之、居屋敷は御取揚之段被仰渡有之。

一、當春善藏白山に捧候歌。但額に致し奉納之由也。

白山の雪の下草下もえのふかき心は神や知るらん。
思は知る人もなし。

右下之句兩說、何れとも不詳。

一、八日萬右衞門を突伏候後、武田喜左衞門等に懸合之節、兼而認置候一封を相渡上之候共いふ風說有之。

一、同日朝善藏於宅朝飯給候節、干鱈に酒を懸て給度旨申出、則其通に致し給候而、殊外風味勝れ候間母儀にも御風味候樣申候故、則母儀も給被見候處、元來替り候事無之に付其段被申候得ば、夫は御口のわざ成べしとて、母儀の給殘し被申候皿を取、自分に給見候て大に風

味宜敷候迚、妹にも給て見候樣被申候に付、則妹給被申候處、又善藏其殘りを給畢り候由。跡に考候處盃事之心持歟与云々。

一、去七日朝善藏儀、萬右衛門菩提所野町大蓮寺ゟ致參詣、和尙に逢候而、於私方無緣之者之爲に候間、明八日四時より九時迄之內御廻向被下候樣致度申述、金三兩渡歸申候由也。

一、善藏當春左之通詠歌有之、彼是一旦之事に而は無之与云々。

　うたかたの水の哀れをたゞよひつゝ夢路わくなき春の曙

一、善藏儀萬右衛門を突伏候事、最初亂心に決し候處、江守半馬張込に付重而僉議有之、喧嘩に成候段專世上に申候得共、第一ゟ同組御番頭河地才記强而張込有之故也。其謂相承候處、其節河地氏在宅無之、金谷ゟ餘程過し被罷出候。夫以前御小將頭中善藏に立會、段々僉議有之處、其身亂心に而前後末之儀一向覺無之段再三申聞に付、則江守氏より亂心之旨御兩殿樣ゟ言上相濟。然處ゟ河地罷付、一往善藏に對被申述候處、河地答も、それは承知難仕、其身よりも亂心与申出候而は亂心に而は有間敷、定而樣子可有之事に候。其上唯今對面樣子見察候處、却亂心之体無之候間、私立會今一往可遂僉議与被申候處、江守氏等被申候は、僉議一決之上亂心与言上相濟候儀、其儀難成与被申候得は、河地氏再答、いか樣に被仰聞候而も亂心に而は無之候。其上善藏儀私同組に候處、一應御示談も無之言上有之儀難得其意候。今一

往立會承候事難被成候ば、私より及言上、私迄立會可申旨等被申候處、御小將中何も尤に被存、左候ば拙者共より伺可申とて、江守氏より今一往僉議仕度旨言上之處、其通与被仰出候に付、其節は河地幷御横目迄屛風圍の中ゟ入、河地段々被尋候得共、如最前意恨等無之、私亂心仕前後覺無之旨善藏申述に付、其上を再三色々与問答有之。此時善藏も道理に服し、成程樣子有之候。併御近習向之事故、各樣ゟは難申述儀と申故、左候ば御表小將御番頭ゟ、委曲之樣子可被相達与申含之處、承知に付、河地氏より其趣通達有之、武田喜左衛門・坂井要人被罷越、則屛風圍ゟ入、餘程久しく對談有之。此御懷中の一封を取出し、武田を以上之候与世上風說有之候得共、いかゞ共不可量。于時河地右對談之内屛風の外に招有之、武田・坂井出候に付、河地申候は、私儀善藏同組之事に候間、不苦趣に候者、只今善藏より御聞之儀被仰聞候樣致度旨申述候處、武田等には、只今承候儀は御近習向之事に付難申述段兩人被申候に付、左候ば此方より其趣を以可致言上段被申入、扨江守氏等に向、右之巨細相達、毛頭亂心に而無之段演述に付、重而江守氏より言上有之、段々御僉議之上、喧嘩に決斷致し候事。

一、右善藏入有之屛風圍之處は、御式臺見付に廣き御間有之、年寄中溜之隣之間也。御出之節御供人溜に相成、御能之節右御舞臺に而被仰付候節は、役者溜或は樂屋にも相成候御間也。

一、中村萬右衛門風說不與千萬、難載筆紙趣共也。高田善藏風說は追日殊之外宜、忠臣と一

統の評判中平均候也。

一、今般之一件御會議には、執筆手懸一圓不相成旨被仰出有之、年寄衆さへ書詞被仰付候上、御用方承之取唆有之。依而實說之趣一向不相洩、世評之趣區々見察其也。

[於金谷御殿高田善蔵中村萬右衛門を及刄傷候節之一卷]

一、今八日四時過金谷御殿當番津田平兵衛より急使を以、急御用候條早速可罷出旨口上を以申越候に付、御歩罷出候處、勤方支配御大小將不破牛蔵組高田善蔵(禄擬作五百石)亂心之躰に而、中村萬右衛門及刄傷深手を爲負候旨、席に在合候石野源兵衛・伊藤津兵衛申聞候に付、先戸田與一郎等席より罷越候處、右席に與一郎・佐々木孫兵衛在合候に付、様子如何之首尾に候哉、善蔵・萬右衛門何方に罷在候哉と相尋候處、善蔵儀は山本九郎太夫(御大小將横目)より引渡申候旨に付、其首尾可承旨申入候處、則與一郎等席に與一郎・萬右衛門・孫兵衛三人在合候處、高田善蔵右席より罷越、平生に何之相替儀茂無之躰に而、萬右衛門より達申度旨に而、則萬右衛門罷越候處、無程萬右衛門聲にて人を呼候躰、常ならず松之御間御廊下之方に相聞え候に付、早速與一郎・孫兵衛罷越候處、右御廊下に而高田善蔵脇刺を以萬右衛門を及刄傷候に付、與一郎先善蔵を引分、脇刺をもぎ取、兩人に而善蔵を押留、善蔵儀山本九郎太夫より引渡候旨與一郎申聞候に付、善蔵縮之様子九郎太夫より相尋候處、惣溜之御間に縮致置、尤御歩并御歩横目茂指添、縮

方宜旨申聞候に付、善藏之躰如何に候哉喜左衞門・要人兩人に而九郎太夫に樣子相尋候處、亂心之躰に而萬右衞門を及刄傷、深手を爲負候躰に候。九郎太夫儀茂御殿に只今罷出候。右之躰に付、委敷樣子は不存旨九郎太夫申聞候に付、何れに茂善藏樣子見屆可申候間、右罷在候所に可罷越旨九郎太夫に申入、則喜左衞門・要人兩人善藏縮之内に罷越、如何之首尾に而萬右衞門及刄傷候哉、意趣等有之而之儀に候哉、有躰申聞候樣申入候處、聊意趣ヶ間敷儀は無御座候。亂心仕候而右之族と申聞候に付、亂心に而右之躰に候者、萬右衞門には限り申間敷儀に候。與一郎等三人罷在候内萬右衞門を呼立罷越候儀は、萬右衞門を可致殺害存寄に而呼立候哉与相尋候處、尤左樣に而御座候段申聞候に付、左候へば、一旦之儀に而は無之と相聞得候。疾より其心懸有之候哉如何与相尋候得者、兎角彼是申聞候儀無御座、亂心仕候旨申聞候に付、其身より亂心仕候与申聞候儀難心得候。其上今日は晝番之所、刻限も早く罷出候は、宅より其心掛有之候而罷出候儀に候哉与申入候處、尤宅より其心得に而罷出候旨申聞候に付、彌以容子難心得候。左候得ば意趣遺恨茂無之儀に、宅より其覺悟も有之間敷儀に候。此期に至り候而聊相包候儀は有之間鋪に候。たとへ自分之意趣等無之共、萬右衞門を致殺害候得ば、何と輙存寄申儀有之而之事与相聞得候。此所不包申聞候樣申入候處、何分相尋候共意趣ヶ間敷儀無御座候。不忠至極之儀迷惑に奉存候旨申聞候に付、左候はゞ今日萬右衞門致

殺害候ニハ、自分ニ茂其場ニ而相果候了簡ニ而候哉与相尋候處、其儀ハ御殿を憚申儀ニ付、其存寄ハ無御座候旨申聞候ニ付、最初より左樣之心付茂有之儀ニ候得ハ、萬右衛門を致殺害候儀ハ尙更御殿關可憚事ニ候旨申入候處、右之所亂心ニ而御座候旨先達而より申聞候趣、曾而亂心之躰与ハ不相聞え候。萬右衛門を可致殺害与存付候儀ハ、一旦之儀共不相聞候。其より之事ニ候哉相尋候處、其通ノ申聞候ニ付、左候得ハ尙更無心得儀ニ候。此期ニ至り何分之子細有之候而も不存申聞候樣申入候處、先達而申聞候通兎角可申聞趣無之、亂心仕候旨申聞候ニ付、身當頭茂罷出候ハヽ尙更紊可申ニ、先其分ニ仕置、登左衛門・要人兩人御前ゟ罷出、右之趣増奉達御聽、口上之趣前後相分り兼申儀茂御座候。先亂心与相聞え申候。尙更追々言上可仕旨申上、御前退き候。無程御大小將頭江守平馬（不破牛之丞光顯先祖）罷出候ニ付、善藏樣子申聞候處、山本九郎太夫於申達、平馬一人ニ而善藏手前承り申躰ニ候。右御前ニ者不罷出已前、善藏猶申在宅難計候ニ付、坂井五郎八・白江彥太夫・湯原平四郎・淺加求人罷出候樣申遣候處、坂井五郎八・豐嶋主作罷出候ニ付、善藏亂心之躰ニ而中村萬右衛門を及刄傷、深き手を爲負候。右ニ付善藏宅縮方之儀可被申談候。樣子により輪駕籠入用之儀も可有之候間、其用意可有之候。且又善藏手廻之品致封印置可被申候。勤向躰爲致他見品も有之候哉、後刻罷越相改可申旨申談、五郎八等相返候。右五郎八ゟ申談候後相向候人々ハ、御門より相返候樣申談、御殿ゟ者

罷出不申候。御大小將頭山本久左衞門・同御横目篠嶋平左衞門追々罷出候に付、江守平馬・山本久左衞門及篠嶋平左衞門・拙者共兩人・御表小將横目何茂相揃、今一往善藏手前可相尋旨申談、何茂縮之間ゟ罷越、段々樣子相尋、疾より萬右衞門を心懸候与申所甚難心得、此儀に付而容子も可有之候間、不包可申聞候。疾より心懸候与申儀に候得ば、大望存立、是迄士之道を相違、其品有之儀を申あらはさゞる時は、亂心之致方而已に相成、大望被存立候儀殘念千萬成事に候所、能々思慮候而、少に而も其品有之儀に候はゞ申聞候樣に色々相尋候得共、幾重に申聞候共毛頭可申聞儀無之、亂心仕不忠之至迷惑に奉存候旨申聞候に付、此上可尋樣も無之、先其分に而指置候處、御大小將頭神尾伊兵衞・同御番頭河地才記も罷出、餘程時刻も移事候間、善藏氣合も落付可申候間、右兼而より心懸候与申所甚難打捨儀に付、何茂申談、今一往承可申旨、平馬より御用番安房守殿ゟ相達候處、承候而可宜旨に付、神尾伊兵衞・山本久左衞門・江守平馬・河地才記・拙者共兩人・御表小將横目園田市兵衞等・御大小將横目篠嶋平左衞門、何茂相揃、善藏縮之所ゟ罷越、種々相尋候得共、一向申聞候筋無之旨申聞候に付、人多に而難申聞趣に候はゞ、平馬及才記・平左衞門迄ゟなりとも可申聞筋無之候哉与平馬申入候處、左樣之趣に候得ば、先刻平馬一人に而承り候時分可申入候得共、何分相尋候而も申聞候儀無之旨に付、左候はゞ喜左衞門・要人兩人に而可承候間、申聞候筋無之哉与申入候處、左

候ニ付拙者共両人ゟ可申聞旨ニ付、表向之人々相退、拙者共両人ニ御横目立合可申旨申入候處、御横目茂立合不申候様仕度旨申聞候ニ付、御横目茂立合不申承候處、御居間御机之上ゟ一封指上置候旨申聞候ニ付、左候得ハ御尋も存付候儀有之右之首尾ニ候哉与相尋候處、其通りニ候旨申聞候。然處可奉達御内意与両人共御次ゟ罷起候處、拙者共両人之内被爲召候様與一郎申聞、先喜左衛門御前ゟ罷出候處、段々御意之趣も有之、喜左衛門よりハ御請申上候趣茂有之、右一封指上置候与申聞候儀奉達御内意候。喜左衛門退キ要人被爲召御意有之、御詩申上候趣も有之候。右一封指上置候与申聞候趣ニハ、私共両人切ニ而、身當姉ゟも其品不申聞、一言申聞候趣有之与計申入置候旨申上候處、尤其通与被仰出候。右ニ付加賀守様ゟハ右之趣委細可申上哉与相伺候處、尤委細申上候様御意被遊、尤封じ物ニ而上候哉与御意ニ付、入組申儀ニ付満筆相分兼申趣も可有御座与御意ニ付、入組申儀ニ付満筆相分兼申趣も可有御座与奉存候間、御目見本ニ可申上哉与奉存候旨申上候處、其通可宜旨被仰出候。且又右一言申聞候趣、身當類ニも露申聞候儀ニ御座候得ハ、右迄ゟ御用番ゟ其段相届申儀ニ御座候間、私共よりも御用番ゟハ一言申聞候趣有之候与計相届可申与奉存候旨申上候處、其通与被仰出候事。

〔高田質蔵一件〕

安永九年子二月八日朝四時過、於金谷御殿泰雲院様御近習勤仕御表小將高田善藏儀、定番頭並御用部屋兼帶中村萬右衞門ゟ及刄傷候趣左之通。

一、金谷御殿御近習頭より高田善藏一類中ゟ紙面。

高田善藏儀於御殿致亂心候條、早速金谷ゟ可被罷出候、以上。

二月八日　　武田喜左衞門

坂井要人

何之誰殿　一類一人充之紙面也。

一、一類共罷出候處、右紙面之通り御近習頭中被申聞、猶更重而可申入旨に而何茂罷歸候。

一、夜に入候而御大小將御番頭河地才記、善藏宅ゟ罷越、從御殿直に竹田五郎左衞門ゟ御預被成候段被申聞。且又善藏居間手廻道具共相改可申儀に付、御番頭兩人可罷越旨被申聞、夫々手廻書物等之類共外取散し候品々、一類共申談風呂敷に包。一類白江多太夫致合封置候處、無程御番頭武田喜左衞門・坂井要人被罷越、手廻道具共相改、御番勤方書物に要人持參被罷歸候。其砌河地才記に座敷に被相扣、右兩人被罷歸候處、一類共之内兩人江守平馬方ゟ可罷越旨、河地才記被申聞、則一類二人坂井五郎八・白江多太夫、平馬宅ゟ罷越、御請申上候。

高田善藏儀、金谷於御殿中村萬右衞門ゟ及刄傷、深手爲負候に付、竹田五郎左衞門ゟ御預被

成、爲致儀不相叶之樣被仰渡、奉得其意候、以上。

子二月八日　　白江多太夫

坂井五郎八

江守平馬殿

二月八日。前田重教、金谷御殿に於ける能を延期す。

〔政隣記〕

今月八日表於金谷御殿御能有之筈に候得共、右之就騷動御延引、及夜中御能御稽古有之九日・十日に御能一番宛、十一日より是迄之通、不相替御能等被仰付、御自身にも被遊候事。

二月十二日。領國等の繪圖修補の件に關して通牒す。

〔國事雜抄〕

御領國等御繪圖及大破候に付、御究申上、去年七月より手入爲仕候。然處右出來之分御修復爲致度候間、當七月十七日より寄日每、町表具師一人充、去年之通指出候樣、町奉行へ被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

二月十二日　　小堀牛右衞門

前田土佐守樣

二月十四日。高田善藏明日切腹を命ぜらるべきを以てその遺體の受取方に關し一類に通牒す。

〔高田善藏一件〕

竹田五郎左衛門より紙面左之通。

以紙面申進候。然ば高田善藏殿、明十五日夕八時過切腹被仰付候に付、御遺躰御身近御一類中に相渡申筈に、江守平馬遂示談申候。依而右刻限に、拙宅近邊に御心易方御座候にて御越被成、檢使役中被罷歸次第御問合被成、拙宅に御越可被下候。其節御遺躰御渡可申候。右得御意度如斯御座候、以上。

尙々爲念申進候。拙者宅に御越之儀御遲滯無之樣に致度御座候。此儀御內々を以得御意候。左樣御心得可被成候、以上。

二月十四日　竹田五郎左衛門

高田善藏樣　御一類中樣

切封上書

御紙面拜見仕候。然者高田善藏儀、明十五日夕八時過切腹就被仰付候、遺躰身近親類共に御渡可被成候樣、江守平馬殿等被遂御示談候。依之右刻限御宅御近邊心易方に罷越居申、檢使

案被罷歸次第、承合御宅へ罷越可申旨御紙面之趣、委曲承知仕候。先達而河地才記殿より被申談候趣ニ、身近一類共之内御宅迄罷越相待罷在候様に被申談候に付、左様ニ相心得罷在候ところ、只今被仰聞候趣、少し相違之儀に御座候間、御自分様より才記殿ゟ被仰入候様仕度奉存候。乍而御指圖無御座候得に、御宅迄右類限に罷出可申心得に罷在申候。右爲御報如斯に御座候、以上。

二月十四日　白江多太夫
　　　　　　坂井五郎八

竹田五郎左衛門様

猶々御自分ゟ以被仰聞候御趣意之趣承知仕候、以上。

明十五日高田善藏殿御遺骸御受取人、御一類之内御請人竹田五郎左衛門方へ御越被成候様ニ、先頭後藤又助殿へ御意候處、御自分様・坂井五郎八殿御越之旨御申聞被成候處、五郎八殿御不行歩に付爲代高原平四郎殿御越之旨、御案内紙面之趣致承知候。平馬殿へ相達可申候、以上。

二月十四日　河内才記

白江多太夫様

明十五日善藏殿御遺骸御受取に付、竹田五郎左衛門より使者を以各樣御返書被指越候。右之通被仰越候得共、檢使相濟不申已前御越被成候而は、間狹故指支候間、檢使退出以後御越被成候樣致度旨申越候。左候へば、先刻後藤又助殿へ申談候通に而は指支候躰に御座候間、五郎左衛門邊へ御越、檢使退出之儀御聞合、追付御向可被成候。若五郎左衛門近所へ御立寄之處も無御座候にて、付入被成、檢使退出之儀御承知之上、善藏殿宅より直に御向可被成候。尤右之趣江守平馬殿へも相達置申候。右御報如斯に御座候、以上。

二月十四日　　河地才記

白江多太夫樣

坂井五郎八樣

二月十五日。高田善藏切腹を命ぜらる。

〔政隣記〕

一、同月十三日於御席、御用番安房守殿江守平馬に左之紙面御渡之。

不破牛藏組　高田善藏

善藏儀、當八日於金谷御殿、中村萬右衛門を脇指を以て突伏候處、萬右衛門右手疵にて依相果候、切腹被仰付。

二月十五日

以上

高田莫盧儀、明後十五日及暮切腹被仰付候間、被得其意、爲檢使御手前並同役之内一人被申談、御番頭一人同道、竹田五郎左衛門宅え可被相越候。其節武田喜左衛門・坂井要人、且關田一兵衛・山本九郎太夫内一人、御横目も兩人罷出候様に申渡候、以上。

庚子二月十三日

本多安房守 印
篠原織部 印
西尾隼人 印
大音帯刀 印
江戸 伴八矢
前田圖書 印
本多刑部 印
前田大炊 印
横山求馬 印
村井又兵衛殿

奥村主水　印
奥村河内守　印
前田土佐守　印
長大隅守　印

江守平馬殿

一、同日竹田五郎左衛門御呼出登城之處、明後十五日暮合頃高田善藏切腹被仰付候旨被仰出候段、安房守被仰渡。

一、同十四日右之人々御呼出、善藏家財母江被下、遺骸一類共江被下之候。且明日暮合頃切腹を被仰出候得共、明日八半時切腹被仰付候。將又右切腹前、善藏江御内御用有之候間、武田喜左衛門・坂井要人江其儀被仰付候。依之五郎左衛門方爲間繕、御歩横目兩人・御横目足輕兩人被遣候段、御用番被仰渡候事。

但、五郎左衛門其夜右落着之儀善藏江相咄候處、難有仕合と大悦にて、夫より彌機嫌克相見え候由之事。

一、同十五日朝二汁五菜之魚類等料理之上、五郎左衛門・善藏致盃事、餘程有之湯漬飯出之。畢而切腹之節着用之裝束出之候。右小袖・上下・足袋等迄、五郎左衛門先祖市三郎拜領之香芝

舟にて、側より爲致介錯候。書院前日被仰渡有之候通、坂井要人・武田喜左衛門、并御歩横目・御横目是迄來、九半時より八時迄武田・坂井義藏ゟ言宗御用對談有之。右相濟、武田・坂井直に被詰候。八時頃江守平馬・神尾伊兵衛・河地才記、御表小將横目山本九郎太夫、御大小將横目今井恒左衛門・石川茂平、並御歩横目吉江武左衛門・近藤源五郎、並附御歩横目山崎孫太夫・高桜宅右衛門罷越候上、縁之間より義藏呼出、一昨日被仰出御書立之趣平馬申渡候處、結構に被仰付難有仕合之旨御請申述、縁之間ゟ退去。于時書院向、二間に三間之假屋白幕打有之、白縁疊翠に敷、其上に白布、其上に藍を敷、義藏白表・淺黄上下着に而其上に着座之處、木具三方に茶碗に水を入持出候處、義藏取之水二口呑之。畢而引之、重而三方に九寸五分之短刀を載出候處、檢使之面々ゟ一禮有之、介錯人ゟも挨拶有之候而、右九寸五分を取候而、左の腹より突立、右之方に押廻し候處にて介錯者を打、引上、檢使之面々ゟ爲見候而白幕下し候。無異儀切腹有之候段、河地才記直に登城、御用部屋横濱善左衛門を以達御聽候。江守平馬は直に御用番安房守殿御宅ゟ爲案内罷越、夫より二之御丸金谷御殿ゟも罷越言上候事。

但、介錯・介添・給仕白衣・淺黄上下着用。且又介錯刀之銘國兼定、九寸五分銘備前則光。

一、竹田五郎左衛門家來、役附左之通り。介錯給人組吉村安右衛門、介添給人組長田直右衛

門、誘人用人長田次郎左衞門。
一、善藏辭世之歌但十五日朝詠。
茂り生ふ一村松の春の雪消えても千代のかげにぞありける
一、同日五郎左衞門より善藏に、先祖市三郎拜領之伽羅芝船一寸宛二切置之、善藏戴之而左の袂に納之。介錯人等も左之發句送候處、是又左之袂に納、尤夫々挨拶有之。

介錯人吉村　彼岸に咲かるゝ梅の名殘かな　蕉　也

介添人長田　花は根に歸るぞゆかし春の風　亂　糸

誘引人長田　雁金の見ぬ世にかへる名殘哉　景　雄

一、右備前則光之九寸五歩刄を向に成す。是禮也と云々。
一、介錯之刀關兼定は、竹田先祖市三郎拜領之內、着込・燭臺と二振之名刀也。着込といふは鎧共に切れ、燭臺といふは燭臺共に切れし例し有之に付、金象眼を以夫々右名目を入有之候。先年竹田家に杉本九十郎御預之上切腹被仰付候節は、介錯刀燭臺也。此度は右着込に而候也。然るに介錯人手鈍に候哉、切れ味不宜由云々。
一、遺骸は一類白江多太夫・湯原平四郎請取に罷越。其節五郎左衞門對面、改之被請取候樣會釋之處、不及其儀段答へ候處、再三之會釋に付改之。其節多太夫儀右遺骸に向ひ、善藏殿此

度御大學被建據重之中に病致し候。其跡妹勝に有之候由也。扨直に菩提所金地山大乘寺ぇ送
之、葬式百僧之取計。法名左之通。衝讃院義岸立節居士。
一、五郎左衛門翌十六日大乘寺に參詣、和尙に逢、祠堂金寄附す。
一、善藏切腹屋の跡に櫻を爲植候。
一、善藏切腹之体殊之外剛謙丈夫氣色、九寸五分之刄を押戴、左之腹より突込、右之方ぇ切
廻し候處、臍の邊にて懸り留り候に付引拔、重而右之脇腹ぇ突立左之方に切廻し、首尾能一
文字に切之。天晴見事成爲躰之云々。
一、切腹前之湯漬飯白木具にて出之。且又事之節之白木三方くゝり方無之。一切昆布出之。且
又白洲詰給人等布上下等着用。尤帶刀帶し候事。
一、白幕之外に善藏紋付幕打候等にも示談有之候得共相止。
一、善藏切腹座に着之上、土器三方・銚子・肴三方・數子・香物三切殺之由候等に用意有之候得共
相止。
一、善藏遺書一箱に御預之段被仰出有之。
一、同人心圖有之由にて、春來毎朝冰を覆り候由。
一、加州寺地山大乘寺にて、善藏爲弔金谷御近習頭中申談法會有之。并御表小將中等、同勤

仕等之面々も申談、於同寺弔法會執行有之。御表小將等は尤も可有之事に候得共、頭中之法事執行如何成謂れ候哉不解。萬右衞門弔は可有之處、無左して善藏法事被致候儀、世評之通忠臣に無違故歟与專風說之事。

一、善藏儀竹田に御預之內、切腹を致候害事は最早間有間敷如何と人々に問、大に待候躰に候得共、私に爲知候事も難成に付、多分十五日に決し候節、茶碗之內に多分十五日切腹与書記、茶を入與へ候處、大悅之由也。

一、高田一件取畤、江守平馬萬端宜候。併一事不出來は、介錯人首を取揚江守等に爲見候處、挨拶無之に付久々取捨有之、不調子に有之候由。其內幕下し候樣竹田指圖有之候由。但見屆候而會釋可有之古禮也。其詞次第幕下し候式与云々。

一、中村・高田家財賣拂候處、中村家財は望人少く下料至極、高田家財は望人夥敷高料至極に相成候由之事。

一、善藏誕生、寶曆八年四月八日也。出生之時臍の緒色白し。取揚婆申は、如斯臍之緒の小兒は、成長之後重職与成歟又は美質成由及承候旨云々。

一、同人平生居間に、御旗本隱居加藤文麗翁筆畫雨笠の畫讃に。
上見ては及ばぬ事の多かりき笠着てくらせ己が心に

右懸物を床に懸置日夜之處、八日朝には右を外し、猿猴が月を摑む躰を畫きたる懸物を懸置し由也。

一、萬右衞門近年之借銀六十貫目餘有之、且三月十五日には君上御成有之筈之由に而、春來用意普請等有之旨也。

一、青藏去冬於金谷御殿、齋藤金平に切腹之致方作法委細に尋被申候由之事。

一、高田導師大乘寺當住畔苗和尚香偈。

　全百年齡豈久長。輕裘肥馬路傍裕。義岸衞達大夫節。萬古千秋使骨香。

二月十五日。高田青藏の家財をその老母に與ふ。

〔高田青藏一件〕

二月十五日晝頃江守半馬殿より紙面。

高田青藏家財老母え被下候、居屋敷は被指上候様に、御用番安房守殿別紙覺書御渡被成候條、被得其意、家作早速被取拂、居屋敷近々被指上候様、御一類中御申談可有之候、以上。

　子二月十五日　　江守半馬判

　　白江多太夫様

　　坂井五郎八様

付札、江守平馬

高田善藏家財母ゟ被下候。居屋敷者指上可申事。

別紙

高田善藏宅締方之儀、各御兩所ゟ先達而申談置候通に候。各樣之内御判・印鑑爲見合用事に御座候條、御一人御主附御極、御判・印鑑今日中可被遣候。

一、善藏知行收納帳面に仕立、明後十七日朝之内可被越候。致奥書可指進候間、當十八日所附御印物幷收納帳共、御一類之内御算用場ゟ御持參可被成候。

一、善藏先程以來頂戴之御印物・御一行は、御類中被請取置候段、御判形之御紙面御指出可被成候。

一、善藏諸上納之分御しらべ、一兩日中可有御書出候。

一、善藏御母儀何方ゟ御引取之段御案内可被成候、以上。

二月十五日　　江守平馬判

白江多太夫樣

坂井五郎八樣

二月十八日。前田重敎夫人江戸上野眞如院等に參詣す。

〔政隣記〕

二月十八日九時過御供揃にて、上野貫如院并清水山王之御廟様御參詣。右相濟廣徳寺江御參詣、暮頃御歸。御表より御先手三輪彥兵衞、御横目村田剛助、御大小將より宮崎淸右衞門・馬淵友之進、同加人青山數馬御供に出候事。

二月廿一日。昨今兩日大乘寺に於いて高田善藏の追弔法會を執行す。

〔高田善藏一卷〕

一、同廿日中陰逮夜於大乘寺茶湯有之。是は竹田氏より法事なり。獻拂袈位執行七十二僧、外に雲水・當宿の客僧凡而九十餘僧。辰の上刻より午の下刻迄。竹田氏參詣。善藏一類の内富田矢四兵衞・寺西源兵衞・白江金十郞致參詣候事。

一、翌廿一日中陰の茶湯、顯中より執行。無縁の參詣人有之。竹田氏・江守氏・河地氏香奠持參。竹田氏は使者也。般若經施餓鬼五十七僧。自巳中刻至未刻。

二月廿四日。金澤城内の御作事所燒失す。

〔御年譜〕

一、二月二十四日御作事所出火。

〔政隣記〕

二月廿四日曉八時過、金澤御郭内御作事所之内木挽小屋四間に十二間之御長屋燒失、七時鎮。御姫樣御立退無之。

〔安永年間御用留〕

御城下若火事之刻、火本近く候はゞ勿論、程遠候与も御城風下にて氣遣敷成候はゞ、二之御丸當番之頭中迄及案内、頭中達御聽、被仰出次第三之御丸早鐘爲撞可申候。尤早鐘爲撞候はゞ、時鐘撞申者之方ゟ申渡、時鐘をも早鐘に爲撞可申旨御定に御座候。御城中若出火仕候節は、勿論早鐘爲撞可申事ニ、私共相心得罷在候へども、御定書に御城中之儀は無御座候に付、三之御丸御番人中相泥罷在候躰に御座候。既前月廿五日曉天、御作事所木挽小屋出火之節、幷明和九年二月會所御長屋出火之節も、早鐘撞不申候。此間之火事之節、御役人等御城幷請取場所ゟ罷出候人々茂遲々仕、本來不罷出人々多御座候。以來之儀も御座候事故、私共心付候趣申上候。御城中出火之節早鐘撞申儀、尙更被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

安永九年三月二日　御用番　中村左兵衛

本多安房守樣

村井又兵衞樣

右紙面安房守殿ゟ相達候處、御披見被成、此儀前々より詮議有之候處、六ヶ敷ものに候。先

廿五日とするもの前文と異なり

寺嶋捴岸敷出火之節茂、早鐘打不申候。早鐘つき候ハヽ、金澤中騒ヶ申事に候。先夜火事外
に而も承付候。雨天にも有之左様之節。御作事奉行部屋番人、手前遅く承付候躰也。旁而之趣
御僉議、追て可被仰渡由被仰聞候事。

二月廿五日。前田治脩發駕の期を三月下旬と定め、尋いで之を延ぶ。

〔政隣記〕

二月廿五日、御發駕三月下旬と被仰出、翌廿六日十二御泊附も被仰出、三月七日當廿七日御
發駕と被仰出。然所同月十九日御發駕暫御延引と被仰出。

二月廿七日。江戸に於いて諸士に綿衣を用ふべきこと等を諭す。

〔政隣記〕

二月廿七日、左之趣御供御家老西尾隼人殿御申渡之旨、夫々觸有之。
於江戸表御式臺を初御表向に而も都而綿衣、御見廻り之御客御給事綿衣御宜者無之候旨、
前々被仰出候得共、今以相改不申候。當御在府より嚴重に相守可申候。先達而より相知れ候
御客御給事・御供・御使等に而も紬・綿、袴者要嶋 川越平類相用ひ、夫より以上之品著堅く無
用。尤襦子も右に準じ、晒類迄に而も下品を用ひ、上下茂龍門抔無用。且御道中御供人者一
統綿衣、於御貸小屋參會之儀も相ゆるみ、不圖罷成儀も有之様子相聞え候。以來者前々被仰

出之通相守可申旨被仰出候。此上不埒之者は急度御咎可有之候。足輕以下者猶更前々之通、刀・脇指拵も金銀用候儀堅不相成候。附、御家中若黨・小者不相應之衣類等着用之者も有之候間、主人より急度可申付候。餞別・土産物、恒品に而も堅無用。右尚又嚴重可申渡旨被仰出候事。

但、頭々より、誠公務、第一聊費無之様に与之添紙面有之候事。

二月。木綿の價を騰貴せしむることなく且つ他國産縮の輸入を禁ずべきこと等を告ぐ。

〔政隣記〕

二月、今般於金澤御省略等被仰付候に付、町中に觸有之、木綿類是迄之値段より上申間敷旨。町人等妻子等木綿之外着用堅く不相成。若着用之者於有之者、手合足輕見附次第剝取候筈。且高田越後縮其外他郡より入商御停止。就中是迄賣物値段上候儀町奉行承屆候得共、以來は御勝手方年寄衆迄伺可申旨。將又加賀縮等他國に賣出候儀者勝手次第之旨被仰渡候由、昨便申來候事。

他郡は他國の誤なるべし

申來は江戸へなり

二月。諸士の人馬數帳を提出すべき規程を更定す。

〔日　記〕

付札、定番頭ゟ

毎歳正月一統被指出候人馬數帳、是以後當分御在國之正月迄一冊宛可被指出候。扣帳被出に不及候。

一、縁組等願書附等入御覽、願之通被仰出申渡候節、前々年寄中等連印之紙面、又は右願書附に更書致連印相渡候得共、是以後當分惣而願書附に願之通被仰出段附札を以、御用番一印に而相渡筈に候事。

右之趣頭・支配人ゟ被相達、組等之內支配有之面々ゟも傳達有之樣可被申達候事。

子　二　月

二月。組頭等、儉約を申渡すべき條文に就いて諮問せられたるを以てその意見を上申す。

〔安永年間御用留〕

今般御儉約之儀被仰出、萬端御格も被改御差略に付而、御家中儉約懸等之儀可被仰渡處、儉約等之儀ニ前々度々御書立等を以被仰渡、都而一統違承知罷在候得者、今更可被仰渡樣も無之候得共、其分に被指置候儀も難成。然共被仰渡候而も、無程致違犯候族に而ニ其詮も無之

一同の次脱字あるべし

候間、享保十四年暨延享三年被仰渡之振にも可被仰渡候哉。又者夫よりも委き方可然哉。又は事短く要文迄を被仰渡可宜哉。右兩三樣何れ可然哉、私共存寄可申上旨先日御内密被仰聞候趣、何れ茂打寄隱密に種々示談仕候處、畢竟末々に至迄信服仕候樣にとの御趣意に候得者、如何躰に被仰渡候者信服可仕哉、其程者難辨奉存候。然共只今迄巨細之被仰渡に而さへ當分は相守候躰に而、無程違失仕候族に候得ば、委き上にも委く可被仰渡儀は道理に當り候御詮議とは奉存候へども、委きとて必信服可仕儀とも不奉存候。左候へば右兩三樣之内何れ可然とは難申上候。勿論各樣御賢慮を以段々御しらべも可有御座候得共、舊臘御儉約之儀被仰渡、當春御格之内御差略被仰出候に付而者、多分御條目を以被仰渡可有御座儀与一統相待罷在候得者、此處ゑ享保年中被仰渡之趣に假令御細注之被仰渡御座候とも、事長迄に而一々信服可仕哉。人々書留置候計に而、數ヶ條一々に相守、妻子・家來男女末々迄嚴密に申付、御書立之通以來迄も違失無之樣相心得可申とは難申上候。就夫私共奉存は、四民共衣食住之華美を好候事次第に增長仕候に付、都而之不益夫に准じ候。當時大抵飽服は用ひ候へ共、いまだ一同不仕候間、先衣類之儀前々御定之通に、絹・紬・布 木綿類迄相用候樣被仰渡、就中女之衣服華麗至極に相見ゑ候間、唐糸・織物等被停止、是又絹・紬等より上品は不相用、且櫛・笄等髮飾榮耀之具費御見聞之通に御座候。右者御家中女奉公人迄に而も無御座、町人之妻子暨御郡方

も見習、都而勞賤を取失ひ罷在候間、先此一儀迄をヽ度被停止候ば、右申上候通品々可被仰渡を相心得罷在候處故、案に相違仕、此外之儀も自然と私に相嘯可申様にも奉存候。尤其條之儀ニ而々被仰渡候趣々條を、當然に相當り候様御引直し、左而最重に被仰渡候而者如何可有御座候哉。數々條一時に被仰渡候ニて、却而忌失之基と奉存候。當時萬民倍上奢情ニ而に而實儀無御座候様相見得申候。ケ様之所被仰渡之御様子も可有御座哉、心付候儀故申上候。美服奢侈之惡物等も、買求候者迄ゟ被仰渡候而者行届申間敷候條、右品々仕入商不仕様、町奉行ゟ急度被仰渡、若此上にも隠商等仕候儀相知候者、代物奉行所ゟ取揚、猶又に可被仰付などゝ具敷被仰渡無御座而者、此一件は尚更ゆるみ易可有御座と奉存候。

一、只今迄右享保・延享年中被仰渡之外にも、倹約等之儀度々被仰渡御座候へども、被仰聞候通暫に相守候迄に而、後ニ迄不申而已ならず、彼是と噂申候。今般之儀者格別之御差略其有之、彼對他國ゟ御行粧迄も御省略之御時節ニ御座候得者、末々迄も右之御寛容御移り候様に仕度儀与、何も打返し種々會議仕候へ共、措而御僉議之端に可相成程之品及急度不申候。右段々申上候通に者御座候得ども、第一私共平生之心得不宜、何ゞ仕候而も世風に揃ひ、少も不意候段に申譯無御座候。今般今度御改被仰渡候節は、隨一猶・支配人之不宜儀を御叱度奉存候。末々之承受も宜敷、私共以來之儀にも宜儀に御座候。任御内意卑意申上候。尚更

御詮議之上、被仰渡次第相心得申に而可有御座候、以上。

二　月　　定番頭
御馬廻頭
御小將頭

二月。自今江戸・京・大坂の詰人を二年半交代とすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月、以後江戸・京・大坂共詰人、二年半詰与被仰出、尤御近習向并御小將・御歩之分は、是迄之通順番にて一年代に候事。

二月。今次の參覲に供奉する諸士の行裝を簡易にすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月、當御參勤御道中、御家老衆は鑓三本、組頭は同二本、頭分は同一本、且御家老役迄釣具足櫃并矢箙、組頭以下は荷ひ具足櫃、平士は具足荷物に認可申候。御行列之内乘懸馬勝手次第、老人并格別之不行步者等は駕籠御免。其外都而乘懸馬与被仰出。將又御步は、六組之内より以後氣丈成者人少に可被召連旨、是又被仰出候事。

三月三日。諸士に貸附すべき會所銀の額等に關し令す。

〔政隣記〕

一、今月三日左之通被仰渡候由に而、會所奉行中より廻狀有。

御勝手御難澁に付、會所銀今年より五ヶ年之間、御供人は百石に三百五十目宛、常交代人者二百五十目宛、地廻御用は百五十目宛。尤返上方都而只今迄之通。但御扶持方・御切米被下候人々茂、右に准じ候事。

右之趣被得其意、夫々可被申渡候、以上。

庚子三月三日　　　　前田土佐守

會所御奉行中

三月六日。前田利常の生母壽福院の百五十回忌法會を金澤經王寺に執行す。

〔政隣記〕

三月六日、金澤小立野於經王寺、今一朝衆僧廿五人、御導師妙成寺被勤、壽福院樣百五十回御忌御法事御執行。依之今一日殺生指扣可申候。御寺近之者は、普請・鳴物右御執行中自分

に指扣可申旨觸有。

但、御法事料諸入用共白銀廿枚、外に導師に五枚被下之。

〔袖裏雜記〕

三月六日壽福院樣百五十回御忌御法事相濟候付、赦之儀先例も有之故、今般も奉願旨妙成寺書付、寺社奉行より主付刑部迄出之、同八より御用番へ達候付、實成院樣等御法事之節赦被仰付間敷旨、安永三年四月留帳別紙書拔之通に候。左候へば今般も御同樣、其上御百回忌も濟候事候間、旁今度より赦不被仰付方にて可有之と僉議伺之處、三月廿五日紙面之通と存候、左樣に可被相心得候と、三月廿五日御加筆を以被仰出。右書拔之要は左之通。

實成院樣十三回御忌御法事に付赦之儀相洩候付、段々考候所、御中陰より御三回忌迄は赦被仰付、御七回忌は相洩候躰に候。預玄院樣には御中陰御法事より御七回忌迄赦連綿。善良院樣には最初より赦不被仰付候。心鏡院樣御法事・壽清院樣御茶湯之節に、赦之御沙汰無御座候。預玄院樣・實成院樣右之通に候へば、御當代に而申時は善良院樣・實成院樣御同樣に而可有御座候。預玄院樣には御實御祖母之御屆有之、中將樣御服忌も被爲請候へども、御妾之名目に而者御同樣に而可有御座哉。壽福院樣御遠忌之節赦被仰付候御例を以、實成院樣御中陰御法事之節より赦被仰付候事に候へば、今以御遠忌ごとに赦被仰付譯に而も可有御座候へど

も、壽福院様御卒去之節とは御様子違可申哉。其上公儀御代々様且御家御代々様にも、御數代に被爲成候へば、度々御赦御座候上に、預玄院様初御法事度々赦被仰付候而は彌多成、當御嗣法に少く相成可申候。預玄院様には御七回忌相濟、實成院様には御十三回忌相濟申候、壽良院様抔御法事等之節御赦不被仰付方可然哉与詮議申候。但赦可被仰付哉、被仰出次第奉心得旨、安永三年四月十六日伺候處、同月十七日預玄院様・實成院様御法事之節、是以後は赦被仰付間敷旨御意。

自分は津田政隣

三月九日。前田重教夫人、紀伊侯の赤坂邸を訪ふ。

〔政隣記〕

三月九日九半時御供揃にて、紀州様赤坂御邸ゟ御前様被爲入、夜五時過御歸殿、自分御供に出。但一先披さ、八半時頃赤坂ゟ爲御迎揃候。且御歸之上、於御廣式御酒・御吸物・御肴一種・御茶・御菓子被下之候事。

三月十九日。前田治脩參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

三月十九日、於金澤左之通被仰出候段、西尾隼人殿夫々ゟ御申聞。

當月廿七日御發駕可被仰出筈候所、先頃以來御持病之御疝邪に而御震痛強、其上御足御痛痒、

長途之御旅行御難儀に付、御發駕暫御延引御保養被成候思召に候。依而御用番御老中に聞番參上御屆仕候樣、明後廿一日江戸表に御飛脚被指出候。此段可申達旨被仰出候事。

三月廿二日。前田綱紀の女専姫の百回忌法會を江戸廣德寺に執行す。

〔政隣記〕

三月廿二日、於江戸廣德寺瑞陽院樣百回御忌御茶湯有之。詰人御先手三輪藤兵衞・御横目村田團助・會所奉行加人小原與九郎。今日は普請・鳴物遠慮与先達而觸有之、尤江戸迄也。松雲院樣御女御早世之御方也。且今日御代番は組頭不破半藏勤之。

三月。この後前田重教屢々放鷹を行ひ、又近臣をして武技を習はしむ。

〔政隣記〕

四月十二日、前月中旬より毎日、御日柄之外中將樣御鷹野、且毎日六具を固め二之御丸幷金谷御殿に而鑓・劒・組打稽古被仰付御覽。尤御近邊勤仕之者迄に被仰付候由。組打指南主付萩原八兵衞に被仰付。將又御能も於金谷毎日被仰付。二之御丸に中將樣前月中旬より毎日被爲入、廿四日には二度被爲入、其間に御行歩、都合三度御出有之由承り候に付記之。

三月。金澤に於いて菜の花見をなすこと流行す。

〔本文今假に三月に收む〕

〔政隣記〕

今年者於金澤桑稼之花見といふ事流行、近邊之野邊に武家・町家共遊行、酒肴等携へ、毛氈を敷或者幕打、甚賑々敷事之由、使に所より申來。昔より桑稼之花見といふ事不及承、事珍敷に付記す。

四月四日。御普請奉行淺加隼人非行を以て役儀を除かる。

〔續漸雜記〕

御普請奉行淺加隼人手前不埒之趣、吉田平左衛門より言上、且又御道具調奉行三輪元右衛門より、金森忠太夫ゟ內々申聞候趣も有之候へども不致濟置、不分明に付段々御僉議有之。四月四日隼人役儀被指除、且又同役金森猪之助も右之趣に付役御免被成。

〔政隣記〕

四月四日

一、今日於金澤左之通被仰付。

役儀御指除	御普請奉行	淺加隼人
同　御免除	同　斷	金森猪之助
御扶持被召放	御普請會所棟取	正木甚左衛門

安永八年四月二日の條參照

四月四日。人持組奧村中務能登島に配流を命ぜらる。

一、四月四日人持組奧村中務宅へ、長大隅守殿・奧村河内守殿御越、爲指引御大小將橫目丹羽伊右衞門・中村九兵衞罷越、被仰出之趣左之通、御組頭大隅守殿被仰渡。

奧村中務

右中務儀、小松御城番に相詰罷在候處、同所御貸小屋より一人忍出、大坂迄罷越候段、先以御城番に罷越有之、猶更重き身分にて右之爲躰、別て不屆至極に候。依之急度可被仰付候得共、其節之樣子亂心之躰に付、於能州嶋之內に縮り可被仰付置旨被仰出候事。

子四月四日

右中務へ十五人扶持被下置、且子息共は一類申談不致徘徊樣に被仰出、則一類へ被仰渡候事。

〔袖裏雜記〕

奧村中務出奔之樣子、亂心之躰に付、於能州嶋之內縮所被仰付置旨、四月四日被仰出、其段申渡候後、中務是迄召仕候足輕野崎長右衞門と申者、能州へ供いたし看病仕度趣願書付、中務一類前田主計等迄出之、主計等添紙面を以出之、河內守より又紙面を添御用番へ達候處、右願之筋輕き者には別而神妙に候へども、御法も有之事故、難相成儀と遂示談候間、此段主

計等ゟ申聞可被成候。右之趣相違御内意に茂候旨、五月廿八日御用番ニより覺書を以河内守へ申談。此伺之節堀主馬嶋へ被遣候節は、家來共之内も罷越候へども、今般中務は主馬とは様子ニ候旨等申上。

四月十五日。前田治脩使を發して參覲の期を延べんことを幕府に請ふ。

〔政隣記〕

四月十五日、御痛積爾々不被遊候に付、今暫御發駕御延引御保養被成度段、御老中ゟ聞番參上御届仕候様、今日御飛脚を以江戸表ゟ被仰達候旨、昨日被仰出有之候事。

但、右御飛脚江戸着、今月中御發駕難被成旨之御使、廿二日聞番勤之。

〔政隣記〕

一、君上御容躰今以爾々不被遊、長途之御旅行難被遊候間、今暫御保養被成度段、御老中方へ今日以御使札被仰達候。此段可申達旨被仰出候條、夫々可申談旨御道中奉行ゟ被仰渡。但御使者江戸表に而仕立に相成、今月十一日淨珠院様御用人印牧消八郎へ被仰付候。然所病氣御斷申上候に付、同役小西助右衛門ゟ被仰渡候所、是又病に而御斷申上候に付、御木宅御廣式番江口嘉江ゟ被仰渡、去二日金澤發足之趣、同十三日江戸着之圖りを以、翌十四日御使勤之。

今日は後記の二日なるべし

四月十六日。前田宗辰の生母淨珠院等江戶兩國・淺草に行步を行ふ。

〔政隣記〕

四月十六日四時御供揃に而、同刻過略御行列に而、淨珠院樣・祚仙院兩國回向院に被爲入、夫より御忍にて淺草日音院に御出、夫より觀音境內御遊覽。重而日音院に被爲入、暮頃御歸。自分御供に出。於日音院一汁三菜之御賄・御餠菓子等被下之。

四月。石川郡粟ヶ崎村藤右衛門東本願寺に白銀八十貫目を寄進す。

〔政隣記〕

六月廿九日承に付記之。御領國加州粟ヶ崎村藤右衛門、今年四月上京之節、東御門跡に白銀八十貫目上之、日本中之舟乘漂難にて死候者共之弔法事致執行。高名京・大坂等に轟し、今月中旬頃歸候由。

五月二日。前田治脩再び參覲の延期を請はしむ。

〔政隣記〕

五月。君上御容躰今以爾々不被遊、長途之御旅行難被遊候間、今暫御保養被成度段、御老中方へ今日以御使札被仰達候。此段可申達旨被仰出候條、夫々可申談旨御道中奉行に被仰渡。

但、御使者江戸表にて仕立に相成、今月十一日淨珠院樣御用人印牧謙八郎へ被仰付候。然所病氣御斷申上候に付、同役小西掃右衛門へ被仰渡候所、是又病にて御斷申上候に付、御本宅御廣式番江口織江へ被仰渡、去二日金澤發足之趣、同十三日江戸着之圖りを以、翌十四日御使勤之。

五月十五日。前田治脩月次出仕の諸役人を召し、儉約の趣旨を違失すべからざることをその支配に告げしむ。

〔政隣記〕

五月十五日、於金城例月月次出仕有之、年寄中謁。且寺社奉行以下諸頭御用番等一人宛御呼出、於御席左之趣御月番又兵衛殿被仰渡。

御家中儉約之儀前々被仰出候趣共、無違失可相心得候。近年一統勝手難澁之儀に候得者、別而儉約可有之候。衣食住其外無用之費省き、人々之好候事には、表向質素之躰に而茂內輪に費之筋有之樣子、萬端內外となく質素に相心得、最重儉約を相守、勤仕に不指支樣相心得可申候。就中衣類等花麗に相用候。急度前々より之被仰出を相守可申事。

右之通可申渡旨被仰出候條、組・支配之面々ゟ可被申渡候。組等之內拔許有之人々者、其支配ゟも不相洩樣被申聞、尤家來末々迄も可被申渡候事。

子五月十五日

右頭々より判形之紙面を以觸出有之。

五月十五日。婚禮の家に石を投じ、又は異躰の風俗にて夜行する等のことを禁ず。

〔政隣記〕

五月十五日左之通御用番又兵衛殿より御觸有之。

御家中之人々幷町方之者致嫁娶候節、石打候儀堅不仕候樣從前々申渡、安永二年にも申渡候得共、近年別而猥に相成、往來之者豎近隣よりも石打、右に事寄せ帶刀人茂入交、不法之族有之躰に候。常々面躰を隱し、異躰之風俗に而夜行仕、幷群集之於場所狼藉仕者も有之、御締方に指障り候儀も有之候間、以來右之族等は急度相咎、交名等相糺、又は召捕可申候。且又簪・笄等金銀を用ひ候儀御停止に候所、當時猥に相成、別而輕き女共迄も、金銀を用ひ申儀不苦樣に心得候躰に相聞え候に付、已來右之族且華美之衣類着用之者は、急度見咎、主人等交名も相糺候樣、盜賊改方廻役人ゟ可申付旨、今般長屋多七郎ゟ申渡候條、被得其意、此段組・支配之面々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配ゟも相達候樣被申渡、同役中可有傳達候事。

御荷指は藩監督する所の監の役として小吏を勤むるもの

有之趣可被得其意候、以上。

五月十五日　　　　村井又兵衛

五月十六日。御飼指と詐稱して郡方を徘徊する者を警めしむ。

〔高井實記〕

近年御飼指之由申僞、御郡方ゟ隱田、宿送り人足等召仕候者有之候に付、今度、富木・田關濱三ヶ所ゟ見合札相渡候。其外村々へ相廻り候者致貯俐候には、名前相尋早速可及斷候。假令眞爲御飼指、御定外不法之仕形有之候はゝ、名前并旅宿・宿送等之樣子相糺、早速可及斷候。尤見合札入用候はゝ相渡可申候。若見隱聞隱仕置、追而相知はゝ百姓共急度可申付候旨、御家老衆より被仰渡候條、夫々村方迄僉議、見合札入用に候はゝ早速可申聞候、以上。

子五月十六日　　　　櫻尾左膳

　　　　　　　　　　高澤半次右衞門

能州四郡十村中

五月廿六日。前田重熙の生母心鏡院の五十回忌法會を江戸長元寺に執行す。

以上は家中に對する命令の寫なり

〔政隣記〕

五月廿六日於駒込長元寺、今一朝心鏡院樣五十回忌御茶湯御執行。附音樂有之。詰人、御用人前田彌助・御先手三輪藤兵衞・御横目村田團助・會所奉行加人小原與九郎。

且御茶湯有之内、鳴物等自分に遠慮候樣、伴八矢殿被申聞候之旨、去廿二日御横目中より廻狀出。

一、今日長元寺に而君上御代香、御小將頭不破半藏勤之。

五月廿八日。百姓等農業を專らとし古來の風俗を失はざるべきことを諭す。

〔司農典〕

御家中儉約之儀、前々被仰出候趣無違失可相心得候。近年一統勝手難澁之時節に候得ば、別而儉約可有之候。衣食住其外無用之集會杯、人々好候事には表向質素之躰に而も、内輪費之筋有之樣子。萬端無内外与質素に相心得可申候。就中衣類等隨分麁服を用可申候。近年女向別而衣類等華麗に相聞候。急度前々より被仰出を相守可申事。

右之趣申渡候條被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之内裁許有之人々へ、其支配にも不相洩樣申聞、尤家來末々迄可被申渡候事。

今般御家中一統儉約之儀被仰渡候趣、各承知之通に候。就夫御郡方之儀、別而前々より御格少にも無相違相守候樣可被申渡候。此度御用番又兵衛殿より平而猶著共に被仰聞候趣も有之、近年御郡之内にも奢之躰相聞候條、右於百姓一統古來之風俗不取失、農業一途に相心得候樣、御扶持人・十村等ゟ急度可被申渡候。以上。

五月二十八日　　　　　　　　御算用場

改作御奉行中

五月、御餌指等の郡方に出づる時の待遇を定む。

〔郡方御觸〕

付札、加州御郡奉行ゟ

一、三ヶ國之內ゟ御餌指共泊懸に罷越候節、宿より網場迄爲持候網等、御餌指三人迄者一人召連、尤自身持參候而茂成候輕之品者、人足召仕間敷候。且又夏の中むしつぼは茅場之內ゟつき候時分者、人足一人爲指出、網場之義茅爲踏分、縱も無之而者網張申儀難成候に付、御餌指三人迄者一人爲指出候樣に、御餌指ゟ申達候。

一、網場に立申竹竿□□亂之棟茂、且又在々に而指竿・杆打之竿・人當も切申儀者、前々より定に候事。

一、飯米代之外宿賃拂不申、鹽・味噌・ぬか味噌之外は、百姓より爲指出不申定に候。

一、五泊宛に而宿替之儀者承屆、將又宿送り人足之外、自分用事之荷物に人足召仕不申儀者勿論之儀に付、尙更心得違無之樣飼指共ゟ申渡候。一村に止宿仕候人數之儀者、三人迄者止宿爲仕可申事。

一、飼米等者在々に而一合より內者請取申定に候事。

一、莨茅場・畠作場に網張候節、莨等幷作物荒不申儀者常々申渡置候。尙更御飼指共ゟ申渡候。

右之趣別紙十村共書付に致付札相渡候事。

子　五　月

六月二日。前田治脩重ねて參覲延期を幕府に告げしむ。

〔政隣記〕

六月三日、君上御容躰衛々不御宜に付、今暫御發駕御延引被成度段、公邊ゟ御使札可被指出旨被仰出、右御使江戶表に而仕立に相成、御大小將御大がね奉行中川丹次郎ゟ被仰渡。廿二日金澤發足十一日江戶着之趣に而、十三日御使相勤。御老中迄也。同月晦日御用番御老中松平周防守殿ゟ、右丹次郎御呼立に付、聞番同道罷越候所、御返翰渡り候に付、以早飛脚御國

台御用人より上之、御類之通八・九月之内御參勤ニ被仰出候由之事。

六月十八日。前田重教初めて鶴を射留めたるを以て、翌日鶴飼の舞囃子を行はしむ。

〔政隣記〕

六月十八日晩鶴初而中將樣御射留、翌十九日舞御囃子組左之通。

中將樣御舞右近、たとへなき顔の花こそかはりけれ。宮門舞鶴飼、鵜舟をぐせいの舟になしより。

中將樣御舞邯鄲、變ぬ恩とて不死の藥を君に捧げより。但御素舞に地宮門・三郎左衞門・文蔵・清兵衞・仁右衞門・孫六・家助・七郎右衞門・次郎助・喜助・庄左衞門・次郎右衞門。

六月廿七日。前田重教越中高岡附近に放鷹す。

〔政隣記〕

六月廿五日、地廻御鷹野之振に而越中入日迄、中將樣明後廿七日晩八時御供揃に而被爲入、同廿九日御歸与今日被仰出。随分御貸馬御渡、從者等隨分省略可仕候。御發駕前渡方一圓無之、御戻り之上可致詮議旨。御泊所に而者上下共御賄可被下旨。晝飯者御歩並以上從者共自分賄に可仕、足輕以下は晝飯時に被下旨、主付不破和平・山本九郎太夫より廻狀有之候所、則廿七日晩御發駕、高岡邊迄御放鷹。廿九日夕八時過御歸殿。

但、御表より御供は吉田九兵衞・豐島喜右衞門迄也。

六月廿五日記に有之通り、中將樣越中に被爲入候內、從加賀守樣御見廻之御使堀儀右衞門勤之。

〔政隣記〕

晦日、今度於越中中將樣鶴御射留、并太鴉親只一筋に御射留、（但一昨廿八日朝五半時過被爲射。）御祝之御能番組岩船・吉野靜・金札、以上三番共中將樣御自身被遊候事。

七月九日。關所の過書に繼立紙を用ふる件を照會す。

〔國事雜抄〕

一筆致啓達候。殘暑之節彌御堅固可被成御達、珍重存候。然者下道中往來之旅人等過書紙、唯今迄一枚紙に相調候へども、當春より諸場料紙御用方鹿紙を用ひ候樣被仰出候。依之是以後は繼立、尤繼目印章を以相渡可申与存候。御關所差支申儀も無之候はゞ彌右之通致度御內談申進候。右之趣得御意度如此御座候、以上。

七月九日　津田林左衞門　判

土方勘左衞門　判

高田市右衞門樣

高田市右衞門は越中境關所奉行

七月十一日。江戸邸の貸小屋に窓を穿つべからざることを告ぐ。

〔政隣記〕

七月十一日、御邸内御貸小屋、自分に窓明候所も有之趣相聞候條、早速塞候樣西尾隼人殿御申聞之旨、御横目中より觸狀出。

七月十五日。前田重教、父吉德の廟參に關する件を告ぐ。

〔袖裏雜記〕

七月十五日從中將樣、左之通被仰出。（佐々木源兵衞奉書并之寫書也）

只今迄歳中護國院樣御廟へ御參詣御延引之時ニは、御名代年寄中より被仰付候へども、是以後ニは歳中之御廟參ハ八月三日ニ御參詣可被遊旨被仰出候。右八月三日御廟參御延引に候へば十二日御廟參、十二日御延引に候ハヽ右護國院樣御廟へ御名代年寄中之事。

子七月

右者次第に暑御座候、其上八月三日者寶成院樣御當月に付而之趣等、別段御内々被仰出之趣ニ有之。

七月廿三日。伴源太兵衞綸子の白小袖を所持したるを以て譴責せらる。

掃は帚・剃は掃なるべし

〔政隣記〕

七月廿三日、左之趣於金澤番頭ゟ御用番被仰渡候段申迄來る。今日於不破半藏席、伴ゟ申渡有之。（間番見習也。）

附札、江守平馬ゟ

伴源太兵衛儀、家來小者挾箱持、舊臘於江戸表供先より致欠落、右挾箱之內取逃之品書出候所、御停止之着類共、就中綸子白小袖も有之候。御定も有之儀に候處、如何之了簡にて致着用候哉。ヶ樣之品堅着用いたさ間敷候。勿論是以後麁服相用候樣、急度源太兵衛ゟ可申渡候。

右之趣に拙者共迄御呼之趣も有之に付、如此申渡候事。

七　月

七月。虫害により米價大に騰貴す。

〔政隣記〕

七月、今月上旬以來越中・越後稍に小虫殊之外多く附候而、太鼓抔に而者不迄に付、百姓共掃を以剃候由。稍共虫に而白く成有之、はき候得ば青く成候由云々。

右等之趣に付、金澤米價俄に十七日より高料に相成候。地米四十九匁、遠所米平均三十九匁計之由申來。

八月九日。前田利家夫人芳春院の祥月忌日等に爾後殺生の遠慮を要せざることを告ぐ。

〔國事雜抄〕

毎月　十日　十四日　十七日　晦日　小之月は二十九日

七月十六日　芳春院御祥月也

右是以後御家中之人々諸殺生不及遠慮候。但四月十七日は相扣可申事。

右之趣頭・支配人ゟ被相達、組等之内裁許有之面々は、其支配へも不相洩樣傳達有之候樣可被申達候事。

子八月

右八月九日安房守殿御渡。

四月十七日は德川家康の忌日

八月。十村等に命じ嚴に百姓をして粗服を用ひしむ。

〔司農典〕

御家中之面々衣服之用可申旨被仰出候處、今以心得違之者も有之躰に付、御横目方等手合より見聞、名前等承屆申筈之旨候間、御郡方之儀にも、跡々より被仰渡之趣每度拙者共申渡候間、

達失者有之間敷候得共、萬一心得違之者共有之、御城下幷御郡中道筋等に而、御横目方等役人見咎申樣成儀有之候而は、拙者共ゆるかせ之樣に而越度之至に相成候條、跡々被仰渡之趣無忘失、分限に應じ木綿・布之外堅着用仕間敷候。就中十村之儀者、數多支配之儀に候得ば、組親心得次第、下々之者に至る迄愼に相成申儀に候條、萬端嚴重相心得可申儀肝要に候。前々申渡候儀ゆるかせに候故、下々迄も違背仕候儀も有之歟与存られ候。自今申渡候趣於相違者、畢竟御掟をも不相用与存候。左候得ば不輕儀に候條、以來不相改候而者、急度申渡儀も可有之候間、其覺悟可有之事に候。此段百姓末々迄可申渡者也。

子八月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

九月二日。同時に三子を生みたる者に扶持を給するの例を開く。

〔袖裏雜記〕

射水郡水戸田村頭振源三郎妻腹に男子三人出生仕候付、御惠御座候樣仕度旨、御郡奉行申聞候。舊例承合候處、相當り候例無之候へども、吉瑞之樣に申ならし候。輕き者俄に人多に成難澁可仕候間、御惠御座候樣仕度旨、御算用場奉行紙面出。前例覺不申に付、公儀之樣子岡田太郎左衞門江戸へ發足に付承合候樣申渡遣候處、公儀に而は三人扶持被下候。其外にも被

下物有之由承合候旨申越候。いずれにも下賤之者俄に右之通三子出生、育之手段も無之不便之儀。能州生神村肝煎又右衛門孝心者に付三人扶持被下候に此度源三郎へも一人扶持充被下候而可然と僉議伺。九月二日伺之通被仰出。

但、御郡奉行届紙面に六月廿二日之日付也。其後八月十四日夜右三子之内一人病死之旨、十六日日附に而重而届紙面出。不入御覽。

九月十日、前田治脩更に參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。

[政隣記]

九月十日於金澤左之通被仰出。

御疝積等爾々不被爲在候故、八・九月當之内に御發駕被成度段、先達而以御使札御願相濟、此節迄御保養被遊候得共、御疝積等今以御指引も被爲在候に付、當月中御發駕難被成候間、今暫御保養被成度段、御老中方に以御使札御屆被成候に付、明日御使者發足被仰渡候。此段可相達旨被仰出候。

但、右之趣御道中奉行等に夫々申渡候樣被仰出候事。

九月

右之趣に付、此間被仰渡有之候御大小將村重蔵、翌十一日金澤發足。但直に相詰有詰之者与

交代被仰渡。將又今月廿日限參着之儀被仰渡、其上去六日に被仰渡、用意之無日間發足に付發足、前日於御次、御内々を以白銀十枚拜領被仰付候事。

但、同廿日江戸參着、御使相濟、御中屋敷に引越。

九月十一日。前田治脩、徳川家治轉任の祝儀を受く。

九月十一日、御轉任の賀あり。中略。これによて、中略。松平加賀守治脩に、奏者番安藤對馬守信成御使して時服二十、松平越前守重富に、土岐美濃守定經使して卷物二十を賜ふ。

〔徳川實紀〕

九月十一日、今般右大臣に御轉任爲御祝儀、今日上使御奏者番安藤對馬守殿を以、御時服綸子・紗綾・熨斗目御紋付染色品々、白黑御小袖裏紅紗綾其外裏色品々。二十二、臺に載之御拜領。名代南部大膳大夫様御勤。上使午五刻御出、同八刻御退出也。於御大書院上意大膳大夫様御拜聽、御拜領物御頂戴之上御退、御家老役西尾隼人に右之趣被仰聞。其間に御熨斗三方出之、御小書院に大膳大夫様御誘引之上、御重・餅菓子等出之。御酒・御肴、御重引大膳大夫様被爲引。尤御相伴小菅備前守殿へも、御給事人引之。御取持御先手倉橋三左衛門殿・右備前守殿・寄合前田安房守殿、御書院番佐野六十郎殿、并御坊主利倉善佐等八人參上。其外御作法都而御前例之通、御都合能被爲濟候。

〔政隣記〕

九月十三日。前田齊敬、藤姫と共に髮置の儀を行ふ。

〔政隣記〕

九月十三日於金澤數千代樣・藤姫樣御髮置御祝有之。

數千代樣ゟ御白髮宅番頭三宅権左衞門獻上之。

藤姫樣ゟは御留守居物頭池田吉右衞門より獻上之。(御入井伴盛器御先例。)

十月朔日。前田重教放鷹の爲に越中に出發す。

〔政隣記〕

十月朔日晴。中將樣今朝六半時過御供揃にて、五半時過御發駕、越中ゟ爲御放鷹被爲入、今月廿五日八半時頃御歸殿。

同日御晝津幡、今石動御泊。二日晴、高岡御泊、七日迄御逗留、所々御鷹野。八日東岩瀬御泊(十五日迄御逗留、所々御鷹野)、十六日魚津御泊。(日御書々滑村。)十七日魚津ゟ御立戻御泊。十八日東岩瀬御泊。(廿一日御逗留、所々御鷹野。)廿二日高岡御泊。(御逗留、所々御鷹野。)廿四日・廿五日之内城端御泊。廿五日・廿六日之内高岡御泊。廿七日今石動御泊。廿八日氷見御泊。廿九日今石動御泊。(所々御鷹野。)十一月朔日倶利加羅御小休、津幡御晝、夫より御歸殿。

右之通被仰出置候所、前條之通廿五日御歸殿被遊候事。

十月十一日。前田治脩更に參覲の期を延ぶることを請ふの使を發す。

〔政隣記〕

十月十日御痛積等今以爾々不被爲在に付、今暫御保養被遊度旨、御老中ゟ明十一日以御使札被仰進候段被仰出。但右御使江戸表に而仕立に相成、今月廿日淨珠院樣御用人木村武大夫ゟ被仰渡、相勤候事。

十月廿八日。年寄村井又兵衞、產物取調の事務に勵精すべきことを命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

又兵衞儀去々年產物しらべ御用主付被仰付、其以來譯立候儀も無之、其詮無之故、猶又格別出情わけ付候樣可被仰聞と思召候。左候へば追々繁多之取捌に成候に付、當分月番御用捨之趣、又兵衞へ今日以御親翰被仰出候間、月番助合可勤旨、此段土佐守へも承知可申達旨等、十月廿八日御日付御親翰を以、安房守・大隅守・河内守・主水・求馬・大炊御充所に而被仰出。

十一月十日。光格天皇御即位・御元服奉祝の爲の使者を成瀬主計に命ず。

〔袖裏雜記〕

成瀬主計は知行八千石寺西九左衛門は七千石なり

主上御即位并来正月元日御元服に付、為御祝儀京都へ之御使者成瀬主計・寺西九左衛門両人書上。小身之内よりさへ僉議仕候へども、前々萬石之内より被遣、近年は其以下も被遣候。五千石以上御使者勤候儀無之様に成候も如何り、此度右両人伺候趣、十一月四日申上、主計え被仰出、十一月十日申渡。

〔政隣記〕

十一月十日禁裡御即位、京都江之御使人持組成瀬主計(改名内蔵助)江今日被仰渡。

附、来年二月廿七日發。

十一月十一日。前田治脩又参覲の期を延べんとすることを請はしむ。

〔政隣記〕

十一月十日、御疝積等御同篤、今以爾々不被為在、次第寒氣相増、雪途に而長途之御旅行難被遊に付、来春迄御出府御延引御保養被成度段、御老中方江明十一日御使札御指出之旨被仰出。

但、右御使江戸に而仕立に相成、御居宅御用人加須屋兩右衛門江被仰渡、同月廿一日御老中方江之御使相勤候。

十一月十九日。牧野金藏役銀・出銀上納の期に遅れたる等の理由を以て

閉門を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

篠原勘左衞門組牧野金藏、當暮打役銀・出銀定之日限不指出、段々及催促候處、色々与申立不指出候付、勘左衞門手前に而火急之才覺を以金藏分取替、前月廿八日一統上納は濟候。其後金藏手前嚴重に申渡候處追付可出と慥成事ども申開相延し、當月へ移り漸當三日白封に而銀子指出候旨等、勘左衞門紙面出之。諸上納之內、役・出銀は別而重き上納に候處不埒成事、右之外金藏常々不心得之趣共有之、不埒者候間、急度御咎無之而は組之締方にも成不申旨、勘左衞門申聞候。第一上納銀、頭より取替候与申に成候而は、一統へも障り不可然儀。其上才覺銀方に甚不埒成取組共も仕候樣子に候。御馬廻後藤右衞門・新三左衞門・不破甚太夫常々不行狀に付閉門被仰付候間、金藏も左之通可申渡哉之趣、十一月十九日伺之處、伺之通被仰出。

篠原勘左衞門に

牧野金藏

右金藏儀、勝手難澁至極に付、當役銀幷秋出銀前々定之日限不指出、漸當月三日差出候段、先以役・出銀者別而重き上納銀に候へば、勝手向指支候とも、兼而覺悟も仕置、上納不指支

様可仕處、色々了申立、期日相延候段不埒成儀に候。且又平生萬端不心得之儀ども、兼而相達御聽候。依之閉門被仰付候旨被仰出候事。

〔拾遺雜記〕

牧野金蔵閉門中當六月病死。依之従弟原勘左衛門申候は、金蔵右之身分故、其身は勿論、一家共よりも一生之御禮も不申上、葬式之儀も不奉願候。金蔵家代々御奉公相勤候處、此度斷絶可仕儀、別而迷惑至極奉存候。依之恐多候へども、金蔵悴子與左衛門當年廿四歳に罷成候。此者御憐愍を以如何様にも名跡之御沙汰被成下候様仕度旨紙面に、閉門以前認置候遺書并一紙被寫相添指出候。閉門人病死跡御沙汰無御座先例、前月河縁宇左衛門跡に付申上候通候間、金蔵跡も被及御沙汰間敷之旨、僉議之通之思召之旨被仰出。

當六月は天明元年也

十一月廿六日。光格天皇の御即位を賀し奉る爲、前田治脩・重教使者を江戸に派遣す。

〔政隣記〕

一、御即位御定日来月四日与被仰出。

來月は十二月

廿六日、今般就御即位、於江戸惣出仕有之候得共、從中將様之御使御大小將宮川只右衛門に被仰付、右相濟直に相詰、右詰之者共与交代可仕旨、御用番被仰渡候。頭分則申渡。加賀守

廿六日は十一月

様より之御使者は、割場奉行宮井武兵衛ゟ被仰渡候事。

十一月。大聖寺藩不作なるを以て百姓等蜂起して減租を請はんとす。

〔毛合村一件留書〕

一、田方出來も盆前迄は大概宜御座候處、盆時分よりこぬか虫付きに相成り甚だ不出來之趣。依之御郡方一黨に相願出で申候哉、尤九月九日より御見分被仰付、御横目河地千丞・筒井清太夫十日より罷出、十村塚田源兵衞・分校村半助同道に而、十日より罷出廿二日に見分相濟。夫より段々御願申上、免切等被仰付候様相願候へ共、御時節柄甚だ悪敷時節ゆゑ、八十六ヶ村ゟ爲御救米三千石、二月切五百石、五月切五百石、御奉行御才覺米千石、都合五千石九月廿八日に御割符被仰付候處、中々不作には行屆不申躰風聞にも有之候へ共、都而御郡人數四萬近き人有と雖、皆人御掟を重じ、御皆濟之一大事のみ心にかけ、立毛鎌入せし砌よりつねならぬ不作と思ひしゆゑ、農道具・喰食・種物等質入れ、或は妻子等迄も奉公に出し抔、身い血を洗ひ才覺調様いみに心をかけしは百姓の常也。時に十一月の事成るに、毛合村に源六といへる小百姓有り。此者中嶋村三右衞門と云ものゝ弟に而、毛合村へ入聟して、馬も繋ぎ、高三十石計も持し百姓成るに、平生在所出合にも悪者溢れ者といふ取沙汰もなき者也。尤源六二人との聟入にして、此家ゟ來り七・八年を經と雖一子もなく、當御家中より養ひ子

守り育しき也。嗣の入聟二人之子を殘し死せり。姉は十四歳、弟は十一歳也。源六養父有ると聞、極老にて都て不差構落せしと也。然るに十一月十八日之夜、御役所より罷歸り、五つ半時に夕食たべ居申處へ、山代新村十村平兵衞方より申參り候一通之趣。

一、唯今罷歸承り候へば、里中より四十九谷筋より、私近在之村々よしま成る狀相廻し候由に御座候。何共氣毒千萬に存候之間、案內申入候。仍而明日得御意、委細御咄し申度御座候。聞狀も見申處、用九ヶ村許に御座候。風聞承り候へば、北濱筋などは昨日當り風聞御座候樣承り候。何卒明日早く御立寄可被下候。尤御沙汰は被下間敷候、以上。

右之通申來り候趣は、其節畑取番兩人有之內、同役分校村半助倅は、十一月十六日に病死致し、十九日に葬式の筈に而、いづれも參詣致す日なり。源兵衞は平兵衞より之一通見ると其儘、丈夫成る人足召連、先御奉行へ早速言上可申と、取物も取あへず出候處に、草木にも心をおかるゝ折なれば、況や人音には猶氣づかはしく思ふ處に、川向邊にさしかゝれば、向より兩人來るを昧いぶかしくと思ひながら、行違ふとに名を問れて、則番代七右衞門より之直使、早速可被罷出之旨割符合せし途中出合、大聖寺へ八つ半時に出で、其儘奉行所へ驅着行而、委細承り申處、山代新村十村平兵衞方より一札差上申趣。御郡村觸廻狀、廿一日より廿四日迄、十五より六十まで奉行口間に罷出可申候。無間違相心得可申候。若滯り村有之候はゞ、存

入可有之候。此状早速すゑ〳〵に相廻し可申候。若留置候はゞ、存寄有之候。はや〳〵と書し趣御見せ被成候而、御當奉行御辛勞至極に而、色々と御詮議之上に而、御奉行には夜之内に御用番へ御訴訟有り。十村源兵衛儀は御役儀も有之付而、御勘定・御郡・御横目へ御訴訟申上る。其節之御勘定頭中川萬右衛門・安達甚十郎、御郡奉行伊東小左衛門月番也・早崎十郎右衛門、御横目河地千丞・筒井清太夫。其節御家老、其外役人略之。十村は都て六人に而相勤申内、保賀村宗左衛門夏比より病氣引に而、組裁許平兵衛兼役被仰付、半助儀は病死に而、支配源兵衛へ御預に而、其御出勤之十村四人、山中村源兵衛・日末村間兵衛・新村平兵衛・小鹽辻村小四郎也。扨注進之翌十九日は、半助葬式之參詣とて、間兵衛・小四郎分校村へ至り、其さた聞とひとしく大正寺町宿に相詰候處、小四郎組下片山津村より廻文相廻り申に付、寫取りて上げ申也と、息を切て大汗に而持出候頃は、十九日之夜五つ時分之事也。今少行届ざる事も有之と雖、注進之手柄とも言つべし。小四郎右寫之一紙早速奉行所ゐ持參之處、御奉行にも御悦氣に而、扨此躰に候へば行先を相糺、急ぎ取上げべしとの御事に而、則小鹽辻村肝煎長兵衛を以たづねしに、西の庄の廻文鹽屋村に而手に入、廿日之七つ頃にもあらん差上しと也。廻文一通村役漸廿七八ケ村計なれば、外に二・三通も有之べくとの御詮議に而、組々村々瓜の蔓をたぐる樣に問尋候に、打越村には箱宮村より請取、いかゞせんと迷ひ居る處に、右

之御穿鑿に仍て廿一日指上る。然るに今一通高塚村に有り。是も吾詮議有しに依て出し置るは、身を開よ臆病共言つべし。高名手柄など思ひのまゝに成る時節に有ながら、残念の事言ふ計なし。扨翌廿日には何茂未明に相揃ひ、其日御用所之御評定事急に厳重也。御詮議御算用場・御部所上を下へと騒動す。变に不思議成るかな、當秋御用所は御中式臺ゟ御移、其跡をば御算用場と成る。則其内に御部所も御揃ひ、十村部屋は少離るゝと雖御舘内之事なれば、都て御跡役人之御運びも手筈よく、御詮議御心のまゝ成る處に、御勘定安達甚十郎、御用所の脇ゟあがりの間に而源兵衛へ尋之趣は、此度之儀に付何ぞ相替儀も承り不申哉と尋に付、別而承り申趣も無御座、併今晩より出申与風聞も御座候へ共、私役業に奉存候に、多分は出て申間敷哉と奉存候と答へ退く處に、御郡奉行より被仰聞候は、只今其方御勘定頭ゟ、此度之一儀多分は出申間敷哉と申上候様子、御用番へ被仰上。仍之御用番被仰渡候は、源兵衛多分は出申間敷由申上候は、何之考を以申上候哉、存寄之趣御答可申上と被仰聞候間、源兵衛答へに申上候は、格別之工夫も無御座候へ共、楚眛之人氣宜御座候故、肝煎共之内にも追々□□仕候。既に先年郡答一けみの時分、人氣不宜儀も承及申候。其節之御奉行様・御横目様は不動院に御宿、十村共は肝煎権四郎与申者之方に下宿仕候處、其夜四つ過と思しき時分に尋立て申故、何事哉と相尋候へば、権四郎答に申様は、此間は毎日毎朝こてが谷人足共の過

分出申候間、右人足に御座候と申に付、安氣仕居申處、良暫有て何千人と申かぎりなき人々あつまり、十村共漸々寺迄の處御奉行樣迄かけ付得不申樣之躰に御座候と申上る。御奉行樣其趣すぐに御川番樣へ被仰上る。夫より又暫く有て、此度之一件に付而、千石に而相濟候哉、千五百石も御渡可被成哉と御尋有之。源兵衛答へには、さ樣之儀に而は無御座候と申上る。扨御吟味の下役共より御用所注進として、明廿一日月津村興宗寺・打越勝光寺・庄の勸歸寺・勅使願成寺等之釣鐘、不意につき申相圖に馳集るべきとの風聞有之由御訴申上るによつて、急に被仰渡る。右寺々に有之村々へ申付、釣鐘を蔣筵に而卷、繩を以からげ置候樣に、早速可被仰渡との御評議有之と雖、御奉行御請なく、然る時は右鐘を相圖と申は風評也。夫を蔣筵に而卷申さば、心なき諸人に迄云教るに似たり。迚もおろすより外有間敷との御評議一決して、左候はゞ鐘おろす樣村々へ可申付との被仰渡有之。時分は早晩景にも及ぬれば、頭取十村共答へけるは、中々事急也。村役人呼寄候而申付候而は延引にも相成、殊に御裁許も違ひ、今も計り難き一大事。寺社所より御役人被差向、寺々へ直に被仰渡候はゞ御安堵にも可相成。尤鐘おろし申人足の儀は、いかほどに而も其村々より可指出と申上る。俄に割場足輕數十人寺ある村へ被遣、其夜に釣鐘おろせし也。其外往還筋・北濱・西の庄・沖中・紙屋谷等、御役人櫛の歯を引が如し。其夜之騷動筆に盡しがたし。就中頃日十村中存寄いかゞ心得居申

哉と、御用所甚だ御氣遣敷思召さる。人々了簡御聞被成度との御事にて、則於御郡所に一人宛呼出され、人々存寄共に申上よとの儀に付、腹藏を打明け申上る。尤人々申上方は違ひとは雖、締る所大變には相成り申間敷との答に依て、御奉行にも御安堵也。扨則右人々之存寄有躰に御用所へ被仰上。依而御用所にも少しは御安心あるらんと申あへり。尤十村中も、此節親子兄弟にも心のおかるゝ折なれば、專ら御請合申事のならねば理り也。去ば十村共之申上之如く、急變もなし、廿一日迄に三通の題文御上御手に入し上は、さして此上大變に可成ともおもはれず。依て右の廻狀何村より初り、何村へ何方迄り繋哉之旨、いさいに書記可差上との被仰渡に依て、廿一日之夜組々肝煎とも十村町宿迄召呼、割付幾致相尋候處に、三通の初り、一通は動橋村、一通は毛合村、今一通は高塚村也。尤狀之出初之日は十一月十七日之夜に而、廿一日迄廻りし事なれば、再湯之村の有しも理也。則廻狀之村々割付奉行所へ差上ければ、第一動橋村等御不審に被思召、既に御疑ひも可懸折節なれば、動橋村肝煎身を置に所なし。何卒して手掛を求度と、村中一人吟味する處に、村小走へ狀一通投込しとその、正敷毛合村長右衛門也と、村番人を初、外に一兩人も見請申由訴けるこそ仕合也。依之早速毛合村長右衛門廿二日夜被召捕、翌廿三日御奉行伊東小左衛門宅於役所に、源兵衛・平兵衛相揃御吟議有る處に、一言も白狀に不及、既に目も眩かゝらんとせし處に白狀之躰なく、依

嘉右衛門は津波倉村の百姓

而禁籠被仰付之被仰渡に驚き、初て張本人源六・嘉右衛門と申事申上しと也。

〔毛合村一件留書〕

天明四年甲辰七月十一日毛合村源六梟首被仰付る。

毛合村　源　六

右之者五ヶ年以前可及強訴之旨企徒黨候体相聞候に付、召捕遂吟味候處、及白状候。其上今度牢を破り致縊死候之段、就重罪梟首申付候。

十二月九日。前田治脩病を以て參覲を延べたるが故に明年の年頭拜賀を受けざること等を告ぐ。

〔政隣記〕

十二月九日左之通、於金澤御横目中以添廻状觸有之。

付札、御横目に

加賀守樣御痛積等爾々不被遊候に付、御參勤御延引御保養被遊候得共、今以御同篇に被成御座候。依之御家中之人々、役儀幷跡目殘知・新知等被下候面々、御禮被爲請間敷旨被仰出候條、献上之御太刀・青銅等目錄を以指上候等に候間、右目錄當月廿八日付に而、同日御奏者番に相達可申候。尤組・支配之人々に可被申渡候。

右之趣夫々可被申談候事。

十二月

付札、御横目ゟ

加賀守様御病積等爾々不被遊候に付、御参勤御延引御保養被遊候得共、今以御同篇に被成御座候。依之来年頭御家来中等一統御禮被爲請間敷旨被仰出候條、可被得其意候。且又一統年頭御祝儀献上之御太刀等目録・青銅目録共、當年中に取立、元日不爲指上候筈に候條、正月朔日之日附に而、自分并組・支配之人々、且江戸表等罷越所に罷在候人々目録、當月廿一日より廿五日迄之内御奏者番ゟ可相達候。御太刀馬代等、右日限之内御進物所迄直々可被差出候。都而近例申聞候様ゟ年頭献上物上方之通可被心得候。但在江戸等之人々目録等者、代判より取計可申候。

一、御家中子供御禮も不被爲請候に付、尤献上物に不及候。

一、元日は頭分以上登城期限等、前々御留守年之節之通可被相心得候。尤八日・十五日・二月朔日茂、平月之通出仕可有之候。

右之趣夫々可被申談候事。

十二月

十二月十八日。前田治脩來年頭の謠初等を廢することを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十八日、左之通御用番河内守殿被仰聞候由、御横目廻状出。

來正月御謠初無之。御射初御覽無之、年寄中罷出候筈に候間、御間圍等萬端御覽無之振に相心得候樣、夫々可被申談候事。

十二月十八日。他國に使するものに金錢を與ふることを廢す。

〔政隣記〕

十二月廿八日、左之通去十八日御勝手方前田土佐守殿御覺書を以被仰渡候由、定番頭例之添廻状を以談有之。

御勝手御難澁に付、他國御使人に被下金、是以後被指止候。只今迄之被下高御貸渡、二十年年賦無利足に而返上可仕候事。

十二月廿三日。小松御馬廻喜多岡傳藏を流刑に處す。

〔御reference雜記〕

小松御馬廻喜多岡傳藏病氣申立、近年御番引仕、十二ヶ月越に罷成候。以前暫出番早速御番

引、去秋も有之通に而、御番引之內も度々致外出、且大乘寺之富突に加り不埒之取引有之、長屋多七郎よりも及屆候儀有之。猶又小松町人には武士をも恐れ候故、町人へ押借等申懸、不致承知者共へは切殺可申抔申、無是非指出候躰。此間には猶更增長之旨、此儀に被成置候而は異變も出來可仕哉。右風俗御馬廻中へ移候而は猥成儀候間、內々相達候旨、御番頭稻垣源太左衞門御用番求馬へ申聞、覺書も出之。依之長屋多七郎相招尋候處、常々不行狀勝手難澁、理不盡成いたし方有之。右不慎故御奉公も怠慢、別而夏以來不法之儀共有之、惣躰不埒至極捨身之行狀共も有之。小松町人之內不宜者共荷擔仕不法有之、改方御締に其障候旨等申候付、一通り御知行被召放候ては、御城下徘徊仕候事。か樣之不屆者御城下に罷在候而は害に成候間、惣躰爲御締方越中五ヶ山之內へ流刑と僉議。十一月十九日伺之處、十二月十七日僉議之通被仰出。

〔政隣記〕

十二月廿三日於金澤左之通被仰付。

小松御馬廻　喜多岡傳藏

五ヶ山へ流刑。配所へ被遣候砌迄一類へ御預。

正月朔日。前田治脩金澤城に於いて病むを以て年頭の賜謁を廢す。

〔三守御譜〕

安永十辛丑年正月、公御疝積等爾々不被成に付、御家中一統年頭御禮不被爲請。

〔政隣記〕

元日於金澤、六半時より頭分以上登城、於表御式臺御帳に付。於柳之御間列居、御年寄衆に謁退出。

正月朔日。前田治脩使を柳營に遣はして太刀馬代を獻る。

〔政隣記〕

元日、快晴長閑也。江戸年頭御作法都而御留守例之通。御太刀馬代御獻上之御使者御小將頭大藪勘右衛門、素袍等着用登城。且御館に御年賀之御客衆等に、左之通二汁五菜之御料理出。

正月二日。前田重教使者を治脩に遣はして年頭を祝す。

〔政隣記〕

正月二日快天、寒風頻に吹。年頭爲御祝儀從中將樣御獻上之御大太刀馬代持參之御使者、御

先手物頭久世平助素袍・烏帽子着用登城。但組頭代也。

本文は江戸邸にての記事なり
備後守は前田利精

君上は前田治脩

正月十四日。前大聖寺侯前田利道卒す。

〔政隣記〕

正月十四日、遠江守様先達而より御所勞之所御指引被爲在候段申來、伺御容躰御大小將使被遣。西八對馬御指重之段從備後守樣御案内御使者、或上對馬大切之段同斷に付、物頭御附使者被遣。右に付早飛脚に而金澤は言上有之。于時亥下剋御卒去之旨御使者を以御案内有之。右に付鳴物等遠慮、日數は追而觸有之。〔三日遠慮上達有之、小屋籠有之〕君上實御いとこ之御續に付御服者有之。

遠江守樣御法號順照院殿徹巖義心大居士。〔諸識四十九〕

正月十六日。諸役所の經費を從來の三分一に減ずべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

正月十六日、左之通諸頭御用番等御呼立、於御別席御用番并奧村河内守殿・前田大炊殿・横山求馬殿御列座、同役可登傳達旨等被仰渡。

御上御勝手年々御指支に付、御入用方前々之半減を以取晴候樣、諸向え先達而被仰渡置候儀。然所當年は別而御難澁至極に付、萬端御入用方前々之三之一を以取晴候樣諸向え被仰渡候條、御儉約方心付之趣も有之候ば可申聞候事。

右は前田利道危篤の事に係る

正月廿二日。前大聖寺侯前田利道卒去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

一、右早飛脚、同月廿二日金澤着に付、爲御見廻早打御使御表小將長瀬五郎右衞門に被仰渡、同日九時前從御城發足。廿七九日九半時江戸着、逗留之間無之に付、いとこ細井彌一郎方に同居。備後守樣御屋敷に御使相勤。翌廿八日夜九時前發、二月七日金澤歸着。

但、發足前金七十兩御貸渡、十五兩御内々拜領被仰付。

一、御卒去之早飛脚も二十二日金澤着。依之普請・鳴物・諸殺生、今日より明後二十四日迄三日遠慮与御用番御觸有之。

本文前田利道の事に係る御先手とあるは御先手物頭の意

正月廿二日。前大聖寺侯前田利道の柩江戸を發す。

〔政隣記〕

正月二十二日曉寅上刻御發棺、大聖寺に被爲入。御附使者御先手也。御發棺之上備後守樣爲伺御容体御大小將。右之節大御門前御通行無之、茅町通也。依而御作事方御門前に、丑之刻五歩より警固足輕召連、御先手久世平助・御横目石川茂平爲御締方罷出。

正月廿四日。德川秀忠百五十回忌法會を金澤如來寺に執行す。

〔政隣記〕

正月廿四日、於芝増上寺表廿日より廿二日迄有徳院様百五十回御忌御法會有之、今日御成有之。金澤如來寺も御法會有之。

廿二日迄 廿四日成 御忌

二月朔日。前田治脩三月中を以て參覲すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月朔日、金城出仕之面々江、君上段々御快方に付三月中御參府被遊候由、御用番被仰聞。

二月十二日。前田治脩及び重教の使者柳營に上りて光格天皇の元服を賀し奉る。

中將は前田重教 加賀守は前田治脩

〔政隣記〕

主上御元服之爲御祝儀、從金澤江戸江被指出候御使者、御廣式番神長右衛門江被仰渡、今二十八日金澤發足、二月十日江戸着、十二日御使勤、夫々相濟、原仁右衛門与交代直に相詰。中將様より之御使也。從加賀守様より之御使者、江戸に而仕立に相成、内作事奉行鯖山茂兵衛江被仰渡、長右衛門同日御使相勤。

二月二十日。會所銀の前借は之を賜はりたる例を廢し自今年賦返納すべ

きを命ず。

〔政隣記〕

二月二十日、左之通會所奉行より廻状有之。

會所銀唯今迄前借被下切之所、御勝手次第に御難澁に付、是以後被下切被指止、前借之分無利足に而、百石に付二十目宛毎歳七月十五日切上納、前借幾度相重り候共、一紙證文に改、右之通可相心得候。御扶持方等之人々も、右同准に而三月取立可申旨、前田土佐守殿被仰渡候事。

二月廿五日。他國詰諸士の扶持方代及び隨從人馬の定數を減ずべきことを告ぐ。

〔典制彙纂〕

一、御扶持方直段、只今迄一石百七十目充に候處、僉議之上二十目相減、百五十目充に相極候條、今般御兩殿樣御供人は、發足之日より右之通百五十目充之直段に而相渡候筈に候。先達而江戸等に相詰罷在候人には、四月朔日より右直段を以相渡候事。

但、發足前於此表相渡候中勘銀は、只今迄之通相渡、彼地に而本勘指引之節、右直段を以

相極候事。

一、乘馬飼料大豆直段、只今迄之通に候事。

一、京・大坂・大津詰人御扶持方直段、只今迄一石百六十目充之内二十目相減、百四十目充に相極候事。

附、乘馬飼料大豆直段只今迄之通。

右之通達御聽相極候條、可被得其意候。尤江戸會所幷京・大坂詰人にも、各より可被申談候、以上。

辛丑二月廿五日　　長　大隅守

藤田兵部殿
神保舍人殿
小堀牛右衞門殿

頭分

一、役料共三百石　上下十人馬一疋　但定人數共
一、同三百五十石より四百石迄　同　十人馬一疋
一、同四百五十石より七百石迄　同　十一人馬一疋

一、同七百五十石より八百石迄　同　十二人馬一疋
一、同八百五十石より千石迄　同　十三人馬一疋
一、同千五十石より千三百石迄　同　十四人馬一疋
一、同千三百五十石以上都而　同　十五人馬一疋

但、都而手替足輕幷役付小者有之役柄之人にはゝ、右人數之内ゟ立込候事。

平士

一、百　石　上下　四　人
一、百五十石　同　五　人
一、二　百　石　同　六　人
一、二百五十石　同　七　人
一、三百石より四百石迄　同　八　人
一、四百五十石より七百石迄　同　十一人馬一疋
一、七百五十石以上都而　同　十二人馬一疋

御醫師

但、祿十五人扶持以上之者、前々在留中二人增被下候處、近年一人增に相成候へ共

右、此度より増人被止候事。

一、五人扶持より三十人扶持迄　同　四人

一、五十人扶持　同　五人

一、百石以上ニ平備割合之通

諸小頭

一、六十石より百石迄　上下　三人

一、百五十石以上　同　四人

新番

一、上下三人唯今迄之通

與力

一、百石　上下　三人

一、百五十石以上都而　同　四人

御徒等

一、六十石より百石迄　上下　二人

但、御切米等之者只今迄之通　上下　二人

當時は唯今の義

一、百五十石以上都而　　同　三　人
一、四千石之當り　　御家老役
但、二千石より内者知行當り之通。
一、平人持之儀は、自分知千五百石以下は頭分人高之通、千五百五十石以上者其時之僉議之事。
一、道中往來者尤知行當り之通。且又御使に被遣候節は、道中并在留中知行當り之通。
右人數減少之儀、今般御兩殿樣御供人は參着翌日より相減、先達而より江戸等に相詰罷在候人々は、四月朔日より相減候事。

〔政隣記〕

御勝手甚御指支之趣等別紙に申聞候通に候。依之江戸詰人御扶持方代、是迄百七十日之定直段に候得共、今般之御在府より當分百五十日宛に相極、并知行當り人數高も相減候。御扶持方代近年當時之直段に相極候。一統致難澁候上又候被減候儀、人々迷惑に可存候得共、諸向是迄段々手詰に相成候上、此度猶更御手を被入候儀に候。右之通御差支に候得者、誠に可被成樣も無之に付、委細相達御聽候所、精誠詮議之上之儀に候間、乍御心外當分相減可申旨被仰出候。則御扶持方減方等別帳に相記候通に候。京・大坂詰之人に茂、右に准じ致減少候。

長の觸は江戸に於いてなり

光格天皇の踐祚は安永九年十二月四日に在り

然ば一統可爲規摸候得共、成だけ致勘辨取繕、御奉公不指支樣相心得可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内拔詐有之面々は、其支配わ(よ)も不相洩候樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

二月　長大隅守

二月廿五日。前田治脩三月廿三日を以て參覲の途に就くべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

一、二月廿五日、加賀守樣來月廿三日御發駕与今日被仰出。

一、同日去十四日金澤發之町飛脚來着、加賀守樣三月下旬金澤御發駕に而御參勤之旨、公邊江御屆御使、御番相勤候旨申來、翌廿六日伴源太兵衞勤之。

二月廿七日。光格天皇の御即位を賀する爲金澤より使者を京都に派遣す。

〔政隣記〕

二月二十七日、去年十一月十日に有之通、人持組成瀨内藏助儀、就御卽位に爲御使今日金澤發出。右に付於年寄衆席御羽織一・卷物二拜領、拔露御大小帶。

二月廿八日。參觀供奉の諸士に旅行の用意等を節約すべきことを告ぐ。

御勝手甚御指支に相成、其上去年過分之御損毛に付、當春大坂御廻米之御手當無之、江戸御仕送必至と差支、當時は寔に御日用も御取續難被成程之場に至り、外に御手段も無之に付、是非御國方より調達銀を以可被相辨外無之候。依之御在府中、只今迄一ヶ年之御入用六十貫目計に候得共、元來御取箇に不致符合候故、年々御難澁相增候儀に付、段々御穿議之上、一ヶ年惣御入用四千貫目に而相辨候趣に相極り候。左候而さへ右御運方甚六ヶ敷候故、是迄段々御省略之上に候得共、猶又今般御出府御道中は勿論、於江戸表も此上如何樣も嚴敷諸事御省略有之、右御入用高より內輪に相濟候程に無之而者難被成、曁地方御入用茂年中二千貫目計に而相辨不申而者難相濟候。然ば自他諸向御入用、唯今迄之半減或三之一程にも不相減候而者難相成候間、諸事瑣細に心を付、少分之事たり共相減可申候。無左候而は御公務も欠候所に至り、誠に大切至極之儀に候間、此處恐察仕、何も和順に申談、御省略之筋相立候樣可相心得候。

一、今般御供之人々旅行用意等、一切費ヶ間敷儀少も有之間敷候。着類等其外諸品都而見苦敷儀も御貪着無之候。且又於江戸表小屋幕等之事も、去春申渡置候趣共人々違失無之樣、猶更急度可申談候。此度新に御供被仰渡候人々者、去春申渡候趣承知有之間敷候間、改而可

申渡候。

但、家來之給銀古來より御定も有之候所、近年別而猥に相成、高給銀に召置候者も有之躰に候間、以來左樣之儀無之樣、急度可相心得候。

右之通一統可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之面々ゑ可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配ゑ茂不相洩樣可被申渡候事。

二　月

右、御用番大隅守殿より御觸有之候事。二月二十八日也。

二月。諸郡に藩の財政窮迫の狀を告げて農事に努めしむ。

〔司農典〕

付札、改作奉行ゑ

御勝手御難澁至極之儀者相替承知之通に候。然處去作御領國一統不作に付、過分之及御償米高に候。元來近年御難澁に付、大坂御廻米も過半御調達を以取計來候處、右御調達御借返之分不殘御償米に相成候に付、當春御廻米御手當不致出來、無是非減石被仰付候御詮議に候。大坂御廻米御指止候而者、江戶表御仕送指支、暨御借金之取捌一圓難相成。左候得ハ無據御借金之分ハ不得止事公訴にも及可申、彼是御外聞にも拘り候御難澁共可致出來候得共、何分

取計之手段も無之に付右之族に候。前段之通、去作不作に付御償米も有之候得共、元來之願高過分に付行屆不申躰。當時出作之時節にも至り候間、夫食等指支候御郡々も可有之候。併右躰御難澁之御勝手振、最早御公務も被爲欠候程之御様子、誠に御大切至極之御時節に至り候條、右等之趣各にも相心得、御指支之趣委く御扶持人等江被申聞、心服を以出作之所相働候様、幾重にも可被申談候。ヶ様之御指支之趣不相辨、不吟味之願方仕候者於有之者、嚴重可相咎候條、是等之趣兼而可被申聞置候事。

二月

御勝手御難澁之儀に付、別紙之通御算用場奉行中より被申談候。元來御難澁之儀は今更不及申訖、一統粗恐察之通に候。累年御難澁之處、種々取計等を以是迄御取續之儀に候得共、最早當時御行詰り、如何共可被仰付手段盡果申候處、就中去作御郡方不作に付、則其節申渡候通、種々御調達等を以御償米被仰付候。右爲躰に付、當春大坂御廻米可被仰付手段も無之、御廻米も御指止に候首尾に至り候。然者江戸御仕送も指支申儀、御公務も被爲欠、御外聞等にも拘り甚不輕儀に候。右之御様子に候得者、拙者共詮議不行屆儀も可有之候得共、誠に御大切至極之場に至り候條、是等之趣各會得有之、末々之者共迄も得与爲申聞、累年之御恩澤存付、一統心服を以、當時出作之時節にも至り候間、何分粉骨を盡し、夫食等差支候儀も有

之候に付、難事共甚許之十村相働取計候樣可相心得候。是等之趣申渡候儀、拙者共役所にも不相當儀も有之、存外之事に候得共、格別之御時節故如此申渡候事。

右之趣末々之者共迄不相洩樣可申聞者也。

丑二月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

三月二日。前田治脩參覲の期遷延したるも供奉の士に扶持方を增加貸附し得ざることを告ぐ。

〔政隣記〕

三月二日、左之趣書奧村河内守殿御渡之。

御參勤今年迄御延引に付、春御供被仰渡候人々、末々迄甚可爲難儀儀に候。此前暫御延引之節さへ茂、一統廿日分御扶持方代御貸渡之儀に候得ば、此度は猶以相應に御貸渡も可有之儀に付、被仰出之趣も有之、種々遂詮議候得共、年々御難澁之上、去年之不作に付、過分之御損米も出候而、彌增之御差支に相成、今春に至り候而は寔に御日用も指支程之場に至り候故、此上にも猶又萬端御省略被成候而さへ、御參勤御入用等必至与指支候。御參勤御入用之儀は別而大切之極成事に付、色々打碎御運方之儀迄僉議候儀に候。ケ樣之振故御供人に御貸

渡之儀は如何共難相成候間、人々難澁至極之儀ながら、如何樣共仕致御供候儀肝要之事に候。右之趣被其意、組・支配之人々に可被申聞候。組等之內裁許有之人々は、其支配にも不相洩候樣可被申渡候事。

二　月

三月十三日。前田重教金澤を發して江戸に向ふ。

〔政隣記〕

三月四日、中將樣御發駕御當日一統布上下着用、且平日者七十間御門外下馬・下乘に候得共、御發駕御當日迄、柵御門前に而下馬・下乘等之儀、御横目廻狀有之。

中將樣當十三日就御發駕、十一日頭分以上登城恐悅等、且又御發駕御當日登城加賀守樣に恐悅可申上旨、御用番求馬殿より御廻狀出。去春御貸渡之會所銀借用之人々、當春御供に而罷越候間、格別之趣を以、來年七月より元銀取立候樣、前田土佐守殿被仰渡旨、會所奉行より廻狀出。

〔政隣記〕

三月十三日五時過中將樣御發駕。

三月廿三日。前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。

〔政隣記〕

三月二十三日九時頃御發駕、御作法前々之通。

〔典制彙纂〕

一、御供人歩御乗用之儀、及極老乘懸馬に而旅行難成人々者各別、其外者堅無用。頭分たりとも年若成人々者、乘懸馬可然候事。

一、御家老役鑓三本・矢籠・替組具足櫃迄之事。

一、人持鑓三本・具足櫃、但替組に而も荷に而も。組頭鑓二本・荷具足櫃。

一、組頭以下鑓一本・荷具足櫃。

一、平士之具足者荷物認之事。

右之通相窺候處、伺之通に被仰出候條、被得其意、夫々可被申渡候事。

三月廿五日。前田重教江戸に着す。

〔政隣記〕

三月二十五日、前記十三日に有之通に候所、中將様今夜之義御泊御止めに相成、昨夜桶川御泊りより直に今日暮頃江戸御着、御上邸に被成御座。御出入之御旗本衆等爲御待受朝より御出之所、依て御着御遅く故暮前に御退出。尤壹二汁五菜御料理出。

一、御供御家老役篠原織部殿、御近習御用戸田與一郎、御道中奉行等御用人兼帯津田平兵衞・和田次郎兵衞、物頭並御近習不破和平、御表小將御番頭宮井彥太夫・山本又九郎、御近習御使番石野源兵衞・關屋市右衞門、御奥小將横目岡田助太夫、御表小將横目河内山七左衞門、御表小將等十八人、奥御納戸奉行、御膳奉行、以上御身附。御表より會所奉行・割場奉行一人宛、宿割御大小將二人、御旅籠取次一人、御右筆二人、御醫師二人、御外科・御針一人宛、新番三人、三十人頭一人也。

二十七日朝六半時御供揃に而、御老中方に中將様御廻勤。

三月廿七日。前田重教の近習新番蓑輪德右衞門刎首に處せらる。

〔政隣記〕

三月十五日、中將様御手廻御道具、御發駕前四十品計紛失に付、御近習新番蓑輪德右衞門・佐伯直七、御歩山岸壽太夫三人を、於池田繞平宅御詮議之上、一類に御預之段、去十日金澤發之町飛脚に申來。

附、德右衞門七歳之悴も一類に御預之由。

右德右衞門父御近習組外蓑輪德兵衞、せがれ德右衞門儀御道具盗取候儀白狀に付閉門被仰付、其後指扣被仰付。四月二十二日御免御近習如最前与被仰出。

申來は江戸へなり

是月江戸大雪降る

〔政隣記〕

三月十五日記に有之喜輪徳右衛門儀、御手廻御道具共盗取候儀露顕に付、去二十七日於公事場、徳右衛門并悴熊五郎七歳共刎首被仰付。

三月廿八日。淺野川及び犀川の漁撈に就いて令す。

〔政隣記〕

三月廿八日、犀川・淺野川大橋より下、魚殺生御停止之處、今般御免被成候。網殺生は跡々之通、川元之者より札請申筈。淺野川之儀は前々之通に候。且又右染川・金くわ川并堀々に而投網打申儀は、先年より堅御停止に候事。

右御用番求馬殿御觸紙面出。

三月廿九日。徳川家治使を遣して前田重教の出府を勞せしむ。

〔政隣記〕

三月二十九日八時過中將様へ、今般就御參府上使御老中田沼主殿頭殿を以、御懇之被爲蒙上意、萬端御前例之御作法に而御都合能被爲濟。上使御料理・御菓子共御斷に付出不申候。

一、中將様御供揃に而、御老中御廻勤、暮前御歸殿。

三月晦日。前田重教出府の後初めて騎射を試む。

〔政隣記〕

三月晦日、中將樣御着府後今日而騎射被遊。未上刻より於御殿舞臺御能、御番組左之通。并一管一調等被仰付、暮頃相濟。

但、當番御歩並以上拜見被仰付、御禮は於御横目所御横目中ぇ迄申述。

鶴　龜　御　羽　衣　彌五郎　祝言金札　松次郎

四月朔日。前田重教柳營に上りて出府の禮を行ふ。

〔政隣記〕

四月朔日陰、申刻より微雨。昨日御老中方依御奉書。中將樣今朝六半時御供揃に而御登城、御參府之御禮被仰上、御下り御老中方御廻勤。

〔袖裏雜記〕

左之御親翰、隼人江戸發足途中迄被成下候由に而隼人出之。

御自分國許ぇ被罷歸、年寄共等へ、第一此度殿中向首尾能、直御請之段よく〱可申聞候。只今迄無之儀に御座候。老中御取合も無之儀之御請、直に公方樣ぇ申上候趣は、甚重き譯に御座候。不一通御懇意之御事叵有ゝ呉々可被申聞候。爲其如此御座候、以上。

卯月九日夜

寶曆九年五月廿五日の條參照

西尾隼人殿

四月五日。廿二ヶ年間入牢存命したる者の赦免に關して議す。

〔袖裏雜記〕

四月五日

宮腰町北河縁屋長右衛門せかれ長三郎儀、寶暦九年五月宮腰道にて毛利三郎太夫ゟ致慮外、法外之仕形不屆に付永牢被仰付候處、今以存命、今年にて廿二ヶ年に候。憐愍を以御宥免可被仰付者にても可有御座哉之旨、公事場奉行紙面出候。其砌之樣子承候處、同年五月廿五日三郎太夫儀、林源左衛門同道宮腰ゟ罷歸、七半時過河合左膳・岩田平左衛門・右源左衛門等同道罷歸候節、寺中通往還道にて町人躰之者、源左衛門家來に鎗持候間持籠にさセ候樣申付、答候處慮外之仕形有之に付、打擲いたし候處、段々過言手向候故切捨候。右之者宮腰之者之躰に付、同所役人等呼寄相糺、家來等相添可罷歸所、家來ハ足先へ相返候故寺罷越候內、金澤町續近く成候。居宅へ歸候而は隔取に付、堀十郎兵衛方ゟ罷越、提灯・鎗等爲持、源左衛門其外二人之者同道、最前之場所へ罷越候へとも見え不申、宮腰へ引取候。慥に切留候与存候へとも、左樣に而は無之、心外成儀に而候旨申聞候。右之者手疵輕く、生死之沙汰には及不申候故、宮腰町奉行佐藤半五右衛門申談相濟候。然其往還道等及騷動候故屆候

本件の結末は明ならず

旨、同日御用番主水へ頭高山善左衛門紙面を以申聞、宮腰町奉行よりも書付出、頭手前に而、右町奉行申談相濟候由及斷候へども、三郎太夫取捌不埒に聞へ候付、段々頭へ尋候處、前後不都合之首尾に付、三郎太夫は閉門、同道人も迷惑被仰付候。右長三郎侍へ對し申分不宜、法外成仕形故、永牢被仰付候。三郎太夫等は又翌年二月御免事濟候上之儀、且長三郎は御咎嚴重に而牢舍被仰付候へば、最早三郎太夫に對し候趣は無之儀と奉存候。先以廿三ヶ年禁牢存命之者はあまり承傳不申。指當例も不見當候へども、赦之砌にも候間、旁格別に御宥免出牢被仰付、居在所之外徘徊不仕樣申渡可然と僉議、四月五日伺。且三郎太夫手前伺之節、三郎太夫儀侍道を取失候躰に付、遠島等可被仰付哉。左候はゞ長三郎樣殺害可被仰付者之旨等御僉議有之。畢竟三郎太夫閉門、長三郎永牢に而死刑代に而は無之旨を申越。

四月六日。前田治脩江戸に着す。

〔政隣記〕

四月五日、信州丹波島滿水に而一日之御逗留に相成、明六日御着府。中將樣に今度上使之段、於御途中被聞召候に付、爲御禮御老中等に之御使、御旅館取次石黑佐七郎に被仰付、熊谷驛より指急發出、今夕江戸着。

〔政隣記〕

四月六日七時御着府。御病得而御參勤に付、御登城・御例勤茂無之。

四月十一日。金澤に於いて諸士に前田重教着府の顚末を告ぐ。

〔政隣記〕

四月十一日御用番安房守殿より前々日之依御觸文、頭分以上布上下着登城之所、柳之御間に而御年寄衆等御列座、御用番左之通御演述。依之爲恐悦登城之人々、御用番御宅に罷出。

中將樣御道中御機嫌克前月二十五日御着府被遊候處、同二十九日以上使田沼主殿頭殿御懇之被爲蒙上意、且又當朔日御登城被遊候所、御白書院において御參府之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、重而難有御仕合被思召候。此段何も可申聞旨被仰出候事。

四月廿一日。前田治脩柳營に上りて參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

五月朔日江戸より來狀、左之通申來。

加賀守殿前月十三日御參府後初而御老中方御廻勤。同十九日上使御老中松平右京大夫殿を以御懇之被爲蒙上意、同二十一日御登城、御參勤之御禮被仰上、都而御例之通被爲濟候事。

〔德川實紀〕

四月廿一日、不時朝會あり。松平加賀守治脩を始め、參覲二十人。

夜具は泊番の士の自宅より齎さしむるもの燒入木の儘出入歟

五月四日。城門の番人に命じ嚴に物品の搬出を取調べしむ。

〔政隣記〕

五月四日左之趣御横目廻狀出。

御城中勤番之足輕・小者、夜具燒入等綿密に相改申筈に候所、近年等閑に相聞へ候。去冬以來於城中度々紛失物有之候。都而御門改方等閑故之相聞え候に付、是以後綿密に相改見分、無心許物者懷中并合羽 籠下迄も相改相通候樣、所々御門番人に申渡候條、家來末々番人相改候に不致違背筈に候得共、尙更可申付旨一統申談候樣、御城代安房守殿被仰渡候事。

五月九日。前田治脩郡奉行等に命じ要脚調達の督促を怠らざらしむ。

〔御親翰留〕

一、今般其方共支配所より要脚調達、何こやらん澁滯の處も有之樣に相聞へ候。彌左樣に候哉。去年不作、彼是無據儀も可有之と令遠察候へ共、外々より可指出と存候者も、一方滯候輩有之候へば其處へ被誘、其志空敷成候儀は下情の習に候。然ば惣樣の釣合肝要に候。今度其方共同列一致熟談致出情候樣申聞候に、此意味に候間、能會得いたし、猶又無間斷相はたらき可申候、以上。

五　月　九　日

加州郡奉行中
越中郡奉行中
能州郡奉行中

五月廿四日

一、當月九日之御覆啓敬而奉拜上候。私共支配所ゟ御要脚御調達之儀、何とぞ不遅滞候處茂御座候様被爲聞召候。去年不作、彼是難澁儀可有御座被爲思召候得共、外々ゟ可指出ヶ有候者茂、一方潰候迄御座候得者、其所ゟ被爲、其志奉感戴成候儀、下情之程に被爲思召候。然者急度之釣合肝要に御座候。今度同列一致熟談、出情仕候様に御書被成下、奉畏候。今度大坂ゟ御達来被指上、御國より御仕送之趣に御改御座候に付、町・在より新發御引當に而、御要脚御調達之儀被仰渡候段、年寄中申聞候に付、近年打續御借り銀御座候上、去年不作、當春出作茂指支候躰見聞仕罷在候得者、御郡之内に而者御調達調兼可申、猶更申渡儀難仕候。乍然重々被仰渡候儀に御座候間、表立候而者難申儀に候得共、越中者飛州、能州者御預ヶ地之方向寄茂御座候間、御調達之儀承見可申候段申達、其後頭役之者共打寄内談仕、遠所町・在ゟ千貫目之割仕候得共、御郡之内へ申渡候儀者何分に茂難仕御座候に付、右割合仕候御調達高未申渡候得共、出作等に指支不申出方之分に申渡、少分之儀者指出申候得共、右申上候通に

御座候而、近年御借り銀御座候上、去年作毛不熟、最御郡之内に而茂、先達而被爲聞候通不同者御座候得共、一統不作之儀者相違無御座候。然者强而申渡而者御調達茂調不申、若人氣に茂相障可申儀茂可有御座与奉存候間、町方同様に者申渡候儀仕兼申候。御郡之内に而茂相障不申出方茂御座候者、猶更可申渡被奉存候。依而御請上之申候。

一、御親翰幷御封目御印奉返上候、以上。

丑五月廿四日

芝山織人 判
矢野仁左衛門 判
槻尾左膳 判
九里幸左衛門 判
大河原助進 判
高畠五郎兵衛 判
杉浦庄兵衛 判

五月十三日。大聖寺侯前田利精歸邑の途金澤に宿泊す。

〔政隣記〕

五月十四日、備後守様昨夜御城下御止宿、今朝御發駕。例年御在國には御登城、貳御寺御參

語に御留守年には御寺御參詣等有之候所、此度は其御儀無之。且從江戸此方樣御歩横目兩人御在中御指留被置、右に付難說多。何れ歟不詳。

五月十八日。本鄕邸吳服所に於いて晒布及び絹紛失す。

〔政隣記〕

五月十八日、江戸御上邸於吳服所、晒布七反・絹一疋紛失、段々穿鑿之處、右品物坂本屋質屋出、盗賊者不相知に付、同月廿七日於會所雪隠小遣小者縊死、右之者所爲かと申事候得共相分不申。右小者は平日至而實躰成者に候間、盗候族には有間敷与云々。

五月廿三日。前田重教附の士佐々木孫兵衛知行を増し人持組末席に列せらる。

〔政隣記〕

五月廿三日左之通。

一、三百石御加增先知都合千三百石　佐々木孫兵衛

中將樣御近習只今迄之通。且人持末席に被仰付。

五月廿三日。幕府前田重教の女頴姫を會津侯世嗣松平容詮に婚せしむる

肥後守は今津侯松平容頌駿河守はその子松平容詮

三月廿七日條參照

ことを許す。

〔政隣記〕

閏五月朔日、左之通今日出仕之人々に御弘有。依之爲恐悦御用番主水殿御宅に相勤。

顯姫樣御儀、肥後守樣御養子駿河守樣与御縁組之儀、御願置被成候處、前月廿二日御老中方より依御奉書、翌廿三日御登城被遊候處、御願之通被仰出、難有被思召候。此段何茂可申聞旨、拙者共に以御奉書被仰下候事。

五月廿三日。先に刑せられたる嚢輪德右衛門の同類佐伯直七等三人刎首に處せらる。

〔政隣記〕

五月二十三日、今日於公事場左之通被仰付。

二御丸御近習　山田常左衛門

金谷御近習　山岸壽太夫

同断　佐伯直七

前記三人共刎首。

右三月一類ゟ御預之上、於公事場度々御吟味之上、於同所禁牢被仰付置候所、今日右之通刎首被仰付。山田も同類之由云々。

豊島徳右衛門は三月二十七日刎首被仰付候所、右三人者今日也。

五月廿六日。大小將組細井彌一郎不埒を以て組外組に列し指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月廿六日、左之趣御用番大炊殿就被仰渡候、頭不快ニ付於宅、神尾伊兵衛并御番頭河内才記立會申渡有之。

付札、不遠慮ニ付

細井彌一郎

右彌一郎儀、前月二日江戸表發足、當日家來小著御門外ゟ使に指出、晩景迄不罷歸候所、何方ゟ茂及断不申致發足、道中迄罷越可申与相待罷在候處、罷越不申に付、病氣に而も可有之哉与其儘に仕致旅行、御當地ゟ罷歸候而も不及斷段相達御聽候所、先以御法も有之候處、段々不埒成儀に候。依之御大小將組御指除、組外ゟ被加之候。急度指扣罷在候様被仰出候條、可被申渡候事。

丑五月廿六日

附、彌市郎町廻御番入、樣子有之旨に而申談無之、前月廿二日より自分指扣申談有之。

五月廿八日。金澤に於いて諸士に前田治脩明年まで在府を請ひたるを許可せられたることを告ぐ。

本文は前田治脩が去年參覲を缺きたる故にいふ

〔政隣記〕

五月二十八日、一昨日御用番大炊殿依御廻文、今日頭分以上布上下着用登城候所、於柳之御間御年寄衆等御列座、御用番左之通御演述。依之御年寄衆等御宅ゟ廻勤恐悅申上。附、左之趣今月十七日被仰出、爲御禮御老中方ゟ御廻勤有之由也。

加賀守樣當年御暇被進候御順年に候得共、其儘御在府被成度段御願被成候所、可爲御願之通候、來年四月御暇可被進旨被仰出、忝御仕合思召候。此段何もへ可申聞旨、拙者共ゟ以御書被仰下候事。

五月。財政困難なるを以て川除普請の經費を減じ百姓をして自から修理せしむべきことを告ぐ。

〔司農典〕

御勝手御難澁、御田地開・川除御普請御入用方も御指支に付、右銀高被相減候間、猶更小破之所々自普請可仕候。大破無據場所にて御加銀を以御普請可申付候條、得其意、此段村方ゟ可申渡候、以上。

丑五月

不破右膳
荻原半左衛門
桐山和太夫
寺西多太夫
鶴見森右衛門

能州四郡御扶持人・十村中

閏五月廿二日、前田治脩登營して徳川家治の養世嗣を定めたるを賀す。

〔三壽御譜〕

閏五月十八日、大目付依書付御登城被成候處、御座之間御次にて、徳川民部卿殿御嫡豐千代君御儀御養君被仰出候旨、松平右京大夫演述。畢て大樹并豐千代君へ御目見被仰上、被爲蒙上意御退出。黑書院御杉戸の外にて、於御座之間御目見被仰上候。御禮、老中へ被調。同廿二日若君ゟ上使御奏者番井伊兵部少輔を以、二種一荷御拜領。此時爲御禮兩丸御登城、老中

御廻勤被遊。

〔德川實紀〕

閏五月廿二日、御養君定め給ひし慶賀とて、白木書院に出給ひ、尾張・水戸の兩卿拜賀し、各太刀目錄を献せられ、中略、次に松平加賀守治脩ならびに三家の庶流・溜詰、および松平越前守重富ならびに牧野越中守貞長・土岐美濃守定經、太刀目錄を献じて拜謁す。

閏五月廿二日。能美郡須天村等四ケ所を御林仕立山とすべきことを定む。

〔今江組巨細掌記〕

天明元年以來御林御仕立山に被仰付候一卷

能美郡　須天村領御林
同　斷　今江村領御林
同　斷　寺津村領御林
同　斷　矢崎村領御林

右今般能美郡須天村等四ケ所、御林御留山に可申付旨被仰渡候に付、ヶ條之趣被仰渡可被下候。

一、御林仕立申に付、下人を付置、右之場所に草苅等爲入込不申、嚴重縮可仕事。

一、出來苗松厚所より松無之所に植替、或は大木にも成間敷小松取捨可申事。

一、御林山之麓ゟ御田地、日陰に成不申様に見はからひ、山の根より五間或は七・八間御林を除可申事。

一、御林山之内本道幷作場通り共に、幅二間計に可仕事。

一、御林松下枝苅、庄蔵自分之薪に被下之、御林に仕立申筈に御詮議極候條、右下枝下苅等仕時分、拙者方へ不及断苅取、御林仕立可申事。

右之通今江村庄蔵ゟ被仰渡可被下候、以上。

天明元年閏五月廿二日　　小幡勘太夫

御算用場

右小幡勘太夫紙面之通に候條可得其意也。

辛丑閏五月廿二日　　御算用場

今江村庄蔵

閏五月廿三日。大小將組脇田伊織不埒を以て組外組に列し指扣を命ぜらる。

〔續漸籬記〕

脇田伊織は前田重教附なるべし

庚子は安永九年

脇田伊織儀、不應思召儀有之に付、御大小將組被指除、組外ゟ被加之候。急度差扣罷在候樣被仰出之趣、閏五月廿三日申渡。

右不應思召品被仰出等無之。申渡は去年六月廿一日左之通申渡候例に而申渡。善左衛門も其品被仰出無之。但虚病をかまへ御番も不仕、其外不所存成事共有之由取沙汰あり。

御小將頭に　庚子六月廿一日神尾伊兵衛へ渡之。

山村善左衛門

右善左衛門儀不應思召儀有之に付、御大小將組被指除、組外ゟ被加之、急度指扣罷在候樣被仰出候條可被申渡候事。

付箋

伊織儀年限も立候間、最早御免可然樣思召候旨、從中將樣天明五年八月晦日加賀守樣ゟ被仰遣、同日指扣御免也。

閏五月廿六日。江戸詰の諸士にその生活を質素にすべきことを諭す。

[袖裏雜記]

閏五月二十六日於江戸、先達而御意之趣有之に付、伺之上左之通申渡。

此表詰人一統、御貸長屋に而暮方質素に相心得、勿論無用之參會堅仕間敷候。且又是迄諸役

人等、爲御用試御貸長屋ゟ寄合候儀も有之候へども、以來者可成限り、御殿并其役所々々において可申談候事。

一、表紬之儀御表向にても都而紬表等垂服致着用、尤夏之服も右に准じ、晒・すゞへ紬にても上品を用申間敷旨等、委曲先達被仰出候通、彌以違失無之樣可相心得候。

一、足輕以下之者共、猶以右之趣に准じ急度相心得可申候。將又御屋敷中に而美服着用之者も、爲私用致御門外候節心得違、御門外において着替等相改候儀も前々有之由粗相聞え候。以來に左樣之儀無之、都而分限不相應之族無之樣可相心得候。

但、御家中家來共之儀も、分限不相應之爲躰無之樣、主人よりも急度可申渡候。

右被仰出候。々樣之內、於御貸長屋寄方并表紬之儀者、先達而被仰出有之候處、何となくゆるみ候躰被聞召候間、以來者嚴重に相心得候樣可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ被申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配へも不相洩候樣可被申渡候事。

閏五月廿七日。御馬廻組茨木源五左衞門の母若黨と出奔し、後河北郡俵等村の山中に捕へらる。

〔政隣記〕

閏五月、御馬廻組知二千五十石茨木源五左衞門母儀、（小原惣左衞門女也。）今月廿七日夜より若黨何某同

道出奔之躰に付、所々相尋候得共行衛相知不申處、翌六月二日晝盜賊改方足輕柿澤七右衛門・末岡吉郎兵衛、河北郡俵等村山中（金澤より一里計東之方也。）に而疑敷躰之者見咎候所、不及應答、男女兩人に而脇指刀拔手向候に付、兩人共召捕、右母儀は内分を以茨木家來に引渡、男は下石引町浪人者小佐宇兵衛与申聞候に付、改方長屋多七郎宅ゟ召連來、藤内頭ゟ指預入牢。但母儀に於茨木宅縮之間ゟ入置。元來内嬶之所、他邦ゟ出走之圖りに候所、俄に路金手筈違候に付、右由に而相對死之心得に而徘徊有之所、樣子不審之爲躰に付、在所之者より改方足輕ゟ及案内候に付、右兩人罷越候由。吉郎兵衛肩之邊餘程手疵を受候に付、外療小柳昌意ゟ、支配頭長屋多七郎より、役筋に而疵付候間無構療治有之樣、手先與力關和太夫を以申遣、則療治平癒之事。

閏五月廿九日。金澤犀川の水暴溢す。

〔政隣記〕

閏五月二十九日曉より犀川滿水、橋桁に等く相成、川上より松・槇等之大木流來に付、拾ひ申爲水中ゟ入候奴僕大勢之内二人溺、死骸行衛不知、二人共水練達者に候得共、大木に而胸を被打候哉与云。

閏五月廿九日。堂形前に大豆を耕種することを許す。

堂形前火除金澤鹽硝藏の地

〔政隣記〕

閏五月廿九日

一、堂形前より大假屋敷迄等火除明地、是迄に叢に成有之候處、花屋清左衛門畠請に仕、大豆等作り植、過半出來。尤運上を仕候由。

六月四日。割場附足輕小頭藤澤宗左衛門茶湯を好むを以て扶持を減ぜらる。

〔袖裏雜記〕

左之通六月四日申渡。初發御前より、此者茶湯を好、分限不相應之爲躰被聞召候旨等被仰出に付、段々會議、且安永四年正月御小人頭齋藤吉之儀、組指引等且勤方不宜、役儀被除、御切米二十俵被下、割場付足輕被仰付候段、從御家老中渡候例を以申上候也。

割場奉行に

割場附足輕小頭　藤澤宗左衛門

右宗左衛門儀、故而役筋不調法之儀は無之候へども、分限不相應成儀共有之、年輕者小頭をも相勤候者には、別而不埒之至に付、御切米三十俵之内十五俵御減少、平足輕に可被申付候。尤以來之儀急度相慎罷在候樣可被申渡候事。

鼈坂は亀坂

六月廿四日。金澤小立野に火災あり。

〔政隣記〕

六月二十四日子八刻小立野鼈坂小家より出火段々及大火、天德院山門際迄燒失、翌朝卯刻鎭火。家大に而風無之に付、軒數は町家三十軒計燒失、近年之大火也。

六月廿七日。京師の寺院又は公卿の用銀を借用せる諸士の返濟方法を改む。

〔政隣記〕

六月二十七日、左之通御用番大隅守殿御觸有之。

青蓮院宮樣等祠堂銀幷堂上方御用銀、御當地町人口入を以御家中之內借用分、安永六年重而申渡、御借知有之內は三十五ヶ年賦、除知高之半分宛除之致指引候趣に相成、是迄其通及沙汰候所、借用人次第に致困窮指支候躰に付、段々詮議之上借用之不依多少、當年より百石に付十匁宛之闔りを以、毎年七月迄返辨可申候。利足之儀者、元銀皆濟之上沙汰有之樣可相心得候。尤銀高程只今迄之通致除知、於町會所割符町人共ゟ可渡旨、町奉行ゟ申渡候條、除知米藏宿縮指紙面等之儀者、安永六年之通可相心得候。且又唯今迄百石十匁より割合寡き分は、

是迄之通可致返濟候事。

六月。鹿島郡和倉温泉の事情を下問せられしに答ふ。

〔貞諒諸書物〕

波御寺小紙を以申上候。

一、和倉村温泉海中に罷在之、地方より六十間計隔り居申候。但島形丸く、指渡し十間計御座候。

一、湯治人は舟に而相渡申候。潮干之節は歩渡りにも仕申候。

一、湯坪は嶋之中に有之、深さ六尺計御座候。口指渡三尺計、桶高二ツ入有之候。

一、湯性温湯之由、爾々より承傳罷在候。第一打身・切疵・下疳・使毒・疥、其外腫物類に宜由に御座候。

一、和倉村之儀、町家居不宜候に付、御家中御侍様方等に於所口御逗留、取湯に而御入湯被成候。下賤之者之儀は和倉村に止宿、於島に口指渡二尺計深さ二尺計之桶ち温泉汲込入湯仕候。至而之熱湯に御座候故潮を指申候。

一、金澤より和倉村迄道程二十里程御座候。

右今般私組下和倉村温泉之様子、黄御寺書上申候、以上。

六　月　　　　今江村　助左衛門

槻尾左膳樣

右天明元年中將樣より御尋之由、御用部屋佐々木孫兵衛殿より左膳殿ゟ申來、書上候に付寫置。

六月。能美郡粟津温泉の事情を下問せられしに答ふ。

〔今江組巨細寫記〕

能美粟津温泉之樣子申上候覺

一、一ヶ所　惣湯、梁間三間桁間五間

但、此温泉養老元年に出來之由承傳。

右湯ざや之廻に、湯治人宿仕候者五軒御座候。

一、一ヶ所　法師湯与唱申候、梁間九尺桁間三間

此温泉出來之年號等相知不申候。

右之温泉は百姓善五郎居屋敷之内に御座候。則善五郎湯治人宿仕候。

〆二ヶ所。外一ヶ所中古退轉仕候。

湯治人宿仕候者〆六軒。但村中惣家數二十二軒。

一、右温泉二ヶ所共惣湯に而、病或は切疵・瘡瘍に宜敷、并性により眼氣或は疝并癪抔に宜由申傳候。

一、湯治人多分町方・在方之人々罷越申候。尤折節御家中御侍樣方茂御入湯被成候。

一、先年小松中納言樣御入湯被爲遊候由承傳仕候。

一、右温泉守本尊藥師如來之堂御座候。坊守大王寺と申小庵御座候。

右温泉之樣子御尋に付書上申候、以上。

丑六月　　今江村　庄　藏

矢野仁左衞門殿

芝山織人殿

六月。江沼郡山代及び山中温泉の事情を下問せられしに答ふ。

［今江組十村留記］

江沼郡山代村温泉之樣子申上候覺

一、一ヶ所　　惣湯、梁間二間半桁間四間

但、寛延二年出來之由に御座候。

一、十八軒　　湯治人宿仕候家數

但、一軒に一坪・二坪宛取湯仕、座敷之内に湯坪有之候由に御座候。
一、右之温泉、性により諸病に宜段申傳候由に御座候。
一、御侍樣方等御入湯被成候儀も御座候由。
一、金澤より道程十二里半程御座候。
江沼郡山中温泉樣子申上候覺
一、一ヶ所　惣湯、梁間五間桁間七間
但、天平年中に出來、其後中絶仕、治承年中に再興有之由に御座候。
一、五十三軒　湯治人宿仕候家數
一、右之温泉温湯に而、性により諸病に宜段申傳候由に御座候。
一、御大名樣方御入湯被成候儀も有之候由に御座候。
一、金澤より道程十四里程御座候。
右温泉之樣子御尋に付、兩所共承合書上申候、以上。

丑　六　月　　今江村　庄　藏

矢野仁左衞門殿

芝　山　織　人殿

山中温泉昔行基菩薩御取立、承平の頃將門反逆之砌退轉、治承年中長谷部長兵衛尉信連再興有之候由。

七月六日。前田綱紀の養女霊姫逝去す。

鶴岡侯酒井忠寄夫人

〔政隣記〕

七月十三日御用番安房殿より左之通御觸出。

昌光院樣去六日御卒去之由、江戸より申來候。依而爲御機嫌伺頭分以上之面々、明日中御月番宅へ可罷出候。且又普請は明後十五日迄三日間遠慮、鳴物・諸殺生は十九日迄七日間遠慮之事。御歳九十。

九十とあるは七十九の誤なり

〔三守御書〕

御忌日、追而五日に御改。

五日は實際逝去の日なるべし

七月九日。徳川家治使を遣はして霊姫の逝去を弔せしむ。

〔政隣記〕

七月九日。爲御悔、上使御奏者番松平和泉守殿を以被爲蒙上意候段、申來候事。

但、御禮御老中御勤之節、如前々御品之内被取次門外ゟ御呼出之事。

七月二十日。金澤城廣式の普請に着手す。

〔政隣記〕

七月廿日、奥向普請地平均今日より申付、廿四日より地搗等、廿八日柱立、十月四日皆済。

夫より是迄有之候家修理に取懸、十一月十五日全済。

七月。諸士他國詰の年限を短縮すべきことを告ぐ。

〔典制彙纂〕

付札、定番頭へ

他國詰近年一統二年半に相成候得共、御扶持方代御減少、且又詰中御貸長屋において幕方質素可相心得旨等、先達而被仰出候處、長詰に而者可為難儀に付、以後一年半詰被仰付候。如斯被仰付候上ハ、猶以詰中萬端急度相慎、右被仰出候趣も無違失相守可申候。

右之趣頭・支配人に被相達、組等之内裁許有之面々者――

丑七月

七月。本郷邸内に時疫等に罹りて死亡する者多し。

〔政隣記〕

七月廿日

今年御參勤後、江戸御邸内時疫・浮腫等に而病死數百七十人餘有之。是迄不及承事与云々。

八月廿五日。前田治脩、徳川家治が嗣子を定めたる祝賀能を觀る爲登營す。

〔政隣記〕

八月廿五日、今度御養君被仰付候御祝儀御能有之、加賀守様御登城、右之節御作法書略記左之通。

松平加賀守殿、國持大名衆、溜詰大名衆、御譜代大名衆、同嫡子、暨表向出禮之分、交替寄合衆、高家衆登城。殿中長袴、表向五時揃之事。右に付加賀守様朝六半時頃御登城、御饗應相濟、七半時頃御歸殿。尤晝頃御供人建替有之候事。

〔徳川實紀〕

八月廿五日、若君そなはらせ給ふ御祝の猿樂あり。三家および松平加賀守治脩・國持・溜詰・譜第・外様衆父子・交代寄合・表高家出仕して、饗宴たまはり、觀樂にあづかる。

八月。町人百姓の賭の諸勝負に關する禁令を犯すことを戒む。

〔御郡典〕

惣而かけ之諸勝負者、前々より一統御制禁に候處、近年町・在之者共右様之勝負事に携り、其

不埒成爲躰之段沙汰之限に候條、自今急度相愼候樣嚴重可被申渡候。尤以後各手前に而も聊無油斷穿鑿可有之候。若不愼之者於有之に者、曲事に可被仰付候事。

丑八月

當十二日二ノ御丸於松之御間に、御用番横山求馬殿御書立御渡に付、相達之候條、得其意寫取、村役人初組下末々迄嚴重可申渡候、以上。

丑八月

槻尾左膳

能州四郡十村中

かけ之諸勝負之儀、別紙就被仰渡之趣に拙者共内存之趣申達候。右に付盜賊改方等より及穿鑿候儀者、拙者共初其方共支配不行屆樣にも被存、甚殘念之至に候條、幾重に茂工夫いたし行狀等宜敷相成候樣可申教。右諸勝負之儀者、農業諸稼之怠に可相成第一之儀与被存候間、嚴重相禁候樣致度事に候。五人組之内一人右申渡相背候はゞ、五人組共迷惑可申付候。尤村役人不穿鑿之至に候條、是又品に寄急度可申付候。第一村役人竝長百姓行狀宜敷候はゞ、一村不殘其風俗に相移り可申儀与存候條、此段村役人・長百姓ゟ尙更急度申渡、其上に敎不隨者は、拙者ゟ可申聞候。右之趣者全く拙者役筋之儀に候條、於拙者に各ゟ賴入存候。一兩年中に裁許中不致博奕樣心服可仕、申敎育之候樣致度候、以上。

丑八月　　　　　　　　　　　　　　　　槻尾左膳

能州四郡十村中

賭之諸勝負之儀者、従前々御制禁に候處、町在共猥に相成申躰に付、今般御用番横山求馬殿御書立を以就被仰渡候に、寔相違之候。

近年村々之内博奕致増長、自ら耕作稼も不情に成行申躰に相聞候間、被仰渡之趣厳重可申渡候。依而是迄御法者無之儀に候得共、向後博奕いたし候者於有之に者、當人者曲事に被仰付、其村々作過怠免申付、無高所詐烈操之儀者、右に准じ過怠可申付候。乍然同村より早出訴出候はゞ可令用捨候。町宿之分は、其宿仕候一町或者組合之者過怠申付候上、兩隣家咎可申付候。且亦同所より訴出候はゞ、過怠之儀前段之通可令用捨候事。

右之趣可得其意候。組々遠近に寄難相知筋も可有之候間、隣組郡違にも共互に申談置、以来綿密相糺、御縮方相立候様可相心得候。等閑に致置、外より洩聞候はゞ、其許十村可爲越度候條、永々急度申渡、尤請書付可指出者也。

辛丑九月　　　　　　　　　　　　　　　御郡奉行

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　改作奉行

能州鳳·口郡扶持人·十村中

九月十五日。前田重教登營して歸國の辭見す。

〔德川實紀〕

九月十五日、月次の拜賀例のごとし。松平加賀守治脩が父肥前守重教、身にいたはる所なれば、封地に赴き溫泉に浴さん事をこふにより、いとま下され、御馬を給はる。

九月十六日。稻岡判太夫長家の臣富永伊右衞門を殺害して自殺す。

〔日　記〕

私組稻岡故三郎左衞門於舊宅喧嘩有之旨、昨十六日七半時前相知候に付、早速彼宅へ罷越候處、三郎左衞門嫡子稻岡判太夫与九郎左衞門樣御支配富永伊左衞門及刄傷、双方相果罷在候旨、判太夫弟稻岡淸次郎申聞候。九郎左衞門樣御役引之儀故、主税樣ゟ急速及御案内候處、主税樣幷御横目丹羽伊右衞門・篠嶋平左衞門追々罷越申候。夫々申談、死骸見分仕候處、富永伊右衞門儀は座敷二之間に、左之目より肩へ懸深疵に而、脇指を抜手に持ながら相果罷在候。判太夫儀は平生罷在候間に、脇指に而咽を突相果罷在候。判太夫弟淸次郎儀樣子相尋申候處、淸次郎儀は富永半助方へ用事申付罷出候處、途中に而下女呼懸候に付、早速罷歸候得共、双方共相果罷在候。右及傷之樣子前後存知不申候。尤此間相替儀無御座候旨申聞候。右之通に而外相替儀無御座候に付、死骸見分之上、勝手次第取置候樣淸次郎ゟ申渡候。伊右衞門儀

九半時頃より見廻、判太夫ら對談之様子に御座候。下女・小者手當相尋候處、小者に使に罷出有合不申、下女は右之様子承り於其儘逃出、清次郎を呼懸申旨申聞候。尤夫々御年寄衆へ御屆申上、且吟味當番者役三輪藤兵衛・久世平助被罷出候。不慮成儀出來仕候。右等御承知被遊候様、御聞達可被爲下候、以上。

九月十七日　　　　　篠原勘左衛門

同役中様

九月廿四日。金澤火除町に火災あり。

〔政隣記〕

九月二十四日晩丑五刻頃淺野川ゟ上火除町出火、町家等四十軒計燒失、寅五刻鎭り候所、再右之指逕五軒燒失、卯上刻鎭火。鎭り候後より雨。

九月廿七日。金澤に於いて諸士に前田重教歸國願の許されたるを告ぐ。

〔政隣記〕

九月二十七日、一昨日御用番大炊殿依御廻文、今日頭分以上布上下着登城、於柳之御間年寄衆等御列座、御用番御宅ゟ相勤。

中納言様御補所爲御保養、御國許溫泉ゟ御入湯之儀願被成候所、去十三日上使御奏者番青山大

膳亮殿を以、御願之通被仰出、且又依御奉書同十五日御登城被成候處、於御黒書院御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、其上御馬御拜領被成、重疊難有御仕合思召候。此段何茂ゟ可申聞旨、御兩殿様被仰出候事。

十月十二日。他領の富突札を取扱ふべからざることを諭す。

〔御郡典〕

近年能州御預地幷富山・大聖寺於御領に富突致興行、近頃日富与名目を附、毎日興行之旨に候間、金澤御城下に而者右富突札先ハ取扱無之様子に候得共、小松邊・越中・能州筋に者、今以取扱末々之者ハ不苦様心得違罷在候段粗相聞、御縮方に指障候段盗賊改方奉行申聞候趣も有之候條、以來他領富突札取扱無之様、御郡方・町方等之者ゟ急度可被申渡候事。

右之趣可被得其意候、以上。

丑十月十二日　　長　大隅守

藤田兵部殿

十月十二日。鬢張り・金剛草履の如き奢侈品を賣買するを禁ず。

〔加藤氏日記〕

覺

一、髮ばりの類
一、こんがう草履之類
一、飛きずり之類
一、其外榮耀之品

右之通近年金澤町方等に取用ひ流行いたし候處、向後右躰榮耀成品々取用ひ不申樣に、金澤町方江有之候條、猶者於支配所に宿立候ヶ所等にも、右躰之品々商ひ申者可有之哉難計候條、若商候者有之店々御改候はゞ相省、以來賣買申間鋪候。此段等閑に不相成樣に可申渡候、以上。

十月十二日　　　進士齋宮

能州四郡十村中

十月十六日。郡方の諸商業に就いて御郡所以外よりの取調に應ずべからざること等を告ぐ。

〔高井舊記〕

一、質屋・糀室屋・酒屋其外何商賣に而も、他役所より書出候樣申來候而茂書出申間敷候。萬一是非書出候樣にて有之候はゞ、其段御郡所へ斷候上、差圖次第可書出候樣にて有之候はゞ、

其段御郡所へ断候上、差圖次第可書出候事。

一、御郡方牛馬之儀年長に相成、はか〲敷用事に茂不相立分、他國に賣出候様子間々有之様及承候。此儀者情なき致かたに存候間、以後用立不申牛馬に而も、斃不申内は買ごろしに致度事に候。用立申内者、其牛馬之働を以持主も世渡をいとなみ申事に候得者、其所を存付可然候。非道之致かた候へ者、畢竟其家のため不宜事に候。

右之條々末々百姓ども相心得候様、面々より申渡可有之候、以上。

十月十六日　槻尾左膳

奥・口十村中

十一月十五日。金澤城廣式の修理成るを以て移轉す。

〔政隣記〕

十一月十五日、新造之奥之間に今日引移候に付、如古例白粥祝、右造立之節懸り候大工等に料理一汁三菜酒肴二品、都合大工等貳拾五人也。爲祝、棟取九郎兵衛には布上下等、其外重立候大工六人に金百疋宛、左官仁兵衛・疊屋市兵衛に白銀一兩宛差遣候事。

十一月十八日。領内の漆は之を特に指定の商人等に賣渡すべきことを命す。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行

御領國ニ漆木有之所々ゟ、他國より相對買請掻取候而、多越前之方に指出候樣子に候。次第に漆木損枯し、減候所々も有之、生立も無之候得者、自ら漆出寡て相成可申候。且亦他國ゟ多出候而ハ、御領國ゟ用之漆拂底に相成候。依之此度能美郡土室村平兵衛組大谷村清右衛門并松任笠間屋六郎右衛門・金澤町漆商賣人堤町田嶋屋與兵衛相同し、相對ニ以右漆爲掻取、又者買取、或者其所々漆木生立出來之樣、其村々相對に申談、他國ゟ掻取參り不申樣致候方、唯今迄他國ゟ貢遣候直段を以買取可申段相願候趣、金澤町奉行・加州御郡奉行より申出候。右之通に候得者、畢竟漆木生立、御領國之漆通用も宜趣に付、承知候段夫々申渡候。御領國中入用之漆餘分茂有之候得者、他國ゟ指出候も不指支樣に申渡候事。右之趣被得其意、御郡方等一統ゟ申渡、是以後相對を以右之者共賣渡可申候。他國之者ゟ直に賣渡候儀ニハ、堅不致樣に可被申渡候事。

辛丑十月

別紙產物方御主付又兵衛殿御渡に付、寫一通相達候條、被得其意、各支配所不相洩樣夫々可被申渡候、以上。

丑十一月十八日

槻尾左膳殿

十一月十九日。前田重教歸國の期を延ばさんことを幕府に請ふ。

〔政隣記〕

十一月七日、中將樣御發駕、最早北國筋雪途御旅行指支候に付、來春雪消次第御發途被成度段、御用番御老中に從加賀守樣屆書被指出候段、前月十九日出候由申來候事。

十二月十三日。金澤淺野川の水暴溢す。

〔政隣記〕

十二月十三日夜淺野川滿水、假橋々杭迄も悉流失、大橋等も危く、御役人出、樽石等に而防之。

十二月十九日。前田宗辰の生母淨珠院逝去す。

〔三守御譜〕

十二月十九日淨珠院殿御卒去。大應公御實母也。御忌日追て十八日に被改。御年八十九。此時上使不知、追て可考。

十九日は發喪の日なるべし

十二月二十日。他國詰の者が旅行中親戚の訃音に接したる場合の忌引に

二月廿天明二年に至て本支共令藩に於ける精なり

闘して定む。

〔續漸得雜記〕

天明元年十二月廿日於江戸、左之趣於御横目へ渡之。

御横目に

他國詰等之人々、父母之外忌懸り之親類死去之旨告越、道中にて忌之日數相立承候へば、不及遠慮引候事。

但、於此表只今迄一日數遠慮引候儀淺例に候へども、是以後右之通に可相心得候。

右之通被仰出候條、被得其意、頭・支配人ゟ被相達、組等之内末々迄も不洩樣可被申談候。其支配へも傳達有之候樣可被申達候事。

丑十二月　此書普金澤に送り、翌年二月定番頭へ渡之。

〔政隣記〕

二月四日左之通被仰出候段、御用番主水殿御渡之旨、定番頭廻狀有。

他國詰等之人々、父母之外忌懸り之親類死去之旨告越、道中に而忌之日數相立候得ば、不及遠慮引候事。

但、於江戸只今迄一日遠慮引仕候儀、淺例に候得共、是以後右之通可相心得候。

十二月廿五日。徳川家治、前田治脩及び重教に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十二月二十五日、上使御使番小書織部殿を以、御鷹之鶴御兩殿樣御拜領。

十二月廿六日。前田宗辰の生母淨珠院の葬儀を江戸廣徳寺に行ふ。

〔政隣記〕

十二月二十六日夜、淨珠院樣御葬式江戸下谷於廣徳寺有之。御輿際渡邊源藏、御をひ之御續也。前田律四郎白小袖淺黄上下着用、御供勤之。但渡邊前田御大小將也。

十二月廿八日。前田宗辰の生母淨珠院逝去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

十二月廿八日、淨珠院樣去十九日御卒去之段申來候。依之普請・鳴物等遠慮日數者、明日可申渡候。頭分以上爲伺御機嫌、明日中御用番宅に可罷出候旨等、御用番求馬殿より御觸出有之。

十二月。今年より定作食米を年賦返上すべきことを命ず。

〔二百二條舊記〕

今年より之作食米年賦返上に被仰渡候に付、御郡々願之年數に被承屆候。年賦等に取立之儀、御上御養之筋を以被仰渡候儀に而者無之、御郡方爲勸教被仰付候。返上相濟候上者如已前御貸渡可被成候旨、此段村々ゟ申渡、年々返上米無遲致大切返上可爲致候事。

一、毎歲返上十一月中手寄之御藏所に而取立可申候。一郡一冊宛一組切御貸付高相記候而、年賦返上米年々書記候樣に白紙有之帳面相仕立指出可置候。每年取立候節返上米高之切手組々より指出、合帳面引合致印章、取立人に可相渡候事。

一、返上米之儀其組切之請用に立置候。每歲取立之儀は、他組より縱々に可貸拔許候。取立方之儀、尤御收納米同事に候得共、代官村之通斗納相成候而は、村方難儀之筋茂可有之候間、村々より金を入用候儀、俵成に而相納、且持之者改之上、厚紙に小札何村返上米村役人名と記、俵之内ゟ指込可申候。俵成麤敷、升不足等無心許分は、升を入改納可申候。尤渡り之方之砌、惡米成者升不足貸渡候米於有之者、早速相斷改を請、納置候村々より爲取替可申候。

許議之上誌度可申付候。

但、當年之分は日數も無之候間、持組切に取立可申事。

一、組々難澁村々、右返上米を以貸渡、可成立村方は、廻日御扶持人立會詮議書出可申候。難澁之樣子承屆候上貸渡可申候。返上之儀十ヶ年を限り、右之內年賦に上納可爲致候。十ヶ

年以上之年賦不承届候。

附、村々より左程難澁にも無之所困窮之躰に仕成、借請致手廻候村方於有之は、追而聞およひ候共米取揚、品により作食年賦米一時返上申付候條、兼而村々へ申渡可置候事。

一、貸渡し之儀、前段之通御郡切別帳一冊宛指出可置候。毎年貸渡候村々書出右帳面に相記、拙者致割印相渡候。其上に而米請取切手取立人、右印形相改候而米可相渡候。毎年返上米高并貸付米共、御郡々帳面惣高員數御算用場印を請置候條、麁末無之様に相しらへ可申候事。

一、返上貸渡殘り米有之候節、翌年御拂米に申付、新穀に立かへ置候。右拂方之砌、返納米悪敷、直段並より劣り候得者、立替候時々減石致候間、取立方年々村々致吟味、爲納可申候事。

右之通ゟ得其意可有裁許候。且又御郡々貸付方等、村々成立宜儀存付有之候はゞ可申聞候。年賦終迄仕法相立候儀は、詮議之上ニ郡切に承届可申候條、此段承知可有之もの也。

辛丑十二月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

［郡方舊記］

一、御領國定作喰米、毎歳春兩度に御貸渡、暮返上之御定に候所、天明元辛丑年より永年譜を以返上被仰付候事。奥郡は辛丑年より五十年譜に被仰付候。諸郡之儀、御郡により年譜定少し違在之由之事。

〔改作根元舊記補集〕

作食米など一番作食・二番作食之兩度に御貸渡、暮に平返上するに、萬治年中米穀・大豆・小豆など積物圖りあつて、勝手次第の品を返上いたし、百姓人々札をさし、我が納し米穀を又其儘暮春から行事に仰付られ、數百年を經たりしに、いつとなく等閑になり、後日は籾などを俵成にして積置しなり。御役人も他の損德にもならざる事なれば、深く穿鑿もなくて實なき事になりしゆゑ、天明の比三十三ヶ年譜を以て御取立、返上濟し上は又御貸付なさるべしとの事なりし。返上も濟たれども、御勝手向御手詰六ヶ敷御樣子にて、いまに御貸渡の御沙汰もなく、夫食米なども願高過分に御減じ、新穀渡りなどにて御かし渡しの事になり、とかく御勝手御手詰りむつかしき御時節になりては、御改作の御趣意通の御取扱も出來兼し事なり。はやく御勝手御取直しの御仕法あつて、御改作を丈夫になされ、地より米の多くあがるやうにとりおこしせぬ事にならずんば、いよ／＼百姓かじけ御上の御難遁となり、畢竟御難遁のなされ方なきに至りては恐多き事なり。

正月十五日。御馬廻組頭藩の要求する夫銀借上の命に應ずる能はざることを上申す。

〔安永天明間御用留〕

御家中去春夫銀御借上可被成由に而、去年毎度御内談之節御答申上候趣に付、去年中者御指止被成候。當年に至必御借上不被成而者御指支御座候條、いつ頃被仰渡指支申間敷哉之旨、尙更御内談に付、去年七月紙面を以申上置候。然處去暮御家中一統指支候趣、御聞及も御座候哉、私共組中以後取續甚辛勞仕候。尤勝手之厚薄も可有御座候得共、難澁仕候處は一統同樣に御座候。何とぞ取續御番等全相勤候樣仕度、當春に至私共種々示談仕儀に御座候。右之通に御座候間、右夫銀之被仰渡御座候而も、於私共御請難申上奉存候。先達而申上置候趣も御座候に付、遮而此段御達申上候、以上。

正月十五日　　原　五郎左衛門

遠田三郎太夫

小堀牛右衛門

篠原勘左衛門
篠原典膳
奥村源兵衛
中村左兵衛
不破半蔵

前田大炊様

正月廿四日。加賀藩の火消役江戸に於いて水戸邸の火災に出動す。

〔政隣記〕

正月廿四日夜、水戸様駒込御中屋敷出火、十八間之御長屋焼失。此方様ゟ御人数五・六間余消留之。一番火消役長瀬又助、二番火消右尾也一也。右所両人ゟ以御意節三把宛拝領、惣御人数ゟも前々之振を以夫々拝領物被仰付。

正月。町方・宿方に連續して百姓の家屋を建築するを禁ず。

〔司農典〕

村札、諸郡ゟ

御郡之内町方・宿方並に、村方之家段々建續候儀中古以来有之。此儀者田畠をひさゝと居屋

敷に仕儀不可然候間、堅く爲仕申間敷候。若又無據譯有之、町續家建申度儀に候はゞ、其節者當役所へ願出、詮議之上可申付候。此段無間違夫々可申渡置者也。

寅正月　改作奉行

二月三日。金澤に大風あり。

〔政隣記〕

二月三日、今朝之荒風に長大隅守殿與向之方二間計倒れ、村井又兵衛殿武具土藏二つ崩れ、書院へ及大破、深美兵庫三十間續之長屋吹倒し、其内厩有之に付馬斃。犀川馬場邊並松も十三本吹倒し、其外諸方并松木等之破損夥敷有之。

二月五日。金澤晴天にして雨降る。

〔政隣記〕

二月五日晴天風も無之候所、晝過三社五十人町邊・白銀前筋餘程雨降、一頻に而直晴。南町邊も微雨に付往來傘用候處、与風往來人之内町人傘を持候手和らぎ候得ば、傘虚空に舞上り、三社宮之方へ行、餘程之間空に有之、其内二口村へ落下り候由。風も無之所不思議与沙汰區々也。

二月六日。前田宗辰の生母淨珠院の忌日を改む。

〔政隣記〕
二月六日淨珠院様御忌日、毎月十八日、御家中諸殺生指扣可申候。御忌日十九日に候得共、御様子有之、十八日寺社御出候段、御用番主水殿より十五日に御觸有之。

二月廿五日。江戸邸に於いて大銀所保管の金子紛失し、次いで奉行等指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕
一、高田昌太夫同月五日より先當分御大小將當ゟ相詰、同廿五日より大がね奉行水越縫殿御道中宿割方御用引に付、右代大がね奉行加人申談有之相勤候所、同日大がね所御金二百兩紛失。依之奉行中村市右衛門・高田昌太夫役所御用者相勤、其外之儀自分に指扣相慎有之。且右紛失同日、大がね所懸り之足輕石崎與三郎与申者出奔。

〔政隣記〕
三月四日晴。左之通被仰付。依而小幡八右衛門・原宗兵衛江大がね奉行當分加人申渡有之。

中村市右衛門
高田昌太夫

右江戸大がね奉行相勤罷在候所、役所向御金之内紛失有之、不念之趣に付指扣被仰付。

〔政隣記〕

三月廿二日中村市右衞門・高田昌太夫前記四日之通に候所、御國ゟ御返、尤金澤指扣罷在候樣今日被仰出、廿四日曉發足歸、四月四日歸家。

二月。江戸留守詰及び他國に使する者の行粧を質素にすることを諭す。

去年の令は天明元年三月廿三日の條に載す

〔典制彙纂〕

付札、定番頭ゟ

當年江戸御留守詰、并御使等に罷越候人々、道中行粧之儀成限り省略有之可然候。去年御兩殿樣御供人行粧之儀に付、別紙寫之通相伺申渡候。御供人さへも右之通り候得者、此度御供代等に罷越候人々者、猶更之儀に候間、是以後都而別紙之趣に准じ致省略罷越可申候。京・大坂等ゟ罷越候人々も、右之通可相心得候事。

右之趣被得其意、頭・支配人ゟ相達、組等之内 ――

寅　二月

二月。郡方に於いて博勞を業とする者の數を制限すべきを告ぐ。

〔御郡典〕

諸郡村々之内、近年博勞仕候者人多に罷成、牛馬賣買仕方等不宜趣有之、百姓中致迷惑候由

相聞候。畢竟耕作方指障に相成候儀与存候條、是以後博勞一組に一兩人与歟三四人与歟人數相極、兩役所へ承屆可申候。當時博勞仕者之内人撰之儀者遂詮議、何村誰々博勞爲仕度与申儀村々よりも爲書出、其上を以詮議之十村手前に而詮議之上申付、博勞爲仕可申候。一組人數相極候儀ニ、御郡々御扶持人十村次第極置可申候。在々作牛馬之儀者、改作第一之要用に候處、風俗惡敷相成候而者其指支之事ニ候條、右之通仕法相立、是以後急度締方可申渡、勿論人數相極候博勞共、買調申付名書指出可申候。尤此後其外之者牛馬賣買取扱候者、曲事に可申付事。

寅　二　月　　御郡奉行
　　　　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月、中仙道諸驛の人馬供給を圓滑ならしめんことを交渉す。

〔政隣記〕

加賀守殿家中之者共ゟ陸道往行仕候に付、武州板橋・蕨・浦和・大宮驛通候。然所右驛々之者共、時に寄人馬差切候趣抔申立、增錢相渡候ば働を以指出可申候抔与申聞候族も有之、徒是及口論候得者旅行之障にも相成候に付、先致了簡候儀も度々有之候。右等之趣次第に相募。

候得者、心外及爭論候事も難計御座候。且又板橋等四驛にも不限、信州追分より此方は、外驛にても所に寄彼是申懸候ヶ所御座候。寶暦四年に茂曲淵豐後守樣ゟ、右同樣之趣無急度御届仕候處、則右驛々之者共ゟ被仰渡、其後者隨分驛々靜に御座候得共、年月も相立候儀故、輕き者之儀に御座候故色々申懸候儀与存候。此段御序無急度御申上被下、加賀守旅行幷家來之者共罷通候節、人馬等不差支候樣、右宿々之者共ゟ御序被仰渡御座候樣被致度趣に御座候。此段各樣迄内々御懸合申上候事。

二　月

御書面御旅行之節、中仙道板橋・蕨・浦和・大宮宿時々人馬拂切候旨申、繼立差支候由。右之外にも信州邊宿々、彼是難澁之儀申懸候驛も有之候に付、御旅行幷御家來之面々往來之節共、人馬不指支候樣被成度旨に付、右御紙面之趣を以御代官飯塚伊兵衛ゟ申渡、板橋驛より先驛々ゟ申渡迄候樣申渡候間、左樣御心得可被成候。

寅　二　月

右者安藤彈正少弼殿ゟ開番中より懸合有之、別紙可申談旨河内守殿被仰聞候條、御組・御支配御申談可被成候。御組等之内裁許有之面々は、其支配ゟも不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

三月廿九日　篠嶋平左衛門

中村左兵衛

諸頭寛所様

三月朔日。藩の金融に盡力せる江戸の町人等に扶持を給す。

〔袖裏雜記〕

三月朔日於江戸、町人富田屋六兵衛御借金方格別入情勤候付、十人扶持御加増、都合二十五人扶持被仰付。此伺等委細留あり。爰に略す。

且又同日同所町人津國屋善兵衛・小野寺重兵衛・伏見屋五兵衛・相模屋安左衛門等、御借金方等入情勤候付、五人扶持充被下之。坂本屋九郎右衛門え同斷に付七人扶持被下之。

三月九日。前田重教の金谷殿歸着後は金谷門・七十間門内を二ノ丸に准ずべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

三月九日、左之通御城代村井又兵衛殿被仰聞候旨、御横目廻状。

金谷・七十間兩御門内三之御丸格に申渡置候得共、中將様御歸殿之上は最前申渡置候通、二

肥後守は松平容頌
駿河守は松平容詮

之御丸格合に可相心得候事。

三月十一日。前田重教江戸を發し廿三日金澤に歸る。

〔政隣記〕

三月十一日、今朝六半時御供揃に而五半時頃中將樣御發駕、廿二日今石動御泊、廿三日七時頃金澤金谷御殿江御着。江戸江者御禮御使人持前田内藏助、御目見之後二之御丸於年寄中席紗綾二卷拜領、披露御大小將。畢而追付發足、四月七日江戸着、廿八日登城、五月七日御返翰渡、翌八日晝發歸。

但、御着之節金谷江罷出候人々等去春之通。御着之上、頭分以上登城恐悅之御帳に附、退出。

三月廿六日。會津侯松平肥後守父子等本郷邸に前田治脩を訪ふ。

〔政隣記〕

三月廿六日、肥後守樣・駿河守樣・讃岐守樣・出雲守樣御出。御取持倉橋三左衛門殿・齋藤三六殿・松本善甫老御越。八時過御客御揃、於御小書院二汁七菜御料理等出。夫より御庭傘之御亭等所々御見物。於榮螺山御亭、殿樣御手前に而御茶被進之。御自身御花も被爲入、御菓子御吸物等出。夫より於御馬見所種々御饗應、御馬十一疋御馬役絹川閑右衛門等江乘馬被仰

付。畢而御小書院ゟ御復座、御酒・御肴品々出、狩野伯圓ゟ席畫被仰付、御囃子鶴龜等五番
同所二之間而有之。夜四時前御客御退出。

三月廿七日。前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月廿七日八時頃、上使御老中水野出羽守殿を以御歸國御暇被仰出、御例之通御拜領物。從西御丸も上使御老中鳥居丹波守殿を以、御例之通御拜領物有之。

〔三守御譜〕

是年前々被仰上候通暑氣御痛、近年別て暑中御旅行御難儀被遊候に付、當年四月中御暇可被進旨、去年被仰出候處、今年氣候も早く、遠國之儀旅中にて甚暑氣能候時節に相成可申与奉存候。其上近來持病時疾相勝不申候間、湯害に参り不申以前御國許ゟ御越、前々御用温泉御入湯被成度、乘月下旬迄之内御國許へ之御暇被仰出候樣、御書付を以て二月十九日久世大和守へ御指出置被成候處、同廿二日御用番御呼寄、先達て御願之通御暇被仰出にて可有御座旨被仰聞、三月廿七日上使水野出羽守を以て御國許へ之御暇被仰出、若君よりも鳥居丹波守を以て前々之通御拜領物有之。

四月朔日。今明日例に依り金澤觀音院の神事能を行ふ。

〔政隣記〕

四月朔日、今日金澤長谷觀音祭禮能有之。御役人出座前々之通。番組左之通。

翁 三番叟 忠三郎　高砂 宮門 四兵衛　田村 忠藏 安之丞

半蔀 隆之丞 宗太郎　張良 長三郎 久左衛門　祝言呉服 作次郎 文右衛門

麻生 源七　釣狐 嘉藏　博奕十王 九郎兵衛

〔政隣記〕

四月二日、今日金澤長谷觀音昨日同斷。

翁 三番叟 勇助　白髭 權八郎 安左衛門　敦盛 隆之丞 伊助

草紙洗 宮門 甚助　藤戸 宮門 宗三郎　祝言志賀 忠三郎

八幡前 高助　六人僧 萬藏　四堂方角 金助

四月朔日。前田治脩柳營に上りて就封の辭見す。

〔政隣記〕

四月朔日快天。昨日依御奉書、今朝御登城御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御鷹・御馬御拜領等御例之通。

右に付奧村河内守殿・大音帶刀殿登城、是又御例之通御目見、紗綾五卷宛拜領。西御丸へも

能出られ、御老中溜に而、直に御老中方・若年寄中江爲御禮被勤。右御城等爲御番代同道、卯上刻出、未上刻歸。但爲休息西御丸下諏訪部文九郎殿御屋敷之内拜借、兼而申込有之借用、燒假置つ等有之。且河内守殿御屋敷見度由に付、其段申達被見候様に致し、自分にも初而見候所、御馬首尾餘繋有之。其内もしや國より渡來之鹿毛馬御出成馬也。長さ九尺計、頭三もの様子丈三尺、尚甚大きく、四足大木之如し。頭は不相應に小さく、耳細し。

〔徳川實紀〕

四月朔日、拜賀例のごとし。松平加賀守治脩・山口修理亮弘道、就封のいとま給ふ。

四月二日。前田治脩就封の途に就く。

〔政隣記〕

四月二日陰、昼より晴。今朝御老中方御禮勤、御歸殿之上午八刻過御發駕、十三日御歸城。

四月七日。金澤堅町に火災あり。

〔政隣記〕

四月七日巳上刻、加州金澤堅町枝町より出火、百二十軒焼失、午上刻鎮火。

四月十三日。前田治脩金澤に着す。

〔政隣記〕

四月十三日、加賀守様前夜今石動御泊、同夜四時御供揃に而御立、今十三日朝四時御歸城。御禮之御使不破彦三、御目見如前々、於御年寄席御羽織・卷物拜領。追付發出、廿四日江戸參着。翌日御老中方・若年寄其外御側衆・御一門様方、夫々聞番同道相勤之、五月朔日登城、御目見覽御献上物（相濟候に付、先達而彦三申述置候御進物今日別御使者を以被遣候儀等、前田内藏助御使之節同斷。）幷自分獻上物相濟。同七日御返翰於御城渡、（前田内藏助等も一集同日渡る。）同九日江戸發歸。

四月十三日。徳川家齊元服の禮を行ひたる報金澤に達し、その祝賀の爲派遣せらるゝ使者柄に就いて御馬廻組頭と御小將頭と爭議す。

〔袖裏雜記〕

若君様御元服被爲濟候へば、爲祝儀御使組頭被指出候筈之旨江戸より申來、御小將頭は每度江戸に詰、其上御人少、組頭と申事候間御馬廻頭被指出可然与內分右頭に申聞、不破半藏順之由申候付、其心得之儀執筆を以申聞置候處、當十三日御元服被爲濟候御様子申來候付、彌半藏可然与御用人にも申聞候上伺置、未被仰出候へども、急發足故先內證執筆を以同日半藏に申聞、致承知候處、同夕原五郎左衛門・遠田三郎太夫より、右御使は御目見無之旨岡田太郎右衛門申候。御目見有之御使者は御馬廻頭之處、此度右御使者御先例を以被仰付候哉、御先

徳川家齊元服の禮は四月三日に行はれたるなり

例不知候へ共早速詮議有之候様存候由、勧修寺大納言紙面を以申越候付、享保十年は御小将頭被指出候旨等、且御使者之儀も詮議之趣有之候間、用意は明日迄見合候様才次より先半蔵方申遣、御小将頭御使者順先承候処、江守平馬之旨申候付、自然儀に御使被成候事可有之趣、内分執筆を以申談置候。依之翌日御用人ゟ僉議之処、御奉書を以御尋等之御禮に重き事に付、先には御馬廻頭被出候へども、元文五年には召有之三輪藤兵衛被指出候儀茂有之。寶成院様御卒去に付御尋等之御奉書御禮、御参府御道中より御小将頭青木與右衛門被指出候儀も有之候へども、先には御奉書御請には御馬廻頭被指出来候へども、御目見無之御使者には必御小将頭被指出候等と申儀、御用所へは被仰出候記等も見當不申。既に享保十六年大納言様御婚禮之御祝儀に、御馬廻頭丹羽武兵衛被指出、元文二年竹千代様御色直之御祝儀に、御馬廻頭松原善右衛門被指出、御同所様御宮参御祝儀に同津田舎人被指出、元文四年御同所様御髪置御祝儀に重而善右衛門被指出候。此趣に而見申時は、御奉書等之重き御請等之節は御馬廻頭、其外組頭御使を申時には御馬廻頭、御小将頭打込被遣候趣と奉存候。御色直等より此度御元服は尚更御重き事、御馬廻頭被指出彼是と申儀は有之間敷旨申聞候付、尚更遂僉議内五郎左衛門・三郎太夫御用番ゟ達、享保十年御元服之節御小将頭和田釆女被指出候御例有之候処、是を被指省、御馬廻頭被指出候儀は一圓相當不申事に而、心服不仕候間、此度は必御小将頭可被指出

儀之旨段々申聞、前段之趣共理解申聞候へども一圓承知不仕。御目見無之分御馬廻被指出候先例書も爲見候處、是は其時節如何之僉議にて罷出候哉難辨、何こか御樣子有之哉与被存候。いづれにも享保十年的當に候處、此例をはづし御馬廻頭被出候儀一圓相分り不申、御用人不僉議之旨等申。且又御小將頭も罷出、右御使者前々兩組頭打込被指出候こ相心得罷在候。此度御目見無之により而御小將頭被出候趣に候へば、御小將頭御目見無之御使者に限り候間、幾重に被仰渡候ても迷惑仕候間、何分御僉議有之樣仕度、此度前廉御馬廻頭ゟ御内證等も無之、御小將頭ゟさし懸被仰渡候へば、何廉可申上樣も無之候處、半藏迅より聞罷在、昨日御目見無之与承り難勤旨申上候上は、何分私共難勤、御請難仕、何分にも御斷可申より外無之旨段々申候。いづれにも御馬廻頭相勤可申儀与遂僉議、御用番に而者急度立候故、主水より五郎左衞門ゟ色々懸合におよび、且御用番よりも色々申談候へども、一向承引不致申張候に付、此上双方いづれゟ御使者被仰付候而茂、迚御請ハ仕間敷候。其上は甚御難題成を以に付、此度ニ在府之者仕立に而御使者被指出可然与遂僉議、其段伺可申こ奉存候内、御省略之御時節にも候間、在府之者可被指出旨、富田外記を以被仰出候付、井上勘助相伺被仰付候。段々之趣御馬廻頭心得不宜、此上私共より何廉申聞候儀ハ難仕候間、御前より急度被仰渡有之、主水役職も立候樣仕度候。主水ゟ申度儀申候故也。且又是以後も、御目見無之御使にハ御馬廻頭不罷越与申

趣に相心得罷在候而は相濟不申候間、御奉書御請等御目見有之御使には、先は御馬廻頭可被指出候。全然思名によつて御小將頭被指出候儀も可有之候。公邊御慶事に付被指出候御使者は、御馬廻頭・御小將頭入交り被指出尋に候條、以後急度左様相心得可申旨嚴重に被仰渡候様仕度候。且又御小將頭申分其理は有之候へども、おとなしく申時は、此度之御使者は先相勤、右寄之儀は段々御用番迄申達、以後々様にて而は必御請罷仕、此度は御斷らせ候故相勤候間、以後之儀會議有之様仕度旨申聞候に而有之所、其儀無之、是又不行屆之事候間、是又御直に被仰渡御座候様仕度、左様に無御座而は以後私共御用勤方萬端之障に成候付、此段達而奉願候。四月廿日付に而各連名に而申上。

但、此紙面并其答なし。今其大要を爰に記す。

四月十五日 德川家齊使を本鄕邸に遣はしてその元服せる祝儀を贈る。

〔政隣記〕

四月十五日、昨夜四時過御小人目付を以、御當番御目附衆より明朝上使有之段御申越之所、今朝六時過從大納言様上使御奏者番松平和泉守殿を以、先般就御元服御祝儀干鯛一箱・昆布一箱・御樽一荷(太刀目録添)御拜領、同半時過御退出。御料理著御膳に付、御菓子等御先手長田甚左衛門殿御相伴に而出。御引菓上使宿ゟ出雲守様御引。上意御名代出雲守様御拜受、御取

自分は津田政隣

持倉橋三左衞門殿・諏訪左源太殿・本多帶刀殿并利倉善佐等。上使御給事先達而申談有之、自分・人見吉左衞門・別所三平・氏家九左衞門・青山數馬・同五左衞門勤之、御刀三平直之。右御取持之御面々等、且上使に付相詰候御徒目付・御賄方・御酒方・御小人目付、都合廿五人にも御料理出之。

四月二十日。金澤に地震あり。

〔政隣記〕

四月廿日、申五刻地震。鉢水覆れ、馬驚嘶之事頻也。

四月二十日。前田重教自ら火災を巡見する際に於ける諸士の作法を令す。

〔天明舊記〕

天明二年四月十五日同役示談之趣、御用番安房守殿へ相達候處、同廿日今枝刑部へ左之通被申渡候。

若火事之節爲御巡見、自然中將樣御出之儀も有之候はゞ、火消中進退如何相心得可被申哉之旨被申聞候。右之節各は馬禮被仕、作法能聽通可被申候。尤騎馬之分は下り立、纏を初火消人數之分は、隨分作法宜敷走通可申候。火事鎭り被罷歸候節、御出合被申候はゞ、各尤下馬、人數も其所々に蹲踞仕、御通以後罷通り可被申候。其節目印等之分は伏せ申に不及候事。

右之趣に被相心得、同役中可有演述候事。

四月廿一日。此の日以後大聖寺藩の老臣等頻に金澤城に登る。

〔政隣記〕

四月廿一日、金澤ゟ備後守様御使者御家老佐分儀兵衛・御用人山井其左衛門、四時過登城、暫有之退出。廿三日同斷。廿四日右兩人に御家老山崎権之丞・御用人稲垣與三右衛門都合四人、四時過よりも登城。虎之御間御屏風囲ゟ此間之通御大小將誘引、八時前一汁三菜・御湯漬・御酒被下之。御歩給仕、指引同小頭、挨拶當番御横目。七半時退出。廿五日も四人共登城、昨日之通。廿六日・廿七日も同斷。然所御使者より申譯に而も無之、御家老等願之趣有之罷出候儀に候間、明廿八日よりは御式臺通り罷出度旨申聞候趣、御用番被聞届、御横目ゟ安房守殿被仰聞、夫々演達有之。誘引は是迄之通御大小將、退出之節迄には不及事に相成、御歩よりも送之。且廿八日・廿九日・晦日・五月二日登城、右同斷。同八日登城、暫有之退出。廿三日・廿七日・六月十六日同斷。七月二日には御家老一色五左衛門一人登城。同四日山井其右衛門一人登城。同六日右御家老三人共登城。十三日御用人中川萬右衛門・山井其右衛門登城。翌十四日同斷。同月廿四日御家老佐分・山崎・一色三人共登城、御用人山井遠慮被仰付候旨、御用番長大隅守殿於御宅御書立を以被仰渡、御横目溝口勘三・末村三蔵爲指引出座。

四月廿八日。前田治脩及び重教の歸國を謝する爲、使者神尾伊兵衞・前田內藏助登營す。

〔政隣記〕

四月七日、今度金谷樣御歸着之御禮使前田內藏助事は、前月十一日記す。就右從加賀守樣も爲御禮組頭御使可被差出筈に付、此元に而詰人より仕立に被仰付、神尾伊兵衞ゑ被仰渡。今日內藏助一集に參着之趣也。依而翌八日前田・神尾、御老中・若年寄中ゑ間番同道御使勤之、九日御側衆同斷。但前田は御一門樣方ゑも追々勤之。廿八日前田・神尾登城、御獻上物有之。兩人共御目見、內藏助は自分獻上太刀代銀一枚。但同日前達而前田御使之節御口上に申述置候御進物、今日御獻上相濟候に付、若年寄衆以上ゑは間番、御側衆等ゑは御大小將使に而被遣。五月七日於御城兩人共御返翰渡、拜領物被仰付。御返翰は鳥居丹波守殿御宅に而渡、翌八日前田發歸。

本文之通に付六月七日神尾御紋付御羽織一・白銀十枚拜領。

四月。菜種の賣買に關する規程を定む。

〔杉木氏小記〕

每歳菜種作主拂方、幷油屋共買入、且又中買人共定書

一、村々菜種拂方之儀、御郡方油屋共幷中買人共ゟ、勝手次第に相對を以賣渡、尤買入手形を取、十村ゟ可指出事。

附り、五合・一升に而も手形なしに賣渡申間舗事。

一、油屋幷中買共買入之儀、御郡方何方へ成共相廻し、作主相對を以買請、尤右之通少分之種に而も必買手形相渡可申候。勿論賤賣ニ向致間敷候。日數之儀は、每歳入梅より三十日を限し、爲相心得可申事。

一、中買相望申旨に、十村方ゟ相斷候にて承屆候上、添紙面を以油吟味人方へ申遣し、中買札爲相渡可申事。

一、御郡方賣油之儀、右買手形油吟味人方に而相しらへ、﨑々勘定相濟次第、餘菜種作主勝手次第他國津出相願可申事。

一、油屋共買入之儀、入梅より三十日を限買入不仕油屋共有之候而茂、組々に而不及言者、右日數相濟次第津出爲相願可申候間、兼而油吟味人より油屋共ゟ申渡、心得違不仕爲買入可申事。

附り、魚津町油屋等ゟ賣渡申菜種之儀、先年より魚津町ゟ賣渡申組々迄に而、先年より不

賣渡組々よりは賣渡中間鋪候事。

一、村々餘り種津出願種之儀は、右に付二分口錢指出し、油吟味人ゟ相渡可申候。且又中買人種之內、御郡方燈油吟味人手前に而相しらべ、餘種津出之儀は吟味人相願可申候。口錢之儀中買人より可致事。

右之通相定候間、村々不相洩候樣可申渡事。

壬寅四月

御扶持人・十村

五月三日。前田治脩使を大聖寺に遣はして前田利精を籠居せしむ。

〔政隣記〕

一、五月三日大聖寺ゟ御家老前田圖書殿・御馬廻頭遠田三郎太夫・御近習御用組頭並橫濱善左衞門・御表小將御番頭由森澤右衞門・大聖寺御橫目御大小將庄田要人各發足。但朔日夫々被仰渡。同月七日各歸府。但同日より御先筒頭多田逸角・御使番堀平次右衞門・團七兵衞爲御橫目相詰。右御用之趣者、橫濱者御名代に而御館御書院正面に着座、備後守樣者下之方に御着座に而、御不行狀之趣共一々申上、御腹立不少候、依之御保養所ゟ可有御入段御意之趣申上。于時圖書殿御帶刀御渡被成候樣申上候所ゟ、遠田進寄、私ゟ御渡与申上請取之候上、直に御

籠之内之間四方之御間閣ゟ奉押込与云々。御不行狀之趣共者、第一御酒狂ニ而御短慮等色々御不慥有之由、區々說雖有之不詳ニ付不記之。右御用御書翰・富田重役、別而富田危ゝ御用。兄來備後守樣御短慮至極、當御刀受取可申与御側近ゝ於進み寄ニ、必定御拔打ニも可被成覺悟。依而發足前追書御用番ゟ上置候与云々。然所臨機溫和ニ而奉受取故、無御子細御渡之。其進退甚殊勝見事成儀之由、是等雖不正說任承記之。

一、五月廿六日御先手物頭佐久間輿左衛門・組外御番頭松原善左衛門・御使番長谷川三右衛門、爲御横目大聖寺ゟ被遣候。勢向之儀者御直に可被仰談旨、御用番安房守殿被仰渡候事。

但、六月五日各發足、多田逸角・堀平次左衛門・園七兵衛与交代。

一、備後守樣御隱居之儀、從此方樣御願、左之御六人之内御相續御願御僉議、不殘御舍弟也。一人御實子也。

主水殿二十歳　主計殿十七歳　大學殿十五歳、以上御在所。

勇之助殿御二歳、御實子。

主次郎殿十五歳　幡十郎殿十五歳、御兩人は江戸。

五月十一日。徳川家齊の元服任官を祝する爲前田治脩及び重教の使者登營す。

〔政隣記〕

五月九日、今度大納言樣御官位爲御祝儀被指出候御國使者御先手御用人井上勘助、中將樣より同斷栢植一平太。且右に付以上使御拜領物之御禮河地才記、以上三人共仕立に相成、去月廿八日金澤發足、今日參着之趣に被仰付、翌十日開番同道、御老中・若年寄中に御使相勤。十一日井上・栢植は、從御兩殿樣御獻上之御太刀馬代殿中に持參、河地は御禮之御使に付、殿中に不出。廿一日尾張樣等に御使勤。是に而右御使御田相濟、御返翰は六月十九日於御城渡。同月廿五日於御舘井上は組頭代御使に付御羽織一・白銀十枚、栢植・河地は白銀五枚宛、於御家老中席拜領被仰付候事。

五月十八日。自今三ケ年禁牢以上の刑に處せらるゝ者は藩侯の決裁を經べきことを定む。

〔袖裏雜記〕

公事場に禁牢者、死刑之分迄達御聽候へども、是以後は三ケ年禁牢之分も相伺可然旨僉議、寛書入御覽候處、尤之事、以後此通可心得旨御意之趣、五月十八日之處に留あり。死刑迄達御聽候儀、是迄之御親翰に不見當、右寛書之留も無之、公事場帳にあるべし。

五月廿三日。幕府へ派遣せらるゝ使者柄に關し相爭へる御馬廻頭及び御

本年四月十二日の條參照

小將頭戒飭せらる。

〔袖裏雜記〕

前に記す若君樣御元服之御使には、一件御馬廻頭甚心得違、就中原五郎左衞門主水ゟ及應答候趣、則而思召に不被爲叶候。依之御馬廻頭ゟは左之通御親翰を以被仰出、五郎左衞門には御次ゟ被召呼、富田外記等を以不心得之旨等、御叱りも可被遣、不被牛爲も不心得に候間、右之通御叱り、御小將頭も何とか可被仰渡候間、達示談可申上、御親翰存寄も候はゞ無泥可申上旨等、五月十二日御達。各示談之上、御親翰之內如何之了簡に候哉と御庫敍には、又何盧御詰申上、御親翰も可有之義間、此御文段は御省き被置可然哉。牛爲御叱存寄無之。御小將頭ゟも以富田外記被仰談可然哉。御馬廻頭ゟは私共より可申渡趣、壁書も入御覽伺濟。廿三日夫々被仰渡旨に付、同日御馬廻頭ゟ左之壁書相渡候處、奉畏候、同役ゟも可申聞旨申聞。右御親翰等は左之通。

今度若君樣御元服爲御祝儀指出候使者柄之儀、御目見醫之使者に其方ゟ相勤趣、年寄中ゟ被申達候付、御目見無之使者其方共勤候舊例數多有之。依而其段申聞候處、享保十年和田采女例のみに拘り、年寄中よりも申聞候儀を一圓不致承知段、如何之了簡候哉、甚以不能存念候。以後如斯心得違無之樣、急度相心得可申候、以上。

月　日

馬廻頭中

御馬廻頭へ

今度若君樣御元服爲御祝儀、公邊へ被指出候御使者柄之儀に付、各存寄之趣段々被申聞候趣、相達御聽候處、暑寒等御尋御老中方御奉書御請之御使者は、各より被指出儀は、時により思召を以御小將頭より被指出儀も有之候。此外都而公邊御慶事等之御使者組頭被指出候節は、御目見之有無に不拘、御馬廻頭・御小將頭打込、時々御僉議にて被指出も前々より之御振合候條、以後も此通相心得候樣可申渡旨被仰出候事。

右覺書一通充、御小將頭・御用人へ爲承知相渡之。

本年二月の條參照

五月廿二日。諸士旅行に際し荷物の重量に關する規程を守るべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

五月廿三日左之通御用番求馬殿被仰渡候段、定番頭より廻状出。

武州板橋・蕨・浦和・信州追分等驛々、近年風俗不宜、御定之外に賃錢貪り、幷人馬も拂切候旨申立、增錢相渡候ば働を以可指出抔与申聞、御荷物幷御家中旅行之障に相成候に付、於江

戸表無之度聞番心得之趣を以、安藤彈正少弼殿江及御届候所、自今右之族無之候様夫々御申渡有之候旨、安藤殿役人より申来候。右之通に候得は是以後御家中之人々往来之節、荷物貫目御定より重く候而者其咎無之候條、右躰之儀無之様可相心得旨等之事。

五月廿五日、御先手物頭佐久間與左衛門等大聖寺藩の御横目を命ぜらる。

〔政隣記〕

一、五月廿五日御先手物頭佐久間與左衛門・組外番頭松原八右衛門・御使番長谷川三右衛門、爲御横目大聖寺江被遣候。動向之儀に御直に可被仰渡旨、御用番安房守殿被仰渡候事。

但、六月五日各發足、多田豊角・堀平次右衛門・團七兵衛与交代。

五月、百姓の遵守すべき法令を示す。

〔上田僖記〕

御法令

一、改作方御法之通急度相守、御納所無私相勤可申事。

一、宿方・諸方に被建置候高札之條々、相背申間敷候事。

一、惣而目安等上申儀有之候はゞ、如先規其組之十村添書を以、御郡奉行々迄可出之御定に候條、假令直に言上仕度儀有之候共、十村迄書付可出候。但十村手前之儀を申上度候はゞ、

直に御郡奉行・改作奉行迄書付出可申候。右両奉行之儀申上度候はゞ、御算用場ゟ可申斷候。御算用場奉行之事申上候品有之候はゞ、御横目迄書付可出候。右之役人指置、直に訴訟仕候はゞ、不及理非急度可被行曲事に候事。

一、公儀御荷物船者不及申、諸大名衆之荷物船遭難風候節、御馳走之筋彌油斷仕間敷候。其外雖為賣船、難風之砌は隨分介抱可仕候。惣而船破損之儀有之候はゞ、縮方仕置、早速案内申事。

一、海上流物拾ひ候はゞ、早速可及斷候事。

一、於浦方便船仕候者、請人を立可申候。當分に而も請人取不申船に為乘、欠落人有之候はゞ、船貸主可為越度事。

一、浦方寄鯨之儀、斷之上御定之通申渡候はゞ、無相違割符可仕事。

一、嶋之内ゟ被遣置候流刑人、船に為乘申間敷事。

一、船潤入之品々、同役銀取立様、從先規如御定相守可申事。

一、御預所等境塚損候はゞ、双方納得之上申斷、可致修理候。勿論不依何事、他領之者与申分無之様、常々嗜可申事。

一、他領之者与縁組申合間敷候事。

一、他領之者致欠落罷越候とも、留置候ハヽ曲事に可被仰付候事。
一、他領・他支配より引越候者ハ不及申、御國之者ニ而茂、他支配より引越移住仕度旨申もの有之候ニ付、慥成請人を立、其在所構無之においてハ、御郡奉行ゟ申断、指圖之上移住可為仕事。
一、津留・津出・津入之儀、如御定備相守可申候。且又他領境渡物御締之儀、堅く相守可申事。
一、十村申付候儀、肝煎・組合頭等總而組下之者違背仕間敷候。若十村并肝煎・組合頭非分申付候ハヽ、小百姓等より直に御郡奉行・改作奉行之内ゟ可申断事。
一、律儀成百姓等、可申上儀を茂御上を恐れ不申上躰有之候ハヽ、十村・御扶持人見聞之通、御郡奉行ゟ可申聞事。
一、徒成百姓等、申立にも成間敷候へ、御上え公事之下持を仕、書付為上申儀有之候ハヽ、本人よりハ下持之者大罪に候間、十村・御扶持人吟味仕、其段可申断事。
一、諸百姓等奢たる儀不仕、農業稼専にいたし、身躰持立候様常々心懸、無油斷様可申事。
一、家作之儀結構仕間敷、其外諸事榮耀成儀堅無用之事。
一、衣類之儀、布・木綿之外着用仕間敷候。但十村・御扶持人之儀ハ、男女共紬御免之事。

一、百姓常々食物雜穀を用、米猥に不可食事。

一、十村・御扶持人惣而百姓男女共、乘物一切御停止之事。

一、小百姓等は不申及、御扶持人・十村・長百姓たりとも、常々振舞之村合仕間敷候。神事或は嫁娶・聟取又は葬禮・年忌之節、成程輕く可仕事。

但、婚禮・葬禮・年回忌等之儀は、人たる者之大禮に候得ども、少も分を過候而は、金錢を費しながら却而人道に不叶儀に候。依而春秋爲讀聽候得ども、其身も不相守、人々も不致様に成候哉、近來右大禮等之節、別而衣服・食品等爭而華美を盡し、分限をのりこえ候由、沙汰之限に候。元來大切なる父母之葬式等、或は一代一度之婚禮を、己が我慢輕薄に而芝居・物まね様にいたし候儀は、先以實意を取失ひ、不孝不敬之至に候。是等之處より平生之暮方之儀も分限を打忘れ、長たるものは鍬・鎌を持候事さへ恥敷存候事にまで押移、何分歎敷事に候。いづれ向後爭而本心に本づき、各本預り候村々末々に至迄、急度本心に立歸り、萬端御教諭通相守、安穩に渡世いたし候様可申諭候。

一、鐵炮御締之儀、彌嚴重可相守事。

一、御郡中在々に餅・酒・小間物、其外惣而榮耀之品振賣、幷道脇に小屋を懸爲賣申間敷候。

但宿方往還筋等、店賣仕儀は不苦事。

一、十村・御扶持人其外百姓共より、給人・町人ゟ音信仕間敷事。

一、御郡之者大聖寺口留番所通り候はゞ、過書取可申候。無隙罷越、後日相聞ゟ候はゞ可為越度事。

一、七木御縮之儀、享和元年御改之通相背申間敷候。

一、百姓・頭振他國ゟ連申間敷候。日用稼等参候はゞ、他國に居留り不申様、一類共より申付可置事。

一、村々百姓・頭振等、男女人數一ケ村切相調理、毎年帳面に記可置候。尤如御定宗門御改、堅く相洩し申間敷事。

一、他國之錢、御領分ゟ入申間敷候。其外賣買之錢、買申間敷候儀勿論之事。

一、往還道常々請取之在々より養修理、損不申様可仕候。打捨置及大破候はゞ、村役人可為越度候。勿論道端を掘ひろげ、道をせばめ候はゞ、急度可為不屆事。

一、不依誰々御郡方ゟ罷越候輩、宿主と云とも是迄仕間敷候。御用之儀斯有之候はゞ、格別之事。

一、就御用御郡方ゟ罷越候人々、旅宿無滯可申付候。勿論音信・賄賂其外馳走ヶ間敷儀堅く仕間敷候。若役人ニより非分申掛候はゞ、十村ゟ斷可申事。

一、宿馬・宿人足、隨分無滯樣可申付事。

一、往還筋は勿論、何れ之道筋に而も、旅人相煩候はゞ致介抱、住國等委曲相尋可及案内候。若令死去候はゞ、死骸其儘指置、早速斷可申候。且又道筋或者野山等の變死人又は行倒人に、死骸に番人附置、早速案內可申事。

一、諸百姓申分之儀、不依何事、給人方に申斷間敷事。

一、寺替・宗門替之儀、至而無據子細有之候はゞ、及斷、指圖次第可仕事。

一、新規之佛法勸申者有之候はゞ、一圓聞入申間敷候。勿論早速可及斷事。

一、後生願候とも、耕作稼之手支にならず、勿論費なき樣願可申事。此ヶ條は恐多茂徹妙院樣御直書を以被仰出候御ヶ條に而、殊に御趣意茂深く、難有相覺候。佛法之儀は、各親・先祖等之冥途をも助れかしと、讀經念佛して願出申事に而可有之候得共、御上より願ふなと被仰出候とても是非も無之事に候處、人々親・先祖に之孝心を御のれは被遊、費なき樣にして願へと被仰出候は、難有御趣意に候。兎角費多く候而者、畢竟御收納に茂指障、不被爲得止事御刑法も被仰付、其果には先祖より之田畑を取失ひ申場にも至り候を、不便に被爲思召候而、ヶ樣に被仰出候事に而、可奉恐察事に候。ヶ樣之難有御趣意も存付候而、其身其程に應じ、朝夕之看經をも耕作之透を考へ勤べき事に候所、ヶ樣

之御事とも不心附、御國恩も取失ひ、佛寺へ圖候得は宜敷きやうに相心得、一類縁者之御
收歸來未進いたし候とも振捨申而已か、寺々之堂閣を立かへ、又は百姓家におゐて祖師之
法會をいとなみ、人寄せなどいたし、金銀を費候儀に、勿躰なく恐多き事に候。中には又
己れは左程佛をも信せす候得共、只世之なれふれにつれて、寄進之多きを人にほこりたて、
己を我儘に而金錢を費し、又は親子を見事にして、既に心得違に候。殊に近年は、一向宗
寺院官位昇進致し候様子に而、打割等相込、金錢を費申者共も多し、中には貧家之者より
すゝめ込、爲致昇進候向も有之由相聞へ、沙汰之限り候。是等之儀に付而は、先達而申觸
置候趣も有之候得とも、畢竟愚昧之者とも春秋廻村申談候節法令之趣とも、通例之事与相心得、
右等之深き御趣意を得不奉恐察、安閑与暮し候故、右之處にも至り申儀ニ被存候間、今度
譯而申渡候、其方共においては、長たる者共に候へは、せめて是等之御趣意とも奉會得、
寄々申談候様可相心得候。尤此御ヶ條のみにも不限、萬事右に准し愼重可相心得候事。

見事にしての次脱文歟

同心寺は道心寺なるべし

一、新寺并同心寺建立申間敷事。
一、新規之祭禮堅御停止、勿論在來る祭禮無懈怠彌輕可執行事。
一、升・秤之儀、彌如御定相守可申事。
一、新規之酒屋、彌御停止之事。

一、ばくちがましき儀、惣而かけの諸勝負不依何事、堅仕間敷事。

一、船乗幷商人他國ゟ罷越借銀等仕置、其所より及斷、惣而御上ゟ之御邪魔に相成候儀、堅く仕間敷事。

一、火之用心跡々如申渡、互に令吟味、灰置所等別而念を入可申候。若無沙汰仕、火事出來においては可爲曲事候。勿論村々火之番人、無油斷爲廻可申事。

一、火事出來御藏近く候はゞ、跡々より十村方に定置候通、罷出火を防可申事。

一、御鹽燒立、念を入、升目等無私可仕事。

一、御郡中出生之駒撰相濟不申内、他國ゟ渡し不申樣、急度締可仕事。

一、九十歲以上之者は勿論、惣而老人之儀、子孫親切に介抱可仕事。

一、たばこ本田に作り申儀堅御停止、勿論たばこ畑歩數相増申間敷事。

一、村々新に家造申儀、村役人相談之上及斷、指圖次第可仕事。

一、御用之品に而も、書狀等村送り之儀、十村幷御何指之外は一圓送申間敷事。

一、矢篦竹數、隨分育候樣可仕事。

一、諸物買しめ、高直に賣申儀、堅く御停止之事。

一、給人藏宿在之所々、其藏宿請人幷十人組は勿論、村役人其外惣而同宿中常々心を附、少

々に而も怪敷躰有之候にては、早速可及断候。若隠置、外より顕においては、如御定辨米可申付事。

一、御年貢米御蔵納之節、尤念を入納可申候。且又諸代官手代等は音信・贈賂堅く仕間敷候。若又諸代官或者手代等非分之族致顕候にては、百姓より直に御郡奉行・改作奉行之内江断可申事。

一、跡々より不在來異形之諸勧進御停止。非他國之座頭・舞々・人形廻し・獅子等、ケ様之類無故者宿貸申間敷候事。

一、借宅人之儀、是又請人を取、村役人江相断、御法背不申様急度申渡、家貸可申候。其外一類等當分爲使置候とも、十村役人江断、御縮方洩不申様可仕事。

一、在々之儀ニ、無縁之者にも一夜宿も貸申間敷候。宿所にりとも二夜泊も候にては、請人取可申候。勿論一夜に而も、無心許者にハ心を付、不屆有之候にては押へ置、十村江断可申事。

右御定之品々、急度相守可申候。此外惣而跡々より御法度之趣、少茂背申間敷候。古來より段々被仰渡候御法之儀ハ、都而御國之人民彌安穏に可暮ため、被仰付置候事ニ候條、村々末々迄此所存付、常々難有奉存、全相守可申也。

天明二年五月

六月廿四日。馬廻組成瀬九郎太郎金澤城河北門外にて發狂す。

〔政隣記〕

六月廿四日朝、金城土橋御門御番人御馬廻組（居宅彦三七番丁）組領五百石成瀬九郎太郎、前夜泊番に付致交代河北御門より歸候所、同御門外に而致亂心、爲持候鑓を取鞘を外し候に付、家來支候得共可突伏爲躰に付、皆々逃散候得者、又々河北御門に既に可走入躰に付、足輕兩人支候所、種々惡言を申候に付召捕、河北足輕番所に入置之、夫々及案內候所、當番御横目中村九郎兵衞罷出取噯有之。其內宅より駕籠迎、類門指添罷越引取候事。

七月二日。前田治脩、前田利政の百五十回忌なるを以て香奠を贈る。

〔政隣記〕

七月二日、福正院様（孫四郎様御事。）百五十回御忌當月十四日御相當に付、今日御使御馬廻頭中村左兵衞を以、御香奠白銀五枚前田土佐守に被下之。

福正院は福昌院

七月三日。原五郎左衞門不念を以て戒飭せらる。

〔袖裏雜記〕

七月三日伺之上段々被仰出有之、左之通申渡。

但、五郎左衛門最初出候紙面に、不念迷惑之旨迄調出候處、指扣伺申儀と御尋故、其趣に爲調替候也。五郎左衛門紙面爰に略。

原　五郎左衛門

御手前儀、御尋數拜領鹽之通去晦日被仰出候。右爲御禮御奏者所に罷出可申候處、心付不申相洩、不念之仕合奉存候旨紙面被出候付、相達御聽候處、か様之類被仰出候へば、爲御禮罷出候儀に、差定候御作法之儀に候處、致失念候段、重き役儀等被仰付、組・支配をも持候者には別而有之間敷儀と被思召候。此度之儀は可爲其通候。以後之儀急度入念候様に可申渡旨被仰出候事。

七月六日。前田治脩、七夕の祝儀として刺鯖を徳川家治に獻る。

〔政隣記〕

七月六日、御祝儀刺鯖御獻上御使村田甚右衛門、西御丸へは河北才記御大小將御番頭代として勤之。但聞番今村五郎兵衛に松平伊豆守殿より呼立、御大小將より御使等多難出に付、任先例河地氏勤之。附、御老中へは百刺、若年寄衆・御側衆へは五十刺宛、如御例御配り。

七月六日。金澤よりの使書江戸に着し、次いで大聖寺侯前田利精隱居のことを議す。

主水は奥村隆振

出雲守は富山侯前田利久

備後守は大聖寺侯前田利精

主水は前田利物

〔政隣記〕

七月六日、今夜足輕小頭一人・足輕二人、去朔日金澤發飛脚參着、御用番主水殿より此表詰大音帶刀殿江之御用狀持參。依而今村五郎兵衞を帶刀殿御小屋江被招數刻對談。十二日出雲守樣幷倉橋三左衞門殿御出、於御小書院御密談有之。帶刀殿・五郎兵衞は右御間江出、其外は御給事人等も都而御人拂。四時頃より九時過、畢而御菓子・御吸物・御酒等出。翌十三日此方樣御用御賴之御老中田沼主殿頭殿江出雲守樣被爲入、右御密談之趣被仰込。倉橋三左衞門殿も御越。于時十六日御大小將氏家九左衞門江、御國江之御使内々御番頭中より内意有之。御步横目塚本和左衞門江茂（若途中氏家故障有之候節之爲副使也、）頭より内意有之。十八日朝五つ時前倉橋三左衞門殿御越、大音帶刀殿對談之上、追付氏家江金澤江之早打御使被仰渡、拜借金七十兩、塚本江五十兩、兩人共早打に而晝八時過發出。但拜借金半分は於金澤發足前受取候樣被仰渡、此元に而は半金幷路銀・馬銀等受取之。右御使者備後守樣就御病氣、從此方樣御隱居等之儀御願に付、從公邊御渡之御書付持參也。

右に付御舍弟主水殿江御家督御相續之儀、從此方樣被引受、同月二十日御願書出。依而前田大和守殿等江爲御知有之。

一、氏家九左衞門等於道中川支、松代江廻候所、是又洪水に付、二十日酉之刻より二十一日

未之刻芝留。二十三日申之上刻着、二之御丸當番御番頭詰引御席ゟ罷出、大音帶刀殿紙面御用番主水殿御受取之。

但、御次ゟ之言上ニは明日ニ可仕旨主水殿御指圖ニ付、翌二十四日頭多田逸角より昨夜奏者之趣ニ而言上之。于時九左衛門等御用相濟候條江戸表ゟ可相返旨、二十六日主水殿御渡、頭より申渡有之。發足ニ江戸ニ而之拜借金受取次第、翌朝發足之筈ニ申談有之候所、借用金高之御僉議果敢取不申、二十九日ニ金二十兩、江戸ニ而受取候分共都合五十五兩御貸渡之御僉議相極、翌八月朔日朝金澤發足、十日江戸ゟ歸府。

一、九左衛門江戸發足前、大音帶刀殿御渡之覺書左之通。

金澤表ゟ致到着年寄中ゟ可被申達趣。

去十八日六半時過脇田三左衛門殿御越、備後守様御舍弟前田主水殿御出府之儀、今日御用番田沼主殿頭殿於御宅御書付を以被仰渡候由ニ而、右御書御渡被成候。依之氏家九左衛門早打申渡、御步横目塚本和左衛門相副及言上候條、可被達御聽候。委細者猶更以紙面及言上候旨、大音帶刀申聞候由可被申達候。

一、氏家早打御使相勤候ニ付、九月十七日於江戸白銀五枚拜領被仰付。

七月八日。諸士に命じ新たに先祖由緒一類附帳を提出せしむ。

〔政隣記〕
七月八日、左之趣御用番主水殿被仰渡候由、定番頭廻狀有之。
年寄中席ゟ、御家中之人々先祖由緒一類附帳先達而指出置候所、年月を經候付此度增減改、當月中に可指出候。帳面口張等に不及候。且本組與力・御步等之內にも御知行被下候分は最前之通可差出候事。

七月九日。前田重教、陪臣田中源五左衞門の馬術を觀る。

〔政隣記〕
七月九日、長大隅守殿給人組馬役領二百石田中源五左衞門馬術、中將樣御覽。最初に雲䳄与申御馬に乘馬被仰付。是は能口を明候御馬に候所能乘。其次頤与申御馬、是は舌を出し候由有之候所、一向舌出し不申。二疋共首尾能乘仕舞候所、年齡御尋に付則□与申上候得者、驅は乘候哉御尋に付、若き內に度々乘候得共、初老以後相止罷在候。併御意に候得者何時に而も乘可申旨御請仕候處、左樣可有之儀思召候。重而御馬場之節可出旨被仰出退出。同十一日出候所、中將樣御騎射二筋被遊、其次源五左衞門ゟ驅一篇被仰付、其次に橫山求馬殿馬役佐野源藏馬術御覽、雲䳄に御乘せ之所、始終口明け不宜由。下り立候而も何之御意も無之御入之事。

七月十三日。不破和平の子新助遂電す。

〔政隣記〕

七月十三日不破和平嫡子新番組御歩二之御丸御近習番不破新助逐電。御留園等一箇玉井圭馬・高山才記詮議候處不相知。右趣に付父和平自分指扣。八月八日赦。

七月十五日。昨今兩日江戸及び金澤に地震あり。本郷邸に損害を見る。

〔政隣記〕

七月十四日・十五日金澤・江戸同刻地震。

十六日、此頃之地震に而江戸中所々損所も有之。御上邸御小書院・御廣間等壁落、御休息之間張付等茂損障之類有之

七月廿六日。使番に派せられたる者の直答書に麁紙を用ふることを命ず。

〔政隣記〕

七月廿六日、御使御直答書前々麁紙を被仰出置候處、宜敷紙を用候者有之候間、地・他共隨分麁紙用候樣。右書方も認樣取次伺之譯を書下に調、隨分無用之文言相省候樣被仰出段、御用番主水殿夫々に被仰渡。

七月廿八日。前田重教の子齊廣金澤に生る。

〔政隣記〕

一、七月廿八日金谷於御廣式、藤姫樣御袋之方（青山大膳亮殿御家來山勝治右衛門妹おみゑ）御安產、御男子御出生。御簞役中島誠左衛門江被仰付。八月十五日御弘有之。且七夜御祝八月六日有之。御名右誠左衛門指上候樣被仰出、則上之候事。

七月。十村の使用する手代の行狀等に就いて諭す。

〔司農典〕

各召仕候手代共之儀、惣而村方迷惑之筋無之樣相心得、村金荷等懸り可申儀、或者夫人足遣候儀等隨分致省略、聊之品にも心を附綿密可相勤筈に候。然ル處不心得之者も有之樣に相聞得、人別相糺可申候得共、先ツ此度は一統へ申渡候條、得其意、夫々主人より嚴重可申渡候。且野邊御用先抔に而見請候處、御郡により主人同樣相見え候者も有之、甚難心得、尤御郡に寄、主人与差別有之先に相見江候所も有之候。其外村役人へ之會釋抔も、主人同事に相心得候者も有之樣子に候。肝煎等之儀者、上江附候一村之役人、輕々敷相心得申間敷譯に候條、假介主人に代り候御用先に而も、手代は心得可仕事に候。是等之趣其主人々々諸事心を附、夫々嚴重可申付事。

篠原左次右衛門
堀田次兵衛
和多田八太夫
遠藤次左衛門
高澤平次右衛門
木村治左衛門
小泉四郎兵衛
小杉源兵衛

寅七月

主水諱ハ利物

八月六日、大學寺侯前田利精の嗣利物金澤城に登る。

諸部御扶持人・下村中

〔政隣記〕

一、八月六日前田主水殿大學ト御替出、七日金城御登城。加賀守様者先頃以來御不例に付御對顔不被遊、金谷に而中將様御對顔。右而御會釋備後守様御同事ニ而、携候人々布上下着用、御料理出不申事。

十八日江戸御着府、廿一日備後守様御隠居、主水様御家督、此方様御願之通被仰出。猶八月

八日・廿一日之ヶ條下々委く記之。

但、羽田源太夫金澤、圭水殿より御先ゟ發足、十七日江戸着、御舘ゟ直に出。御近習御持筒頭也。

追付備後守様御屋敷ゟ罷越、同所に御貸小屋受取相詰候事。

八月十五日。諸士に前田齊廣の出生せしことを告く。

〔政隣記〕

八月十五日、左之趣今日於御横目所披見申談有之、追而定番頭よりも如例廻状出。

今般金谷於御廣式若子様御誕生、御名亀萬千殿与被稱、殿付に唱候様従中將様被仰出候事。

八月十五日

八月十八日。大聖寺侯前田利精の嗣利物江戸に着す。

〔政隣記〕

八月十八日、前田圭水殿今日四時御着府、追分口御門より中之口通り、出雲守様等御定席ゟ御通り、御熨斗出之。構候人々布上下、圭水殿も御上下御着用に而御出也。御往來共中之口ゟ、大音帯刀幷御用人・物頭都合三人罷出、御先立物頭勤之。御口上御用人ゟ被仰置、追付御退出。無程爲御祝干鯛一箱被進之、御使御番頭河地才記勤之。

八月十八日。前田治脩海雲及び獣筋を徳川家治に献る。

〔政隣記〕

八月十八日、今朝爲御伺御機嫌御老中方迄以御飛札、海雲一壺・獣筋二把御獻上、御側衆以上御配り御例之通。

八月十九日。前田治脩、幕府聖堂釋菜の爲に要する杉原紙を寄進す。

〔政隣記〕

八月十九日、聖堂釋菜に付、一昨十七日如御例杉原紙可有御寄附所、御用所濟に而、今朝青山數馬名御寄附物持參、役々聖堂御役人ゟ内濟之儀申込、一昨日御寄附有之候趣を以取計相濟。依而御使書茂十七日之日附に而上之。

但、御用人井上勘助發病に而役引に付、御步頭渡邊主馬當分御用人在勤中也。依而渡邊氏

上ゟ聖堂御役人ゟ、内取計之挨拶金等餘程費用有之。

八月廿一日。大聖寺侯前田利精隱居を命ぜられ利物その後を受く。

〔政隣記〕

八月廿一日四時御名代御登城之儀、昨夕御用番久世大和守殿ゟ御番御呼出被仰渡候に付、出

雲守樣御登城。前田圭水殿ゟ茂依御奉書御登城之所、從此方樣御願之通備後守樣御隱居、圭水殿ゟ御家督御相續被仰出候段、御老中方御列座、御用番大和守殿被仰渡。然る上は松平之御稱號、并御座席・御供廻も御家格之通之段是又被仰渡。備後守樣御名代には、佐竹壹岐守殿御登城也。此方樣御名代出雲守樣、御城より直に爲御禮御老中御廻勤有之。圭水樣も御廻勤之上、直に御館ゟ御出、御熨斗上之、追付御退出。

今日より圭水殿御儀、樣与唱候樣談有之。

〔德川實紀〕

八月廿一日、加賀國大聖寺城主松平備後守利精、病あつきをもて致仕し、弟圭水利物に原封七萬石をつがしむ。

八月廿一日。本鄕邸以下江戸の藩邸風害を受く。

〔政隣記〕

八月廿一日、今朝之風雨に而江戸中破損點、此方三御邸并深川御藏屋敷、且兩御寺等之損所、當分之御修覆代銀四十貫餘之御費与云之。

兩御寺は小石川傳通院及び下谷廣德寺

八月廿二日。前田重敎、馬廻組山崎五郎右衞門の武技を賞す。

〔政隣記〕

八月二十二日、今月□日並合御近習勤仕御馬廻組山崎五郎右衛門儀、於中將樣御前、西瓜を三方に載せ木刀を以可切旨被仰出候所、奉畏、三方に少しも不疵、奇麗に切割候所、御稱譽之上名次郎兵衛与可改旨被仰出。

八月廿七日。前田重教、近臣戸田與一郎がその職務を謹まざるを以て戒飭す。

〔續漸雜記〕

中將樣より被仰出に付、左之通八月廿七日申渡候處、被仰出之趣謹而奉畏、迷惑至極仕候。心付可申處、行屆不申儀、其段は恐入千萬奉存候。以來之儀急度奉畏候旨申聞、其段も申上。

戸田與一郎ゟ口達に而可申渡趣。

御手前儀、中將樣御ためにに可相成品等被申上候氣取不相見、御儉約之節も不行屆候付、數度御意も有之由。右之儀に付、此間諸者共には被仰出之趣も有之候。先以御ためにに相成品は第一之事、殊御儉約之節も當時品數御省略之儀候へば、綿密に相心得、萬端心付可被申處、其儀無之儀にて不心得之至候。以來は萬端心を被付、御儉約之筋を嚴重に相心得可被申事。

八月。幕府、能登千路村の出願により邑知潟に於いて將來新開し得べき

安永四年二月十六日の條參照

地域を定む。

〔潟廻り落着一件〕

松平加賀守御預所能登國羽咋郡千路村、并加賀守領分同國同郡柳田村・深江村・吉崎村・圓井村・千田村・尾長村・堀替新村・本江村、同國鹿島郡酒井村・四柳村・大町村・金丸出村・金丸村・鹿島路村、右十五ヶ村入會潟新開引請之儀、御料千路村より奉願、川井越前守様御勘定御奉行御勤役中、御同人様御懸に而、場所爲御見分荻野作右衛門様御普請役御勤之節、御同人様并御吟味方御下役吉濱佐七郎殿御同御越、御見分有之。其後石谷淡路守様御勘定御奉行御勤役中、御同人様ゟ千路村并私領十四ヶ村一同御呼出し御吟味有之。右潟新開一件御吟味之儀、私領役人中ゟ御引渡被遊、歸村被仰付候に付、御預所御役所之御吟味請候所、尙又去年中、當御奉行所ゟ千路村并十四ヶ村惣代之者共、一同被召出、再往御糺明之上左之通被仰渡候。

一、右潟之儀御料・私領十五ヶ村入會に候所、先達而御見分之上、潟縁通り加賀守領分村々是迄作付致候場所は、年古き年貢地故、御吟味之不被及沙汰。然共後來之ため、右作致候場所之境ゟ、私領地境之御定杭此度御打渡被遊、尤其餘潟内之分は公儀新開に可被仰付候得共、是迄私領十四ヶ村より蘆・眞菰刈り候場所茂有之、新開に相成候而は、秣・肥草・薪等に指閊難儀致、其上用惡水之指支も有之候趣、私領十四ヶ村申立候に付、右蘆・眞菰刈取來り候場

所々先〻其儀被指置、猶當内之方ゟ前芝刈取場之境杭御打渡被成、往来之通私領十四ヶ村ニ而林・肥草・薪等刈取、右境杭之外潟内魚鱗之儀茂、唯今迄之通千路村并私領十四ヶ村入會ニ相稼、右芝・萱苅取場境杭之外、潟内此上干揚場田来致候節ニ、千路村斷開請之積りニ相心得、御定杭之通急度相守、少茂違乱無之様仕、若御定杭損候節ニ、御預所御役所ゟ申立、御指圖請打替可申旨被仰渡候。

一、右地境杭御打渡として、今般御普請役青田宮内殿・村田榮次郎殿・猪俣直之進殿被指遣候間、先達而荻野伴右衛門様・吉岡佐七郎殿御見分之節申立候地境等、正路ニ御案内仕、御指圖受可申旨、是又被仰渡候。

右被仰渡候趣、一統承知奉畏候。若違背仕候ハヽ御科可被仰付候。仍御請證文指上申處如件。

天明二寅年八月

松平加賀守御預ケ所能登國羽咋郡千路村

庄屋 當兵衛　組頭 太右衛門

百姓代 作兵衛　同上 半兵衛

百姓代 九郎右衛門當病ニ付代人宇兵衛

同國同郡柳田村

肝煎　半兵衛　　組合頭　七郎右衛門
組合頭　傳右衛門　　同　上　太郎右衛門
百姓惣代　清次郎　　同　上　權兵衛

同國同郡深江村

肝煎　平兵衛　　組合頭　市兵衛
組合頭　小兵衛　　百姓惣代　藤右衛門
百姓惣代　新藏

同國同郡青崎村

肝煎　忠右衛門　　組合頭　彌五兵衛
百姓惣代　又右衛門　　同　上　伊右衛門

同國同郡圓井村

肝煎　三郎左衛門　　組合頭　清右衛門
組合頭　與三左衛門　　百姓惣代　七郎兵衛
百姓惣代　小兵衛

同國同郡千田村

肝　煎　作右衛門　　組合頭　長五郎
組合頭　次右衛門　　百姓惣代　與三右衛門
百姓惣代　彌三兵衛

同國同郡尾長村

肝　煎　傳右衛門　　組合頭　善　六
組合頭　彌左衛門　　同　上　萬右衛門
百姓惣代　彌兵衛　　同　上　七兵衛

同國同郡堀替新村

肝　煎　名右衛門（江ノ貝村）　　組合頭　半兵衛
百姓惣代　左　助　　同　上　四郎左衛門

同國同郡本江村

肝　煎　理左衛門　　組合頭　與三右衛門
組合頭　喜兵衛　　百姓惣代　孫左衛門
百姓惣代　長五郎

同國能美郡酒井村

肝煎　與三兵衛　　組合頭　茂兵衛
組合頭　五郎八　　百姓惣代　惣四郎

同國同郡四柳

肝煎　伊兵衛　　組合頭　甚左衛門
組合頭　三右衛門　　百姓惣代　彌兵衛
百姓惣代　彌兵衛

同國同郡大町村

肝煎　吉兵衛　　組合頭　次郎左衛門
組合頭　惣左衛門　　百姓惣代　八右衛門
百姓惣代　十郎右衛門

同國同郡金丸出村

肝煎　野右衛門　　組合頭　五右衛門
組合頭　助九郎　　百姓惣代　七兵衛
百姓惣代　喜兵衛

同國同郡金丸村

肝煎　園　助　　組合頭　新　助
組合頭　河原助　　同　上　三郎四郎
組合頭　八郎右衞門　　百姓惣代　道　權
百姓惣代　源左衞門
同國同郡豐島路村
肝煎　六左衞門　　百姓惣代　傳四郎
同　長兵衞
御奉行所

〔潟繩ら落着一件〕
加州御領所能州羽咋郡千路村、金澤領鹿島路村外十三ヶ村、右十五ヶ村入會潟地境杭御打渡為御用、今般各様御越被成候ニ付、御奉行所被仰渡之通、地境等正路ニ御案内可仕ニ勿論之儀、惣而御尋之品、當座取繕ヶ間敷儀不申上様可仕候事。
一、御場所御分間其外御旅宿御呼出之節、刻限無遲滯罷出、御指支ニ不相成様可仕事。
附り、御案内等之節、不入脇指帶し申間敷候、勿論喧嘩口論等相慎、响騒舗無之様可仕候事。
一、御場所先往來之者ニ不及申、耕作之者共冠り物取計儀等為致候儀不仕、惣而往來野菜等

之障り不相成様可仕事。

附り、道橋掃除等に不及、且辨當持之外雨具等茂可成丈け御手入に而可被相濟候間、御指圖之外不用之人馬等決而指出申間鋪候。

一、御旅宿近所若出火等有之節には、早速馳付、御指圖次第御用書物等取片付候樣可仕候事。

一、御旅宿之儀、千路村御落着之上、淵蓋寄宜場所御止宿候樣御先觸被遣候所、加州御役人中より兼而村々御紀之上、金丸村に御極め被指置候に付、右村に御止宿被成候。御逗留長く相成候はゞ、諸色御買上御手賄に可被仰付候得共、一躰御旅宿狹く、別宿建候場席茂無之、村方不勝手に付、格別日數も御懸りも不被成候にで、御定之木錢并米代は所相場を以御拂可被下置候。米直段時之相場無相違書上、所有合之野菜を以相賄、一汁一菜之外何に而茂御馳走ヶ間敷儀仕間敷候。惣而村入用等不相懸樣可仕候。且御家來中に至迄御調物懸け賣不致、代物与引替に可仕、勿論時相場を違へ高直又は下直に賣上申間鋪事。

附、御召仕に至迄金銀・米錢・衣類等は不及申、何樣之輕き品にても、音信借り貸一切仕間敷候。若御家來中より非義被申懸候はゞ、無隱早速各樣迄可申上候事。

右之趣被仰渡、一同承知奉畏候。小百姓共に茂申含置、違失仕間鋪候。仍御請印形仕指上申所如件。

御名ハ松平加賀守

天明二寅年八月廿五日

御名御領所能登國羽咋郡千路村

庄屋　清兵衛　　組頭　太右衛門

百姓代　作兵衛

同所分同國同郡柳田村

肝煎　半兵衛　　百姓惣代　清次郎

同國同郡深江村

肝煎　中兵衛　　百姓惣代　嘉右衛門

同國同郡吉崎村

肝煎　忠右衛門　　百姓惣代　又右衛門

同國同郡國井村

肝煎　三郎左衛門　　百姓惣代　七郎兵衛

同國同郡千田村

肝煎　作右衛門　　百姓惣代　與右衛門

同國同郡八長村

肝煎　傳右衛門　　百姓惣代　彌兵衛

同國同郡堀替新村

肝煎　志々見村　名右衛門　　百姓惣代　彦　助

同國同郡本江村

肝煎　理左衛門　　百姓惣代　孫左衛門

同國鹿嶋郡酒井村

肝煎　與三兵衛　　百姓惣代　惣四郎

同國同郡四柳村

肝煎　伊兵衛　　百姓惣代　彌兵衛

同國同郡大町村

肝煎　吉兵衛　　百姓惣代　八右衛門

同國同郡金丸出村

肝煎　野右衛門　　百姓惣代　七兵衛

同國同郡金丸村

肝煎　園　助　　百姓惣代　道　權

同國同郡鹿嶋路村

肝煎　六左衛門　　百姓惣代　傳四郎

若田善内様

村田榮次郎様

猪俣直之進様

〔潟廻り落着一件〕

今般御廻り御用懸り被仰渡候に付、私共勤方書上可申旨承得其意候。則左に申上候。

一、芹川村兵助・高田村喜三次儀は、先達而御紙面を以被仰下、則八月廿二日に子浦村迄罷出、夫より金丸ゟ始終相詰申候。堀松村荘右衛門儀は、御扶持人中當御用に相懸り候間、罷出候様御紙面を以被仰下、則九月七日金丸村ゟ罷出、同八日より御用仕廻迄相詰申候。尤御扶持人中申談、入変り夫々相勤申候。

一、八月廿七日より九月五日迄副縁御分間御座候に付、酒見村孫右衛門并兵助・喜三次申談、両人宛毎日罷出申候。八月晦日孫右衛門儀平常御用に退散仕候故、其後者一人宛罷出申候。尤乾而立會方申筋に而茂無御座、御役人衆御分間御改之跡より罷越、御用茂有之候得者承り申儀に御座候。御壹体御宿ゟは、上足之儘御伺申上候。九月七日より十一日迄蘆・眞菰等刈

取場舟に而御分間之節茂、右同様に一人宛罷出申候。

一、潟縁御分間之節、蘆・眞菰等刈取場潟内境に、はい竹を指し御案内申上候樣被仰渡候に付、其段村方ゟ申渡、はい竹立置候所、殊之外出張申旨に而、八月廿九日酒井村領御分間之節、若田喜内殿より兵助ゟ迄御申聞被成候は、繪圖面御調方之所致推察、隨分引込候樣取計候樣被成度旨、其節申上候通に御座候。其後御奉行樣方ゟ茂御通達有之旨に而、何分宜取計候樣被仰渡、其趣に相心得居申内、別而九月七日潟内御分間初日よりは被仰渡之趣有之、私共之内御分間舟路之方ゟ罷出不申者共は、毎日潟内ゟ罷出内見仕、村役人申談、前段潟内はい竹夫々取計爲指直置申候。

一、御田地境御分間御番杭通間數、村方に而相しらべ書上候樣、九月四日に御扶持人中ゟ被仰渡候旨、則村切書出申に付、御寛申上、一村々々小紙覺書に爲調、名前等茂記不申、其日切肝煎中に爲持、直に御役人衆御家來中迄爲指上申候。

一、御田地境御假番杭より蘆・眞菰等刈取場潟内御假杭ゟ、一本より三本宛ゟ致繩引間數書上候樣被仰渡、則御扶持人中申談、御郡之内繩張人共ゟ申渡相しらべさせ候内、又候潟内御假杭通り間敷繩引之儀被仰渡、兩樣共以之外御指急ぎ之旨に付、尙更加人等申談相しらべさせ、其日切横折に記御役人衆ゟ書出候得共、墓取不申候に付、御内意申上候而、九月十日柳

備考は加賀守

田村御書所に而御役人衆江兵助より御覚申上候所、しらべ方之様子茂御申聞に付、尚吏同役御役人衆御宿江兵助罷越候而、何分急にしらべ方出来兼申趣申達候所、左候はゞ先寸繋に可相成分迄書出候様にと御申聞に付、其様子承り合、翌日より一筋宛之分為持縄引并潟内杭通り間数一躰横折帳に記し、同十二日兵助持参御役人衆江直に指上申候。其節前方其日切之横折には、御縄引覆成御見捨被下候様仕度段申達、詳立申候。夫より三筋縄引之分相しらべ、是又横折帳に相認、同十七日に兵助持参相違申候。則横折帳扣書指上申候。

一、兵助申上候。右九月十日之夜罷越候節、喜内殿より御申聞候者、先達而潟縁分間之節、吉崎村等番杭間縄引之外に毛付有之、空地寺平均之譯は村役人江為申聞置候得共、若毛付之所引方等相違、御名柱御勝手向御難題に相成申儀は有之間師蔵寺御噺に付、若毛付張出之儀毛而少々宛之様子、殊に空地寺御平均茂被下候得ば、村方より何寺可申出様茂無御座候。尚更私共方に而不指支様為仕可申儀。御勝手向難題に相成申儀は無之段申達候所、左候得者宜き旨御申聞被成候。

一、同十二日潟内御假杭通間数等持参仕候節、無築木杭御打方之儀、川々并大町・金丸渡外場等は、間違に為御打茂被下度趣御内々申達候所、右所々書記為見候様御申に付、立歸り横折に相記、追付致持参候所、御相談之上、右之所々は杭を寄せ候而、中を明て打候様に御申

付可被成旨等、御申開に御座候。

一、同十七日に三筋繩引之間數書持參仕候節、先達御申談候御番杭繩引等致し候儀は、人足共迄に候哉与喜內殿御尋に付、左樣に而は無御座候。國方に而步數等相改候節罷出候繩張人与申私共下役人、幷村役人指添爲相改申与相答申候。併國方に而は常に繩張等取扱申儀無之候得ば、改方儀茂行屆兼可申哉。尤隨分念に入相改させ申与御挨拶申達候。

一、九月十日頃より御扶持人中茂追々相詰候に付、同十四日より御境杭爲御打之場所江は、何れ茂申談、毎日一兩人宛爲御縮方罷出申候。

一、御分間中風雨に而御休日、幷御分間相濟候砌等、御役人衆江機嫌爲伺御宿江私共之內兩人程宛罷出候時分、取次迄名札にて口上申上置、相歸り申候。

右今般御用中私共勤口、公儀御役人衆江請答共書上申候。尤御境杭落着御分間等之節は出役仕立會申候、以上。

寅　九　月

芹川村　兵　助　判

堀松村　甚右衛門

高田村　喜三次

進士齋宮樣

小泉四郎兵衛様

〔潟廻り巻着一件〕

羽咋・鹿嶋両郡之内邑知潟縁御預り所羽咋郡千路村幷御領分潟縁ゟ十四ヶ村入会之趣に而、安永三年千路村より右潟縁通り新開引請奉願候處、公儀於御奉行所御僉議之上被仰渡候趣は、御領分十四ヶ村は潟縁通り控作村候場所年古き年貢地故、御吟味之不被及御沙汰に。然共後年之ため右控作村候場所之杭へ、御領分境地之御定杭此度御打渡、尤其餘潟内之分は公儀新開に可被仰付候得共、是迄御領分十四ヶ村より蘆・眞菰刈取来り候場所も有之、新開に相成候而者秣・肥草・薪等に指支致難儀、其上用悪水之指支も有之趣、御領分十四ヶ村申立候に付、右蘆・眞菰等刈取来り候場所茂先々其儘被指置、猶又潟内之方へ草刈取場之境杭御打渡、十四ヶ村藻等刈取、右境杭之外潟内魚猟之儀も、只今迄之通千路村幷十四ヶ村入会に相稼、右蘆・眞菰刈取場境杭之外潟内、此後干潟場致出来候節は、千路村新開之積り相心得、御定杭之通急度相守、少も違乱無之様仕、若御定杭損候節は御預所へ申立、御指圖請相繼可申旨被仰渡候間、左様之節は御改作御奉行所へ可申上候御事。

右地境杭爲御打渡、今般公儀御普請役若田喜内殿・村田彙次郎殿・猪俣直之進殿被差遣候間、先達而荻野伴右衛門様・吉濱佐七郎殿、御見分之節申立候地境等、正路に御案内仕、御指圖

請可申旨被仰渡候御事。

右之趣千路村幷御領分十四ヶ村肝煎・組合頭・百姓惣代、江戸御役人御旅宿へ被召出、御預け地御用懸り安井左太夫殿・御郡御奉行・御改作御奉行御立會に而一統奉承知、若違背仕候はゞ御科可被仰付旨被仰渡、御受證文指上候上は、公儀御役人被仰渡候通、後年無違失急度相守可申旨。且又此度御打渡候御番杭に其村地境杭与書記有之儀は、田地境杭より潟内杭迄見通分間之ためこ而、此度村方領境相改り申に而は無之候。村々領田地境杭之儀は、依所入組等有之筈に候條、是迄村方に而領境相極り候通相心得可申候。若後年心得違仕、右境杭證據とし て地境之爭論等仕間鋪旨。且又此度御定杭之儀は、御領分之御田地境与、潟内草刈場与、魚獵場後年干揚新開に相成所之境杭に而、沖杭より内之方一村限り之草刈場等に御定候儀に而は無御座候條、末々之者心得違致間敷、尤如先規十四ヶ村仕來り之通蘆・眞菰・秣・肥草・薪等刈取獵業等相稼可申旨。猶又御郡御奉行・御改作御奉行被仰渡候趣奉畏候。後年村々領境等之儀聊心得違不仕、是迄仕來り之通相心得可申候。依而御請證文如件。

天明二年九月

羽咋郡柳田村

肝煎　半兵衛

組合頭　七郎右衛門

組合頭　傳右衛門　　同　上　太郎兵衛
百姓惣代　清次郎　　同　上　權兵衛

羽咋郡深江村

肝煎　平兵衛　　組合頭　市兵衛
組合頭　小兵衛　　百姓惣代　彦右衛門
百姓惣代　新藏

同　郡吉崎村

肝煎　忠右衛門　　組合頭　彌五兵衛
百姓惣代　又右衛門　　同　上　伊右衛門

同　郡圓井村

肝煎　三郎左衛門　　組合頭　清右衛門
組合頭　與三左衛門　　百姓惣代　七郎兵衛
百姓惣代　小兵衛

同　郡千田村

肝煎　作右衛門　　組合頭　長五郎

組合頭　次右衛門　　百姓惣代　彌三兵衛
百姓惣代　與三右衛門

羽咋郡尾長村
肝煎　傳右衛門　　組合頭　善　六
組合頭　彌左衛門　　同　上　萬右衛門
百姓惣代　彌兵衛　　同　上　七兵衛

同　郡　堀替新村
肝煎　（志々見村）谷右衛門　　組合頭　半兵衛
百姓惣代　彥　助　　同　上　四郎左衛門

同　郡　本江村
肝煎　理左衛門　　組合頭　與三右衛門
組合頭　喜兵衛　　百姓惣代　孫左衛門
百姓惣代　長五郎

鹿島郡酒井村
肝煎　與三兵衛　　組合頭　茂兵衛

組合頭　五郎八　　百姓惣代　宗四郎
同　郡四柳村
肝煎　伊兵衛　　組合頭　甚左衛門
組合頭　三右衛門　　百姓惣代　彌兵衛
百姓惣代　權兵衛
同　郡大町村
肝煎　吉兵衛　　組合頭　次郎左衛門
組合頭　惣左衛門　　百姓惣代　八右衛門
百姓惣代　十郎右衛門
同　郡金丸出村
肝煎　野右衛門　　組合頭　五右衛門
組合頭　助九郎　　百姓惣代　七兵衛
百姓惣代　喜兵衛
同　郡金丸村
肝煎　閑助　　組合頭　新助

組合頭　河原助　同　上　三郎四郎
組合頭　八郎右衛門　百姓惣代　道　權
百姓惣代　源左衛門
同　郡　鹿嶋路村
肝　煎　六左衛門　組合頭　藤右衛門
百姓惣代　傳四郎　同　上　長兵衛
進士齋宮殿
小泉四郎兵衛殿

右今般被仰渡之趣、濶組十四ヶ村肝煎・組合頭等委細奉得其意、御請書付指上申に付、奥書仕上之申候、以上。

能登部下村兵右衛門跡組當分裁許　酒見村　孫右衛門
芹川村兵助元組　當分裁許　荻谷村　平右衛門
三階村　五左衛門

八月。十村手代の家に組下村役人を宿泊せしむるを禁ず。

〔司農典〕

諸郡十村手代共之内、在所於自宅に組下村役人共之宿いたし候者有之躰に候。向後肝煎・組合頭幷平百姓たり共、其組手代於自宅に爲致宿申間敷候。尤手代之親類共方にも宿爲致申間敷候。唯今迄致宿來候分も、右拘り不申者へ宿替可申候、以上。

壬寅八月　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

九月二日。前田治脩重陽の祝儀を德川家治に獻る。

〔政隣記〕

九月二日重陽御祝儀、干鯛・昆布一箱宛、御樽代御獻上。御側衆以上は御配御例之通。但、若年寄等には昆布無之。附、御樽代は都而千疋宛也。

九月五日。大音帶刀等先に富山侯前田利久に對する待遇を謬るを以て戒飭せらる。

〔續漸得雜記〕

段々伺之上九月五日左之通極。但先例等は伺に無之。

大音帶刀に（此儀九月十五日御足早飛脚、同廿貳日着今日渡之。其趣紙面は略す也。）被仰渡之趣

前月廿一日爲御名代出雲守〔富山侯前田利久〕様御登城、直に此方様ゟ被爲入候節、御料理指出可申處、御用意等之儀御自分より申談遲く候故、御黠に合不申候故、御退出被成候。御名代之儀は重き御儀に候へば、萬端入念、帳面等相糺可申處相洩候儀、執筆共甚以不念千萬成儀に候。於御自分も心付行屆不申致迷惑候旨。且又執筆共兩人手前支配人ゟ申渡、右之様子被相尋候處、不念至極之趣、吉崎由右衞門・不嶋與左衞門紙面に、會所奉行添紙面を以差出候付、被指越候旨紙面之趣、委曲相達御聽候處、御名代之儀は品重き事候處、御自分儀不被心付段、不念儀に被思召候。以後猶更入念可申旨可申渡段、被仰出候。且又右等之趣相しらべ候儀は、執筆共勤方之儀に候へども、内分之事表立不申儀候處、御自分紙面之趣に而は、執筆共不調法之趣に專被及言上候。其上執筆どもよりしらべ達之儀、御自分ゟ直に申達承知之事に候處、改而支配人ゟ申渡紙面爲指出候儀は、如何に候哉。且又席之執筆共勤方は、專御隱密之筋に候處、勤方之様子、支配人ゟ明白に相尋紙面爲指出候儀、旁御不審に思召候。此等之趣如何相心得有之候哉相尋可申旨、被仰出候條、可被申上候事。

執筆吉崎由右衞門・不嶋與左衞門ゟ可申渡趣、左之通、湯淺才次等迄申渡、才次等より相達之。

前月廿一日爲御名代出雲守様御登城、直に此方様ゟ被爲入候節、御先例等之儀一向心付不申、

常御出之通相心得、御料理出候趣大音帶刀ゟ相達不申、御作法欠申、不念至極迷惑仕候旨。先以か樣之節は隨分相心得、先例等も相考可申處、無其儀不念之至に候。以後急度入念可申候事。

出雲守樣

前月廿一日此方樣爲御名代御登城被成、直に此方樣ゟ被爲入候。右樣之節は前々御懸合之御料理被進候處、間違之趣有之、御用意及遲々、御料理不差上、不念之仕合奉存候段、大音帶刀より達御聽、御心外之御儀被思召候。依之帶刀等不念之趣、急度御叱被仰付候。此段私共參上宜申述候樣被仰付趣候段、間番參上、今なに御留守居迄宜申述候。

天明元年五月廿三日參照

九月

九月九日。前田重教、近習佐々木孫兵衛の知行を加增す。

〔漸得雜記〕

佐々木孫兵衛儀、應御意務之外宜候。只今迄數役勤、御近習も出情相勤候。旁御加增被下度被仰進之趣被仰出、其段會議申渡之趣も調上可申旨、九月七日被仰出候付、西尾隼人跡之節僉議之書抜上之。孫兵衛去年御加增、人持末席被仰付間も無之、旁三百石御加增被仰付に可有御座哉、左之通九月七日調上候處、此通明九日可申渡旨、八日に被仰出。（九日九時過候趣申渡。）

一、御加増三百石　　佐々木孫兵衛

先知都合千六百石

孫兵衛儀、只今迄品々役儀相勤、御近邊之御用烈敷候處、出情相勤候。依之如斯御加増被仰付候旨、從中將樣被仰進候。此段可申渡段被仰出候。

九月九日。前田重教三十三間の距離に於いて大的を射る。

〔政隣記〕

九月九日、金澤於金谷御馬場、中將樣三十三間之間數に而大的被遊。但此間毎度被遊、表向之人々ゟ茂拜見被仰付、御中ゟ付拜領被仰付候人々も有之。且遠的被仰付候人々も有之。將又十二日玉川直左衛門ゟ遠的被仰付、名左之通改候樣被仰出。

直左衛門事　玉川孤源太

〔政隣記〕

前月九日記に有之通、中將樣御大的度々被爲射、諸侍追々拜見被仰付、且御中ゟ附拜領被仰付候人々も數多有之。右中ゟ附寫左之通。

天明二年壬寅十月日

御指中　御一手二本

大的は一手のみ也。二手とは射ぬ物也。下の霞を嫌ふ。霞とは黒き筋を言、多く口傳のあり。

以上。

右之通依時々少々違候事も有之。御的は三尺五寸計。

九月十三日。前田齊敬着袴の儀を行ふ。

〔政隣記〕

數千代樣御着袴、來る十三日御祝に付、御當日御城詰御歩並以上上下着用之儀、御横目廻狀出。十日也。

御南殿ゟ爲恐悦、翌十四日御用番宅に頭分以上可能出旨、十一日安房守殿御廻文出。

十月朔日。河北郡袋村に火災あり。

〔政隣記〕

十月朔日加州淺い川々上泉村、家百餘之在鄕に候處、不殘燒失。

十月三日。前田治脩、德川家治及び家齊に初鮭を獻る。

〔政隣記〕

十月四日

一、昨三日朝両御丸江初鮭御獻上。右に付五日田沼主殿頭殿江爲問番代奉書受取に罷越、直に御殿江出御用人江達。尤御使書相添上之。且御奉書内見之所左之通。

御札令披見候。公方様・大納言様益御機嫌克被成御座、恐悦之旨尤候。隨而初鮭一尺被獻之候。各申談遂披露候處、一段之御仕合候、恐惶謹言。

十月四日　　田沼主殿頭意次　判

松平加賀守殿

西者鳥居丹波守殿より奉書、右同断に付略す。是又一集に御用人江達上之。

西は西の丸

〔政隣記〕

十月九日、今月三日御獻上残り初鮭、今日御側衆以上江御配。但御獻上之頃未致到來に付、今日被遣之。御使人如前記。

十月五日。本郷邸外の棄兒を收容す。

〔政隣記〕

十月五日、同夜四時前日影町此方様屏際江捨子有之。辻番取上夫々江相達、如前々饗應所東御門續江入、御横目・足輕等勤番。尤乳母被召抱候所、夫有之者に付夫婦共罷越、御賄朝は一汁二菜、晝同断、夜食は一汁一菜に而被下之、夜具等迄も被下之。其上一ヶ月金二歩宛

被下之。右御用相調候節は、其節外に被下物者無之。右捨子當歳之女子也。是貰人有次第金五兩宛被遣候筈。右都而御省略に候事。

　但、同月二十八日貰人有之、在郷ゟ被遣候事。

十月五日。羽咋郡邑知潟に於ける加賀藩領と幕府との爭論決したるを以て勘定奉行等に物を贈る。

〔政隣記〕

十月五日、能州千路村御領・公領公事曾論先年より有之候所、今般此方理分落着に付、今日御勘定奉行・同組頭中等ゟ白銀十五枚宛表立被遣之、外に爲御内々眞綿上下地・茶宇嶋共五具宛・綿筋三籠宛被遣之。其外代金に而被遣候ヶ所も有之。

十月十三日。前田治脩、徳川家治に鰤を獻る。

〔政隣記〕

十月十三日鰤御獻上。但御側衆以上ゟ今日可有御配所、未致到來に付、廿三日に被遣之。其外御奏者番衆等ゟも、例年之通被遣之。

十月十八日。前田重教、人持組戸田與一郎に蟄居を命ず。

〔政隣記〕

十月十八日、於金澤左之通被仰付、御用番大炊殿於御宅被仰渡。

金谷御用部屋人持末席

戸田與一郎

勤柄之處御心得難被成、不屆之趣多品々不輕候。依之先蟄居被仰付候旨、從中將樣被仰出。

十月廿二日。前田治脩、徳川家治に手綱を献る。

〔政隣記〕

十月廿二日御繮御獻上、如御例御側衆以上御配。但三十筋宛、御側衆には二十筋宛也。

十月。御判物・御印物を頂戴する作法に關して令す。

〔日　記〕

一、御奥書院替於檜垣之御間、奥村木工・前田大炊に御判物被下、御廣蓋御表小將持參、御用番相渡。

但、大炊儀當月御用番に候得共、同人へも御判物被下候に付、木工等二人に被下候分は、安房守・大隅守より相渡。

一、右相濟於御同間、人持組頭に御判物・御印物被下之、御用番相渡可申候。御奏者番罷在

候者、受名披露可仕候。左候者頂戴人先歸罷仕、御判物等相渡候年寄中之際へ寄頂戴、退去可仕候。都而御小書院に而被下候振合に候事。

右御印物、年寄中着座之處御大小將持參出之、指引等之儀者、御判物方御用相勤候組頭相勤可申事。

右御判物等頂戴人、脇刺を帶可罷出事。

右御用相勤人々、布上下着用之事。

御式臺當番之御小將、布上下着用可仕事。

右頂戴人名を書出候紙面、御用番前に指出可申候事。

御判物等頂戴之人々、爲御禮年寄中等宅々可罷出候。名代相勤自分にも頂戴仕候者は、身に當り候御禮先申述、門前ゟ罷出立歸、名代之御禮可申述候事。

一、他國等遠所に罷在候者は、名代人より右之趣相達、御判物等寫指遣、拜戴之上使を以御請指越可申候事。

檜垣之御間伺公之人々、御小書院に而御印物被下候振合に可相心得候事。

名代に而罷出候者は、其者之階級無構、本人之所に而爲致頂戴可申事。

一、御門々之物頭勤番之儀、前々は物頭迄布上下着用、其外所々御番人常服に候へ共、十五

日に相當候御作法之通に候事。

十　月

付札、御横目ゟ

一、今般御判物・御印物頂戴之節之御作法書、先達而相渡置候書立之旨は、御間も違相混候に付改而相渡候得共、右者寶暦十三年相渡置候御作法書に時々違候時は、付札を以申渡候振合に候條、前段之通り付札之趣に被相心得、尤朔望御禮人等有之節は、前々之振合に可被相心得候事。

寅　十　月

十一月朔日。前田重教、醫師內山覺順の投藥効を奏したるを以て知行を増加す。

〔袖裏雜記〕

中將様より被仰進候趣被仰出に付、十一月朔日左之通申渡。私曰此申渡被仰進趣無之は間違歟。

一、御加增五十石　內　山　覺　順

先知都合三百石

覺順儀指上候御藥御當被遊、近年御丈夫被爲成、專御用に相立候付、如此御加增被仰付。

十一月二日。人持組戸田與一郎に流刑を命ず。

〔政隣記〕

十一月二日　　　　　　　　　　　　　　　貳千百石　戸田與一郎

右今二日御用番求馬殿御宅ゟ、頭中二三人同道罷出候樣被仰渡、則岡田太郎右衛門・青木五郎左衛門同道仕罷出候所、與一郎儀不屆之趣有之に付遠嶋被仰付候。配所ゟ被遣候迄は一類ゟ御預之旨、求馬殿被仰渡。

但、御横目丹羽伊左衛門・溝口助三郎・御歩横目相詰。

一、右與一郎せがれ傳太郎儀は、縁組等勝手次第与被仰渡候。且弟戸田五左衛門をも中川丹次郎指扣伺候所、不及其儀段被仰出。

〔續漢雜記〕

左之通十一月二日御用番求馬宅に而、來月御用番木工列座、御横目兩人罷出、與一郎（帶刀之まゝ、）御歩横目（兩人罷出、數寄居間に扣）誘引罷出、申渡濟退候節、脇差懐中之品相渡候樣、御横目より及指圖、御歩横目請取之。一類も四人罷越、與一郎退候上は最初之溜りに而無之、別に屏風圍之内ゟ入、御歩横目指添、一類御請出候上、御歩横目より頭中ゟ引渡、求馬家來侍分四・五人屏風圍口

に附置。但與一郎帶刀之有無先例糺候處、堀主馬時分は支配人青山將監宅に而申渡候節、帶刀に而出候与御横目方舊記に有之。大槻内藏允時分は、無刀に而罷出候樣子に候。是は樣子も違可申、其節は御横目幷御歩横目も三人充罷越候樣子に候。此例は當り申間敷旨、右之通帶刀に而罷出候也。一類ゟ御預之儀は、與一郎申渡候以後、一類ゟ申渡候也。與一郎せがれ傳太郎は、徘徊指留に不及被仰出、其段も一類ゟ申渡。

戸田與一郎

與一郎儀、勤柄に候處、御心得叵成不屆之趣多有之、其品々不輕。依之先蟄居被仰付置候。段々不屆至極之趣共に付、遠嶋被仰付候旨、從中將樣被仰進候。此段可申渡旨仰出候。

十一月五日。當春徳川家治の前田治脩に賜はりたる鷹本郷邸に渡さる。

〔政隣記〕

十一月五日、當春御暇之節御拜領之御鷹相渡候砌御作法。

一、御鷹大御門より御玄關ゟ相通候砌、帶刀御杉戸際迄罷出、在合之頭分等鏡板ゟ罷出、御横目御鷹之先立仕、竹之間ゟ相通、同所に而帶刀茂御鷹見分之上、御鷹部屋ゟ繋候樣可及指圖、且又御鷹指添御横目相談可申事。

一、當番之頭分幷御小將も、鏡板ゟ罷出候に不及候。上に扣罷在候事。

但、服之儀は間番并御鷹匠、御鷹受取に罷越候人々は布上下、其外は常服之事。

一、御鷹來候に付本郷三丁目に見番附置可申事。

十一月五日

十二月十五日。江戸町人宮田屋久兵衛藩債の事務に勵精するを以て扶持を與へらる。

〔袖裏雜記〕

江戸町人宮田屋久兵衛、御内用被仰付置候處、御借金方之儀に付格別相働、事之外情に入勤候付、水野兵三郎等同事、七人扶持被下候様仕度奉願旨、會所奉行紙面出、右之通被下に而可有御座哉与十二月十日伺、可被下旨十二月十五日被仰出。於江戸十二月廿三日申渡。

十二月十八日。前田宗辰の生母淨珠院の一周忌法會を江戸廣德寺に行ふ。

〔政隣記〕

十二月朔日、淨珠院様御一周忌御法事當十八日於廣德寺御執行之節、主付御用御先手芝山十郎左衛門に被仰渡。

〔政隣記〕

十二月十六日、前記朔日記之通に付今日廣德寺惣見分、且左之通觸有之。
　淨珠院樣御一周忌御法事、當十八日朝御執行、同日鳴物等遠慮之事。

〔政隣記〕
十二月十八日、前記朔日・十六日に有之通、今日下谷於廣德寺、淨珠院樣御一周忌御法事御執行。

十二月廿三日。物價高値なるを以て江戶詰の士に與ふる扶持の割合を改む。

〔政隣記〕
十二月二十三日、左之通大音帶刀殿御申聞之由、頭々より諸向廻狀有之。
　御步並以上被下銀割合左之通。
一、古詰幷當六月迄に追々罷越候人々者、一人扶持に銀三十目被下候事。
　但、馬持之人々ゟ者右之外馬一疋に十五匁宛被下。
一、當七月より此節迄に段々罷越候人々之分者、一ヶ月一人扶持に二匁五分宛之圖りを以、來年三月迄月數に應じ被下候事。
　但、馬持之人々ゟ者、右之外一ヶ月一匁二分五厘宛、本文之割合を以被下。

右之通に候事。

十　二　月

此表當夏以來米等高直に而、當御留守詰人一統勝手難澁之躰に付、於金澤表段々詮議之上、組達御歩にも、御差略之御時節に候得共、格別之趣を以、御歩並以上一人扶持に銀三十目宛之圖りを以。別紙割合之通、當暮一作に被下候段申來候事。

一作は一回のものにて翌年上納を要せざるなり。

右之趣被得其意、組・支配之人々にも可被申渡候事。

寅十二月

十二月廿五日。前田治脩、歳末の祝儀を徳川家治及び家齊に獻る。

〔政隣記〕

十二月二十一日、歳末爲御祝詞、兩御丸え御例之通御時服・御樽代・干鯛昆布御獻上。御老中にも御樽代千疋・一種。

一、今日御廣式には、上使御廣式番之頭大塚兵九郎殿を以、歳末爲御祝詞、縮緬赤・白二十卷御例之通御前様御拜領。二汁五菜之御料理等出、御作法都而前々之通。

十二月。百姓の垣根及び持山の七木を郡奉行の許可を經ずして伐採することを禁ず。

〔御郡典〕

四郡百姓垣根・持山之七木、御作事所爲御用、御大工等村方ゟ相廻見分之上、御用之木買上等之仕形、百姓心服も不仕儀を押而申付候族有之躰に候。元来百姓垣根并持山之竹木者、御郡方様子有之植置候儀に候得者、御用木にもむざと伐取可申譯者無之候條、向後御作事方役人等右之族申談候はゞ、其趣拙者共役所ゟ申聞、指圖を受可申候。是等之趣夫々不相洩様可申渡置候、以上。

寅十二月

進士齋宮
篠原佐次右衛門
堀田次兵衛
小杉喜左衛門
槻尾左膳
高澤平次右衛門
和多田八太夫

能州四郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

天明三年

正月朔日。前田治脩病むを以て年頭の禮を廢す。

〔日　記〕

卯正月朔日

一、御前御風邪氣故、御用番ゟ御斷被遊候故、御家中一統の御禮御受不被遊候。依家老中御禮之惣代被申上候。一統樣の御間へ相詰候而、家老中被罷出、御氣滯に付各中御禮拙者共より申上候旨、一統へ被申聞候而年頭相濟申事。

正月朔日。前田治脩の使者例により太刀等を德川家治に献る。

〔政隣記〕

一、江戸表も年始御作法等前々之通。御献上御太刀等、今朝御小將頭渡邊主馬、素襖等着用殿中ゟ持參。御老中方ゟ者御太刀馬代、爲組頭代御先手荒木善太夫、若御年寄衆ゟ者聞番、御側衆ゟ者御大小將御使を以夫々被遣之。

正月二日。前田重教の使者太刀等を德川家治に献る。

〔政隣記〕

正月二日。中將樣より御献上御太刀等、爲組頭代御步頭河地才記、素袍等着用令朝殿中ゟ持參。

正月七日。前田治脩、德川家治に若菜の祝儀を献る。

〔政隣記〕

正月七日、兩御丸ゟ爲若菜御祝儀、寒鹽鯛御献上。御老中等ゟ御配は無之。

正月十七日。戸田與一郎の流刑に處せられたる後二十人扶持を給することを定む。

〔袖裏雜記〕

戸田與一郎遠島之事、前に記候通に付、先年御近習勤候多賀隼人・關屋運八、嶋等ゟ被遣候節、御扶持方二十人扶持充被下候。堀主馬嶋ゟ蟄居之節、十五人扶持被下、自分之家來も兩人召連候。安永九年奥村中務嶋ゟ被遣候節は、十五人扶持被下候。組柄も重く候故、最初廿人扶持与奉伺候へども、亂心之躰に付、配所に而締所ゟも被入置候事故、重而奉伺、主馬節之通十五人扶持被下候。今般與一郎は組柄も重く、其上御近邊茂勤候者之儀、隼人等平士にても二十人扶持被下候例も候間、旁二十人扶持被下、家來も兩人計召連申儀は、可爲勝手次

趣旨被仰渡に而可有御座与僉議、正月十七日伺之、書表之趣則申上候處、僉議之通と御意に候條、其旨可被相心得候与、以御裏書被仰出。

正月十八日。前田治脩、徳川家治及び家齊に鹽鮎及び烏賊の黒作を献る。

〔政隣記〕

正月十八日、鹽鮎一箱・烏賊黒作一壺、兩御丸へ御獻上。若御年寄衆以上へ御配有之。

正月廿八日。前田重教大的を射、諸士をして之を觀覽せしむ。

〔耳目甄錄〕

正月廿八日、今日人持・頭分等へ中納言様御大的拜見被仰付、中附も被下。

〔政隣記〕

一、二月十八日、中納言様御大的御中附、御出入衆之内へも數家へ此間被遣之。但奉札を以也。

依而爲御禮右御旗本衆追々御出。

御出入衆は江戸の旗本ならん

二月二日。徳川家治の前田治脩に贈りたる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

二月二日、寅氣御寺之御奉書且御鷹之鶴、去月廿五日相濟候に付、開番作源太兵衛御用番田

沼主殿より受取來、暮頃如例宿次役人に渡發出、今曉八時金城に到來、鶴は今晝到來。御禮使御馬廻頭武田喜左衞門に被仰渡、四日御例之通白銀・御羽織拜領、五日發出、十六日江戸着。

但田沼殿宿觸左之通。

此狀箱幷鶴一、到加賀國金澤(御名)方に相達、返書可有之候間、月番之老中に急度可爲持參者也。

正月廿五日　　　主　殿　印

右　驛　中

二月五日。金澤中三ケ所に火災あり。

〔政隣記〕

二月五日夜、金澤廣岡幷下淺野町・田井町端三ヶ所に火災有之、皆々無程鎭。戌刻より亥ノ刻迄之間之由也。子之上刻より大風起、鷄鳴之比止。翌六日終日大風雨、及暮靜。同日淺野川大橋御修覆に付船橋懸有之處、大風雨洪水に而船流失。

二月上旬。御歩及び足輕の鬚を低くすべきことを令す。

〔政隣記〕

一、二月、御歩并足輕共鬢、御定より纔に高く有之に付、早く可爲致旨、今月上旬被仰出。

但小者も支配人より早く爲致候事。

二月十七日。前田重教近習の士駒井平學流刑を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月十七日於金澤左之通被仰付。

　　　　金谷御近習御使番　駒井平學 千石

不屆至極之儀有之に付流刑被仰付、配所ぇ被遣候迄一類ぇ御預。

〔政隣記〕

前記十七日に有之通、駒井平學流刑就被仰付候、實父佐々木孫兵衞自分指扣相伺候處、不及其儀無泥相勤候樣、從中將樣被仰出。孫兵衞は人持組、金谷御近習御用也。

二月十九日。三輪主殿等議に本多安房守が橋爪御門通過の際在合はさゞりしを以て處罰せらる。

天明四年閏正月十一日の條參照

〔政隣記〕

二月十九日於金澤左之通被仰付。

閉門　　　　　　三輪縫殿

遠慮　井上逸角
中村八兵衛
大石彌三郎
金子新兵衛
急度指扣　辻五郎助

右人々、正月十一日橋爪御門當番之處、御城代本多安房守殿御番所前御通之節、御番所に不在合に付言上之處、右之通被仰出。附、翌年四月十五日御免許。

附記、逸角等四人燒飯給候付、張番縫殿・五郎助致候內、五郎助小用に罷立候跡、縫殿用事有之立退候而、張番暫欠候內に安房守殿御通過与云々。

〔日記〕

一、正月廿三日、橋爪御門御馬廻御番所の前を安房守樣御通り被成候所、右御馬廻御番所に一人も不在合、明居申候。依而段々御僉議之上、當日御馬廻中當番三輪縫殿・金子權右衛門等五人の內、三人閉門殘は遠慮被仰付候事。金子は遠慮。

二月廿四日。道中御供人の携ふる鎗の數を改定す。

〔政隣記〕

二月廿四日

一、左之趣奥村主水殿御覺書を以、江守平馬ゟ御渡之。

去年御參覲前、御道中御供人、人持は鑓三本、組頭二本、物頭以下一本爲持候樣申渡候得共、高知之人持矢筥等爲持、組頭鑓三本、物頭等鑓二本爲持候儀、勝手次第に候。去共小身之面々等は省略可然候。平侍は高知たり共、先達而之通鑓一本爲持可申事。

二月廿六日。前田重教諸士に葵の紋服着用の件に關し令す。

〔政隣記〕

二月廿六日左之通御用番被仰渡候旨、御横目廻状出る。

御近邊相勤候内、葵御紋付被下置候人々、御近邊御指除之上、右御紋付着用仕人々も有之候。外樣勤仕之者は、向後葵御紋付着用仕儀堅可爲無用旨、從中將樣被仰出候條、一統可被申談候事。

三月朔日。石野主殿助人持組末席に列し、前田重教附屬を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

三月朔日、石野主殿助御用番誘引御前へ被召、其方儀加增五百石人持末席へ差加候。金谷御近習御用、只今迄之通可相勤旨被仰渡。

但、右被仰渡御直歟又は御用番歟之旨、前廉御尋有之。御加增知被下候儀は、私共席に而申渡候へども、戸田有柔御加增被下、人持末席被加候節は、於御前被仰渡、座列等は於私共席申渡候間、主殿助も於御前被仰渡に而可有御座旨、二月廿九日申上。

三日とするもの前文と異なり

三月二日。金澤上堀川町に火災あり。

〔日　記〕

一、三月二日晝九つ時過上堀川町出火、六・七軒燒亡。風強くして川向の淺の町穢多等の家、百五十軒計有之所不殘燒失畢。

〔政隣記〕

三月三日巳の刻頃中堀川より出火、川向穢多町ゟ火移、都合百四十軒餘燒失。

三月七日。前田治脩、人持組富田外記の知行を加增せしむ。

〔政隣記〕

三月七日、當春御拜領之鶴御披、出仕以上頂戴被仰付、御作法別記に有。御近例之通。且左之通被仰付。

三百石御加增　　　　人持御近習御用　富　田　外　記

先知都合二千四百石

三月七日。前田重教の女穎姫卯辰観音院に参詣す。

〔政隣記〕

三月七日、穎姫様今日卯辰長谷観音へ御参詣。十一日寶圓寺・天徳院へ御参詣。

三月九日。羽咋郡七海村肝煎九兵衛等精勤を以て賞せらる。

〔御郡典〕

覚

一、鳥目一貫文米一石　羽咋郡七海村　肝煎　九兵衛

一、同　一貫文米一石　同郡　組合頭　藤次郎

一、米五斗宛　惣百姓等家一軒へ

右之者共肝煎組合頭相勤候處、惣百姓共風俗宜敷、萬事和順を以耕作方入精致候段、奇特之者に思召候。依之右之通被下候事。

卯三月

右之通御勝手方前田土佐守殿御申渡候條、被得其意、可被申渡候、以上。

癸卯三月九日　御算用場

能州御郡奉行中

右之通今日御算用場より御題紙相渡候付、寫相越之候條、得其意夫々可申渡候、以上。

御郡奉行

改作奉行

改作御奉行中

酒見村　孫平

三月十一日。前田重教附坊主山本梅雪刎首に處せらる。

〔政隣記〕

於公事場刎首

金谷御居間方坊主　山本梅雪

但、三月九日御的御用相勤候後、指扣被仰付、翌十日遠慮被仰付、其翌日公事場に御渡、

本文之通被仰付。

三月十四日。米價高直なるを以て江戸詰人等の扶持方代を改む。

〔典制彙纂〕

御勝手御難澁に付、當分江戸詰人御扶持方、直段百五十目充之圖に而御渡被成候筈之處、去年以來以之外米高直、諸物も准之直段引上に付、暮方難澁至極之旨一統願之趣有之候。如當時米價過分高直之儀者希成事に付、格別之趣を以米直段高直之內は、去々年迄之通御扶持方

代、一石百七十目寛之直段を以相渡候筈に候。御供人者發足之日より右直段に而相渡、江戸表に相詰罷在候人々者四月朔日より右直段を以相渡候事。

但、京・大坂等詰人とも、去々年迄之通百六十目寛之米直段を以相渡筈に候。

右之通達御聽相極候條、可被得其意候。尤江戸會所幷京・大坂詰人江も、各より可被申達候、以上。

癸卯三月十四日　　横山求馬　印

篠田兵部殿

神保舍人殿

小堀牛右衞門殿

三月十五日。前田治脩金澤を發し參覲の途に上る。

〔政隣記〕

三月十五日七時過金澤御發駕。數千代樣爲御見立、御式臺階上迄御出。

〔日記〕

一、三月十五日加賀守樣江戸へ御發駕、夕七半時御立、夜七半時石動へ御着被遊候。是は中將樣其日朝之内御鷹野、御歸り御騎射過に御能、夫より加賀守樣へ御暇被進候由にて、直ぐ

御發駕被遊候旨取沙汰。

〔政隣記〕

一、當御參勤御道中御泊附左之通。

三月十五日、今石動　滑川　境　糸魚川　高田　牟禮　榊　追分　板鼻　熊谷　浦和　江戸御着。

三月十六日。前田治脩、使を幕府に派して重教が在國の期を延べんことを請ふ。

〔政隣記〕

一、三月十五日、中將樣御湯治御在國御願延之御國使者、於江戸仕立に相成、御廣式番組外中泉七十郎に此間被仰渡、今日習仕す。尤從加賀守樣之御使者也。翌十六日御使者勤。

三月十九日。前田治脩の使者登營して徳川家治に串海鼠を献る。

〔政隣記〕

二月十六日、去二日記之通武田喜左衛門去五日金澤發足之處、今日江戸參着、御内輪御使相勤、翌十七日御用番御老中方勤、――廿一日御側衆等追々御使相勤。三月十五日登城、串海鼠御獻上御使勤、御目見。十九日殿中に而御返翰渡、紗綾二卷拜領、廿一日江戸發歸。

但、武田氏ゟ大的弓騎射傳授事之内、二十ヶ條餘御好に而、御使御用之透に和田千太郎殿ゟ習可申旨、金澤發前從中將樣被仰出。依而今月廿日千太郎殿御館ゟ御越、喜左衛門ゟ御對談有之、懸合、御料理も出。

三月廿一日。前田重教の女穎姫金澤を發して江戸に向ふ。

〔日記〕

一、三月廿一日、榮姫樣江戸表へ御發輿。是は近々保科肥後守殿へ御婚禮御入輿有之筈に付、先江府迄御出与取沙汰。御供之筆頭は組頭並志村五郎左衛門殿、其外御小將組以下也。

（榮姫は穎姫）（肥後守とあるは駿河守）

〔耳目甄録〕

穎姫樣十九御泊附

三月廿一日金澤御立。

森下	御中休	三里八町餘	津幡	御泊
今石動	御中休	七里廿六町餘	高岡	御泊
小杉	御中休	七里三町	東岩瀨	御泊
魚津	御中休	六里廿九町	三日市	御泊
舟見	御中休	七里三十町	境	御泊

青海　御中休　六里十五町　糸魚川　御泊

（鬼伏）西性寺　御中休　六里十八町　名立　御泊

長濱　御中休　六里　高田　御泊

荒井　御中休　五里十六町　關山　御泊

關川　御中休　五里　柏原　御泊

牟禮　御中休　五里十八町　善光寺　御泊

丹波嶋　御中休　七里十町　榊　御泊

上田　御中休　五里　海野　御泊

小諸　御中休　七里十九町　沓懸　御泊

坂本　御中休　六里六町　松井田　御泊

板鼻　御中休　七里廿四町　落合新町　御泊

深谷　御中休　七里十九町　熊谷　御泊

吹上　御中休　六里二町　桶川　御泊

大宮　御中休　五里廿八町　蕨　御泊

四月十一日御下屋鋪御中休　三里十町　江戸本郷御着

〔政隣記〕
三月廿一日、今日九時過頴敏様御發輿。

三月廿二日。金澤田井新町に火災あり。

〔政隣記〕
三月廿二日暮頃金澤田井新町出火、町家等七十軒餘燒失、夜五半時鎮火。

〔日　記〕
一、三月廿二日暮六時前、田町横山多門殿後出火、夜五時迄に百軒計燒失。御前御登城。九郎左様御人數百人計御自達、横山求馬様・奥村主水様へ御越、御出申候。騎馬に小林猪宮也。御見舞爲御使者騎馬杉野權兵衞求馬様へ、騎馬原十郎兵衞多門殿へ參り申候候事。

御前ハ前田重教

九郎左ハ前田孫九郎左衞門

三月廿六日。前田治脩江戸に着す。

〔政隣記〕
三月廿六日九時前御着府。追付御供揃に而御老中方御廻勤、若御年寄衆迄之御屆者、自分爲聞番代御使者相勤。且御待詰御客衆等御料理出。其外御作法如前々。

自分ハ津田政隣

三月廿八日。徳川家治使を前田治脩に遣はしてその出府を勞せしむ。

〔政隣記〕

三月廿八日、今般就參御府、上使御老中久世大和守殿を以、御懇之被爲蒙上意、御前例之通御都合能相濟。追付之御供揃に而御老中方御廻勤。

三月。米價高直なるを以て失業者匡救の法を講ぜしむ。

〔日　記〕

一、三月、町家へ被仰渡候は、近頃別而米高直に付、輕き挊人等餓死におよび可申間、人々家居ゐ前道惡しき所に、道作り爲致可然与也。左候へば自挊人等取續可致との御工夫のよし。

四月朔日。前田治脩棚營に上り參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

一、四月朔日、昨日御老中方御連名之依御奉書、今朝御登城、御參府之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、都而御例之通。御獻上物御太刀・金馬代、御老中等御配りも前々之通。右に付隨從之臣奥村主水殿・前田圖書殿御先に登城、御目見被仰付、御太刀・銀馬代獻上之。西御丸幷御老中等十二家にも持參。自分爲聞番代御城等に同道。

〔德川實紀〕

四月朔日、月次例の如し。紀伊中納言治貞卿參覲の拜謁あり。常陸介治寶朝臣疱瘡いえて後は

じて拜謁あり。御手づから熨斗あはびを給ふ。松平加賀守治脩參覲す。

四月上旬　町方にて浪人體の者を宿泊せしむるを禁ず。

〔日　記〕

一、四月上旬町方へ御觸有之候は、浪人躰之旅人宿かせ申間敷候樣相觸候共、一向宿御貸候儀相成不申候。又或は草鞋等相調候はゞ、賣候而も不苦候。然共長休みなどに堅く爲致申間敷候旨、御觸有之也。

說曰、越前福井之御家中に、支配頭寺組下等ゟ取合出來、頭利分に相成、組下等七十人計御扶持離召放候由。其内に妖術遣候程有之、諸國へ退散仕候故、若左樣之者御國ゟも參り可申哉との事にて、右御觸有之との取沙汰。

又曰、去年以來米以外高直にて、諸國殊外物騷にて、輕き者共飢死に及申段。就中御國は米少下直にて、豐なる之由風聞有之故、浪人又は輕持人等御國へ入込可申ゟ取沙汰故、右御觸有之共言。

四月十一日。前田重教の女頴姬江戶に着す。

〔政隣記〕

五月廿八日、頴姬樣御日圖之通前月十一日江戶御着府。今月六日御供之御橫目ゟ八講布三疋・

兩御所は德川家治及び家齊

白銀一枚、御大小將等ゟ八講布三疋宛、其外夫々拜領物被仰付候段、江戸より申來。

四月十七日。前田治脩、德川家治の紅葉山參詣に豫參す。

〔德川實紀〕

四月十七日、紅葉山に兩御所御同參あり。松平周防守康福・久世大和守廣明・水野出羽守忠友、及び酒井石見守忠休・太田備後守資愛・御側高井兵部少輔綽房豫參し、本多中務大輔忠籌・松平紀伊守信道をはじめ、五位三十八人鹵簿にそなはり、松平加賀守治脩・松平彈正大弼勝富中略。等さらに豫參し云々。

四月二十日。大小將組原宗兵衞の弟重藏出奔す。

〔政隣記〕

五月六日、御大小將原宗兵衞舍弟重藏儀、前月廿日他出罷歸不申に付、所々尋候得共行衞不相知に付、猶更相尋、彌行衞不相知候はゞ、重而書付を以可及斷候。先爲屆前月晦日暮時頃岡田太郎左衞門ゟ指出置、越中境幷大聖寺御關所迄相尋候得共、行衞不相知出奔之躰之旨。常々相替樣子無之、家内之者共見聞仕候族も無之、取組儀も無御座、猶更是以後爲相尋、行衞相知次第可及案内旨之斷書付、今日岡田氏指出す。

四月廿三日。前田重教躊躇の法を失ひたる者を戒む。

形敬多江戯なるべし

〔政隣記〕

四月廿九日、中將様より前月廿三日左之通頭分迄被仰出。

中村彌十郎・吉岡權兵衛致蹐跼様有奔に候。嚴可申付候。右兩人共致組入間も無之、於江戸表ゟも不參人々に候哉、衆人を凌下座容貌粗に有之候而、御三家様方御家來頭分など於途中御出會申共、自彌十郎・權兵衛抔は形敬多に見え候、從頭夫々可申事。

山村喜兵衛等者蹐跼之經立居申事。

下座も可申處を、自前々御家に而者蹐跼といふ。元來蹐跼之字うづくまりうづくまると讀而、則容貌恭敬愼中處よりぞ出たる義也。

山村嘉兵衛・高畠四兵衛・伊東加兵衛・織田儀右衛門・後藤幸右衛門・片岡伊左衛門・神子田新藏・高畠勘兵衛等之儀者、蹐跼之字に拘候。彌十郎・權兵衛之儀者蹐跼之かた偏却而夷にしてまつの夷字に當、本當之蹐之所に行並、此味を支配頭たるもの嚴可申付。夷の字は人に無禮するに而、孔子も杖に而叩被申候也。

三月廿三日

附、中村彌十郎等者御馬廻組七十間御門御番人也。

〔政隣記〕

三月廿三日蹲踞身体方之儀、從中將樣被仰出之趣、前記四月廿九日に記之。其後左之通重而被仰出有之、御馬廻組十二組等江頭副書を以申談有之由承に付、左に記之。

出雲守樣・備後守樣御登城之節、御馬廻等御番所に罷在人々下座仕、隨分作法宜心得候儀、勿論之事に候。與蹲踞下座之譯未會得不仕者も可有之。蹲踞者中將樣・加賀守樣・敎千代樣等御通之砌、御番所雨落軒下石之内江下り蹲踞仕、恭敬之志深き面々者、草履を用不申進退相愼、寔に蹲踞り候形に而罷在候を蹲踞と云。故に御末家備後守樣等御登城之時分は蹲踞与申に而は無之、下座与相心得、頭も上、手も下より六寸明、御供人之容子迄茂得与見屆、若非常之儀候者誡申心得第一也。此趣茂申談樣被仰出。

四月廿七日。來月朔日より前田齊廣の爲に建つる轜の觀覽を許さるべきことを告ぐ。

〔御觸留〕

別紙之趣向寄に可申談旨、佐々木孫兵衛申聞候間、御承知被成、御同席御申談可被成候、以上。

四月廿七日　　木　村　三　藏

今　枝　刑　部樣

龜萬千歲御のぼり七十間御門内に相立候。來兩日より五日迄、御家中并町方共男女拜見之儀御申渡。但男子者十五歲以下より、都而拜見人七十間御門より入、金谷御門へ出申筈候條、夫々御申渡可被成候事。

四　月

四月廿九日。幕府前田重教の在國延期の請を許す。

〔政隣記〕

四月廿九日、前月十五日記之通、中將樣御出府期月に至候得共、温泉御湯治に付今二十ヶ月御出府御延引之儀、從加賀守樣御願之處、今日御願之通被仰出候事。

四月。浪人横田秀幸不義を以て禁錮せらる。

〔政隣記〕

四月、浪人和歌師範横田秀幸兼旨儀、弟横田某妻与密通候處、此間露顯縮所ゟ入、尤右弟之妻も縮處ゟ入候事。

又横田久太夫兼好也。秀幸儀先年不行狀之趣有之に付、右久太夫跡は弟相續。依而秀幸浪人に而和歌師を以渡世す。

〔日　記〕

一、四月中旬横田藤下妻と横田秀幸密通露顯故、秀幸は其伯父三木次郎兵衛方にて縮いたし置、藤下妻は藤下方に縮いたし置候而藤下勤番之由。次郎兵衛と嫡子薫藏、自分扣いたし候。然所同廿七日藤下自殺いたし候。翌廿八日檢使相濟申由。仍而藤下妻は淺田茂左衛門娘故、頭中より指圖に付、茂左衛門方へ引取申事。藤下自滅之砌、數通之書置有之事。

五月朔日。先に流刑に處せられたる戸田與一郎の子傳太郎を祿す。

〔袖裏雜記〕

戸田與一郎せがれ、來三月頃百石計遣、戸田を名乘組外に召出候樣御内意候條、兼而申達置候。宜時分猶又可被申聞候与、寅去年十一月三日御親翰を以被仰出候付、百石と申者餘り少知にも可有御座哉、橋爪直せがれ之例、青木内藏太せがれ之例を引、與一郎は千百石被下置、組柄も重く候間、せがれは三・四百石計可被下哉。其上故有柔各別勤功に付五百石御加増、重き組柄に被仰付候者之儀之旨等、年寄中連名紙面に而御家老中了簡も承候處、同意に付奉伺旨申上候處、傳太郎三百石に被召出候。當五月朔日可申渡旨御意に候旨等、以御加筆被仰出。

〔政隣記〕

五月朔日左之通被仰付。

新知三百石　　與一郎せがれ　戸田傳太郎

井上松之助は本年十二月四日に、小瀬卓磨多は天明四年八月五日に歿

傳太郎父與一郎儀、澁島被仰付候。然處傳太郎祖父有季儀段々勤功も有之、及極老候迄御近習も全相勤、格別之者に付、傳太郎儀被召出、如斯新知被下、組外に被加之候。此段可申渡旨從中將樣被仰進候段被仰出候。

五月三日、前田重教の近習井上松之助・小瀬卓磨多金谷御殿に於いて傷を負ふ。

〔袖裏雜記〕

五月三日夜井上松之助・小瀬卓磨多、金谷御殿御居間先御庭において傷出、打倒怪我仕、少々破血も有之、暫絶氣。右に付被仰出趣有之、石野主殿助等より兩人之一類呼出、病氣等之樣子爲申聞、兩人も相返候。夜陰之儀、彼是申談候内時刻移り、漸も早く宅々へ引渡候儀專要に付、手寄之入口丹後屋敷より駕籠を入、爲致乘用相返。右に付御醫師横井元泰・今井元昌呼出療養申談候旨等。同月十日石野主殿助より覺書を以、御用番へ相達。此一件事長し。爰に略記す。

〔政隣記〕

五月十日、中將樣御近習井上松之助・小瀬卓磨多、當月三日夜於金谷御殿過仕候處、殊之外傷重本復難計。右に付異說色々相聞不記。

〔日　記〕

一、五月四日、於金谷御殿井上松之助・小瀬宅又喧嘩華。井上松之助疵重く臂を打れ、小瀬宅又は疵淺く無事なりと取沙汰。但是に口傳あり。鐵炮疵也と云々。

四日とあるは誤なるべし

五月十日。前田重教放鷹の際大小將の士を先角に隨從せしむることを告ぐ。

〔政隣記〕

五月十日、中將樣御鷹野之節御先角御供、近くは御近習より被召連候處、當分御大小將より可被召連旨被仰出。御寺御參詣御供に極有之候、野村七郎五郎・板野孫七郎・村重藏・加藤左門・吉田彥兵衛・仙石兵馬にに談有之、町廻御番除に相成候事。

五月十八日。金澤城大手先なる前田大炊邸の長屋より失火す。

〔政隣記〕

五月十八日朝五時、前田大炊殿表門續長屋より惣間七十間餘也出火、十間餘燒失、同半時頃鎮火、尤早速御城に罷出。

右燒出候長屋者、大手先之方平生人往不申、尤火一向無之處に付、賊藏れ住居、夜逃出火を

附候哉共云々。

五月廿一日。流刑に處せられたる戸田與一郎を能登島の向田に送る。

〔政隣記〕

五月廿一日、前記去年十月十八日等非常嗣目にも有之戸田與一郎儀、今日配所能州向田村に被遣之、於配所二十人扶持被下之、若黨小者一人宛召連候儀、并嗣之内借銀も御免、御貸屋も是迄之流人ゟ建、廣く奇麗に出来御渡之由也。

〔袖裏雜記〕

戸田與一郎、配所ゟ被遣候處は一橋ゟ御預に付、與一郎せがれ傳太郎儀、是迄輪方寺同居仕候。然所當廿一日與一郎配所ゟ被遣候付、御格之通家屋敷早速上可申儀に候へども、今般傳太郎被召出、未居屋敷拝領不申、當時住所も無之候間、暫居屋敷指上候儀延引仕、彼宅に傳太郎罷在候而も苦ヶ間敷哉、及内談候旨、一類共申聞候付、追而可及指圖旨申聞置候。右御格に候へども、寛永五年辻織人在鄉被仰付、其後せがれ千太郎被召出候節、家屋敷之儀僉議之上本伺、千太郎ゟ被下候。今般與一郎未配所ゟ不被遣内、段々結構之被仰出を以、傳太郎被召出候事候間、織人例に准、家屋敷被下に而も可有御座哉と五月廿九日伺。

五月。前田重致屢々放鷹を試む。

〔政隣記〕

五月、中將樣今月上旬以來、連日或者朝夕御鷹野度々御出。數千代樣爲御見送、町端迄御出之儀も折々有之。此後右同斷。

六月十二日。前田治脩、德川家治の增上寺參詣に豫參し、次いで又上野に豫參す。

〔政隣記〕

六月十二日增上寺御成、同廿日上野御成之節、兩度共加賀守樣御豫參。續而之御豫參古來稀成御事、其上御溜も御三家樣御同間、御先詰も有之、都而御三家樣に被准、是等間番今村五郎兵衞働之趣共も有之。依而御感悅之御意も有之候由也。

六月十二日。金澤如來寺に於いて德川家重の二十三回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

六月十二日於如來寺、惇信院樣二十三回御忌御法會有之。

六月十七日。前田重教先侯綱紀の畫讃等を有する者あらば供覽すべきことを命ず。

神護寺は東照宮附屬の佛寺

〔政隣記〕

六月十七日左之趣石野主殿助申聞候由御横目觸有之。

松雲院様御直筆之御書副等之類、御家中之人々之内拜領仕罷在候人々有之候哉、從中將様御尋に候條、一統申談、所持候者可入御覽候事。

六月二十日。金澤神護寺に於いて徳川吉宗の三十三回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

六月二十日於神護寺、有徳院様三十三回御忌御法會有之。

六月廿九日。是日以後淺間山爆發の音金澤に聞ゆ。

〔政隣記〕

六月廿九日、朝より陰雨、午上刻より三刻迄雷鳴不止、遠々轟鳴。其内大小替らせ、又午七刻より八刻迄同斷。是雷鳴に而者無之、山鳴動与云々。併何れ之山歟不知、且少宛者先頃より鳴、是者山鳴与聞。今日者雷に假申候。又雷に非ず。翌七月朔日山鳴申刻に有、昨日よりは弱し。二日申五刻より黄昏迄山鳴、昨鳴より者大に強く、其上戸障子に響き動き冷し、兒女恐怖す。三日曉五刻山鳴大に彊し。間之内に難居、衆人庭に出る程也。右山鳴動者東北之風あれば西南之風ありと相對し、中央に滯り横發せる鳴動すと云云。又硫黃山或立山鳴杯与區

説多し。四日・五日山鳴動無之。六日曉寅刻山鳴、申上刻より戌上刻迄、亥五刻より子六刻迄山鳴。如此間、七日寅上刻より山鳴強し、卯上刻より大に強く、先日來無之程之鳴動甚響く。辰中刻より少し弱く、午上刻又強く、同五刻より弱く、未上刻より又強く、黄昏御頻に甚大に強く、同夜亥い五刻より殊之外強、子二刻より弱く、強き節者戸障子倒るゝが如く、家々響冷し。八日曉寅上刻より又強し。辰二刻大に甚強く、同五刻殊之外強く頻に鳴動、天地如爲反覆、向靜謐鳴動止。七日曉寅より八日右之刻限まで、一晝夜餘之間一圓無絶間鳴動。強き時者百千之太鼓を於隣里打が如く、人心波上に漂ふが如し。同日午上刻より少々鳴動、夜も同じ。暫宛止間有。九日折々鳴動、弱し。今日に至而右鳴動者淺間信州山焼与いふ事知れたり。近國之郷村家根ハ焼灰多く溜候由。當所者越中立山に當り候故、鳴響者彌強く与云々。虚實不詳。十日少々宛所々鳴動。

〔老翁雜記〕

一、天明三年卯七月二日夕方東南之方鳴動、戸障子ハ響、高山焼申震動かと申候。同六日夕七半時頃より重而鳴動、同刻より同八日晝九時前迄暫時も不相止、響甚敷、六日夜・七日夜人々不寢。同十八日到着早飛脚之者申聞候樣子左之通。

江戸表當月六日夜八時過發足仕候早飛脚御用、八日四時前坂本驛ハ罷越申候處、淺間山大

候仕、往來通路無御座候。同十二日晝八時坂本に逗留仕候得共、同處泊家多、何茂所々ゟ立退候而人馬田不申候に付、跡宿ゟ立戾り泊候而、近在之者之內丈夫成人足相對に而相頼、右人足小諸迄召連罷越申候。仍而往來相立候儀は、いつ頃より与申儀難計御座候。

〔舊　記〕

天明三年鳴動之事、案るに二月より北風而已に而、少し茂南風七月洪水之夕節迄無吹準、北風は陽風、南陰風也。然ば陽風迄に而却而陽火を包故、如此鳴動する也。又陽火と云事、冬至り和而一陽來復す。陽春之時を得て陽氣陰氣を生す。陰は南方、陽は北方也。陰陽和合し萬物宴に生す。陰又水を生じ、陽又火を生す。陽火凝而雷電を成、是陽火之發所也。故に此年三夏より中秋迄、暑少し茂なし。則此年鳴動ニ陽氣却而陽火を包所也。又往古より信州淺間山燃上り、山中山近に水氣無之。依陽氣凝而不斷燃上る。是陽火之發所也。陽火發所水氣温泉を生す。然れば熊野本宮之湯・有馬之湯・御國山中・山代等是也。富士山又燃といへども、水氣有所山中に温泉生す。信州に茂淺間山燃上るといへども、諏訪に又水氣有て温泉生す。水氣難得所、立山地獄谷等陽火燃上。是陽火之發所如斯申傳事也。此儀若杉必陽師の染筆錄し有し。

〔那方爲記〕

天明三年五月廿五・六日頃より雷又は地震之樣に有之候處、七月二日より同八日・九日甚辰巳い方に當り鳴、家居・天井・戶障子抔へ響き、女童共驚、いかなる事やらんと安き心も無之居候內、信州淺間山燒申故と取沙汰有之、漸落付申候。十日頃よりは鳴り不申、評判之通淺間山燒申儀無相違よしにて、彼所近村死人等多有之、灰ふり候處四五寸もたまり申由也。

〔政隣記〕

七月五日、御馬廻組頭千八百石本保十太夫以守は、今般鳴動に付從中將樣被仰出有之、指上候考書左之通。

七月五日には尚淺間山爆發の報に接せざりしなり

天明三年六月中旬之頃より東方鳴動す。非雷非震。山中之地氣凝鬱而不能發。然而爲音而轟々響也。其所爲考。春夏二季之間不多雨降。山上日々陰雲覆而地氣不能昇。海方陰雲薄故地震不成。地中之火不昇。故雷不能成。海上陰雲薄。故水氣無爲薰蒸而無降大雨。山上陰雲覆哉厚。故地中之陽火不能發。地中憤發勢烈而東方爲鳴動也。四邊霽歟大雨降時得而可止。

卯孟秋上旬　　　　平　以　守　孝

右十太夫者幼名杢之助与云々本保□之子也。伯父長瀨藤左衛門之許に寄住之處、同苗常右衛門に無子、此杢之助を爲養子与。天生之才人、算學を好み、天學・曆學を學びて、算學を成就せり。儒學・醫學をも兼學び、本草も委し。一粒金丹なども調合せる人也。

六月。婚儀を擧ぐる家に礫を投ずる者を捕縛すべきことを令す。

〔日　記〕

一、御家中何れに而も婚儀相整候節、前日役所へ相斷置候へば、打礫役儀之者御指出、若被仰出を相背、礫等打候者於有之は、幼少者幷小者に至る迄召捕、其親・主人々々へ引渡候樣、先達而被仰出、尤衢場打廻之者共へも申渡置候所、當廿一日三宅六郎兵衞枠直儀婚儀相整候節、悪石を打候樣子有之候所、廻り之者致油斷候儀御咎、兩人共逼込に被仰付候。左候へば、後々何れに而も婚禮等相整候刻は、不依貴賤、被仰出を相背不法之振舞有之候へば、先達而被仰出候通り、決而召捕候答に候條、銘々幼少人幷家來末々迄急度御申渡置可有候。各爲御心得諸者共より申達候事。

卯　六　月

六月。火災の際無用の者の現場に集合することを禁ず。

〔日　記〕

定番頭より

一、火事之節、無用之人々火事場へ不罷越答、前々より御定茂有之候所、無用之者馬上に而罷越候人々も多、右御用に罷出候御役人之障に候樣子に相聞え候事。

一、辻々大勢集り、火消人數等致見物候躰。且町歩共引揚候節道幅をせばめ、往來差支、がさつに致通行、馬上之人々には聲抔を懸、第一不作法成爲躰も有之候様子に相聞候事。右々等之趣、前々より相觸置候所、近頃猥りに成候躰に相聞え候條、是以後右之躰無之様、急度可相心得候。尤自今右躰之者於有之には、御横目より相咎、夫々名前も承屆候筈に候條、此段組・支配之人々へ一統可被申渡候事。

六月

今月は七月にて幕府への願書に次に掲ぐるいの如く出府の期を明記せざるな只て急に啓行せんと欲したるなるべし

七月五日。前田重教來九月・十月中に出府のことを告ぐ。

［政隣記］

七月五日、中將様當九月・十月之内江戸表江御出府可被遊旨被仰出、御道中奉行吉田九兵衛・津田平兵衛江被仰渡。于時今月十日、當十五日御發駕与被仰出候得共、御道中奉行御請無之候處、左候者當廿五日与被仰出、是又御受無之候處、來月十五御發駕と被仰出、今月十五日・十六日・十七日に、頭分・平士等夫々被仰渡。

［袖裏雑記］

中將様當秋御出府之儀、以御親翰被仰出、且左之御願書も拜見被仰付。

私痛所等指引御座候付、居延之儀當春奉願、則願之通被仰出、毎度難有仕合奉存候。然處痛

所等、先日以来打續快御座候。今年出府當之儀にも御座候間、何卒今年中出府奉伺御機嫌度、此段何分にも奉願候、以上。

七月

右御出府御供御家老左之通、七月八日御用番より申渡。

伊藤内膳

中將樣當九・十月之内御出府被遊候付、御自分御供被仰付候。此段可申渡旨被仰出。

七月十一日。金澤犀川・淺野川の水暴溢す。

〔政隣記〕

七月十一日、夜前より之大雨に而犀川・淺野川滿水。淺野川大橋・小橋・觀橋共不殘流失。川端之家等、水疊之上或は椽床下迄浸り込。堀川町・鍛屋町・馬場町・淺野町迄等同斷。犀川も大橋落、十三間町筋等流家或損亡家、疊之上或床下迄浸水右同斷。淺野川端等淺野町邊等も流家多く、或四つ柱而已殘る所も多し。

〔老耄雜記〕

一、天明三年卯七月十一日夜前より大雨、卯刻洪水。犀川橋落流、淺野川大橋・小橋落、淺野町高柳屋等家不殘十軒流、圖助馬場内外、堀川川除町上之方家五六軒流、末寺こばた淺野

仁右衛門妻子二人流死す。小橋邊・母衣町・大橋前後付。其外溺死も有之、不慥。淺野町蓮福寺向かは高柳屋・八田屋等數軒土藏も流候得共、人損無之候。犀川五枚町邊家損水付、十三間町川除之上ゟ水のり、大工町・河原町・養智院之邊水付、人損無之候。

〔政隣記〕

七月十二日、昨日之出水に而悉皆家流れ候ヶ所者、淺野町之内片瀬に而二十軒餘、堀川筋八軒、馬場五軒也、此外は半分流失、或門或は前通迄流失等之ヶ所舉而難計。兩川筋に而之溺死等五百人餘与云々。いまだ委く者不知。犀川邊之事未不知。

一、昨日手取川も洪水、鶴來村にも水付九軒流失。宮の腰にも水付、別而冬瓜町損家多く、粟ヶ崎等も同斷。森下川も洪水橋落、其外所所損所夥し。越中筋も川々洪水、小矢部川橋も落。

一、今日四つ時頃より、淺野川靜明寺後之方より山際之方筋違に渡り瀨出來に付、其過出宅、馬場居宅有之渡邊源藏・姉崎太郎左衛門方等ゟ見廻候所、間之内都而泥土五・六寸も溜り有之。疊・戸障子・唐紙・襖過半流失、殘有之分は泥に染或は及大破、難盡言語爲躰也。右之外町屋筋も巡見候處、淺間敷族共。別而淺野町・馬場裏町大破損、五・六間四方之堀深さ二丈計出來之所も有之。委曲難及筆記。

自宅は津田政隣

〔政隣記〕

一、七月十一日今日町廻當番宿は馬場淺過源藏之處、右之通に而通路も無之に付、俄に自宅に宿替し候。野村傳兵衞も當時馬場町に居住に付、廻り勤不被申、足輕も四人兩川之外居住に付不罷越、三人召連相廻。且夜行札幷見合印鑑、淺野町に居住之足輕受取有之に付、右無之夜廻相勤。但頃日町廻組合之内御番引多候處、右之通に付壹廻は自分・齋藤忠太夫兩人に而相勤。

右等之趣、御用番之御番頭中江罷越、夫々相達。夜廻は今日切爲加番中條十郎江申談有之、三人に而相勤候事。

一、御城中勤番之人々、今日當番之面々も、兩川外に居宅有之分は通路懸候に付、頭々より御番除取計に而相濟。翌十二日減水、渡り瀨出來之上夫々斷書出之。

〔咄隨筆〕

天明三年の夏雲中鳴る事あり。雷に非ず、地震に非ず。四隣響き喧し。七月の始に到りては尤甚し。天陰々として曇り、雲密して雨降らず。其鳴る依りて來る事を知ることなし。或はいふ、信州淺間山の焚くるなりと。然るに七月十日の夜より雨を降らし、忽然として洪水をなす。平地水深き事四・五尺計、才川・淺野川兩橋を流失し、家を潰す事夥し。稀代の洪水也

こいひ合へり。是に依りて田畑荒れ果て、百穀漂ひ流れ、是よりして米穀乏しく、其翌年に至りては下民飢に臨む者甚多し。

七月十三日。財政處理の途を誤りたるを以て御算用場奉行等に指扣を命ず。

〔袖裏雜記〕

御勝手御過迫至極之處、當盆前米切手賣捌變約出來、町・在御調達少分も出來無之、種々僉議有之候得共、御拂等は皆無に盆前可取捌より外無之、左候得ば末々甚及騷動、如何躰成御難澁出來可申も難計、せめて人氣之取靜には、御勝手方主付を初不調法に不被仰付候半而者騷動之程も難計、右之通不調法に被仰付候得者、人氣之寄所有之与申物に候間、いづれにも右之通被仰付候樣仕度旨、七月十一日土佐守より內々覺書を以申聞有之。且同月十三日又兵衞兩名に而左之紙面出、御算用場奉行藤田兵部・神保舍人・小堀牛右衞門も、右に付指扣伺紙面出之候付、兵部等三人者相愼罷在候樣及指圖、御勝手方御用小杉喜左衞門も同樣頭迄紙面出候付、是又愼罷在候樣申渡。土佐守等紙面を入御覽、其段土佐守等承知之上門相建候。兵部等者指扣被仰付にて可有之と伺、伺之通被仰出、七月十三日夕御用番大隅守宅に而左之通申渡。

門相たてとあるは閉づるの意なり

右に付奥村當兵衛當分御算用場奉行被仰付、小杉喜左衛門え指扣之儀伺、伺之通被仰出頭迄申渡。

私共御勝手方主付取捌候樣被仰付置候處、當暮前御逼迫至極に至り候趣、取捌方不宜候故、御政務に指障之趣出來可仕哉難計、迷惑至極奉存候。依之自分に指扣罷在可申哉、御指圖御座候樣致度御座候、以上。

七月十三日

村井又兵衛 判

前田土佐守 判

長大隅守樣

藤田兵部

神保舍人

小堀牛右衛門

御勝手向御難澁至極に相成、當暮前諸向御拂方も御指支之場に至り、迷惑至極に被奉存候間、指扣罷在可申哉之旨、委曲紙面之趣相達御聽候處、取捌方行相不申故被思召候條、指扣罷在候樣可申渡旨被仰出候。

兵部者土佐守組に而、土佐守・又兵衛自分に指扣候故、土佐守組に安房守、又兵衛組に大隅

守指引。依之安房守宅に而大隅守立會可申渡處、大隅守御用番に而難罷越、神保舍人等へ申渡趣も有之、安房守罷越立會申渡に付、兵部も一所に申渡候也。皆御横目指引也。

但、河内守・主水は煩、求馬・大炊は組頭未被仰付、右之通也。

大野仁兵衛・上月數馬へ

小杉喜左衛門

右喜左衛門儀御勝手向――相達御聽候處、取捌方不行屆故と被思召候。指扣罷在候樣可申渡旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

右に付御勝手方御用矢部友右衛門は新役、田邊孫助等は兼役等も有之候間、不及指扣段申渡可然と伺、伺之通被仰出。

七月十四日被仰出之趣左之通。

御自分儀、不及自分指扣候間、可被致出勤旨被仰出候條、可被得其意候、恐々謹言。

七月十四日　　長　大隅守

前田土佐守殿

一通充

村井又兵衛殿

七月十四日。洪水により犀川・淺野川の大橋流失したるを以て盆中野田

山の廟參を延期せしむ。

〔政隣記〕

七月十四日、左之通御用番求馬殿被仰渡候由、御横目廻状出。

兩川洪水大橋流失に付、舟橋何分急に而も一兩日中に者不致出来段、御作事奉行等申聞候。右に付渡船迄に而者船場混雜ニ付、不圖怪我等計候間、當中野田御廟參并自分寺參詣等も致延引候樣、一統可被申談候事。

一、昨日迄者宮腰往還道舟に而往來來有之、今日者舟止。

七月十五日。前田重教淺野川を巡見す。

〔政隣記〕

七月十五日八時御供揃に而、御供入野田装束御鷹野之振ニ被仰出。

中將樣才川・淺野川御巡見。但才川ニ御巡見無之。

一、兩川共一兩日又々水增渡、舟立不立暫時究に而達上ニ水增甚無極故也。

七月十八日。犀川・淺野川の船橋出來したるを以て諸士に廿一日以降野田山の廟に參詣すべきを告ぐ。

〔政隣記〕

七月十八日、左之通御用番被仰聞候旨、御横目廻状出。

兩川船橋出來に付、當二十一日より二十五日迄朝五時より七半時迄之内、野田御廟參勝手次第之旨等、御横目廻状有之。

七月廿九日　前田重教這次の出府に東海道を取るべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

七月二十九日、中將樣御出府下道中者今度之淺間山變に付指支、東海道御旅行与今日被仰出候事。

〔袖裏雜記〕

信州淺間山大燒に而、北陸道より中仙道ゟ御通行之儀つかへ候故、東海道より中將樣御通行之儀御僉議に付、御側筒之儀ニ僉議有之。先年木曾路通御通行之節、信州福嶋山村甚兵衞殿之被相守候御關所御筒通り申事、公儀ゟ御屆相濟御通被遊候樣覺候趣、七月廿日主水より之内狀中に有之。

七月。　前田重教山嶋等の異變あるを以て大に注意すべきことを諭す。

〔郡方舊記〕

先頃以來山鳴、此度出水に而、町・在共死傷之者茂餘程有之躰に候。不慮之至に思召候。出
水之多少に而痛不相知もの故、痛怪我人等も多有之筈に候。山鳴等常に變り候事有之節、其
後出水に隨ひ候得共、輕き者左樣之事に辨無申事に候條、水邊・山際抔に居住之者共、以來變
り候樣有之刻無油斷用心之儀を、町奉行・御郡奉行等夫々心を付、支配之者共に申聞置可然事
に候段、御噂に候事。

七　月

中將樣御噂有之旨に而、別紙佐々木孫兵衞被仰渡候に付達之候條、致拜載、末々迄不相洩樣
可申聞候。

八月四日。大雨の爲才川・淺野川の水漲溢す。

〔政隣記〕

八月四日、大雨に而才川・淺野川水出、淺野川假橋既に可流處漸防留候由。

八月六日。前田重教出府の行程を定む。

〔政隣記〕

一、八月六日、中將樣東海道御通行に相成候に付、御供人惣樣相增、御大小將役付之内宿割
兩人、二〈人御徒歩／合四人〉御旅籠取次一人〈一人御徒歩／合四人〉之處、左之通相增、尤何茂立歸之御供之筈也。且御發駕

御日限九月十一日与被仰出、十五御泊附左之通。

十一日	三里二十六町	柏野御中休	五　里	小松御泊
十二日	五　里	大聖寺御中休	四　里	金津御泊
十三日	六　里	舟橋御中休	四　里	府中御泊
十四日	三　里	鯖波御中休	二　里	今庄御泊
十五日	五　里	中河内御中休	五里十一町	木本御泊
十六日	七　里	水晶御中休	六里六町	大垣御泊
十七日	五　里	萩原御中休	五里十八町	宮　御泊
十八日	三里二十四町	池鯉鮒御中休	七里四町	赤坂御泊
十九日	七里五町	白須賀御中休	四里三十町	濱松御泊
二十日	五　里	袋井御中休	七里十一町	嶋田御泊
二十一日	三里二十六町	岡部御中休	六里十四町	江尻御泊
二十二日	四里二町	蒲原御中休	六里二十六町	沼津御泊
二十三日	四里三十町	箱根御中休	四　里	小田原御泊
二十四日	四　里	大礒御中休	七里十八町	戸塚御泊

金川は神奈川　廿五日品川泊を止め直に江戸に着す

二十五日　三里九町　金川御中休　五里　品川御泊

二十六日　江戸御上屋敷へ御着。

〔日記〕

一、前翁林公當九月中旬江戸表へ御發駕有之筈也。然る所下道中淺間山大變に付、此度は東海道御通り之旨被仰出候。御道中御入用金七千兩之由也。但下御道中に三四千兩程御入用なり

と云々。

八月八日。村肝煎の老年に及び倅之に代はる場合の手續を定む。

〔司農典〕

肝煎及老年に候迄も相勤居候者、倅名代役に而入精も宜、親極老に而難相勤に付、代り肝煎[illegible]に仕度旨同苗中も納得に而願候得者、倅には持高無之、唯今竝不承屆候。併宜者に爲勤候ハ宜敷候間、右持高之倅ハ爲讓候得者宜敷事旨致詮議候間、右之趣に仕度村有之候ハヽ、兎ニ持高讓も願ニ出ニ、當役所承屆候上、肝煎願申聞可然事。

右今日御改作所より御覺書を以被仰渡、則寫相廻申候。以後右之通御心得可被成候、以上。

八月八日　野々市村　吉郎右衛門

八月上旬。前田重教騎射を行ひ諸頭をして之を觀覽せしむ。

〔政隣記〕
八月上旬以來、堂形於御馬場中將樣御騎射、諸頭迄々拜見被仰付、御禮御近習頭を以申上。
加賀守樣ゟ之御禮者、江戸表ゟ御近習頭中迄、一役連名之呈書を以申上候事。

八月十一日。前田重教の命により脇田哲兀郎・近藤小守二人閉門に處せらる。

〔袖裏雜記〕
中將樣より以御親翰被仰出有之。左之通申渡。

奧村湍兵衛ゟ

脇田哲兀郎

哲兀郎儀、此間田邊部吾を以被仰渡、其譯以封物指上候。右文面之内、僞に而は無之候得共御意に不應品甚有之。依之閉門被仰付。右之通可申渡旨、從中將樣被仰出候條、可被申渡候事。

癸卯八月十一日

天明四年三月廿五日閉門御免、知行高之内千石御減少。同年九月三日遠慮御免可被成旨前日被仰出、三之御丸等御番可勤旨も被仰出。

坂井要人・宮井典膳に

近藤小守

小守儀、不屆之趣有之、殊更輕病氣痛所に而も引籠、一ヶ月之内無幾度も御番引いたし、此間も御番御用捨、例表之内も時々罷出候得共段々結構被仰出有之候處、五・三日罷出、又候最前之通引籠不罷出儀、御本公等閑に相心得、不屆千萬成儀、其外不了簡之品も有之候に付、閉門被仰付。

右之通可申渡旨、從中將樣被仰出候條、可被申渡候事。

癸卯八月十一日

天明四年九月三日閉門御免、御格之通遠慮、知行高四百五十石之内二百五十石御減少、御近習被指除、元組へ可被加旨前日被仰出。

八月十五日、和田長助閉門を命ぜらる。

〔續漸雜記〕

前田彌助組和田長助、無謂勝手取亂不筋共有之、於旅館江御聞繕至極仕、只今之內御答御座候樣仕度旨、彌助より達御內聽候付、閉門可被仰付、因御親翰八月十五日被仰出。左之通追付可申渡旨同日御請あり。

前田彌助ゟ　　　　和田長助

長助儀、常々不行狀之段被聞召候得共、相愼申儀も可有之哉与御猶豫被成置候處、相嗜不申、不屆之至被思召候。依之閉門被仰付候旨被仰出候條、可被申渡候事。

八月十九日。日蓮宗妙久寺・宗榮寺女犯により吟味せらる。

〔政隣記〕

八月十九日、卯辰日蓮宗妙久寺・宗榮寺於寺社奉行所吟味之上、御月番ゟ相達、公事場御吟味に相成、二十七日禁牢之處、妙久寺者翌年月日牢死。

（天明五年十月廿二日の條參照）

但、妙久寺者去年以來、宗江寺揚地町東野屋甚兵衛妻妹これ与馴合、當春以來これを寺ゟ爲使置、宗榮寺者去秋以來、本多安房守殿足輕二口半助娘しほ与馴合、當春以來しほ儀寺ゟ爲引越置候に付、前月晦日より夫々主人預・組合預等に、改方御用長屋多七郎より申付置。

右清僧に而女犯破戒之者御仕置先例者、剃首に而寺滅却、寺地三尺削平地に成候。是百年計以前之例与云々。

八月廿三日。石川郡宮腰の商家暴徒の爲に破壞せらる。

〔政隣記〕

八月二十三日暮頃より、宮腰町町年寄酒家八右衛門等之家二十三軒え大勢集り打毀し、井川人之米積舟に手懸、且諸等を取散而退出、何者に候哉不知。

〔政隣記〕

九月、前月廿三日夜家破毀候宮腰町人名前等左之通。

一人の名字遺す

酒屋八右衛門	唐仁屋孫兵衛	錢屋五兵衛	唐仁屋孫三郎
長沖屋宇左衛門	長沖屋德右衛門	油屋與兵衛	相河屋五兵衛
長沖屋六右衛門	酒屋小右衛門	菓子屋平右衛門	藏屋又四郎
安宅屋彌三右衛門	吉堂屋甚右衛門	安宅屋彌兵衛	寺中屋武兵衛
長沖屋八兵衛	小濱屋七郎兵衛	湊屋重右衛門	塩瀬屋武兵衛
紙屋六郎右衛門	酒屋彌三右衛門		

右之内酒屋彌三右衛門者米買込置出不申、剰米錢貸船欺令积出与申之由。依之其船も被破毀。此者頭取に付組合も被指損、四人竟令勤番、其外之二十二人之者共に捺印留、是質荷貸候故与云々。

八月廿五日。前田重教、裳輪德兵衛等の精勵を賞し知行加增を命ず。

〔袖裏雜記〕
左之通九月六日被仰渡候樣、從中將樣被仰進之趣、江戸より八月五日申來、同日御家老中へ申談。

蓑輪德兵衞
右一向少無懈怠神妙に相勤候付、百石御加增被仰付、御大小將に可被仰付旨。

今井又忠儀
右之者勤方宜、情に入勤候付、百石御加增被下、御表小將組に可被仰付候。

田邊郡六
是又右同樣に候間、百石御加增被仰付、御大小將組可被仰付候。

八月廿七日、古江次右衞門異風の結髮したるを以て戒飭せらる。

〔坂井留記〕
中將樣御意之趣左之通孫兵衞被申談候儀、次右衞門早速呼立段々申渡、則御請被立候事。
申談儀有之候條、追付拙宅へ可被罷出候、以上。

八月廿七日　前田彌助

古江次右衞門殿

被仰渡御座候付、追付可罷出旨被仰下、承知仕候、以上。

八月廿七日　　　　　　　　吉江次右衛門

私儀慶信儀異見に付、中將樣御意之趣佐々木孫兵衞より被申談候儀、段々被仰渡奉畏奉迷惑候。此後異躰之族於而茂御座候樣、急度相心得可申旨、分而被仰渡之趣、奉得其意候。以後之儀急度相心得可申候。右御請上之申候、以上。

卯八月廿七日　　　　　　　　吉江次右衛門　判

前田彌助殿

八月廿八日

一、吉江次右衛門儀呼出申渡候付、今日御次江罷出、佐々木孫兵衞迄右御請之儀申上候。尤御請紙面取立置候旨、孫兵衞迄相達置候事。

八月廿八日。前田重教の近習大平欣太夫越中五ヶ山に流さる。

〔政隣記〕

八月廿八日左之通被仰付。

定番御馬廻組　大平直右衛門せがれ

金谷御近習組外　大平欣太夫

越中五ヶ村之内江流刑。

九月九日。家族の痘瘡に罹る者ある諸士をして登城を遠慮せしむ。

〔政隣記〕

九月九日、左之趣御用番より御觸有之。

數千代樣未御疱瘡不被爲濟候に付、家内痘病人有之候者、三番湯懸り候迄、金谷御殿幷二之御丸江罷出候儀遠慮可仕候。且又御番人等者、御目通江罷出候儀扣可申候。將又右病人者、相見え候日より三十五日過候者、肥立次第可致出勤候事。

九月十一日。前田重教金澤を發し出府の途に就く。

〔舊記〕

天明三年五月より信州淺間山頻に燃上り、燒石近郷に飛時、七月十二日洪水山崩し、隣國共死人不知數、往來通路指留る。依而九月十一日に泰雲院樣東海道通江戸表江御發駕被爲遊候節、手取川假舟橋幷打懸橋共十二ヶ所俄に懸り申に付、此時主付人者澤村源次江被仰渡候。

一、泰雲院樣九月十一日金澤御發駕。

御中休　松任笠間屋方

御小休　福留村六郎右衛門方

是月は大盡なり

同　　　　寺井村御得寺方

右御德寺方御小休、諸事指方御扶持人中ゟ被仰渡候事。

一、泰雲院様御得寺ゟ十一日晝八つ時に被爲入、御機嫌能御立被爲遊候。依而金子三百疋御得寺へ被下候事。

九月廿五日。前田重教江戸に着す。

〔政隣記〕

九月十一日五半時頃中將様御發駕。但御日圖二十六日之處、品川御泊止、廿五日江戸御着之事。

附、今日布上下着用之儀、頭分御見立之類、其外都而御横目廻狀等、去々年御發駕前之通に付略す。

九月晦日。能登所口奉行、珠洲郡雲津村の百姓四郎右衛門兄弟の孝行を賞す。

〔菅記等抜書〕

私組下雲津村百姓四郎右衛門・與右衛門兄弟之者共ゟ、所口御奉行有賀甚兵衛殿より鳥目拜

領被仰付候。御書付寫仕、左に繼添御斷申上候、以上。

雲津村　文　二　判

卯　十　月

進　士　齋　宮殿

槻　尾　左　膳殿

覺

珠洲郡雲津村文二組同村百姓兄弟

一、一貫五百文　　兄　四郎右衛門

一、一　貫　文　　弟　惣　右　衛　門

右兩人之者共老人之親今所持候處、其孝を盡令撫育、暨是に順心得宜、御收納方等茂心得宜由、相承及候。輕き者に者稀成心得、神妙之至令稱美候。依之乍輕少爲褒美、拙者より先相送り候。尤此段出府之節以御序、年寄衆に茂申上置心得に候事。

卯九月晦日　　所　口　役　所

十月七日。江戸に赴くものは當分甲州街道を取るべきを告ぐ。

〔政隣記〕

十月廿九日、左之通御用番被仰渡候旨定番頭廻状出。但今月七日に出。

信州淺間山大變に而、沓掛より松井田迄問屋不相立指支候に付、江戸往來當分甲州街道可罷通候。併人々手廻に而右驛路往來勝手次第に候。碓氷峠馬足立不申候條、乘馬爲牽候人々者可有其心得候。尤宿賃銀等者、都而甲州街道之圖を以相渡候筈之事。

十月七日。領內不作の狀を見分する爲奉行を諸郡に發遣す。

〔郡方舊記〕

天明三卯年三州共不作覺書

能美郡・石川郡・河北郡

和多田八太夫殿

中居三右衛門

加納權六

礪波郡・射水郡

堀田治兵衛殿

村井與三右衛門

馬場八左衛門

羽咋郡・鹿島郡・氷見庄之內

木村次右衛門殿

金屋本郷金右衛門

野々市吉郎右衛門

奥郡　小杉喜左衛門殿
神田吉左衛門
沼保彦四郎
新川郡　高澤平次右衛門殿
澤村源次
福留六郎左衛門
大西加兵衛

〆

右之通御郡々立毛爲御見分、十月七日金澤御出立、御扶持人共被召連、御見立、より申に而は無之通筋村々御見分有之。一組之内二・三ヶ村充御見立様に而御見分有之。泊所に而御扶持人入札指出平均仕候。其日毎御免狀相渡不申候事。

より申は故らに村に立入るの義

右不作御償米左之通。

一、一萬石　能美郡

外、千石御貸米。

一、二萬四千石　石川郡

外、三千石同斷。
一、九千七百石　　河北郡
外、千石同斷。
一、二萬六千八百石　　口郡
外、千石同斷。
一、一萬千三百石　　奥郡
外、千石同斷。
一、二萬五千石　　礪波郡
外、二千石同斷。
一、一萬三千石　　射水郡
外、千石同斷。
一、一萬四千石　　新川郡
外、三千石同斷。
〆十二萬二千八百石
外、御貸米一萬三千石。

三州共右御償米を以願、村方一村に定納・口米に當損毛、村々免引に被仰付、諸書物村々御請等都而御見立を以相調上、則御免狀御役所に而相渡申候。一萬三千石の御貸米之分は、右之內江は入不申、是は別段に割符仕候事。

一、新川郡損毛村數五十ヶ村餘有之。御見立被仰付候得共、御免狀其日に相渡不申。是以金澤へ御歸被成、御役所に而御免狀御渡有之候事。

一、口郡金丸邊御泊之節、百姓中大勢他郡御扶持人宿へ詰懸、御免狀被下候抔与申、大分やかましき事に候得ども、御奉行所へは罷出不申に付、穩便に相治申由に候事。右之年は諸郡共甚之不作也。

一、奥郡作難深く、翌年御郡所・御改作所兩御手合より、難澁人ども幷宿次村々等へ、延御拂米・御救米等都而六千二百四十石餘、麥三百石、代銀十八貫六百目、但石に付六十目がへの圖り。御郡所より中居・飯田・正院出來之素麵二百九十個、但一箇入三貫目入御買上、飢人共へ御施行被下候。定式相願申現銀御拂米・御鹽手米越中等に相渡、積廻方過分造用相懸。天明四年夏頃米一石代銀八九十目に候得共、兎角難買求、劒地邊へ者七ヶ筋より夜々忍々に少々宛相求來、露命をつなぎ申事に候。天明三年に者諸國共不作と申事に候。以上。

〔舊記〕

劒地は鳳至郡

天明三年七月一日洪水より雨降續、十月末迄晴天成事なし。依五穀不實、畑物の種も苗に百年以来之不作也。然故に十月御改作御奉行和多田八太夫様、他郡より御扶持人能州鳳至郡中居村三右衛門、越中射水郡加納村権六、能美・石川郡わ立毛爲見分御廻り、河北郡・新川郡わは御改作御奉行高澤平次右衛門様、能州口郡へ木村次右衛門様、奥郡わ小杉喜左衛門様、礪波・射水郡へ堀田次兵衛様、夫々御廻り、御歸後十月廿八日御覺立爲代十三萬六千石、三ヶ國村々わ免付を以御用捨米被仰付候。併不作無此上年柄に依而、十二月能美郡へ六千石増御貸米被仰付候。此御貸米澤村諱次達而願方有之に付被仰付候事。

十月七日、鳳至郡輪島の商家暴徒の爲に破壞せらる。

〔郡方舊記〕

天明三年卯十月七日夜、輪島角屋與三兵衛・飾見屋次右衛門・ひさ屋平右衛門・小西彦兵衛・新屋三郎兵衛・中上屋傳兵衛・橋爪庄五郎・湯屋權右衛門、此八人者共宅へ大勢押込、家・物置・家財諸道具うちこはし、金銀衣類等取散騷動に付、爲御縮方御郡奉行優尾左膳殿、盗賊改方より小代官齋藤宗四郎・德山齋左衛門、足輕小頭平岡宗八等輪島町へ出役有之。疑敷者共御吟味之上、手鎖縮を以公事場へ御引渡禁牢被仰付。右角屋與三兵衛等八人之者共も公事場へ御呼出、其後御郡所へ御指話。入牢仕候者共追々牢死仕、頭取人も相顯不申。右八人之御預

者共御指宥被成候。右八人之者共酒造等商賣方御郡所より御指留、其後年を經て御指解被成候。稲舟跡組裁許八左衛門儀、立毛御見分爲御用礪波郡へ罷越居申所、飛脚を以役所手代共より及案内申に付、十月十一日中田村罷立、夜通を以同十三日輪島へ歸着いたし、立毛見分方代り人田井村次郎吉被仰付候事。

〔袖裏雜記〕

先頃宮腰町中幷能州鳳至郡輪島町に大勢相集、町家百姓家打毀候趣等、委曲其時々達聽候通候。是は江戸状留にあるべし。畢竟當年不作に付、輕き者取續兼、米商賣等之手前奸曲も候哉と疑候故之事と相聞え、徒黨之躰候。元來强訴・徒黨之儀は、從公儀も被仰渡、其時々御領國中被仰渡有之處、去々年高岡町中へ大勢集及騷動、今般又候右之族。近年別而下張成風俗に成申儀、右之族又候有之間敷ものにても無之間、以來右躰之及狼藉候者は、理非之無差別嚴科に可被行旨一統申渡可然哉。只今迄其手合々々之足輕等罷出鎭候得共、手に合不申候間、兼而大組・御持幷割場奉行へ申渡置、地廻は其向寄々々より早速罷出鎭、手に餘り候はゞ大組・御持は鐵炮に而打散可申候。既先頃上州・信州筋百姓共騷立候節、松平若狹守殿等御領分國之樣子承候由、和田清三郎より指出候付、則寫一緘指進申候。勿論右は夥敷事之樣に承候得共、集り候人數之多少は格別、都而一揆之形に候旨等、十一月廿九日主水等迄申遣候紙面等留あり。

其被仰出等此報中に不見當。

十月九日。大小將吉田宇右衞門江戸邸より出奔し次いで發見歸國を命ぜらる。

〔政隣記〕

十月十六日江戸より左之通申來。

御大小將組五百石吉田宇右衞門儀、當月九日朝御弓御用之中立御門外に出、直に出奔之旨。先頃中將様御宿坊等御大小將石黒佐七郎・津田武平次・千秋作左衞門・中川丹次郎より返上金一歩二百四十九切預置、返上方之儀相頼候而江戸發足、今月十日金澤歸着之處、宇右衞門儀右金子不致返上、致懐中出奔候事。依而右四人ニ引金子拵へ、返上仕度旨之願書、今月十九日他に江戸表に指出候處、本文之通に付不及返上に事に相成。右に付宇右衞門宅に御番頭兩人罷越、類中に夫々締方之儀申談有之、妻子一類致勤番、彌取逃に候得者妻子禁牢之御格に云々。

一、同月二十一日江戸より申來趣左之通。

吉田宇右衞門行衞、詰合一類中より江戸中所々相尋之處、當月十日夜居所相知、但事結家に罷在候に付本文之通也。湯島に罷在候町人鶴玉屋清兵衞方に連越置、一類永原潤太夫・安達彦宮清兵衞宅に罷越、御屋敷内に連歸候に付、近江守平馬等より奥村主水殿に御達申候處、一類共に御預被成候。

且又宇右衛門儀御國ゟ御返被成候條、一類共之内指添返候樣被仰渡。同二十五日永原淸太夫指副に而、十一月十一日歸着に付、其節頭岡田太郞右衛門・御番頭天野傳太夫爲見屆彼宅ゟ罷越候處、宇右衛門逆上之躰に候間、於縮之間見分有之樣致度旨、類中湯原典膳・石黑宇兵衛等申達、於縮所見屆有之、兩人共退出。淸太夫右用向相濟、同月十六日發足江戶ゟ歸府。但宇右衛門旅中縮籠は丈夫に認、戶一方に二ヶ所宛鎖おろし、大小便者底に小さき穴より引出しに而取候認め、尤靑網覆ひ、嚴重至極之認方与云々。且宇右衛門儀亂心之趣に相成、取逃候金子者御貸小屋疊之下に有之候由にて上納相濟。實は吉田九兵衛・吉田彥兵衛等より遣ひ失ひ候不足指出、引足候而上納之由云々。

一、今月二十九日吉田宇右衛門儀歸着之上も、一類御預之段御用番被仰渡、頭より類中呼立夫々申渡有之。且宇右衛門行衛相知召連來、且亂心に付妻子勤番相解候事。

十月十五日、新番組山本伊右衛門江戶に於いて出奔す。

〔政隣記〕

十月十五日江戶在府新番組御徒山本伊右衛門（組外山本故定右衛門せがれ也）出奔。江戶中ゟ割場足輕等に出。幼少之弟一人罷在、引受候者無之、御貸小屋に有之。

十月十五日。金澤に於いて諸士に前田重教江戶着到以後に於ける狀況を

告ぐ。

〔政隣記〕

十月十五日、前々日御用番安房守殿依御廻文、今朝頭分以上登城之處、於柳之御間例月出仕年寄衆詰相濟候後、右列に御番頭以下等加り、重而御年寄衆等御列座、左之通安房守殿御演達。

中將様御道中益御機嫌能、前月二十五日御着府被遊候處、同廿八日以上使水野出羽守殿御懇之被爲蒙上意、且又當朔日御登城、於御白書院御參府之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、大納言様ゟ初而御目見難有思召候。此段何も可申聞旨被仰出候事。

右御弘に付、今日中爲恐悅、御用番御宅ゟ一統相勤候様被仰渡、登城之面々參出之事。

十月。前田治脩及び重教近習の士をして帯佩を習はしむ。

〔政隣記〕

十月、今月上旬以來於江戸表、御両殿様御近習頭等ゟ帯佩被仰付、毎日稽古有之。右に付御旗本御出入衆之内小笠原舘次郎殿御懇、連日黄金一枚宛、三ヶ日に三枚、幷絹五疋・白銀五枚・十枚宛両度被遣之、川勝内記殿ゟも銀二十枚外に十枚・絹三疋・染物三端宛三ヶ日續ケ候而被遣之。佐野六十郎殿ゟも銀・絹右に准じ三ヶ日續被遣之。但六十郎殿ゟ者以奉札被遣之、

館次郎殿・内記殿ゟ者御次渡に而御大小將使を以被遣之。右者たいはい御傳授事、并御近習ゟ傳授事被仰付候故之御進物与云々。

十一月朔日。前田重教の出府に供奉したる諸士に扶持方の一部返上を命ず。

〔政隣記〕

十一月朔日、中將樣東海道御通行御供人ゟ、指定候御扶持方代之外一人扶持に二百目宛御貸渡、乘馬も一疋に付二百目宛御渡之處、東海道格別諸入用懸り候儀無之に付、右增銀之内百目宛返上被仰付候段、於江戸被仰渡候。追歸之分も同樣返上之筈に候條、早速返上可申渡旨。且殘り百目宛之分は返上方之儀、追而可被仰渡旨伊藤内膳殿より御觸出有之。

追歸とは着到後直に歸國せしめたるものをいふ

十一月上旬。先の洪水に拾得したる流れ物の處分を定む。

〔政隣記〕

今年七月才川・淺野川筋洪水之節流物拾ひ置候者幷持主、双方共盗賊改方御用長屋多七郎宅において僉議之上、御用番ゟ御達申候上、元來下賤之者共拾ひ置候事に付、左之通補方御定之振を以割方に而双方ゟ申渡有之。

今月は十一月

一、川中に而洪水之内拾ひ候分者五ヶ一。

一、水引候上或は人々園之内に而流れ込拾ひ取候分者十ヶ一。

但、兩樣共拾ひ候上改方ゟ不及断者、或隠し置候分者取揚、骨折賃錢之不及沙汰、道具主ゟ可相渡候事。

一、材木之分者前段沙汰無之品に付、於改方不及貪着、双方申談和順之上、慥成品者骨折賃指出、直に取引可申候事。

右今月上旬申渡有之。

十一月十八日。前田宗辰の生母浄珠院の三回忌法會を江戸廣德寺に行ふ。

〔政隣記〕

十一月十八日、來月今日浄珠院樣御三回忌御相當之處、今日ゟ御取越、江戸下谷於廣德寺御法會御執行。主附御先手芝山十郎左衛門、取次御大小將二人、御給事役一人。

十一月廿二日。不作の爲引免を許したるを以て給人知引足米附與の手續を令す。

〔政隣記〕

十一月廿二日左之通御算用場觸有之。

今年作毛不熟に付、三州共引免被仰付候間、給人知百姓納不足之分、前々之通引足米、當場印之切手を以相渡候間、渡方之儀は追而可申談候。右に付組・支配交名帳來月六日切可差出候。但前々は給人引高人別引物成帳取立候得共、今年之分は右に而は及遲々指支候間、不及其儀候。且又一組帳交名知行高迄頭々帳面に記、遠慮・蟄居・逼塞并七月後病死人何月病死与申儀相調可指出旨。秋夫銀取立候後引免極候間、過夫銀は來春夫銀を以指次、皆濟狀草案之通來春指次可申旨可相調候。收納拂米先達而賣出置候切手、引免に而減石に付、調替候而は指支可申に付、引免米最前之切手に致振札可相渡旨等之事。

十一月廿三日。前田重教の女穎姫、會津侯世嗣松平容詮に嫁せんとするを以て結納を送る。

〔政隣記〕

十一月廿三日於江戸穎姫様御結納。且其外御日取左之通。

十二月十五日御入輿御婚禮、同十六日御里披、同廿三日五百八十之餅爲御取替、同廿五日御聟入。

一、御輿渡奧村圭水、御貝桶渡前田圖書。

一、御逹大久保加賀守殿、同御和津軽越中守殿に御頼之處御斷に付、松平越中守殿・植村右衛門佐に御頼之事。

一、御婚禮懸り御供人并御給事人に、一人に銀百七十目宛衣類代被下之。

〔政隣記〕

十一月廿九日、頴姫様来月十五日御婚禮之節、御長刀従駿河守様御頼之御方大久保伊豆守殿・松平若狭守殿、御待方如長谷川太郎兵衛殿、御先手前田半右衛門殿、御和堀田豊前守殿・本多肥後守殿。

一、此方様より御逹之御大名者前記廿三日之通、并御先手倉橋三左衛門殿・長田甚左衛門殿。

一、御婚禮之節小笠原流諸禮御用、青山數馬に被仰付。

是月は大盡なり

十一月晦日。米作佳良ならざるを以て納租の吟味を寛にすべきを命ず。

〔政隣記〕

十二月朔日、當作毛實入薄く青米交り、其上南天勝に付干立がひなく、依之如例年納米吟味仕候而ハ指支候條、右之趣相心得米納候樣に、諸代官并給人中也宿共に被仰渡候樣仕度旨右樣先例も有之段、改作奉行杉野多助・堀田治兵衛紙面打返し僉議仕候處、相違無之段御算用場奉行神保舎人以紙面御用番に相達申候に付、則先月晦日御用番求馬殿より御觸出有

之。

本年五月三日の條參照

十二月四日。前田重教近習の士井上松之助出奔す。

〔政隣記〕

十二月四日夜井上松之助（組外に而金谷御近習領知四百石、居宅古道。今年五月三日夜於金谷御殿煙出候後、直に致御番引罷在候處如本文。）幷母・弟三人・姉一人・家來小者一人・同人妻・娘都合九人出奔、宅には裁許人一人罷在候處、昨夜酒を強而爲給候に付給醉、右出奔之儀一向覺無之段申聞候由。其外下女等前廉暇を遣し或は下宿爲致、夜前に裁許人迄在合候由。右に付金澤中暫在方等所々相尋候得共、行衞相知不申に付、御領國中相尋度段類門より相願、松之助支配頭組外御番頭松原善右衞門より、御用番に御達申候處御聞屆に付、其段七日一類に申渡候處、近き續無之に付、母方いとこ田邊善太夫・いとこ違神子田五兵衞（用人共御大小將也。）尋に出候筈之處、翌八日暫見合候樣御用番被仰渡、重而御領國尋不及段被仰渡。是御關外に出候事相知候故也。同十三日田邊善太夫、右に付指扣之儀、頭岡田太郎右衞門より御用番に伺有之候處、不及其儀段被仰渡候事。

〔政隣記〕

十二月十三日於公事場、井上松之助行衞京・大坂可相尋旨。神子田五兵衞遠類新番御歩井上勘六に被仰渡、廿二日發足翌正月廿二日歸、行衞相知不申由也。御馬廻組井上兵左衞門せが

旨也。

但、田邊壽大夫公事場ゟ呼出之處、氣滯御番引中に付、爲代井上勘六ゟ被御渡有之。

十二月七日。是日以後頴姫の婚具を會津侯世嗣松平容詮の邸に送る。

〔政隣記〕

前月廿三日等に有之通、十二月十五日頴姫様就御入輿、今月七日・八日・十一日に御道具被進之。指副者初日御歩頭河地才記に而、大御門より繰出し、御兩殿様表御式臺ゟ御出御覽。美濃守様等も御出也。八日・十一日は御附頭等指副南御門より繰出し、三ヶ日共持參人三百八十人宛也。將又六日には、御兩殿様共御道具御見分被遊、畢而詰合拜見被仰付、御道具共御大書院・同溜・御小書院・同溜・舩之間、右御五間に飾り立積立有之、夥敷事也。殊に皆々結構至極、風呂桶迄も黒塗高蒔繪有之。是等萬端御省略之處如斯と云々。

美濃守ハ大聖寺侯前田利物

十二月十二日。町人に奢を勸めたるを以て諸士も亦食物の消費に注意すべきを告ぐ。

〔御觸留〕

別紙一結南通之趣可被得其意候、以上。

十二月十二日　　長　大隅守

御　名　殿

今年凶作に付、新穀出來之上も米拂底故直段甚高直に付、町家之者共一統粥を給候樣申渡候。ヶ樣之趣に候間、御家中之人々茂心得茂可有之儀に候。則町奉行ゟ申渡候覺書之寫相渡候。右之趣被得其意、組支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月十二日　　前田大炊

町奉行ゟ

當秋御領國洪水、其以後氣候不順に而作毛不熟至極、曁他國茂作躰不宜由に而、新穀出來之上も米拂底故直段甚高直に付、輕者共別而可爲難澁儀に候。依之來秋新穀出來迄、何分用米不差支樣、夫々遂僉議候事候。今年凶作之儀に一統見聞之通之事に候得者、ヶ樣之年柄勿論人々心得可有之候得共、猶更各僉議有之、町家之者共粥を給候樣可被申渡候事。

卯十二月

十二月十三日。百姓の食物に關して諭す。

〔高井舊記〕

御領國今年作毛不熟、其上他國抔皆不納之所も有之様子、依之御領國中來秋新穀出來迄之用米不指支樣、段々遂詮議候事に候。ケ樣之年柄各支配所人々も心得可仕候得共、猶更各より被申渡、身元宜敷者も一統儉約を給、其外末々に至候而は彌右に准可申儀勿論に候。御郡方は當今難澁等窮物と給可申事に候得共、今年之儀別而無油斷、至而窮物を以何分食續候處專要に候。御城下之儀は、一統儉約を給候樣御用番よりも當町奉行え被仰渡候由。遠所町並御郡方えも右之趣當場より可申談旨被仰聞候に付申聞候條、各支配所夫々不相洩樣可被申渡候。且又所々用米支不申樣、各油斷も無之儀不及申候得共、在・町支配是抔無隔、町奉行・御郡奉行被申談、何分にも都而無指支樣取調肝要に候。尤其上にも無據儀有之候はゞ、被申聞次第可及示談事。

十二月十二日　　　　御算用場

榎尾左膳殿

進士齋宮殿

十二月十五日。前田重教の女頴姫松平容詮に入輿す。

〔三壽御譜〕

十二月十五日御入輿。實御年十八歳なり。駿河守容詮御部屋住に付、芝新錢座御屋敷に御居住に付、芝へ御引移。依て芝御前樣と奉唱。然所容詮御部屋住之内御卒去。依て天明五年十一月薙髪、松壽院殿と號せらる。御一生芝に被爲入、享和三年正月十日(御忌日後五日に御立替。)御年三十八にて薨ぜらる。下谷廣德寺に葬る。法號松壽院貞操妙幹大禪定尼と云。

同十六日御婚禮相濟候に付、爲御祝詞御本丸より御廣式番之頭三河口雲五郎を以て三種二荷、西丸より小知三右衛門を以て二種一荷御拜領。廿八日爲御禮御登城懇被蒙上意、御下り御老中方御廻勤被遊。

〔政隣記〕

十二月十五日、前記前月廿三日記之通、今日於江戸頴姫樣御入輿御婚禮等有之。

廿七日、昨日御用番大炊殿依御紙面、頭分以上布上下着用登城之處、於柳之御間御年寄衆等御列座、大炊殿左之通御演述。

頴姫樣御婚禮、當十五日御首尾能相整候。此段何茂可申聞旨被仰出候。

右に付登城之人々、今明日中年寄中等宅ゑ爲御祝儀廻勤。尤御用番幷病氣等に而登城無之人々、前々之通大炊殿迄相勤、大炊殿ゑ使者を以御祝儀申上。

頴姫樣御入輿以後、芝御前樣与奉稱候樣被仰出候段申來。

十二月廿四日、藩の收納減損したるを以て調達引當米及び拂米の借上を命ず。

〔御郡典〕

付札、町奉行へ

今年御米方取捌手段無之に付、無據御借米等之儀別紙之通申渡候。就夫に是以後御勝手御運方別而難澁至極之依、彌以何与被御仕廻御用相辨不申候半而は難相成候。當町方より近年御用辨來候處、此度之首尾に付別而迷惑可仕譯に候得共、近年之振にて段々遂詮議候得者、只今にて而者假令他國向抔より可相勤与申者有之候而も、畢竟御國益に不可然譯に而難申付、然者何分にも是以後御仕廻御用、近年之通當町方より相勤候樣有之度候條、各被相考幾重にも可被申渡候事。

今年御領國凶作に付、過分御損毛引免等有之、御收納莫大之引方に相成、就中今年洪水之事之御入用等彼是打重り、御難澁至極之御運方相成、如何共取捌方手段無之、不得止事當時迄諸向へ相渡候御調達引當米幷御拂米、御算用場印切手二十萬石餘之分、不殘御借米等不申渡候半而は御米取捌難相成候。依而右之内御郡方引免御借米等都合十八萬石之分者御借米に申渡候。御返濟方來年十月新穀を以可申渡候。殘三萬石計之分御召米に申付候。一貫目充當時相渡し、殘り銀之分來年四月中御調達銀之内を以可相渡候。末々可及難澁至極儀故、種々打返逐詮議候得共、誠に手段無之候條、何分共致納得候樣可被申渡候事。

卯十二月

付札、御算用場奉行に

今年御領國凶作に付過分之御損毛、當御收納米取捌方等之儀、別紙兩通之通町奉行に申渡候條、御郡方にも右之振合夫々可被申渡候事。

卯十二月

當年御領國一統作毛不熟、過分之御損毛有之、其上洪水變事に而御入用相重り、御勝手御難澁至極之御運に相成、御調達之手段盡果候に付、不被得止事、當時迄諸向に相渡候御調達引當米并御拂米之分、御借米等被仰付候儀、御勝手方土佐守殿等御渡覺書寫三通相達候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十二月二十四日　　御算用場

槻尾左膳殿

進士齋宮殿

十二月。堀樗庵の末期養子に扶持を給することに就いて議す。

〔袖裏雜記〕

癸卯十二月之切物之内、堀樗庵跡的當之例無御座候。奧田理元跡を引、且又寛延二年六月御

外科堀宗叔病死、同年十二月末期願置候養子御算用者堀吉左衞門せがれ吉三郎江、宗叔へ被下置候御扶持方五人扶持無相違被仰付候。其節吉三郎儀十二歳に而御座候。今般に及末期願置候養子、御當地町人池田屋吉之丞せがれ吉太郎儀、今年十五歳に候。外に筋目之者無之、吉之丞儀縞柄之者にて御座候へども、正に町人之せがれを難被儀例も承及不申に付、支配人ゟ尋候處、都而御醫者養子等之儀、弟子之内或町醫者等願候儀不支に申所ゟみに相心得、其上當而弟子にも仕置儀も候故承届候旨等申聞候。右樣之儀例見當不申候へども、筋目之者弟子にも仕置候事候間、隨之儀に而可有御座候。就夫御醫師に五人扶持より少扶持之者、是迄見當不申候。被仰付候時に樣段へ被下置候通、五人扶持被仰付にて可有御座候。乍然醫而醫術之方に而被召出候御樣子ども相聞え不申候。然ば本御醫者之振ども違可申候。去ども御醫師之申趣に而被召出候處、無調歸式不被及御沙汰之申にても有御座間敷候へども、被召出年數も無御座、殊吉太郎も若輩者に候間先御延引、追而御僉議被仰付に而可有御座哉伺之處、伺之通被仰出。

十二月。百姓金澤に出で、家財を賣り又は食を乞ふものあり。

〔政隣記〕

十二月、此間在方より百姓共大勢連に而香林坊橋邊・淺野川橋など迄り邊ゟ罷出、破れ桶等

之類を賣らんと申、或は食を乞、連日甚騷々敷、且先月以來今以夜盜・行路之追剝甚流行、夜行人稀成躰也。在家に押入も有之云々。

十二月。領内の米作損耗高を幕府に上申す。

〔袖裏雜記〕

覺

一、八十一萬八千四百三十七石　加賀・能登・越中之内

右拙者領分之内、當春以來水損・蟲付等有之、當年損毛高如斯御座候間、御屆申達候、以上。

卯十二月　御名

〔螢邇光〕

天明三癸卯三・四月頃至て寒く、五月迄も綿入なり。土用の內曇天にして白日を見ず。四月頃より何處共知らずごん／＼と鳴動して、大筒を放つが如く、始のほどは日に一兩度或は三四度と日々に數重り、鳴音も次第に高くなり、六月十日頃よりは暫の間斷なし。晝夜ともに戸障子もはづるゝ計の震動也。淺間山の頽るゝとは知らず、津浪の押來る歟、大地震の前兆か、坤軸も覆るかと安き心はなかりけり。七月六日夕より雨降出し、只盆を傾けるが如く、降音にて物音も不聞得、十日餘も暫の晴間もなし。しかも毎日の大雨なれば、洪水の波濤海

の大變にはなして、山々崩れ、且出る事限りなし。堤切れ、土居流、往還の橋々小川々々の橋までも落流れざるはなし。昔より水村と知る在里々も水底になり、隣村の通路隣への通ひもならず。所々の大變金澤奉行々々へ注進を急げども、橋々落ち水高ければすべき様なし。數日を過水練の者を撰立、頭に状箱をくゝり、裸にして處々およがせて漸に通路す。七月・八月は雨止ず。殊大雨度々にて、且水出る事毎日也。三州とも如此にて、泰雲院殿より何卒工夫して具を取て出すべしとの蒙仰出度々有。小松泥町・松任町邊に床の上へ上り、深さ帯を踰、町中船にての往來なり。又里々の大變詞筆に盡しがたし。常々洪水に水の付村々は、此度の大雨只事にあらずと、兼て諸道具は二階へ上げ、家には多くのかせをかひ、梁柱小木を横たへなどして其心得せり。然に其家流潰るゝ事夥し。朝日村といふに、夫婦兩人・子供二人家ともに流、家も人も行衞知れず。其外流死人かぞへがたし。又日頃水に馴れざるは、不意に大水山の如くに押來り周章驚き、兒女の泣聲村毎也。手廻の品々はいふに及ばず、葛籠・長持或は衣類杯流出る事少からず。郡奉行・改方奉行・御横目方再三再四の見分皆船なり。里々の有様軒傾き壁くづれ或は潰れ、泥砂四・五尺、少き處は一・二尺なり。水引て泥砂取除るといへども、村毎家毎に壁落軒損じ、且地乾かず、數ものは流れ盡し、是非なく三月・四月の二階住なり。水中ながら水に乏しく、不浄なる泥水にて米を洗ひ、小さわる家の二階にて、

煮燒き煎換、火災のなきも不審也。拾月日を經て川口を堰留、土居をつき、水の引けし跡を見るに、茫々たる原野とはなれり。淵瀨とかはる世の中ながら、山の淵となり河が丘となり、地理一變したり。扨水の付かざる里々、たま〳〵に高みの田地、水難は逃るといへども、此節の氣候にて稻は皆羊田の如し。依之暮に到、引免替りとして一萬石の御用捨なり。又跡御貸米七千石、猶是にて治りがたく、一萬石御拂米御貸附なり。日本中洪水の由、往昔より聞傳へざる洪水也。淺間山の石燒て飛散る事凡四十里計と聞、人民多く燒絕えし事數は知れずなり。燒石深事七・八尺計、或は四・五尺或は一・二尺、四方の隣國田畠皆然なりといへり。淺間麓の里々は却而左はなかりしとなり。

〔袖裏雜記〕

今年水損等に而、御領國引免十二萬三千八百石、御貸米一萬五千石出候。加能之內には皆無之處も有之也。此儀江戶に而申上り候十一月十一日紙面中にあり。但今年の內作元祿十四年以來無之事也。夫以前は舊記はきと無之。

此段去閏正月二十一日御普川場奉行紙面中に見。

是歲。石川郡日御子村の手叩淸水に愚民集來す。

〔寢覺の螢〕

一、天明三・四年の頃、しら山のほとりに手をたゝけば淸水湧上り、此水を服すればいかな

る様願も霊驗などいひ出し、金澤の貴賤をはじめとして松任・本吉・小松、後には大聖寺邊其外浦々山々里々より樽を提、徳利を携て群り行事夥し。愛の座頭も目あきとなり、かしこの腰ぬけも此水を飲て今はしり歩行と、あら〳〵と云ふらし、百日ばかりは口々の往來蟻の行がごとし。間巷の辻々茶屋をかけなどして、酒と餅をならべ、不思議の賑ひなり。ばゞさどこへ行きやる三升樽提てばゞは手たゝき水汲にといふ小唄、三年ばかりもはやり謡へり。後聞けば世を欺く山師、此清水の側に小さき鳥居を立て、何の何某病氣に依て寄進奉納など、書きたるを見て、世の人騒を出せしなり。

今年九月十三日の[illegible]

天明四年

正月十六日。江戸下谷茅町の火災に加賀藩の足輕等町火消と爭鬪す。

〔政隣記〕

正月十六日夜江戸下谷茅町より出火、及大火、御居宅風下に而甚危く候處、一番火消永原清太夫・二番火消馬淵友之進御人數召連押出、消防仕申候。右に付御大小將御番頭青地七左衛門行御人數指添、御居宅に被遣之、火之粉等防被仰付。于時翌十七日、火事場見廻り役久永松五郎殿より聞番所に來り、則伴源太兵衛罷越候處、昨夜之火事烈火、殊に大火之處、御人數殊

之外之働見屆候間、加賀守樣江其旨申上候樣被仰聞候に付、源太兵衞罷歸、則右之趣達御聽候處、即日永原・馬淵を初惣御人數江、御前規之通を以生絹并金銀夫々以階級拜領物被仰付、久永殿より御申越之趣に付御喜悅之被仰出も有之候。將又同日町奉行中よりも聞番呼に來り、則高田新左衞門罷越候處、昨夜火事之節町火消江、此方樣御人數之內より手疵爲負候條、遂僉議相手指出候樣被仰渡有之に付、則御詮議有之候處、右火事之節此方樣之防場階子江町附與力登り候に付、足輕共咎候得共不聞入理不盡に乘候故、階子をはね返し落し候に付、右與力共儘足輕を令打擲、重而階子江登り候故、足輕共馳集り鳶口を以引下し、殊之外致打擲半死に相成。右之節鳶之者共は火防有之拘り不申、小者も同斷。大將永原・馬淵も右之躰見受不申候に付、罷歸候上不及言上にも段申上、其趣を以聞番より町御奉行中江達方有之候得共、左之通被召呼候に付、伴源太兵衞指添罷出候處、則左之通被仰渡。

召呼ばれたるは後文によれば廿二日なり

火消大將兩人共伴源太兵衞江御預

永原淸太夫

馬淵友之進

足輕小頭四人共同人江御預

小杉孫左衞門

鷲田市左衞門

吉岡作兵衞

宮川嶋左衛門

足輕　淺井惣助　永岡喜三太　永山吉平　大原作藏
細田平右衛門　坂本喜右衛門　林喜太夫　池尾軍平
小坂傳六　小川與左衛門　清水伊右衛門　堀田吉郎左衛門
藤澤傳右衛門　三宅與兵衛　豐嶋喜九郎　高桑源藏
西村喜左衛門　小山吉兵衛　廣岡彌左衛門　山本彌一兵衛
中村武左衛門　濱田吟左衛門　岡本安左衛門　由良圓平
津川市丞　蒲井清五右衛門　高桑與助　吉本理右衛門

御指留禁牢都合廿八人也。

〔政隣記〕

一、二月朔日重而町御奉行所に永原清太夫・馬淵友之進、足輕小頭小杉儀左衛門等四人御呼出之上、彼方に前月廿二日より被指留置候足輕淺井惣助等廿八人不殘被指出、手懸致打擲候儀可申出旨御吟味に而、廿八人共拷問（願出候、其上に徒黨之上ニ而重き者なる故ニ重く被成御答）之處、四人白狀に付、其四人（永山吉平・由良圓平・小山吉兵衛・山本彌一兵衛也）者御指留重而禁牢被仰付、殘り廿三人者御僉議濟御返。林喜太夫に急度御預に付、於御屋敷手鎖縮被仰付、足輕兩人宛勤番被仰付有之。永原・馬淵並足輕小頭四人

を、只今迄之通闕番ニ御預に而御返之事。但御返し有之候足輕共、何れも嚴敷拷問に合候に付、皆々筋骨を大に痛み候故、御外科今井元昌療治、其内之四人ハ肩骨顯れ碎、存命難計者も有之与云々。

一、同月五日永原・馬淵幷足輕小頭共、町御奉行所ニ御呼出有之候得共、奉行中御出無之、役人を以一通り御尋之趣有之御返之事。

一、同月十日永原・馬淵等町御奉行ニ御呼出し、去月十六日夜火事一件書付に調被差出、致判形候樣被仰渡、則致判形候上御返附。

前月廿二日以來町御奉行所与調候儀間違也。皆々評定所也。公邊御格は何奉行に而も評定所ニ出、其手之吟味等を致候事与云々。且前記十六日夜火事与有之候得共、夜に而ハ無之晝也。

一、前月十六日火事場に而打擲に合候與力、不埒之趣有之に付改易。

正月十八日。大聖寺詰の士の扶持方代等を増加支給することを定む。

〔政隣記〕

大聖寺ニ相詰候御歩並以上之人々、地廻御扶持方代に而ハ致不足候段、去年以來願之趣有之、其上炭・薪等去夏迄ハあなたより相渡候得共、是以後詰人より自分に買上候樣被申談候。

張之當分格別之闕を以、諸人一統御扶持方直段、右ニ付百四十目宛之闕を以御貸、尤宿賃銀ニ御渡被成間敷候。且又足輕・小者之分ニ宿賃銀等爲代、一日一匁四分宛可被相渡旨、爲豐御勝手方より御算用場ゟ被仰渡候段、今十八日夫々ゟ被仰渡有之

正月廿九日。御算用者坂井善太夫の子直三が先に町人と爭ひたる件に關し裁決す。

［御用雜記］

左之通可申渡哉之旨、正月廿九日伺之處、伺之通被仰出。此一件、前帳之御覆留帳より少々先相見え候得共不全候。

御算用場奉行ゟ

御算用者小頭坂井善太夫之せがれ　坂井直三

右直三儀、組外岩田平左衛門方ゟ岩田長三郎致同道、去々年二月十五日卯辰八幡へ致參詣候處、境内致群集、右場所に而申分致出來、小松屋仁右衛門と申者へ執付候付、引請自分に成敗仕度旨直三奉願旨善太夫書付、各證書を以被出之候。然處右一巻之者共於公事場遂吟味候處、畢竟及混雜候ニ仁右衛門に而ニ無之、卯辰月心寺門前に罷在候小松屋五右衛門と申者に而、當時與村主水小者吉藏と申者之段申出候付、畢竟直三手前相礼被申聞候樣申渡候處、

今般於公事場吟味之上、本人吉藏与申者之由申顯候上は、仁右衞門同樣に成敗相願申渡候得共、其場を立退、追而公事場吟味之者に候へば、成敗奉願候儀も如何敷候に付、仁右衞門迄成敗奉願旨、直三書付添書を以重而被出之候。先以八幡境内致群集候はゞ、相扣可申儀心得も可有之處、其儀無之者不心得之至。其上右取捌手ぬるく相聞え候。依之願之筋は御聞屆難被成候。尤以後之儀急度相心得候樣可被申渡候。且又直三儀御貪着には不被及候得共、善太夫名跡相願候存寄に候はゞ、其儀は相扣候樣善太夫へ可被申渡候。將又右仁右衞門等兩人は不屆之致形に付、永牢被仰付候事。

疫病のことは本年四月の條參照

正月。金澤に於ける米價大に騰貴す。

〔政隣記〕

正月晦日、金澤ゝ去年凶作に付、春來米價段々高貴、頃日者地米石に付九十目餘、遠所米准之。

〔舊　記〕

天明四年、前年不作に付、米穀春に至り段々高直に相成、米一石に付文丁銀百目、麥一石錢六貫文、稗一石四貫四百文相成、錢百目に付代十貫五十文位。如此諸物高直相成、飢饉無此上、山々餓死甚多く、且又去秋より當六月迄疫病大きにはやり、金澤笠舞非人御小屋・公事場罪人共多病死致し、其外在々所々疫病はやり、寺井組粟生村等男女五十人計致病死申候。

依之許邪丸与申丸藥、御上表より諸郡在々行被爲下候事。

〔萬　記〕

天明四年正月より、小松町御奉行江守助左衛門様御才覺を以、小賣米數ヶ所被仰付、同御郡方に而者、金平村・中村・寺井村此三ヶ所に而、小賣米一升に付九十三文宛に賣申候。右之趣御郡御奉行小寺武兵衛様・成田十郎左衛門様より被仰渡候事。

〔老翁雜記〕

一、天明三年七月已來雨天、氣色涼敷、五穀并地に付申、品不出來、米高直、末々困窮。翌年春に至而米拂底一石八十目餘、閏正月上旬頃一升九十二文替、二月・三月頃より末九十八文替、翌四年三月御下行御召米に相成。直段小松八十五匁五分、本吉八十一匁五分、平均八十三匁五分替、五月三の一、七月三の一、殘銀九月二十二日相渡る。

翌四年本のまゝ

閏正月三日。徳川家治、前田治脩及び重教に鶴を贈る。

〔政隣記〕

閏正月三日、於江戸上使御使番岡部大膳殿を以、御鷹之鶴御兩殿様御拜領。

閏正月五日。前田重教、治脩の婚禮を封國に於いて擧ぐるの許可を得んことを議す。

御末家は大聖寺藩

〔袖裏雜記〕

閏正月五日、圭水 圖書中將樣御前へ被召、加賀守樣御婚禮今以不被整候。別御殿も不被仰付候半而は不被爲成御事に候。當時之御勝手之御樣子に而者、中々左樣之所へは迚至も申間敷候。さすればいつと申期も無之候間、各初可爲當惑被思召候。依之御心付被遊候者、於御國御婚禮与申儀は不被爲成公儀御格に候得共、只今も松平筑前守殿・喜連川左兵衛督殿には御在所に而婚姻に候得共、筑前守殿者各別之譯、喜連川殿には御府内同樣之場所に付難被引用に候。然共只今者公邊も以前与違ひ、被仰達にもより前不相成事も致出來候事ども、有之候。御末家之事、其上御同國之事に候得者譯も違候間、田沼殿抔ゟ内々被仰込、俊姫樣御儀金澤へ御引移、御婚禮御整被成候樣御座候得ば、御一段に被思召候。各初了簡も有之間敷哉と御意に付、先以私共聊心付不申儀に御座候。被爲成候御儀にて御座候得者、恐悦之儀奉存候。此儀に付而者、安房守初別存は有御座間敷儀に奉存旨御請申上候處、左候はゞ御内々可被仰込候間、其趣相心得各へ可申遣旨御意に付、奉畏候旨申上候。右之趣加賀守樣奉達御内聽候上、今村五郎兵衛へ内密至極に申聞、とくと致工夫候上、夫々御内々申込候樣申渡候。將又於江戸表婚禮と申儀者、人質之代りにて御定法に候へ者、六ヶ敷可有之事に御座候。畢竟御末家其上御同國之事に付、先中將樣ゟ御引取置、追而御出府之上御婚禮御整被成候思召

天明三年二月十七日の條参照

之旨、無念度御届難成候趣に相成候はゞ、結局物事大造に無之可宜事とて、其趣も五郎兵衛へ申聞候處、右之通に候はゞ却而事軽く可相聞哉とも奉存候。とくと思慮仕候上尚更可申聞旨申候由、閏正月五日之日附主水等より安房守等へ申越。

閏正月十一日。前田重教先に近習使番駒井平學に流刑を宣告せるも之を免除す。

〔袖裏雜記〕

駒井平學流刑御免等之儀、段々被仰出之趣有之に付、申渡左之通閏正月廿日伺之處、伺之通被仰出候旨正月晦日返書。

中將様御近習御使番　駒井平學

中川八郎右衛門より

平學儀不届至極之趣有之流刑被仰付候旨被仰出、先達而申渡置候。然處實父佐々木孫兵衛儀、御近邊重き御役儀被仰付置候處、勤方神妙に被思召候。依之平學儀流刑御宥免、知行百五十石被下之、組外に被仰付候。此段可申渡旨從中將様被仰達候條、可被申渡候事。

右之通結構に被仰出候間、自今急度相慎御奉公相勤候儀肝要之事候條、此段も可被申聞候事。

月　日

御横目に

中將様御近習御使番駒井平學儀、不屆至極之趣有之、流刑被仰付候旨被仰出、先達而申渡置候。然處今日中川八郎右衞門於宅申渡候趣有之候。右申渡之節各内一人八郎右衞門宅へ被罷越、立會可被申候。猶更八郎右衞門可被申談候事。

月　日

組外御番頭に

一、百五十石　　駒井平學

右平學儀流刑御容免、右之通御知行被下、組外に被仰付候趣等、今日於中川八郎右衞門宅申渡候、各可有支配候。且又御禮之儀、新知被下候通候間、其心得候様可被申渡候事。

甲辰月　日

〔政隣記〕

閏正月十二日、左之通。但昨十一日被仰渡。

駒井平學

去春流刑与被仰付置候得共、其段御免、新知百五十石被下之、組外に被加之候段被仰出。

閏正月十九日。前田重教歸國の暇を受く。

美濃守は前田利物の御伯母は妹の誤
俊姫は當時耕姫なるべし

〔御年譜〕

一、中將樣ゟ御國御暇之上使御奏者坂倉伊勢守殿、閏正月十九日御出。同二十二日右御禮御勤成。

閏正月廿七日。大小將吉田彦兵衞江戸に於いて火災見分に出張し落馬負傷す。

〔政隣記〕

閏正月廿七日於江戸、晩天赤坂邊火事に付、御大小將吉田彦兵衞爲御使番代早出、火本見に罷越候處、和田倉御門之内御堀際に而致落馬、額より頭ゟ懸餘程強疵之、馬は御堀ゟ落候に付、公儀御役人立合にて引揚之。土井大炊頭殿御家來等之外彼是介抱、尤駕籠に而歸。其所療養之處追日小快。

閏正月廿七日。前田治脩の婚約せる大聖寺侯前田利道の女俊姫を金澤に移さんことを請うて許さる。

〔三守御譜〕

天明四甲辰年閏正月廿七日、美濃守樣御伯母俊姫君御事御縁組之儀、明和八年御願被成候處、

其御願之通被仰出。然所御國許重教公御居所へ御引取置、追て江戸表にて御婚姻御整被成度段、廿五日御願書被指出候處、廿七日可爲御願之通旨、御付札を以被仰渡、翌廿八日爲御禮老中御廻勤被遊。

閏正月。物價高直なるを以て江戸詰の士を減員す。

〔政隣記〕

御上御勝手御難澁之上、去年以來米等江戸表及拂底、諸物高直至極に付、詰人御減少、組頭並御近習御用志村五郎左衛門、御鑓奉行御近習頭有澤才右衛門、御先手物頭羽田源太夫御國に之御暇被下、表向御先手物頭芝山十郎左衛門詰滿御暇被下、代人不被仰渡。右人々今月十五日・六日に追々金澤歸着。右に付多田逸角御近習迄相勤、江守平馬一人に而御客方等勤候様被仰渡有之。

今月は閏正月

閏正月。江戸より歸國する者の土産物を齎すを禁ず。

〔袖裏雜記〕

從前々江戸御供等に罷越候人々へ致餞別、又は罷歸候節土産物無用に可仕旨被仰出、夫々申渡有之候。右之通には候得ども、親類等至而身近き者、或は他門たり共至而懇意成面々には、無味に打過候儀も致しかね候故、内分にて餞送等も仕、罷歸候節も右之首尾故無味成儀と相

成候に付、相違に土產之品持參相贈候躰に相聞え候。然處自他一統勝手難澁之時節、其土產年頃來ゟ高直、當時者尙更高貴平倫に相成、何も難澁千萬に候。然者中ゟ土產物杯買求候所詮ゟは行屆不申事に候得共、金澤表發足之節、前段之通內分にて相應に指遣等候人々も可有之事に候得者、無味に及沙汰不申儀者如何敷ニ存候而、其心得致候面々有之間敷哉も難計候條、御歸國御供人者勿論之儀、常交代等にて罷歸候面々も、土產等致持參之儀堅無用いたし候樣可申渡旨被仰出候。如此被仰出候上、萬一にも爭而內分杯に申立、買求等いたし相贈候人々有之候段相聞候はゞ、急度御咎可被成候。尤致受用候面々も同樣に候。此段嚴重に申渡、尤金澤表ゟも申遣、一段嚴重に申渡有之候樣可申遣旨も被仰出候付、其段年寄中へ申遣候事。

右之通今般は各別之被仰出に候。若々兼而土產物之心當にて、只今迄相求置候品々杯も有之間敷事にも無之候。左樣之心當有之候共堅相贈候儀指止可申候。身近き親類・緣者にもとも、勿論右之沙汰に及申間敷候。尤自今以後右之趣に相心得、聊之費用等も無之樣可被相心得候。且又前々ゟ細書共御供にて罷歸候節、數千代樣本初輕く土產之品致獻上候得共、以後指止可申旨今般自御兩殿樣被仰出、則指止候事。

右之趣各被得其意、組・支配之人々ゟも嚴重可被申渡候。組等之內其許有之面々者、其支配

へも不相渡様可申聞旨可被申談候事。

閏正月

〔袖裏雑記〕

被仰出有之、左之通夫々觸出。

江戸表より御供等に而罷歸り候人々、土産物等堅指止可申旨被仰出之趣、別紙之通於江戸一統被仰渡候條、於此表も右之通嚴重に相心得、尤以後交代等に而罷歸候人々ゟ餞別として贈物者申に不及、盃事抔に事寄、親類・縁者たりとも相招候儀堅指止可申候。以後聊無違亂急度相心得候様可申渡旨被仰出候條、可被得其意候。則於江戸表被仰渡候寫相渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも不相渡様被申渡、尤同役中可有傳達候事。

二月三日　　前田大炊

閏正月。凶年に處する爲御郡所より煎粉の製法を示す。

〔筒井舊記〕

一、一升　こぬか　一、一升　下籾　〆　但上煎粉

一、三升　ぬか　一、五合　こぬか　一、一合大豆　〆　但中煎粉

一、四升　ぬか　一、一合　大豆　〆　但下煎粉

一、五升　ぬか　一、一升　こぬか　一、五合　ひえ　一、二合　大豆　〆　但同断

此分右各粉にして二升出來可仕事。

辰閏正月

去年凶作に付、御領國一統給物拾之及飢可申躰に付、若々飢を凌可申便りとも可相成哉与心付に而、別紙御郡所より御渡に付、爲相廻申候。夫々御寫取、役人中へ御申聞御尤に御座候、以上。

二月四日　三右衛門

閏正月。百姓等飢饉に瀕する者の互助を命ず。

〔司農典〕

諸郡より乞食躰之者、去暮以來非人小屋に罷越候者多有之由に候。去作不熟米穀拂底故、無死にも及申程之躰に付、右之通り相聞え候。右躰之者共有之候はゞ、村役人手前に而承糺、抜詐十村ゟ相糺、其上に而其者之親類者不及申に、其外之者共も申合候而、少々宛成共爲給續候樣可取計候。去冬已來御郡方より非人小屋へ入候者共、寒疫に而死候者多有之候由。左候得者不便之至、殊一人命に懸り申儀大切至極之儀に候間、何分麦作出來迄幾重にも爲取續、

右之族にあひ不申樣取計專要に候事。

辰閏正月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月七日。金澤に於いて諸士に前田重教が歸國を請ひて許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

二月七日、一昨日御用番大炊殿依御廻文、今朝頭分以上布上下着用登城、於柳之御間御年寄衆等御列座、大炊殿左之通御演述。依之爲恐悦、登城之人々御用番御宅江參出。

中將樣御痛所爲御保養、御國許温泉江御入湯之儀御願被成候處、前月十九日上使御奏者番板倉伊勢守殿を以、御願之通被仰出。且又依御奉書、同廿二日御登城被成候處、於御黑書院御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、其上御馬御拜領被成、重疊難有御仕合思召候。此段何茂江可申聞旨、從御兩殿樣被仰出候事。

二月七日

二月八日。前田治脩の婚約せる大聖寺侯前田利道の女俊姫が金澤に移る

利謙は後嗣の病弟治中務輔は藩の

ことの許可を得たる報金澤に達す。

〔政隣記〕

二月八日、加賀守様御養女利謙様（重教三寸様御件、當時某寺に而被召置候）金澤表ゟ御引取、御婚禮御整、中將様御對顔、並前田府藏殿候様被遊度旨、從中將様御斷之通被仰出。依之爲御禮御登城、御側勤も被遊候由江戸より申來候事。

二月九日。前田重教江戸羅漢寺筋に散策す。

〔政隣記〕

二月九日六半時御供揃に而、爲御行歩中將様羅漢寺筋ゟ被爲入、所々御覽見。御歸御途中に於而俄に被仰出、新吉原ゟ被爲入、大門先に而御下乘、廓中御歩行に而御巡見、九時頃御歸殿。

附、朝之内故に被爲入候事故、廓内之者共中將様と者不心付、御歸後初而承知候由云々。

〔續東雜記〕

自先年江戸に而名ある所々之氣色等參見候。昨日は聖堂、今日は五百羅漢・本庄邊・よし原よりも致巡見候。あの邊しまらく有之候得共、就中吉原甚賑やかなる處にて、當家においては

侍は云に不迨、下々に至迄可參所とは不存候旨等。且又家中之者共かの所へ參、淫なること無様彌以可被相心得之旨、二月十一日從中將樣以御親翰被仰出。

二月十四日。去年引免の爲不足したる家中の知行に對する償米を本年の新穀にて支給すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十五日、昨十四日御勝手方前田土佐守殿被仰渡候由、御算用場より左之廻狀出。

御家中知行當り候去作引免、能・越之分御藏米を以可被返下候處、引免幷御借米・當春夫銀米等莫大之御損毛に相成、御藏入米無數、右御引足米之御手當無之候。依之無是非當新穀を以可被返下筈に候。併當時譯付不申而は、先達而侍中賣出置候拂米切手通用留り、町・在用米之通用不足に付、御切手出來次第相渡、當新穀を以可渡譯切手に致附札相渡申筈に候。御米藏出之儀は、當十月以後受取に向候樣可被心得候。侍中手廻によかり、去收納未拂不申人々は、此度相渡候切手、當時賣出候儀勝手次第に候事。

二月十五日。江戸に於ける諸士の行狀に關して諭す。

〔政隣記〕

二月十五日左之趣御用番大炊殿當御留守詰頭ゟ被仰渡、夫々觸有之。

於江戸表一統重服着用、其外無用之參會相止、萬端省略候樣近年段々被仰出候得共、自然与相ゆるみ候躰相聞へ候。當御留守中猶更嚴重御小屋容躰費無之樣可相心得候。江戸表ゟ召連候家來給祿も御定之通に可仕候。江戸にて家來召抱等、猥而不相應成儀無之樣、且又主人當番等之節御小屋ゟ不埒樣、面々之通可申渡候。尤內外廻足輕繁々相廻、右之類有之候者相咎、品により無會釋押込召捕等に候。將又家來共江戸ニ而致入代、幾年も相詰罷在者有之由。勝手次第成儀、畢竟御締方之ゆるみに相成候間、以來右之族候者、御場奉行より相糺候筈之事。

二月十七日、米價高直なるを以て諸士の食料に注意すべきことを諭す。

〔御觸留〕

去年御領國作毛至極に付、米直段過分に高直、其上新發田來迄三州之用米指支候躰に付、當座町在一統ゟ別紙覺書寫之通申渡候。先達而も申渡置通、加樣之年柄ニ御家中之人々も心得も可有之事に付、猶又右覺書寫相渡し候。右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配ゟも相達候樣に被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通可被得其意候、以上。

二月十七日　　　前田大炊

去年御領國往古より無之凶作至極に而、御領國用米不足之闘り付、當秋新穀出來迄取續之儀、夫々遂僉議候處、元來出來高過分に致不足より、暨他國茂不作故米高直至極に候得者、他國より入米茂容易に不致出來候。右之趣に付、町家之者共一統粥を給候樣去年十一月中渡候。然處春に至猶更米高直、第一用米指支之躰に候間、油斷は無之事に候得共、猶更一統申合、成限粥・雜水抔を給取續可申候。右之通米直段高直至極に候得者、輕き者共之内雜水茂給兼候程にもいごとも可致出來事候間、ヶ樣之年柄者人々勘辨いたし、平生のごとく相應に暮し候者茂、致難儀候もの同樣に食物勘略致し、其餘慶を米所持無之もの共江品能相對を以貸渡候か、又者賣渡し可申候。尤飯米等餘慶致所持候ものは、勿論右之通り心得候而、何とぞ末々輕者に至迄、隨分相互申談致介抱、新穀出來迄取續候樣可致候。

一、御郡方之儀者、平生粥・雜水等給申儀は勿論之事に候得共、ヶ樣之年柄は猶更冥加之程を可恐事に候。年之廻りに而豐年・凶年有之事に候得者、自然我村凶年之わざはひに逢候時者、他村之合力を請取續べし。此度他をおろそかにしては、我難儀之時他村之合力疎略なるべし。大凶年に者三州一同之持合になくては取續難成儀故、此所能々相心得、十村・村役人等致世話、村中に而少々充茂給出し候分を、難儀之村江品能相對を以貸付候歟、又者賣拂候樣

相互に申談、聞糺を遂取計候樣可心得候。

右之趣町・在一統嚴重可被相觸候。若難澁之者共ゟ合力杯などゝ申候もの有之候ハヽ、町役人・十村等隨分無油斷遂吟味、其段役日に支配々々及斷候樣、是又可被申渡事。

甲辰二月

二月廿三日。金澤に於いて米價高直の際特に諸士の行裝を簡易にすべきを諭す。

〔政隣記〕

二月廿三日、當時米高直、一統諸人難澁至極に付、別而御使に罷出候人々者彼是指支申儀に候。依之於高直之内ハ、各たりとも其先供先著召連候中間敷候。笠籠も一つ爲持、其外も准じ省略可有之候。聊大小將之內小身之面々は、若黨・鎗・挾箱・草履取・笠籠迄爲持、近き所ハ天氣次第笠籠も止メ、乘馬も遠方ハ格別、近き所ハ先ハ止候樣可被申談候。當時者定に難儀之米等高直に付、各別之趣を以右之通達御內意候上申談候。尤以來此段押移儀に而者無之、定に當分之儀に候旨等、去る正月於江戸主水殿より組頭ゟ被仰渡、夫々傳達等有之。於金澤も御用番大炊殿より、今日定番頭ゟ御壁書御渡、夫々傳達廻狀出。

番士定番頭といふ

二月晦日。頭分以上の士に藩の財政窮乏の狀を告ぐ。

頭分は大番以上

二月晦日、組等有之頭分以上ゟ被仰談儀有之由、前田御用番大炊殿依御紙面、各四時過登城之處、左之覺書御渡之。但一役御用番迄御呼出に而、夫より同役演達被仰談候事。

近年御勝手別而御難澁至極之處、去年御領國凶作に付、御郡方引免幷御貸米・御拂米、當春夫食銀等、彼是莫大之事に而、御收納米不納に相成、三州用米不足之處、如何共取捌方無之旨等御算用場奉行申聞候に付、用米之儀者別而品重き事故、種々遂詮議候事。

一、御兩殿樣御歸國御入用、曁御平生方御仕送り等之儀、種々僉議仕候處、去年凶作に付町・在共米銀不通用至極、就中去年御收納米を以御借銀引當米幷御拂米等、御算用場印之切手都而御借米に被仰渡候に付、調達方不辨至極に相成、迚先納近年之振に者出來難仕、曁當分調達銀者尚更相調不申。然者御歸國御入用を初、御平生方御仕送手段盡果候に付、於江戸表二萬兩計調達取組候樣仕度段、土佐守等ゟ相達置候。假令右高相調候而も、御歸國御入用等指支可申儀に付、年寄中初御家中一統、分限相應に銀子上納有之樣にも仕度旨等、段々御算用場奉行了簡之趣申聞候。御家中より上納之儀、年寄中に者假令幾重に致し候而成共、知行高に應じ少々宛致上納間敷物に而も無之候得共、大抵高之相知申儀に而、行屆申事に而者無之候。御家中一統者、當時諸物も過分高直、彼是甚難澁之時節、其上去秋火災之面々段々顯も

有之候得共、其之御醫論に付御救も無之候得共、人々是非もなく取繕罷在事に候。左様之處行、少分宛にても上納銀有之様申渡候儀者難相成候間、何卒於江戸表に御才覺相調候様いたし度候。萬一調達不致出來時者、乍恐千萬御發言御延引可被遊より外は無之旨等、委曲先達而江戸表わ申上候。

右之通に而、是迄御勝手御難澁等申儀者數年之事に候得共、當時俄に危御勝手向に相成、揺者共も甚致辛勞候事に候。々様御難澁之趣、表向之而々も承知無之候而者相濟不申儀、何歟心得も可有之事に付、此段申聞置候事。

二月

右組・支配台之願出者尤無之候也。

二月晦日、御馬廻組立川金丞、亡父の二十ヶ年前に於ける罪狀露顯したるを以て逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月晦日左之通被仰付。

逼塞　　御馬廻組當時土橋御門番人　立川金丞

右亡父立川兵太夫改作奉行在勤之内、於大坂表私曲有之儀今般露顯に付、右之通せられ金丞

御答被仰付。二十ヶ年餘以前之事与云々。右同趣に、御算用者九人も逼塞被仰付。

二月。諸士の儉約等に關する前令に違失すべからざることを告ぐ。

〔典制彙纂〕

御家中之人々儉約等之儀、前々より度々被仰出、就中近年茂嚴敷被仰出有之候所、自然与相怠み、衣類等も近く猥に相成候躰、暨組入・番入等之振舞、幷無用之參會、且音信・贈答茂相止不申躰に相聞に候。畢竟人々心得等閑故に候間、近年被仰出候通猶更無違失、嚴重可被相心得候。

右之趣被得其意、組・支配之面々に茂――同役中可有傳達候事。

二　月

三月六日。能登奥郡破損舟裁許の職務を明年以降宇出津山奉行に兼ねしむべきことを定む。

〔袖裏雜記〕

能州奥郡破損舟裁許兩人、前々御當地より罷越候。右は御城米船難船有之節、爲取捌被遣置候得共、全取捌申に而は無之、難船有之候得は右破損舟裁許罷出取捌、御當地へ申越候而、

能州御郡奉行罷越候上引渡申樣子に候。且又右破損舟裁許は、二百十日立候得ば九月に至罷歸候。其跡に難破有之候得ば、宇出津山奉行等取捌候間、右山奉行等裁許、早速御郡奉行へ申越候得ば、つかへ申儀有之間敷候間、破損舟裁許二相止可然と二月廿五日伺之處、前々より破損舟裁許被遣候は樣子も無之哉、御算用場に舊記も無之哉之御尋。則相糺候處、何之儀も見當不申由故、其段申上候處、當分右山奉行より兼候趣可申渡旨、三月二日被仰出候得共、今年は先達而右御用兩人申渡、用意も仕候事故、やはり被遣、來年より當分山奉行より可然と重而伺之處、三月六日伺之通被仰出。

缺字は鳥居丹波守なり

三月六日。前田重教江戸を發して歸國の途に上る。

〔御年譜〕

一、中將樣三月六日江戸御發駕、同十五日御歸殿。但高田驛より御指急。

三月十三日。前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中水野出羽守殿を以、御國許之御暇被仰、御例之通御拜領物。從西丸も上使□殿を以御例之通御拜領物。且前日依御達に、同十五日御登城於御黑書院御暇之御禮被仰上、御懇之上意、御鷹・御馬御拜領、本多刑部・前田圖書御目見等被仰付。且當

月十九日江戸御發駕、三月朔日金澤御歸城之筈之旨、追々江戸より申來候事。

三月朔日は四月の誤

三月十五日。前田治脩登營して就封の辭見す。

〔徳川實紀〕

三月十五日、松平加賀守治脩・大久保加賀守忠顯就封のいとまたまふ。

三月十五日。前田重教金澤に着す。

〔政隣記〕

三月十五日夜九時頃中將樣金谷ゟ御歸殿。昨十四日夜滑川驛御泊より直々御歸着也。且江戸表ゟ爲御禮被指出候御使、人持組前田權佐御目見被仰付。二之御丸於御用番席紗綾一卷・御羽織拜領、披露御大小將。將又御着に付、此間迄に廻狀出候御横目竝諸頭等御待請に罷出、爲恐悅二之御丸ゟ翌十六日登城も、前々之通に付留略之。

附、去六日江戸御發駕之御飛脚同十三日到着、甲州路ゟ御廻り道も有之候へ共、御急に而當十七日御歸着之御聞り与申來候處、昨十四日從御旅中之御飛脚到着、十六日御歸与被仰出候段申來、重而同夜御飛脚到着、今十五日御着与被仰出候由申來、過急に相成、金谷御殿着不及申に、諸向大騷動也。佐々木孫兵衛早打に而御先ゟ歸候樣昨夜御仰出、昨夜九つ時滑川驛發出、今晝九時前金谷御殿ゟ到着。御宿拵幷宿割御大小將丹羽六郎左衛門・山口

小左衛門今晝過歸着。

中將様御旅行越後高田より直に越中境迄被爲入、同所に而御供人御待合せ、夫より直に滑川迄被爲入、同驛今晩七時前御着被遊、御途中に而御放鷹。右之通高田以來御急之御旅行に付、御供人夥之下り候者夥敷有之。別而足輕共之内に者勞れ、御供仕得不申者多く有之、滑川より今日俄に御迎今暮頃發足之事。

一、高田迄被爲入候内、甲州路御廻り道等に而二日之御逗留有之。

〔天明四歲日記帳之内舊記目錄〕

一、月十四日暮行中將様ニ御着之日圓之處、俄に越後高田より御急に而、十二日ニ御着に相成、御側御人數僅七・八人許にて御着、残ニ御人數は天近追々來る。夫より魚津御泊之所俄に滑川に成、滑川御着之上追付御供揃有之、夜通金澤迄被爲入候事。

滑川は越中新川郡

三月十六日。前田重教今日以後大に騎射を行ふ。

四月五日に政隣記記載の日附

〔政隣記〕

四月五日。中將様御歸邑翌日より、天氣宜候得者毎日或者朝夕、堂形御馬場江御出御騎射被遊、御近邊等江も被仰付、加賀守様にも毎日一度宛御出、御騎射被遊候様被仰進。

但、御大小將之内右屋也一・野村傳兵衛・戸田五左衛門等、御相乘并騎射被仰付、毎日罷出

に付、二御丸御番御用引に而御馬場御用而已相勤。三人共最前御近習相勤候人々也。右之外無息之面々にも、右為御用毎日罷出候人々有之、渡邊源蔵嫡子與一郎・次男門之助等也。

〔政隣記〕

三月廿六日、御前様附物頭並河村儀右衛門儀、昨廿五日從江戸歸着之處、今日騎射被仰付落馬手を甚痛、翌廿七日湯涌村入湯。金谷御近習御使番關屋一右衛門も、騎射にて落馬肩骨を强痛、同所ゑ入湯。其外騎射に而落馬之人々一兩日數多有之。御馬共勞れ候故与云々。

三月十八日。横地理左衛門等酒宴に招かれ亂行したるを以て閉門を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

被仰出之趣有之、先例的當不見當、後藤常右衛門等を引、此度理左衛門等三人之者共不埒至極、同組を引損候仕形に候へば、以後之御縮方にも候間、三人共閉門可被仰付哉といひ伺二月廿七日之處、伺之通三月十八日被仰出候也。

武田喜左衛門ゑ

二百石　廿五歳　横地理左衛門

二百石　廿四歳　永原貞五郎

百五十石　卅八歳　津田吉兵衛

右三人之者共、去年十一月廿七日神尾源一郎宅へ仲間共相招饗應罷越、源一郎と彼是及口論、其上料理等差出候得に、家具等投打、亂行之躰尾籠之致方、不届至極に付閉門被仰付。右三人之外永井兵一郎・林逸左衛門・杉本猪左衛門・原源太兵衛・不破宗助・中村喜平太も、同日源一郎方へ罷越、口論亂行に付、一旦は宥候躰に候得共等閑にいたし、且露顯事支て差出候様子不埒に付、遠慮可被仰付哉。源一郎も宿いたし、右之族に付是又遠慮之伺に候得共、元來此一件頭より言上有之に付、御尋有之、重而御請有之。且又前段三人之外には御吟味御座候様相聞、且外之者は口論等隨分制候様子に付、三人之外は御宥有之無之、頭より申上候紙面にし、三人之外以来慎等之儀は急度可申渡旨等申上。亂行に而損候品々も書上、其品に障子・唐紙・疊・掛物・御硯箱・盛物枝・赤繪猪口・染付猪口・指身皿・見壷・茶椀・絹手掛など、盤等は小刀等にて切ちき候躰に見候由、喜左衛門より申上。此一件御横目等之言上もこれあり。前後事長し、爰に略記す。

絹手掛本のまゝ

三月十九日、前田治脩江戸を發して就封の途に上る。

〔三壺御譜〕

三月十九日江戸御發駕、四月朔日金澤御着城。御供前田圖書。

三月廿九日。前田重教金澤郊外大豆田に放鷹す。

〔政隣記〕

三月廿九日九半時御供揃に而、豆田口筋に中將樣今度御歸後初而御放鷹、御先角者御大小將より被召連、其外御籠廻御近習、御餌柄鶴三・水鷄二。

但、此以後も御出毎度也。相替儀無御座節は記略す。

三月。能登に於ける幕府領の百姓に夫食に當つる爲救助金を與ふ。

〔政隣記〕

三月、去年御領三州共八十ヶ年以來無之凶作与云々。諸國共大槪同斷。公邊御不納も夥敷事与云々。

今月上旬以來、公領百姓夫食金御渡之處、正月・閏正月・二ヶ月分十三萬兩餘、二月・今月之二ヶ月分も右同斷。右金高に而も一人米三勺之割也。當秋新米出來迄は、右之通御救金被下候箬与云々。

四月朔日。前田治脩金澤に歸着す。

〔政隣記〕

四月朔日・昨夜高岡御泊之處、同晩六半時御發駕、今朔日四半時頃御歸城。御作法都而兩々之通り。御歸國御禮御使人前田兵庫、御目見以後於御席紗綾二卷・御羽織一被下之、追付發足。且穀千代樣御式臺階上迄御出迎。

四月朔日。前田重教近習の士をして騎射を行はしむ。

〔政隣記〕

四月二日

一、昨朔日御歸城後、無程從中將樣被仰進候に付、亀形御馬場ゟ御出騎射御覽、暮頃二御丸ゟ御歸殿。

但、御近習之面々騎射等に被仰付。三十騎。

四月九日。定番御徒藤江通太夫金谷御殿に於いて急死す。

〔政隣記〕

四月九日夜、金谷御殿於御次、御居間方定番御徒藤江通太夫變死之處、表向檢使無之、金谷御殿切に而相濟。宅ゟ嫡出大切に候體、親類迎指越樣申來、則遣候處、相果居候由也。自害共雜説區々也。元來御居間方坊主候處、去年組替被仰付。宅は淺野川御藏附持方組屋敷之內也。

四月十五日。前田重教堂形馬場に於いて五十騎の騎射を行はしむ。

〔政隣記〕

四月十五日夕方堂形於御馬場五十騎騎射被仰付、人持組中・組頭中見物被仰付。右相濟、於金谷御殿中將樣歌占御能被遊、右人々ゟ拜見被仰付。且御大小將菊池九右衞門持馬、先日以來度々御馬場ゟ出之、中將樣御鞍下に相成候に付、右馬持主爲罷出候樣被仰出。九右衞門ゟ右騎射・御能拜見被仰付。于時翌十六日中將樣、右馬應御意御乘込被遊候間、每日朝夕御馬場ゟ出し候樣被仰出有之。

四月廿七日。能美郡小松に於いて磔刑を行ふ。

〔小松舊記〕

當月廿七日小松町端磔之御刑法者有之筈に候間、私支配所上下之內町端に而御刑法可被仰付場所有之候哉、內分遂詮議其樣子御達可申、尤右之趣御內分を以被仰越候旨、當十三日御紙面之趣承知仕、則夫々詮議仕候處、私支配之內兩町端に前々より御刑法被仰付候場所亦及不申由。

微妙院樣小松御在世之時分、同所御馬廻宮部彌三右衞門下女、御郡奉行支配須天村・今江村間に而御刑法被仰付候由。其後元祿十年六月、私支配所小松八日市町蛭川屋久次与申者徒者に

相極、於公事場斷罪被仰付候上、小松上口町端私支配所より六・七町末須天村・今江村間に而梟首被仰付候。右增役所留帳相見合候得共、委細之儀者相知不申候。其節小松より下口に者爲懸不申様、其御場より申來候躰に相聞申候。上口町端之儀者山王社有之、夫より二・三町末八幡社有之、五・六町之間双方御田地畠に而御座候。下口町端者御郡奉行支配に而、粟生通之道脇に双方田に而、往還之道脇者天滿宮御社近邊に御座候。右之趣故須天村・今江村之間に而御刑法被仰付候。右兩村共御郡奉行支配境に而御座候。右之外近來小松町近邊に而御刑罰被仰付候様承及不申旨、役人共申聞候。右爲御報如斯御座候、以上。

四月十五日　　江守助右衛門

前田數馬様

來る廿七日於小松御刑法者一人有之、同廿六日發足申渡、同役能美郡寺井村に致止宿等に候之條、御自分支配所不指支様可被申渡候。且又右御刑法之節、往還之者共見物に罷出候様可被申渡候、以上。

辰四月廿一日　　前田數馬

江守助左衛門殿

四月廿八日。來月朔日以後前田齊廣の爲に建つる幟の觀覽を許すへきこ

自分は津田政隣

とを告ぐ。

〔政隣記〕

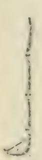
四月廿八日、來月朔日より五日迄七十間御門内に龜萬千殿御いぼり建候條、男子は十五歳以下、女子者大人共拜見勝手次第之旨等、御横目廻狀出。去年今日記同斷に付略。

〔政隣記〕

五月五日自分儀今日着到當番に而、七十間御門内通行に付、龜萬千殿御のぼり拜見す。兜十二刎。出し幟り、金紙折鶴・五葉橘・打出之小槌也。

四月。前田重敎近侍の士をして打毬を試みしむ。

〔政隣記〕

四月廿八日。今月中旬以來中將樣御近邊等に打毬被仰付。是馬場に毬門竹に而假に建。を建、三十間計此方に馬上二騎乘並び、右之方地上に紅与白と之毬を置、尤二毬之内一色宛分け置也。兎增如此。毬杖に而轉ばし、何れにも先に毬門に入し者勝也。迫合甚烈敷物也。本法十騎、夫より二騎迄段々有。尤毬數者人數に應ずる也。委曲は不能毫末。毬杖は丸打長き五尺の先に竹也 苧繩也附記、帶佩是當て字也。帶佩之字小笠原館次郎殿・小笠原平兵衛殿兩家に而一子相傳也。依而致稽古候人々は、たいはい与假名にて書事也。

箱記打建中將様被建、非御近習向のも被仰付、表向之人々も追々拜見被仰付。

四月。是月以降領内に疫病大に流行す。

〔政隣記〕

今月中旬以來世上病人多し。多分疫・痢之二病也。金谷御表小將御番頭坂井要人、御大小將高山金所之助・河村善七郎等追々病死。皆右病也。

〔加藤氏日記〕

當年諸郡疫病はやり申に付、則藥方御改作所より御渡に付寫仕指進申候。別紙藥方御書立之通相調、細末にして五粒程づゝ服し候得者、疫病うつり不申。尤疫病人介抱仕罷在候面もうつり不申旨に御座候間、夫々藥種相調、右丸藥いたし相用候樣被仰渡候間、夫々御申渡可被成候。尤にしきゞと申藥種は、山にも在之木候間、則右見本御渡に付指進申候。此等山に有之候はゞ取、壇前に成其植置候得者、はやり病請申間敷とのよし被仰渡候間、左様思召夫々御申渡可被成候。以上。

辰五月十日　　　　　　　　　番代　傳兵衛

何田寛所

追而申上候。右丸藥御當地調合いたし有之處に、材木町柄崎屋与申藥種屋に調合仕候間、御

入用御座候はゞ此方ゟ御調に御越可被遊候、以上。

雲間李土村先生傳

雄黄一両 丹參二両 赤小豆二両 鬼箭羽二両（一名衛矛、和名にしきゞ。）

右細末にして、空腹に温湯にて五粒を呑。

醫宗讀避邪丸條云、服此雖與病人同床合被、亦不能傳染也。

五月五日。前田重教百騎の乘馬を試みしむ。

〔政隣記〕

五月五日、俄之被仰出に而、堂形於御馬場百騎一度に乘馬被仰付。兩御近習頭并兩御近邊且御大小將御馬役等ゟ被仰付。

但、自分ゟも罷出候樣申來候得共、着到當番に付不罷出候事。附、當日之服布上下に而乘馬被仰付候由也。

五月六日。前田重教百二十騎をして乘馬せしむ。

〔政隣記〕

五月六日、今朝も昨日之通に而、服は馬乘袴に而、百二十騎一度に乘馬被仰付。今朝は二尺餘り之丸竹に自分々々之交名記したるを持、或は腰に指候而乘馬、乘違候節或は追懸候而成

共、人之持所之竹を挟本に而も奪取候様被仰出、烈敷迫合、落馬人も多有之。自分台も罷出候様今晩申来候得共、今日も者頭當番に付不罷出候事。但昨今共乘馬之人々足袋着用可被仰出、各着用之事。

五月十日。大聖寺侯前田利物金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月十日美濃守様昨日御旅宿に御着、今日四時過御登城御對顔、御饗應之上御退出。直に金谷御殿に御出御饗應、御菓子等被進之。御作法都而御先例之通に付不記之。

但、御太刀馬代被進之、先達而御使者持參。

五月。前田齊敦腰痛を病む。

〔政隣記〕

五月十三日、此間若子代様御血虚之方に而、御腰痛強、御立居被遊御難儀に付、此間中御醫師書役相詰、且御家中陰醫師並町醫に至迄、世上に用候者不殘被召呼、診被仰付。

五月。前田重教諸士と將棊を試む。

〔政隣記〕

五月

一、中將樣此間者毎日碁・象戯被遊、御近邊幷御身附之人々に御相手被仰付、加賀守樣御見物被遊候由。御相手各奉負与云々。

一、無息之面々之内將棊覺候人々、金谷御殿に被召出、御近邊之人々相手に而被仰付。

一、御大小將之内將棊覺候者御尋。自分儀も今月十九日罷出候樣申來候得共、將棊覺不申に付不罷出。

一、頭分にも將棊御尋、覺候人々十九日罷出。神尾伊兵衛・江守平馬中將樣御相手被仰付候處奉負。但兩人之内神尾は御馬廻頭、江守者御小將頭也。

一、御大小將之内恒川七兵衛廿一日罷出候處、中將樣御相手被仰付候處奉負。七兵衛外者覺不申、少々覺候者も痛等に而不罷出候事。

一、村波檢校・七尾勾當・箏都、此間將棊爲御用金谷御殿に被召出、盲人相手に而指し候事也。晝比出、夜に入御暇出。

一、右之外諸向より、將棊爲御用罷出候人々數多有之。頭分・平士之内にも御相手に被仰付候人々も多し。

一、此間於金谷御殿、野尻次郎左衛門直法に將棊之詠歌被仰付、則詠之。

所せくこがね白かねさす月のかつらの胸は中にいさある

本文は能美郡小松周辺の事情なり

五月。米價益騰貴して飢民を出す。

〔螢迴光〕

聟天明四甲辰正月より米次第に揚底、米可賣價大槪一石に付四十目より四十九匁位。八十目・九十目・百目と騰躍し、五月・六月に至百二十目位となり。右の直段にても米なし。只野山の草々の根を掘、木の芽を食とす。下數の糠迄も喰盡せり。千菜一連三十五錢に買しこ、しる遣い方い書狀于今所持せり。御上よりの米壹場有といへ共、兼て家毎の家數・人數を以、男三合・女二合の札渡して、餘慶は望がたし。依て錢を負ながら道に倒れ、椀を持て道に死する者は毎日三人・五人なり。町・里・浦・山々も皆然なり。小松山王より八幡迄の往還玉繰に倒伏し、通る人を見てひだるしひだるしと泣。此所計にても毎日餓死する人多し。湯定村山にセキメンとて至て白く、碎けば葛根の如き眞白成土あり。貧窮には食物と成と言傳へ侍れば、是を取り來、稗など少し宛交て食せしに、何れも腹つまりて皆死せり。若後世かゝる事ありとも必喰ふべからず。扨て九月より冬に至て疫病はやり、死する者家毎なり。是皆同じ。わけて山方は夥し。予其頃鍋谷村といふを通りしに、屋根崩れ扉傾、茫に埋れし家軒を並べ數を知らず。皆死絶たる家なり。死骸は葬るべき人なければ、皆谷へ捨たりとぞ。小松にても行たふれ死たる者は、三昧

本文は天明三年七月十日の條に載せたる咄隨筆の文に接續す

に大き成る穴を堀置、死骸どもを投込し也。後其跡に石塔立て、今に哀を殘す。かゝるうき目を見て、飢饉の貯はなすべき事なりといひし人々も皆死果て、今知る人稀なり。

〔咄隨筆〕

翌年に至りては、下民飢に臨む者多し。爰に金澤竪町に一箇のあきんどあり。名を五郎兵衛といふ。綿を賣りて渡世とし、正直なる者にして利を貪らず。心常に人を憫む。然る處下賤の者飢に及びて死に至るを見て、是を悲しみけれども、米穀の價尊うして施すべき術なし。是に於て雜穀の屑・粃・糟糠を求めて粥となし、飢ゑたる者の家へ持ち行き施す事毎日おこたらず。然れども飢人等多くして、周く施す事能はざるを憂ひ、近所の富家を賴みて下部を借り、糠・糟の類を貰ひ來りて、日毎につとめて是を施す。おのれは寢食を忘れ、此事にのみ奔走す。是を見聞きて志を發したる者、米穀の類を施さんと思へば彼者方へ送るに、大に歡喜して卽時に粥となし是を施す。誠に奇特なる者なりとて稱美せざる者なし。去れば廉直の行を聞き、時の奉行なる人飢民を憐むこゝろざしを起し、米錢を施し賑はせけり。是において飢死の者一人もなし。是偏に彼の五郎兵衛が惠により及ぼすに似たり。

五月。領國內の驛馬を使用する者は家中侍の荷物といへども駄賃を徵することを告ぐ。

〔日記頼〕
近年御家中侍中等自分用事之荷物多相成、商荷物致減少に付、御領國驛馬倩持共甚致難儀候旨、各より每度被申聞候に付、以來侍中自分爲用事取寄候品々之分に、商荷物同樣に駄賃爲請取申度段、先達御用番へ相達候所御聞屆、一統御觸渡有之候間、被得其意、夫々可被申渡候。勿論右之趣候得ば、侍荷物しらべ問屋并馬形共心得違仕、此上驛の賃錢喰候樣成も有之候はゞ、當場より御年寄衆へ相達候而含不相立候條、隨分嚴重相心得、荷物付渡候儀遅滞不仕、宿々差支無之樣急度可被申渡候。由御用番へ相達候紙面寫相廻候條、可有披見候、以上。

五月　　　　　　　　御算用場

所々奉行名前

六月十一日。前田重教騎射の用を勤めたる野村傳兵衛等に賞賜す。

〔政隣記〕
六月十一日、野村傳兵衛每度御騎射御用被仰付、御懸にも相成候。依之越後縮一反、并御騎射的之圖・御日記も、佐々木猿兵衛を以拜領被仰付。且今度乘馬被仰付候人々も、昨今金谷御殿に被召出、御騎射御的之圖拜領被仰付。右御禮御兩殿樣の御近習頭を以申上、平侍之分は頭引受同斷。

天明五年十月五日の條參照

六月廿七日。前田治脩及び重教、歩士の水練を才川に觀る。

〔政隣記〕

六月廿七日、御歩中水練爲御覽、曉七半時御供揃に而、御鷹野御格に而、御兩殿樣才川貝殼淵ゟ被爲入水練御覽、四時御歸。

六月廿九日。石川郡粟ヶ崎藤右衛門に名字帶刀を許す。

〔袖裏雜記〕

粟ヶ崎村木屋藤右衛門御かね御用拔群御用立候。未年者故萬端親貞悅指引仕候。今般藤右衛門へ御扶持方御增被下、御例も無之樣子に候得共、格別に候間御紋付拜領、親貞悅へも何に而も御有合之品物拜領被仰付候樣仕度旨、委細御算用場奉行紙面指出候。成程過分に米銀御用に相立候。當時於居住所草高八十石被下候處、免御宜敷場所に而、此定納口米六十三石餘收納仕候。藤右衛門身上に而者、御加增米被下候よりは、格式宜敷被仰付候方難有可奉存儀に候。乍然御家人之振合に被仰付候儀者、相成申間敷哉と奉存候。且又御紋付之品も、十村格之者ゟ被下候与申儀に御例も無之、第一輕々敷此儀は難相成事と奉存候。依而僉議仕候處、藤右衛門當時御扶持人十村格に御座候處、少格式宜敷今津甚右衛門同格に被仰付候にて可然、甚右衛門儀は十村よりは餘程宜敷候。御城下に而も帶刀仕、出府之上御目見被仰付候節

前文には廿九日とあり

は、御間之内に而被仰付候。京都等町人杯之振合にも相當候得共、大躰者十村之格式之宜敷著に候。藤右衛門へ之被仰渡には、父貞悦禪妙之志に而御用方入情相勤候付、貞悦之爲御褒美如此被仰付候段被仰渡、貞悦へは御次よりも品にても被下候はゝ可然と何も僉議、六月十四日伺之處、帶刀者重き事、此前石丸彌三郎等改作奉行勤候節、十村共帶刀爲仕度旨申出、其後木梨助三郎等御郡奉行勤候節も、澤村源次へ帶刀爲仕度旨願候得共、御聞屆不被成候。微妙院様御代に者、十村等江御懸之趣も有之候得共、帶刀には不被仰付候。然ば藤右衛門前段之通被仰付候儀如何可有之哉之趣、六月廿六日段々御意有之。重而藤右衛門者各別之者に付、先達而伺之通被仰付候様段々申上候處、左候はゝ其通相心得可申旨御意に付、廿九日に御算用場奉行へ申渡、貞悦へは於御次輪島三端被下之。

〔政隣記〕

六月晦日、一昨廿八日粟ヶ崎村藤右衛門儀今津甚右衛門格に被仰付、帶刀御免、金澤町江出候野間書冨爲持候事も不苦由。名字粟崎と稱し、々之字者と云々。同日町人中買等、數人江永代御扶持、或は一代、又者此度現米被下切等被仰付。

〔國事雜抄〕

粟崎 藤右衛門

右加州石川郡粟ヶ崎村藤右衛門儀、今般今津甚右衛門格被仰付、當場支配被仰渡候。且又右藤右衛門手代、爲用事他國ゟ罷越候節、今津甚右衛門手代同樣に兩刀帶候間、右之趣爲承知如此に候、以上。

辰八月十一日　御算用場

野村與三兵衛殿

六月廿九日。石川郡本吉の町人古酒屋四郎兵衛等三人の扶持を增賜す。

〔袖裏雜記〕

本吉町古酒屋四郎兵衛・川崎屋治兵衛・清水屋甚八郎過分之米銀御用立、藤右衛門ニ迄甚之働者無之候得共、外に又願申者も無之に付、四郎兵衛・治兵衛へ八人扶持充御增米、都合二十人扶持充に被成下、甚八郎ニ手薄に候得共、兩人同事勤候間三人扶持御增米、都合十三人扶持被下候樣御算用場奉行紙面出。紙面之通被仰付可然と六月十四日伺、六月廿九日伺之通被仰出。

七月十三日。御勝手方主附前田土佐守・村井又兵衛等藩の財政を整理し得ざるを以て進退の指揮を求む。

〔政隣記〕

七月十三日御勝手方御主附前田土佐守殿・村井又兵衛殿、御勝手必至与御指支、當盆前御拂方、是以後とても御遣方手段無之、迷惑至極被奉存。仍之自分御指扣之儀被申上候處、翌十四日不及差扣段被仰出。同趣に付、御算用場奉行藤田兵部・神保舍人・小堀牛右衛門、自分指扣之儀御用番大隅守殿迄相達候所、則同十三日夕方大隅守殿於御宅、本多安房守殿御立合指扣被仰付。御勝手方御用小杉喜左衛門・矢部友右衛門・和田八太夫・遠藤次左衛門・田邊吾助儀も、指扣之儀頭々を以伺之候處、翌十四日不及指扣段被仰出。但小杉喜左衛門・田邊吾助は指扣被仰付。頭宅に而申渡之。兩人は別段役故也。

七月十四日。米價日に下落し諸士盆前季の仕拂を延期するもの多し。

〔政隣記〕

七月十四日

一、當作米御印紙〔萬五千石一貫四十目の銀筈〕匁、御渡米有之。右故彌米價日々下落、頃日遠所米過四十日平均に相成、其上望人無之。

一、御上必至与御指支、諸向御拂方一圓無之。并五百文計例年爲日渡下方ゟ都而相止。尤南御近習并御廣式女中ゟ之例年渡下方も、都而無之候事。

利姫は俊姫の前名

一、米段々下り、其上望人無之に付、當盆前拂方金府士中九分通者延置。自分も右之内也。

七月十七日。前田治脩婚姻の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

七月廿五日、加賀守樣御緣女利姫樣、九月中從大聖寺御引受可被遊旨、二月八日記之通に而、前月御治定被仰出候得共、御勝手向必至与御差支一件に付、來春二月迄御延引与今月十七日被仰出有之。

七月。藩の財政困難なるを以て盆前諸拂を停止すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御勝手向累年御難澁之處、去年凶作に付、別而當春以來甚御指閊に相成、種々取計相辨來候旨、御算用場奉行等申聞候に付、御運方等之儀打返遂詮議候樣申渡置候處、御難澁至極之御勝手振故、何分手段無之、此節迄精誠遂詮議、尤他國調達之儀も取組置候處、相調不申、勿論地方調達も不相調、最早御辨方手段盡果申由。盆前取捌方必至与指支迷惑仕段、右奉行幷御勝手方役人申聞候。於拙者共にも當惑至極、如何共可及指圖樣無之候。依而心外之儀一統可爲難澁候得共、當盆前諸向御拂方等指延候樣、御算用場奉行ゟ申渡候。此節に至り如此に而者、末々難澁之程不便至極之事に者候得共、不得止事申渡候條、此段夫々可被申渡、尙更

登後に至り格別差詮議候樣、御算用場奉行の申渡置候事。

右之通御覺書を以被仰渡候條、得其意、夫々不相洩樣可申渡候、以上。

七月　　横尾左膳

能州四郡十村中等

七月。江戸在住の與力池田彌十郎幕府の測量方助手を命ぜらる。

〔政隣記〕

七月、江戸在住與力池田彌十郎儀（算學鍛錬に付、天文學心得之、右樣之者有也。）公邊天文方御用吉田靱負に、從公儀被仰付候測量方御用之手傳役被仰付、毎日天文臺役所へ當上旬より出る由也。

八月朔日。石川郡粟ケ崎村の粟崎藤右衛門登城して先に優遇を得たるを謝す。

〔政隣記〕

八月朔日例日之御禮等被爲請、右粟崎藤右衛門於檜垣之御間、今度木谷藤右衛門名に被仰付候御禮に被仰付。依之扇子・鰹節一箱宛獻上之、隱居眞敎より串海鼠一箱獻上之事。

八月五日。前田重敎の近習小瀬卓彦流刑に處せらる。

天明三年五月三日の條參照

〔政隣記〕

八月五日夕方左之通被仰付。

金谷御近習組外

小瀬卓广多

引籠罷在候内不覺悟至極に付流刑与從中將樣被仰出。

右頭中島誠左衛門於宅、御大小將横目水野次郎太夫立會。

〔袖裏雜記〕

被仰出之趣有之、左之通可申渡哉之旨前々の振を以伺之處、追付可申渡旨被仰出。

佐藤半五右衛門・中島誠左衛門ゟ

小瀬卓广多

卓广多儀引籠罷在候内覺悟甚不宜、段々不屆至極之趣有之、依之越中五ヶ山之内ゟ流刑被仰付候旨、自中將樣被仰出候。此段可申渡旨被仰出候條可被申渡候事。

但配所へ被遣候迄之内は一類共ゟ御預被成候條、急度締仕置候樣一類共ゟ可被申渡候。九

一類共交名可被申聞候事。

甲辰八月五日

十三郎殺さる
丹藏九郎に
傷る

右御買柄に付而之儀等は何も不見、其儀仰出之内、先達而段々不宜事共被仰渡、相改候樣に御沙汰專成といへども改不申、引當上も覺悟一切是なく、重き御意共も空相成、人の申に可任器量、不屆至極之旨被仰出候也。

八月六日。田伏直三郎出合宿にて阿部儀太夫の爲に刺殺せらる。

（政隣記）

八月六日、御馬廻組頭前田彌助組田伏十左衛門手前に、致厄介罷在候又田伏十三郎儀、不行狀至極之者に付、從先年頃より相違押込置候處、近々に先非を悔得度之躰に付、一類示談之上昨五日より福所へ指出候處、今夜本多安房守殿家來篠井直記与申者、發懸入來之者に付同道、宮川用除町二口屋長兵衛方に罷越、九人並番人罷久屋吟助妹よりも出會、同道之直記者同中居二右衛門与申者從家來よりも出會有之候處、跡より御醫師林玄從家來吉兵衛長谷川伊九郎与申者、安房守殿家來阿部儀太夫与申者同道に而、右長兵衛方の罷越及口論候上、十三郎儀太夫に數ヶ所手に而被突殺、長左衛門宅え駕籠に乘歸死去。

右之趣互に可取計与之一類示談に而、十三郎儀一通病人之趣に而引取、外科二三人も出來之趣を以療治を可被得共不致承引、彼是除取候内相果候に付、彌右一件押隱し難可申手段之處、寺和尚も不致承引、彌是非表向へ附今月十八日御用番依被仰渡、翌十九日於盛改方御用

松尾平九郎宅ゟ、二口屋長兵衛・同人妻つや・前記に有之後家ゆり・吟助妹みよ・長谷川平九郎召出、僉議之上、御書取立之上、夫々主人幷組合ゟ預置。但、具に及白状、公事場ゟ引渡、尤皆皆禁牢。

一、九月十三日於公事場に、田伏長左衛門幷類門御馬廻組塚本次左衛門・中村猪右衛門・小幡清次郎以上三人は十三郎兄弟、長左衛門之伯父也。岡田沖右衛門（沖右衛門も同断也。）御僉議之上、長左衛門等四人は一類ゟ御預、沖右衛門者去月六日頃ゟ大病相煩、何等之儀も一圓不承由申に付、急度差扣被仰付候段申渡有之。

右十三日朝五時前より、一類同道公事場ゟ出候處、翌十四日暮六時過相済退出。右御僉議者、五人別間に差置候而、一人宛之由也。田伏頭前田彌助・塚本頭小堀牛右衛門・中村頭奥村瀧兵衛・小幡頭篠原勘左衛門・岡田頭武田喜左衛門、各相詰有之。

一、翌天明五年二月二十九日田伏十三郎一件落着爲開届、御用番之外御年寄衆不殘御出席有之。同年四月二十七日於公事場、左之通被仰付。

改易　二百五十石田伏長左衛門。百五十石中村猪右衛門。三百石塚本次左衛門。三百石小幡清次郎。

逼塞　岡田沖右衛門。沖右衛門せがれ岡田左門。（父同事急度可罷在旨。）

一、田伏長左衛門頭前田彌助・相頭小堀牛右衛門より、四月二十七日御用番横山大藏殿於御宅、長大隅守殿御立合、御大小將橫目中村九兵衛・山崎彥右衛門指引に而、左之通被仰渡。

前田彌助

御手前組田伏長左衛門厄介仕居候伯父田伏重三郎儀、去年八月六日夜本多安房守家來服部半次右衛門与云儀太夫に被懸付相果候一件に付、一類共より相達候趣委細紙面被指出、相違御座候處、最初一類共之內中村猪右衛門・小嶋清次郎罷越、重三郎儀致口論少々手疵候旨爲知候に付罷越候處、寶久寺河原二日屋長兵衛与申者方に而、右儀太夫与致口論、儀太夫相見得不申、長兵衛方に同家中篠井直記等罷在候に付、儀太夫与出候樣に申達候。重三郎儀者、割場附者庄左衛門後家方に罷越居申候故、樣子見請候處、少々腫り疵所有之旨等申達候に付、小堀牛右衛門申談罷越見屆、其上に而致指圖旨申入、牛右衛門方に罷越及示談、可致見分として出懸り候處、猪右衛門罷越、先程段々申入候趣甚致相違候、重三郎爲躰疑之樣子致見分相見候處、重三郎令致亂心、自身剃刀相走り、其上に轉び申躰に而、手之內麗り迄にも至而少々疵御座候。相手有之儀相見候得共、一向無之旨等申聞候に付、段々相尋候得共、只今相違候處實正之旨相答候に付、重三郎輔方宜致し候樣に申達、其段同八日月番に相達候段。先以最初者重三郎儀太夫与致口論候趣、無程手負やうにも仕候段申聞候儀は、表裏之達に付精

誠相糺可申儀に候。且又重三郎同日致病死候段及案内候上、たとへ手あやまちたり共、蒙疵致死去候者は一通り之譯に者無之、第一最初届之首尾も有之候事故詳敷可存儀、是非死骸不致見分候而者難計次第に候。其節致見分候者、自他之所爲者相分り可申處、其通りに致置候段未熟至極に候。將又右之樣子從御前御直に御尋之節、一類等最初罷越申聞候趣、幷重而申聞候次第具に御請可申上處、一通り手あやまち仕候趣迄御請申上候段、明白不成事に候。御譜代之侍中を御預置之儀に候へ者、ヶ樣之節入念心力を盡取捌可申儀、旁以甚未熟千萬に被思召候。依之役儀被指除、閉門被仰付候旨被仰出候。

小堀半右衛門

前田彌助組田伏長左衛門厄介仕置候伯父田伏重三郎儀、去年八月六日夜被疵付候一件、彌助より御手前江演述之樣子、委紙面之趣相違御聽候處、最初中村猪右衛門等彌助方江罷越、重三郎儀及口論候樣子相屆。重而猪右衛門儀罷越、最初之趣与者相違仕候、重三郎亂心に而手あやまち仕、少々疵付、相手取儀無之与相斷候旨彌助申聞候に付、一類共左樣に申候者、其上を穿而可致見分譯にも有之間鋪旨彌助江申達候段。先以一類共追而申聞候趣者、表裏之違に付得与相糺候樣に、彌助江可申入筈に候。其上重三郎無程致死去候段案内候者、たとへ手あやまちたり共、蒙疵候者を致死去与候段一通り之譯に者無之、第一屆候首尾も有之事故詳

較可有儀、重三郎死體不致見分候而者難計儀与、彌助ゟ存寄可申達處、其心付も無之段、相別ニ者等閑成儀、不念之至ニ被思召候。依之指扣罷在候様ニ可申渡旨被仰出候事。

一、本多安房守殿家來篠井直記、去年ゟ於公事場禁牢之上無御構赦免。但長谷川平九郎者牢死、鰐部儀太夫ハ出奔行衛不知候事。

一、田伏長左衛門等四人ゟ、改易之節被仰出之趣、大抵前田彌助ゟ被仰出之御書立之内ニ而相分リ候趣に付略之。

岡田仲右衛門并同人悴左門江被仰出之趣左之通。

岡田仲右衛門

右仲右衛門儀、去年八月六日夜田伏長左衛門致厄介置候田伏重三郎儀、本多安房守家來鰐部平次右衛門并儀太夫与及口論被疵付候節、右長左衛門宅ゟ者罷越候得共、塚本次左衛門等口論之場所ニ而取扱下濟取計候趣者、其而不存旨申聞候。乍然右場所ニ而取噯之趣、次左衛門等ゟ日得寺承糺了簡も可有之處、其儀無之、甚等閑至極不埒之至ニ付遠塞被仰付。

右仲右衛門江申渡

岡田左門

右左門儀、去年八月六日夜田伏長左衛門致厄介置候田伏重三郎儀、本多安房守家來鰐部平次

右衛門せがれ儀太夫与及口論被疵付候節、右長右衛門等宅江者罷越候得共、塚本次左衛門等口論之場所に而取捌下済取計候趣者、曾而不存旨申聞候。乍然右場所に而取噯之趣、次左衛門等江得与承糺、仲右衛門江も申聞了簡も可有之処、其儀無之、甚等閑至極不埒之至に付、親仲右衛門同事急度相慎罷在候様被仰出。

今月は七月

八月十三日。前田重教曲馬師の演藝を觀る。

〔政隣記〕

越中氷見之産、幼少に而父母に離れ、能州に知音之者有之に付罷越、其所に而成長、夫より上方江登り曲馬致稽古候而諸國を廻り、年老候に付歸郷之由に而、今月中旬以來於廣岡山王社内曲馬乘之。依而見物人群集す。夫婦并子共兩人都合四人共乘。夫四十歳計、妻三十五歳、子は兄十一歳、弟六歳也。曲馬之次第、駈之内夫者鑓、妻は薙刀に而、六歳之子を肩に載之仕合。其外駈之内、馬之腹潜り。立一睦・鵜鶴・骨なし形・大字調筆等、色々之曲乘候也。

一騎木の誤歟

中將樣八月十三日被爲召於堂形御馬場、曲馬被仰付御覽、色々如前記乘之。且大字は風・雲・龍、尤一字宛書之。御厩之御馬にても被仰付候處、曵り乘之、何之替事も無之由也。

右之者實は尾張之産之由、御國法に付右之趣に申成与云々。

國法とは他國の者の藩内に留まるべからざるをいふ

八月廿二日。御小將頭等、御小將に會所銀返納の義務を完くすべきこと

を命ず。

〔政隣記〕

八月廿三日左之通紙面を以申談有之。

御小將中近年僉方宜、第一古き人々申談も行屆、尋方質素故、新御小將中成立等宜、尤成儀に候。然其近年打續世柄惡しく、東・北共諸色高直、就中去年以來は別而甚高直至極に相成、其上町才覺も一圓不相調、勝手難澁之人々多、去々年以來江戶表相詰候人々等、彌增難澁之儀及承候。將又去年水難之御小將中、指當り難澁至極之樣子に付、其砌拙者共願之趣色々有之候得共、御上甚御指支之御時節故御聞屆も無之、其後引足被仰渡、御引足米切手も當春可被渡下等之處、六月に至御沙汰無之に付、是又相達候處、追付御渡可被成旨に而、今以御渡も無之、旁以當七月知行米之賣拂も付兼候儀も有之趣及承候。御小將中之儀者、上納口も多き勤柄に而、別而難澁至極之人々も有之段者、各ゟも御申聞致承知罷在候。尤人別之樣子者不相知候得共、自然七月中上納差支候人々も有之候而は、其品により御格も有之儀に付、七月中上納皆爲致延引、尤此段御聞屆有之上は、手廻相成人々は追々早速上納爲仕度段、拙者共僉議之趣段々御年寄衆に再往相達候儀、各御承知之通に候。然處一圓御聞屆難被成段及數度被仰聞、是非當月中爲致上納可申段被仰渡候。此上者不及是非候間、何分被遂才覺、當

月中上納有之候樣可有御申談候。乍然當月中最早日間も無之儀に候間、容易に才覺可相調樣にも不存候條、才覺不相調人々は、來月は懸上納可有之候。尤來月は懸上納与申儀も、且而御年寄衆より被仰聞候儀に而は無之候得共、此所は御小將中手前指淀申談候間、猶更拙者共存寄も有之ば、當年之處打重り人々難澁之趣相察、色々遂僉議候得共、御時節柄故一個者筋相立不申、心外之至に候。此所御小將中にも會得有之、夫々上納之心得有之樣に御申談可有之候。猶更口達にも申入候趣、得与御申含可有之候、以上。

辰八月

江守平馬
本保孫八郎
渡邊主馬
岡田太郎右衛門
多田逸角

御番頭衆中

八月廿七日。前田重教鐵炮を放ち組頭をして之を觀しむ。

〔政隣記〕

八月二十七日組頭は、於豆田口中將樣御鐵炮被遊、拜見被仰付、脚半・股引等野間裝束に而可

出旨被仰出。此後追々諸頭ゟ拜見被仰付。

［政隣記］

九月朔日。御兩殿樣御騎射・御馬場、此頃迎分等ゟ拜見被仰付候樣度々之事。

八月廿七日。儉約の爲に前田治脩行列の從士を減ずべきを命ず。

［政隣記］

八月廿七日今般御儉約に付、御寺御參詣等御行列之內、御大小將御先供四人、二人減少 內二人は頭番より爲定加人出候筈。御先角は三人。都合五人之外被召連間敷旨、今二十七日被仰出。御馬廻際者御表小將より勤候筈。且御供人從者草履取一人、鑓等者用不苦、笠籠は御先角代より一つ、御左御先供二より一つ爲持、笠・合羽天候等。御供福井歸候節之若中者、從者平日之通。渦又御鷹野之節御行列は格別御減少に付、御供之節從者草履取一人迄可召連旨、夫々申談有之。

但、御先供合羽挾箱に、一より兩人宛下ゟ、尤二之御供所者二より埋、二に明不申樣に仕候筈。

右者御大小將不足之處、御儉約に而不被仰付故如此。其外御供方諸向共御省略被仰出、併中將樣御供御行列等者、都而是迄之通相替儀無之事。

一、右御先供兩人、新番より爲定加人被召連候而者、新番組當り之御供所相止候に付、新番小頭御供に出候處御用無之故、段々願之筋有之に付、御先供は四人共御大小將より可被召連旨、九月十九日被仰出。但新番は一人御跡供仕候筈。

〔政隣記〕

九月四日、前月二十七日記に有之通、御供方御減少、從者小者一人宛に候得共、御番頭・御横目御駕籠際者（三人之内御右之者之事）只今迄之通り。

但、笠籠者右三人より一荷申談爲持候筈。都而紺染爲致着用に不及、嶋類等勝手次第之事。

八月。火消役の勤務に關する覺書を定む。

〔火消番勤方覺書〕

一、當番之節火事に而罷出候時分、其組合中ゟ不殘以使可及案内候。鎭候歟、虚說に而罷歸候者、其段又可及案内候。助番之者有之節には、尤當番之組合可爲同事候事。

一、非番より罷出候刻には、非番之組合中不殘案内使、前後同斷之事。

但、非番之節近所火事に而罷出候はゞ、當番之者ゟ茂可及案内事。

右二ヶ條近年指止候事。

一、一番組・二番組當番之時限、明六時之事。

但、番替時限前より出火ニ而、前日之當番人罷出防有之内六時鐘打、其日之當番人罷出候共、防禦申面々者其儘有之、無防所居申面々ゟ替可申候。但其時之可隨首尾次第事。

一、火事沙汰有之候而も、煙も不見虚實難知候ば、早速見番遣、實火ニ候者可罷出候事。

一、火見番所より見ゟ觸申手筈出火之段、同役中より案内有之候者、煙不見候共可罷出候事。

但、當時案内使ニ相止候而、實火之様子承候ば、煙も不見候共可罷出候事。

一、出火之段承、火本ゟ罷出候半ニ而火鎮候由承届候者、火本ゟ不及罷越、道より可罷歸候。虚説勿論之事。

但、出馬以前實否承候ば尤不及罷出候事。

一、兩所一度ニ出火之節は、當番・非番無差別近所ゟ可罷出候。乍然少ニ而茂前後候者、跡ニ出火之方ゟ非番之者可罷越事。

一、何方ニ而茂當番・非番罷出防候内、又他所ニ火事出來候ば、其節之様子次第同役申談、御横目ゟも相達、追而之火本ゟも可罷越候事。

一、火事場ニ而同役之家來、互ニ無遠慮可致指圖事。

一、御城下幷御寺近邊は、小火に而も非番茂罷出、其外は大概家五・六軒程燒候者、非番も可罷出候事。

但、近年非番も右之定より早罷出候故、御城程遠き町端等火事に而罷出候跡に、若又御城近出火候者、都而不心懸之筋にも可成候に付、自今以後以前之格に申談度儀と同役示談之上、御用番横田大和守殿・生駒監物相達候處、同役にも申談、可爲已前之通旨被申聞候に付、右之通相極候事。

一、御城下火事若及大火難防留候はゞ、同役申談人數引拂、御城近邊に相集、其段御城代に及案内、可請指圖候事。

一、御城近邊火事之刻、火之粉參候程之時は、兩御門前迄罷越、御城代歟又は御用番御横目中に成共以使者申入、可受指圖候。若御郭之内番小屋に而も火之粉燃付候節は、右之通答を不待御門御番人に致付届、御郭之内に罷越防可申事。

一、御郭之内下乘之内には、火消道具之外長柄等之身有之物には遠慮仕候に付、竹柄之纒用ひ申候。馬上之儀は御城代等之可受指圖候事。

一、朔望・嘉節等御城に罷在候内、出火之段宅より致案内候節、表御式臺下番足輕迄家來之者可申達候得者、下番足輕より御横目に相届、火消中に通達有之筈之事。

但、右之節直に御壇より當番之者罷出候刻、表御式臺に而致裝束可申候。尤御構目ゟ非番
内より、當番罷出候段相達可申候事。
一、當番之者は火事裝束入候挾箱、二ツ御丸臺懸迄通置候事。
一、請取人有之處出火之節、請取人より先ゟ出候者、蓋構防可申候。請取人罷出候はゞ、其
時之首尾次第可申談候事。
一、御寺近邊火事に而罷出候刻、請取人未罷出御寺氣遣成節者、尤御寺之方第一に防可申事。
一、御寺危見え候程之火事に者、山門之内何方に而も馬上不苦候事。
一、侍居屋敷并下屋敷火事之節に、其家主ゟ防申段先達而可申達候。若内ゟ入間敷等及臨候
者、相通可然旨門番人等ゟ達而爲申聞、樣子次第御構目ゟも可申談候。其上にも承引無之候
得者、可爲其分候事。
一、居宅并下屋敷危見え候程之火事に者、古來より御定之趣茂有之に付、同役申談、尤御構
目ゟ茂相斷、宅之方ゟ隨趣防可申事。
一、二月より四月迄助番相立可申候事。
但、其年之樣子によりて、雖數年に年内よりに而も、同役申談助番相立可申候。雖爲四月雨
天抔樒帘成年に、是又仲間申談助番相止可申事。

一、當番五人之内煩等に而役引有之節、春中騒敷時分一人欠候而も不及助番、二人欠候者一人助番加、四人に而勤可申事。

一、十人之内一人欠、代不被仰付、四人・五人に而相勤候内、當番四人之組合一人番引有之候者、騒敷時節は助番を加、四人に而相勤可申候。五月頃は二人致役引候者一人加、三人に而勤可申事。

一、兩組三人・四人之時、二人之時は助番を請、三人宛勤候分には不及助番事。

一、金谷御殿請取有之者役引之節は、春中嚴重に相勤、助立時分之外は、當番四人相揃居申候得者、本役不及兼、金谷之助迄相勤可申候。右之通助番相勤居申内、又定役引人有之候者、助先之者より右助番相勤可申候。先達而一人役引之上、又金谷請取有之者致役引、欠人及二人候者、定役共に相兼助番勤可申事。

一、御寺助番相勤候内、御寺危程之火事に罷成、御位牌外へ奉除候儀は、寺社奉行茂罷出候。寺僧も此儀第一に相心得可申儀に候。然共寺社奉行も罷出不申、寺僧も手に合不申様子に候者、見のがしには難仕趣に付、其所へ出合、其節之様子次第御位牌之方へ茂主付可申事。

一、町續在郷出火之節、防可申候。町端より少間有之在郷に而も、風筋悪敷、町之方危候者、主人は町端に扣、人數迄遣打消可申事。

一、野田桃雲寺邊出火之節、金谷御殿詰取所無之當番之面々罷越申候。其間者非番之者精間、當番同事に相勤候。就夫當番之方よりも前後共〻、非番之方ゟ以使案内可申事。

一、宮腰火事に而火茂見ゟ申程に候者、當番之者金澤町端ゟ罷越、大火に茂罷成申躰に而、宮腰町奉行よりも火消役且御横目之内ゟ案内有之候者、金谷御殿詰取所無之當番之人々罷越防可申候。其役御用番迄早速以使者可及案内候。其内には非番之者罷出、當番同事相勤候。就夫當番之方よりも非番之方ゟ前後案内之事。

一、他國御使壮發候而、十五日休息候流例候。雖足以前致役引候儀に、其時節御用番ゟ申達、可爲指圖次第事。

但、先年は御歸國御禮之御使等者、御暇被遣候左右承次第致役引候共、近年者他國御使前後共に、諸役懸役引休息等無之様子に付、火消役も次之押立役引には不仕候。併同役申談、勤番を立、五・六日も前後共に致役引候樣に相極置候事。

一、火事場より罷歸候節、御用番に案内之儀、防口無之早速無、又者遠就に而候得者、尤不及案内候。大火之節人々消口も多有之、又は小火に而も何とぞ紛敷品に候者、紙面に記可及案内候。小火に而不輸時者、消口有之者より使者口上にて相濟申候事。

但、近年古來之趣と違候に付、是又今般大和守殿ゟ相達候處、可爲右之通旨に付相極候事。

一、御鷹野御往來御通之所江參り懸り候節、下馬可仕候。相扣候儀者、其節之樣子次第相心得可申事。

但、古來此ヶ條無之候得共、今般序に大和守殿江申達、右之通相極候事。

右勤方帳面、元祿年中已來之覺書之趣を以、同役示談之上、享保十七年帳面相仕立、元文元年五月同役成瀨先々内藏助等より御用番對馬守殿江相達候處、已來帳面之通相心得可然段被申聞候に付、右之通相勤來候、已上。

天明四年八月

今枝刑部判
津田玄蕃判
成瀨内藏助判
寺西九左衞門判
前田内藏助判
竹田五郎左衞門判
不破彥三判
西尾隼人判
菊池大學判

九月六日。御小將頭江守平馬等役儀を除き遠慮を命ぜらる。

生駒右膳一列

〔政隣記〕

九月六日、御用番主水殿於御宅、横山大膳殿御立合、御大小將横目服部牧多・水野次郎太夫
指引に而、左之通被仰渡。

江守平馬
岡田太郎右衛門
本保孫八郎
多田逸角
渡邊主馬

各組・支配之人々借用之會所銀上納、何も勝手致難儀候付、上納月延願之儀追々被指出候處、
面之趣等、且前月中不致上納面々之名書入御覽候處、委曲相達御聽、年寄中より段々事を詳
申聞、於御次も御内々被解利害被爲仰出候上は、何分共取計先爲致上納、其上之處は願方何
茂之身に引受、幾重共御猶豫可有之儀に候處、不致承引段不心得之至に候。今般者一統組之爲
与存可罷在候得共、結局組々之御格を爲破候儀は、頭第一之越度に候。且組切之儀に而も無

之、一統之御締方に指障候段不輕次第。右之族組頭之心得には一向有之間鋪儀に被思召候。依之役儀被指除、遠慮被仰付候。此段可申渡旨被仰出候。

右之通に付、御大小將御番頭當番之外不殘、主水殿御宅ゟ御呼立、主水殿・大膳殿御列座、左之御覺書之通被仰渡。依之御用方夫々引請候儀、連名紙面を以言上有之。

付札、齋藤與兵衞・青地七左衞門・溝口七太夫・天野傳太夫・奥村十郎左衞門ゟ

御小將頭江守平馬・岡田太郎右衞門・本保孫八郎・多田逸角・渡邊主馬儀、今日役儀被指除、遠慮被仰付候。依之代り人被仰付候迄、御小將組之人々各致支配候樣可申渡旨被仰出候。各儀ニ當分御用番之年寄中致支配候事。

九月六日

付札、御大小將御番頭ゟ

御大小將組之內借用之會所銀前月中上納無之人々、早速致上納候樣、夫々急度可被申談候事。

九月六日

右之趣御番頭中より、御横目中を初廻狀觸有之。

九月十一日。御小將等先に役儀を解かれたる組頭の寃を訴へ、自分指扣

を行ふべきことを稟申す。

〔政隣記〕

九月十一日、去八日・九日同組之人々寄合、今朝同組御番頭天野傳太夫殿宅に、同組中談能越、去六日頭中五人其役儀被指除、遠慮被仰付候趣、前月中會所銀上納之儀、頭中より組々被指留有之義に被聞食候、而之御咎に相聞え候。曾而指留に而延引仕候而は毛頭無之、頭中より段々被覃候得共、御聞屆無之候間、今月中可致上納之旨、前月廿四日申談有之候處、元來勝手難譯、日間も無之に付、調達方手間取候内、今月へ移り候。御格違り候段は迄に私共之不屆に候間、何卒私共は御格之通被仰付被下候様奉願候。尤御下知之上は、自分に指扣可罷在哉。此儀に御差圖次第可相心得旨、頭並村彌左衛門殿宛所に而、同組連名之紙面持參。猶口達に而も右寄之趣申達候處、取次可被申旨に付、指置各罷歸、右紙面出候上は、御用之外他出指止、猶素に相慎、自分指扣同様之心得に而罷在候事。

附、自分指扣に而は六組一統之譯に付、下よりは御用支に仕候事、御上へ不本意恐多儀に付、

右之通委曲には不能書解粗記之。六組共大底一般連名紙面、文段に少宛之有差等。

右指出候紙面之趣、同十六日譯立、翌十七日より外出等都而平常之心得也。委曲之趣廻文不記之。

一、御番頭中よりも、去六日御小將頭中御咎被仰付候趣、私共よりも段々申達候趣有之に付、同樣御咎不被仰付而は却而迷惑奉存候。先自分に指扣可申旨、御用番主水殿ゟ相達候處、段々御指留之趣有之。翌七日組頭兩人被仰付候に付、紙面被出候得共不被受取に付、御用部屋志村五郎左衛門迄紙面達有之候處、則被入御内覽候得ば、主水等申聞候通可相心得候樣に与御噂に候。且又御小將中此節愼等之儀も何となく達御聞有之、是又右同趣之御噂之段、五郎左衛門申聞候由、天野傳太夫殿申聞有之候事。

九月十三日。江戸下谷茅町火災の際に於ける喧嘩事件落着す。

〔政隣記〕

一、九月十三日八時永原・馬淵等町御奉行所ゟ可指出旨、山村信濃守殿より申來候段聞番申聞候旨可申渡旨、本多刑部殿御小將頭井上勘介等ゟ夫々御申渡有之。則聞番高田新左衛門指添に而罷出候處、永原・馬淵并指添人高田、相手與力中山源右衛門并指添人都合五人は緣之上着座、足輕小頭小杉孫左衛門等四人、足輕林喜太夫、并入牢中致牢死候四人之足輕代ゟ承り足輕一人、水籠持小者傳六相果候に付代り承り人小者一人、中山源右衛門下人一人は白洲に着座候而、七半頃信濃守殿御出座、左之通落着之趣被仰渡。

本年正月十六日の條參照

由良圓平
小山吉左衛門
山本彌一兵衛

右四人刑追放に候得共致牢死候。其旨可相心得旨候。

林　喜太夫

右者諏右衛門に懸合申者、其段不相達段不埒候。依之主人ゟ引渡遣候。主人方に而相應之咎可申付候。

永原清太夫
馬淵友之進

右一件其節御見聞不仕段申といへ共、兼而主人よりがさつ等に無之様嚴重に申渡置、其段足軽小頭共ゟ時々申渡置候處、ヶ様之儀出來仕候上は、平生申付方不行屆故与相聞候、不埒に候。依之主人ゟ引渡遣候。主人方に而相應之咎可申付候。

小杉孫左衛門
豐田市左衛門
吉岡作兵衛

宮川　鳥左衛門

右者平生申付方不行屆故、ヶ樣之儀致出來、不埒之至りに付叱り置。

水籠持　傳　六

右者不埒之趣無之に付、無構可被召仕候。

高田　新左衛門

右夫々申渡候趣、罷越主人江可申聞候。

中山　源右衛門

右一件夫々落着被仰渡候間、其旨可相心得候。

源右衛門下人　長　八

右者不埒之趣無之に付、無構可召仕候。

源右衛門　同　道　人

右之趣頭江可相達候。

右同夜五時頃、永原清太夫等御屋敷へ罷歸候處、只今迄之通り愼罷在候樣本多刑部殿御申渡之旨、頭井上勘助申渡之。翌十四日左之通刑部殿御申渡、則勘助申渡之。

永　原　清　太　夫

右兩人、當春茅町火事一件に付聞番より被指留置候處、昨日山村信濃守殿落着之趣被仰渡候。依之用意出來次第發足、御國より罷歸候樣可被申渡候。猶更於御國被仰渡可有之候間、先只今迄之心得に而致旅行候樣可心得旨も可被申渡候事。

九月十四日

一、右落着被仰渡之内相應之咎とは如何程之儀に候哉与、聞番村田甚右衛門より御用番御老中方迄伺候處、公儀に而者被仰渡之品に而候。此上はいか樣にも不被仰付候共相濟可申程之事に候旨、被仰聞候事。

一、右に付翌十五日永原清太夫等江戸發足、廿八日金澤歸着之處、御咎者之趣無之候條、歸着之上無構出勤可申渡旨、奧村主水殿被仰渡候旨與奧村彌左衛門申渡有之。十月六日より兩人共取次御番入申渡有之。

九月十七日。吉田守右衛門江戸に於いて不都合の行爲ありたるを以て知行を召放さる。

〔政隣記〕

九月十七日、左之通被仰付候段御用番主水殿被仰渡。

附札、奥村彌左衛門ニ

吉田宇右衛門

右宇右衛門儀於江戸表、去年十月九日朝和角甚左衛門家來小者一人、内山養穪家來若黨一人・小者一人致借用、御門外ニ罷出、下谷池之端中町弓師方ニ罷越、右家來共罷歸候様申付、宇右衛門儀其日御屋敷ニ不罷歸候ニ付、一類吉田九兵衛等家來共御門外ニ指出爲相尋、同十一日朝永原清太夫等召連御屋敷ニ罷歸候。依之江守平馬等より段々様子相尋候へば、從中將様御弓村被仰付置候處等閑ニ致置、右九兵衛より様子相尋候ニ付申分無御座候故、御門外ニ罷出候旨申聞候。家柄之儀ニ候得者、右村之儀無油斷九兵衛ニも可及示談候處、其儀無之、段々九兵衛相尋候ニ付右之爲躰、不届至極無十方仕形ニ付、御知行被召放、一類ニ御預被成候旨被仰出候條、可被申渡候事。

甲辰九月

右同日晩吉田宇右衛門宅ニ、御小將頭津田林左衛門・奥村彌左衛門、御番頭青地七左衛門、御横目服部牧多・木村三藏罷越、類中揃之上縮之間ニ各罷通り、被仰出之趣彌左衛門申渡、御請紙面判形見屆、類中よりも御請取立、畢而各退出。

一、右宇右衛門御一行物上不申、一類之内ニ預り置、且又家屋敷共御格之通爲差上、家財之

儀者御貸着有之間難成之段、同二十日御用番ゟ彌左衞門より相達置候處、可爲其通旨同廿六日圭水殿被仰聞候に付、一組之內右里字兵衞ゟ其旨申談有之。將又字右衞門收納幷知行假所附、右字兵衞ゟ指出候、彌右衞門加判書御算用場ゟ指出候處、當十七日迄に收納相收候理來、違所未共書出候樣申來。則字兵衞より取立指出之。

九月廿一日。前田重教狂言師八田屋萬藏に賞賜す。

〔政隣記〕

九月廿一日八田屋萬藏ゟ、白銀二十枚從中將樣拜領被仰付、結構之被仰出有之。是此間狸の腹鼓といふ狂言を相勤候處、甚御氣候故と云。

九月廿八日。幕府の命により加賀藩の江戸火消にその擧動を愼ましむべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

一、當月十四日御用番久世大和守殿役人より聞番呼に來り、村田甚右衞門罷越候處、於此表出火之節、足輕共之內がさつ成者共も有之候。以來がさつ成儀無之樣可被相心得旨被仰渡候由に而、別紙右之寫之通甚右衞門より及言上候に付、御使番等被渡候。其表ゟ申遣、火消方

并割場奉行に可申渡旨就被仰出候。則寫進之候條、夫々御申渡可被成候、以上。

九月廿八日　　奥村圭水

本多刑部樣

出火之節每度火消人數早速駈付、消防之働致出情候趣兼々相聞候處、先達而下谷茅町出火之節、足輕共之內がさつ成者共有之候。已來がさつ成儀無之樣可相心得旨猶更被申渡、尤防方等之儀者、是迄之通彌出情無怠樣可被申渡候事。

火消方之儀に付久世大和守殿被仰渡之趣、夫々可申渡旨被仰出候間、紙面等之寫相達之候間可被得其意候、以上。

十月十日　　井上勘助判

御上屋鋪火消五人・御中屋敷火消二人殿

紙面寫前記同斷

別紙之通御老中久世大和守殿御番被召呼被仰渡候條、已來於火事場がさつ成儀猶以無之樣無油斷加下知、消防之儀者隨分出情可仕候。右之趣本多刑部より可申渡候得共、猶更可申遣旨被仰出候條、可被得其意候、以上。

九月廿九日　　志村五郎左衛門判

御上屋舗・御中屋敷之宿六人宛所殿

九月廿八日。前田重教、若年寄女中の嗣子高畠清太夫に新知を給す。

〔[illegible]雜記〕

左之趣書付刀持參、則九月廿八日申渡。清太夫は御馬廻高畠四郎弟也。

若年寄女中中野養子

一、新知百石　　高畠清太夫

右中野儀、護國院様御代以來、御代々様御用久々全相勤、當時及老年候得共氣丈相勤候。依之若年寄女中ゟ被召出候御例は無之候得ども、格別之者に付せられ如斯新知被下之、本組與力可被仰付様、中將様御聲も有之候條、可被申渡旨被仰出候。

九月廿八日

右之通被仰出候、御申渡可被成候事。

十月十二日。幕府前田治脩が明年の參覲を缺かんとする請を許す。

〔[illegible]雜記〕

左之御書付、十月十一日田沼主殿頭御先手倉橋三左衛門殿を以御指出之處、翌十二日以御付札御願之通被仰出、其段志村五郎左衛門を以被仰出。

候へば本のまゝ

博取は果取

但、右御書付被指出管之趣、十月十五日御親翰を以被仰出も有之。爰に略す。

私領分加賀・能登・越中三ヶ國共、近年氣候惡敷累年損毛、其時々御屆申上、追々勝手向指支に罷成候處、去卯年は八十萬石餘之損毛に而、連年相痛候上之儀故、勝手向彌必至与指支に罷成候處、勝手向之儀は先指置、百姓共ゟ夫々手當仕相凌がせ候へば、一躰打續損毛之上、去卯年之儀は古來より無之莫大之損毛故、百姓共に不限、士農工商共に及難澁候付、是以打捨難置、夫々救方手當仕候得共、困窮之上之儀に候間、人氣惡敷罷成、諸人掟共を取失、所々騷動仕候儀共有之候得ば、漸取鎮置候。兎角此上之處無覺束奉存候間、長く救方之所専勘辨を加へ、幷一統困窮に付掟共取失候故、是又元へ立戻候仕法而已思慮仕罷在候得共、私儀當在國中には救方幷仕法共元へ立戻、人氣も立直り候樣には出來難仕、いか計心痛仕候。殊更越中・能登兩國之儀は居城より隔り居候故、一入掟も取亂し候付、追々仕置を申付候得共、是又私在國之内跡々作法立戻候樣には難仕奉存候。右之政事共半にいたし置、私參府仕候而は、跡之儀家老共より追々申聞候にも、遠路之儀博取兼、其内又々萬民氣請惡敷事ども出來、騷動之基罷成、重疊甚難澁至極に奉存候。依之近頃奉恐入候儀に者御座候得共、來巳年參勤之所御憐愍を以御用捨被遊、來々午年春參勤仕候樣被仰出候儀は相成申間敷哉。外之儀与違、前件之趣難默止奉願候。御規定も有之候處、加樣願何共違惑至極奉恐入候得共、此度之儀中

々無言語達事共、難盡至極誠無是非奉願候、以上。

十　月　　御　名

御付札

願之通、來巳年參勤御用捨被仰出候間、來々午年春中可有參府候。將又別紙に被申聞候通、

松平出雲守儀は來巳年御暇被下間敷候間、可被得其意候。

別紙願之通被仰出候付、同姓出雲守儀來巳年御暇年には御座候得共、直詰越被仰出、只今迄

之通相應成御役等をも被仰付被下候様仕度奉存候。尤同姓美濃守儀は、當時在邑に付、定式

之通參勤之時節相窺候積相心得罷在候。

十　月　　御　名

出雲守は富山藩主前田利久

美濃守は大聖寺藩主前田利道

十月。前田重教近習の士をして和歌を詠ぜしむ。

〔政隣記〕

十月十七日、此間於金谷御殿、菊泱榮字と云題にて詩合一統ゟ從中將様詠歌仕候様被仰出候處、歌道一圓不心得之人々も多有之及難々候内、追々御番變代之人々出候而多人に成、一入及難々、漸三十一文字につゞり上之候由。且右之外大音帶刀殿・伊藤内膳殿ゟ詠歌被仰付、全而風雅之由被及聞召候旨被仰出有之。右兩人和歌者詠被申候事無之、連歌者少々被致候由。

右詠歌數首、皆々三十一文字をつらねし迄にて、和歌にも非ず狂歌にもあらぬ定に蜂腰故不記之。

十一月朔日。頭分の士を召して前田治脩が參覲の期を明後年に延期せんとの請を許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

八月十五日、聞番今村五郎兵衞儀御用有之候條、同役村田甚右衞門江戸表ゟ罷越、五郎兵衞与致交代候樣前月十三日被仰渡、同二十日甚右衞門發、出府交代有之。今月四日五郎兵衞江戸發、今十五日歸著之處、御內御用被仰出、九月八日金澤發出江戸ゟ罷越、十月二十八日右御內御用相濟金澤歸著。右御內御用之趣者、御國去卯年水損等に而御損毛八十萬石餘有之、元來御勝手御難澁之上彌增之御差支、且又士農工商とも及困窮、別而百姓共不穩躰、彼是無御據趣有之候間、來年御參府御用捨、午年御參勤被遊度段、五郎兵衞を以先御內々被仰込之上、表立御書附被指出候處、御願之通御聞屆、午の年御參府可被成候。且又出雲守樣ゟは來年御暇被下間鋪候。尤美濃守樣も御順年之通來年御參勤被成候樣、御付札を以被仰渡。十月二十二日右御付札物金澤到着、十一月朔日御用番本多安房守殿前々日依御奉書、頭分以上登城之處、於御之御間御年寄衆御列座、御用番橫山大膳殿右之通御演述。依之爲恐悅、登城之

人々御用番横山大膳殿御宅ゟ相勤候事。

翌年御勝手御難澁之上、去年御領國不作莫大之御損毛に而彌增御指支等に付、來春御參府御用捨、來々午春中御參府被成度旨御願被成候處、御願之通被仰出、難有御仕合被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意に候。

但右御願之通被仰出候御禮使、御馬廻頭中村左兵衞ゟ十月二十三日被仰渡、同二十九日金澤發足。

十一月十日。大小將橫目木村三藏、木村重成所持の兜を前田治脩に獻る。

〔政隣記〕

十一月十日御大小將橫目木村三藏、家に持傳候木村長門守重成所持之兜之儀、達御內覽候に付入御覽候樣被仰出、則入御覽候處、御留置被遊候段被仰出、今日御紋付御上下二具・白銀三十枚拜領被仰付。

十一月十五日。前田齊廣髮置の儀を行ふ。

〔金龍公御年表〕

天明四年十一月十五日御髮置。

十二月朔日。前田治脩と婚約したる俊姬が金澤に移徙の期定りたること

を告ぐ。

〔政隣記〕

十二月朔日、一昨日御用番大膳殿依御廻文、今朝頭分以上登城之處、於柳之御間御年寄衆等御列座、御用番大炊殿左之通御演述。依之登城之面々、御用番御宅へ爲御祝詞參上。

俊姫様御儀、來年二月十五日此表へ御引移、追而江戸表へ御出府之上御婚禮御整之筈に候。此段何茂へ可申聞旨仰出候事。

附記、俊姫様之俊之字、利之字に候處、先頃俊に御改之由也。且二月十三日大聖寺御發輿之筈也。

十二月十六日。安永九年以降五ヶ年の儉約は本年を以て終るといへども更に五ヶ年を延ぶべきことを命ず。

〔政隣記〕

十二月十六日、寺社奉行より以下頭分以上、一役一人宛御呼出、於御席左之通被仰出候段、御用番大炊殿御演述。

御勝手御難澁至極に付、安永九年より五ヶ年之内萬端嚴敷御儉約被仰付候段被仰出、當年に

爾右年柄讃候得共、去年御領國中莫大之御損毛に而、彌増御難澁至極に被及候段、各見聞之通に付、重而來年より五ヶ年之間、猶更嚴敷御倹約被仰付候條、何茂致會得何分出情有之、御倹約之儀存付候品々、猶更無泥年寄中迄相達可申候。此段改而一統申聞候樣、拙者共迄被仰出候事。

辰十二月

十二月廿三日。前田齊敬の病癒えたるを以て醫師等に酒食を賜ふ。

〔政隣記〕

十二月廿三日、御内々於二之御丸錄千代樣御本服御祝就被仰付候、今度御滯之節伺等被仰付候御醫師中、并陪臣醫師・町醫師被爲召、御吸物・御酒被下之、御目録金百疋宛拜領被仰付。

天明五年

正月朔日。前田重教乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

元日、中將樣御乘馬初今日有之。御馬奉行迄御上下拜領。

二日、夜御謠初御規式、六時過初り、五時過相濟。

自分は津田政隣

四日、御打初・御射初、九時前迄に夫々相濟。

正月四日。前田重教寶圓寺の隱居にその騎射を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

正月四日寶圓寺隱居、中將樣御騎射拜見被致度段被相願候處、御聞屆に而於堂形御馬場今日拜見被仰付。

二月十一日。前田齊敬、大小將中村九兵衞等に命じて繪を描かしむ。

〔政隣記〕

二月十一日、數千代樣去年以來折々爲御遊慰、二ノ御丸御式臺等ゟ御出、詰人姓名抔御尋之儀も有之候處、春來は度々御出、詰人ゟ繪被仰付儀折々有之。各多分松或は竹・梅・鶴等調上之。御大小將横目中村九兵衞之繪を書候に付伺候處、辨慶与御好に付則調上之。自分は富士出・三穗松原調之。料紙等者御抱守持參也。右御禮に者不及段、御抱守中申談。加賀守樣ゟ之御禮にも不及段御近習頭申談也。且今月十二日御出之節者、當番御大小將戸田五右衞門与御抱守与背競被仰付、此後度々右繪等被仰付候儀有之。

倹姫の婚儀は寛政十一年四月廿八日にあり

二月十五日。前田治脩と婚約せる大聖寺侯前田利道の女倹姫金澤城二ノ丸の廣式に移る。

〔政隣記〕

二月十二日、去年十二月朔日被仰出候通、彌當月十五日倹姫様御引移之筈。且御引移後ハ御名ヲ奉唱候様、從中將様被仰出候段御横目廻状出。

右に付十五日目次出仕朝五時揃、同日御城中ゟ罷出候者ニ、朝五時後服紗小袖・布上下着用之筈之旨も申談有之。

但、倹姫様今年御二十四歳之由云々。

〔政隣記〕

二月十五日、倹姫様一昨十三日大聖寺表御發輿、同夜小松梅林院に御止宿、十四日夜松任に御止宿、今十五日野町町端に御休所出來、從金谷様被仰進次第御發輿之筈。且同所迄御大小將横目雜爲平左衛門爲御迎罷出、御先騎馬等相勤。九時前金谷御廣式ゟ御着之上、中將様・倹姫様御對顔等有之。

夫ゟ御能御見物、暮前二之御丸御廣式ゟ御移被遊候。但於二之御丸御廣式御料理御獻立等、不承に付不記之。御用ひ之御蠟燭者翌十六日當番之節拜見仕候處、高砂尉・姥・鶴龜・松竹・

雛御押・蕗根元にふきといたう有之。都合五臺。

一、今十五日爲御祝年寄中・御家老中等、御赤飯・御吸物しふか・御酒、御歩並以上當番にも同斷頂載被仰付、足輕・小者に者赤飯迄被下之。夫々御禮、御臺所奉行承之。

一、今日切御通筋野町は舖町、片町は丸町、香林坊は香林橋与名目改之。

一、今日御著輿之節御行列左之通。

御先乘御横目篠島平左衞門　旅裝束。金澤町端迄御出迎、其所より御迎。　從者　御先拂足輕 御先拂足輕　此方樣御

横目足輕　御長持、宰領足輕　年寄女中乘物　足輕 足輕　荷挾箱　乘物

あなた御近習女中 こなた御中臈之内　荷挾箱　合羽掛竹馬四荷　足輕小頭　御挾箱 御挾箱　小人二人 小人二人

御傘　小人二人　御徒 御徒 御徒　御徒 御徒　御薙刀　小人二人　侍生駒金左衞門 侍村井矢柄　御輿

侍河野七左衞門 侍桑平孫三太夫　侍佐分孫三 侍若林彌源次　此方樣　御歩横目 御歩目付　御行列前後支配　御輿舁手替

御茶辨當、宰領足輕　小遣三人　乘物　あなた御近習女中 こなた御中臈之内　足輕　荷挾箱

乘物　こなた御表使女中　足輕　荷挾箱　乘物　あなた御次女中　足輕　荷挾箱

御長持、宰領足輕　御挾箱一荷　御召替御輿、宰領足輕　此方樣御橫目　足輕

合羽掛竹　馬六荷　御跡乘頭堀江志摩　御醫師竹內玄閑　押足輕　惣供合羽掛竹

馬六荷　押足輕 押足輕　志村五郎左衛門　從者

今十五日御着輿御用に携候頭分者就平日、平士以下前記之通り。

同日前記に有之頂戴物、年寄中等者於席、人持以下者於御臺所、夫々席分に而頂戴之事。

同日七半時過志摩美濃守樣爲御使者登城、取次御大小將階上迄出向、虎之御間屛風圍ゟ誘引。右御用懸り武田喜左衛門等ゟ爲知之。儀式奏列居御大小將御番頭・御橫目・御大小將九人也。御歩給仕ニ而御吸物・御酒・御肴、御用懸御使番原田又右衛門相伴に而被下之。挨拶懸り組頭喜左衛門申述。且又就御省略御料理者不被下等に候處、夜に入時刻移り候故御懸合、一汁三菜御饗應之御斷請被下之、御口見は無之。御口上取次幷御答共御奏者番。將又從美濃守樣年寄中等ゟ之御口上有之段志摩申聞候に付、虎之御間ゟ年寄中等各被出拜聞、御請も右御間ゟ答被出被申上候。志摩披候節、廊下ゟ御奏者番喜左衛門・又右衛門、最前誘引之御大小將迄送之。其外左之御作法書披之通、御作法書要文。

武田喜左衛門幷御使番之内一人、右御用懸り、志摩ゟ挨拶幷御作法等之儀も內々演述可仕候。

右相済御奏者罷出、御口上承、御目録可受取之。御進物者於此方御用意有之事故、御目録迄に候。且御口上取次人左之通。

御兩殿樣敎千代樣者御奏者番、御前樣等御四方者御附頭、芝御前樣者物頭代御用人、右順々罷出取次、御目録受取退。御品は柳之御間御廊下に而御目録に引合、與力本橋仙右衛門（御進物裁許也）等より受取可申候。右相済御奏者番罷出御答申述、志摩に被下候御目録も渡之。夫より御前檜垣之御間に御出、柳之御間御廊下迄御使番誘引、御杉戸之内より年寄中誘引、御奏者披露に而志摩御目見、御意有之、年寄中御取合申上、志摩退出。（ケ様に候得共、就御取込御目見不被仰付段被仰出。）於虎之御間中將樣・敎千代樣御答御奏者申述、被下物御目録渡候。従御前樣被下物之御目録は、御附頭河村儀右衛門持出渡之。右相済、金谷御廣式御用物頭並山崎次郎兵衛出、藤姫樣・龜萬千殿御答申進候事。

但、志摩往來河北御門且三御門勤番。尤御目見之節、定番頭以下御歩頭以上柳之御椽頰に伺公、各熨斗目。御門勤番服紗小袖・布上下着用之事。

一、倭姫樣御道筋、堤町より香林橋・南町・西町・七十間御門より金谷御廣式。

一、金谷御廣式より二御丸御廣式に御移御道筋は、七十間御門より西町篠原織部屋敷横、西町口御門より御宮坂、土橋御門、御廣式。

十六日美濃守様より、御結納被進候御禮之爲御使者、今日四時過堀江志摩登城。御目上御取次御奏者番昨日御使者之節同斷。三御門者御平常之通り、給事御歩ニ布上下着用、御吸物等者不被下候事。

〔御觸幷御返書留〕

別紙之通可申談旨、御用番主水殿被仰聞候、御承知被成、御同席御傳達被成候、以上。

二月　　　　御横目

　　人持衆中

附札、御横目わ

倍嫩様御着輿之節、御道筋警固足軽、辻々参懸候者ニ十五歳以下之もの者勿論、十五歳以上之ものニ而も、御道之障ニ不相成様、作法宜敷指置可申事。

一、御道筋町方外より参候ものニ而も、女之分且又十五歳以下之子共之分者、ニ十之内ニ作法宜敷仕指置可申事。

右之通被得其意、組・支配・家來末々より可被申渡候。組等之内以許有之面々者、夫々申渡候様是又被申聞候事。

二月二十日。石川郡粟ヶ崎に繫留する藩有船の修繕を直請す。

覺

一、塗川御座御船　一艘

但、損じ御用に相立不申候付、野村與三兵衞在役之內、安永六年四月御修覆相願、同七年十月御聞届被仰渡候處、御入用銀高過分御座候。暨其節雪中にも相成候に付、御届申上御修覆相見合置申候。

一、塗小早御船　二艘

但、內一艘損御用に相立不申候。一艘は野村與三兵衞在役之內御修覆有之、當時御用に相立申候。

一、白木小早御船　同斷

但、二艘共損御用相立不申候。

一、白木川御座御船　一艘

但、損御用相立不申候。

一、小早御船附之橋船　二艘

但、內一艘損、ふか入仕候。一艘に當時御用相立申候。

一、淺川御座御船附之艀船　一艘
但、損御用相立不申候。
一、車　御　船　二艘
但、二艘共損、御用に相立不申候。
右御船々損に御用に相立不申候に付、御屆申上候。數艘之儀に御座候間、追々御修復被仰付候樣仕度奉存候。右御船之內白木川御座御船之分は、御兩殿樣御出之節御用之御船に而御座候。
一、淺川御座御船之分し、御兩殿樣幷御姬樣御出之節、御用御船に而御座候。淺川御座御船之儀は、先達而御聞屆相濟候御船之儀に御座候間、今般御修復之儀、御勝手方御當局ゟも御屆申上候。右兩艘は御出之節指懸に御用之御船御座候間、此分格別之御詮議を以、早速御修復被仰付候樣仕度奉存候、以上。

巳二月廿日　野村次郎兵衛　判

二月廿三日。前田重教、俊姬を招請す。

〔政隣記〕
二月廿三日二之御丸御廣式ゟ俊姬樣御移後、始而中將樣御招請有之。御饗應之御次第不承候

に付不記之。

二月廿四日。神護寺に於いて徳川家基の第七回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

二月廿四日於神護寺孝恭院様御七回忌御法事御執行。御奉行前田大炊。御前御装束に而御参詣被遊候事。

三月十二日。越中新川郡の境が町なりや村なりやに就いて確定せんことを求む。

〔國事雜抄〕

境は部落の名

私支配所越中境之儀、村に候哉又は町に候哉之旨、其御場より御尋に御座候。古來より西町・東町与申來候。乍去御貸米願返上帳等には、前々より境村与有之候に付、元來村・町之儀得与相分不申候間、改作所上帳等之儀承合候處、鄉村帳に境村与有之候由に御座候。然ば境村にて、西町・東町与小名御座候与奉存候。依て支配所與力手前遂僉議候處、於支配所に古來より境之儀は町に御座候間、宗門帳に茂町与相調、暨御國目付巡見上使通行之節茂、御用之青物等町与相調申候。往古驛に而、于今驛御印茂町役人共手前に所持仕罷在、其節問屋相勤

候家も東町に有之候。此等之趣にては町にて茂可有御座候へ。右與力手前ニ而も難計段申聞

候ニ右之趣にて村・町之儀相分り不申候間、是以後如何相心得可申候哉被仰聞候様仕度奉存

候。以上。

巳三月十二日　　野村與三兵衛

御算用場

覚書

右紙面三月十二日御算用場へ指出候。同廿二日御算用場ゟ罷出、御用番小堀牛右衛門殿ゟ相

達候處、御算用場ニ而も相分り不申候間、是迄之通村共町共申候様にと之牛右衛門殿被申聞候。

尤藤田兵部殿・神保舎人殿にも列座有之候事。

美濃守は前田利物

三月廿三日。大聖寺侯前田利物初めて金澤城に登る。

〔政隣記〕

三月廿三日美濃守様御家督後初而御登城、於御居間書院二汁六菜御料理被進之、御對顔は無

御座候。（先日以來御風氣、十五日御夫〻出も金谷にも不被為入候也。）御退出、二之御丸より為御禮御立戻、追付御退出。土橋御門

内御堀端通り御廣式ゟ御勤。（御前御勝手之言に御作法等御附候、佳節様御逢被遊候、右之通りに相成候事。）夫より金谷御殿ゟも御出、

松之御間に於て中將様御對顔有之、御退出、為御禮御立戻り被遊候事。

三月。時疫大に流行す。

〔政隣記〕

三月下旬春寒立歸冬の如し。同月病人死人も甚多し。是時疫流行也。去十五日中川八郎右衛門人持組寺社奉行公事場奉行兼帯中黒六左衛門能州所口町奉行病死也。

三月。諸士の家來にして缺落・取逃等の罪を犯したるものを拘留する手續を改む。

〔御馬廻頭留記〕

付札、定番頭に

御家中之人々家來、欠落・取逃等いたし候者、於盗賊改方召捕候節、只今迄は先主人手前に相渡、其主人より公事場に引渡候得共、詮議之趣有之、以來者改方に而召捕候節、直に公事場に引渡、尤其段御用番に改方より相達、其主人にも及屆候筈に候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々者、其支配にも申渡候樣可被申談候事。

巳　三　月

乙御廣式は前田重教の女[illegible]

五月朔日。本日以後前田齊廣の爲に建てたる轎の觀覽を許す。

〔政隣記〕

五月朔日從萬千代樣御のぼり、七十間御門内に建、今日より五日迄見物被仰付候段、御横目廻狀觸有出、去年四月廿八日總狀同斷略す。

五月四日。中村十兵衞の養子乙次郎、その父を刺殺す。

〔政隣記〕

五月四日乙御廣式御用人並御二百石中村十兵衞養子乙次郎、通悞有之由にて養父十兵衞を今朝刺殺候儀露顯。翌五日夜爲檢使、御大小將横目四人・十兵衞支配頭・寺社奉行中從越、乙次郎手前糺明之上御達申候處、達聞至極之者に付、右乙次郎儀先牢揚屋に入置候樣御用番大隅守殿就仰渡、同夜公事場牢揚屋に入。乙次郎儀實は御大小將組會所奉行永原清太夫弟也。右に付清太夫并父方いとこ永原治九郎、（金谷御[illegible]依[illegible]大小將組頭也。）父實方いとこ安達多宮（御大小將組）等指扣伺候處、清太夫儀者指扣可罷在候。多宮治九郎は忌外之いとこ故不及指扣候段、翌六日御用番被仰渡に付、清太夫儀者頭親村彌左衞門於宅御番頭青地七左衞門立會にて申渡有之、治九郎・多宮へは以紙面申渡有之、書付這達有之。

右名別之外一類同斷、一々記略す。

一、安達多宮嫡子吉次郎儀爲には、乙次郎儀は母方實伯父之續に付、吉次郎儀爲指扣置可申哉与父多宮より書付出之。則頭津田林左衞門より御用番江相達候處、外出指留相愼罷在候樣可申渡旨同月八日被仰渡、則多宮江申渡有之。此外無息之人々同趣、一々記略す。

〔政隣記〕

一、永原清太夫指扣罷在候處、故中村十兵衞家內・家來共一類江御預に付、類中家來共指出勤番申付候得共、右家來迄に而者締方不行屆に付、毛利伊兵太・毛利兵左衞門十兵衞舊宅江罷越、夫々締方を談候得共、兩人迄にては差支候條、清太夫儀差扣中に候得共彼宅江罷越締方等申談有之度旨、伊平太等申聞に付、同月十日支配頭寺社奉行横山又五郞宅江伊兵太等相招、清太夫差扣者今般之一件に付而之事に而候間、十兵衞宅江清太夫罷越候儀者不差支段又五郞申聞候由。則伊平太等より清太夫方江申越候得共、又五郞之任指圖候事者難成段僉議に而、清太夫頭奧村彌左衞門より御用番江相達候處、無據趣に候間御聞屆可爲勝手次第旨、大隅守殿被仰渡、其段清太夫江彌左衞門より申談有之候事。

右乙次郎儀養父十兵衞を及殺害候趣意者、乙次郎常々不行狀博奕を好み候に付、今月三日朝強く加異見候處、其節者畏有之。暫以後外出、博奕有之場江罷越博奕打候處、大に負け着服・帶刀迄も被取之候に付、色々与才覺を以、刀一腰やう〳〵借受候而四日朝宅江歸り、將又養

兄弟ニ而常々致喧嘩罷在候に付、右兩人申談、拜若黨□と申者ニ申合せ、十兵衞居間江罷越候處、いまだ寢覺不申罷在候に付、頭上ゟ大夜着を覆ひ、其上ゟ跨り乘、下之方よくり、睾丸を握め、用門より刀を以刺通し令殺害。其節十兵衞儀、乙次郎等之所爲とは聊不心付躰に而、乙次郎并妻之名を二聲宛呼び、助け候得と呼びながら絶命致し候由也。扨疵口を洗ひ清め、病死之爲躰取計、一類江及案内候。右取計方に付容易に可及露顯仕抹にては無之處、右一味致候若黨□儀、一類中之内ゟ及露顯候に付、早速一類寄集り、先乙次郎を揚、并妻子ども揃ひ設候而、夫々頭等ゟ及案内候に付、早速令露顯と云々。

一、右十兵衞妻儀を揚牢、親者今石動に有之處召呼、其外一類十八人有之。

右一件に付度々不時公事場有之。

一、今年十月廿二日乙次郎儀、於土口殿に被仰付。

右に付實兄永原清太夫等忌引之儀、平合之者忌引無之事に候得共、會議分り不申に付、頭々より御用番本多安房守殿ゟ御尋申候處、爲致忌引候樣被仰指圖忌引書付取立有之。十一月二日就忌明出勤之事。

但、清太夫指扣者十月十二日御免被仰付、其外之人々も同斷。

五月七日、前田治脩、金澤大豆田口に放鷹す。

〔政隣記〕

五月七日晝頃より、大豆田口より加賀守樣御放鷹。御御柄鶴十一有之。但此後も折々御放鷹御出有之。時々記略す。

五月七日。前田重教、御先手三輪藤兵衞等をして一調を奏せしむ。

〔政隣記〕

五月七日、中將樣春以來者御騎射等御間遠之處、此間當分御延引被仰出、當時之御慰者太鼓・小鼓御稽古、折々於新御舞臺一挺御打被遊、拜聽も寄々被仰付。其刻者役者抔にも一管一挺被仰付。今日者御先手三輪藤兵衞に小鼓放下僧一挺、御大小將渡邊源藏に太鼓舟辨慶一挺も被仰付、暨御一挺も被仰付。御鐵炮御稽古は今以御入情、御近習頭等にも被仰付。

五月廿四日。定番馬廻組麻生新四郎流刑に處せらる。

〔政隣記〕

五月廿四日左之通被仰付。

小松定番御馬廻組

麻生新四郎

越中五ヶ山之內に流刑

八嶋猪三郎

追放

右元來不行賦者に付、先年小松に被遣候處、於小松も彌増不償有之故と云々。麻生に領百石、八嶋に百二十石也。

五月廿七日。諸士の他國に使者として出張したる際藩より借用したる小拂金銀返納の法を定む。

〔政隣記〕

五月廿七日、他國御使等之節不時に借用之小拂金銀、江戸・金澤共明和八年より去暮迄之分、今年より七月より十月迄之內、百石に二十目宛之割を以上納、御切米之分は十匁宛三月より十月迄之內上納可致旨被仰渡候由廻狀來。

六月十五日。諸士に博奕を行ふことなかるべきを諭す。

〔政隣記〕

六月十五日、御用番前田大炊殿組等有之。諸頭等一人宛御呼出、以御書立被仰渡之趣左之通。

御家中之人々行跡不宜者茂有之、第一侍に不似合博奕に假寄候儀就中茂有之候付而、前々より段々御制止被仰付候所、不相愼、近年別而致増長候躰相達御聽候。依之嚴敷御糺可被成

介は大にと訓む

候得共、先づ御猶豫被成候。先以右之爲躰、侍には猶更不埒成所業、不屆至極に被思召候。此上相愼不申者も候者、嚴重御沙汰可有之候間、兼而此旨を存、急度相嗜候樣・頭・支配人指引可仕儀之旨被仰出候。

右之趣被得其意、同役中可有傳達候事。

巳六月

六月。前田重教諸士の行狀を戒む。

〔坂井舊記〕

今度組中行跡愼等之儀に付、同役中中將樣御前ゟ被爲召、被仰出之趣御書立、并拙者共添紙面之趣、組中不殘拙宅ゟ呼出し申渡。御書立寫者筆頭由森外記ゟ相渡、封印を以巡達有之樣申談候事。

累年御勝手御難澁、當時者社稷最早危殆共可申時節に至候儀、一統奉承知罷在通。就夫御家中諸士介心得茂可有之筈也。近年米直段下直、諸色者高直、甚以難澁之處、風俗者成奢侈に相成、宴樂遊興を好、無益の物數奇等致し、謂なく難澁之人々茂有之樣被聞召候。畢竟御上茂御難澁故、困窮者一統之儀に候得共、人々手前行つまり候を打捨置、不相應之參會抔致、平生暮方油斷する族者甚以不埒之至、ヶ樣之所組頭明細に心を付、其人々之行跡等

嚴々は[illegible]と讀む

を相考、平生無油斷可加指圖。勝手向之儀者今日勤職之根本其可申事に候條、誠如何樣に茂致擔得、勤仕不指支心懸、其内に而分際相應の武器を嗜み、文道に茂携え之そ也。

一、新規に番入被仰付者に、古參之者共隨分心を注引廻、勤職擔樣成ニ取立置可申事に候處、心得違之者茂有之、不案内を致嘲弄、或振廻之節抔美味を爲取扱候之類、皆以古參之者心得不宜故なり。時節柄別而有之間敷儀に候條、急度相改之樣嚴々可致差引。

今般拙者共中將樣御前ゟ被爲召、御直に被渡下候御書立寫相達候條、被奉得其意、与得會得可有之候。是以發右被仰出之趣、急度可被相守儀者勿論之儀、如此被仰出候上者、拙者共心付候趣猶更時々隨分可申談候。併今般之被仰出に依而、武藝稽古等に茂被寄合候儀被致与申樣成事に而者有之間敷候。兎角無用之參會、或要物木石等を翫び、凡而奢侈榮耀ヶ間敷儀無之事而已肝要に候。尤御内意之趣茂有之候間、新規に番入有之節之參會之儀ニ、猶更堅く無用に候。此等之趣隨分會得可有之候。

一、子息所持之人々、二三男又者弟等諸侯ゟ養子に遣候儀、親類之面目有之者格別、輩等於無之者一向相成不申候。然諸侯者之娵等緣組を申合候儀茂、筋目ゟ無之儀に右同樣に拙者共承屆申間敷候。將又聟而養子緣組申合候節、持料与名付金銀を取受候儀、元來御停止に而度々被仰出茂有之儀に候得ども、以來者猶更右等之取扱無之樣可被相心得候事。

右之趣者中將樣於御前、右御書之外段々御内意之趣有之申談候間、急度可被相心得候、以上。

六月。女を抱へ人集めすることを禁ず。

〔政隣記〕

前々より被仰出置候得共、近年金澤廻り町方、幷寺社門前地、御郡方ゟ支配所において女を抱置人集仕、體出合宿仕候者多有之候由に付、今般松尾平九郎ゟ被仰渡、急度遂吟味申筈に候。近隣不存事は無之筈之處、右之族不屆之儀に候。向後左樣之者有之に於いては、本人は勿論曲事可被仰付候。兩隣・向家ゟ急度可被申付候。尤肝煎・組合頭無油斷遂僉議可申候。右之族於有之者、是又急度可被申付候。

右之趣被仰出候條、嚴重可被申渡候事。

乙巳六月

右之通寺社奉行・町奉行・御郡奉行ゟ被仰渡候。御家中長屋借ゟ・屋守等之内にも、右之族有之段相聞え候。是又急度可申渡旨被仰出候旨、大炊殿御添書を以御觸出有之。

六月。時疫流行するを以て郡方の請求により調藥を給することを告ぐ。

〔三守御譜〕

六月加州三郡之内、先頃以來時疫流行に付、御藥被下間、御郡奉行斷次第調藥指出候樣、御

醫師中へ可申渡旨、三田村内匠へ被仰渡。

七月朔日。組頭等に藩の財政窮乏の状を告ぐ。

〔典制彙纂〕

御勝手御難澁至極に付、町・在より之御借銀等莫大に相成候處、過分至極之御引當米に付、當金前御返濟之手段一圓無之に付、御返辨方御猶豫、御返方出來候上者追而御返濟取計候之儀、御算用場奉行等ゟ申渡候。如此之御勝手御行詰に付、此上は御家中ゟ御かり米増穀に而茂不被仰付候半而ハ難被成候得共、御家中茂追年勝手向難澁至極に付、御救も不被仰付候半而ハ難成程之躰故、其儀ハ茂難被及候。左候得者御救之手段者猶更御手に及不申、御心外成事ニ候。然處會役之通先納銀等此度御返濟方御定に付而ハ、町・在及難澁候事故、當七月半納米賣御指支候儀茂可有之哉に候へども、右之通之御勝手振に候間、此處深察有之、何分被申談取賄候樣可被取計候。最先來御取賄ニ而不致符合、年中御入用高に付、此上各別に御省略不被仰付候半而者迚難相成候。此御時節ゟ奉ゟ候而、何茂致會得候樣有之度儀に候間、各同役中被申談、可然樣被申解候様存候事。

七月朔日　　安房守

右墨書、組頭初筆頭々二人宛相招、於別席口達に而申述墨書相渡。

七月十一日。金澤城本丸の番士、その保管の鍵を紛失せしめたるを以て遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

七月十一日、御本丸御番人定番御馬廻十一人。

作七兵衛組

駒井淺右衛門　永井儀右衛門　松宮吉兵衛　青木善太夫

熊谷半藏　佐藤清藏　横地善助

松田治右衛門組

丹羽久太夫　河合右膳　金岩嘉太夫　多田直丞

右東丸境御門鍵致紛失、不念之趣に付、今十一日遠慮被仰付。但右鍵は御本丸御番所預之處、當番之節紛失故也。

〔政隣記〕

十月七日

一、御本丸御番所預り之鍵紛失に付、今年七月十一日於金澤遠慮被仰付置候定番御馬廻之内、八人今日御免許。

左之三人は御免許無之。

河合左膳　佐藤清藏　青木善太夫

七月十二日。疫疾流行に付藥法を郡方に傳ふ。

〔加藤氏日記〕

頃日疫病流行いたし、輕き者共相煩候段相聞得候。依而御醫師中洽議被仰付、別紙藥法書揚候に付、拙者共迄被渡下、夫々無急度相觸候様被仰渡候に付、別紙藥方書相廻之候條、可得其意候。輕き者相煩候儀被聞召、藥方被下候儀難有奉存、其段不相洩様可申渡候。先々無遲滯相廻べく候、以上。

巳七月十二日　　御用番　蓮士壹宮

能州四郡十村中

疫病之藥

一、松葉を細に切、酒にて一匕程宛一日に三度飲てよし。

一、小豆を布の袋に入れ、井の内に三日おき、男は十粒、女は二十粒飲てよし。

右頃日疫病流行いたし、輕き者共相煩候段相聞得候。依之御醫師中洽議被仰付、右之藥方書上候に付、各迄被遣下候條、夫々無急度相觸候之様、三州御郡奉行・遠所奉行等へ可被申聞

候事。

　　天明五年　　　　　　御算用場

七月廿一日。道中筋の人馬賃錢を割增することに關する幕令を傳ふ。

〔御觸幷御返書留〕

道中筋宿々米穀高直等に付、從公儀相渡候御書附寫一結二包相越之候條、被得其意、御組幷與力、且又御家來末々迄可有御申渡候、以上。

　　乙巳七月廿一日　　　　本多安房守　印

　　長大隅守殿

田沼主殿頭殿御渡候御書付寫一包相達之候。被得其意、答之儀は久松筑前守方に可被申聞候、以上。

　　六月廿日　　　　　　大目付

　　松平加賀守殿留守居中

道中筋宿々米穀高直、其上流行病に而人馬繼立差支候由相聞候に付、東海道筋品川より守口迄、佐屋路幷渡舟場とも、當巳七月朔日より來る卯の六月まで拾ヶ年之間人馬賃錢四割增、中山道筋に先達而增錢無之分、沓懸より守山まで幷美濃路共、是又當巳七月朔日より來る子

六月迄七ヶ年之間、人馬賃錢二割増受取候樣宿々ゟ申渡候間、可被得其意候、以上。

右之趣向々ゟ可被相觸候。

巳六月

七月　羽咋郡・鹿島郡の百姓等が食用に供する物の品種を上申す。

〔加藤氏日記〕

羽咋郡・鹿島郡里方并山方村々百姓中食事に仕候品々

一、大唐米　一、[illegible]粉　一、ゆしこ
一、大麦　一、小麦　一、蕎麦
一、稗　一、粟　一、黍
一、大豆　一、小豆　一、蕎麦の日屑
一、寄豆　一、大根、但葉共　一、蕪
一、干菜　一、大角豆　一、小豆の葉
一、畑芋　一、芋子葉　一、おばこ
一、せり　一、よもぎ　一、ちゝこ
一、山牛蒡　一、あかざ　一、わさび

一、りやうぼ　一、だつま　一、いたごり
一、のびり　一、たんからし　一、けぶき
一、裏白　一、豆ふかす　一、醤油かす
一、あさみ　一、いんどう

同凶年食事仕候品々

一、こぬか　一、栗ぬか　一、稗ぬか
一、飴かす　一、酢かす　一、たにし、但田に生じ申貝に而御座候
一、たれ貝、右同断　一、ごくだめ　一、じねんご
一、くずね　一、藤の葉

右之外浦方幷潟廻百姓中食事に仕候品々

一、小海老　一、しゞみ　一、藻の實
一、いご

右私共御郡百姓中食事に仕候品々書上申候、以上。

巳七月　孫右衛門
平右衛門

助左衞門
喜八郎
五左衞門
五兵衞
喜三次
彌兵衞

御改作御奉行所

八月廿二日。前田重教自ら藩の財政整理の任に當るを以てその吏を命ず。

〔稿實雜記〕

八月廿一日安房守等中將樣御前江被召、御勝手向之儀御心付之趣も被爲在候間、御勝手方之儀御引取御取捌可被仰付与思召候旨等御意。且御算用場奉行に富田權佐（兼改作奉行・御勝手方兼帶）・富田彥左衞門・篠嶋庄兵衞・池田權左衞門・長野七左衞門・多田左守・久田忠左衞門被仰付、前田三郎太夫御算用場奉行御免除等之儀御親翰被渡下。

〔政隣記〕

八月廿二日、今日より中將樣御勝手向御下知に付、左之通被仰付。

改作奉行并御勝手方兼帯

御馬廻組 富田彦左衛門　同 篠島庄兵衛
同 公事場御横目より 奥野七左衛門　同 多田左守
同 久田忠左衛門　同 池田權左衛門

御勝手方御用御免除

會所奉行は只今迄之通り 矢部友右衛門　和多田八太夫
太田彌兵衛　水野平左衛門
堀田治兵衛　田邊孫助

產物方御用御免除

小森貞右衛門

右之外只今迄之改作奉行御免除、內寺西多太夫・木村次右衛門者御免無之、同月廿六日御勝手方兼帯も被仰付。

右今般御引受御下知之趣意者、富田彦左衛門・池田權左衛門棟取に而一封認之、金谷御廣式向最寄取次を以池田より上之。依之御引受御下知可被遊旨被仰出候由等之風說也。且富田・池田者中將樣御近習兼帯与被仰出、直に奉言上与云々。

附、右に渡候產物方兼帯和多田八太夫・水野平左衛門、改作奉行杉野多助・堀田治兵衛、是又都而御免除之事。

九里幸左衛門を金澤町奉行

本令は諸所町以下に及ぼすにより九月六日撤回す

九月八日、金澤の質商の營業を停止し、質物を本主に返して三十ヶ年賦の債務とすべきことを命ず。

〔袖裏雜記〕

九月八日町奉行九里幸左衛門へ渡之。

町奉行へ

町中質屋致商賣候者、當夏以來銀支等申立其用不辨、輕き者共甚困窮。當年にも不限、毎年時々不辨至極之由相聞え候。元來質屋之儀にて、末々輕き者共之爲之爲致商賣事に候へば、不掃支樣可相心得處、是迄質貸方等閑之致方、末々輕き者共差支も不顧段不埒至極に付、右商賣方取揚追込に可申付候。仍而品物之儀は、先々持主ゟ相返、來午之年より三十ヶ年賦を以代銀取立可相渡候。右之通申付候付、此以後質商賣差止候而は、末々差支可申候間、相應之者右商賣相願候樣可申渡候。尤願候者有之は、相應に銀子貸渡有之樣可申渡候。右之通可申渡旨、從中將樣被仰出候條可被申渡候事。

〔政隣記〕

右に付金澤町質屋百十人不殘追込申渡有之。

〔袖裏雜記〕

御郡支配寺社門前地質屋之分も、前に記す町奉行ゟ申渡候同様可申渡趣御書立、九月十二日御渡、且左之通可觸出旨も御意。

質屋共取置候質物持主ゟ相返、來午之年より三十ヶ年賦を以代銀取立可申趣、先達而夫々被仰出候通に候。然處御家中小者・奉公人等之類卑賤之者共、至而少分之質物代銀、右年限に割方も難相成程之分は、無指引に而品物相返可申候。質屋共手前ゟは、追而御上より御沙汰可有之候。此段一統爲申聞候樣被仰出候事。

九月

寺社門前地質屋追込、九月廿六日御免申渡。

九月九日。町奉行片岡孫兵衛・中買組合頭割出屋久兵衛以下役儀不相應を以て處罰せらる。

〔袖裏雜記〕

町年寄片岡孫兵衛、役儀不相應に付、役御指除御扶持御取上。中買組合頭割出屋久兵衛・戌亥屋仲助・油屋半左衛門心得不宜に付、御扶持御取上、中買組合頭御指除。右組合頭大竹屋庄右衛門、御嚫爲許勤候付被下候二人扶持御取上。右組合頭越中屋彥三郎不屆之趣被聞召候付、御扶持御取上、役指除。右組合頭越中屋次左衛門・鶴來屋吉兵衛・茶屋仁兵衛、去年御扶

特就下候ニ付、御取上之旨。中將樣より被仰出、九月九日町奉行ゟ申渡。

九月十一日。産物方を廢しその事務を改作奉行の所管に復す。

〔[illegible]記〕

産物方廢被指止候付、如旧改作奉行ゟ右主付被仰付、富田彥左衞門・池田權左衞門兩人申談可相勤旨、九月十一日被仰出。

〔政隣記〕

九月十一日於金澤、左之通從中將樣被仰付。

御勝手方幷產物方御用御免　村井又兵衞

九月十一日。勝手方御用を前田土佐守一人に處理せしむ。

〔政隣記〕

九月十一日、前記之通又兵衞殿御勝手方御免に付、土佐守殿一人役ニ被仰出。

御勝手方御用無之、執筆御免　寺西作右衞門

御省略方御用無之　本多安房守

　奥村主水

九月十二日。勝手向諸役所の事務を調査しその役人を交迭せしむ。

〔政隣記〕

九月十二日、御勝手向小役所しらべ被仰付、薪所小役人に至迄入替被仰付。

九月十二日。家中の諸士以下に質物を受出し及び債務に對する證文交附等の手續を告ぐ。

〔政隣記〕

御家中之面々自分質物、曁家來之分も、其主人致引請に、當月迄之利足相加へ、元利〆高支配人之奥書之證文町會所ゟ取置、毎歳七月年賦當り取立可申事。

右之通夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

九月十二日　　九里幸左衛門

前田大炊樣

右に付質物置主ゟ相返候日限、曁年賦證文等之儀都而町會所ゟ可承合旨、別紙町奉行紙面之趣可相心得旨等、御用番大炊殿より御廻狀出。

〔御觸并御返書留〕

質屋共手前之儀に付、別紙寫之通町奉行ゟ申渡候。依之右質屋共より置主ゟ質物相返候日限、

豐右質物借年賦證文等之儀、都而町會所に承合可申事。

一、質物年賦證文等之儀、別紙町本行紙面等之通相心得可申事。

一、質物置主に相返候に付、請取人指遣候節、質屋に爲驗方町附足輕指出置候樣、先役等之儀に付及言論不申樣、家來等に急度可申渡候事。

右之總被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之内其許有之人々者、其支配にも相達候樣被申談、尤同役中可有傳達候。

右之趣可被得其意候、以上。

九月十二日　　前田大炊

天明元年閏五月廿九日の條參照

九月十二日。金澤堂形の畑を廢し舊の如く明地と爲さしむ。

〔政隣記〕

九月十二日、堂形新畑被毀、暫時之内如元明地に被仰付。依之大豆・小豆拾ひ候申者も有之。但花屋讃左衞門請地に仕、大豆・小豆作置候處、右之通に而損毛、剩讃左衞門追込に被仰付。

九月十五日。前田重教農事に就いて注意すべき事項を令す。

〔觸留雜記〕

左之通早速可申渡旨九月十三日御意。

餘米は用米

劇は其の義

敦は致と訓む

物はこと、訓む

役仁は役人

諸郡隠田蹈出除地捨地之分、新田開發或手上等之儀第一に遂僉議、拔目無之樣淑々可申付事。

收納米皆濟之儀、少不作之年にても大概指支申儀有間敷候。惣而十村・百姓高持共、餘米先に取、年貢米跡に相成候故、皆濟之指支に成躰、劇不届至極に候。年貢米第一に心得不申族不埒至極。餘米先取敦故、皆濟之節に至小作可及難儀も可有之候。小作手前不足は、高持より少々づゝ見次遣候へば、皆濟も支不申等に候。以後は急度相心得候樣に夫々可申談候。此等之趣改作奉行にも是迄不行届處、無油斷取捌可申事。

諸郡鞭地場所等之儀相糺、夫々立歸候樣可申付事。

諸郡川除普請所等之儀、とくと遂僉議可申事。

右之條々嚴重申渡取捌可申候。彼是及違背申輩於有之は、時々不及伺曲事可申付候物。其方共抽丹誠勤申上は、若仕毀儀有之候ても宥免可致間、毛頭無泥相勤可申候。當時勝手方指支候條、入用等增不申樣取計可申候。其外諸事心付候品、聊無泥速に可申上。

附、諸郡扶持人幷十村・新田裁許・山廻・村肝煎・組合頭等之役仁共、百姓之内にも甚之不屆者多有之段、委及承候間、必油斷不仕取計可申事。

天明五乙巳九月

改作奉行に

可強は強む
べしと讀む
如し

其方共支配取〆不行屆儀有之躰、萬端無〻心付可強。支配之義官㑹方など米方之儀に付、下役人共甚不埒之取計有之處、奉行之內にも宜事と心得、用ひ申人〻も有之躰、且細承およぶ。今般勝手引取候儀皆承知之通候。改申渡す條、心得違無之樣に可相守候。作方之儀に付改申渡候條々有之間、支配之者共心得違無之樣、嚴重可申渡置。若改作方之儀において彼是と申觸す者もあらば、急度曲事に可申付候。末々迄斯筋得と合點參候樣可申渡。支配之扶持人并十村・山廻等之者、其實不竭只之沙汰も有之躰、不屆至極に候。是以後嚴重に可相勤事。

九月

宮腰町奉行
小松町奉行
所口町奉行
高岡町奉行
魚津町奉行
諸方部奉行

右九月十五日夫々申渡。

九月十五日。諸士の借銀は凡て永年賦として返濟すべきを命ず。

〔政隣記〕

九月十五日、於金澤御用番等之諸頭、暨支配有之人持御呼出、於御席御用番大炊殿左之御書立御渡之事。

御家中諸士、近年勝手難澁之儀被聞召候。然處當時一統承知之通御財用甚御指支、最早御仕送方御手段無之程之期に至り候故、中將樣御勝手御引取御下知被遊候。仍之御運方御詮議之上、御家中御借知被返下度被思召候得共、兼而之思召与は致相違、彌增之御逼迫に付難被及其御沙汰、御心外被思召。左候得者取續方可爲難儀候間、諸借銀等返濟方、相對を以永年賦に申談、是以後幾重にも儉約專にいたし取續、惣而質素に相慕可申候。其內御勝手向御成立之道も付候はゞ、御借知も御返可被成候。將又諸士風儀惡敷、其內金銀等貸附之取組致候者も有之段、具に被聞召候。就中收納米拂方不埒之族も有之躰に相聞候。甚不愼之至、急度御糺可被遊候得共、御下知始之御事故不被及其御沙汰候。畢竟困窮より僅之世帶書算違等出來与被思召候に付、人々收納米藏縮之分、當年より藏解被仰付候。尤收納米拂方不埒有之輩者、急度御咎可有之候。人々其覺悟尤に候。右之通一統可申渡旨、從中將樣被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配にも相達候樣申渡、尤同役中傳達可有之候事。

九月十八日。前田重教政務を監するを以て小吏の任命にもその同意を經べきことを定む。

〔袖裏雜記〕

九月十八日御用番金谷へ罷出候處、中將樣御勝手御引取御下知被遊候内は、御在國・御在府にても、小役人たりとも、加賀守樣より中將樣へ被仰達候樣可申上旨御意。其段加賀守樣へ申上候處、被仰進候趣一々尤被思召候。此旨宜申上候樣御意に付、重而中將樣御前へ罷出申上。

九月十九日。御馬廻組頭原五郎左衛門知行を加増し人持末席に列せらる。

本年十二月廿一日の條參照

〔政隣記〕

九月十九日

御馬廻頭並公事場奉行

一、御加增二百石　原　五郎左衛門

先知都合千二百八十石

五郎左衛門儀、幼年より大應院樣御部屋住以來數十年、品々重き役儀入精相勤候に付、如斯

御加增被仰付、人持末席に被指加、佐々木孫兵衛次、石野主殿助上に列居、當分御用番支配被仰付。尤公事場奉行只今迄之通可相勤旨被仰出。只今迄之御役料は被指除之。

九月廿五日。訴筒箱を公事場門前に出しその投書を前田重教に呈せしむ。

〔政隣記〕

訴筒大さ高さ五尺計、横三尺計。箱の大さ高さ二尺六・七寸計、幅二尺計、横一尺五寸計。是公事場門續下之方土塀際に置之。尤番人無之。

右今月廿五日より被置之。名前無之投書者上り不申火中、名前有之分者中將樣上之候樣被仰出与云々。

（今月は九月）

〔續漸得雜記〕

十月十七日より公事場前訴筒箱出來、出る。箱之上の口より善惡の事を記し入る也。毎朝御改御歩横目一人、割場より兩人宛參り引出し相改、其儘御次に指上申事也。但其後御改法相止申に付、翌年十一月御取捌に相成候事。

（十月十七日とあるは誤なるべし）

九月廿九日。盲人の支配に關する幕府の令を領內に傳達す。

〔御觸并御返書留〕

中國・西國筋其外是迄無支配之盲僧之儀に付、従公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、

被得其意、御組幷與力且又御家來末々迄可有御申渡候、以上。

九月廿九日　　本多安房守　印

長大隅守殿

松平周防守殿御渡候御書付寫一通相達之候間、被得其意、右之儀に牧野大隅守方ゟ可被申聞候、以上。

八月八日　　大目付

松平加賀守殿留守居中

中國・西國筋其外是迄無支配之盲僧共、青蓮院宮御支配に相成候に付、武家陪臣之悴盲人は盲僧に相成、右宮御支配に附候共、又者鍼治・導引・琴三味線等いたし檢校之支配に相成候共、勝手次第たるへく候。百姓・町人之悴盲人者盲僧には不相成、鍼治・導引・琴三味線等いたし、檢校之支配に可相成候。若内分にて寄親等いたし盲僧に相成候儀者、決而不相成事候。右之外百姓・町人之悴盲人に而、琴三味線・鍼治・導引を以渡世不致、親之手前に罷在候而已之もの、幷武家ゟ被抱、主人之屋敷又は主人之在所ゟ引越、他所之稼不致分者、安永五申年相觸候通、觸外にたるへき事。

右之通可被相守旨不洩樣可被相觸候。

是月は大盡なり

八月

九月晦日。能登に於ける御預地の百姓に對しその取締を嚴にすべきことを命ず。

〔袖裏雜記〕

左之御書立九月晦日御渡、十月朔日御算用場奉行に相渡。

御預地之者共人氣惡敷、緩怠に相成、申度儘を申、風俗不宜候。彼是与及問答候へば、可及公訴等申候に付、一統相泥申故、彌申度儘に相成、不作法之族も有之旨被聞召候。容易に公訴可相成儀に而無之候條、以來は其心得を以隨分嚴敷申付、緩怠之族有之候はゞ急度可被相咎事。

九月

九月晦日。儉約所を廢し、御用所に於いてその事務を執らしむ。

〔政隣記〕

九月晦日、金城御儉約所今晦日より被指止、於御用所御副印押候樣、中將樣より此間被仰出。

本年九月八日の條參照

江戸御倹約所者十月九日より被指止、是又御用所に而御副印押之。
金澤朔ゟ暫能・越十村共番代相止、十村共直勤に可致旨、中將樣より此間被仰出有之。

九月。遠所町方等の質屋は取質・請質凡て從前の如くなるべきを告ぐ。

〔御郡典〕

今般當町質屋共、御様子有之、質屋商賣御取揚、品物持主ゟ取戻し、代銀三十箇年賦を以返濟之儀被仰出候。遠所町等末々之者共、當町同樣品物取請申心得に相成居申躰に相聞え、甚不埒之至に御座候間、急度相守、唯今迄之通相心得、取質・請質共都而質物取亂不申樣可相心得儀に候間、了簡違無之樣嚴重御申渡可被成候、以上。

巳九月　　富田養左衛門等七人

蓮士齋宮樣

九月。藩の町方に對する八月以前の買上物代銀支拂は當分之を延期すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

九月、町奉行ゟ左之通り被仰渡。

累年御勝手御難澁之處、次第に御運方指支、御手當も難計期に至候。今般御勝手方中將樣御引請御下知被遊、御改法被遊候思召候。依之是迄指上候諸色御買上物等代銀、當八月迄指上候者は、御詮議之上夫々可被及御沙汰候。如斯被仰出、一統被爲難澁儀、以之外に被思召候。此所者格別に奉存、是以後入情仕御用相辨、不指支候樣に夫々可被申談候。向後御拂方七月・十二月兩度可被相渡候。急切なる御用之儀は、其節遂詮議可申上旨被仰出候。指懸り候御送方等御指支候に付、右之通早速夫々可申渡旨、從中將樣被仰出候間、此所末々可申談候事。

巳　九　月

九月。百姓の天明四年以前に係る借用證文にして書替へざるものは効力を消滅せしむ。

〔御用大綱拔書〕

一、御改法之時貸借等無差別同事に相成に付、十村與書等之儀、天明四年以前借用證文書替不申分は不及貪着、夫以後之分者綺害に指引相立候樣御觸渡之事。

九月。足輕・小者等にその分限を守るべきを諭す。

〔政隣記〕

本文は九月のことに係る

諸組足軽・小者迄年者分限ヲ取失ひ、平生善方不相應之躰相聞候。且又家居宜敷、土蔵迄所持仕者も有之様子に候。家居夫々相應に致させ、土蔵者必毀に爲取可申候。將又被召抱候砌、或定役に罷成候砌、爲仲間入不相應之振舞致し候由。曁妻子等衣類等も先年与者違ひ、絹類致着用候者も有之由、向後綿衣之外着用致間敷候事。

一、今般諸士へ統借銀永年賦被仰付候儀に候得者、御家人之儀者一統之事に候。組々小頭等手廻し宜敷者共、御下ケ米を致引當に、困窮をし不顧、理不盡に返濟方爲相立候故、勤仕に茂相障、心外御暇相願候族も數多有之由其不埒至極に相聞候。畢竟其頭・支配人常々最到等閑成故に候。此度借銀等爲相改、返濟に爲相宥、都而右之通可取計候。

右之趣夫々不相洩様可被申渡候事。

乙巳九月

右御書立従中將様被仰出候由、御用番安房守殿被仰渡候事。

本多安房守の教令も十月朔日にあることは前項に見ゆ

十月五日、天徳院に於いて前田重靖の三十三回忌法會を執行す。

十月五日は重靖の忌日なり

〔政隣記〕

十月五日、昨今於天徳院大珠院様三十三回忌御法會御執行、御作法等前々之通。今日御南殿様御参詣有之。且十一日前々之通御使御大小將不破直記ヲ以、御茶・焼饅頭・狗脊一箱宛被遣

之。

同日於江戸廣德寺ゟ御茶湯御執行。役附左之通前月二十一日申談有之。

取次并御香奠裁許相兼　津田權平

　　　　　　　　　　　別所三平

御　給　事　　　　　　野口左平次

一、右御茶湯に付三日より五日迄普請・鳴物等遠慮。且五日御茶湯濟候後并六日兩日之内拜參等之觸、右同日出。

一、於金澤も前之通御法事觸等有之。

〔政隣記〕

當五日就御法事、五十人出牢被仰付。

十月五日。石川郡粟ヶ崎村木屋藤右衛門の帶刀をその願に依りて停止す。

〔袖裏雜記〕

粟崎藤右衛門帶刀之儀、御算用場奉行紙面之通可申渡哉之段、十月四日伺之處、伺之通被仰出。

右被仰出之趣、左之通翌五日申渡。

天明四年六月廿九日の條參照　粟崎は苗字として用ひたるなり

本年十二月の條參照

御算用場奉行江

粟崎藤右衛門儀、今津甚右衛門替被仰付、帶刀仕罷在候處、商方に指支候趣有之に付、帶刀相止申度段願之趣、藤右衛門紙面に各紙面相添被指出候。願之通帶刀爲指止可申候。帶刀指止候へは、最前之身分に相成、御郡奉行支配可被仰付儀とも被存候旨、各僉議之通被仰付候條可被申渡候事。

十月六日。郡方に於ける變死人檢視の爲出張したる足輕に食餌を供給する件に關し令す。

〔御郡典〕

町・御郡方之内變死人等有之、公事場檢使遣候節、檢使并召連候足輕等江食餌等指出候に付、諸入用失墜多相懸り、末々致難儀候事有之躰に付、先年より申渡置候得共、猶更以來嚴重相心得、食事之儀は調候得者事足申儀に候。今度相心得候樣、公事場奉行よりも檢使等江申渡候條、惣而費之儀無之樣相心得可申事。

附り、都而御郡方總村、向後右に準し、村方に而聊も費懸り不申樣可相心得事。

右之通從中將樣被仰出候條、夫々可申渡候事。

別紙之通被仰出候に付、寫相達之候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十月六日　　　御算用場

進士齋宮殿

政隣記は十二日に作る

十月六日。僧徒・醫師等よりの借銀并に無盡の銀子も亦永年賦辨濟すべきことを命ず。

〔御觸并御返書留〕

別紙之通從中將樣被仰出候に付、相越之候條被得其意、組・支配之面々江可被申聞候。組等之内裁許有之人々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月六日　　　本多安房守

諸士并御家人之分、今般一統借用銀、來午の年より相對を以永年賦申談候樣申渡候處、銀主等之内僧徒類・醫師或者厄介人・浪人躰之者等より、借用主格別之因みを以取組候類ひ、將又打入無盡等与名付候而、賴母子取立申者茂有之躰に候。元來賴母子之儀者御停止之儀候處、心得違之面々茂有之、ゆるかせに相成候躰に候。只今迄之分、借銀同樣相對を以永年賦等に致兼候人々も可有之樣子相聞江候。左候而者、此度一統勝手成立之ため申渡候詮も無之儀候間、如何樣之者銀主等に相成可有之共、借用金銀并打入出銀等之分迄も、無泥永年賦等之申

遊山院とあるは瑞山院なり

御可仕事候間、諸頭組・支配之人々ニ一統可被申談候之事。

十月七日。金澤卯辰日蓮宗妙圓寺等の住持禁牢を命ぜらる。

〔政隣記〕

十月七日禁牢。

卯辰日蓮宗　妙　圓　寺
寺町禪宗　遊　山　院
同　所　開　善　寺

〔政隣記〕

前記七日禁牢被仰付候寺院前夜更に賴出之。

廣昌寺　大圓寺　桃雲寺　大乘寺　寶林寺　觀性院

十月八日。組外の士脇田伊織、嫡子雄三郎と共に出奔す。

〔政隣記〕

十月八日、組外脇田伊織儀、一昨六日・昨七日・今八日と金谷御殿に被召出、御親翰被成下候處、御詩不指上、今夜嫡子雄三郎同道出奔。但御前にも被召出候共云々。且書置有之。其文中國變に付身退ヶ有之抔風説有、不慥。

十月九日。割場役人等音物を受けて依怙贔屓の沙汰を爲すを戒む。

〔政隣記〕

十月九日。

割場足輕・小者風俗近年惡敷相成、棟取候役人觸番等之者共、第一依怙贔屓專に候。無謂音物を受候族に而、譬へば足輕老人共を烈敷勤所に懸渡し、若き丈夫成者を緩なる勤方に懸渡候類多、甚不順之仕形に相成、下々殊之外及難儀候族も有之躰被聞召、彼是不屆至極沙汰之限りに被思召候。奉達御聽にも儀に候得者、奉行不役儀有之間鋪處、見逃し置候段不埒に被思召候。此度諸向右躰之不埒御吟味有之、段々嚴重被仰付候條、以來少分之品たり共音物等之意味を以、依怙贔屓之沙汰有之者、急度被仰付可爲曲事候。此段下々にも爲申聞、猶更無油斷致指引、奉行不能了簡儀者夫々急度相咎、不屆之族有之候者卽刻可及言上候事。

十　月

十月十一日。金澤城二ノ丸菱櫓の造營を命ず。

〔政隣記〕

十月十一日石川御門御普請相止、二の御丸菱御櫓御造營被仰出。

十月十三日。諸寺庵の出家に對しその不埒の行爲あるを戒む。

〔袖裏雜記〕

左之御書立并覺書を以、十月十三日寺社奉行へ渡之。

近年諸寺庵之内風俗甚猥敷、譏僧形を取失候族多、別而住寺どもも相勤候者等に重き身分に候處、法儀を破り候へは、寺内等之僧徒も彌不儀に押移候事に候。然處甚亂法之輩も有之候儀、沙汰之限に候。依之格別不埒之族には、今般御吟味之上夫々禁牢被仰付候。此外破戒無慚之出家數多有之候。先以祝得とも不顧、剃法衣を着し、内々にて肉食女犯等致增長、制戒を不恐、勝手次第に相働候儀に多罪之至候。且又其内には金銀を貯、所々え貸付候寺庵も相有之候。一向有之間敷儀、境界を打忘、利欲至極之事候。彼是不埒之輩、寺號等委細聞召被届置候付、此上嚴敷可被及御糺明候へども、先暫御猶豫被成候條、向後急度相慎、擧僧道途失不仕様、諸寺庵え嚴重に可申渡候。此上不慎之族於有之は、急度可被處罪科事。

十　月

十月十五日。前田重教足輕の下人を伴ひて徘徊するを禁ず。

〔泰雲院様被仰出候御題紙等之寫扣〕

一、巳十月十五日左之御書立安房守相渡候。

足輕共、男女等不限、下人を召連致徘徊者茂有之躰被聞召候。是又不屆之至に候條、是以後有之族有之候はゞ、夫々支配方より相糺、嚴重可申付候。萬一左様之者達御聞候はゞ、曲事

可被仰付候樣、中將樣被仰出候條、被得其意、急度可被申渡候事。

十月十九日。前田重教諸役所に命じて日々の用務は當日中に處理せしむ。

〔政隣記〕

十月十九日。

諸役所其日々々之御用、成限り其日切取捌、日延に成不申樣可心得候。假令夜に入少御費に成申候共、其儀者不苦候條、諸算等者別而早速に可致決算候。其外御用向、其日之分成限り其日切に仕廻可申候。御用多節者早朝より出可申事。

一、諸役所共、從御先代人數多に相懸候躰に而、加人或は手傳人等取申樣子に候。御用多故に者可有之候得共、精誠人少に而御用方相濟候樣可相心得事。

右之趣諸役人嚴重に相心得候樣可申渡旨、從中將樣被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

十　月

右金澤に而者御用番、江戸に而者御家老伊藤内膳殿、夫々に被仰渡候事。

十月廿二日。前田重教足輕の町並の家屋に居住するを禁ず。

〔泰雲院樣被仰出候御題紙等之寫扣〕

一、巳十月廿二日左之御書立安房守相渡候。

組附足輕割場附等足輕、組屋敷或拜領地に可罷在候處、近年は町並家買求、多分居住之者有之躰に候間、町並に致居住候者相改、名書可指出旨被仰出候事。

右之通從中將樣被仰出候條、被得其意、可被書出候事。

十月廿二日　金澤の上下郊端に於いて磔刑を行はる。

中村乙次郎の事は本年五月四日にあり
宗榮寺の事は天明三年八月十九日にあり

〔政隣記〕

十月廿二日　於上口磔　中村十兵衛養子　中村乙次郎

於下口磔　卯辰日蓮宗　宗榮寺

御馬廻土方勘左衛門家來　近藤九兵衛

九兵衛辭世、道ならぬ道つけられて枯野哉。三返申旨云々。

右之外火付於上口一人、養子殺女於下口二人磔に被仰付。

〔金澤古蹟志〕

日蓮宗卯辰　宗榮寺

同斷　妙久寺

右女を犯、破戒之族不屆至極に付、不被及赦之沙汰、追而磔被仰付、尤寺跡破却被仰付。

右女犯、破戒之族無紛相聞え候に付、於存命者宗榮寺可爲同刑者に候へども、先達而相果候に付、寺跡破却被仰付。

右宗榮寺儀、於公事場禁牢申付置、遂吟味致言上候へ者、落着如此就被仰付、右之通今日申付候。宗榮寺等之寺諸道具闕所有無之儀者、追而可申達候、以上。

巳十月廿二日

織田主稅 印

江守平馬 印

原五郎左衞門 印

松平典膳 印

西尾隼人殿

三田村内匠殿

横山又五郎殿

右之通、公事場奉行織田主稅等より申來候條、可得其意候。寺諸道具闕所等之儀、別紙之通候條、寺中幷諸道具縮方、猶更嚴重等之儀、組合寺庵に可有御申渡候、以上。

巳十月廿二日

西尾隼人 印

妙成寺

右之通、寺社所より被仰渡候條、可被得其意候。尤寺中縮方之儀、組合寺嚴重可被相心得候、以上。

妙成寺

宗榮寺組合中
妙久寺組合中

十月廿七日。前田治脩引續き明年の參覲を缺き明後年に出府延期を許されたることを告ぐ。

天明六年七月廿六日の條參照

〔觸留雜記〕

十月廿七日左之御附札物拜見被仰付。

私領分近年打續損耗に付、勝手向必至と指支、士農工商共及難儀候へども、救方行屆不申、諸人氣も取失候程に相成候付、長養方之所専勘辨仕、氣其元に立戻り候樣に仕度奉存候付、今年參勤御用捨被成下候樣去年奉願候處、願之通被仰出、誠以難有仕合奉存候。依之夫々仕法等申付候。元來去年相願候節、垂而之願年に參府致度趣奉願度内願には罷在候へども、先例も無之年延之儀故、恐入指扣罷在、尤大概は一年御用捨被成下候はゞ仕法等立戻可申と種々相考、先達而之通相願候處、今以全は行屆不申、今一ヶ年も在國仕候はゞ大躰仕法も行屆

可申哉と奉存候。左候へば自ら人氣もおだやかに相成候へば、誠安心至極仕候。去年結構被仰出候上、又候奉願儀は甚恐入候へども、相成申儀に御座候はゞ、來午年之參勤御用捨被成下、是迄之願年之通、來々未年春參勤仕候樣被仰出候儀は相成申間敷哉。每度ヶ樣之儀奉願候儀も自由ヶ間敷樣に而、迷惑至極奉存候へども、仕置等今少に相成行屆不申內出府仕候而は、又候立戾人氣も惡敷相成候而は、先達而今年參勤御用捨奉願、願之通結構に被仰出、是迄仕置等申付候詮も無御座罷成候付、重疊至極奉恐入候儀には御座候へども、右之譯合故誠に難默止又候願候、以上。

八　月　　　　御　　名

御付札

格別之譯を以、願之通來午年參勤も御用捨被仰出候間、來々未年春中可參府候。

十月廿七日。新に藏縮によりて借銀せんとする諸士に融通を計るべきを諭す。

〔政隣記〕

御家中諸士年々勝手難澁相重り、勤仕にも指支申程之者も有之躰兼々被聞召、御救も可被仰付候得共、當時御上にも御難澁至極に付其御沙汰無之。依而借銀方に相渡置候藏縮相解き、

返済方来年賦に而相返候様被仰出候得共、過半未納に捨置、當時調達出来兼、来年迄之取締之手段無之人々も有之躰に被聞召候。今般借銀方ゟ相渡從候蔵縮解き被仰渡候故、是以後蔵縮借に不存、彌相泥候躰に候。此度諸士心得・春方等之儀、厳密に被仰出事に候間、改而蔵縮之以調達候者共、身上相應之銀高、只今迄勝手方致仕送好しテ之者ニ別而之儀無泥、新にに調達申談候者し、随分用事相辨候様可申渡候。改而蔵縮渡し置、来七月に至返済方不埒之者於有之者、急度御糺可有御座候間、又差引之者有之候者、各ゟ相達候上、尚更遂詮議可相達御達候。此所致心得、相應之銀子取替候様可申渡候。御上御調達之儀者最早不被仰渡候間、此段も可申渡旨從中將様被仰出、夫々可被申渡候事。

十　月

別紙之趣可被得其意候、以上。

十月二十七日

右御用番より御觸出有之。

是月日大藏ヲ刊

十月晦日。前田重教足輕の組數等を定めしむ。

〔泰雲院様被仰出候御留紙之覚帳〕

一、巳十月晦日左之御書立土佐守相渡候。

割場附組數之儀は、前々より組數幷一組之人數高茂不相極、先近年は五十六組に相成居候由。一組に小頭幷足輕共二十二人充に仕、五十組に可相極候。當時右之圖りに而は八高相揃不申候ほど、先二・三組明組に可致置候。右之通に相成候而は、人數八九十人計不足躰に候。此內當時病死代廿三人有之由。此分追而可被召抱候。

一、足輕・小者江戶交代等之儀、是迄年寄中詮議も有之候得共、以後は交代指遣候節、割場奉行より紙面を以相達次第被承屆候樣被仰出候。右之趣に付、割場奉行等下々之事而已相いこひ、御不益を以不顧仕形於有之は、奉行幷棟取役之者共越度に可被仰付候。若棟取役之者詮議之趣奉行聞屆不宜儀有之候はゞ、棟取共より可申上候。若左樣之儀於不申上は、嚴敷御咎可被仰付候旨、割場奉行に被仰渡置候。

諸手合足輕共之內勤功に依而、其先々より相願小頭に被仰付候者も有之候。左候而は割場向にて指支候趣有之候間、以後は小頭に被仰付候樣相願候節は、割場奉行に示談之上相願候樣可仕旨被仰出候間、何れより相願候共割場奉行に示談、否致詮議候樣被仰出候事。

十　月

十月晦日。百姓等藩の收納米を上納する方法に關して告ぐ。

〔御條目等書上帳〕

今般御改法に付、諸郡御收納米歩入納方之儀に付、先達而申渡候通、最重に可相心得候。右に付百姓居村より御藏所迄三・四里も相隔、頃日諸方より御藏所ゟ持懸候處、及數百石に納方手餘、遠路之者は別而持運候内時刻も相移り、其日之内御藏納不得致、無據御藏邊往來土之上に積置、米主從番等致候間、悉く難儀之樣に相聞候事。

一、右之通土之上積置候而は、雨天之節濡俵等相成候而は、御米之障に相成候事。

一、持付候御米、其日時刻移、御藏納不致候節者、御藏所近邊に候者預置、御藏納之節尤米主相斗立、最重に可相納事。

一、右預米賃之分は三合・五合を限り、又は幾日に而相拂候共、右割合を以可致相對候事。

一、右米預候儀は、村々肝煎共等示談之上、實躰成者共方ゟ指預け可申事。

一、右之者共難預り樣子茂有之候はゞ、損支等之分承糺、支配先役人共ゟ及斷可申事。

一、右預ヶ候節、其身は勿論、家業其出入末々之者迄、米に麁抹無之樣、是又最重に可相心得候事。

一、只今迄御米預ヶ候者之内、心得違之者多、不埒至極之儀共取組有之躰も相聞居申候得ば、以後ヶ樣之相對を以取組候者於有之は、急度咎可申事。

一、只今迄御收納御藏番等之内にも、預り米致候者有之躰に候。元來ヶ樣之族は最重に咎可

中付事。

右之通諸郡一統申渡候に付、篤相達之候條、被得其意、若百姓共より米預申度相願候者、預候之樣可被申渡候。是迄預米等之儀に付、種々取組等之趣有之、甚不埒之族共有之段相聞候間、以後預ヶ米致候者共、右等之趣無之樣嚴重可被申渡候。若違失之族於有之は、急度可相糺候間、違亂無之樣申渡可被置候、以上。

十月晦日　　御算用場

野村次郎兵衛殿

十月。前田重教、鷹匠及び餌指の地方に出張するもの不法の行爲あるを戒む。

〔政隣記〕

御鷹匠　御餌指

右就御用遠所町・村々に巡行之砌、旅宿に而不厭費不法之振舞有之躰、不時成人夫を多く取、不可然候。致止宿候共、食事さへ相調候得者事足り申儀に候處、不心得至極に候。向後急度相改、村々致邪魔候族無之樣に夫々可申渡候事。

右之通從中將樣被仰出候。

三品とは馬廻組・定番馬廻組・御歩組をいふ

仁々は人々

十　月

十月、前田重教、諸士の子弟を陪臣の養子たらしめ又は陪臣の娘と婚するを禁ず。

〔政隣記〕

左之通御馬廻組頭・御小將組頭ゟ、從中將樣被成下候御親翰寫也。

家中三品之家二三男・弟等、陪臣之者ゟ養子に遣候儀、親類之筋目有之者は格別、筋目茂無之者ゟ養子に遣候儀は有之間敷儀に候。且又陪臣之者之娘を緣組申儀茂同意味に候。右之內に者拵料杯を旨立、內々に而養子請候類茂有之躰に候。譜代之仁々爲子弟共、年寄共等を主人に致、奉公致度志し、正誠之とは不存候。先例有之候共、向後養子・緣組共に、筋目無之與陪臣之者申合候儀有之間敷、此段各心得へたく申聞事。

天明五乙巳十月中　　北　藩

右之趣待之配有之人々ゟ傳達之儀被仰出、則右兩組頭より夫々申談。

附、右之通に候而者、小身之人々杯指支之趣茂有之に、與力等緣組申合候儀者、享和年間より不指支事に相成。

十月。借銀返濟の保證として交附したる米切手を債權者より米仲買に賣渡すを禁ず。

〔政隣記〕

御家中之人々借用銀返濟方爲引當相渡置候米切手之儀、返濟之期に至り借用主指圖を不待、銀子貸主或は口入之者向寄之米中買ゟ申談候得者、米賣拂候躰に相聞候。爲米中買共不埒之儀に候條、右躰之米切手取扱候者有之候者急度相糺、借用主より渡置候切手不殘取上、給人々々ゟ被下可相返候。且又前段之通之米切手賣拂候儀、甚不屆之至に候間、銀主等可爲損分候事。

十　月

右之通中將樣より被仰出候事。

十月。前田重教、小將組の士の勤務に關して諭す。

今月は十月

〔政隣記〕

今月□日御小將頭不殘中將樣御前ゟ被爲召、段々御意之上、左之通御書立御直に御渡之。

大小將組之儀者、他組に違勤方も色々多有之、江戸表第一御公界向も專相勤、彼是規模有る組

格に候。就夫自跡々、新に御大小將組被仰付候者は、右參之者に見合、勤方等に入承合相糾申振合に候。依而心得違敷者は、右參之者より加賀見引直し、御奉公勤方候樣教へ可遣事に候。然處其内にも心得違之者有之候得者本意を失ひ、新參者之不案内を誘り、中には筋違ひにも振廻も有之、不計增長致候得者不法之族も出來、理不盡に貪詞杯進申者有之。左樣之扱ひに逢候者之内、生質虛弱之輩は、氣分之障命にも障申程に至儀も有之躰に被聞召。自前々之組格意味合、今般格別改候樣にとの被仰出に而者無之候得共、若輩之者共興に乘り本を失ひ、不法に至候得者不可然候間、組頭急度相心得可有指引事。

一、近年江戸詰之内、仲間之外諸役人等ゟ右體之振廻も有之躰に被聞召候。此儀者不埒之至、前々者曾而不聞召儀に候條、是等之類急度相嗜候樣、嚴重可申渡事。

天明五乙巳十月中　　　　北　　藩

右に付組々頭宅ゟ相招、左之紙面幷口達を以も申談有之。

今般拙者共中將樣御前ゟ被爲召、別紙之趣御意之上御直に御渡、拙者共迄段々被仰出之趣も有之候。御小將組之儀者、他組々違勤方多、第一御公邊向等に相勤、彼是規模有組格之旨被仰出、誠に以結構之御書立、御用意之儀御座候。是迄も御書立之通に可有之處、何となく猥りに相成、傾等之儀も相ゆるみ、行届不申儀共有之、就中新御小將被仰付候節參會申談等之

儀者、數度申談置候儀に付、今更格別不及申談事、御書立之通ら急度可被相心得候。將又新御小背被仰付候節、心得違之人々は理不盡成振舞も有之、江戸表に而外諸役人等へも右之族有之樣子も被聞召候段被仰出候。此儀者江戸表にも不限、心得可有之事に候。今般借銀方等結構に被仰付候上、勝手取續無詞指支、御奉公に相障り候而者申譯も相立申間鋪候條、此處は人々覺悟可有之儀に候。左樣に候得者、平生內輪慕方可成長ケは儉約有之、誠に質素に可有之候。各にも粗承知之通、御上御勝手向御指支之御時節に候間、組當り之御用向被仰渡候砌、不時借用物願等は必相成間鋪候。然者此度者大切成所に候間、萬端之儀に付被仰渡之趣具に被奉承知、是以後急度相愼可被申候。裝束等之儀も近年數度之被仰出有之儀、彌嚴重に能服可被相用候。今般之被仰出者別而格別之趣に付、猶更拙者共存寄之趣申渡候間、相互に被申合、聊無油斷可被相心得候。且又儉約專に被仰出候間、容易に參會等不仕、質素之形第一に候得共、人多に相集候儀を遠慮仕、武藝稽古等も相止候樣之心得に罷成候而者致相違候間、稽古之儀者隨分相勵、勝手取續之上相應に武器等相嗜候儀者、尤之心得与被仰出候。將又御家中三品之二三男・弟等、筋目無之陪臣へ養子に差遣候儀、緣組之願も右同樣、暨緣組之節指料等申立、內々に而銀子取受候抔有之間敷儀、是以後右之族一向無之樣、改而急度申渡候樣、拙者共迄被仰出候條、以後右示談等之儀堅難相成候條、此段も申渡置候事。

村替の手續終了は天明六年九月二十日に在り

巳 十 月

右之趣於江戸表も、御小普請溝口七太夫殿於御小屋、夫々相招申談有之、十月二十九日也。

十月、能登に於ける幕府領一部を加賀藩領と交換することを許可せらる。

〔能州公領地等之留〕

能登國之内御預所羽咋郡千路村等都合八ヶ村之儀、私領村々入交有之、國中難取締候に付、其領分村々と村替之上、千路潟とも其領分被致度。尤千路潟之儀は先達而公儀新開之御吟味も有之、往々何程之御高合に可相成哉難斗候得共、右代知之儀は其領分羽咋郡・鹿島郡之内水旱損等無之村柄宜敷場所を以見立、三千石以上御物成米千五拾石除充御收納可有之候新田、自分入用を以相仕立被指上候積も。右新田成就いたし候迄之内は、其領分右兩郡收納米之内を以年々千五拾石充、風水旱損等其外不作之年柄に不拘、潟之内代米として被相納、右代米は御預所村々皆金納定石代之振を以、其年々之直段に成共、又は五ヶ年平均直段に成共金納被致、前書新田成就之上右地所被指上、金納は其砌御免有之候樣被致度段被相願候。右之通御預所村々領分入交、國中難取締候段、格別之趣を以願之通相成、御村替被仰付候。潟内は代官米として二千五十石充石代を以年々上納被致、尤自分入用に而被仕立新田致出來代知被指

上候はゞ、其節代米御免之御沙汰可有之候。委細之儀御勘定奉行より可被談候。

十　月

〔能州公領地等之留〕

天明五年御領所之内御村替之事。

御上り知十七ヶ村

羽　咋　郡

尊保村　阿川村　楚和村　鵜野屋村　灯　村

入釜村　地保村　切留村　豊後明村　神子原村入會

福水村同

鹿　嶋　郡

谷内村入會　別所村同　田岸村同　深浦村　外　村

黒崎村

右十七ヶ村古高

〆千九百九十六石五斗

去る子より巳迄五ヶ年平均物成

〆四百三十六石六斗三升四合六勺

但定納也

辰年見所米

〆一石七斗

同小物成銀

〆一貫百七十四匁

但山役・苦竹役・炭竈役・舟械役

米に直し五十八石七斗

但、銀一匁に付代米五升

御物成詰米高

合四百九十七石三升四合六勺

外、夫銀口米は此御物成詰に入不申由。

右御代り知八ヶ村

羽咋郡

千路村　中山村　上棚村　二所宮村　町村

安部屋村　佛木村

右八ヶ村高

〆二千百八十七石六斗九升五合二勺

去る子より辰迄五ヶ年平均物成

〆三百九十八石一升四合

辰年見取米

〆九升

同年小物成

〆五十一石五斗六升八合

同小物成永

〆三十七貫八百七十文九分七厘

但、高役・棟役・舟役苫竹役・獵師鐵炮運上・室役・肴役・鹽釜役代永・酒造冥加永

米に直四十七石三斗三升八合七勺

但、永一貫文に付代米一石二斗五升

御物成諸米高

合四百九十七石一升七合

右御村替御通、天明五年十月御開済御下知有之。御代り知御上ケ村等之儀、同六年秋迄に双方御引渡決着仕候也。

但、御主附御改作奉行高島勘兵衛殿・御預地御奉行遠藤次右衛門殿御改作奉行兼帯也。

十一月朔日。前田治脩、幕府が来春の參覲を廢するの請を許したることを諸士の頭分に告ぐ。

〔政隣記〕

十一月朔日、一昨日御用番安房守殿依御觸文、今朝頭分以上登城、御帳附候以後、於柳之御間御年寄衆等御列座、御用番大隅守殿左之通御演達。依之爲恐悦各御用番迄參出。

去年御願之趣に付、來春御參勤御用捨、是迄之御順年之通、來々未の年春中御參府被成度旨御願被成候處、前月十七日以御付札、御願之通被仰出候。先以重而御用捨之儀、重き御事に候處、別而難有被思召候。此段何茂江可申聞旨御意に候。

右御禮之御使、御小將頭多田逸角江前月二十八日被仰渡、明二日發、十三日江戸着。

十一月二日。明年より儉約勵行以前の例に復し年頭拜賀の際長袴の着用

を命ず。

〔政隣記〕

十一月二日、來年頭御禮被仰付候節、五ヶ年以前之通、是以後長袴着用可仕旨從中將樣被仰出候段、今日御用番より夫々被仰渡。

十一月三日。戸田與一郎の流刑を赦免す。

〔袖裏雜記〕

戸田與一郎流刑御免可被成旨、十一月三日被仰出申渡左之通。

覺　　　　戸田與一郎

右與一郎儀、不屆之趣多有之、流刑被仰付置候へども、爲赦流刑此度御免被成候旨、中將樣より被仰出候條、此段可被申渡候。尤御城下に罷出令居住候儀、勝手次第之旨可被申聞候、以上。

乙巳十一月　　長大隅守始十三人　連印

淺井源右衛門殿

追而與一郎、親類等より家來迎に遣可申候間、其者に可被相渡候。此儀は重而可申達候。先

御免之段可被申聞置候、以上。

組外御番頭に

戸田與一郎

右與一郎儀、不屆之趣有之、流刑被仰付置候へども、爲救流刑此度御免被成候旨、從中將樣被仰出、則其段淺井源右衛門へ申遣候間、戸田傳太郎等へ可被申聞候。且又右與一郎爲迎、家來等彼表へ可差遣候間、遠路赴候段[?]可被申聞候。其節淺右衛門等へ之紙面可相渡事。

十一月

十一月五日。明年より諸士互に新年を祝するの儀禮を行はしむ。

〔政隣記〕

十一月五日左之通御用番大隅守殿御廻文出。

御勝手御難澁に付、安永九年より五ヶ年之間屋敷御倹約、右年限相濟去年又候五ヶ年中御倹約被仰出、右最前より年頭勤會之儀被仰渡候處、年始之儀は上を祝し相互に勤合候儀、左のみ費之節にも不相成候儀之處、不相勤儀者中將樣不叶思召候。來年頭より如先規、随分年頭嘉儀相勤候樣被仰出候段御觸有之。

十一月十日。前田重教諸士の子女に書道を學ぶべきことを諭す。

〔典制彙纂〕

定番頭ゟ

御家中諸士之子共男女とも、手跡随分爲相習可申、調筆達者に候得者いづれ之爲にも宜、後に御役儀相勤る節茂指懸り御用之辨にも相成候。於御國は江戸表ニ違、婦人に手跡宜者稀なり。女子之分別而せり込可申候。男子は武藝稽古とも爲習可申事。

右之通被仰出候條、被得其意、組・支配有之人々等ゟ可被申談候。且又組等之内――。

巳十一月十日

十一月十二日。前田重教諸士に親類と緣類との用語の相違を示す。

〔政隣記〕

十一月十二日

親類、父方續之者。

緣類、母方續之者。或は緣者。

親類与緣者之差別右之通に候。御家中諸士養子・緣組等願書附、双方續無之分は、何某儀親類・緣者に而無御座与相調候儀者随分相聞え候。いとこ違又いとこ之續之儀も、是以後其名目書顯可申候。譬者何某儀親類に而いとこ違、或緣類に而又いとこ、遠き親類又は至而遠き

繰者与書加可申候。此段一統可被申渡候事。

右之通被仰出候段、御用番被仰渡候由定番頭廻状出。

十一月十九日。定番御馬廻小野木左門遠島に處せらるべきことを知り出奔す。

〔政隣記〕

一、十一月十九日定番御馬廻池田與左衛門組小野木左門、不行状等に付遠嶋被仰出候段之御覺書、頭與左衛門へ御用番御渡に付、如例與左衛門より左門一類共へ迄及内談可申渡處、其沙汰左門承之、同日出奔。與左衛門宅へ相頭并御横目等立會、爲御用罷越有之處、彌左門出奔之躰に付、各今朝に令退散。

附、左門儀十二月三日盗賊改方手合足輕其於越前福井召捕來候に付、改方御用松尾縫殿より本伺候處、於公事場禁牢与被仰出、則公事場へ引渡有之。

十一月廿一日。前田重教諸組・支配の行状に付善悪共直に言上すべきを命ず。

〔泰雲院様被仰出候御廻紙之寫扣〕

一、巳十一月廿一日左之御書立大隅守相渡候。
諸組等より組・支配等之者共之行跡心得等、善惡共少茂不指扣可申上候。惣而何ぞ事に寄せ御尋も有之候得ば、申上候形茂相見え候。是は頭等心得不宜候。進而可達御聽候。譬ば二十ヶ年餘或三十ヶ年皆勤等いたし、御奉公精に入ながく相勤候者等は、別而時を不待可申上、是以後延引有之候はゞ其頭可爲越度候。此趣夫々可被申渡候事。
右之通被仰出候事。

十一月

〔政隣記〕

十二月廿二日、諸頭等より、組・支配之者共行跡心得等、善惡共少も不指扣可申上候。且又二十餘年或三十餘年皆勤之者、早速可達御聽候。早速相しらべ、輕き役人にても數十年實躰に相勤候者は、皆勤に而無之共達御聽候樣被仰出候段、去十三日御用番被仰渡候旨、定番頭廻狀有之。

十一月。竊盜の罪を犯したる者はその輕重に拘らず出牢の際入墨を施すべきことを令す。

〔政隣記〕

今年前月左之通公事場奉行ゟ被仰出。

盗賊之者罪之輕重によつて、死刑或は二三ヶ年又は百日・五十日禁牢之上指免申儀、前々其通に候。被免之上重而致悪事候而も、年月立候得者不相知儀も可有之、旁小盗に而も共出牢之節向後致入墨、其上に而被免可申付事。

右之通被仰出候條、可被得其意候事。

乙巳十一月

右に付入墨圖左之通極より、同々より金谷御殿に持參、佐々木孫兵衛等を以入御覽。

闕略す

十一月、前田重教の命は單に被仰出といひ治脩の命には特にその名を書せしむ。

〔國事雜抄〕

御横目ゟ

中將様より被仰出等之分に、都而被仰出・被仰渡等迄相認。

加賀守様より被仰出等之分に、御名相認可申候。

右之通被仰出候條、此段諸向不相洩様、夫々迅に可申渡候事。

巳十一月

十一月。諸士の緣組は豫め內意を伺ふことを要せず直に前田重教に願書を提出すべきを命ず。

佐々木孫兵衞は前田重教の近習

〔國事雜鈔〕

頭分以上前々緣組前伺書付、年寄中ゟ相達候へ共、以後者右前伺之儀半切紙面に調、佐々木孫兵衞等ゟ指出可奉伺旨、前月被仰出候へ共、向後御家中一統緣組不及前伺、本書附を以可奉伺旨、重而被仰出候事。

但、與力御步並之者に、右書付中折横二つ切に仕相伺可申事。

右之通被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

十一月

十一月。前田重教頭分の士その職を辭するときは嫡子を馬廻組に列せしむべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

頭分被仰付置候者、老年或病氣等之依願御役御免被仰付候者、何れも重て御役被仰付置候處、右之趣に而御斷申上候儀心外に可存候。依之右御役御免之頭分觸子、御馬廻組に打込御番爲相勤可申候。但、役儀被指除候頭分之觸子も、右之通可申渡候。

右之通夫々可申談旨被仰出候條、被得其意、觸子年寄等之儀可被申聞候事。

（年寄はとしごろと讀み年頃なり）

十一月

十一月。前田重教江戸における消防夫の器具服裝等給與方を嚴重にすべきを告ぐ。

〔政隣記〕

江戸表火消役御小將江

江戸表御近隣、火消出火之節御人數押出、火元被手懸候砌、火消道具品々損物紛失之品前々多有之躰に候。莚之者等着東之儀も、大火之節者猶以之儀、小火に而も押出手懸候度々取替紛失之品多有之段、相知候通に候。手懸候度毎取替相渡候儀、外々大名方抔に無之事に候。是以後火消役之御大小將、何れ損物等見分之上取替可申候。小頭等江兼而申渡置、取替不申而不叶品者各別、無故紛失損物等之品者、綿密に遂僉議、一品にても御不益無之様相心得、惣人數江急度可申渡事。

（着東とあるは服裝なり）

十一月

付札、火消御小將江

別紙之通被仰出候條、可申渡旨御用番より申來候。各可被得其意候事。

巳十二月

十一月。日蓮宗宗榮寺・妙久寺破却を命ぜられたるを以てその檀那を同宗内の他寺に轉ぜしむべきことを諭す。

〔例格拔書〕

瀧谷妙成寺江

日蓮宗卯辰　宗榮寺

同宗　同斷　妙久寺

右二ヶ寺令破戒、依御刑法寺跡破却就被仰付候、兩寺旦那、宗旨之内向寄之寺江旦那成儀、可爲勝手次第事。

一、兩旦那交名帳差出可申事。

一、右旦那向寄之寺院江片付候者、寺旦納得之趣、其寺々より書付を以斷を立可申事。

右之趣被得其意、帳面等早速可有御指出候、以上。

妙成寺は觸頭なり

本年十月廿二日の條參照

乙巳十二月

十二月朔日。年寄奥村主水を能登島配流に處す。

〔異本三州御譜〕

十二月朔日、國老奥村主水隆振を能州島之內配流可被仰付旨被仰渡。（是先九月晦日閉入逼塞被仰付、先達て知行加増被仰付二千石被召上、今般此旨へ至る。然所十二月二十六日同人三男左京儀、故內記跡目新知六千石被下、人持組に被仰付。左京追て國老御加判被仰付。）

此時長大隅守殿、主水宅へ被罷越御申渡也。細井彌三郎・參笑金左衛門、其時大隅守殿供役にて二御丸より夕方直に被罷越、何之事不知、暫有りて女中大勢にて鳴聲聞えし由。聞き廣く衆へも餘程可有之所、大勢のなき聲聞えしと噂之由、彌三郎申聞。

此一件は其頃沙汰なし。木屋藤右衛門を申談、御國米を他所へ被指出と云。風聞にて米直段其頃高貴、他國は彌增高貴也。渡り米之儀每度御算用場より申出、尤被仰出ともに最中誠不埒成儀之旨、近頃も古老（八十有餘の者）噺、其頃之沙汰尤前段之通と云。尤此儀者表向不知、只沙汰を記す物也。木屋藤右衛門は粟ヶ崎村にて、親藤右衛門へ御扶持被下置、當時藤右衛門へも親同事御扶持方被下置、明和八年五人扶持御引足被仰付、都合十人扶持頂戴仕罷在候。然所藤右衛門儀、十村鶴上村源五郎組下に罷在候間、藤右衛門一代御郡奉行直支配に仕、十村並に被仰付、十村同事に御目見も申上候樣に被仰付候者難有可奉存、尤前々より結構被仰付置候

木屋藤右衛門の處分は天明六年八月に在り。本文奥村家の沙汰と關係ありたりとするは誤なり。

儀に御座候得共、一兩年別而御用筋入情に相働申者之儀に御座候間、私共僉議之上奉願候段、可相成儀に御座候はゞ右之通被仰付候樣仕度奉存候与、安永二年五月御郡奉行木梨助三郎・奧村左太夫より相願候處、同十月粟崎村藤右衞門親以來御扶持被下置御用相立候者に付、藤右衞門一代御郡奉行直支配に仕、十村並被仰付、十村同事に御目見も被仰付候樣仕度奉願旨木梨助三郎等紙面に、御勝手方・改作奉行・御算用場奉行にも、右之通被仰付候樣奉願旨紙面を以指出候に付、其段達御聽にも、願之通被仰付候條可申渡旨被仰渡候。然所此時禁牢被仰付、後牢死す。主水殿に追而嶋より御呼返、無程死す。實は自害と云ふ。

十二月三日。江戸に於いて年頭諸禮式都べて舊に復することを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月三日、來春より年頭御規式等、都而五ヶ年以前之通与被仰出候段、今日夫々ゟ伊藤内膳殿御申渡。於金澤ゟ御用番夫々被仰渡候段申來。

十二月十一日。前田重教亦來年頭の謠初を復舊すべきことを命ず。

〔政隣記〕

十二月十二日、左之通昨十一日於金澤被仰出。

來年頭より御謠初御規式以前之通被仰付候段被仰出候旨、御用番御覺書を以、御表小將御番

頭、御大小將御番頭ゟ被仰渡。

十二月十一日。前田重教諸士の希望により銀子を貸與すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十二日。左之通昨十一日於金澤被仰出。

一、今年ゟ無借銀方結構被仰付候得共、右に付御家中取續町才覺銀等不調達之儀被聞召、可致難澁候間、御才覺銀を以歩分爲取續御貸渡可被遣旨被仰出候間、借用有之度人々者別紙證文案之通相調之、百目に付三石五斗宛之積切手、來二月十日切人々頭々ゟ差出可申候。只今銀子受取候節者、右證文ゟ爲持受取人可指出候。銀高之儀者其頭々ゟ直に承合可申旨等、頭々より申觸有之。

覺

一、何百目　　文丁銀

右今般爲取續、御才覺銀を以御貸渡を取申候。一ヶ月百目に付一匁五分宛之加利足、來七月七日切上納可仕候。引當御切手之儀、來月十日切指出可申所如件。

天明五年十二月　　日　　　　誰　名判

頭　殿

十二月十六日。大聖寺藩に横目として派遣せられたる御先手物頭小川七左衛門不埒を以て閉門に處せらる。

〔政隣記〕

十二月十六日

役儀被指除閉門　　御先手物頭　小川八左衛門

於大聖寺町人集、其上銀子借受、返濟方不埒之趣有之、重き御締方に被遣候處、不屆之旨被仰出、如此被仰付。

十二月廿一日。原五郎左衛門知行を増し人持組に編入せられ、若年寄に補せらる。

本年九月十九日の條參照

〔政隣記〕

十二月廿一日。　　人持末席公事場奉行

一、千石御加増　　原　五郎左衛門

都合二千二百八十石

五郎左衛門儀、十歳之節より今年迄五十ヶ年餘入情に相勤、江戸詰も度々、公邊御用他國御使等其外品々重き御役共相勤、勤功過分に思召候。仍而人持組入、當分年寄中御用番支配に被仰付、千石御加増被下之。及半白大儀に思召候得共、若年寄役に被仰付候條、萬端無泥可相勤旨被仰出候。名縣正寺改候樣被仰出。

十二月廿二日。前田重教來年頭に於いて頭分以上の拜賀を受くべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月廿二日。

中將樣來年頭若年寄以上獨禮被爲請、頭分以上席付之御禮被爲請候段被仰出。但平士以下御禮不被爲請段も被仰出。但右に付御奏者并裝束役、御大小將最初金谷御殿ゟ出相勤、右相濟二之御丸ゟ罷出相勤候筈也。

十二月廿七日。諸士の意見言上は之を前田重教に提出すべきを命ず。

〔政隣記〕

十二月廿八日、諸方一統言上封物、是以後金谷御殿ゟ可指上候。二之御丸ゟ不及指上候段、昨

廿七日被仰出候旨御横目廻状出。

十二月廿八日。諸士の改名は舊名の一字を用ふべきを諭す。

〔政隣記〕

十二月廿八日、向後名替願、可成たけ只今迄之名上之一字用可申旨被仰出候段、并諸役懸り同役同名は紛敷候間、早速改名候樣被仰出候旨、御用番被仰渡候段、定番頭廻状出。

十二月廿八日。是日以後諸士の心得に關し誓文を徵す。

〔政隣記〕

十二月二十八日より御馬廻組・定番御馬廻組・組外に誓詞血判被仰付、頭々於宅見屆之。

起請文前書

一、對御上御後闇儀聊以仕間鋪、御爲之品不依何事有躰可申上事。

一、忠誠・忠義・忠孝片時も不怠、自之行尤甚愼、御恩を忘れず、御奉公情に入大切に勤可申事。

一、諸事御法度之御定を急度相守可申候。無禮緩怠無之樣可愼事。

一、武藝勵、專ら遊樂・好色・過酒抔相愼、少も分限を取失はず、奢侈之儀聊無之樣相心得可申事。

一、勝手向之話抹放埒無之樣相心得、案內を可沾。且夫子弟之儀隨分成立、敢御用立候樣育可申事。

一、兄弟等多有之、其內不心得之者出來、色々異見加見候得共不聞時、遠頭・支配え申談を以相斷可申事。

一、相撲幷尺八之類好候一圖有之間敷、左樣之隙力は武藝に相用可申事。

一、殺生抔に而山河を渡り身屆候儀者可有御座候儀、乍去御留場抔え入込いたづら致し、御上之御目を忍ぶ事堅致間敷事。

一、輕き者共に對し、無法之爲躰無之樣常可心得、萬端に我意を立申儀有御座間敷、別而金銀米穀指引合之儀、不埒等無之樣可相心得候事。

右條々若雖爲一事有之者、於致違犯者。（異本のまゝ）

神文

牛紙に而。

今般以紙被仰付候御趣意者、近年御家中人々之內群集之場え立入、或は御鷹場に而鳥を捕、其品を賣拂、遊興に誇、不屆之族有之人々、此度嚴重に被仰渡候儀、各承知之通に候。以來不法之族增長無之、何茂急度相改候樣被思召候に付、今般誓詞被仰付候。右躰之惡事無之、相

愼罷在候者は多有之候得共、人別に不被仰出儀者思召も有之候。組柄輕き御家人・與力等にも不愼之者も有之候得共、三品以上之儀誠に格別に被思召候に付、各ゟ分而先御內意被仰出候。とくと組々人々意得仕候樣可申聞候事。

十二月

附記半紙。

天明五年以來各ゟ誓詞血判被仰付候得共、是以後新入之面々は、右誓詞之儀當分被指止候。追而血判被仰付之儀も可有御座候。每月一度宛組中頭之於宅に御前書讀聞、無忘却怠慢可相守趣御請に判形取置候儀者、可爲是迄之通候。右判形之御請、以來每年二月・七月兩度可入御覽旨今般被仰出候條、可被奉得其意候事。

癸亥七月　頭名

各御中

十二月。先に磔刑に處せられたる妙久寺及び宗榮寺の寺號を繼續することを許す。

［例格拔書］

一、卯辰妙久寺・同宗榮寺兩寺共女犯肉食、右依破戒其身磔、寺跡破却就被仰付候。瀧谷妙

成寺より右人々御刑法被仰付候儀者格別、何卒寺號被下候樣被相願候處、願之通兩寺號被下候事。

御覺書寫

西尾隼人等に

日蓮宗卯辰妙久寺・宗變寺儀、死罪被仰付寺跡破却被仰付候處、寺數減少仕候儀迷惑に奉存候間、右兩寺號被下置候樣仕度旨、妙成寺願紙面、各添紙面を以被指出、相達御聽候處、右願之通兩寺號被下置候段被仰出候條、其段妙成寺に可被申渡候事。

本年十月六日の條參照

十二月。變死人等の檢使の爲出張する者の心得を諭す。

〔公事場御定書〕

町・御郡之内變死人等有之、公事場檢使遣候節、檢使并召連候足輕等食事等指出候に付、諸入用失墜多相懸り、末々致難儀儀事共有之躰に付、先年申渡置候得共、頃更以來最重相心得、食事之一圓調候得者事足り申儀に候間、此旨急度相心得可申事。

附、諸方趣へ罷越候者も右に准、宿々に而費懸り不申樣に可相心得候事。

右之趣天明五年十月被仰出候に付、公事場より改而町奉行初諸奉行へ、檢使并足輕等へ食事指出候節、誠に食事之防迄に輕く湯漬躰指出候樣等、安永九年相觸候通に候得共、今般就被

仰出猶更嚴重可相心得。且又變死人一卷諸入用打込、檢使入用与申立候躰難心得候間、以來は檢使之者賄方入用与、變死人入用与、其譯はきと相分候樣可致、檢使所に無用之役人等不罷出樣可申渡旨等相觸、御家中ゟ茂左之通年寄中より申渡候。

付札、定番頭に

變死人有之公事場より檢使指遣候節、於先々時刻移候得者、檢使并足輕等へ食事指出候節、入用過分に相懸り候趣。畢竟無用之役人等爲取持相詰罷在、檢使入用并變死人入用打込候故、檢使入用過分に相懸候躰に相聞、混雜致候間、以來兩端之處相分候樣致度旨、公事場奉行申聞、則右奉行より町奉行等へ申達候紙面等も指出候に付、相達之候條被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。且又組等之內裁許有之人々は、其支配へも申渡候樣可被申談候事。

天明五年十二月

十二月。割場附足輕の宛行を大槻內藏允の施政以前に復す。

〔政隣記〕

足輕宛行割場附之分最前より二十俵宛之處、大槻內藏允御用取嗎之砌より二俵宛減之、十八俵に相成、內藏允退候後、病死跡被召抱或は立替等被召出候者に者、如先規二十俵被下候得共、長命に而未だ存生相勤有之者共者、今以十八俵に候處、舊臘被仰出、一統二十俵宛に御

今日ハ六年
正月十四日

引足被下之。在江戸之者ゟ者其段今日被仰渡有之。

十二月。横井元泰等三人に、醫師を統べてその學術を授くべきことを命ず。

〔御觸並御返書留〕

横井元泰

端丈庵

八十島壽三

御醫師家業心懸候儀勿論之事に候得共、人々無間隙相勵不申而者先以病人虛實も相分り不申、竟一人命を救申儀に候へば大切之至り候間、右元泰等三人ゟ醫道稽古之指引被仰付候條、御醫師幷町醫者も醫業專精入、御用に可相立者樣可申候。內經・素問・靈樞等之講習を相立、一ヶ月三度充右宅ゟ寄合修行可仕旨被仰出候。御醫師中夫々可申渡事。

天明五乙巳十二月

天明六年

正月朔日。前田治脩年頭の賀を二ノ丸殿に受く。

〔政隣記〕

一、頭分以上五時より登城二之御丸於御式臺御帳に付、四時過檜垣之御間に御出、御年寄衆・御家老衆・若御年寄衆獨禮被爲請、安永九年以前之通諸大夫衆も長袴に而御禮被申上。右相濟、於柳之御間人持・頭分獨禮被爲請。右相濟重而御同間に御出、獨禮難成揃等有之人持・頭分、六組御小將等より坊主頭まで一統御禮被爲請。其外於舟之御間、御近習平士一統御禮。鶴の庖丁御覽等年頭御規式、都而安永九年以前之通に候事。

同日、江戸年頭御規式都而安永九年以前之通り。今朝年頭御太刀御献上之御使者、御小將頭溝口舍人素袍烏帽子着用殿中に持參。

正月朔日。前田重教金谷御殿に於いて年頭の賀を受く。

〔政隣記〕

元日六半時揃にて、於金谷御殿、御年寄衆・御家老衆・若年寄衆松之御間（檜垣の御間振合にて。）獨禮被爲請。裝束安永九年以前之通。諸大夫衆も長袴に而御禮被申上。右相濟、人持組より御馬廻まで座付御禮。

〔三壺御譜〕

同六丙午年正月朔日、於金谷御殿重教公、大老を初頭分以上年頭御禮被爲請。御隱居後初な

正月二日。前田重教年頭の祝儀として太刀を治脩に贈る。

〔政隣記〕

正月二日、年頭御太刀從中將様御献上之御使者、御歩頭佐藤勘兵衛素袍等着用、殿中迄持參。

正月二日。二ノ丸御殿に於いて松囃子の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月二日夜於金城御松囃子御規式有之、御番組左之通。

四海波靜にて　權兵衛

高砂　權兵衛　市左衛門 孝水郎　太左衛門 清右郎

松高き　權之進

東北　權之進　治三郎 熊助　新判藏

猩々　權兵衛　六之丞 太三郎　太郎助 昌次郎

正月四日。射初・打初・乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月四日於金城御射初・御打初・御乘馬初御規式等、都而安永九年以前之通り、其外御規式等も都而同斷。

正月十一日。前田重教割場足輕に棒術及び和儀を學ぶべきことを命ず。

〔泰雲院樣被仰出候御題紙之寫扣〕

一、午正月十一日左之御書立於金谷御次佐々木兵庫相渡候。

割場足輕共弓・鐵炮之役有之者に而茂、棒・和儀人々心懸申儀は尤之事に候。指南仕候者相撰、寄々弟子取立候樣可申付、指南之儀は足輕に不限候。又家中之内に而茂術有之者ゟたより、御奉公之透に稽古爲仕可申候。

右之通被仰出候事。

但、稽古所相違候儀失墜有之儀も候はゞ承屆、入用等少分之儀は承屆可遂詮議候事。

正　月

正月十二日。前田重教城中にて御扶持人・十村・新田裁許・山廻等の足袋及び下駄を用ふるを許す。

〔十村御目見例書〕

一、前々より御城中の御扶持人・十村新田裁許・山廻等迄見苦相成不申處、御郡々御扶持人中、御改作御奉行富田彦左衛門様え相願候處、御聞届、其段中將様え言上有之處、無構はき候樣、十二日朝六ッ半時被仰出、何れも足袋をはき御目見に登城いたし候。

一、十三日にも同斷。

一、御城中げたも無構はき申旨、尤かんぎ坂より上御式臺迄ぞうりはき申候。其外御門々等ゝ、げた無構はき申候。

一、十三日御料理頂戴に罷登り候時者、御臺所口迄高見に罷越候。

右之通特別相改り候に付覺書仕置候。但、げたゝ申者名目迄、何れもぞうりをはき申候。

天明六年正月　　異館彌兵衛覺書

正月十四日。前田治脩佛寺參詣及び鷹野等の行列を舊に復することを告ぐ。

〔政隣記〕

正月十四日、金澤御寺御參詣并御鷹野等御行列等、都而御省略以前先規之通与被仰出、且御鷹野際も如先規御大小將より被召連候旨、志村五郎左衛門を以從加賀守樣被仰出。但御先

本年三月十五日の條參照

供も六人に相成、近年者御表小將より被召連、御先供も四人に相成候處、今日より如本文。從者も都而最前之通に相成候事。

正月十八日。前田治脩參覲の際の供奉を命じ次いで之を延期す。

〔政隣記〕

正月十四日、當春御參勤御供御家老前田圖書殿に御内々被仰渡、諸向順先書出被仰渡。今月十八日順番之通御供被仰付、御道中奉行御小將頭松原元右衛門、御用人御歩頭遠藤兩左衛門に被仰付。然處二月五日左之通圖書殿夫々に御申渡。

先達而當春中御出府与被仰出置候得共、春中御延引、重而御時節可被仰出段被仰出候事。

正月十九日。與力牧萬平放鷹禁止の所にて狩獵したるを以て廻藤内の爲に捕へらる。

〔政隣記〕

正月十六日中、石川郡大豆田口・宮腰筋等野廻り御留場に、殺生人躰之者多入込候に付、相咎召捕候樣改方等に被仰出有之。于時同十九日野々市村廻藤内、於御留場致殺生罷在候者召連、改方松尾縫殿宅に參り樣子相糺之處、人持組津田源右衛門與力牧萬平与申者に付、其段縫殿より金谷御殿に罷出言上仕候處、寺社奉行に引渡候樣被仰出候に付、寺社御用番横山又

五郎ゟ申遣有之候處、爲平一類兄弟舟木平六・杦坂彌三太夫・栗野甚助受取に來、渡之遣。

正月廿二日。江戸深川なる藩の米廩類燒に罹る。

〔御年譜〕

一、正月二十二日江戸大火深川御藏邸御類燒。

正月廿六日。金谷御殿に於いて今後經書の講釋を行はしむべきを告ぐ。

〔編年雜記〕

左之通正月廿六日被仰出。

毎月　八日　廿三日

右日限に、是以後於金谷御殿、御儒者に經書講釋被仰付候間、組頭・物頭之人々不洩罷出可致聽聞候。書物持參或聞書之儀、勝手次第之事。

但、當月は廿九日に講被仰付、論語學而之篇講し候。毎月定日朝五半時揃、右人々之内指合候御用、或ハ當病又ハ病氣故障に而難罷出者ハ、御横目ゟ及斷可申事。

一、右講談之節、御横目兩人充罷出可致差引候。尤聽聞人名前幷不參之者名前時々書記。

天明六年正月

正月廿七日。八百石以上の知行を食むものに自今その役料を支給せざることを令す。

〔政隣記〕

正月廿七日今般御改法に付、八百石より八百石以上之人々、何役被仰付候共、當分役料不被下旨被仰出候條、自分知八百石以上之人々、當年の年より當分役料不被下候。

右之通被仰出候條、可被得其意候事。

午正月

正月廿八日。奥村主水配所能登島に向ひて出發せしめらる。

〔政隣記〕

正月廿八日奥村主水配所に被遣發出。

正月廿九日。袖帽子禁止の令を發す。

〔政隣記〕

正月廿九日、於金澤左之通御用番前田土佐守殿より御觸有之。

男女共袖帽子与名付、面躰隱し候帽子致着用候。第一女之笄等に金銀を用候儀、御停止之段

毎度被仰渡候處、近年猥に相成候躰に付、是以後改方に而急度相糺候樣被仰渡候。依之右綿帽子致着用候而者、相改候儀指支、其上面躰隠し候帽子者元來御停止に候間、向後男女共堅く用ひ間敷候。此段御家中竝陪家中并町方等、不相洩樣急度可申渡候。右御觸承知之上相背者於有之者、途中に而改方足輕見懸次第相咎申筈に候。

但、右之趣承知之上、二月十五日限右帽子相止可申旨、右日限以後者急度指止可申旨被仰出候事。

正月廿九日

正月、前田重教諸士の家督を相續する者は實際の生年をその組頭に屆出づべきことを告ぐ。

「安永・天明間御用留」

御馬廻頭

幼少に而家督相續被仰付、十五歳に滿候得者纔知御引足被下儀御定に候。近年者過分年歩申者も有之候哉、十五歳以上に而も格別幼弱に見え候容貌之者有之、纔知被下候而も當分前髪取不申、御番入不仕人々も多く有之躰に候。前々より出生之砌虚弱等に而、頭々江屆相見合候儀も可有之候。以來者頭々江屆候節、生年無相違樣正直に相心得可申候。御譜代之者に候得者、

幼少虚弱たり共相續之筋目思召も有之、官年・實年と申事も候間、頭々了簡も可仕旨御内意に候事。

午　正　月

正月、難澁の村方にして藏宿に未進米あるものゝ利足を用捨すべきことを命ず。

〔杉木氏小留帳〕

諸郡難澁村等、藏宿過分之未進米も有之、村々年々利足等相重り可致難儀候。藏宿之手前、年毎利足も請取申儀に候間、一統用捨可致候。此段支配ゟも申達候條、御郡方藏宿共へ可申渡候。

一、去暮御用銀申立、一統不指引に致候。別而心立悪敷者共、無差引成儀を任勝手、法外之仕方有之旨委細及承候。是以後藏宿等未進に不限、人手之物を借請致無沙汰候者共は、恥を不存不義至極に候間、以來節義之處異犯有之間鋪候。

一、十村與書には只今迄之通りに候。併天明四年以來借用證文書かへ無之分は、及貪着間敷候。右之趣夫々急度可申渡者也。

午　正　月　　　　　池田忠左衛門

身分は自分獻

正月、十村等、隠田・餘田の告訴を要する法令を不可としその職務を辭せんことを請ふ。

御扶持人・十村中

富田 彦左衞門

〔杉本氏小智録〕

先達而下上高等之儀被仰渡候處、元來御領國之内ニ地不足之村大牢ニ御座候。然處勝手次第訴人被仰渡、他村之田地ヲ訴主附申事ニ相成候而者、自他之差別無御座、無道之形ニ相成、百姓拵之内不行屆或家業相怠り候者共、身分之家職取失、纔ニ人手之者ニ罷申工等仕、畢竟右躰之者共隠田・餘田拵ヘ申立候。近年別而累年不作打續、以之外難儀仕、少々地高餘勢御座候村々ぐら、不寄御取捨御座候而は、次第百姓衰、農業相進不申事ニ相成行、耕作ニ苦勞仕候而も所詮無御座候様ニ相成、自然業衰、必定取續得不申場ニ至り可申与奉存候。左候へハ御大切千萬之儀ニ奉存候。其上心立不宜者共妄訴仕候而も、萬端賄賂之沙汰而已多、已成儀無御座候。隠田・餘田拵ヘ申立候儀、惣躰ニ御聞入御座候而者、御郡方相調不申、取續難相成御座候間、兼而私共退役被仰付被下候様ニ、小紙ヲ以奉願上候、以上。

御領國十村連名

正月

二月朔日。前田治脩病むを以て遠所在住等の年頭拜賀を受けず。

〔政隣記〕

二月朔日、加賀守様此間御疝積に而、今日御表御出不被遊。依之遠所在住并頃本復人年頭御禮不被爲請旨、昨日被仰出。依而例月出仕有之。尤年寄中謁に而退出之事。

二月十日。犯罪の種類により首錢・過怠銀を徴して之を贖はしむべきことを令す。

〔上田舊記〕

一、於公事場科人に首錢・過怠銀を指上させ出牢申付候儀、往古有之候間、是以後ゝ罪之様子に寄、首錢・過怠銀取立可申旨被仰出候。依而向後右之通申付候。尤科人有之、末々より首錢指出申儀願候はゞ、其時宜に寄て承屆候條、此旨可被申渡候、以上。

午二月十日　　不破彦三等

進士齋宮殿等

右之通り公事場より申來候條、得其意、夫々不相洩様可申渡候、以上。

進士齋宮

能美口郡十村中

二月廿四日。金澤森下町に火災あり。

〔政隣記〕

二月廿四日夜八時前より金澤森下町油屋九右衞門家ニ而出火、類燒十五軒有之。廿七日淺野宮際在郷大家七軒燒失、晝九時頃より出火。右之外火災度々有之。

二月廿四日。前田重教の夫人上野護國院等に參詣す。

〔政隣記〕

二月廿四日、御前樣九時御供揃ニ而、同刻過西之口より御出、御邸内地藏堂江御參詣、夫より上野護國院・下谷廣德寺・上野眞如院江御參詣、暮頃御歸館。

二月廿六日。一季居奉公人の給銀を定む。

〔御觸并御返書留〕

御家中男女一季居奉公人給銀之儀者、享保十四年御觸被成、其後寶暦元年公事場より相觸候處、其以後段々猥ニ相成候間、右給銀高之儀、今般一統相觸可申旨就御申渡、猶更遂詮議、別紙之通ニ御座候條御承知被成、嚴重ニ相守候樣ニ、御組・御支配中且又御與力等にも可被仰

觸候、以上。

午二月廿六日

不破彥三判
江守半馬判
織田主稅判
松平典膳判

一季居奉公人男女給銀之事

役小者

一、九十目より七十目迄　上中下見計此内を以可相定
但、江戶ゟ相詰候共不及增銀、江戶ゟ當座歸に候者五匁、京・大坂ゟ者三匁之增銀たるへき事。

鎗持

一、八十目より七十目迄　上中下右同斷
江戶共外他國詰仕候者十匁、江戶ゟ當座歸に候者五匁、京・大坂ゟ者三匁之增銀たるへき事。
附、他國詰一ヶ年に滿不申候者、半年に五匁計之圖を可相渡事。

馬　捕

一、八十目より六十目迄　是より以下上中下幷他國詰增銀右同斷

一、乘物昇小者之儀者鑓持馬捕に可准。

草履取

一、七十目より四十五匁迄。

平小者

一、六十五匁より四十五匁迄。

一、四十五匁より三十目迄。

若黨或先供等之者

一、百二十目より百目迄　上中下見計此内を以可相定

但、江戸其外他國一年詰仕候者二十目、當座歸幷京・大坂〆者十匁之增銀に限るへき事。

附、他國詰一ヶ年に滿不申候者、半年十匁計之圖りを以可相渡事。

右若黨躰より役宜中小將抔之類

一、百五十目より百三十目迄

但、他國詰増銀等之儀前段之趣に准、相應に可相渡事。

一、はした者等之儀給銀は、當時通例遣來候通たるべし。但是以彼等に不相應程之給銀者遣申間敷事。

しんめう或物縫等之類

一、年中七十目より五十目迄。

一、高知之面々家來之内譜代之者、又者何こそ舊功之筋に依而給分相増遣度存候者に、尤格別之事。

一、役方之用事等申付候者抔、強而給分減少之沙汰には及間敷儀に候得共、是以主人之分限に茂應申事に候條、猶更其心得仕、畢竟高祿之家來者召仕不申覺悟尤に候事。

一、惣而此度之定より、相對を以給銀少分に召抱申儀者、尤勝手次第たるべき事。

一、出替之時節過候而、半年又者五・三ヶ月以後召抱候者茂、近年は大方年中之給銀を取申躰に相聞候。一向ヶ様之筋に而者無之譯に候間、向後は半給銀、或日割等を以召置可申事。

右之通先年被仰出之趣、今般猶更相改候條、若違背之族於有之は公事場ゟ可申斷事。

丙午二月

二月廿六日。前田重教能美郡に放鷹す。

〔政隣記〕

二月下旬能美郡へ爲御放鷹中將樣可被爲入旨、今月廿七日被仰出候處、二月廿四日明後廿六日御發駕可被遊旨被仰出、則廿六日曉御發駕、翌廿七日夜御歸殿之事。

〔參　記〕

天明六年午二月廿六日に、中將樣能美郡へ鷹御覽野に被爲入、則同日朝、御膳所福留村六郎右衞門方に被仰付候。御晝御膳所傳右衞門方に而、夫より野間御覽野被爲遊、小松御旅館久津屋彌平次方に御休被爲成、同日夜に御歸城被爲遊度旨被仰渡候處、早速御立、寺井通被爲御入候而、粟生通御歸城之圖に而、同村佛得寺に暫御休被爲遊候所、折節洪水に而粟生・湊兩渡場舟立不申候に付、則其役張に傳右衞門方に御泊り被爲仰付候。翌朝六つ時御機嫌能、赤井道通湊舟より御歸城被爲遊候事。

一、右御鷹野御晝之內、傳右衞門方御座間之內、わんじ迄御好被爲遊候而、則御繪圖を以被仰付、御郡御奉行成田十郎左衞門殿より、御立之跡に而早速取懸り、近々文々被爲御入候迄出來仕置候樣被仰渡候事。

二月廿八日。前大聖寺侯前田利精を金澤に移さんとするを以て豫め近習の士を選定す。

本年三月廿八日の條參照

〔政隣記〕

二月廿八日金澤において、御先手長谷川三右衛門・上月數馬ゟ御内御用被仰渡。是御馬廻組井上勘右衛門家御借上に而御普請有之、備後守樣ゟ從大聖寺御引取一件御用也。但、右なたより御家來者不罷越、此方樣御家來左之人々ゟ先御内々被仰渡有之。御抱守之振に而御近習・配膳等勤候筈与云々。

五百石　金森彌二郎　　三百石　前波端三郎　　三百石　林　義三郎

三百石　河合半兵衛　　三百石　野村兵藏　　百廿石　吉田甚五郎

百廿石　加藤與兵衛　　百九十石　中山儀太夫　　二百石　由比久左衛門

百七十石　平野是平　　以上御馬廻定番御馬廻組外也。

右に付井上勘右衛門者先淺加五兵衛(實弟也)方ゟ同居、其後町屋御借上に而御貸渡也。

三月七日。金澤城造營の爲諸士の上納する人夫賃銀を減額す。

〔政隣記〕

三月七日於金澤、左之通御用番大炊殿御廻狀出。

御家中一統指上來候御城御造營人足賃銀、於御作事所召仕候日用賃銀一人に付三分宛相減候間、右人足賃銀上納向後一人分八分宛之圖りを以指上可申候。尤人數ニ是迄之通に候事。

三月九日。前田重教夫人平尾邸に赴く。

〔政隣記〕

三月九日五時御供揃ニ而御前様・松寿院様御同道、御忍ニ而御下屋敷ゟ被為入候処、卿大小將様ゟ御指支候ニ付、自分可罷出旨御家老衆御申渡ニ付、六時過御広式ゟ罷出候処、五時過御出、巣鴨町より庚申塚通り御下屋ゟ被為入、暮頃御立、巣鴨本道より夜五時前御帰。於御下屋御膳下并御菓子・御酒・御肴被下候。且御歩以上ゟ御酒・御肴・御菓子被下之、將御賄両度一統ゟ被下之。

一、御庭拝見仕候処、廣々景色難盡筆紙言語申共。（[illegible]二十九[illegible]）

三月十二日。年寄中の邸内に於いて鐵炮を練習し得べき期日を定む。

〔袖裏雑記別集〕

天明六年丙午三月十二日被仰出左之通。

年寄中自分屋敷并下屋敷之内的場ニ而鐵炮打申儀、前々四月より七月中迄之御定ニ候処、以来中嶋蔵左衛門・豊嶋与右衛門様右所同事ニ、従三月九月中迄鐵炮打申度旨願之趣御聞届被遊候條、三月より九月中迄勝手次第可有稽古候。乍然大筒或目込等者可有遠慮候。六匁筒以下之鐵炮稽古之儀ニ、可為勝手次第旨被仰出。

三　月

三月十五日。前田治脩當年秋季に參覲せんとの請を許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

附札、御道中奉行ゟ

當春中御出府御延引、當秋中御參勤被成度旨御願書、當十九日御用番牧野越中守殿ゟ御先手衆を以被指出候處、無御滯御受取被成候。御願之通被仰出候ゆゑ、當秋中御出府可被成旨被仰出候事。

二　月

右御道中奉行より夫々申談。

〔政隣記〕

付札、御横目ゟ

去年御願之趣に付、來春御參勤可被成候處、當秋中御出府被成度段重而御願書被指出候處、御願之通被仰出候。此段爲承知申聞候。右之趣頭分以上ゟ可被申談候事。

三　月

當時とは文化七年以後のことなり

附、十五日於御横目所披見申義有之候事。

〔政隣記〕

三月十五日、當秋御出府御願之通被仰出候爲御禮差出御使、御馬廻組森田直右衞門被仰付、去十三日金澤發、同月廿三日江戸參着。

三月廿三日。二ノ丸御殿實檢の間に於いて初めて經書を講ぜしむ。

〔異本三壺御譜〕

三月十日、於金谷御殿經書講釋被仰付、組頭・物頭迄聞罷出候處、是以後右講釋於二御丸被仰付候條、御近習頭初二御丸へ詰合候諸頭、勝手次第致聽聞候樣被仰出。且年寄中・御家老中等茂御用之透聽聞罷出候等之旨、前田大炊申渡。三月廿三日於實檢之御間初て講釋被仰付。

當時ニ於鷹之間、毎月八日・廿三日講釋被仰付。是文化七年御損御造營、夫より當時御聞にて講釋あり。講師上下着用、天保十年より常服也。

三月廿四日。前大聖寺侯前田利精を金澤に移らしむる爲從行の諸士を命ず。

〔政隣記〕

三月廿四日於金澤、備後守樣御引取御迎御用御大小將横目代林與八郎、御駕籠際御供御大小將恒川七兵衛・姉崎太郎左衛門・岸忠兵衛・喜多岡善左衛門・吉田孫左衛門・渡邊治兵衛・鈴木助左衛門ゟ、伺之上申談有之。

〔政隣記〕

三月廿六日

備後守樣ゟ御使　御近習御用定番頭並　横濱善左衛門

同　副御使　御近習御先筒頭　松平才記

備後守樣御迎　組外御番頭　上月數馬

今般備後守樣御引取に付、小松御止宿、翌日金澤御着之筈。御迎人一統御發駕前々日發足、大聖寺ゟ參着次第、人々旅宿名前小札に調、參着之上無間違上月數馬ゟ可指越旨。御供之人々從者并乘馬・驛馬・宿次人足數書付、直に早速數馬等役所ゟ可指出候。從者隨分相減可召連候。於御泊宿賃は、本陣に而相極候通可相渡候。粟生渡舟一艘に二十人計乘候等。込合不申候樣末々ゟ可申渡。粟生支候得ば湊通ゟ被爲入候間、是又同樣に可心得候。御行列帳役所ゟ出可致披見候。小松御泊、御中休は松任に候旨等、上月數馬より頭・支配人迄廻狀出。

三月廿八日。前大聖寺侯前田利精金澤に移住の後附屬すべき諸士を確定

す。

〔政隣記〕

三月廿八日。

一、前月廿八日之記に有之備後守様金澤表へ御引移の後、御側勤仕、先御内々被仰渡有之候十人之内より、左之七人へ今日被仰付。

金森彌二郎　林儀三郎　河合半兵衛　斯波端二郎

吉田甚五郎　中山儀太夫　平野是平

三月。諸士の借用したる會所銀返納の法を改む。

〔政隣記〕

會所銀御改法之覺

一、安永四年より天明五年迄借用、地・他國當り并定借共元利數口有之候共、前借百石二十目宛之上納之分共、右二ヶ條打込、今年より百石に付二十五匁宛之割合、無利足を以上納之事。

但、是以後前借之分此內へ打込、是迄之通取立可申事。

一、安永五年より無利足を以返上之殘銀、被下切之事。

一、當年正月より御貸付之分、來未之年より十五ヶ年譜を以元利上納取立可申事。
但、前借有之分、百石に付廿五匁宛之割合を以今年より上納、是又是以後他國當り重而借用之時者、都而前借右之割合を以、今般改候百石に付二十五匁宛之內ゟ打込上納之事。
一、定役地廻相勤候人々定借、是以後も只今迄之通り每歲證文相改、利足迄上納之事。
一、會所銀御貸渡之上に而、其御用無之御指留に相成候人々、夫々用意仕候儀に付、當式之通御貸渡に而、翌年より十ヶ年譜を以元利上納。
但、其身煩等に而御斷申上不罷越分は、其節一時返上取立可申候。無據願之趣有之節者、其時々詮議之事。
一、退轉人利足は、退轉月迄之分取立候得共、是以後元利共被下切之事。
一、上納取立月、是以後御知行分七月、御切米之分三月、年中兩度に取立可申事。
但、是迄者利足銀十二月年切取立候得共、數月之取立に相成候間、是以後本文之通取立可申事。
一、是以後御貸附高、左之通十五ヶ年譜に而、一ヶ月百目に付五朱宛之加利足上納取立可申事。
但、左之百石に付而之當り。

五百目宛　他國御供人。　四百目宛　他國詰之人々。　二百目宛　地廻り御用。

右之通會所裁許御貸渡、是以後御改法被仰出候條、夫々可被申談候、以上。

丙午三月　　前田土佐守

會所御奉行中

四月六日。前田治脩參覲の際の行裝は凡て天明元年省略以前の格に復せしむ。

〔政隣記〕

四月六日、左之通御供御家老前田圖書殿御申渡被成候段、御道中奉行廻狀有之。

御參勤御供人天明元年より格別御省略就被仰出候、諸數等減方之儀被仰渡置候得共、當秋御參勤御供之節武器等之儀、右天明元年以前之通爲持候樣從加賀守樣被仰出候。其外御行粧等、幷下々着東絹物着用之儀等も、都而天明元年以前之振に被仰出候事。

四月十二日。諸士の借銀を年賦返濟とすべき去秋の令を勵行すべきことを告ぐ。

〔御觸并御返書留〕

御家中之人々町方等より借用銀、以相對永年賦に仕、年限之儀も相對之懸合候而差引仕候樣去秋被仰渡候。然處いまだ指引不相極、年賦證文に相改不申人々多有之躰に候。早速證文相改候樣一統可申渡候。

一、質物質屋より置主に相返、質物價證文に相改、三十ケ年賦を以相返候樣先達而被仰渡置候。彌無相違相心得候樣、是又一統可申渡候。

右之通り被仰出候條、被得其意、組・支配之面々に被申渡、組等之內裁許有之人々は、其支配に茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月十三日　　本多玄蕃助

四月十四日。前大聖寺侯前田利精金澤の假館に移る。

〔政隣記〕

四月十四日、備後守樣、昨十三日大聖寺御發途、今日暮候頃御居所安江木町井上勘右衛門宅御用借之所に御着之事。

但、御迎人に於大聖寺旅宿、十三日朝一汁三菜之御賄料理被下之、參着之砌より御馳走人被附置。右御禮上月數馬を以申上有之。且歸着之上假御横目林與八郎者御次に罷出、御近

習頭を以言上、其外者頭々を以申上有之。

[三州御譜]

四月十三日晝四半時之御供揃にて、大聖寺御立、其夜小松に御泊。翌十四日七半時過此元へ御着。此時爲御迎御用人大音帶刀安貞（後號峯）・上月數馬・佐久間與左衛門（御横目）・林與八郎（御横目代）、御大小將にて細川七兵衞・喜多岡左衛門・磯崎太郎左衛門・吉田蔀左衛門・渡邊治兵衞・鈴木助左衛門・山岸忠兵衞、其外御役人・御醫師・御料理人・足輕・小者に至る迄被遣御供仕。（御引取の上御近習中村仁右衛門并宗番三番頭に被仰付相勤候由にて、仁右衛門色々噺あり。）

[政隣記]

前記備後守様ゟ從大聖寺之御附人無之寺記置候得共、あなたより御附頭分寺岡喜八郎并御近習雨人被附置、今日參着。御醫師者此方様池田玄眞・森快安、御針醫二木順伯、御外料有澤長安ゟ被仰付。

四月十四日。前田重教の夫人江戸青山千壽院に參詣す。

[政隣記]

自分ニ津田政隣

四月十四日於江戸、青山千壽院ゟ五時御供揃、略御行列に而御前様御參詣。御大小將横目就指支候、自分儀御供に罷出候様伊藤内膳殿御申渡、六時過相揃候處、五時過御出、四時過千

壽院江御參詣、說法二座日本一二之說法附來有之に付、御參詣。二座之內一座は御所望に而神代卷說法也。參詣人夥數事也。御聽聞、同所暮頃御立、五時過御歸。但於千壽院、侍以上江は御菓子・御酒・御肴・御步江は御菓子被下之。并賄一汁二菜、暮前御湯漬被下之。足輕江は御賄代錢百文宛、小者江は七十文被下之。將又侍以上重附上下、御步以下羽織・袴着用之事。

四月廿一日。前田重教、その下賜したる親翰の箱を返上すべき形式に就いて諭す。

〔政隣記〕

四月廿一日左之通御覺書、御用番玄蕃助殿御渡之旨、定番頭廻狀有。

御親翰被成下候節、御箱之上被成下候者之名前、御指札に而被成下候。其御請指上候節、右之御指札を被成候時之通りに、御箱之上に指し候而上る者有之候。不心得之至候。右之通り認上候而者、御用多之時分者、未不被渡下御箱与紛敷候に付、又其儘に而被渡下候樣成御麁相ニ不圖御出來可有之。其上被成下候御指札に殿文字有之節者、如何可仕候哉、御請に者相改候而定□極り候事に候。御請　上　何某　如斯相調指札仕上候儀。被渡下候節之御指札者御箱之內江入奉返上候事に候。此段夫々爲心得爲申聞候樣被仰出候條、諸頭諸奉行等不相洩樣可被申談候事。

本文單に被仰出とあるを以て前田重教の處罰なるべし

午四月

四月廿五日。大聖寺侯前田利物江戸より歸邑の途に上る。

〔政隣記〕

四月廿五日美濃守様御在所江之御暇、一昨廿三日被蒙仰、如御例従両御丸御馬・卷物御拝領。

今日江戸御發駕御歸邑。

四月廿五日。前田重教、小將組半田半兵衛に流刑を命ず。

〔政隣記〕

四月廿五日於金澤左之通被仰出。

付紙、御小將頭江

半田半兵衛 知七百五十石也

右半兵衛儀、先年以來御膳方之儀に付、不屆未熟不心得麁抹不敬失念歯等品々毎度有之、其時々段々巨細被仰渡、随分御猶豫被成置候得共相改不申、近ゝ此儀に付血判誓詞茂致候處、又候今日不心得之致方、御上は申に不及、諸神江之誓詞茂虚に相心得科不輕。依之越中五ヶ山之内江流刑被仰付候旨被仰出候條、可被申渡。

但、配所に被遣候迄者、一類共江御預被成候條、急度締仕置候樣可被申渡候。尤一類交名

可被申聞候。

丙午四月廿五日

右半兵衛御鷹奉行御用番支配に付、御用番多田逸角於宅、井上勘助・御番頭田邊長左衛門、御横目木村三藏・坂野忠兵衛立會に而逸角申渡、御請判形取立、并一類武田喜左衛門・河地才記・上木金左衛門・淺賀彦兵衛・同せがれ左平太も罷越有之、配所に被遣候迄一類御預之旨申渡、武田・河地兩人之御請に判形取受、且御步横目楡葉孫右衛門・中島要助相詰、前々之通相勤候事。

四月廿八日。能登七ッ島にて巣鷹を捕へ得たることを報告す。

〔御用留帳〕

四月廿八日

一、能州七つ嶋之内荒見子に窠四つ子の内二据弟、同所大嶋窠三子之内一据弟、都合三据、此度致窠揚、來月三日頃可罷歸旨、窠揚人より申越候旨取次より屆る。

弟は弟鷹なり

四月。前田重教、御小將組野村傳兵衛等の亂行を處罰す。

〔政隣記〕

付札、御小將頭に

本文中脈に
處仰付上あ
ゝ多以て前
田重教の命
なるべし

野村傳兵衛

御家中之人々行狀慎等之儀、去冬被仰出、一統奉承知罷在儀に候。然處傳兵衛儀、同役參會之介、別而當春に至、不同心之者ゟも强而寄合宿等を申談、於會席亂行之族躰有之旨、頃日組風聞之趣達御聽候。傳兵衛儀幼少より御近習被召仕、其後御表向ゟ被指出候處、去冬御近習再勤被仰付候儀は、寔に難有可奉存筈に候。當時之勤柄に而は、組柄も宜、筆頭に罷在候得ば、一統慎方之儀も萬事心付可申談筈に候處、却而參會等之儀を棟取仕候躰、御時節をも不顧不屆至極候。依而御近習番被指除、閉門被仰付候條、可被申渡候事。

四月

右御用番玄蕃助殿被仰渡候に付、御用番御小將頭多田逸角於宅、御番頭伊藤甚左衛門立合申渡有之。

閉門　新番組　星野高九郎

同　八嶋金藏

但、被仰出野村傳兵衛同趣、御近習番被指除。

遠慮　新番　根來三九郎

但、同斷。

御叱　　御近習番組外　寺西彌八郎

同　　吉田左太夫

同組外御馬役　有田俏兵衛

四月。去秋の令により質物による貸借の整理方法を議す。

〔御觸幷御返書留〕

去秋被仰出候質物之儀、其節御達申候通り、一統帳面に記指出申筈に御座候へ共、置主幷質屋共手前に而も、殊之外相混、しらべ方出來兼申樣子に御座候間、此度相改、札主・口入等之無貪着、質物受出し候本人より金銀錢高迄書記、質屋何町何屋誰与相調、御家中幷寺社方・御郡方等夫々頭・支配人手前江取立、一紙目錄記、當六月十五日切町會所江差出候樣仕度奉存候。尤質屋書出帳面与引合、相違之分者夫々可申達候へ共、急に者出來兼候間、先人々書出之通、三十ヶ年賦割合を以當七月晦日切、御切米等被下候人々者十一月晦日切、人々印形添、紙面を以町會所江指出候樣仕度御座候。尤以來取立月、每歳兩度相極申べく候。

一、御家中小者・奉公人等之類、卑賤之者共至而少分之質物者、追而御上より御沙汰可有御座旨、先達而被仰出御座候間、其主人等より不及書出候。但し上立候人々之內、輕き者借札等に而差置候分者、書出申筈に御座候。

右之趣一統不相洩様被仰触候様仕度奉存候事。

午四月　　吉田九兵衛
　　　　　九里幸左衛門

四月。累犯の者を死刑に處すべきを命ず。

〔政隣記〕

致賊候者、於公事場禁牢及三度に候得者、從前々可爲死刑筈之旨、公事場奉行紙面御覽、是以後尤可爲其通候。於盜賊改方之禁牢者も入墨及三度に、出牢之上又候致賊候者には、是以後之不依輕重、右猶又於公事場に差出候樣改方に被仰渡、公事場にも此分死刑可申付旨被仰出候段、御用番より天明六年四月被仰渡有之。

五月六日。前田重教その子齊敬と共に金澤郊外大豆田に放鷹す。

〔政隣記〕

五月六日、大豆田口に爲御放鷹、九時御供揃に而中將樣・敦千代樣御同道御出、敦千代樣御拳に而水鷄御拿被遊。

但、初而御拳之事。

五月七日。大聖寺侯前田利物金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月七日美濃守樣金谷御殿ゟ御出、於松之御間中將樣御對顏。夫より二之御丸ゟ御登城候處、御持病之御疝積に而、春來御表等ゟ御出無御座に付御對顏無之。御退出、三之丸御堀端通御廣式ゟ被爲入。都而御作法等前々之通。

五月十三日。前田重教越中に放鷹す。

〔御用留帳〕

五月十二日

一、明十三日曉天八つ時御供揃に而、越中へ御鷹野御發駕に付、今日退出より直に一統寬御機嫌罷出之。依之今朝石動迄御先へ罷越候御鷹方等左之通。

一、福井網懸御鶴　鹿野鐵次郎
一、越前御兄鷹　小塚次太夫
一、大坂御兄鷹　山崎半助
一、松坂御兄鷹　吉田五郎兵衛
一、岩井御大鷹　宇野源太夫

一、餌飼時御大鷹　山崎宇太夫
一、谷地御大鷹　廣瀬彌平次
一、富山御大鷹　追川喜八郎
一、鵜那枝渕御大鷹　吉田太左衛門
一、若崎鴨御大鷹　松崎吉左衛門
一、御備兄鷹　薄井善左衛門
一、御備兄鷹　黒田五郎左衛門
一、御備兄鷹　棚橋平六
一、御備兄鷹　黒田源藏
一、丸之内御隼　山口五郎太夫
一、樽見壹二御隼　吉田幸左衛門
一、上野若御隼　吉田太夫兵衛
一、大嶋壹一御隼　河合新助
一、大滝壹二御隼　林傳左衛門
一、市川若御隼　薄井左平

一、富山若御隼　丹羽伴吾
一、大嶋冪一御隼　足輕　武部善九郎
一、大嶋冪二御隼　同　安達彌九郎
手明　清水新五郎　內藤十左衞門　吉田新左衞門　高木安右衞門
山口七左衞門　金子又右衞門　廣瀨彌助　山口又助
山下次郎太夫
御雇　清水宇左衞門　棚橋彌太夫
御横目　林判太夫
御步横目　石澤喜三齋門
取次　清水平八
手明足輕　榊原理右衞門　加藤沖藏　宮崎文藏　井上與三太夫
伊藤才一郎
足輕　石倉散藏　寺內平六　宮北才右衞門
御餌指　三人
御鳥見　七人

能美郡剳指　二　人

明朝御供　林　淺右衛門　武山治部右衛門　清　水　平

右之段御步頭へ申渡す。

五月十三日

中將樣今曉八時御供揃之段、昨夕和田權五郎等より申來候得共、七つ半時過御發駕被遊候事。

御泊附　森下村御小休、津幡朝御膳所、倶利伽羅御小休、今石動御晝、福岡御小休、御廻道内島村御小休、高岡御泊。

［政隣記］

五月十三日、越中筋ゐ爲御放鷹今曉中將樣御發駕被爲入、十五日晩御歸殿。御筒柄鴻鶴六羽・鵰七十餘、都合百羽餘有之。

五月廿七日。大小將横目原宗右衞門火災の爲出張の際落馬して死す。

［政隣記］

五月廿七日曉八時過、堅町金澤辻彌平太宅より出火、類燒無之鎭る。各登城。但御大小將横目原宗右衞門、火事所より歸候剋、岩根馬場入持組永井七郎右衞門前に而落馬、塞り候處開

角島は今の鹿渡島なるべし

不申死去。息亥之助二歳。

五月廿七日。前田重教火災を報ずる太鼓の打方を改むべきことを命ず。

〔政隣記〕

五月廿七日。是迄金澤定火消太鼓打方、御城近并兩御寺近之火事に者三つ宛打續け、犀川・淺野川兩大橋之内二つ宛續け打、同橋外者一つ宛打候處、被仰出に而今月より左之通打方改り候事。

御城近	○-○	○—○—○	○—○—○—○	宛
御寺近	○—○—○	宛		
兩大橋內	○-○	宛		
同上外	○	宛		

六月六日。鹿島郡角島の漁民朝鮮に漂着す。

〔御用大綱抜書〕

一、鹿島郡角嶋村之者一人、獵船に乘獵出居申所被吹流、天明六年六月六日朝鮮國全羅道唄天之内粟浦与申所に致漂着、夫より對馬に被送、大坂に來候上御藏屋敷に相渡し、無異儀歸國す。

六月七日。前田重教病むを以て治脩自ら政務を見るべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

六月七日、左之通昨日從加賀守樣被仰出、今日御用番大隅守殿被仰渡候旨、御横目廻狀出。是五月上旬於御馬場中將樣少々御滯り、其後御浮腫も有之、御勝れ不被遊候處、押而同月十三日越中江御放鷹に被爲入候處、御氣色不御宜に付、十五日御歸、其上にも御押被遊候而、同月中御馬場・御能等被遊、今月朔日にも御能被遊候處、御中入より餘程御滯に而、直に御床に被爲附。御大病寺卿匕横井玄臺・相見内山養益等診候得共、被仰出之趣に而御表向〻者不相知、少々御浮腫等に而御勝れ不被遊之被仰出。御所勞御重き御容躰抔寺中事共御據〇〇御容子に付、雖申上、依而玄臺等兩人之外診被仰付候樣に申上候事も難成由。委曲に者難書盡也。

諸向より指上候封じ物、金谷御殿へ指上候樣先達而被仰出候得共、當分二之御丸へ指上候樣從加賀守樣被仰出候事。

〔政隣記〕

中將樣前記之通被成御所勞、御國政等都而今月七日より加賀守樣へ御引讓被遊候。且御所勞御重き抔に堅く沙汰仕間敷旨嚴重之就被仰出、御表向〻者其頃御樣子相知不申候事。

六月十二日。前田重教卒す。

〔政隣記〕

六月十二日御用番大隅守殿より中將樣頃日御氣色御勝不被成候處、夜前より御指引も被爲在候條、追付登城御機嫌可相伺旨、頭分以上江一役連名之御廻狀有之。重而御指重りに付、右同樣之御廻狀有之候事。

頭書。曉天九時過より御指引、實は四つ四歩御落命也。十三日夜の内より十四日曉天御入棺、同日七時二重御入棺。

右に付二之御丸御表小將兒嶋伊三郎江早打御使江仰付、御前樣江御容子被仰進、且御指重候段公邊江御屆之早打御使御大小將菊池九右衛門江、小拂金七十兩被貸渡、於御次白銀五枚御目錄拜領、且御醫師御願も兼被仰渡、申下刻發出。且就御大切早打御使御大小將馬淵友之進江被仰渡、同夜子上刻發出、拜領物等九右衛門同斷。

同夜亥中刻、就御逝去公邊御屆早打御使御使番青木與右衛門、爲押指副御馬廻組榊四郎左衛門、御前樣江御悔被仰進候早打御使御近習御使番山路忠左衛門江被仰渡、同夜子上刻發出。

前記有之頭分以上最初之登城者暮頃に而、御帳に附各退出。重而御指重に付而之登城者夜九時登城、御帳附候處御指留に而、柳之御間列居申談有之、御年寄衆御列座左之通御用番御演

今晩亥の中刻とあるは十一日の夜なり

達。

中將樣御氣色不被爲叶御療養、今晩亥ノ中剋被遊御逝去候。此段申達候。右之趣組・支配之人々へも夫々可申聞候事。

六月十二日

一、左之趣御横目中申談有之。

爲伺御機嫌明十三日可有五時登城候。病氣等之人々者、御用番宅迄以使者可申越候。且又今晩登城無之人々并遠出之面々へ者、演達之趣夫々向寄より可有傳達候事。

一、平士者組伺御機嫌候に不及申事。

一、御先祖樣方御忌日御寺へ參詣之儀も、當分指扣可申事。

一、頭分以上人々者、此砌之儀に候間居屋鋪之大門を閉、小門より出入、小門も無之者には大門閉寄候而可然候。平侍中等も右之通に候事。

右之趣夫々可被申談候、以上。

六月十二日　　長　大隅守

御横目中

右之趣に付夫々頭々より組・支配へ廻狀出之。

付札、御横目江

覺

一、普請并鳴物高聲等遠慮之事。

一、諸殺生無用之事。

一、御家中さかやき可爲遠慮候。又者ニ及其儀申間敷事。

一、不及申候へども、此砌之儀に候條、火之元之儀別而入念可申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配江も是又夫々申聞候樣可被申渡候。日數之儀者追而可申達候事。

右之趣夫々可被申談候事。

六月十二日

右御用番大隅守殿被仰聞候旨等、御横目より役名廻狀有之。

今夜より御葬式迄、寶圓寺出家中七人宛晝夜詰切、和尚時々被罷出候事。

中將樣御法號、泰雲院殿故正四位羽林中郎將仁山彭壽大居士。

覺

一、今般御家中普請御三十五日過候者不苦候事。

一、諸殺生鳴物五十日過候者不苦候事。

一、鐵炮稽古之儀も五十日過候はゞ不苦候事。

一、御家來精進五十日たるべき事。

一、年寄中且又御近習相勤候人々者さかやき五十日、其外は御三十五日過候者さかやきそり可申事。

一、頭分以上之人々居屋敷之御門閉候儀、御葬式相濟候翌日より可爲常之通事。

六月

前田重教行狀

〔雲濤光〕

泰雲院殿江戸御道中にて、高さ三四間も有べき嶽に御指懸り、此處を馬乘にて上るべき哉と御尋あり。御近習皆て、今度御供の内久世平助ならで覺え不申と申上る。さらば平助を呼べとて、是を命ぜらる。平助畏て、馬の腹帶をしめ、鞍おきかへなどし、心靜に嶽を上り得たり。又下りて見よとの御意なり。時に石野主殿助御諫を申上るは、下る事は甚危く覺候、此儀は御免被下べしと再三申上ければ、下る事は止めになりけりと也。

〔雲濤光〕

又江戸より御歸國の砌、姫川大水にて、御通行なり難しと追々注進あれども、御聞入なく御指向、主殿助瀨踏致し見よと有ければ、其儘馬を乘入遙におよがれ、或は沈み或は浮み、辛うじて岸に上り着きければ、馬も嬉しげに二聲三聲嘶きける。暫く息をつがせ、又引返し乘入らんとす。馬も驚きたる躰を見て、馬の心を察しおもはず落涙したり。哀情はふとした事におこるものなりと語られしとなり。水勢强ければ御人數も危しと申上、御逗留に成たるとなり。

〔螢廼光〕

泰雲院殿御露地の松の枝を伐らせられ、杣梢高く上り居るを御覽じて、鐵炮を持て、杣の髻を打て見すべしとの御意なり。御近習より色々御諫め申上、萬一御ねらひ違時は、人命にかゝり不便の事と御なだめ申せども、我打損ぜざるを見よとの事にて、既に鐵炮御取寄せなり。時に石野主殿助御前の御傍へ走り來り、御前の御鐵炮百發百中、はづるゝ事は無御座候得共、下郎の儀に候得者、音に驚き先て落申べしと御諫め申上しかば、左もあらんかと仰られ御止めに成しとかや。誠に御諫言の申やうにて、人のたすけにもなるとの沙汰なり。

〔螢廼光〕

泰雲院殿は世にかくれなき豪將にてましましける故、家士の名士も顯れたり。中にも久瀨平

助作方にて、殊に弓馬に達し、江戸にても色々の名譽度々也。（事繁多なれば略す）吉田九兵衛は弓の名家、別して此人様々の名譽あり。或時御褒詞ありて、其節御尋には、其方の箭先にて何程射伏申べき哉と。九兵衛答て、箭種さへつき不申候得者、敵一方は防可申なりと。劒術の名人多き中、齋藤金平近世の名人也と稱美し、今に其名きこゆ。鎗術は筒井恒右衛門、柔術荻原八兵衛、是等は萬夫不當の勇士也。皆々奇妙の談多けれど事繁ければ略す。

〔螢邇光〕

江戸神田町の祭禮は、昔より騷敷群集故、祭禮の日は諸侯方御通行御禁なりとかや。泰雲院殿兼て思召も有しにや、此日御出馬有べき旨、前日御供を撰び立られ、朝御供揃の時、可辱の御筋の上御酒を給りたり。依之御供の面々も覺悟を究め、今日は君へ一命を指上る日成べしとさゝやきける。果して神田町へ御指懸りの處、左右につゝくりと棒を引違ひ、其體固嚴重也ける。御前此躰を御覽するに、向の人上が上に群集して、棒を立べきやうもなく、中々御通行思ひもよらず。然れ共理不盡に御懸拔可被遊思召にて、皆を拂へとの御意也。石野主殿助轡にすがり馬を止め、御前聲を給ひ、そこ放せよと鞭を持て三度迄打給へども、主殿助じつとこらへて馬を動さず。扨江戸中の火方ども（御國にてまとひ持の類のものなりと云。）幾千となく來て狼藉す。御同勢百二十人也。誠に馮河の勇とも云べきか、危ふかりし事どもなり。荻原八兵衛一番に進み、

警固の棒を奪ひ、一人々々手向ふ者を投散し〳〵、秘術を盡して働きける。是に劣らず働く者は多けれども、前後左右蟻の如くに追取卷き、進む事も成がたく、退く事も相同じ。防ぐべき術もなかりける時、椶梠の大木立懸有しを、是幸ひと、久瀨平助・北川桀八郎・江守平馬、彼是究竟の勇士十人計、二本の椶梠を引違へ、町幅に横たへ、群り來る大勢の胸に押あて、樊噲・項羽が勢ひにて、えい〳〵聲を出し押行きける。其隙を見て、棒或は鎗の柄を持て、無二無三に打立ける。疵を蒙る人多けれども、跡より押來る人にて退くべき樣なし。彼火方の類大勢屋根へ飛上り、瓦を打付る事雨より繁し。流石の御同勢も疵を蒙り辟易す。かくては不叶と、山崎小兵衛小屋根へかけ上り、瓦を打奴原を投おろし投おろし、火花を散して働けるが、筒井恒右衛門・原田某續て屋根へ上らんとす。山崎聲を懸、此側は何程の人ありとも、我ひとりにて事たれり。向側へ上つて奴原を投おろされよ。心得たりと飛上り、勢ひ猛くのゝしり、人を投おろす事礫を打が如し。（此屋根にて三人働めざましかりしと、江戸あとあと迄評判有りとなり。）扨平助等十人計は、一世の勇をふるひ、椶梠を持てじり〳〵と一脚宛押行き、終には町を通り拔たり。又殿には、大脇兵馬是又萬夫不當の豪傑にて、水溜の柵を引き拔き前に並べ、是をさか茂木にして、後より押來る人をたゝきたて防げり。市川仙左衛門御鎗持の御鎗の穗先をふみ折り、是を棒にして働き、中村儀右衛門・岡野又助、是等は輕き者ながら、拔群の働きの由にて、後御取立

なり。無恙御歸城、一人も御供に欠けたるはなし。然共鞁を掌りし者五十四人、或は二三日にて死し、或は日を經て死せし者四人有しと也。其日の働き人々より申上ことの御尋なり。萩原八兵衞袂より髷の元結五・六十取出し、たゞおさへつかんで投たるは大概斯の如く、蹴倒し踏ニ倒したるはおぼえ不申と申上る。はげしき中にて、手抜りなきいたし方と御褒詞有しと也。依之一番の働きにつき、其外二番・三番と段々甲乙あり。加増・褒美被下しと也。萩原八兵衞は廣言過たる故、格別の御褒美なし。此騒動江戸にても聞傳へ、今に此時の沙汰奇談ぞも有しと也。只聞し儘に、大海の一滴大樹の一葉を摘んで爰に記す。此騒動の節、安藝公より御加勢出すべしと備へ有し内、事鎮り御加勢には出ざりしとなり。

〔螢燈光〕

二月十五日、御隱居泰雲院殿能美郡ゟ可爲被入旨、前年冬より御鷹野仰出、御鷹捉指と寺井邊近在に逗留なり。御泊り御旅舘小松久津屋彌平次、朝・晝の御休所は寺井村十村伊左衞門方と兼て被仰渡也。此時五日御逗留、天氣快晴打續、毎日の御鷹野なり。二月十九日五間堂村領にて、御拳の鷹にて鶴御手に入、御機嫌不斜。其日晝過より御歸城也。翌年又中鄕村領にて鶴御手に入。夫より連年御鷹野御何かこなかりしかば御機嫌うるはしからず。安永八年鍛治村助右衞門・漆村三郎左衞門網指御用として御召連なり。(御用所居中村孫右衞門内寄にて中村と)同年上淸水領にて

御鶴手に入。夫より後は能美郡へ御鷹野なし。網指御用には仔細有事の由也。寺井村伊左衛門宅地甚御機嫌にかなひ、御間の内御好みにて普請有。露地に御的場など被仰付たり。又御間に餝り置し金屛風、御氣前に叶ひ御召上なり。花車の圖なり。白銀三十枚被下、又露地御目通に高野つゝじあり一株にて二間半に三間。・茶木一株と成て八尺四方ゝ有しを、城中に引取べしとの御意にて、手木の者并植木屋を被遣、數日逗留して根認め、道中數日人夫を以て御引せ、金谷御殿に今繁茂せりと聞。又梯領往還並木の内、枝ぶり能きとて御眼に留り、是も同前也。松は程なくして枯れたりとかや。

御鷹野始めの年の御從者千人、其翌年よりは百人と成り、兵粮は不殘書苞・煮染・香物、御郡方より主附を立、每日認之。御近習御鷹方等百人計は十村馳走なり。或年明日は御歸城なりと觸有て、其日の御鷹野も過、小松御旅館へ被爲入、明日は御歸館成とて、寺井にては御見送申上、野良御供はわらじを解き、所持之面々は袴をとり、連日の疲をやすめ、酒など取ちらし居る處、日暮に到り遙に呼來るは、只今御前是へ御いらせ、俄に御泊り成りしと、段々聲を繼て告來る。各是を聞て、あわてふためき狼狽廻る處へ、はや御膳所懸りの役人先拔の人々追々に來り、重て思ひよらざる事なれば、只是は／＼と走り歩行計也。十村下には茅屋わづか十軒にも足らず、寺井本村には八町隔、是迄も良家は僅也。八百人の御從者をさまるべきにあらず。爰か

安永七年最蟲の螢見物

しこに散亂し、大身の歴々も、折しも雨降ければ軒下にひそまり、芥を藉こし塊を枕にして、又本陣より誰々を只今急に御召なりといへども、宿定まらねば其名前々々を呼立てる聲絶間なし。扨七つの御出馬と御觸有。折節洪水にて粟生船をとまり、湊廻りなり。水高ければ夜中船は越えがたしとて、港より追々に役人・船越其來り、殊に赤井の欠道甚難所にてあやふしとて、御近習より毎度申上るといへども、元來剛將の御事なれば、却て御進み、夜八つ時御出船有。御從者は自身々々の僕を呼はり、若黨・小者は主人を失ひ、上を下へと返し、其外人馬の混雜譬ふに物なし。扨能美・石川兩郡より數千の松明、御從者八百人の御提灯者四張五張と立つゞき、誠にめざましき見物なりき。

〔螢熄光〕

安永六・七・八・九年の頃、泰雲院殿名人の能役者ども御召寄、御自身の御能、諸家中幷奥方、および町年寄・肝煎、御郡方十村等、其外小役人も百姓迄、金谷御殿舞臺にて御能拜見被仰付けり。毎日御能濟て其儘御鷹野、又御歸館在て御能なり。鷹野・御能なき日は稀なり。

〔寝覺の螢〕

一、石丸彌一郎改作奉行にて郡廻りするゝ時、脚をいため遠道難儀を致したりとて、半日程駕籠に乘られたり。若黨云ふ、主人脚をいためらるゝは、泰雲院殿江戸御道中の時、强き大來

て御飼犬を喰ひ伏せたり。御前御覽じて、あれ殺せよと御意なり。彌一郎走り寄て彼犬を蹴上げられしが、落ちて卽死せり。其時痛められし脚なりと云へり。

〔擢萃錄〕

一、金岩嘉太夫は人に知られし士也。常々の住居百姓の暮しに同じ。常にむしろを懸こもを敷たり。高平の大業物を麁相の拵にて刺たり。腰に大なる桐の木の胴亂を提たり。公用の外袴着たることなし。或時泰雲院樣御鷹野へ御出の節、御城中にて蹲踞し居けり。如何成儀にてや不圖御鐵炮を御取上遊ばし、嘉太夫の廻りを御乘廻り遊ばし候に、少しも變せず謹しみ居れり。蹲踞の仕方や御目に留りけん、其後一統蹲踞のいたし方、嘉太夫の通に可心得と被仰出たり。一生殺生したる事なし。子孫にもかたく殺生を戒めたりと、子息大次郎語られし。大次郎拔群の士なり。武術之內最鑓に長じたりし。其外人のおよばぬ所多し。

〔擢萃錄〕

豊嶋喜右衛門は異風組の士なり。

一、豐嶋喜右衛門は近世名人の聞え有之、ことさら活物を打候事得手のよし。泰雲院樣或時鷺を御打遊ばされしに、嘴の上を玉すりて落けれども死せず、生捕に遊ばされし。是によつて喜右衛門に被仰付候に、無程數を打上し由。色々御用仰付られしに、一度も無調法なしと。

〔耳底雜記〕

一、山下次郎太夫に鳥指候事上手に而、中りは皆中なり。また雉子突事も上手に而、古今稀成人故蒙御意、御殺生御出毎に御供被召連候。或時泰雲院様御代、蓮池へ御出被遊候節、金谷御門御通り被遊候刻、御細工所の方より燕一つ、金谷御門雨落へ来り虫を取、又御細工所の方へ行候を御覧被遊、次郎太夫へ指候様御意に候處、御跡より御馬の先へ進出、笠をかむり外繋之方へ開き相待候處、御細工所の方よりたち来り、御門雨落にて一結び、其歸り立出候所を次郎太夫指留め、竿に附ながら御馬先へ指上入御覧候。かけ鳥を指し申所初て見請、御供の人々目を驚し、竿の出早き事矢を射る如なりと、橋本某物語なり。御歸前後御意には、妙人とも可言ものは筒井常右衛門・山下次郎太夫なりと御意に候よし。其後次郎太夫内傷相滞り、内血症に而諸被御醫師等療養手を盡候處、彌々不宜に付毎日之様子従相公様御尋被遊、御近習頭を以人参二兩拝領被仰付、用候得共終に其驗なく病死候に付、甚た御残念被思召候段御噂有之候。誠に冥加に叶候人、手令似寄候上手も無之、累年の名譽状悲涙候。世の人惜候こと無他事。

〔泳歸公孝順公ゟ御夜話之内拜寫〕

一、吉田九兵衛土州公ゟ御咄申候は、則九兵衛泰雲院様の御先立を仕候に、夜中の事故手燭を御足元の見ゆる様にと存、御足元を明らかにして、左の手に持参り申候。然所御意には、

相は宰相にて參議をいふ

足元暗きと存候得者、何れにても燭をともさせ置申候。先立と申は左樣にては無之候。右の手に持、向に怪き者も不居かを見る先立也。足元のあかるき爲に、手燭を持すにては無之こと御意の由。是は御尤成御儀と、吉田御咄申候由、成程左樣可有之儀也。

〔詠歸公孝順公に御夜話之內拜寫〕

一、泰雲公御作の書に、げん本追加今一冊有之。此內に此方家は相の位に候間、家格を落しては不濟儀ながら、とても泰雲公抔にては其所は不爲及候。積年の思召、旁以御隱居被遊度の由抔調有之候由、土州公ひそかに御咄。

〔續漸得雜記〕

菅公八百五十回御忌の時泰雲公御詠 寶曆二年御十二歲

松ならで知る人もなし天神の八百五十とせのけふのむかしを

〔續漸得雜記〕

五言古　泰雲公

一生執肯識。年富有猶征。曩出東方郭。今屏藩北營。爭忘花境宴。較在黃金城。折指曠離友。垂首哀心驚。款筆不成賦。佩書尙述情。欄前菊復茂。竹外鳥飛輕。徒畢百年日。還無千載榮。將引英明士。更懷國勳名。一弟無二諾。三嬰約長生。

群臣奉威武。益思事儀行。

右安永九庚子十一月朔日尊作

六月十七日。前田重教危篤の報江戸邸に達す。

〔政隣記〕

六月十七日申上刻、従金澤之早打御使六人到着。江戸御中邸前通行、中將様御困憂之風說に付、自分御上邸ゟ早速罷出承之候處、前記之通兒嶋伊三郎・菊池九右衛門・馬淵友之進・山路忠左衛門・青木與右衛門・岡四郎左衛門参着。金澤に而は追々發出之處、信州丹波嶋川支に而、一集に六人共参着。但、公邊御届は順々を以有之に付、御大切等之御届は相扣有之、御指重之趣也。

同夜戌之中刻、左之四人早打爲御使、江戸發金澤ゟ罷越。

御前様より	御廣式御用	中泉七太夫
結仙院様より	御附御用人	小泉也門
松壽院様より	御附御用人	堀八郎左衛門
従御家老衆伺御機嫌	御大小將	寺西彌左衛門

右菊池九右衛門・兒嶋伊三郎に御使御用相濟、翌十八日江戸發之處、丹波嶋川支、川田に而

も川支、一日逗留、廿三日午中刻金澤歸着。

六月十八日。當分月並の講書を中止すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

六月十八日於金澤左之通。

當廿三日より月並之經書講釋相止、御忌明後只今迄之通相勤候樣被仰出候段、御用番大隅守殿被仰聞候に付、八月八日より最前之通相勤候條、被成御承知御同役御傳達可被成候、以上。

六月十八日　　御横目

物頭以上定番頭迄一役之役名宛衆中

六月十九日。徳川家治、老中の奉書を以て前田重教の病を問はしめ又醫橘隆庵を派遣す。

〔徳川實紀〕

六月十九日、致仕松平肥前守重敎、加賀國金澤の城にありて病あつきよしきこえければ、宿老之奉書もてとはせらる。その子加賀守治脩ねぎ奉るにより、奥醫橘隆庵元周を遣はされて療養を加へしめらる。

二十日、けふ致仕松平肥前守重教が病をとはせられ、糟漬鯛をたまはる。

〔政隣記〕

六月十九日、御隠御卿御之儀相聞候様隠庵老ゟ被仰渡、今晩御發出金澤ゟ御越に付、指添御大小將神子田五兵衛・御歩横目村上庄蔵。但足軽等指添罷越、御旅宿等に而御料理方等取捌。尤五兵衛より指圖を請勤也。

六月二十日。前田重教の病危篤なることを幕府に屆出づ。

〔政隣記〕

六月廿日書過於江戸、公邊ゟ中將様御大切之御屆相濟。馬淵友之進五ッ時頃江戸發之處、入馬引信州丹波嶋川支、松代邊等に而及逗滯、廿六日辰之中刻金澤ゟ歸着。但公邊御屆使馬淵相勤候後、御内輪（御本宅御葬式ニ付之事也）幷紀州様之御廣式ゟ之御使相勤候而發足。附、馬淵儀去十二日申下剋金澤發足之處、旅中川々滿水、幷人足甚指支等に而、漸今晝到着仕候趣を以、今日晝過公邊ゟ之御使勤之。前記之菊池此後之御使入も、發足・參着之都合右に准取計等を以、御屆夫々有之候事。

六月廿一日。德川家治、前田重教の病を問ふ爲に使者を發せしむ。

〔政隣記〕

六月廿一日、御病氣爲御尋金澤ゟ之上使、御使番嶋田治兵衛殿今朝江戸御發足。從大納言様者宿次以御奉書御尋、是又今日發出。

六月廿一日。前田重教夫人再び使者を發して重教の病を問はしむ。

〔政隣記〕

御前様より御大切之爲御見舞、御用人代御廣式番長崎呂太ゟ早打御使被仰付、今夜江戸發出、廿七日寅上刻金澤着。同日申ノ上刻發之處、信州長沼川支、七月五日江戸歸着。

六月廿二日。前田重教卒去を江戸に於いて發表す。

〔政隣記〕

六月廿二日晝九時頃、於江戸左之通頭分以上ゟ伊藤内膳殿御演述。

中將様御氣色不被爲叶御療養、去十二日亥中刻被遊御逝去候段、從加賀守様早打御使番青木與右衞門ゟ被仰渡被遣、今晝公邊ゟ御屆有之候に付此段申達候事。

六月廿二日。前田重教卒去せしを以て幕府の慰問上使及び醫師を留むる爲江戸より使者を發遣す。

〔政隣記〕

六月廿二日　　申上刻發出　　御大小將

御隱居橋隆庵老指留早打御使　　横地茂太郎

同斷　　同

上使嶋田治兵衞殿同斷　　加藤左門

〔政隣記〕

六月廿六日、前記廿二日に有之通、加藤左門發出之處、廿四日未中刻信州海野に而、上使嶋田治兵衞殿へ追付候に付、御逝去に付御指止之御使相勤、申上刻御答有之、無程早打に而今廿六日巳中刻歸府。但、去る廿二日申上刻發出、翌廿三日松井田驛ゟ酉上刻着之處、御關所支に付、翌曉寅之上刻迄同所に逗留。其外如本文。

〔政隣記〕

六月廿六日、前記廿二日に有之通横地茂太郎發出之處、翌廿三日松井田驛ゟ酉上刻着之處、碓氷御關所夜に入指支候に付、同驛に逗留。翌廿四日寅之上刻發出、同日戌之中刻信州松代に而橋隆庵老に追付、御指留之御使相勤候處、隆庵老留守ゟ之傳封被頼候に付請取、翌廿五日寅之上刻同所發出、今廿六日夜子之上刻江戸ゟ歸府。

六月廿二日。前田重教の葬儀に供奉する者の心得を命ず。

裁領は宰領

〔政隣記〕

六月廿三日於金澤。

覺

一、御葬送御供揃、當廿五日夜四半時（重而五半時与被御出候段、翌廿四日御横目中より廻状。）に候事。

一、御葬送之節御供之人々御歩以上、くゝり股立・わらんじ之事。

一、御寺より野田迄御供之人々一統、わらんじ・こうかけ之事。

一、金谷御殿より御寺幷野田迄御供之人々新番以上、自分手傘幷家來之合羽・笠籠等爲持不被申人々は、割場に取集、御行列跡より爲持罷越申筈に候。尤裁許足輕に爲御渡可有之候。御寺より野田迄御供之人々は、百々女木橋より手前足輕町之内に而右之通受取、是又御行列外へ野田迄爲持罷越筈に候。尤交名付札に而、當廿五日夕方割場迄御指出可有之候。野田之御供相増候面々は、御供揃之節右百々女木橋邊に而請取申筈に候間、其節爲御渡可有之候。

但、金谷より野田迄直に御供之面々、且又御寺迄御供之面々、其分は御申達、右裁領に爲御渡可有之候。御寺より罷歸候面々は、右之處に而請取候品相返申筈に候事。

附記、右に新番以上手傘与有之候得共、前々御葬式御供之節御歩横目も手傘に付、右之趣御歩頭御用番河地才記より御奉行大炊殿に相達、此度も手傘相用候筈に相成候事。

一、金谷御殿より御寺迄御供に罷越候人々、御棺山門之内に被爲入候ば、勝手之所より直に御供爲御引可有之事。

一、野田迄御供之面々は、御棺御火屋に被爲入、寶圓寺和尚誦經に被罷出筈に候。右和尚退去次第、下々迄作法宜御供引可申事。

一、御醫師・外料等棧守等に相詰罷在候間、是又御承知可有之事。

一、惣而御供之人々從者等控處之儀、御歩横目・足輕等指圖之通相心得可申事。

一、石川・河北御門・七十間長屋御門・金谷御門、御供揃之節指支不申候間、左樣御心得可有之事。

右之通夫々可申談旨、御葬式等御奉行大炊殿被仰聞候條、御承知被成御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候、以上。

六月廿三日　　木村三藏

山崎彦右衛門

諸頭御用番一名樣

六月廿四日。江戸に於いて前田重教の喪中の心得を諸士に示す。

〔政隣記〕

六月廿四日、左之通於江戸伊藤内膳殿夫々ゟ御申渡。

一、普請・鳴物幷高聲等、且又諸殺生、五十日遠慮可仕事。

一、御家中之人々さかやき之儀、與力以上一統、當月十三日より御三十五日迄、御歩幷御歩並之者は、十二日より三十日、足輕・小者は十二日より三七日遠慮可仕候。依御用指支候者有之候はゞ、天德院樣之御時分之通可相心得候。

一、御家中精進可爲五十日候事。

一、脊實御門出入五十日可指留事。

一、御表向裝束、嘉節朔望に而も平日之通に候。平士も尤可爲常服事。

六月廿五日。德川家治及び家齊が前田重教の病を問ふ爲に發したる宿繼奉書金澤に着す。

〔政隣記〕

六月廿五日、前記廿一日有之候御病中爲御尋大納言樣之宿繼御奉書、今申上刻金澤ゟ到來之處、御逝去後に付御返上之早打御使御馬廻組今村喜太夫、副使同組鹽川信左衛門ゟ被仰渡、翌廿六日朝六時前金澤發出之處、信州長沼二日二夜逗留、七月五日曉丑上刻江戸着、同夜戌下刻江戸發歸。

公方様より去十七日夜御病中御尋之宿繼御奉書、同夜江戸發之處、道中川支に而右同刻一所に金澤へ到來候處、就右同斷御爲上之早打御使、御馬廻組永井兵五郎、副使藤田十太夫へ被仰渡、右同斷發足之處、信州長沼に而川支に付、二日三夜逗留、七月五日轉丑上刻江戸着、同日御使勤、同夜戌下刻江戸發歸。

六月廿五日。前田治脩、重教の葬儀の爲に奉行を寶圓寺に遣はして檢分せしむ。

〔政隣記〕

六月廿五日、加賀守様御病結等に而春來御出無御座候得共、今般之趣に付押而御參府被遊候に付、寶圓寺御門外へ取之際に而御駕籠横付于被御出候段、當番組頭和田清三郎夫々申談。

同日御葬式爲惣見分寶圓寺へ、御奉行大炊殿初布上下着用、朝五時より御越に付、諸役人等罷越九時前相濟事。

但、御巡道之習禮も有之候事。

六月廿六日 徳川家治使を本郷邸に遣はして前田重教の卒去を弔せしむ。

出雲守は富山侯前田利久

廟所は野田山

〔政隣記〕

六月廿六日於江戸、爲御悔上使御奏者番秋元但馬守殿八時前御出、御名代出雲守様御勤之處、左之通被蒙上意。

今度肥前守致死去可爲愁傷候。上にも御殘念に被思召候。依之御香奠被下之。

御香奠銀五十枚御拜領、諸事前規之通相濟候事。

　但、尤御書院御飾無之、御料理等出不申候事。

〔徳川實紀〕

六月廿六日、致仕松平肥前守重教卒しければ、その子加賀守治脩がもとに、奏者番秋元但馬守永朝御使して、銀五十枚たまはり祭奠せらる。

六月廿六日。前田重教の葬儀を寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

六月廿六日。前記之通昨夜五半時之御供揃に而、今曉八半時泰雲院様金谷御殿御出棺、朝六半時前寶圓寺江御着棺、御巡道等御葬式四時前相濟、夫より御廟所江之御出棺。

　但、御寺詰頭分以上御出向、山門之外向て左之方江御奏者番初頭分列居、御年寄衆者右之方江被罷出。

一、本堂に被爲入候内、本堂上御白幕之外に石面々列居。
一、御寺より野田迄御出棺之節者、惣門之外御先手番所下之方ゟ御年寄衆御見送に被罷出候に付、其後之方ゟ御奏者番初諸頭御見送に罷出。

七月朔日、是日以降寶圓寺に於いて前田重教の法會を營む。

〔政隣記〕
七月朔日・二日・三日二夜三日、金澤於寶圓寺御法事差定寫左之通。

泰雲院殿御中陰之法務修行諸佛事大齋會差定

寅刻　轉讀大般若經　　卯刻　上粥般若心經
卯刻　獻粥大悲神咒　　辰刻　修楞圓通懺法
午刻　上供般若心經　　午刻　奠茶法語
同刻　奠湯法語　　　　同刻　拈香法語
同刻　獻供楞嚴遶行

中日

寅刻　轉讀大般若經　　卯刻　上粥般若心經
卯刻　獻粥大悲神咒　　辰刻　頓寫大乘妙典

巳刻法問高量　午刻般若心經
同刻献供楞嚴遶行
満散日
寅刻轉讀大般若經　卯刻上粥般若心經
卯刻献粥大悲神咒　辰刻上堂法語
午刻水陸勝會　午刻上供般若心經
同刻献供楞嚴遶行　同刻放生秘密神經
以上於寶圓寺

同日は晦日

同日四半時御供揃に而、八時前御裝束に而寶圓寺ゟ御參詣。敎千代樣九時御供揃に而、八時過御參詣。
同日御法事八時頃相濟、惣樣御寺詰人退出七時前に候事。
〔政隣記〕
七月二日、寶圓寺に而御法事前記之通り、九半時頃相濟、八時過御裝束に而御參詣、夫より詰人退出。
七月三日同斷、前記之通九時過相濟、追付御裝束に而御參詣御拜被遊候後、和尚ゟ被下物有

筑前守は大聖寺侯前田利物、出雲守は富山侯前田利久

之、前々之通御大小將披露。畢而息付御歸殿、夫より御前様等美濃守様・出雲守様御代香幷年寄衆等拜禮。畢而座見に之被下方相濟、惣様八時前退出。

七月三日。公事場に於いて罪囚を恩赦す。

〔政隣記〕

七月三日於公事場御大赦有之。火付・親子殺は永牢、其外は出牢被仰付。

七月四日。前田重教の寶圓寺位牌所及び野田山廟所に參拜の件に關して告ぐ。

〔政隣記〕

七月四日、於金澤左之通於御横目所披見申談有之。組等より向寄を以談有之。

付札、御横目より

覺

一、於寶圓寺泰雲院様御牌前に、人持・頭分之面々、當月十二日より毎月勝手次第可有拜參候事。

一、當念中泰雲院様野田御廟所に、人持・頭分幷平士之儀も、前々之通勝手次第可有拜參候事。

右之通向寄次第夫々可被申談候事。

午七月

付札、御横目〻

御先祖様方御忌日御寺〻拜參之儀、當分指扣可申旨先達而相觸候通に候。御忌明之上者、勝手次第御寺〻拜參可仕候。

一、當希中野田御廟〻拜參之儀、泰雲院様御廟之外者指扣申等に候事。

右之趣向寄次第夫々可被申談候事。

午七月

七月四日。本郷邸に於ける割場附足輕、藥種商より一角を詐取して直に出奔す。

〔政隣記〕

七月四日、今朝御上邸詰割場附足輕松本鄉太夫与申者、下谷花町藥肆坂井屋〻罷越、一角多く御用に候間、御進物所迄此方与同道持參候様申入、則召連越、中之口に而一角受取、暫待候様申入置、外口より直に追分口御門より出奔。右一角大さ長さ六・七寸、上々一角にて代金百六十兩与云々。

七月八日、昨今兩日江戸廣德寺に於いて前田重教の法會を執行す。

廣德寺ゟ相詰とは津田政隣のことなり

壽光院は前田重教夫人

〔政隣記〕

七月六日、明日・明後日御法事之爲懸見分、伊藤内膳殿等下谷廣德寺ゟ九時頃より罷越、暮前歸。七日北上刻御中邸出、廣德寺ゟ相詰、暮頃歸。前記有之通、泰雲院樣御中陰御法會式無滯見懺法等、并從壽光院樣御附御法事有之。附於御寺一汁三菜之御斎兩度被下之、從御寺者爲菓子被出之。

八日、昨日之通北上刻出、黄昏歸。今日御法會式粥齋・頓寫等、從祐仙院樣塩原見、從松壽院樣金剛經之御附御法事有之。附御斎等昨日之通。

一、此度御法事料白銀百枚、詰人面々御參詣衆并御使者ゟ出る。御料理・御菓子者都而御臺所懸り役人罷越、於假臺所從此方樣被仰付。此度出來之假屋數ヶ所、尤御作事役人等罷越建之。御法事後御寺ゟ上り切也。諸向杢等に至迄御寺より一切不構之。右御法事料百枚者御法事式而已也。御佛前御飾・御靈供等も、奉行御大小將丹羽六郎左衛門・久田義兵衛夫々役人召連罷越勤之。僧中ゟ之賄・菓子も別段に代銀被遣之。是者御寺に而出來之事。

一、祐仙院樣より之御法事料白銀十枚、從松壽院樣之御法事料白銀十五枚。

一、御一門樣等より之御香奠、惣高白銀五十九枚か二十包、金千百匹、其外菓子・生花・作花

等將敷事也。

七月十日。家中諸士に從前の諸法度を嚴守すべきことを告ぐ。

〔天明六年御觸幷御返書留抄〕

從前々被仰出候御法度之品、暨御定書之趣、急度可被相守候。尤與力・家來等嚴重に可被申渡候、以上。

七月十日　長大隅守

御名殿

御相組中殿

七月十一日。前田重教の三十五日以後の法會に關して告ぐ。

〔政隣記〕

七月十一日、左之通御法事御奉行大炊殿被仰聞候、且頭分以上長袴着用之等に候旨等、御横目廻状出。但於金澤也。

付札、御横目に

御三十五日・御四十九日・御百ヶ日御法事御執行に付、御寺詰人揃刻限前々之通、先達而申渡置候得共、此度詮議之趣有之、一統揃刻限近年御年忌之節之通、卯の刻迄に相揃、奉行人・諸

役懸り御番人者卯上刻相集、御法事相済迄相詰可申候。但御牌前御番人・火之番人者各別に候。

右之趣夫々不相洩様可被申談候事。

午七月

御三十五日・御四十九日・御百ヶ日御法事之節、御菓子料出家中之外、御寺詰人々者不被下候。御賄之儀は三日共、御歩並以上夕御賄迄、足軽以下者朝夕御賄被下候間、右指紙而御三十五日之儀者當十四日限り、四十九日之分者當二十日限り、御百ヶ日之分者二十八日限御臺所ゟ指出候様、夫々被仰渡可被下候。右日限後指紙而出候分者、御用意不仕候間、此段夫々被仰渡候様仕度奉存候、以上。

七月十一日　　土師清吉

前田大炊様

覺

一、七月十七日　御三十五日御法事

一、同月二十四日　御四十九日御法事

一、八月二日　御百ヶ日御法事

右御中陰御法事之節、病氣等に而拜禮不罷出人々、右御法事之節卯の刻より巳の刻迄追々拜禮罷出可申事。

但、染帷子・布上下可致着用候。

右之趣夫々可被申談候、以上。

七月十一日　　前田大炊

御横目中

七月十三日。奥付御歩横目等の月代を剃り得べき時期を定む。

〔政隣記〕

七月十三日、前月十二日記之通、御三十五日過候得者月代剃候筈に候得共、二の御丸・金谷共奥付御歩横目、御膳所御歩横目、幷金谷御廣式御膳所御歩横目、且御歩並以上月代、五十日遠慮可仕旨、向々頭より申談有之。

七月十六日。前田重教の卒去に對し幕府より與へられたる禮遇を謝する爲の使者を命ず。

〔政隣記〕

七月十六日、從今度公邊御香奠御拜領之御禮使、御小將頭本保孫八郎被仰渡、八月三日金澤發足之旨。御奉書御禮使御馬廻頭津田林左衛門、其外品々之御禮組外御番頭上月數馬・定番御馬廻御番頭永原彌三郎・寄合加藤圖書・御馬廻組小林清左衛門ゟ被仰渡、何も八月三日金澤發足之筈に候事。

但、八月三日發十六日江戸着、九月朔日發歸。上月に御看府迄詰被仰渡。

七月十七日。前田重教卒去後三十五日の法會を寶圓寺に營む。

〔政隣記〕

七月十七日、御法事九半時過相濟、追付御參詣、恐悦退出八時過。御法會差定寫左之通。

泰雲院殿御三十五日御法事差定

辰剋上粥般若心經　同剋獻粥大悲神咒

同中剋涅槃講式　午剋上供般若心經

同剋獻供楞嚴遶行

以上於寶圓寺

十八日九時御供物に而、野田泰雲院様御廟ゟ御參詣、且御供人長髮之儘御供可仕旨被仰出。

七月廿四日。前田重教卒去後四十九日の法會を寶圓寺に執行す。

〔政隣記〕

七月二十四日御法事九半時頃相濟、追付御參詣、惣樣八時過退出。且從松壽院樣御附御法事有之。是は八半時より初り候由之事。

泰雲院殿御四十九日御法事差定

辰刻上粥般若心經　同刻獻粥大悲神咒

同中刻羅漢講式　午刻上供般若心經

同刻獻供楞嚴遶行　以上於寶圓寺

七月廿六日。前田治脩當秋參覲の期を定む。

本年八月廿一日の條參照

〔三守御譜〕

天明五年御國打續御損耗等に付、御願之上御參勤御用捨、翌年春御參勤可被遊處、重て御願によつて未年春迄御用捨之處、御政務相調候に付、午年秋中爲御伺御機嫌御參府可被成旨、猶又御書付御指出、御願之通御付札を以て被仰渡。

〔政隣記〕

七月廿六日、當秋御參勤御發駕御時節八月下旬与被仰出、且左之通御用番御觸有之。於江戸表者八月三日御家老衆御觸有之。

江戸表御式臺ニ而初御表向、都而綿衣等竜服可致着用候。御見廻掛り之御客等者、御給仕たり

共綿衣等御貸着參之候間、勝手次第可有之事。但前廣より相知候御客之節御給仕、幷御供・御使等之節、絹類可致着用候。

一、江戸詰中於御貸長屋無益之參會無用之事。

一、餞別幷土産物堅く無用之事。

一、足輕以下者御門外たり共綿衣着用、刀脇指金銀相用申儀も可爲無用事。

右之通安永七年御參勤之節被仰渡通に候條、當御在府之儀も猶更嚴重可相心得旨、從加賀守樣被仰出候間、被得其意、組・支配之人々へも可被申渡候事。

七　月

七月廿七日、棉花の候なるを以て河北・石川兩郡に放鷹するを禁す。

[政隣記]

棉に花付實入に相成候に付、來る八月四日より十月晦日迄、石川・河北兩御郡、御家中鷹野致遠慮候樣仕度旨、改作奉行申聞候條、此段被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

七月二十四日　　　　生駒右膳

村井又兵衛樣

右同月二十七日又兵衛殿より御觸有之。

七月、前田重教の施行したる改法を錄上せしむ。

〔政隣記〕

御改法に付、諸場・諸役所且又諸頭ゟ從泰雲院樣被仰出候品々、小事たり共不相洩樣一々書記、御忌明之上早速指上可申候。但御內御用之品有之候者封じ□

右之通被仰出候條、被得其意、一統不相洩樣可被申談候事。

七月

右御用番又兵衞殿御渡之旨等、昨十三日於金澤定番頭神保舍人より別文狀有之。附於江戸も八月八日被仰渡有之。

七月。百姓等に貸借の決濟を嚴にし又小作料の納附を怠ることなからしむ。

〔司農典〕

近年御郡方諸指引不埒に相聞候。元來心得違之者共任勝手に難澁之儀申立、借用方等申破り、一躰風儀不宜段沙汰之限に候。左すれば町方等致取替候者共、米錢抔振替候而も無指引に相成申に付、不致手放不通用に而、輕き者共田畠屎物代仕入等も不行届樣成行、畢竟困窮之場に相望申儀に候。當春十村與書等之儀、譯而申渡置候通、天明四年以前借用證文書替不

申分者不及言者に、夫以来之分者偏當指引相立候様相嗣置候処、詮議方等閑に致置候組も有之候に付、一躰錯り申躰に候得共、畢而及詮議候得者、末々心得違之者共彼是申立候に付、正に詮議方見合候様相成来、自相泥申躰相聞え候。別而去暮十村與書物書替も請不申由。旦前之所も申抜、利欲に拘り何角申募り候而は、都而末々指障り申儀に候間、早速指引為相立、以後運方宜敷相成申様取計可申候。若違背仕歟、彼是申立及遅々に候者は、人別厳重致吟味、承引不致候はゞ其段可申聞候。詮議之上急度可申付候。

一、御収納方之儀者前々御定も有之、御縮方第一者元禄年中譯而書立を以申渡有之候処、御縮方相ゆるミ申所も有之に付、寶暦八年委曲申渡候処、近年百姓手前より致請作候小作躰之者共、無指引成儀を申立、去暮指引方今以相立不申者も有之躰、不届至極に候。以来右寶暦八年御渡帳之表を以致取捌、尤毎年御収納以前に、右帳面末々迄為読聞、請紙面取立置、不致忘却候様相心得可申候。違犯之者於有之者、其方共手前に而相糺、其上にも我儘申募り候はゞ可申聞候。引出詮議之上曲事に可申付候。

午七月　　　　改作奉行

諸郡十村中

七月、領内の御扶持人等、改作奉行及び御郡奉行に對し十村の待遇改善

を要求す。

〔眞館諸書物留〕

御郡方十村役之儀者、慶長年中御取立御座候而、御領國御取治被仰付、御草創之頃より私共先祖之者御改作方御用相勤、御扶持高頂戴仕、御武具・御時服等之類度々拜領被仰付、其内御鑓之儀は御郡方爲御締被下候間、村廻仕節爲持可申旨被仰出之儀、先規より由緒帳面に書上候者も御座候。尤御次迄も被召出、御用相勤申候。且又私共御扶持高被下候上は、町方等御扶持高被下候者与違、名宛所之御印被下、病死仕砌上り知等之儀、御知行同様之趣、只今以其御格合に御座候。且又先年は御年寄様方より、私共宛所に而作躰之様子等御尋之御書面數通所持仕候。勿論御先代樣年頭御禮竹之御間續御緣側に而被仰付、御料理被下候節も、足輕御給仕に被仰付候。右御給仕之儀は、今以古來之通御振合に御座候。然處近年御算用衆等より私共江之會釋混雜仕、御役所に而は名前申放しに被致、自然与風儀押移り、御家中末々小者躰之者幷町方輕き者共迄も、甚かろしき候様に成行、御城下幷宿方にも御郡百姓等二・三男躰之者奉公に罷出、舊里に罷在候節心躰不宜者共、不實之儀に而十村より受批判候者、身分之非儀を忘却仕、遺恨を含、支配も違候得ば勝手次第雜言等申ふらし候風俗、おのづから御郡方に押移、御締方にも相障申儀に御座候間、私共役列之儀先前之通御糺被下候はゞ、

全躰御縮方にも相成可申儀与奉存候。最前申上候通、御算用并會所等之儀茂、先規之通り被仰付被下置ニ而、末々茂歸服仕、則役筋御礼之場に至り可申与奉存候。先以御算用奈より、十村名前申放に被致候儀は、小井又七殿御改作附相勤候節、御算用場におゐて覚蔵村故丈蔵名前申放も被呼候處、無心得旨返答仕候も御座候。其已前茂は左様之儀無御座候處、其後自然与被申落候趣に御座候。先年御算用場并所々御奉行所ニ而も御紙面にも殿付に而御渡、今以私共所持仕候。々様之儀御振合も御座候處、小役人中迄當時ニ御奉行所同事之會釋ニ而、階級も無相分奉存候。既に金澤町年寄等於町御會所、御同心并拘町下代中會釋之振ニも及承罷在候。御郡方ニ限り右樣之趣相違仕候樣に奉存候間、何分御内談被下候樣奉願候。右町年寄等御振合も御座候所、別而十村之儀は、御田地御收納方・諸役懸之儀ニ不及申、過分之人家御指揮被成候。百姓中不届之趣御座候得は、十村手前ニ而手鎖・追込等申渡、私宅之儀も役宅之趣に被仰付置候華き役筋故、外々与違御印物等被下置候儀与奉存候。將又十村之儀は御軍用御手當之趣も御座候由奉承知罷在候。彼是御樣子御座候に付、御先格先條之通被仰付置候樣与奉存候。曾而私共身分之儀申立候趣に而は無御座候。畢竟御郡御縮方にも相障申筋に御座候に付、御内々小紙を以申上候、以上。

午七月　　　　　　　　　　　　　三州御扶持人連名

右天明六年御改作御奉行所・御郡御奉行所へ上る扣。

八月二日。前田重教卒去後百ヶ日の法會を寶圓寺に執行す。

御歸殿は前田治脩

〔政隣記〕

八月二日、於金澤御百ヶ日御法事八時過相濟、同刻前御參詣暫御聽聞、御法事畢而御燒香、追付御歸殿。夫より御前樣等御代香相濟、諸頭同道、御法事御奉行に御法會無御滯相濟恐悅之段申演、八半時頃各退出。且差定寫如左。

泰雲院殿御百ヶ日御法事差定

辰刻上粥般若心經　同刻献粥大悲神咒

同　中　刻　大　布　薩　午刻上供般若心經

午　刻　献　供　楞　嚴　遶　行

以上於寶圓寺

一、今日階下番御歩平野與三兵衛儀、詰所に中廻廊通り可罷越處、心得違に而刀を持、御法事中御間之內罷通不都合之儀に付、罷歸指扣罷在候樣、御寺詰御歩頭河地才記申渡、其段御法事御奉行大炊殿にも御達申候處、甚不都合之趣に候得共、今日之儀に候間不及其儀旨大炊殿被仰聞、則申渡有之。

四日、御法事御奉行大炊殿初、夫々拜領物被仰付。

本年八月廿一日の觸參照

八月三日。前田治脩、重教の施行せる改法を嚴守すべきことを命ず。

〔袖裏雜記〕

八月四日左之御覺書被渡下、本旨御請あり。

泰雲公御改法被仰出候儀、輕き品迄も聊違不申様、彌以愼重可相守旨、一統不相洩様可被申渡候、以上。

丙午八月三日　　御　名

年寄中

八月八日。前田治脩參覲の行程を定む。

〔政隣記〕

八月八日、當御參勤御發駕御日限當月廿八日と被仰出候段、御道中奉行御小將頭松原元右衞門・御持筒頭並會所用人之山本十郎左衞門より請向相觸。且十二御泊附左之通。

今石動　御泊　高岡　御中休　東岩瀬　御泊　滑川　御中休
魚津　御泊　船見　御中休　境　御泊　青海　御中休
糸魚川　御泊　名立　御中休　高田　御泊　關川　御中休
牟禮　御泊　丹波島　御中休　榊　御泊　小諸　御中休

板ヶ鼻　御泊　新　町　御中休　深　谷　御泊　鴻　巣　御中休
大　宮　御泊　浦　和　御中休　江　戸

八月十五日。前田治脩政務を親らすへき決意を老臣に告ぐ。

天明六年正月より九月迄之御親翰帳之内、八月十五日年寄中御前へ被召、御渡之御親翰左之通。

〔袖裏雜記〕

年寄中ゟ申入候趣

拙者身分之事、當春各を以相願、御聞届被成下候付、當秋出府之上は退身可相願覺悟に罷在候處、今般之趣誠三州者闇にて候。各心中之程も察入候。就夫敎千代年頃にて候へば、早速家督引渡、我等退身仕度所存頼に候へども、いまだ幼稚、夫々下知之處へも至りかね可申候。然者思召を奉續候事こそは、愚昧之我等迚難及候へども、責而敎千代年頃にいたり候迄之内、各申合何卒御憤之消失不申様、持こたへ罷在度心願急度致了簡候。雖然兼而も申上置、各にも承知之通、拙者國政取捌にては、又候國風衰敗、先祖之方々、殊には奉對泰雲公申譯も無之、次には各にも不相當而已之加下知候はゞ、嘸可被致難澁、皆諸士を初不心服、彼是以此時にあたり、誠に進退極り、當惑至極不辨是非候へども、去年以來被盡御心力候御様子

を致懇察候而は、今之趣味に候とて其職任に在なから、暫時たりとも各打任せ月日を送り候時は、國脈に及として、益以多罪之至、是亦御高慶之思食も恐入候付、不顧前後前段之了簡發消定候事に候。然上者並以各和熟有之、申迄もなく候へとも、先祖之方々暨泰雲公へ被盡忠誠、修に年此上我等之徹志も相立候様助け給候はゝ、生涯之大幸不過之存候。此段厚頼入申計に候。先以我等覺悟之大綱を承知不被致而者、各心中も如何と、不堪心底如此候。何分にも御改法御條相立候様、念願之外無他候事。

天明六丙午八月

八月十八日。前田治脩、從來加賀守と呼ばしめたるを止め自今中將と稱せしむ。

〔政隣記〕

八月十八日、歸旨并段儀之御禮等並爲詞。且左之趣御用番被仰渡候段御横目中より申談。

只今迄加賀守様と相唱候得共、是以後者前々之通御官名相唱申筈に候。此段寄々可被申談候事。

八　月

八月廿一日。前田治脩參覲發駕の期を延ぶべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

八月二十一日、當御參勤御發駕當二十八日与被仰出置候得共、此間少々氣候御觸被遊、其上御幸積に付暫御延引被仰出候段、前田大炊殿等被仰聞候旨等、御道中奉行松原元右衛門・芝山十郎左衛門より廻狀出。

附、本文之趣於江戶公邊ゟ御屆有之。

八月廿一日。池田忠左衛門を入牢せしめ富田彥左衛門を逮捕すべきことを命ず。

〔袖裏雜記〕

一、富田彥左衛門儀、盜賊改方・足輕大坂ゟ指遣、召取致縮連越可申事。

但、御步橫目指添可申事。

一、到着之上牢揚屋へ入置可申事。

一、彥左衛門せがれ共罷在候はゞ一類ゟ御預之事。

一、池田忠左衛門儀、御詩之品有之に付、一類兩人指添罷越候樣可申渡事。

一、右之趣公事場奉行へも可申渡事。

但、御歩横目者江可申事。

一、忠左衛門嫡子助二郎・次男専吉儀、一類ゟ御預之事。

一、富田権佐儀、先遠慮可被仰付事。

一、井川善六儀、急度改方足軽京都ゟ指遣、彼地詰人申合御國へ連越可申事。

一、善助儀、到着之上、町奉行手前において厳可申付置事。

右忠左衛門・彦左衛門儀ニ、去秋泰雲院様ゟ御勝手向御改法之儀等趣訴仕、御族式向へ取入、忠左衛門娘を以段々爲取次、訴状等差上候趣、露顕には不仕候へども相違無之様子。右一件彦左衛門一類大坂町人井川善六と取組、善助申旨に任せ、前後取しまり無之儀を荷擔仕候族、御勝手向興廢をも貪着不仕、末之心配無之儀を乍存打捨置候躰、都而取捌無十方躰。御勝手方御連方泰雲院様思召之通不被爲成御様子に而、御心労被遊候御様子、當五月安房守御前へ被召候節御意被遊候趣も御座候。當時右両人御算用場奉行等に申談等一向不仕、此儀に被指當候には行々如何躰之儀出来可仕哉之旨等、八月十二日申上。其後御意之趣有之、御算用場奉行へ様子尋候處、右両人取捌候儀、都而御算用場奉行存不申候。併當春に至御連方段々支候躰故、當面両人へ様子承候處、全躰取締申儀無之、當時以取捌方一圓評立不申、此儀に

而ニは可相辨とは不奉存候等。且右兩人幷本保十太夫取捌之內、誠無十方儀共迄も申聞、其趣八月十八日申上候處、兩人手前不一形言語同斷多罪之至。畢竟泰雲院樣思召にも應不申御樣子に候間、兩人共可被加御嚴制趣等、翌十九日被仰出之趣、前段之通伺也。右伺之通被仰出に付左之通申渡。

池田忠左衞門一類へ

池田忠左衞門

右忠左衞門儀、於公事場御詮之趣有之候條、途中縮駕籠に而追付公事場へ差出可被申候。尤其節一類之內兩人差添可被申候。右之趣公事場奉行へも申渡候條、尙更被申談、不都合無之樣可被相心得候。且又せがれ共ニは各へ御預被成候條、不縮無之樣いたし置可申事。

丙午八月

覺

池田忠左衞門

右忠左衞門儀、不屆之趣有之付、於公事場御詮之趣有之候條、牢揚屋へ入置可申候。

右之通被仰出候條可被申渡候、以上。

丙午八月廿一日

土佐守初十四人　印

不破彥三殿
松平典膳殿
織田主稅殿
渡邊主馬殿
羽田源太夫江

池田喜嗣郎

右喜嗣郎、父忠左衞門儀不屆之趣有之に付、於公事場御詮議之儀有之候。依之右喜嗣郎儀一類へ御預被成候條、此段可被申渡候。尤一類交名可被申聞候事。

丙午八月

松尾縫殿江

富田彥左衞門

右彥左衞門儀、當時大坂表に相詰罷在候處、不屆之趣有之に付、於公事場御詮議之儀有之候條、各手合足輕急速被差遣、途中網乘籠に而召捕罷越候樣可被申渡候。途中御歩横目幷兩人罷越差添候樣申渡候間、可被申談候。此儀相洩候而者大切之儀候條、罷越候者共へ不相洩樣嚴敷可被申渡候事。

丙午八月

御横目ゟ　　御歩横目兩人

右冨田――に付、松尾縫殿手合足輕差遣、――縫殿ゟ申渡候條、右御歩横目兩人急速被差遣、差添罷越候樣可被申談候。其段大坂詰人多田左守へも申遣候條、申談彥左衛門召連罷越候樣可被申渡候。尤此儀相洩候而は大切之儀候條、不相洩樣急度可被申渡候事。

丙午八月

冨田彥左衛門儀、不屆之趣有之に付、――依之松尾縫殿手合足輕――縫殿へ申渡候。途中爲締方御歩横目も兩人差添罷越候等候條、到着次第右之趣に被相心得、彥左衛門へも可被申聞候爲承知如此候、以上。

丙午八月廿一日　　土佐守等十四人　印

多田左守殿

覺　　冨田彥左衛門

右彥左衛門儀不屆之趣有之に付、於公事場御尋之品有之、大坂表より近々召連罷越申等に候

權左衛門は忠左衛門の初名

條、到着次第牢揚屋へ入置可申候。

右之通被仰出候條可被申渡候、以上。

丙午九月三日　　　　山城等十四人　印

不破彥三等四人殿

富田彥左衛門一類中

右彥左衛門儀、於公事場御詮議——夫々申渡候條、可被得其意候。到着之上ニ公事場へ直ニ引渡申筈候。且又ヶ條書之儀ハ、一類へ御預被成候條、不締無之樣可被相心得候事。

富田彥左衛門

〔政隣記〕

八月廿一日左之通御組頭大枝殿於御宅、安房守殿御立會、御横目坂野忠兵衛・今村三郎太夫指引ヲ以被仰渡。

富田權佐 人持組御算用場奉行

御手前儀、思召有之ニ付役儀被指除、遠慮被仰付。

〔老翁雜記〕

一、天明五年八月富田彥左衛門・池田權左衛門等御改法之卷物中納樣へ指上、甚御用被遊、

九月十日は七日なり

同年九十は九七なり

權左衛門は忠左衛門の初名なり

富田・池田御加増頭分被仰付御用甚、今年武士等流刑・改易多、諸人知る所也。翌六年に至り富田等兩人奸甚敷、八月二十一日池田忠左衛門禁牢。翌二十二日富田彦左衛門大坂罷在候に付、彼地に而召捕可申段被仰渡、御徒横目北村以左衛門・齋田與八郎、改方手合足輕大坂ゐ罷越召捕、繩に而九月十日公事場到着禁牢、追而五ヶ山に而禁籠被仰付。

〔加陽諸士系譜〕

富田彦左衛門　好禮

娶杉江平丞女。千二百石。天明五八二十二改作奉行・御勝手方。同年十二二十八加八百石合二千石、物頭並。同六八二十七於大坂召捕、同年九十金澤へ來牢揚屋。同七十二五ヶ山流刑。四十一歳。

池田權左衛門　正信

三百石。始吉太郎。妻堀六郎左衛門女。寛保二十二大小將、後御馬廻改作奉行。天明五十二二十一加三百石合六百石、物頭並、改忠左衛門。同六八二十一牢揚屋へ入。同七四二十七五箇山へ流刑。未出立内同年五二十七牢死、六十三。

八月廿四日。前田治脩參觀の際の行粧を省略すべきことを命ず。

〔政隣記〕

八月廿四日當秋御參勤御行粧之儀、安永七年御參勤之振を以相しらべ候樣先達而被仰出置候處、今般御行粧格別御省略被仰付候。御供人も可成程御減少可被召連旨被仰出候段、前田大炊殿諸向ゟ被仰渡有之。右に付御道中幷御在府中御近習番被指止。依而御次入口不締に付、組頭御步横目一人宛爲御締相詰候樣被仰出申渡有之。

八月廿八日。石川郡粟ヶ崎の富豪木屋藤右衛門その父貞悦と共に入牢を命ぜらる。

〔政隣記〕

八月二十八日粟ヶ崎藤右衛門・同人父貞悦、商方に付不筋之取組有之。京都町人井川善助ゟと取入、彼是不屆有之に付牢舍申付、家財取揚、幷商方之品諸方可差許議旨、御用番土佐守殿より改方松尾縫殿ゟ被仰渡。依之改方小頭等指遣、案内間所、諸道具等に縮申付、書き物取揚、右父子召出禁牢申付、十月十三日公事場ゟ引渡。

附、貞悦は牢死、藤右衛門は寛政三年三月十七日爲赦出牢、尤御扶持被召放。

〔燕遺光〕

泰雲院殿御隠居まし〱ながら再び御政務にて、宮田彦左衛門・池田忠左衛門國政を司り、

藤右衛門は子にして父は貞悦なり

一國虎の尾を踏が如くおそれける。富田・池田毎度の加增して、太梁院殿奉始御老中諸役人衆は有てなきが如し。富田彦左衛門大坂に登りし留守中、惡事露顯の由にて大勢捕手の人數向ひ、網乗物にて歸國、池田・富田とも流刑也、栗ヶ崎藤右衛門此ふたりに組しゆゑ、父子共に入牢、家財欠所家藏封付になる。藤右衛門は牢死、子は三年を經て御免なり。石浦先生前田大炊公の儒者中島半助、名は恒久。飢饉どしの春言、栗ヶ崎藤右衛門家も久しかるまじと。予其故を問。恒久曰、十年の謀には木を植、百年の計には德をうゆることあり。今藤右衛門は德を植るの富也。然るに前年より數萬石の米を買しめ、國中に米盡き既に百目近し。依之街に立人多し。民の患易き心なし。然るに猶利を貪りて深くかくせり。天此不慈を罪せざらんや。果して大難三年をまたず。

九月二日。前田治脩更めて參覲發駕の期を定む。

〔政隣記〕

九月二日、同月十五日御發駕、二十七日御着府与被仰出候段、廻狀出。

九月六日。財政の收支を整ふる爲諸場の費用の削減を命ず。

〔政隣記〕

九月六日、左之通御覺書御用番山城殿夫々に御渡。

御勝手御運方只今迄種々御僉議被仰付候得共、元来御取縮に不致符合、年々及御不足候。依之此度、何分御取縮り設宜合候様被仰付候儀御治定被遊候。然者諸場御入用に拘り候儀、先當分指止可申候。尤勢々指止候而者御用不辨儀可有之候間、其品々に當り時々拙者ども迄被申聞候事。

九月七日。富田彦左衛門大阪より檻致せられて禁牢に處し後五ヶ山に流さる。

〔政隣記〕

九月七日、先達而左之通被仰渡置候處、今日富田査左衛門儀大坂より網駕籠に而召連帰候處、直ニ於公事場禁牢被仰付。

付札、松尾縫殿ゟ

富田査左衛門

右査左衛門儀、當時大坂表に相詰罷在候處、不屆之趣有之に付、於公事場御詮議之趣有之候條、各手合見計急速被指遣、途中網駕籠に而召捕罷越候様可被申渡候。途中御歩横目に兩人罷越指添候様申渡候間可被申談候。此儀外に相洩候而者大切之儀に候條、罷越候者共含不相洩様嚴敷可被申渡候事。

右爲御用大坂江罷越候改方足輕小頭馬淵傳太夫江金二百疋、足輕十四人江銀五兩宛、小遣兩人江鳥目一貫五百文。今度彥左衞門召捕候節都合能召捕、途中無異變連越候爲御褒美追而拜領被仰付、普御歩橫目江は銀一枚宛拜領之事。

頭書。御歩橫目は齋田與八郎・北村治左衞門江、御內御用与申趣に而被仰渡有之。前月廿二日改方役人与一集發足。

九月八日。德川家治薨去したるを以て江戶邸に於ける諸士の心得を命ず。

〔政隣記〕

九月八日、大樹家治公今日薨御与御弘有之。依之普請・鳴物・諸殺生遠慮、火之用心猶更嚴重、日數之儀ハ追而御觸可有之候旨。嘉節・朔望上下着用に不及、平日之通、家來迄町方江用事有之候共至而無據儀ハ格別、可成程ハむざ〻御門外江不指出候樣可相心得候。足輕・小者之分ハ、其支配〻〻に而猶更用事等之趣得与承屆候上、御門外爲仕可申候。御家中御歩並以上之人〻月代剃候儀、先見合可申旨等、御家老衆夫〻江御申渡之段廻狀有之。但陪臣ハ御初七日過、剃月代候等之旨被仰渡有之。

九月十二日。前田治脩、寶圓寺及び野田山の祖廟に詣づ。

〔政隣記〕

九月十二日五時御供揃ニ而寶圓寺江御參詣、同所境内壽清院様御廟江御參詣。夫より野田御代々様御廟江御參詣。且御廟に付、寶圓寺ニ御貌龍玄圓江構付、野田ニ而は高德院様御廟之下に而御下乘也。

九月十三日、前田治脩、天德院の祠廟に詣づ。

〔政隣記〕

九月十三日五半時御供揃に而天德院江御參詣。陽廣院様・天珠院様御廟江も御參詣。御廟に付寄御門迄御乘用。天德院に而は御貌龍玄圓構付与御番頭より伺之處、御廟に而は前々之通外門に而御下乘与被仰出。

九月十三日、前田治脩、諸士の風俗を正しくし先侯重教の遺志に從ふべきことを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

九月十三日役之御覺書以著左衛門被渡下。

各組中風俗不宜に付、從泰雲公可被仰付候。畢竟文武忠孝之儀令衰敗候故ニ存候。則右之思召御平生之御行状に而も相知申候、各存知之通故一々ニは不申達候。拙者事存知之ごとく、

生質愚昧之上、幼少より長袖に育ち釋門に入候ゆゑ、武門にうとく武道之吟味中々難叶、且革是のみ恥入申候。雖然常々泰雲公御側に隨身仕、御教誡も被成下候故、志は此條尤無他事隨分心懸候へども、可行屆樣も無之に付、偏泰雲公御憤御行狀を龜鑑と仕、各初身分之愼等無怠慢樣催促可仕覺悟有之儘如此に候。しかれば各中平生文武之たしなみ形に顯、武備手厚く、假初にも腰弱之振廻遊樂無益之物數寄を禁じ、組之面々を指引無之而は、泰雲公御憤に叶ひ可申樣無之候。一々は不申達候條、前條之趣意を以差引可有之候。將又別紙之通組頭共に可申出存念に付、各心得にも可相成哉と下書之儘相達候。得与被熟覽、如何与被存品も候はゞ、付札を以少も無遠慮可被申聞候。指當り候處にては、迂遠之樣にも可有之哉に候へども、職分之本元より吟味不仕、只一端之理を以相直り候風俗は、不待年月本のごとくに成候事に相知れ申事候條、各にも此筋能々被勘辨、組中差引有之、何分泰雲公御憤相立候樣、盡忠誠可被申候。此答各連判之紙面を以可被申聞候、以上。

丙午九月十三日　　　　御　　名

年　寄　中

組頭中に

各愼之儀、暨組之面々風俗、并武藝隨分相勵候樣、舊冬段々被仰出之趣共有之候。然處近き頃

は何となく參會繁く、長座酒宴等有之躰。組之人々も右に隨ひ、武藝之嗜みも被仰出候砌よりは等閑に相成候樣に相聞え候。是は如何之趣に候哉。先以段々被盡御心力、厚き思召を以被仰出候御儀、其詮も無之樣成行可申段、於我等心痛之至候。就中武藝之儀は、造次顛沛にも令怠慢候而は、何を以忠節を盡可申哉。誠はやも事之樣に心得候而は、無勿躰次第に候。畢竟其方中組・支配之趣意は何之爲に候哉。武備第一之儀は今更不及申候。分限相應之武器を嗜、餘力有之族は又文道にも携り候樣可有之儀尤之至候。惣して我身に不行して、人を教る事は、信服可仕樣無之、先各中行跡亂酒雜談、人之善惡之批判、又は無用之瓶器、木石之類遊興之品堅相止、假初之參會にも武之甲乙を論じ、平生之所作には武藝のみ數寄好み、兵具を愛し、得失を正し、或は組之人々わ對話之序にも、懦弱遊樂之雜談を禁じ、其人々之武藝又は武器之嗜等も尋試、心懸之厚薄によつて勞武加異見、扨又各宅々なども、庭前築山泉水等之不益之物數寄を除、的場等をかまへ、屋敷も廣き人々は馬場をも設け、家內には武具・馬具・弓・鐵炮等を飾置、組之人々に見習せ候へは、言申聞候異見も心實に恥入、不行屆儀は無之筈に候。是茂形之風情に而は其詮聊以無之筈に候。如此其身とりおこはし候上にも、不心懸之族有之候はゞ、迅に我等耳に入べく候。其上は可及甚判候。然處組之人々風俗不宜、或武藝之心懸嚴かに候處へは心付居候躰に候へども、面々之覺悟無沙汰之躰、先以沙汰

之限に候。何ぞや不正之規矩を以方圓を可正いはれ、道理として無之儀に候。尤組之人々風俗惡敷相成候は、根元我等之仕置不宜故には可有之候へ共、組之人々死生存亡をまかせ置候は其方中に候へば、全く各支配に預り候儀、當職之規模たるは此所に而は候はずや。身分は無沙汰に仕置、只役威を以致指引候ては不信服のみならず、却而後指をさゝれ候樣に相成候而は、非常之節其方中之下知を守可申哉。甚以無心許次第に候。此處之親疎平生之裁判を以可有了簡候。治に亂を不忘と申は古今之格言にして、誰とても覺悟仕罷在候儀、曾而不珍事に候。譬ば平生上納方用捨之趣等強く願出、或は組之面々に成かはり迷惑被仰付候樣などゝ申出候樣成事を、頭之はたらき本意之樣に心得候よりして、其意地組へも押移り、左樣之頭をよき頭とはいひ、餘組よりもうらやみ候樣に成行候儀は、職分之趣意を忘却せしめ、誠に歎ヶ敷次第。其源武儀をも取失候より、右躰之風俗に流候儀は、各之心得にては無之候哉。然ば當時一統士風之儀、泰雲公被仰出之通急度相守候樣可申出と存候へども、先各手前不相糺候ては其詮も無之事故、態与令猶豫候條、偏泰雲公江奉公与存、御在世と相心得、御憤を急度相守可申候。以來緩怠有之候而は、則泰雲公江之不忠不義に相當り候條、我等奉對泰雲公一圓用捨に叵成候間、兼而其心得可有之候。依而此旨內々申聞候。

天明六丙午九月　　　　御　　　印

九月十四日。徳川家治薨去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

九月十四日、宿次御奉書今晝過到金澤。是去八日公方樣薨御に付而之御奉書也。御請使御馬廻頭奧村彌左衞門に被仰渡、道中指急に而翌十五日朝發足也。

九月十五日。徳川家治薨去せしを以て金澤に於いて殺生・鳴物等の遠慮を命ず。

〔政隣記〕

公方樣御不例之處不被爲叶御療養、去八日薨御に付、爲伺御機嫌頭分以上之面々、明十六日御用番宅迄可有參出候。幼少・病氣等之人々者、以使者可被申越候。

右に付普請・鳴物等遠慮之筈に候。日數之儀に追而可申渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々わ可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々者、其支配わも相達候樣可被申聞候。

右之趣可被得其意候、以上。

九月十五日　　横山山城

一役連名宛所殿

九月十五日。前田治脩金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

九月十五日五時御供揃に而、九時前益御機嫌能御發駕、御作法前前之通、敎千代樣御式臺階下迄御送り之事。

九月十六日。當分鷹方の用務なきを以て會所前の番所に勤務せしむ。

〔政隣記〕

九月十六日、當分御鷹方御用無之に付、御鷹方御歩十九人會所御土藏前御番人ニ被指出候旨、御家老役津田修理殿御歩頭ニ御申渡。但一番組者與力、二番組定番御歩。此内七日・八日与相分勤番之筈。右御番所、以前者侍番所に而、其後與力等相勤候事に相成候也。

本文之勤番指支出來、十二月九日より指省有之。

九月十八日。德川家治薨去に付普請・殺生等遠慮の日限を定む。

〔政隣記〕

覺

御當地幷遠所川除・外堤等御普請方御作事方之儀、當十四日より二十日迄七日過候者初可申事。
但、石・大材木杯釣、虹梁上、地形石搗等、大勢懸目立申様成儀者、御法事相濟候迄可有遠慮候。其外御城御普請方幷所々御旅屋修覆軽き儀、右日限之通人少に懸候而初申様可被申渡候。

一、當十四日より七日過候者、浦方猟仕候様可被申渡候。其外諸殺生猟業之者者尤可為同事事。

一、鐵炮幷鳴物之儀、御法事相濟候迄ハ遠慮可仕事。

一、鷹二候儀幷自分諸殺生、五十日より内者無用可仕之事。

一、魚鳥之儀當十四日より七日過商賣可為仕候事。

以上

九月

公方様薨御に付、先達而相觸候遠慮日數等之儀別紙之通に候條、組・支配之人々江可被申渡候。組中之内懸許有之面々者、其支配ゟも相達候様可被申聞候事。

九月十八日　　横山山城

諸頭一役連名充殿

〔政隣記〕

十月八日、左之通於金澤御用番玄蕃助殿御廻狀出。
公方樣就薨御、押立候普請・鳴物等遠慮之儀、先達相觸候通に候處、普請者當月四日御出棺迄遠慮有之候樣、於江戶表被仰渡候由申來候に付、普請之儀者不及遠慮候條、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。
右之趣可被得其意候、以上。

十月八日　　本多玄蕃助

〔政隣記〕

十月二十四日左之通御用番より御廻狀出。
公方樣薨御、諸殺生鳴物等遠慮之儀先達而相觸置候得共、當二十八日御忌明に付、同日より不及遠慮候條、組・支配之面々江可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。
右之趣可被得其意候、以上。

十月二十四日　　本多玄蕃助

九月二十日。能登に於ける幕府領の一部と加賀藩領との交換を終了す。

〔杉木氏小留帳〕

天明五年七月の條參照

廿一日とするは此の覺書と異なり九ヶ村は十七ヶ村なるべし

能州御預地御領より此方樣ゟ御取被爲成候村々左之通。

阿部屋村　千路村　二所宮村　佛木村　上棚村　町　村

安津見村　中山村　〆八ヶ村

右酒見村孫右衞門、今江村助左衞門、武部村彌兵衞、此三人ゟ御預ヶ。

此方樣より御渡被爲成候村々左之通。

尊保村　阿川村　楚和村　鵜野屋村　灯　村　入釜村

地保村　切留村　豐後名村　神子原村　福水村　谷內村

別所村　田岸村　深浦村　外　村　黑崎村　〆拾七ヶ村

孫右衞門組之內

右天明六年午九月二十日於御算用場被仰渡候。御主附高品勘兵衞殿、御預ヶ地御奉行遠藤次左衞門殿。

〔梅花無盡藏〕

九月二十一日、能登國御預所之內千路村等八ヶ村御圖通替地被仰渡、御私領之內尊保村等九ヶ村替地に被指上。

〔加越能御繪圖覺書〕

天明六年御預所郷庄分村附帳

能州羽咋郡之内御預所十七ヶ村

邑知院之内志雄庄之内　敷浪村入會無之　針山村同　原村同　神子原村同

邑知院之内　福水村入會無之　白瀬村御私領入會　四町村土方知行所入會

堀松庄之内　松木村入會無之

熊野方郷之内　豐後明村入會無之

稗造庄　尊保村入會無之　阿川村同　楚和村同　鵜野屋村同　灯村同　入釜村同

地保村同　切留村同

能州鹿島郡之内御預所二十二ヶ村

三階良川保之内　川田村御私領入會

飯川保之内　下村入會無之

八幡新庄　八幡村入會無之

大呑郷　熊淵村入會無之　山崎村同　花園村同　東濱村同　大泊村同　黒崎村同

佐々波村同。此一ヶ村に限大呑庄ヶ唱候由。　庵村同　江泊村同　大野木村同

奥原保之内　祖濱村御私領入會　石崎村同

熊木院之内　瀬嵐村御私領入會　谷内村入會無之　別所村同　深浦村同　外村同
田岸村同　横見村御私領入會

能州鳳至郡之内御預所二十二ヶ村

南北郷之内　鹿島村入會無之
穴水郷之内大屋庄之内　鵜島村入會無之　大町村同　川島村同　天神谷内村同　上唐川村同
下唐川村同　七海村同　槇村同　藤巻村同　岩車村同
櫛比庄之内　黒島村入會無之
諸橋郷之内　鹿波村入會無之　曽根村同　中谷村同
山田郷之内　院内村入會無之
中町野郷之内　里川村入會無之　河内村同
下町野郷之内　伏戸村入會無之　大野村同　井面村同　時國村御私領入會

能州珠洲郡之内御預所一ヶ所

若山庄木郎郷之内　眞脇村御私領入會

以上六十二ヶ村

九月廿七日、前田齊廣金澤觀音院に宮參を行ふ。

本文は前田齊廣のことに係る

〔御年表〕

六年九月廿七日觀音院へ御宮參、同日御着袴。

九月廿七日。前田治脩江戸に着す。

〔政隣記〕

九月二十七日今日九半時御機嫌克御着府、夕方御老中方御廻勤。但公邊御凶事中に付一統常服之事。

〔御年譜〕

御供大炊御留守より詰延・御家老伊藤内膳、御歩頭御供遠藤兩左衞門。

十月三日。徳川家齊使者を以て前田治脩の參覲を勞せしむ。

〔政隣記〕

十月三日上使御老中鳥居丹波守殿を以、今般御參府に付御懇之被爲蒙上意候。但御痛に付、御禮之御老中御勤は御名代前田伊豆守殿に御賴之事。

十月十六日。前田治脩、徳川家治の遺物を受く。

〔三寺御譜〕

十月十六日、以上使安藤對馬守信明、浚明公遺物臨差（備前義弘、金三十枚。）代を与ふ。

〔政隣記〕

十月二十六日上使若御年寄安藤對馬守殿を以、御遺物御襲物（松倉郷吉廣、無鍔指也。）御拜領。御縮に付御出向且御老中御勤共、御名代前田伊豆守殿ゟ御勤、御拜受・御請共君上被遊。

十月十七日、金澤に於いて諸士に前田治脩參覲後の狀況を告ぐ。

〔政隣記〕

十月十七日左之通御用番玄蕃助殿より、御用番出仕以上之諸頭ゟ、同役同列可有傳達旨御紙面出。但頭役七・八人連名。

前月廿七日御機嫌能御着府。當三日上使鳥居丹波守殿を以被棠上意、難有思召候。此度之上使は、公儀御喪中殊御出棺以前之儀に候得ば、其以御繁多にも可有御座處、以上使被棠上意候段議に思召懸に無御座儀、別而忝思召候旨、拙者共迄被仰出候事。

十　月

十月十八日、德川家治の薨後なるを以て茸狩遊山をなすものを戒む。

〔政隣記〕

十月十八日於金澤、左之通御用番被仰渡候段御横目廻狀出。

先頃以來茸狩遊參人等多、御家中之人々妻子等召連罷越、竝町人共酒宴等催候族ミ有之躰に候。此節之儀に候得者、別而愼第一之御時節に候處、心得違之人々も有之躰に被聞召候段、江戸表より申來候條、此段夫々被申談、猶更御縮方之儀嚴重に可被相心得候事。

十月廿五日。前田齊敬の金谷御殿に移らんとするを告ぐ。

〔政隣記〕

十月二十五日於金澤、左之通御横目所に而申談有之。

來月二日數千代樣金谷に御引移之上、金谷御殿与相唱候樣、御城代又兵衞殿被仰聞候事。

十月廿九日。越中五ヶ山に流刑を命ぜられたる半田半兵衞金澤を發す。

〔政隣記〕

十月二十九日、前記四月二十五日に有之通、半田半兵衞儀今日配所越中五ヶ山猪谷村に被指遣候に付、右宅に御小將頭堀平馬、(御用番也。)立合井上勘助、御番頭田邊長左衞門罷越、右之趣申渡、御請判形取立之。且大小將横目山崎彦右衞門幷御歩横目も相詰、類中武田喜左衞門等夫々詰有之。右申渡等畢而追付發出、指添御歩本間與左衞門・木村久左衞門等(足輕六人、小者四人也。)小御用番玄蕃助殿より御渡之御覺書を以、頭長作兵衞より申渡之通勤之、閏十月三日金澤に歸。

十月。十村等の行狀を愼み質素を專らとすべきを諭す。

〔司農典〕

近年改作方取捌、往古之御定之御捉忘却之躰に候。元來十村等、多分者累代役儀も相勤候家筋之者に候得者、改作之御法明白に承知之事に候所、忘失之根元者、十村以下之者ゟ利徳を含ミ、御上を蔑に仕志より起り申儀に候。依之今般拙者共改作方御用當帯被仰付、萬治年中以來御定之趣を以取捌候樣御直之御意有之候間、以來此旨可相心得候事。

一、十村等行狀慎之儀、并御用失墜不倹約之儀無之樣に、御扶持人并十村等身分之守り肝要に相心得候上、末々百姓共ゟ右之趣申渡爲相守申儀は、前々より一統ゟ被仰出も有之、申渡置承知之通に候處、致忘却候哉、表向者質素之躰に取計、内證に者奢侈不行狀之儀共有之候由、上に立候御扶持人之内にも粗及承も有之躰に候。十村等奢侈相止不申故、其組百姓等相應之作配仕者も、内分に而者奢侈甚敷、衣類等不相應之華美を用ひ、無益之失墜有之躰に候。前々申渡置候通候得共、得与會得無之躰に付、以來者右躰之者見及、改方廻り之者召取申筈に候條、此段篤而承知有之、支配方へも早速嚴重可申聞置候。且亦御當地に而、旅宿之名目に而名代を立、町家を求置、留守居人等指置申抔風聞有之候。ヶ樣之儀は無之筈に候得共、於旅宿に自由之爲躰有之故、右之風聞起り申儀与相聞え候。惣組下等惣村方ゟ指引勘定之儀、不筋之取捌有之、末々百姓及難儀に候族も有之候得共、申斷候得者却而相咎及難儀に候故、

末寺とは南本願寺の金澤に於ける別院をいふ

無是非任其旨に罷候族有之躰粗相聞、不屆至極之儀に候。右等之趣已來急度相改、行狀愼等百姓共質素に相心得候儀。且又郡打銀・村余荷銀・御貸米配當等、諸勘定方潔白に取捌、末々百姓共難儀之筋無之樣取計、決算之趣以紙面可申聞候。若右之趣一事たり共違犯之者於有之に者、可被處嚴科に候。去年以來被加嚴刑候儀、承知之通に候。依而豫而申聞置候。當時御當地に有合不申者江者、向寄より可被申聞候事。

十　月

諸郡十村幷惣百姓・頭振迄も奢侈之儀無之、質素に相心得、萬端無益之失墜無之樣可相心得旨、前々より每度申渡候所、表向は質素之躰に取計、内分に者其躰無之樣子に相聞候に付、盜賊改方江申渡、十村始惣百姓男女共、分限不相應之爲躰有之歟、或者末寺抔江參詣之節にも衣類等に心を付、且亦御當地呉服店等に而、不相應之品相求候樣成儀可有之哉。左樣之躰有之候はゞ召捕、御郡奉行江相渡候樣申渡候條、此段御郡奉行江可被申談候事。

午十月

別紙之通、御用番本多玄蕃助殿御覺書を以御申渡候に付、寫相達之候條、被得其意、末々迄不相洩樣急度可被申渡候。元來近年十村共等分限を取失ひ候儀も多有之に付、組下之者自然与其行跡を見習、不相應之心得に押移候儀、畢竟十村共等之不屆に候間、以來急度相愼、萬

専質素に相心得候様厳重可被申渡候、以上。

十月二十六日　　　　御算用場

進士晉宮殿

奥村左太夫殿

閏十月六日。前田治脩参覲せしを以て物を幕府に上る。

〔政隣記〕

閏十月六日、今般御参府に付而之御献上物、（御太刀馬代金。）以御使者被指上候。いまた将軍宣下不相濟に付、御禮無之故也。且御家老両人（前田大炊・伊藤内膳。）登城、献上物如前々有之。右に付御館詰人着服布上下、御給事役者並付上下、且平詰に而者無之。右御献上相濟に付、御老中方等江如前々御太刀馬代金被遣之。

〔三壺御譜〕

十月六日、今度御参勤被遊に付、御伺之上御献上物以御使者被指上。（牧野越中守請取可差捨旨被申聞、且前田大炊・伊藤内膳献上物も同日御城へ持参、御納戸へ相納候旨、大炊等より申来候旨御用番演達。）

閏十月十三日。前田治脩脚疾を病むを以て柳營に杖を用ふるを許さる。

〔政隣記〕

出仕とは朔望佳節等に謁見するをいふ

閏十月十三日、中將樣御脚痛爾々不被爲在候に付、御登城之節御城中御杖御用被遊度段御達置之處、今日御用番御聞屆之段被仰渡候事。

閏十月十五日。前田治脩參觀の後初めて柳營に登る。

閏十月十五日五時過御供揃に而御登城、御下り直々肥後守樣に被爲入、八半時頃御歸館。

但今日御參府後初而之御登城也。

閏十月。諸士出仕の際は遲滯なく列居すべきことを命ず。

〔政隣記〕

十一月朔日左之通御用番被仰聞候旨、御横目中申談有之。

付札、御横目に

出仕之面々列居遲々無之樣可被申談旨、寶暦十三年・明和二年・安永二年にも申渡候通に候處、近き頃又々列居及遲々候樣子に候。出仕日に御用向示談等不致、且諸席に入込不申筈に候段、前々より申達置候通に候條、是以後其儀無之、列居及遲々不申樣各より出仕之面々に可被申談候事。

丙午閏十月

十一月朔日、徳川家齊家を繼ぐを以て前田治脩物を上つる。

〔政隣記〕

十一月朔日・二日・四日公儀御代替御禮被爲請、殿中御規式有之。依而御邸内火消方間廻、寶暦十年之御例を以迄方御成之御格、三ヶ日者朝六時より夕七時迄間廻相出、夜ハ御平日之通。

中將様今日御禮可被仰上候處、就御脚痛御登城御斷、御使御家老伊藤内膳を以、御太刀御馬（上曾秀五金 四尺二寸）御献上被遊候事。

但、御老中・若御年寄へ御太刀馬代被遣之。御使聞番

附、前田大炊殿與合壁數に付、内膳殿御使被勤之。右三ヶ日共殿中御作法都而年頭之通候事。

十一月朔日、諸士の河北・石川兩門外にて下馬下乘すへき位置に就いて諭す。

〔政隣記〕

付札、御横目へ

河北・石川兩御門之外下馬下乘之儀に付、寶暦十三年御歸城前一統申渡置候處、近年猥に相

成、一之御門ゟ近く下乘有之、右込合候樣子に相聞候條、前々之通兩御門共一之御門より二十間下り、段々下乘等有之候樣可被申談候事。

十一月朔日

右御城代安房守殿被仰聞候旨等、御横目廻狀有之。

十一月七日。金澤に强震あり。

〔政隣記〕

十一月七日夜戌之上刻、金澤六十ヶ年以來之强地震、產婦八步通驚死。且四日より七日迄連日雪降積七・八尺餘、山之手者一丈餘。然處八日大雨に而過半消失、九日より快天續く。右積雪之刻、前田土佐守殿庭之大松折れ、有賀甚兵衞居邸門ゟ倒れ懸り、門潰れ、其外小町所々、雪に而潰れ損候家數十ヶ所有之候事。

十一月十三日。前田治脩、脚疾に罹るを以て德川家齊に誓詞を上る爲の登營を辭す。

〔政隣記〕

十一月十三日朝御登城公邊御代替に付而之御誓詞可被遊旨申來有之候處、御脚痛に付御斷

也。今日者御三家は初諸侯中皆詞之由也。

同日表奥御醫師精宗仙院御招、於御居間書院御診有之。

十二月六日。寺院の祠堂銀を借用したる諸士にその返濟方法を改めたることを告ぐ。

〔御觸并御返書留〕

別紙三通之趣可被得其意候、以上。

十二月六日　長大隅守

御名殿

御相組中殿

寺社方役所より前々貸付置候祠堂金銀米、以來返濟方等今般相改候仕法之覺。

一、祠堂金銀返濟方前々より五ヶ年賦に候處、今般相改來未年より二十ヶ年賦を以取立可申事。

一、右利足取立方、七月一度立、十二月一度立、七月・十二月年中兩度立等、三段指別有之候得共、以來者總而七月十日切、十二月二十日切、年中兩度取立に相改、年講當り元入利足共座封銀を以、寺社奉行御用番宅へ借用人々より指出可申事。

舊宅とは諸士の死亡後その子の未だ家督を續かざる間をいふ

但、元銀百目に付利足一ヶ月一歩宛之儀、尤是迄之通りに候事。

一、祠堂米返濟方五ヶ年譜候處、來未年より二十ヶ年譜に相改、年譜當元入幷利足取立可申候。尤利足是迄之通に候間、元利納米切手を以、每歲十月十五日切、是又寺社奉行御用番宅ゐ指出可申事。

但、御扶持方等之人々は、每歲十月上旬之平均直段を以、代銀に而取立可申事。

一、右銀米利足是迄遲滯之分、一時に取立申候而者指支可申候間、去巳年より滯分者今度證文に相改、來未年より無利足十ヶ年譜を以取立可申候。當七月立利足銀、十月立利足米、于今延引有之分は、當十二月二十日まで米切手且座封銀を以、寺社奉行御用番宅ゐ指出可申事。

一、右仕法相改候に付、借用之人々一統證文相改可申事。

但、證文々段等之儀者、寺社方役所承合候樣、且舊宅等之人々者代借主相立、證文指出可申事。

右寺社方役所引受、前々より貸附置候祠堂金銀等、返濟幷利足遲滯之人々も多有之、勘定方指支、重き御寄附等之御旨趣も等閑相成、且祠堂銀等格合茂相違候に付、段々詮議仕、如此取立方相改申候間、借用之人々、以來返濟無遲滯元利指出可申段、頭々ゐ被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

御寺方等ゟ御寄附祠堂銀等始、都而私共役所引受祠堂金銀米等之儀者、御家中人々ゟ貸附、元銀五ヶ年請ニ歩充之加利足返済之趣、借用證文加判、兩人頭加奥書指出申候。利足取立勘定方之儀者、右來より祠堂裁許並屋彦兵衛等ゟ申付置候。尤借用之人々も、利足銀等先年は座封を以指出、前々嚴重に取捌來候處、無何ヶ振合相ゆるみ、不宜前例相混、返済方利足等も定置候日限迄に指出不申候に付、裁許之者共より段催促、受取に廻り候樣相成候得共、おのづから座封之儀及寄々相止、次第祠堂銀格合亂敷相成申候。殊更近年者時節柄不相調与申立、其年分利足致滯銀候人々も數多有之候ゆゑ、御寺方等ゟ利足濟方にも相障、勘定も其指支申候。左候へば第一御寄附被成置候御趣意も等閑に相成、將又私共役所引請祠堂銀等之格合も難相立程之風儀押移申候。謙德院様御代御寺方ゟ祠堂銀御寄附之時分、麁抹無之樣可取捌旨、各様ニも被仰渡候處、近年利足等及延滯候人々も御座候。夫に付前々より御寄附祠堂銀等を始、役所ニ而貸附置候分、當時之振合粗前段申上候趣に付、其分に難指置、段々僉議仕、別紙仕法書之通取立方相改、以來不及混雜樣仕度奉存候。依之右仕法相改候儀、私共迄之僉議に而者、借用有之候人々頭々ゟ申談候而も、一統信服覺悚々之締方之處も行屆兼可申哉難計御座候間、旁以右返済方今般仕法相改申候趣、私共僉議之通御聞屆被成、借用之人

々一統ゟ被仰渡御座候様仕度奉存候。則別紙相添相達申候、以上。

丙午十一月十日　　西尾隼人
篠原監物
横山又五郎

長大隅守様

御寄附祠堂銀等始、都而私共役所引請貸附置候祠堂金銀米、以來返濟方之儀、今般仕法相改候儀、私共詮議之趣相達申候處、直々申談候樣被仰渡候に付、別紙兩通御達申候間、此段御組等之内借用之面々、其心得仕候樣被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

十二月朔日　　篠原監物
横山又五郎
西尾隼人

長大隅守様

十二月廿八日。頭並堀平左衛門家政困難の故を以て出奔す。

〔政隣記〕

十二月二十八日夜より、御役御免頭列領二百石堀平左衛門（最前御先手物頭兼御近習之處、病身依願御免除也。）之儀、出奔之躰

次に平次右衛門とあり

二月は翌天明七年なり

に而在合不申。書殘一通有之、勝手難澁至極、上納等指支候に付致出奔候段調置候由。右に付嫡子平八郎、翌二十九日朝父平左衛門行衛爲尋出候旨に而出宅、是又其後行衛不知与云々。

〔政隣記〕

右に付平左衛門母牢揚屋に被入置。是從前々之御法令也。

二月廿六日於金澤左之通。

平次右衛門せがれ

同姓堀八郎左衛門宅へ立歸　堀　平八郎

同姓堀與三左衛門宅へ立歸　堀　平次右衛門

〔政隣記〕

二月廿七日同斷。

附記、右堀平次右衛門・同平八郎、五月十三日左之通被仰付。

越中五ヶ山へ流刑、於同所縮所へ被入置　堀　平次右衛門

能州嶋之内へ遠島　同　平八郎

右急度可被仰付候處、今般非常之御大赦に付如斯被仰付候段被仰出候旨、於公事場申渡有

之。

是歲。造酒の石高を半減すべきことを命ず。

〔郡方舊記〕

能州四郡酒林之事

一、三十四軒　羽咋郡

一、十四軒　鹿島郡

一、三十八軒　鳳至郡

一、十四軒　珠洲郡

〆百軒

右能州四郡酒林數如此に而、先年は一郡之株數を以其一郡切に賣買仕、餘郡へは不用來候所、中頃より右之無差別、能州四郡之内は一体に賣買御聞屆有之、羽咋郡之酒林鳳至郡へ用候樣に相成候事。

一、天明六午年從公儀之御觸に、新酒寒造幷休酒屋之儀も酒造致度分は可爲勝手次第旨、寶暦四戌年觸渡置候所、近年米高直にて末々之者及難澁候間、諸國とも是迄造來候酒造米高、半石酒造相止、半石酒造いたし、且休株之分酒造候儀可爲無用旨御觸有之。又同七未の年御

願に、株石に不拘、只今迄造來候酒造米高之内三分二相止、三分一酒造可致旨被仰渡。又同八申年御願に、右三分一之石數仕込候桶并諸道具共、見懸り口極印打可申、右之外不用之桶諸道具共、是又別極印打、村役人江指預置可申旨、從公儀度々嚴重御觸渡。依之右之通御郡御奉行所より極印御打渡被成、最御縮方に御座候。然所文化三酉年、近年米價下直に而世上一同難儀之躰、米穀澤山之時節に付、諸國酒造人共幷休株之者共外是迄渡世に不仕者にても勝手次第、勿論酒造高是迄之定高に不拘仕入相稼可申旨、從公儀御觸渡に付、右之趣御算用場より御達紙面を以被仰渡在之、御郡方休株之分悉歸酒造いたし候事。

是歳。鹿島郡金丸村及び小島村の民、七ッ島にて胡獱を獵するを許さる。

〔天明六年以來御觸等抄〕

一、胡獱打備候儀、金丸村久太夫・小島村與三天明六年被仰付、爲冥加銀百二十九匁上納いたし候所、元來名舟村領沖七ッ嶋に而打申に付、村方より願之筋在之、翌年相止候。

天明七年

正月朔日。前田治脩柳營に上りて新正を賀す。

〔政隣記〕

正月元日、六時御供揃に而御登城、年頭御禮被仰上。御盃（御酌高家有馬兵部大輔殿。）御頂戴等都而御例之通。四時頃御下り、表御玄關より御歸館。御先立前田大炊、夫より御例之通御規式、夫々被爲濟。

自分今日御横目代御供に罷出候事。

（自分は津田政隣）

同日於金澤、御前例之通。

正月四日。金澤城二ノ丸御殿に火を失せんとして發見せらる。

〔政隣記〕

正月五日、夜前御用所与御臺所境之御廊下に有之候行燈不殘燃、側之柱暨疊も焦、火響、道具所泊番坊主高村久清聞附之、見廻候處右之通に付、道具所之小遣小者申談、早速水を懸打消。右之趣當番組頭御横目より委曲言上之處、今日右久清へ金小判三兩、小遣へ鳥目三貫文爲御褒美被下之。

但、是以後夜中一時に兩度宛、風高之節者繁々、二之御丸置附行燈之邊相廻り可申旨、同月八日御城代衆より被仰渡、道具所坊主小遣召連見廻り候筈に相成候事。

附、右行燈以前は鐵行燈に候處、寶暦九年四月十日之御類燒に而燒失後、木竹行燈に相成有之候處、今般不殘鐵行燈に被仰付。

自分は津田政隣

正月七日。前田治脩、徳川家齊に若菜の祝儀を上る。

〔政隣記〕

正月七日御登城。且若菜御祝儀室鱠鯛一箱献上に付、自分爲聞番代爲持登城。御坊主組頭江間宗悦取次に而、御側衆杉浦出雲守殿御受取、御披露可被成旨被仰聞候に付退出。直に御大老井伊掃部頭等へ、當日御祝儀御使勤之。

正月十四日。本郷邸に於いて福引を行ふ。

〔政隣記〕

正月十四日、御例之通御本宅御廣式に而福引被仰付。引人女中暨御廣式頭並・御用人。御表よりは、御用部屋勤之御近習御用迄也。以上六十人餘之由。御品物六十餘番に而、紅絹紬等より芝肴・葛西菜迄種々輕重有之と云々。

正月十五日。米價高直なるを以て、諸士にその用を節すべきを告ぐ。

〔御觸并御返書留〕

去年氣候不順に而、諸國とも作毛不熟至極に付、新穀出來之上も米價甚高直に付、町家之者共一統粥を給候樣申渡候。右樣之趣に候間、御家中之人々も心得可有之儀に候。則町奉行ゟ

申渡候覺書之寫相渡候。

右之趣被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月十五日　　前田土佐守

町奉行に

去年氣候不順に而、諸國とも作毛不熟至極に付、新穀出來之上も米價甚高直に而、輕者共別而可爲難澁儀候。ケ樣之年柄人々心得とも可有之候得共、猶更各詮議有之、町家之者共粥を給候樣可被申渡候事。

未正月

正月廿四日。安永九年以降早打使者に貸與したる金子の年賦返納を命ず。

〔政隣記〕

安永九年以來、早打御使人に御貸渡之金子、是迄返上之譯立不申分、當未年より二十ケ年譜を以取立候樣、前田土佐守殿等被仰渡候。是以後御貸渡之分も、翌年より二十ケ年譜を以取立候樣被仰渡候條、同役中並組・支配之人々借用之分有之候はゞ、金高目録に認、來月廿日限

指出候樣夫々可被申談候、以上。

正月廿四日　　　　御算用場

諸頭御用番交名殿

正月廿六日。前田治脩、公儀代替に付徳川家齊に誓詞を上る。

〔政隣記〕

正月廿六日、公儀就御代替而之御誓詞、御病に付しより未た不被爲濟候處、今朝五時頃松平周防守殿〔康福、老中〕ゟ被爲入、被遊御誓詞。

正月。十村等に農事の勸奬に關して示諭す。

〔司農典〕

近年改作之御法猥に相成候故、近來之十村共は最初之御法をは不存、當時之振を以御定法に相心得罷在候躰相聞、右役人共ゟ承合違亂無之樣相心得可申候。雖相辨儀者、改作所ゟ罷出相尋可申候。改作奉行も近年何れも新役に成候故、難相知儀者相糺可申聞候事。

一、當年者氣候も早き年柄に候條、御扶持人・十村共此表御用方手早く相仕舞、幾度も村廻りいたし、例年之通末々小百姓に至迄改作之御法嚴重相守候樣申渡、當田作不指支樣取計、種物所持呑嚴重相糺、兼初より農業無懈怠敎入情候樣急子を入可申候。近年爲指水損・旱損之

悴はかじけなるべし

天災も無之候處、連年致難作、甚御逼迫至極之御時節御難題に懸り申儀。其根元を相糺し候時者、都而惰農より相起り、萬事出作手後れいたし、種蒔池入等を初、諸事古來之掟を相破り申故、秋に至り取劣候。右取劣り候處より、百姓共手前甚悴け、出作之頃より自分之夫食等調達に打懸り、農業に力を不得用、糞用意も等閑に致置、荒起しも拙者共相廻候に付、俄に晝夜名目迄に鍬入申迄に而、右蒔も不綿密、草拂等も誠に名聞迄に而、根離等不深様子に候。諸事右躰に候得者、取劣り申儀必定之儀に候。都而其方共勢子之入方等閑に而、組々介抱之致方甚不宜、役前不沙汰故に候。如此其方共要用之勤方に怠り、農業之儀苦にも相成不申形に成行候者、拙者共あやまちに而、當役被仰付候所御上に對し申譯も無之儀に付、拙者共自今申談相改申存寄に候條、其方共も唯今迄之様子に而者一圓難相成、深致會得可申候。近年之風俗專ら力を可用耕作を相怠り、秋に至り少々氣候不順等を申立、御難題之筋相願候。其方共も曾而相願度儀に而も無之等に候得共、拙者共役所に罷出相願候辛苦之代りに存、下々に對し嚴重耕作方相勤、聊以怠り無之様可相心得候。無左候得ば連年農業相怠り取劣り候而も、御收納不足者御上に御難題を懸申事之様に、其方共心底相極罷在候形に相見候條、急度此所自今可相改候。大切至極之儀者不及申に會得之儀に候。

一、去暮御貸米等借用帳、前々之通相認早速可指出候。

高造は高銀

一、早稲・中稲歩数積之規之通可指出候。
一、苗種田並高一組切帳面に相認指出可申候。
一、用水普請之儀、小普請之内早速自普請を以修理致し、大破に及不申様可申渡候。
一、植付以後草修理之儀、度々致村廻見分之上、懈怠無之様可申渡候。
一、歩入之儀近年額に相成候躰に候。當年より御定之通急度歩入致、歩落無之様取計可申候。新懸田畑之類自分指引等に取散し、歩落之儀支配之十村共通致置候儀不屆至極に候。當年右躰之儀於有之には、本人之儀者不及申に、支配之十村共可爲曲事候事。
一、近年御參勤御歸國之節、津幡等所々御泊所御中休所等諸入用過分に相成、御郡打銀至極相増申躰に候。右所々に相詰候御扶持人等諸事心を付、入用不相増様可相心得候。猶亦高造用銀も同様、精誠致詮議可致減少候。
一、村肝煎等、百姓共年中指引役算相濟候算用帳、印形見届候段及注進に申筈に候處、近年猥に相成申躰に候。村々肝煎より百姓算用總寄相札、算用帳見屆可及注進候。
一、組々之内川々洪水之節者、支配十村早速川筋令罷出、川除損所有之候にも、人足を集範染入、增崩無之樣相防可申候。
但、御城下近在之分は、格別損者共も川筋令罷出遂見分可申候條、其心得可有之事。

一、近年邊鄙之者共も町方を見習、食物・衣類幷髪之飾等に至迄奢侈に相移候、曾而五穀豐饒餘力に而、連々終者御上江御難題之催に候。其方共儀者、一郡之目當にも相成身分に候條、着服・居住・食物等に至る迄、聊奢侈無之質素に相心得、小百姓等迄農業而已に相心懸候樣爲相勵可申候。將亦其方共之內にも甚心得違之者共、無用之遊藝等相好候者茂有之躰致風聞。御用に而出府之內聊無愼之族無之樣可相心得候。於承糺者急度存寄有之候條、右ヶ條猶更入念申渡候。

一、末々小百姓に至る迄、商賣心懸申儀甚不宜候條、少しも商方江拘り申儀嚴重相糺可申候。勿論稼之儀格別に候條、無懈怠致入情候樣可申渡候。

一、去年以來格別嚴重御儉約被仰付、御勝手方御運之道も附可申御時節に至り候條、尙更今年之儀御勝手之御爲に相成候樣相心得申儀、肝要之御時節に候。御勝手御取直し候儀者、三州一統奉氣張儀に候條、御上江御難題不申上、御收納全く相納候樣に相心得申儀專一之儀に候。

一、近年三つ鍬与申名目に而、新規之農具を專用ひ候樣子承り候。荒起に鍬入淺く、草之根等切兼、甚害に相成申樣子に候。元來人夫与御高不致符合、募行而已心附候農具に候條、自今爲指止、彌出作無油斷樣に精誠可申渡候。

一、新田裁許ゟ申渡候、新開所々數多有之内、開發之剗ゟ追地味も宜相成、定免に相成候場所も可有之處、左様之所者無之、水損等申立減免迄申開、增免申開候場所無之候。減免之所々有之躰ニ相聞者、增免之所も可有之儀に候處、新田裁許共詮議綿密に無之、作人之任申旨、作躰不吟味故と相見得候。當秋より委敷遂吟味、免ニも上候様可相心得候。右之外數條可有之候得共、要文申渡候條、一統爲致心懸夫々申渡、農業爲盡入力候様相心得申儀肝要に候條、格別ニ被申渡、當出作より僞事迄穿鑿候條、急度相心得可申事。

未　正月

御用番　木村靑右衞門

杉　野　多　助

諸郡御扶持人・十村・新田裁許中

正月。越中戸出村の十村又右衞門等、作食米及び夫食米の沿革に關する諮問に答ふ。

〔親館諸書物留〕

諸郡作食米・夫食米と申名目分り之儀、書上申様に被仰渡候。作食米之儀は、慶安四年草高百石に付作食米六石宛御貸付之旨に相見え申候。さすれば是以前より有之儀与奉存候。其砌は格物も不仕候哉、萬治二年之御觸に、銀作食之内三之一年内指上、三之二之分は先御貸延

に被仰付候。米作食之儀は、雜穀にても百姓勝手能候はゞ、御藏納可被仰付与御座候。夫食与申分、前々御貸米通帳に、春御貸米或は耕作仕入御貸米・增作食米等与御座候而、名目は違候得共、增作食与申名目御座候得ば、同樣之趣に而、何れも耕作仕入に御貸渡に御座候与奉存候。夫食と申名目は、寬延三年御貸米通帳に有之候。定作食米御貸付之儀は、屎代銀等御貸付之通、前々之引付に而御貸付に相成居申候處、天明元年御仕法相立、永年賦を以御取立極難村ゟ御貸附御座候處、同五年重而年賦返上之分御藏納被仰付、御取立に御座候。夫食与唱申分は、御郡一躰拜借仕候得共、割符之儀は、乃至一村之内に而も上中下相立、上百姓指除、中之百姓は半減仕、或は年内引免代ゟ御貸米不被仰付村々幷極難村ゟは、見計大に貸付申候而、引免代ゟ御貸米与に違、貸付方前々より右之振合に御座候。作食米御見立等之儀は、定免に御請仕候時分、御定之由承傳申候、以上。

未　正　月　　　　戸出村　又右衞門等

御改作御奉行所

右天明七年御改作所より、作食米等之儀右又右衞門ゟ御尋に付、如此調上候。御領國仲間爲承知相廻に付寫置。

二月朔日。御馬廻奥村五郎左衞門養子市右衞門その下女を刺して自殺す。

〔政隣記〕

正月廿七日より、金澤味噌藏町御馬廻組奥村五郎左衞門養子市右衞門實奥村半丞兄儀、他出罷歸不申に付、所々相尋候得共行衞相知不申内、折立町二口屋七左衞門方ゟ同月廿九日朝、不押立於養家召仕候下女とせと申者ヲ同伴罷越候旨、七右衞門より及斷候に付、同姓御馬廻組奥村半丞并市右衞門實妹聟組外三輪篤太夫迎に罷越候得共、市右衞門并とせ廿七日五郎左衞門方より出奔候由儀も逆上之躰に而、一圓難罷歸旨申聞候に付、一先罷歸夜是亦難成之内、翌晦日朝右とせ付を同道、實家右半丞宅 母屋半丞町塗師町在 ゟ罷越候に付、養家ゟ可罷歸段半丞等段々申入候得共、一圓不致承知候に付、二月朔日朝當田市郎左衞門 五郎左衞門實弟 ・三輪篤太夫等申談、相宥メ候而、五郎左衞門宅ゟ爲可引取罷歸用意、爲而右人々半丞方へ罷越、ところ市右衞門へ對面不致候内、市右衞門帶刀を以右とせ切殺、其身自害相果候に付、五郎左衞門組頭不破和平、半丞組頭渡邊主馬罷越、夫々取職有之、爲檢使御大小將横目今村三郎太夫・寺西彌右衞門罷越見屆有之、同三日頓夫々相濟候事。

二月二日。石川郡宮腰に火災あり。

〔政隣記〕

二月二日、九時前より加州宮腰町より出火、烈風に而八歩通 家數三千軒計之處、殘町方百軒計殘。 燒失、大野村ゟ

も飛火に而、三百軒計之處不殘燒失、二軒殘り候事。

二月二日。火災の際無用の者の附近に群集することを禁ず。

〔政隣記〕

二月二日、火事之節無用之人々火事場へ不罷出等、御定茂有之候處、無用之者早乘等多、辻々大勢集見物等猥に相成候に付、右躰之者於有之は、御横目より相咎、名前を承り候樣被仰渡候旨等、御用番被仰聞候由等、定番頭神保舍人より於金澤廻狀出。

二月四日。本鄕邸の家老席等に狼藉の所業を爲せることを發見す。

〔政隣記〕

二月四日於江戶、昨夜御家老衆席幷御用所へ何者歟入候躰に而、兩所共御用之帳面數卌取出し散亂し、紛失幷破却之分も有之、御席之眞中へ坊主衆溜に有之大手水鉢之蓋を置、所々痰水等消置之。御用所に而者御用人着座之品に糞を通し置、帳面に而拭ひ抔及狼藉有之。尤今朝迄不相知候事。

二月七日。本鄕邸に於いて御預地奉行遠藤次左衞門の若黨、出入商人を殺害す。

〔御年譜〕

一、於江戸二月七日、御作事奉行淺井久左衛門若黨儀、諸色屋廻り之者を及切害、其身自殺。爲檢使御歩目附衆・御小人目附參上之事。

二月十六日。前田治脩、重教夫人壽光院の爲に囃子狂言を演ぜしむ。

〔政隣記〕

二月十六日、壽光院様御表へ御出に付、御囃子狂言有之。御番組左之通。但御間に一統不被仰付置之處、俄に當番切詰間被仰付。

[illegible]　鼓　吉二郎　　蒙　絹　龍五郎　　春日龍神　龍五郎

文角力　執　本　　昌堂妹　八三郎　　栗　焼　平　助

柒　腕　平　助　　三人片輪　八三郎

右之節三十人頭湯川伴右衛門・御歩小頭山田政太夫・御用所執筆御算用者中圓新左衛門へ地謡被仰付。

二月十八日。前田治脩の脚痛稍を癒ゆ。

〔政隣記〕

二月十八日橘宗仙院御脈、於御居間書院診被仰付處、御脚痛等段々御快然之旨被申上。畢而

於御勝手座敷（元來御出入衆也、）御料理出。

二月廿四日。前田齊廣金澤觀音院に宮參を行ふ。

〔政隣記〕

二月廿四日於金澤、卯辰觀音院に龜萬千殿御宮參、御供人金谷御廣式へ相揃、七十間御門より御出。御宮參相濟二之丸御廣式へ御立寄、御歸之上御供人に赤飯・御酒・御吸物被下之。御供、御大小將より五人、御駕籠脇御抱守四人、御大小將橫目一人。

二月。御作事方役人の出張したる際、町村に失費なからしむべきことを命ぜしむ。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行に

御作事方役人遠所御修覆等御用罷越候節、旅宿等彼是失墜相懸り候儀に付、御作事奉行紙面之趣被得其意、遠所町奉行・御郡奉行に夫々可被申渡候。猶更御作事方役人遠所へ罷出候節者、其時々右奉行より、其節町奉行等に相達候筈に候。尤御作事方役人に不限、遠所爲御用与罷越候諸役人、尙村方等費ヶ間鋪儀無之樣、跡々よりも申渡候通に候條、猶更嚴重相心得候

旨、夫々可遂申ニ候事。

未 二 月

二月、煙草口錢の徴收方に關して郡方に令す。

〔岡部氏御用留〕

一、他國・他領并御領國より舟に而たばこ積越、其所々たばこ問屋致舟揚候節は、早速其所たばこ改下裁許役相屆、下裁許舟場迄罷出、たばこ荷物數指紙又者送證等を以相改候上、問屋へ可致賣入、又陸廻り馬附たばこは右同樣之儀、是亦問屋よりたばこ賣渡節も下裁許へ相屆、斤高下裁許爲改可申事。

一、於能・越たばこ小賣人之名前、たばこ改人并下裁許方へ爲書出置、たばこ賣〆高等問屋場帳方引合、紛敷たばこ取扱申間敷事。

一、たばこ刻賣人等、たばこ問屋より日限延賣にたばこ買入候而、右代銀及遲滯、亦者不致指引者は、問屋よりも重而賣渡不申に付、外郡宿亦者小宿等より買請候族も有之樣子に相聞候。左候而は口錢相洩候之條、右之類堅有之間敷候事。

一、越中福野等在々并能州富木邊在々に而出來たばこ、秋中取入、於干場出來斤高相しらべ、口錢取立申儀先達而申渡置候所、別而富木邊近年猥に相成、たばこ改人等へ彼是申立、

無口錢同事之族茂有之躰相聞候條、是以後改役人ゟ向不法無之樣相心得可申候。尤是後改役人ゟ對不法之仕形有之候得ば、急度可申付候。

一、越中福野幷富木邊在々作たばこ、其外能・越所々たばこ持運候節、舟積・馬附之たばこ相改口錢取立候得共、十斤・二十斤持運候分は口錢相洩候。十斤・二十斤少分与者乍申、年中致都合候得ば過分之儀に候條、たばこ役人相廻、其節所々役人ゟ懸合、口錢不相洩樣可取立候。尤秋中干場に而はき懸之節、斤高嚴重に相改申儀、福野等幷能州富木邊在々之通に相改候事。

一、鶴來出來葉たばこ、越中ゟ多買入候に付、明和三年より於能・越買入方より口錢取立來候。然所近年は刻たばこにて能・越ゟ過分入込申故、たばこ改役人共吟味いたし兼、口錢甚減少に依而、鶴來たばこ之分茂、於能・越買入人方より是以後口錢取立候樣、改役人へ申渡候事。

但、高岡之儀は刻たばこ他所より不指遣筈に候。安永八年申渡候通りに候事。

右ヶ條之趣末々之者心得違無之樣被申渡、且前々申渡置候趣共違失無之樣、其所々たばこ問屋等へ嚴重可被申渡候、以上。

未　二月　　　御算用場

進士齋宮殿

奥村左太夫殿

條・越ニ而ハ口錢、近年次第致減少候、畢竟洩ニ而ハ有之、其上御締方ニ拔申族も殘存候。依而今般口錢改方役人ゟ、別紙之通申渡候間、則別紙之通相達候條、ヶ様ニ問屋并小賣人等へも不相洩樣嚴重可被申渡候、以上。

二　月　　　　御算用場

進士齋宮殿

奥村左太夫殿

右之通申來候ニ付、別紙寫指遣候條可得其意候、以上。

奥村左太夫

進士齋宮

能州四郡十村中

三月四日。前田治脩將に就封せんとするを以て道中の作法に關し告ぐ。

〔政隣記〕

三月四日、今般御道中觸左之通

御道中御定書前々之通ニ付相變不申候條、御組・御支配御供之人々、且又御相等之內拔詰有

之人々、御申談可被成候。御披見有之度候はゞ、於御横目所御披見可有之候、以上。

二　月　　　　御道中奉行　御　横　目

御道中船渡場に而、下馬・下乘仕罷通申筈に候條、左樣御心得可被成候、以上。

二　月

御道中に而御泊ゟ御着早き時は、爲御夜詰罷出候者、何も早く罷出、伺之品は早速伺可申候。

御供勤候者は、旅宿へ罷歸、食事等相仕廻候而、追付罷出申筈に候事。

二　月　　　　御行列奉行　御　横　目

於御道中御鷹御拵被遊候節御行列進退。

一、御行列之內御先三品・御馬より、御跡三人之御步横目迄は、宿々に而見合、御樣子次第御先へ可罷越候。

一、御鷹師幷御用可有之人々は、尤見合可申事。

一、御先三品は、右御行列見合罷在候節も、無構押通可申候。

一、御先三品之御行列脇、惣而行披候者、御行列に障不申樣道をも除、作法宜相心得罷通可申候。路次惡敷道幅等狹き所に而は、御行列支不申樣相心得、罷通候節三品之押足輕へ可申斷候。主人々々にも右之通に而、三品騎馬之人ゟ罷通候段申屆候而可然候。勿論馬上・駕籠

に而罷通候者は、下り立申には不及候事。
一、御行列御跡より罷越候人々は、御行列見合罷在候所々にても無構罷通、馬上・乘籠に而罷通候者は、下り候而可被通候。勿論末々迄堅爲致可申事。
一、御鷹野並遊覽候時分、末々迄騷敷無之樣、作法宜罷通候儀專一に候間、其心得可被成候、以上。

二月　　　　御行列奉行　御横目

〔政隣記〕

道中供之定

一、道中供之次第、行列書附に相違有之間敷事。
一、供之間、脇道并引離獨立參間敷候。草臥候者、惣供之跡ゟさがり、馬に而可參候。町通案之際左右を明可罷通候事。
一、騎馬・乘懸共其沓打候刻、道之脇ゟ引退、跡之馬無滯通、沓打仕廻、本之所ゟ乘入可申事。
一、警護之儀、本行人可任指圖、若本行人背下知猥に入込候者、主人ゟ不及屆討捨可仕事。
一、自然喧嘩等有之候共、其場に有合申者は格別、其外は本陣ゟ相詰、頭中可請指圖事。

附、若火事等有之刻、風下之者は自分道具をかたづけ、仕廻候はゞ本陣ゟ相詰、是又頭中可請指圖、一切火本ゟ參間敷候。尤自分宿々之火之用心堅可申付候事。

一、横目之者幷押之足輕申渡候儀、違背不仕候樣、主人々々より下々まで堅可申付事。

一、宿札へぎ取候儀停止之事。

附、明宿候共組頭ゟ無斷はいり申間敷事。

一、下々茶屋幷町家に而不作法成躰仕間敷候事。

一、他境之者等に對し非法申懸間敷候。むざと打擲等仕事有間敷候。勿論駄賃無相違可相渡、此段堅相守候樣、主人より下々迄急度可申付事。

一、馬請取候儀、馬渡奉行ゟ指紙を遣可受取、馬渡奉行指圖無之、相對に而むざと馬受取申間敷事。

一、諸事買物代宿賃無滯急度可相濟、自然宿之道具等損候はゞ、代銀を以辨可遣候。發足之跡に、宿々横目相廻候條、此通下々迄可申付事。

附、宿賃無滯受取、其外申分無之趣、亭主證文を取置、跡仕廻に頭ゟ追而可相渡事。

一、自然於路次、他所之者与申分仕出候歟、又は家中之者与して申分仕出候はゞ、其所を守、猥に馳參申間敷候。其近所ゟ參候騎馬供之面々裁許可仕候。難遁之儀候はゞ、其次之騎馬与

申談可相濟候。但其時々首尾により可申事。

一、着以後本陣之前、家中末々に至迄乗通申間敷事。

一、先騎馬之面々、組下之行列正敷候樣に、常而急度可申付候。若行列雜亂之儀有之候は、其とへ組下にて無之候共、其段堅申付、跡先にても可相斷事。

一、騎馬之面々、乗物より跡を正敷可申付事。

一、行列之中において、高聲不仕樣に下々まで可申付事。

一、騎馬之面々、城下并宿々に而手綱を放申間敷事。

一、於城下・町中雨降出候はゞ、不作法に無之樣雨具可用之事。

一、持筒所騎馬。

鑓一筋、乗馬一疋、若黨或二人・三人可爲其分限、挾箱持一人、沓籠持一人、合羽持一人、草履取一人、并鞁供之手替一人可召連之。其外之供之者共、勝手次第先に可遣之事。

但、此儀近年道中之可隨樣子事。

一、持弓所騎馬。

右同斷。

一、先長柄所騎馬。

右同斷。

附、惣面供之組頭鑓三筋・弓、於旅宿幕打可申候。物頭は鑓二筋・弓・幕、番頭は鑓二筋爲持、弓・幕は可遠慮、横目者身代多少に隨、鑓或二筋・一筋爲持可申事。

一、歩供仕面々草履取一人。但雨天之節は、笠合羽持一人、乘物之跡押足輕之次に可遣。持鑓一筋・若黨一人・挾箱持一人・笠合羽持一人、騎馬供之次押之者跡に可参。乘馬沓籠持は使馬与押歩横目与之間爲牽可申。乘馬無之人々は、乘懸馬惣供之跡押足輕之先に可遣之。此外從者勝手次第可遣之事。

一、行列作法之儀、行列奉行並用人可請指圖事。

一、於船場不作法無之様、奉行之面々別而精を出し可申付事。

一、若川々水出申候はゞ、勿論水多少之様子見屆、其段何も以飛脚可及注進候。假令水無之候とも、是又其旨可有言上事。

一、惣面何れ之川々にても、其所之船奉行馳走人又は足輕人足等相改、晝休歟泊迄、右馳走人交名幷知行高・人數念を入相改、委細書付可指越事。

一、船渡所奉行之儀、可相通前日之晝船場迄参着、其夜四時分迄有之、先に罷越人々致裁許、無滯様渡可申候。若供中多行つゞかい、其節迄渡濟不申候はゞ、夜四過時分迄も渡可申候。

翌朝七時分より船渡場は罷出可有其旨候。勿論足輕等其節罷出候様可申付事。

一、鮫川又は筑摩川・才川村上之渡、天氣相によ り俱中早速先ゟ参候様に申渡割に、其段以飛脚可申達候條、夜中にまて小渡可申候。左樣之節は、所之渡船人足等別而骨折可申候條、書付可出事。

一、夜中は何れ之舟渡所にても、兩方之川端に大挑灯二張宛爲燈置可申候。且又小挑灯も三十計爲持、渡舟之内にも小挑灯一宛一艘々々に爲燈可申事。

但、所によ り相伺候て爲燈可申事。

一、船渡所入用之道具品々、時々之道割場奉行致吟味爲持可参事。

一、先ゟ不罷越候而、先々番之點合兼申由人々及難儀候はゞ、役儀之様子承届、斷之品尤においては、何れ之船渡所に而も早速渡可申事。

一、訴狀等上申者於有之者、手ふとに不仕、先足輕様子承、脇ゟ召連参候趣、小將横目或騎馬之面々ゟ可相達、又は様子によ り目通ゟ罷出候ニ〆、足輕又は徒等にても出向、其者之側に付き有之、小將横目其様子承届、騎馬之組頭可申談。往還書付等持有之者は、騎馬之横目と組頭可申談事。

右之條々、先規之通用置候條、其旨を存、聊相違有之間鋪者也。

三月八日。前田治脩就封の際の供人に旅費の増額貸與を許す。

〔政隣記〕

付札、御道中奉行へ

當御歸國御供人之内、古詰之者も罷在候得共、多分去秋御供に而罷越、詰留も不申者共に候處、此表去年已來米・諸物高直に付、一統致難澁候處、道中驛々も此表同樣米・諸物高直に而、困窮之躰に相聞え候に付、旅用等も入増候間、御供人へ御貸渡物品、能詮議有之樣被致度旨、委細先達而被申聞候。一統難澁之儀は相知申事、其上御供者失墜も有之儀故、御運方甚御指支に候得共、種々打返各別に遂詮議、委曲達御聽、別紙に記候通被下候。當時甚御難澁之内より如斯被下候儀候條、猶更可成だけ精誠致勘辨、旅用不指支樣御供可仕儀專要之事に候。右之趣被得其意、組・支配之人々へも被申聞、組等之内裁許有之人々は、其支配へも不相洩樣可被申渡候事。

詰留与申者、一人扶持に百目宛、内二十目は當暮より三ヶ年賦に而返上之事。

古詰之者へは、一人扶持に銀八十目宛、内二十目は同斷。

右當八日大炊殿被仰渡候旨廻狀昨日到來、今日仕切御扶持方代与一集に受取候事。

今日は三月十一日

三月九日。本鄉邸に洗馬の儀式を行ひ、且消防の練習を爲さしむ。

習仕はならしとよむ
押出はおしだしとよみ正月の消防出初式をいふ
中見本の儘

〔政隣記〕

三月九日豊〈より〉御洗馬御規式、御馬役等ゟ於御庭乗馬被仰付。且又於御庭御近隣火消建習仕被仰付候ニ付、一番不破直記、二番人見吉左衛門御人數召連罷出、御好に依而都而御門外へ押出之通高聲等仕罷趣〈り〉、紅葉山之邊にて者之者ゟ中見申付、諸事都合能相濟。畢而惣御人數ゟ爲御酒代金子千五百疋被下之。不破・人見ゟ者翌十日於御次御菓子被下之。

三月十三日。前田治脩就封の暇を受く

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中牧野越中守殿を以、御國許へ之御暇被仰、御例之通白銀百枚・御卷物三十宛御拜領。諸事御都合能相濟、上使歸是出後追付御老中御勤、若年寄中へ者聞番御使相勤。且就上使、頭分以上并御給事役者翌十日、御式臺取次役ゟ服紗小袖・布上下着用。

三月十五日。前田治脩柳營に上りて徳川家齊に就封の辭見す。

〔政隣記〕

三月十五日依御參暇御登城、御暇之御禮被仰上、御退之後爲家上意、御鷹二・御馬二御拜領。御下り直に御大老・御老中・若御年寄中ゟ御勤。且又御家老兩人〈前田大炊殿・伊藤內膳殿〉登城、御目見、卷物拜領。是又爲御禮御大老等御勤、前々之通。

〔續德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守治脩就封の御暇あり。鷹・馬を給ふ。

三月十八日。前田重教夫人壽光院西ヶ原の牡丹を觀る。

〔政隣記〕

三月十八日四時過御供揃、御忍御行列に而、壽光院様西ヶ原牡丹屋太右衛門庭へ御立寄、道灌山・日暮里より上野之内常照院へ被爲入、暮頃御歸。

三月廿五日。御使番山路忠左衛門。火事場に於ける横山山城守配下の行爲に對して抗議す。

〔袖裏雜記〕

三月廿五日夜村木町劔崎辻火事之時分、山城儀出席仕退出之節、於途中御近習御使番山路忠左衛門儀、山城跡より罷越申入度旨有之由申候付、途中に候間宅へ罷越申聞候様申達、則罷越、只今火事に付致出馬候處、乘馬に障候者有之候。右は山城人數之躰と見請候間相達候。ヶ様成儀に而は御用支候旨申聞候付、致承知候。左候はゞ慥成證據有之哉と尋候處、證據と申は無之候へども、多分人數之内相違も無之樣存候旨申聞候付、左樣之儀未致承知候。尙更

相延道而穩是可申達旨申聞置候。依之見候處、曾而不法無之候。就夫都而御使番、御在國之節は、專御差圖を以相勤申儀。左候へば御城へ早速罷出、被仰渡次第火事所へ罷出、火元之樣子等見分及言上可申儀候へども、御留守には先二御丸等へ罷出、火事之樣子致見分罷越候樣、私共よりも及差圖候はゞ早速罷越、火元之樣子見分仕、重而罷出其樣子可申聞儀ニ相心得罷在候。尙又私共出席仕候節、御使番隨分罷出申者共御座候。尤只今ニ見分之上罷出、火事所之樣子相屆申者も御座候。いづれにも尙々勤方與合も可有御座、併御留守たりとも勤方は、御發足前等時々相伺候上被仰出も有之、早速火事所江不罷越候而は相成不申趣も御座候哉。役儀有之二三騎ニ乘込候樣成事ニ而は、おのづから申分も出來可仕、惣而勤方之儀被仰渡之趣も候哉。左候はゞ私共存寄ニ相違仕儀も御座候哉。勤方之所被仰出候樣仕度奉存候。ことに火事之節無用之馬上等之者多候。毎度一統觸候へども一圖に相集候間、尙更嚴重可申渡旨等、四月十六日御用番安房守より申上候處、使番・横目之儀は直下知之役者、各にてもいふ被申事難成譯に候。將亦合紋羽織歷然たり。是に對して狼藉を働くものは法外なり。右附役格別之勤向は治亂同樣に候。彼等勤方違亂之儀無之候は、尤是等之通可被相心得、組末々之者合紋を不見知歟。然らば其主人々々不斷申付方不行屆不覺悟之至に候。向來夫々急度可被申渡、且又火事場無用之馬上等之者與に相集不申樣、是亦一統嚴重可被相觸事に、

同月廿一日以御加筆被仰出候付、其御請に――奉畏候。左候へば御使番勤方之儀は、被仰出無御座候儀と奉存候。乍然彼等勤方違亂之儀無御座候條、尤是迄之通相心得可申旨被仰出候付、先達而申上候通、御留守之節は御使番先御城ゟ罷出、火事所見分仕候儀は私共及差圖候上罷越申儀と奉心得候。就夫及大火候節、前々以奉書火消申渡候砌、御歩使に而爲持遣候へども、所々ゟ差遣御歩在合不申時は、是迄先は申渡候事無御座候へ共、人持之内罷出火消候樣可申談旨、御使番早乘を以罷越候樣可申渡趣に、前々より相心得罷在候。此儀も自然有之間敷ものに共不奉存候間、以後も此通何も相心得罷在可申と奉存候。將又御使番群集仕候内に御座候とも、役前幷名前等斷相通候はゞ、雜兵末々之者に御座候ても承知仕間敷譯は有御座間敷候へども、先頃山崎忠左衞門儀、山城人數之内相障申儀も無之、尤證據も無御座候處、山城へ相向不束成儀申懸候族、誰に仕候而も若重而か樣成事御座候時は、何程役儀有之ものにても末々承知は仕かね可申哉と奉存候。此所には心得も可有御座儀与奉存候旨、四月廿三日安房守より申上。

三月廿六日。前田治脩江戸を發して就封の途に上る。

〔政隣記〕

三月廿六日、今日七時頃御上邸御發駕、御下邸御立寄、夜五半時頃浦輪驛御泊宿へ御着。

闕文は辞精なり

三月。前田治脩、在江戸の養母疾病の際は親族よりの屆出により出府すべき許可を求む。

〔袖裏雜記〕

三月廿六日江戸御發足之砌、伊藤内藏御前へ差出候節被渡下御附札之寫。

養母儀、御當地に罷在候間、若及病氣大切之節は、相屆出府仕度候事。

大切之儀承之國許より罷申趣候而ニ、遠國之事に候間、不苦儀に候はゞ、兼而右之内存御聞置被成、御同席方台も被仰談置、出府可奉願躰之病氣ニ及候ニ付、其節一家共より御用番迄可及御屆候條、早速願被仰上被下候樣仕度存候。

右御内談申達候。

三月　御名

御附札、承屆候。

四月九日。前田治脩金澤城に着す。

〔政隣記〕

四月九日微雨、巳刻より晴。朝六時御供揃に而同刻過御立、昼下御小休、九時過御歸城。

但、自分御先拔に付六時頃發、御小休所見分、直に御城へ出、御着之上御用番於御席恐悅申述、追付致歸家候事。

自分は津田政隣

一、野田等御參詣御延引被仰出。

一、江戸へ之御禮使、人持組前田兵部御目見、御例之通拜領物被仰付、晝過發出。

四月十九日。江戸下谷廣德寺に對し靈供米を增加寄進す。

〔袖裏雜記〕

廣德寺御靈供米、毎歲二十五石充被遣、此分は松嶺院樣御一躰に御寄附に而、御代々樣御位牌に御寄附無之間、御寄附有之樣、明和六年以來段々願有之。廣德寺よりは松嶺院樣御靈供米と申候へども、延寶年中會所に之押紙面には、どなた樣と申儀も無之、此儀に追而廣德寺へ申入可然。右願に付今五十石御增、七十五石可被遣哉之旨等、天明二年にも僉議。其後僉議中之處、當二月又々同樣願書付出申上候處、左之通被仰出。且又廣德寺書付に御尊牌御安置之分左之通書立出之。

但、松嶺院樣御靈供米と申は、申傳迄に而記錄は無之由。依之百石之分と都而之御靈供米之趣也。

高德院殿　瑞龍院殿　微妙院殿　陽廣院殿

松雲院殿　護國院殿　大雄院殿　崇德院殿
天珠院殿　泰雲院殿　芳春院殿　玉泉院殿
天德院殿　梅園院殿　妙光院殿　瑞陽院殿
寶明院殿　靈心院殿　實林院殿　照光院殿
淨珠院殿　春桂院殿　春香院殿　福昌院殿
樹正院殿　慈雲院殿　清月院殿

四月十九日以志村五郎左衞門左之通被仰出候也。

廣德寺御靈供米之儀、各僉議之趣被聞召候。此儀は追而從御前可被仰出与思召候へとも、各僉議有之に付、歸聞被成候上可被仰出与思召被成御座、右御靈供米之儀は壽光院樣御時之趣も有之候間、廣德寺願之通都合百石可被遣旨被仰出候。

丁未四月十九日

四月廿三日、前田治脩、德川家齊より將軍宣下の祝儀を受く

〔政隣記〕

四月廿三日於江戶、上使御奏者番土屋能登守殿を以、爲將軍宣下御祝儀如御前例御拜領物。御賀式わり御番頭竹田清次郎殿を以如御先例御拜領。

四月廿五日。金澤城石川御門を修繕の爲河北御門より通行せしむ。

〔御觸幷御返書留〕

付札、御横目に

石川御門御普請就被仰付候、當廿五日より往來指留候條、御城中御番人、且又就御用罷出候面々、河北御門より往來之筈に候條、一統不相洩樣可被申談候事。

四　月

付札、御横目に

石川御門御普請就被仰付候、都而河北御門往來に相成候。若火事之節、右御門迄に而指支可申候間、火事之時分ニ手寄之人々は土橋御門より致往來、從者等甚右衛門坂御門坂下に殘置可申候。西町口より土橋御門に相通候人々は、御宮坂下に相殘し可申候、御宮坂・甚右衛門坂兩御門より內は、三ノ御丸御定の人數ニて召連、土橋御門通罷出可被申候。從者末々相殘り候所々不作法無之、込合不申樣相心得候樣夫々可被申談候事。

四　月

四月廿七日。富田彦左衛門・池田忠左衛門越中五ヶ山に流刑を命ぜらる。

〔政隣記〕

四月廿七日、去年八月廿一日、九月七日・十日記に有之通に候處、今日左之通被仰付。急度
可被仰付處、非常之就御大赦に如斯被仰出。
五ヶ山へ流刑、於同所縮所に被入置　富田壱左衛門
　池田忠左衛門
能州嶋へ流刑、配所へ被遣候迄牢揚屋へ被置入　池田喜朔郎
但、壱左衛門實弟富田雅五郎・いとこ杉江兵助指扣御免許。

〔政隣記〕
十月二日、前記四月二十七日記に有之通に候處、今日富田壱左衛門・池田喜朔郎夫々配所へ
被遣之。但池田忠左衛門に先頃牢死之事。

四月廿八日。閣老松平周防守、前田治脩より珊瑚の贈遺を受け次いで之を返却す。

〔袖裏雜記〕
御用頼之閣老中松平周防守殿より、珊瑚珠御所望。元來下谷清徳寺に所持之由。これを御望
之趣、聞番へ周防守殿家來より內通有之。則御僉議之上九百兩に御買上、御肴御添、四月廿八
日聞番御使に而御進物に相成。周防守殿甚御大慶、先當分飾置候上色々取用可申旨御答有之

處、翌廿九日周防守殿役人林良藏より、聞番へ及面談度儀有之旨に付、高田新左衛門罷越候處、右は大切之品を切くづし候而は、不益のみならず、奢侈之至、其儘指置候而は趣意も違候間、内々被相戻、こなた様御道具に被成置候樣被致度旨申、段々懸合候へども迚御受納有之間敷趣に付、五月朔日良藏より紙面を添、右御品爲持越候付、御留守詰御家老篠原織部より表御納戸奉行へ渡之。右一件、最初より新左衛門懸合不都合に成候上は、指扣可申渡哉に候へども、良藏申分に隨ひ候迄に而、最初より曾而如在無之故指扣不申渡。委細右之趣共、五月三日紙面を以申越候付、御答は左之通被仰付。且又右御進物御目錄調方等、江戸に而僉議左之通調叄り候也。此一件始終長篇に候へども、爰には要のみを記す。

私曰、此節取沙汰には、周防守殿には素より御懇望之處、松平越中守殿御老中に御成候時分に而、受納難成首尾故との事也。

御目錄寫

枝珊瑚　一

交香　一籠

以上

高田新左衛門持參覺書之寫。

枝珊瑚　一

鉢　銀

黒塗紗張覆

箱黒塗

上箱桐

臺

一、珊瑚珠高さ五寸七歩程、横四寸五歩程。

一、臺銀鉢高さ四寸三歩、幅八寸三歩四方。

但、横縁浪高彫二重側。

但、かんすい石入。

地板浪毛彫。

縁唐草并唐花之毛彫。

下段彫物松竹梅滅金。

一、覆黒塗ニ而格子組七寸五歩四方。

黒黄紗ニ而張。

一、上箱黒柿。

一、紐眞田糸打。

右之通御座候、以上。

四　月

松平周防守殿内玄關ゟ罷越、役人林良藏ゟ内々可申述趣。

次第暑氣相募候へども、彌御寧固御座候而珍重存候。然ば先達而短刀之緣に相成可申樣成珊瑚珠、在合候はゞ御所望之儀被仰越候付、何卒致進覽度、其砌より段々相しらべ申候處、在合候付、若右御用にも相立可申哉と致進覽候處、先御飾置御詠被成、色々に御取用ひ被成度旨被仰聞候へども、猶更御考被成候へば、右之品御切くずし被成候儀も如何歟、又其儘に被指置候而は御趣意も違ひ、不御本意候故御戾し被成候旨、御内々被仰聞候趣致承知、近頃御丁寧之儀存候。幸右之品在合に付致進覽、御用にも相立可申御樣子に而本懷之至存候處、段々御懇厚に事を分け被仰越御戾之上、強而致進覽度旨申達候儀も致兼候付、乍殘念其儀無御座相扣申候。右に付委細被仰越候趣、被入御念候儀忝存候。尤以來何成ことも聊無御心置被仰越候樣致度存候。此等之趣御手前迄何分宜申述旨申付越候。

右申述候以後、

當々何成とも御慰に可相成品被致進覽度、色々心配被致候へども存付候品も無之候處、此度御所望被仰聞候趣、御懇意故与識に不大方被致大慶候儀に御座候。然處御返に相成、千萬殘念至極存當被存候。しかし段々御様子被打明被仰聞候事故、此上渡是被申達候儀も甚無詮に被存候へども、何れに御用ひ被成候而も御留置被成候へば、誠に本懐之至安堵至極仕儀に御座候。段々分而被仰聞候事故、強而被申達候而は却而思召にもちがひ、本意に相背候事故、此段には被相控候へども、除き残念被存候故、右之存念を御手前迄無急度唱置候様、圓浄より申付越候。且又以後用向御細義申候儀に付而も、段々御懇意至極之趣共、御手前迄被仰聞候段、具又具被致承知、誠御深切之程千萬忝御礼難盡被存候。此等之趣も宜御手前迄可申述旨被申付越候。

五月廿五日。前田治脩、親翰返上の包紙等を簡略すべきことを命ず。

〔政隣記〕

五月廿五日左之通志村五郎左衛門より申聞候旨等御横目廻状。

御親翰御請指上候時分、右御親翰上包紙、并都而披言上紙而上包紙、是又以後一枚に不及、半枚に而包差上候様、夫々可申渡旨被仰出候。

右之趣被仰出候條、一統不相洩様可被申談候事。

郡而言上封物等料紙宜候間、以來隨分奄紙相用候樣被仰出候條、夫々可被申談候事。

未　五　月

未　五　月

五月廿六日。前田治脩石川郡宮腰に行歩を行ふ。

〔政隣記〕

五月廿六日御鷹野之振を以、宮腰ら爲御行歩被爲入、御休所中山主計。夫より濱へ御出、其節町之内者御供建之通、濱入口に而御供落し切。且又金澤町端より日笠御免与御出前被仰出。

六月四日。本鄕邸に富山侯前田利與の行狀に關し訴狀を投ずる者あり。

〔袖裏雜記〕

六月四日江戶御上屋敷東御門續番所出窓之内に、左之通上書有之訴狀有之。内外廻御横目足輕より御横目ゟ達之、御横目披見之上言上に付而、其訴狀被渡下。重而六月廿日に、淡路守樣御行狀不宜躰兼而御聞及も有之、右訴狀も其一端と思召候。元來雲州樣御勝手御逼迫至極之訶、淡路守樣江戶御居住は第一御不益候間、御湯治御願御歸邑之儀可被仰遣与思召候。存寄も候はゞ可申上旨被仰出、存寄無御座趣六月廿二日申上、其後尙更段々御僉議有之、右之通被仰遣候處。御治定は不見。右訴狀之内は、吉原之遊女被受出、女中多御樂、御表に御飯

來と無之、過分之御書請、替以村隼人・三浦平三郎・山田五左衛門・吉村順左衛門罷人故、四人を可討旨趣也。

訴狀之表

出雲守様御内
惣 足 輕
惣 小 人

加賀守様御内御横目様

裏

日安 封

六月十三日、前田治脩、増上寺に於ける徳川家重の法會に香奠を上る。

〔政隣記〕

金小判壹兩宛

御城使御歩
中 村 甚 藏
淺野三郎右衛門
北 川 嘉 藏

右之人々、前月十三日惇信院様御法事之節、御香奠に指添罷越候處、於途中大風雨に相成、

衣類等濡損致難儀候旨、格別願之趣に付被下之候。
右之通被下候條可被申渡候事。

未七月

右六月十三日於江戸增上寺へ罷越候節之儀也。
頭長作兵衞より相願置候處、前月廿七日別紙之通被下候段、江戸詰御家老篠原織部殿御申渡之旨申來候由承に付記之。

六月廿八日。役料知の支給を改法以前の狀に復す。

〔袖裏雜記〕
御改法に付、自分知八百石以上之人々、何役被仰付候ても當分役料被下間敷旨、去年正月被仰出、八百石以下に而も組・支配無之者は、五百石以上へは役料不被下、又は組・支配有之候共、御先手物頭六百五十石以上、御細工奉行七百石以上へは役料被下間敷由、同年五月被仰出、其時々申渡置候處、御馬廻頭入用多候故、役料知不被下內は、御普請會所へ指出候下奉行、頭欠有之節之振を以、二十俵之分は、其組役銀之內五百石分相渡候樣仕度旨等願紙面出、聞番長瀨五郞右衞門よりも、役儀物入有之間、前々之通役料被下候樣願紙面出、一統不信服之躰候間、都而如前々役料知被下可然と六月十三日伺之處、御趣意は不奉存事に候へども、い

天明六年正月廿七日の條參照

二十俵云々本の儘

ずれにも當分之被仰出置候事候間、向後ハ被可爲舊々之通候事と、以御附札同月廿八日被仰出、卽日夫々申渡。

〔政隣記〕

六月廿八日、就御改法當分役料不被下段、去年被仰渡置候頭分江、是以後前々之通可被下旨被仰出候段、夫々御呼出御用番被仰渡。

六月。諸士たるもの、儉約を守るべきも武道を怠るべからずとの幕令を傳達す。

〔政隣記〕

萬石以上・以下末々に至迄、常々應分限可成程ニ儉約を用、勝手向取亂不申、御奉公出精相勤候心懸專要ニ候。儉約を相守候とて、知行高相應之人馬・武器等不相嗜儀者有之間敷候事。

一、文武忠孝者前々より御條目等第一之事に候得ば、別而心懸可申儀に候。若き面々に、平日武藝等ハ隨分出精可致候。亂舞其外者畢竟慰之筋に候得者、程能相用可然候。專に致候而者自然与武道薄可相成候間、其處に心を用候樣可致候。

右之通被仰出候間、無甚僞可被心懸候。

右之趣向々江可被相觸候。

水野出羽守殿御渡候御書附寫一通相達候間、被得其意、答之儀は松平對馬守方へ可被申聞候。

六月十八日　　　　　　　大　目　付

御名殿　留守居中

右今月□日於江戶篠原織部殿御渡之旨等、御橫目廻狀出。

〔政隣記〕

八月廿八日、前記六月廿九日に有之、萬石以上・以下末々至迄儉約等之儀に付而之公儀觸、今日於金澤も長大隅守殿・本多安房守殿より御廻文出、諸組へ觸渡夫々より有之。

六月、十村等に百姓の奢侈怠慢を戒むべきを諭す。

〔司農典〕

近年里方賤片山里男女共、百姓不相應之衣服を着、傘・雪踏等木履に皮緒抔用申者有之樣子、村役人者勿論、都而主人分之者は、前々より嚴重申渡置候御定致會得可罷在儀に候得者、如何程致亡失候共左程心得違之者は有之間敷候得共、若年之子弟暨下人共之所業与存候間、其親共主人常々嚴重申付、如此百姓不相應之族無之樣可爲相心得候。金澤近き村方、其外所々町分宿驛之近村抔、別而商家之風躰を見習、如此奢侈多有之樣子に相聞候條、猶更綿密に心

迄附可申渡候。以後子弟・下人共之内ヶ樣之族有之候得者、本人勿論、其親類・主人も越度に可申付候條、其旨急度相心得、無油斷糺可申候。其上違背之者有之候はゞ、村役人より早速裁許之十村江可申達候。忽に致候はゞ、村役人可爲越度候事。

一、盆遊日之申立、往古山方者七月十五日・十六日兩日休日、里方は十四日より十六日迄三日程致休日候樣子に候處、近年は村方に寄十四日より十八日頃迄休候樣子。尤所に寄可申候得共大躰右之族に相聞得候。自今往古之通相心得、數日爲致休日候儀有之間敷事。

一、祭禮之儀山里共、春は大躰往古之通一日休候樣子。秋者村に寄近年は三四日も休申樣子。別而秋祭禮之儀者早稻・中稻刈入之時節に相當り、右之族に而者甚手支に可相成、其上村方に寄、其登祭禮之節不時之休日を村役人江願聽、年若之子弟并下人共大勢押聽、若村役人不致許容候得者、申合猥ヶ間敷儀も有之樣子。近年如此成來、次第農業致怠慢、氣候宜敷年柄にも人力之怠より致不作、其場に至り氣候を申立、畢竟御上之含も申場合に至り候儀、誠に失本意冥加恐敷事に候。ヶ樣之儀者常々其得失を申教、可爲致會得儀に候。其上不信用之者江ハ、申斷次第急度可申付事。

一、參宮之儀、往古者草拂後少々農業之隙を得致參宮候處、近年は草修理最中主人へ者勿論、傍輩共へも不知急參宮致し候樣子。百姓分として農業等閑に心得神參致候儀、曾而神慮に可

叶事共不被存候。是等之道理も急頃に可申教候事。

一、十村共打寄萬端御郡方之儀及相談に候條、新田裁許〻可致出座候。能美郡抔は右之通に候處、餘郡者左樣之儀無之樣子に候。以後諸郡共右之通可相心得候。且亦若作躰不宜年柄、秋縮前十村作躰致内見分候節、往古者新田裁許致内見分候樣子に候。以來新田裁許も致見分、委曲可及内達候。

右此度石川・河北兩郡へ申渡候覺書之寫相達之候條、右品之内諸郡聊違者可有之候得共、大躰奢侈之風俗怠慢之族者同樣之儀に相聞候條、右書面之趣を以、急度以來之儀可申渡候。尤不信用之者有之候はゞ可申斷候事。

未六月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

六月。領内各郡より村數及び田地の高を上申す。

〔杉木氏小留記〕

三州惣高

高　村數二百十三ヶ村

一、八萬二百四十三石三升六合　　羽咋郡

高　村數百五十六ヶ村

一、七萬六千六百四十二石一斗四升二合　鹿嶋郡

高　村數二百九十七ヶ村

一、五萬七千五百六十三石九斗一升一合　鳳至郡

高　村數百十一ヶ村

一、三萬二千五百七十二石七斗一升五合　珠洲郡

高　村數二百四十七ヶ村

一、十萬四千五百五十七石八斗二升八合七勺　能美郡

高　村數二百五十四ヶ村

一、七萬八千四百四十三石一斗一升三合　河北郡

高　村數三百二十三ヶ村

一、十六萬九千八百九十二石三升三合　石川郡

高　村數八百三十九ヶ村

一、二十萬三千二百二石二合　新川郡

高　村數三百十ヶ村

一、十五萬八千八百七十七石四斗五升一合　射水郡
高　村數五百八十三ヶ村
一、二十四萬七千三百二石五斗三升五合　礪波郡
高　村數七十ヶ村
一、五千八百六十四石七斗八升五合　五ヶ山
村數三千四百三ヶ村
惣高百二十一石四千二百六十一石五斗五升五合七勺
一、五萬六千九百九十石餘　御領國變地作附出來不申高
右天明七年六月御救銀之砌、郡々より書上高。

七月朔日。前田治脩石川郡土清水に行歩を行ふ。

〔政隣記〕
七月朔日八時御供揃に而土清水邊御行歩、暮過御歸。

七月六日。人持組前田兵部の家來山本平藏その情婦を殺す。

〔政隣記〕
七月六日、前田兵部家來近習相勤候山本平藏三十歳与申者、昨夜下笠舞村領於宮之内に、兼而

馴染合候女縫二十不義之儀有之旨に依て、右女之構服より指通、五輪等不慮取出し置候而、平常儀歸宅之處、同居之實兄六組御歩木村文左衞門、血付候衣類等を見付、一緒共申談相尋候處、右之旨申聞、同七日檢使有之公事場ゟ相渡、平掛屋ゟ入追而禁牢。右に付、御歩文左衞門指扣之儀、御歩頭より御用番へ相伺、先自分指扣頭より申渡置候所、同十日指扣罷在候樣御用番被仰渡。

〔政隣記〕

九月廿八日、前記七月六日に有之前田兵部家來山本小藏、昨廿七日於公事場斬罪被仰付。右依落着、御歩木村文左衞門等指扣今日御免許。依而文左衞門等忌中御番引致し候事。

七月十六日。本日より河北・石川兩郡に於ける放鷹を禁ず。

〔政隣記〕

稻に花付實入相成候に付、當月十六日より九月晦日迄、石川・河北兩御郡御家中鷹野致遠慮候樣仕度旨、改作奉行申聞候條、此段被仰渡候樣にと奉存候、以上。

七月四日　　　　江守平馬

前田土佐守樣

右廉指渡候家來等ゟも急度申渡候樣等、土佐守殿御廻狀今月十三日出。

七月廿六日。大聖寺侯前田利物金澤城に上る。

〔政隣記〕

七月廿六日美濃守様御登城御對顏、御料理相濟御鈴通御廣式へ御通、無程御退出。爲御禮雁木坂より御立戻。

七月廿八日。江戸に於いて御歩中村甚藏歸邸の時刻に遲れ、後處罰せらる。

〔政隣記〕

十月十五日於江戸、御城使相勤在江戸之御歩中村甚藏儀、早速御國へ罷歸候樣可申渡旨、篠原織部殿御歩頭長作兵衞に就御申渡に、則作兵衞小屋へ呼出申渡、翌十六日朝江戸發之處、旅中荒氣色に而於所々逗留、同廿九日夕金澤歸着に付、御用番篠嶋平左衞門より、愼之儀以小頭申渡置有之。翌晦日御用番大炊殿へ平左衞門より以紙面御達申候處、同日左之通被仰付候段被仰渡。

但、甚藏儀七月廿八日御門出仕及深更罷歸候に付、則頭作兵衞より織部殿に委曲御達申候處、病氣とは申ながら、及深更歸候間、追而及指圖候迄、自分に指扣可申渡旨申聞。則申

養治候處、如本文。

御步　中村甚藏

右共趣儀於江戸表、當七月廿八日九時前致御門外、堀之内妙法寺へ致參詣候處、途中にて而煩出、四つ谷新宿手前茶屋へ入致保養、夜中九半時頃御屋敷へ罷歸候に付、前後之樣子委細相尋、口上書被指出候。遠方へ罷越候にはは刻限も遲く御座候得共、長日之事故堀之内へ罷越候之有之候。七月下旬は次第に短日に向候時節に候得ば、長日とは難申可有之候。惣而致御門外候而は、七時過にはは可罷歸筈之儀に候得ば、遠方へ罷越候而は、道程之心付も有之、御門外刻限之心得も可有之儀に候。且又茶屋に罷在候內、人足等にても相雇、早速御屋敷へ可致案內處、腹痛致難儀心付不申內少々快方に罷成、單人之儀も致才覺候得共、相調不申旨等口上書之趣、始終不都合に相聞、不埒之至に候。依之御切米十俵御減少、定番御步に被指加、遠塞被仰付候條、此段可被申渡候事。

未十月

八月十日。富山侯前田利久危篤の報至るを以て使者を金澤より發せしむ。

淡路守は嗣　富山侯前田利與

〔政隣記〕

八月十日、於江戸出雲守樣御氣色御聲之處、就御指重、從淡路守樣(御居屋)早打御使御小將組樹

野權太左衛門を以、爲御知被仰進。巳中刻到着。依之從此方樣御見廻之早打御使、御大小將三宅平大夫へ於御席被仰渡、白銀五枚・御目錄御用番御渡之拜領、御使書も御渡、追付從御城直に未五刻發出。

但、小拂金御定之通七十匁御貸渡也。且御指重与有之候得共、被及御大切至極に候由云々。

一、出雲守樣去七日御卒去之旨、從淡路守樣爲御知之早打御使御小將組進藤左源太、未二刻翌十一日金澤着。依之御家中一統普請・鳴物・諸殺生、明後十三日迄三日遠慮与御用番より御觸出。

八月十二日。富山侯前田利久の卒去を弔する爲使者を江戶に出發せしむ。

七月七日卒去し八月七日發表なり

〔政隣記〕

八月十六日、今度出雲守樣就御卒去に、富山ゟ之御使御使番永原佐六郎へ、道中指急御使被仰渡、同日發出、十九日罷歸。淡路守樣へ爲御悔江戶ゟ之御使、御馬廻組栂喜右衛門へ被仰渡、去十三日發出。

八月十七日。前田治脩犀川に於いて御步の水練を見る。

〔政隣記〕

八月十七日八時之御供揃に而、爲御行步才川上於緣淵御步水練御覽。教千代樣も御同道御出、御步頭御用番篠島平左衛門罷越。御歸七半時之事。

八月廿二日。金澤城の菱櫓成るを以て祝酒を賜ふ。

〔政隣記〕

八月十八日左之通於御横目所披見。

今般菱御櫓御普請出來に付、當二十二日御祝被仰付、御普請懸之人々其外二之御丸詰合之面々一統、御吸物等頂戴被仰付候條、被得其意、夫々可被申談候事。

八月十八日

右に付二十二日御城向一統布上下着用、（但頭分之外は上下着用に不及、御横目中より可申聞有之候事。）同日中頂戴人數書御臺所へ指出候樣、御横目中申談之事。

二十二日前記之通に付、御普請懸り之人々并詰合之人々、御吸物・御酒等、正月十九日御祝直御雜煮頂戴之振を以夫々頂戴、御禮御臺所奉行を申述。且又左之御用懸之人々、左之通拜領物被仰付。御意之趣御城代安房守殿御演述、御目録御渡之。御作事奉行以下の者御目録者、御用人相渡之。

泰雲院樣被仰付置候菱御櫓、何も情に入相勤宜敷出來、御喜悦被思召候。仍而御目録之通被下之候。

九月十日。前田齊廣等金澤春日山に遊ぶ。

〔政隣記〕

九月十日六半時御供揃に而、爲御行歩春日山ゟ藤姫樣・鶴萬千代殿被爲入、且神主方へ御立寄、暮頃御歸。

九月廿八日。徳川家齊、代替の爲新たに法度を頒つを以て受領の爲に發する使者を命ず。

〔政隣記〕

公儀就御代替、御法令被仰出候。御請使御先手岡田友左衞門へ今二十八日被仰渡、來月七日發足之筈。右御使御用相濟、同役詰人長谷川三右衞門与交代、直に江戸詰被仰付。

十月十二日。大小將吉田孫右衞門、前田治脩が邸前を通行する際その門を閉ぢざりしを以て處分を請ふ。

今は九月なり

〔政隣記〕

十月十二日寶圓寺へ御參詣。但石川御門御普請中に付、金谷御門より御出之處、仙石町御大小將吉田孫右衞門居宅御見通に候處、御通行之儀遲く承、門爲締不申迷惑之段、頭松原元右衞門より御用番大炊殿ゟ相達候處、追而被及御指圖候旨、先自分に爲指扣置候樣被仰聞、則

申渡有之。委曲大炊殿より被達御聽候處、不被及御貪着段被仰出候段被仰渡、則其旨申渡有之。

附、他組に而も右同町邊三ヶ所同様之趣有之。

十月十九日。天徳院表門通より火を失す。

〔政隣記〕

十月十九日朝六時過、天徳院表門通に罷在候山崎庄兵衛役小者宅より出火、烈風に而如來寺表門迄類焼、町家等十六軒類焼。右に付御用番大炊殿より、奉書火消奥村左京・奥村監物・松平源次郎へ被仰渡候奉書使、御歩兩人宛持參之、返答之趣前々之通。御歩御歩頭御用番篠島平左衛門御席ゟ請引之、直に爲申遣有之。附、以前者御歩御席に而御用番へ返答申述候節脇指取候得共、僉議有之、伺被仰出之上、□年□月□日より帶刀之儘申述候事に相成候由也。

右火事五時頃鎮火。

十一月十四日。石川御門の普請竣れるを以て本日より通行を許さる。

〔政隣記〕

十一月三日左之通御城代村井又兵衛殿被仰聞候旨等、御横目廻状出。

付札、御横目江

石川御門等御普請就被仰付候、往來指留置候處、御普請出來いたし候に付、當月十四日九つ時過より往來指支不申候條、一統不相洩候樣可被申談候。且亦右御普請中、若火事之節手寄之人々は、土橋御門より致往來候樣申渡置候得共、右同日より前々之通相心得候樣、是又夫々可被申談候事。

十一月三日

十一月十八日。前田宗辰の生母淨珠院の三回忌法會を江戶廣德寺に執行す。

〔政隣記〕

十一月十八日、來月十八日淨珠院樣御三回忌御相當之處、今日ゟ御取越、江戶下谷於廣德寺御法會御執行。主附御先手芝山十郎左衞門、取次御大小將二人、御給事役一人。

十一月。領內風邪大に流行す。

〔政隣記〕

十一月二十二日申四剋より寒入。頃日町・在共風邪大々流行、遁る者無し。

十二月十五日。廣島侯淺野宗恒の訃金澤に達し次いで使を遣はして之を

弔せしむ。

〔政隣記〕

十二月廿四日安藝守樣御隱居但馬守樣御卒去之旨、十二月十五日申來。依之普請は同日一日、諸殺生・鳴物は十七日迄三日遠慮之旨、同月御用番長大隅守殿御廻状出。

右に付御國許安藝廣嶋へ御悔之御使御馬廻頭不破和平へ被仰渡、廿日發出。依之小掃金三百五十兩御貸渡、白銀十五枚拜領被仰付。且御香奠爲持許廣嶋へ罷越候御歩中村新助（[illegible]）（[illegible]）へ、於彼地致着用候小袖一・麻上下一具拜領、小掃金二十五兩御貸渡。但罷歸候上除分返上之旨、代銀闕に而受取。右三人共尤中勘御扶持方代等請取之。

十二月十八日。永原半左衛門等先に城中に於いて塗笠を着用したるを以て遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

十二月十八日、前月十八日橋爪御門當番御馬廻遠慮、三之御丸當番御馬廻指扣、石川御門當番與力指扣、足輕共追込。是半左衛門等之塗笠見咎不申に付而之御咎也。

付札、井上勘助へ

永原半左衛門

半左衛門儀、前月十八日犀川々上新町覺源寺前出火之節、火事所より直に致登城候處、頻に雪降候に付御城中塗笠致着用候儀、役筋不心得之至に候。第一家來若黨火事帽子致着用候儀者、一向有之間敷儀に候。剩右樣之儀を可相糺役筋に候得者、猶更心得も可有之事に候。且又右之趣遮而頭迄可申達所、其儀も無之、重々不埒之至、役筋令忘脚候旨思召候。依之役儀被指除、遠慮被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

十二月十八日　　　　　　　　水越八郎左衛門

付札、多田逸角に

御書立之趣右半左衛門同斷。

付札、中村九兵衛に　　　　　小原惣左衛門

惣左衛門儀、前月十八日犀川々上新町覺源寺前出火之節、火事所より直に致登城候處、頻に雪降候に付、御城中往來塗笠致着用候段、役筋不心得之至に候。急度御咎可被仰付候得共、此度之儀者御用捨被成候。以來之儀嚴重に相心得候樣可申渡旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

十二月十八日

右夫々へ御成代本多安房守殿御渡、半左衛門并井上は在江戸に付、堀平馬相組也・松原元右衛門より御渡、同組御番頭伊藤甚左衛門立合、元右衛門申渡之。八郎左衛門へ者堀平馬・自分立會、頭兄角申渡之、御請紙面取立、判形見届有之。惣左衛門へハ立會無之、九兵衛一人に而申渡、御請判形取立有之。但今日定日寄合宿堀平馬宅に付、於同所夫々申渡有之。

〔政隣記〕

二月廿四日永原半左衛門・永越八郎左衛門、去年十一月十八日火事之節、雪降候に付御城中猿皮着用、家来若黨火事頭巾着用之處、不及見咎候に付、十二月十八日遠慮等被仰付置候御馬廻等、今日夫々御免許被仰付。

二月は天明八年なり

十二月廿八日。馬廻組新三左衛門不行狀を以て知行を召放さる。

〔政隣記〕

十二月二十八日左之通被仰付。

御馬廻組百五十石
新 三左衛門

御知行被召放

右先年より不行狀、其上先頃於宅淨留理爲語、聽聞人台札を賣、人集いたし候故之御咎与云々。

閉門被仰付を消したるなり

〔袖裏雜記〕
新三左衞門前月十九日於自宅淨るり令興行、人多に相集候段、頭作無理兵衞より達御内聽候趣、十二月廿八日被仰出之趣有之候付、三左衞門儀常々不行狀之段被聞召候へども、相愼申儀も可有之哉与御猶豫被成置候處、相嗜不申、其上同組をも引損候仕形共も有之躰、不屆之至被思召、安永元年六月廿四日閉門被仰付、御免之節減知被仰付候。然處右之族、依之先例福田彌八郎・山本吉郎太夫常々不行狀に付、先年閉門御免之節減知、其後相嗜不申不行狀之趣被聞召に付、安永七年十二月廿五日御知行被召放候。三左衞門も准じ可申候間、御知行可被召放哉。彌八郎等は重而又博奕之參會仕候。三左衞門には博奕之儀被仰出無之候間、閉門可被仰付候哉と、左之通兩端に同日伺之處、御加筆之通可申渡旨即日被仰出、御加筆朱之通也。
即日可申渡旨御請あり。

伴無理兵衞ゟ

新　三左衞門

右三左衞門儀、常々不行狀に付先年閉門被仰付、御免之節減知被仰付、自今急度相愼候樣被仰渡置候處、今以相嗜不申、於自宅致人集等、不愼之趣被聞召不屆之至に付御知行被召放（閉門被仰付）候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

十二月廿八日。火事に際し雨天なるも城内にて蛙笠を用ふべからざるを告ぐ。

天明八年正月二十日の條參照

［政隣記］

十二月晦日、昔火事之節雨天之砌、御城中迄笠致着用候儀不苦樣に心得違之人々も有之躰に相聞え候、雨天に候共御城中着用難成儀に候條、右之趣一統向寄に可申談旨、今月二十八日御城代本多安房守殿被仰聞候段、定番頭より廻狀出。

十二月晦日。御異風豐島左門に新知を給し、豐島流炮術を兩家に分つ。

是月は大盡なり

［袖裏雜記］

左之通以御書立被仰出、十二月晦日申渡。

新知百石　　豐嶋左門

外三十石　異風料

右鐵炮豐嶋喜右衞門より一流致皆傳授候。元來强弓達者に打候付、喜右衞門致差圖、五十目五段之强弓爲打候處、無滯打候。流儀五十目五段之强弓は甚珍敷儀に而、先祖豐嶋故新九郎寛永年中打候後、至當年迄打候者無之、古來稀成儀之旨相達御聽候。左門儀家督子に年中拔

群之儀、畢竟心懸候故と被思召候。依而如此新知被下之、御異風組被仰付。

十二月

豐嶋喜右衞門
豐嶋左門

豐嶋流之儀は、他國にも一向無之流儀に而、微妙院樣御代以來御秘藏被成事候。以前は豐嶋藤兵衞家与喜左衞門兩家に候處、藤兵衞家は當時無之、右之思召も有之旁、今般左門新知に被召出、豐嶋兩家に被仰付候間、彌以無怠慢心懸、一流之儀兩人申談、至子孫迄無退轉、弟子共成立御用相立候樣可心得旨被仰出。

十二月

此書立之趣は御異風裁許迄申渡候也。

十二月晦日。御步寺岡吉太夫不埒を以て知行を召放され、藤田嘉右衞門等十六人滅祿を命ぜらる。

〔政隣記〕

十二月晦日、不埒之趣有之御知行被召放　御步　寺岡吉太夫

御步　藤田嘉右衞門　大脇次郎作　長谷川永藏　篠田判太夫

山森眞助　岸権右衛門　渡邊甚左衛門　安田紫五兵衛
橋爪半兵衛　森次郎兵衛　青木眞丞　古市忠藏
中村新助　石倉判太左衛門　山田新九郎　小川嘉藏

不埒之趣有之に付、六組御歩被指除、定番御歩へ被仰付。紫五兵衛・判兵衛儀には、御知行之内二十石宛御取揚、相殘分に御宛行並之通十俵宛御取揚、四十俵宛に被仰付。

右不埒之子細者、御歩組御知行被下置候者には、旅行之節迄鎗爲持候得共、若黨召連候事は一向不相成儀之所、只今迄混淆例を以輕使に召連來候處、去夏已來表立召連度旨相願候得共、御歩頭不承屆候處、強而連名願紙而指出、押而相願候に付、不得已事御達方有之處、六組御歩等御知行被下置候にも、御歩に若黨召連候儀ニ一向不相成事に候處、私之跡例を申立、不慥儀に連判を以相願、其上頭にも段々事を分申入候處不致承引、頭を蔑に致し御上を輕んじ、重々不埒之至に付、右之通被仰付候段今日被仰出

〔御年譜〕

付札、御歩頭え

本役御歩横目之勤

御歩一統に

當五月十一日、寺岡吉太夫儀御法事御施行米御用罷出候節、若黨召連候儀、從跡々無之事に付、頭より相咎候處、慥成舊記證據も無之、誠に傳承之趣を以理不盡に願出、剩吉太夫外少祿暨御切米之人々に候得者不相當。其上若黨召連候儀は御定も無之、假令其理有之事に候共、頭へ對し候而者神妙に可願出處、一統連判を以願出候儀者、申合候形に而不輕事に付、頭より段々事を分利害を解申含候得共、一圓不致承引、組品も相劣候段理不盡に申出、其上右願出候に付所々に相集候躰、或は頭宅々に一統相詰可罷在などゝ申出候族、理非を不辨、第一頭を蔑に仕、且は御上へ對甚以不敬法外之至、分限を取失候族重々沙汰之限に候。急度御咎可被仰付候得共、思召も有之不被及其御沙汰、頭宅へ呼寄嚴敷叱置可申候。以來右躰之仕形於有之者、可被加嚴制候。此段可申渡旨被仰出。

天明七年未十二月

一、御歩小頭江者、右御文面に而御歩中夫々御咎被仰付候。右躰不輕儀に候得者、同役共始末申談、如此御難澁成趣に不相成樣取納方も可有之所、不行屆先以不調法之至に候。以來嚴重に相心得候樣御叱之事。

十二月晦日。前田齊敬の童名の唱へ方を一定す。

〔政隣記〕

のりたまと唱へ申との儀なり

十二月、数千代様御名唱方臨々候間、以来清候而本唱候様被仰出候段、今月晦日御用番大隅守殿被仰聞候旨、御横目廻状出。

天明八年

正月朔日　前田治脩金澤城に於いて年頭の禮を受く。

〔政隣記〕

正月朔日快天、餘寒柔和長閑成気候。今朝六時登城、同半時過於表御式臺御帳に附、九時過於柳之御間年頭御禮申上、青銅百疋献上。奏者横山蔵人。且又披露役御大小將、御禮相濟退出。但年寄中より若年寄中迄御禮は、於檜垣之御間五時過被爲請、夫より鶴之庖丁等御規式去々年春之通也。都而頭分以上は獨禮被爲請、御表小將は於船之間一統席附之御禮、御大小將より坊主頭以上、於柳之御間同斷御禮被爲請候事。

附、近例之通諸大夫衆御禮も長袴に而被申上、其外御大小將以上長袴に而御禮之事。

〔政隣記〕

二日、昨日御用に而指支候頭分以上、幷御大小將、且御馬廻組、今日當日也年頭之御禮一統席付に而被爲請。

正月二日。松囃子の儀を行ふ。

〔政隣記〕

二日夜御松囃子、六時過始り五時頃相濟。萬端御例之通に而、御都合能相濟。今年竹田權兵衛出府無之、狸々舞等頭取諸橋權進勤之。御長柄御銚子御表小將中村才兵衛、同御加村爲大、御流御銚子御大小將安達彌兵衛・中川丹次郎・野村順三郎・別所三平、御加永原治九郎・神保金十郎、役者指引歸山長太夫・高田昌太夫勤之。將又大隅守殿・又兵衛殿就所勞登城無之候事。

附、御流頂戴人五十九人、御囃子等御番附御例之通に付不記之。

正月三日。前田治脩、寶圓寺・天德院に參詣す。

〔政隣記〕

正月三日、昨日就當番相殘候御馬廻・定番御馬廻・組外等年頭御禮被爲請、且九時御供揃に而、御表御式臺より御出之節、御通り掛り役者・町人・檢校於御廊下通御禮被爲請。夫より寶圓寺・天德院、直に野田泰雲院樣御廟へ御參詣、七半時頃從奥之口御歸殿。

正月四日。射初・乘馬初及び打初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月四日、於檜垣之御間頭分以上鶴子等爲肴可被爲請處、少々御風氣に付俄に被仰出、於御之御間一統座附之御肴被爲請。且昨日相洩候定番御馬廻・組外且與力暨諸小頭、於柳之御間一統座付之御肴被爲請。畢而御弓初吉田彦兵衛・吉田左太夫迄御覽、御射手中は御覽無之。御乘馬初・御打初御規式御例之通に候。御射手裁許・御異風裁許へ御紋付御上下一具宛、彦兵衛・左太夫へ染物二反宛、御射手・御異風中へ金二百疋宛、御馬奉行中へ御紋付御上下一具宛、御賄料理被下之。御異風以上へ著座而後御吸物、煎御鍋煮・御酒被下之儀等御例之通。

正月十三日、石川郡宮腰に火災あり。

〔政隣記〕

正月十三日、今夜五半時頃より宮腰足軽町より出火、四百軒計燒失、九時頃鎭火。右に付御用番山城殿等幷御使番御横目不曉登城。宮腰え者定火消之内前田内藏太、御使番・御横目罷越。

正月十六日、領内の需要終了するまで干鰯等の屎物を輸出するを嚴禁す。

〔國部夜記〕

御領國中御定諸色津出御制禁之趣、前々より嚴重申渡置候得ども、今以下々心得違之者多有之躰に候。別而干鰯等之儀、屎物個所々浦々に而濱借与名付、其所々出來之干鰯を買入置、

春に至出舟之節、濟借物同樣致出船候樣子に而、御領國近年屎物類殊之外拂底に相成、百姓共難儀之躰相聞候條、當年よりは御領國用達之外、都而屎物類、其所々濟借ども有之、買入相濟候迄、他國出津之儀堅不相成候。右爲締方當場より御領國中へ足輕相廻置、若屎物に不限諸品御制禁之者相渡儀於有之は、直に召捕、其所爲指預、急度詮議相糺候上可爲曲事候條、被得其意、夫々嚴重に可被申渡候、以上。

申正月十六日　　　御算用場

奥村左太夫殿

進士齋宮殿

右之通申來候條得其意、不相渡樣急度可申渡候、以上。

奥村左太夫

能州四郡十村中

正月二十日。雨天火災の際は城中にて手笠等を用ふべきことを告ぐ。

〔御觸幷御返書留〕

村札、御横目ゟ

若火事之節雨降候者、御城中主人は手笠、家來末々迄者菅笠、當分用ひ申筈に候條、被得其

天明七年十二月廿八日の條參照

是月は大盡なり

章、夫々伺書に可被申談候事。

申正月廿日

正月廿八日。徳川家齊の前田治脩に贈れる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

正月廿九日餘重御寄之宿次御奉書、并御鷹之鶴、今月廿三日江戸發、昨夜九時前金城到着。依之御禮使御馬廻頭岡田太郎右衛門に被仰渡、來月二日發足。

正月晦日。京都に於ける加賀藩邸類燒の難に罹る。

〔政隣記〕

正月晦日朝六時前、京都川東建仁寺町どんぐり之圖子ゟ申所之風呂屋より出火。烈風及大火、四條川西佛光寺町等へ火飛、夫より四方へ火移り、殊大風起り、同夜九時過此方樣御邸御類燒。御土藏は不殘無別條。翌二月朔日晝禁裏炎上、主上下加茂へ御立退之處、火之粉烈敷に付上加茂へ立退。夫より又比叡山へ遷幸之段、朔日申刻京都發之飛脚、二月五日金澤着告來。

〔螢廼光〕

一、二月京都大火、皇居・院中・神社・佛閣・町々に至るまで不殘燒亡、即今稀成る大變なり。

則其頃金澤に在しが、火事と呼びて火消まとひ持出で、大騷なり。然れども何方といふ事知れず。翌晩又然り。四・五日立て京師の炎上追々に沙汰す。去れども六十里の大火炎天に映ぜし物なり。此節狂詩狂歌色々の奇談、梓にちりばめて夥し。

〔備忘記抄〕

天明八年正月廿九日夜より、京都大火洛中九歩通りの上燒亡す。此事を白蛾先生筆記あり。今左に載す。(白蛾先生の居宅も類燒す、)

天明八つのとしむつき下の九日、曉かけて火あり。明ればつもごり、四面こと〴〵く焰となり、夜半に及で大宮作りまでも殘りなく、都はすべて灰塵となりぬ。又明ればきさらぎ朔日、晝時も過なむころ火勢やう〳〵とゞまりぬれども、誰かはひとり住べきやどりもなし。逃迷ひて死するもの數しれずとなむ。ながらへたる人は、住所もとむとてはつかのゆかりをしたひ、四方の國々へちり〴〵につどひ行もの幾ばくちたり。あはれてふもさらなり。やつがれは大津の里に親しきゆかりの家有て、しばし假居し侍り。四日の月をながめ、みやこの空をなつかしく侍りてよめる。

源　祐　登

おもひきや此衣更着の初月を大津のさとにあふぎ見むとは

又其時のやうをおもひて

花ならで都の春はもみぢ散なみだのしぐれたえぬ諸人

又

颶風連日河東火。忽轉河西如雷起。熖々烈々三十六。京師一片委灰塵。

或曰大燒時望之則三十六所一時燃云。

別紙に

煙となりし跡まで猶なつかしく侍りて

住なれし軒端こひしくふと見れば早蕨ならでもえにけるかな

春早夜晝日之際

皇嘗幸處白露市。況是帝都萬世天。習慣草廬依起臥。歎息聲不待期年。

きさらぎ下の二日篤光むかひ來り、大津より小關越を過こて、

榮の花も春のながめや燒にされ

二月五日。城中諸役所の火防を嚴にすべきことを命ず。

〔政隣記〕

付札、御横目へ

御城中諸役所火之元之儀、尤人々無油斷可相守候得共、被仰出之趣も有之候條、彌嚴重相心得候樣、諸役所役人中へ可被申談候事。

二月五日

右御城代被仰聞候旨、於御橫目所披見申談有之。

二月六日。前田齊敬、弓初及び具足着初の式を行ふ。

〔政隣記〕

二月六日、今日二之御丸於御居間書院、敎千代樣御弓初幷御具足召初御規式御都合能被爲濟。今日御用縣之人々熨斗目上下着用五時揃。右之外年寄中・御當番之頭分以上は服紗小袖・布上下着用。從中將樣敎千代樣へ御弓矢等被進候御使若年寄。御居間書院宜段河內守等より申上、御規式初り候節吉田左太夫御弓矢持之、桐之御間に罷在、宜時分上之。御替弓等根來三左衞門持之、桐之御間に扣罷在。御卷藁に而御射初被遊。左太夫に御次に而拜領物被仰付候段、若年寄申渡之、御目錄御用人渡之。於御居間書院左太夫儀、中將樣・敎千代樣御前に河內守誘引に而被召出、敎千代樣御手自御熨斗鮑被下之。御兩殿樣御雜煮・御吸物御祝、御盃事相濟御退座。

一、御具足者干鯛一箱御添、御次に而神田吉左衞門（于時御附御步頭也）に御渡被進之。

一、御射手小頭櫻來三右衛門渡、右于傳御用義相勤候、檜垣之御間於二之間拜領物被仰付候段、若年寄申渡之、御目錄御用人渡之。

一、年寄中等へ於席々吸物・御酒被下之。かよう坊主。御近習頭分以上并御用人・敎千代様附頭分以上へ、於御次御吸物・御酒被下之。吉田左太夫・吉田彦兵衛・根來三右衛門へ、柳之御間於二之間御吸物・御酒被下之。

一、今日四時頃敎千代様御表式臺より被爲入。御横目・御步目付御着用、其節奧村河內守・本多頼母階下へ罷出、當番之御表者番組頭等其御式臺側へ罷出、御大小將御番頭・御大小將當番之詰所に罷在。御先立神田吉左衛門仕、御居間へ被爲入。九半時頃御退出、御出之節之通也。

二月十一日。先に德川家齊より贈られたる鶴を披露す。

〔政隣記〕

二月十一日今度御拜領之鶴今日御披に付、出仕以上之人々登城。九時前於檜垣之御間御年寄衆等御目見。於柳之御間出仕以上之人々御目見、三切に而鶴御吸物・御酒・御重肴頂戴之。九半時始り八半時頃相濟。年寄中は檜垣之御間に而頂戴之、給仕御表小將勤之。出仕以上之人々は於柳之御間被下之、給事御大小將・新番・御射手・御異風勤之。且今日御用に携候御大小將御番頭・同御横目・御臺所奉行、柳之御間於横廊下御吸物等頂戴、給仕御步勤之。但右出仕以

琵屋坂は紺屋坂

上之人々は、爲御禮十三日四時より同半時迄之内登城、（服紗小袖布上下着用。十一日は尤熨斗目上下着用也。）御帳に付、直に退出。夫より年寄中御宅へ廻勤。但御家老中へ者廻勤無之。將又諸番頭以下者、主付御家老伊藤内膳殿へ即日檜垣之御間於二之間御禮申述相濟。尤十三日登城等無之。

二月十八日。廣島侯淺野重晟の使者金澤城に登る。

〔政隣記〕

二月十八日、去年十一月廿四日記之通、廣嶋へ御使不被和平被遣候爲御答禮、安藝守樣御國許廣嶋より之御使者淺野民之助、十三日夜大聖寺止宿、十五日御當地発着。今十八日登城、佐藤八郎左衛門同道。（主付組頭御馬廻頭今井甚兵衛・御小將頭大屋武右衛門、御馳走方御大小將佐藤八郎左衛門・宮川只右衛門、聲御使番主付永原佐次郎。）御直答可被仰述處、御痂積に付其御儀不被爲在候段被仰出、御家老役津田修理殿御返答被申述。右御使者退出後、旅宿へ御大小將野村順九郎御使に而、白銀五枚・綿三疋御目錄被下之。右於御城御料理被下之。民之助役儀物頭之由。且今十八日暮六時旅宿發足罷歸候事。

二月廿八日。前田治脩金澤城内を巡見す。

〔政隣記〕

二月廿八日八半時頃、御城中爲御巡見奥之口より御出、二之御丸唐御門・菱御櫓御覧。夫より橋爪御門・土橋御門・甚右衛門坂迄御見通。河北御門・尾坂口迄御見通。石川御門・琵屋坂新

櫓御見通。車橋高石坂下御見通。水之手御門・東之丸八枚戸御覽。御本丸・新丸御立歸、埋御門・松坂御門・玉泉院樣丸・金谷御門、堂形御馬場御入口より御見通。御立歸り、尾坂門通與之日より御歸殿。但竹之間跡も御覽。

右に付御城代本多安房守・鎗奉行御櫓迄御供。尤御普請奉行・御作事奉行等罷出。且富田織人等御近習頭御供。其外御供人者、常御城中へ御出之節之通御行列也。御玄関前御通之節、表・玄御式臺前へ御城外御出之節之通當番之人々罷出。但富田織人等常服之儘御供仕候事。

二月晦日。前田治脩石川郡大野村より粟ヶ崎を巡遊す。

〔政隣記〕

二月廿九日八半時頃御出、大野より粟ヶ崎迄御行歩、夜五時前御歸殿。但、御供人野間日至御坐。且宮腰口町迄少両方より粟ヶ崎迄御早乘、同所御旅屋に御休之事。

二月。前田治脩、大德院に於ける靈堂建設の經費を節すべきを命ず。

〔御親翰留〕

今般大德院御靈屋申付候。當時勝手向難澁之時節に候間、少分にとも不益之儀無之、兼而之圖より入用相增不申樣緻密に僉議可申候。然に建方を勝手を抜候程成候に心外に存候條、此所に隨分心付可申候。此外中村方或職人召仕方等によつて、甚益不益之品有之候。此儀者

奉行人勵次第たるべく候。勘定者我等直に可承屆候條、聊以無油斷和順申談、抽丹誠可相勤候。末々迄も此意味能々會得いたさせ候儀肝要候事。

天明八戊申二月

御手前山とは藩の直營の義

二月。能美郡不動山の採鑛を藩營とし、その仕法を祿上せしむ。

今般不動山金山御手前山之振に就被爲仰付候、惣躰御縮方等之儀、追而者御步御横目等可被付置儀に御座候得共、先私主附、嚴重遂詮議、委細紙面を以可申上旨御書立を以被仰渡之趣奉畏、左に申上候。

［不動山金山御縮方等仕法］

一、右御縮方等之儀、唯今迄茂隨分無油斷相心得罷在候得共、今般御手前山之振を以、御縮方等改而被仰渡之儀に御座候間、彌萬無油斷相心得、御縮方等嚴重可申渡候。就夫かね山掛所雨小屋初め家持居住之者共、前々より十人程宛組合相立、尤組合頭一兩人相立置、御國法之儀者不及申上、時々御觸御紙面幷山法之儀、右組合頭を以觸渡、若組合之內不法等之族御座候得者、本人者勿論、組合十人共急度申付候。且又他國山法之振を以、若不埒之者於有之者、其樣子に寄藤內迄りに仕、大聖寺御關外迄爲追拂申候。其品輕き者共者、御領境又者所拂に爲仕來申候。尤不奉公仕下山爲致申者共、御郡之內奉公先指構申品茂御座候。勿論押立

謂次の水役は十村より不申上ば可申上候

御國法相背候得者、早速御斷申上、急度曲事に可被仰付儀者、常々嚴重申渡置候處、安永元年以來御國法相背申程之儀茂無御座候間、先以今迄之通被仰付置被下候樣仕度御座候。

一、他國稼人之儀者、先稼方手鑑等見屆、彌召抱申節者亦同相改。緣借り等相極召抱申候。

一、私儀安永元年開山之節より主附被仰渡、在宅之間本役御用之外隙分登山仕申候得共、猶更今般被仰渡之樣に御座候間、是以後無油斷罷出、猶に見立山者不申上、新之稼方勢子を入、尤かね山金場共御稼方嚴重申渡、萬事無油斷相心懸入情相勤可申候。

一、今般被仰渡之通、近年稼方衰色引合不宜、追々銀主中及斷、入用銀指支、次第人少に罷成申趣に御座候。依之是以後之儀者、掘子等相増、隙分猶に入、出方茂宜敷相成候樣心懸可申旨被仰渡之趣奉畏候。前段申上候通に而、不動山之儀茂人少に相成、其外剣山等休山茂仕、近在に而相仕立置申掘子六七人下山致罷在申に付、此間夫々申渡置候間、追々召抱申度奉存候。他國金山所何れ茂遠方、其上當時者何方共かね山稼最中に向、別而掘子等相雇申儀、及懸合候而者甚た六ヶ敷山法に御座候に付、向寄本者、段々人多に仕、當山益宜敷相成候樣仕度奉存候。

一、かね山掘子共居小屋迄御貸方、番頭詰七・喜三次兩人定役申渡、惣掘子共近在より罷出候日雇人足賃方其日掘出申荷石、大極上・極上・並荷上中下三段、以上五段位付仕、十二貫目

宛簁叺江爲詰、荷數帳面に記、金場江爲持屆申置、掘場遠近より賃錢高下見計相極置、右人足共晝上り・夕上り之節、金場江爲持屆申儀に御座候。

一、鋪內仕事之樣子幷人足割之儀、鏈頭惣左衞門・惣右衞門・常吉此三人主附、順番を以當番相立、掘場等見廻り縮方仕、鋪內柱・矢木抔危所入替留方之儀、去秋迄十助与申者に主付申渡置候得共、病死仕、末代り人相立不申に付、當時者右三人兼帶爲仕可申候。十助代役之儀者、跡より人柄相極、名前書上可申候。

一、金場仕事御縮方之儀、番徒九右衞門・彦四郎右兩人定役申渡置、板取・根粉流日雇等仕事縮方仕、勿論山々より下し申荷石、大極上等五段振札之通入帳に記、貫目等相改、大極上・極上者大概十荷宛釜懸に仕、上・中・下三段者二十荷宛一釜に懸、三日三夜程燒立、夫より唐臼に而爲碓申候。右粉に爲碓申人足賃錢等之儀者、一人分仕事粉二斗宛に相極置申に付、仕事仕廻碓粉爲計請取申候。尤出來粉增減により、賃錢割合を以相渡申候。

一、金場仕事之儀、右碓粉大極上・極上幷並砂板取共江相渡、先一番流仕、追々仕揚申、砂金之分目形相改帳面に記、私方江請取置、時々寄吹爲仕來申候。

附り、かね山定入日雇人足之內、數年相勤、鋪內掘方等見習申者共、掘子爲見習取揚、扶持米・給銀等相渡召抱來申候。

一、右根粉ニ而立仕、一番砂板取共ゟ相渡申、跡ニ而砂之儀者、則金場小屋一番根粉洗之者共ゟ相渡、十日分一番洗仕、籠桶ニ入置、仕揚者板取共ゟ相渡、金場ニ而砂金取揚申候。

附り、一番洗之者共数年相勤、たばニ体等迄ニ板取仕事見習申人々、手職次第給銀等相増、金場板取ニ取揚申候。

一、一番根粉洗ニ而金気取揚申候跡、二番根粉場小屋根粉洗之者共ゟ右ニ而砂相渡、洗し返し、是以十日分籠桶ゟ入置、前條之通板取共ゟ相渡、金場ニ而砂金取揚申候。

附り、二番根粉洗之者共多分扶持米迄ニ而召仕申候。夫ニ付数年勤方宜仕事入情之人々、給銀少々相増、二番根粉洗場ゟ取揚申候。且又右無給銀ニ仕、人々砂金出来高之内二割ニ相当ニ御引替銀、給銀代ニしニ相渡来申候。

一、二番根粉場ニ而金気取揚申跡之ニ而砂、御国外自分稼三番小屋ゟ相渡、揺子板取等妻子躰之者共、自分ニ又々洗返し銭相稼申候。右小屋諸道具相渡、木支根粉場之通、一番洗に而金場仕揚之上、砂金目形相改請取、灰吹金懸目形、九双替ニ相極置、只今迄者御引替銀御渡被次第、役人共ゟ相渡来申候。

一、三番小屋ニ而金気取揚申跡之ニ而砂等、渡世仕之者共ゟ相渡、右臼挽又者洗返し等、人々了簡次第銭相稼申候。右渡世仕之者共、小屋・諸道具共自分ニ相仕立、其上ニ而砂三番迄

流返し申跡之こみ砂故、至而金氣薄く、夫故臼挽等造用多、旁十三双替を以前條之通買上、御引替銀御渡次第相渡來申候。

一、右砂金時々灰吹仕、唯今迄者先五百二匁五分宛取揃上納仕申候。是以後之所、一ヶ月切灰吹仕致上納申儀に御座候得者、何百何十何匁何分与、月々灰吹又者寄吹等仕指上申趣に御座候哉、乃至何百目与仕、何匁何分之分月越に仕、勿論右上納目錄に灰吹金過不足目形等書記指上置、月迭りを以何百目与として指上候樣可被仰付候哉、此儀被仰渡次第相心得申度奉窺候。

一、不動山之内鉛出方之儀、猶更僉議仕、大鋪又は新に鋑先等詮議仕可申候。銅山之儀何茂休山仕置候間、只今に而者掘子も人少に相成行屆兼申候に付、猶更追々掘子等相增、夫々詮議仕、時々御窺申上、都而稼方無油斷相心掛可申候。

一、今般被仰渡候藥石・繪具類等之儀、只今迄者本文稼方而已に而、鋪內より掘捨申、土石共引捨申候得共、是以後之儀一兩人主附相立詮議爲仕、夫々差圖仕、御本速之通貫目相改帳面に記、時々御伺申上、御指圖次第仕可申候。且製法之儀茂、隨分詮議仕度御座候得共、掘子躰之者共江申渡置候而茂行屆不申、第一本文仕事手支に相成可申に付、右主附人之儀被仰渡次第相心得申度奉窺候。

一、小屋〳〵普請方、并舗内留木垣竹等諸事買上物吟味役、助八申付置、時々入用品を爾小屋番杜九右衛門・清七等立會、直段付・品物善悪精議詮議為仕為買上來申候。

一、全躰難成仕事故、十日仕廻之山法、先様日十日目毎仕事重ニ相改、十一日目休日仕、其外毎月山神祭并五節句祝日等休日御座候所、山人之儀外聞及無之故、百姓家等ニ立入候得者、自ら仕事手支に及相成、其上大勢之儀御座候得者、若於村方申分抔出来仕候而者如何敷、全山稼方之者共者、休日等之間稽古ニ名附寄所極置、右小屋之外村方并近在百姓家ニ入込不申、野山ニ罷出候而茂農業等指障申者共之儀、下山為致可申山法申渡、且又百姓分之儀者、右稽古小屋ニ入込申間敷旨嚴重申渡、締方仕置申處、其後自他國寄人多御座候得共、随分是迄申分ヶ間敷儀一向無御座。別而近年博奕御締方最重被仰渡之儀に御座候。併諸國からの山所ニ而者博奕杯之事、先者御見通被成候山に御座候所、右躰之儀者不及申上、小松表ニ夜行仕候得者、自然寺稼方等閑に罷成申に付、幸山神宮祭禮等之類から山職人共打寄、神子三番三仕、夫より淨瑠璃・狂言様之事に而相祝申候。依之祝日休日初、仕事仕廻より右小屋ニ相集り、仕組狂言稽古仕來申候。勿論博奕初め一躰悪敷之分堅く締仕、横目等茂付置、其代りに者遊藝等之儀者無構指免置申候。尤稽古小屋之内申分或者長嘯等仕、翌日仕事に指障申儀抔無之様申渡、仲五郎・清兵衛・八兵衛・右三人ニ締方主附申付置候。

一、今般御手前山之御振合を以、前段之趣被爲仰付候上者、拝方人多罷成申に付、追々人家茂彌增可申与奉存候。然上者諸商賣方連々出來之上、都而十歩一御役銀取立可申旨、奉得其意候。此儀諸國山法等之振合承合、則安永元年開山以後、折々愚案帳面等ヶ條を以御覽申上置候趣意に御座候得者、聊以油斷仕不申候。併未人家茂少分に御座候得共、指當り此度被仰渡之趣を以、御役銀等心付申儀御座候間、別冊を以御覽申上候。

一、稼方惣用御入用銀御渡被下候に付、買上物代等其時々御渡可被成候。依而掘子給銀日雇賃等之儀、三十日切毎月繰々跡御渡に可被仰付旨奉承知候。則前々より、一ヶ月切月送りを以諸事拂方勘定仕相渡申候間、其月切渡方銀高精誠相しらべ、御入用銀奉願、毎月二日御役所に而御渡被下候樣仕度奉存候。

附り、去秋迄之儀者銀主中金場番徒九右衛門・彦四郎立會、諸拂仕候得共、右銀主中及斷申に付、去暮より勘定方見届人庄兵衛・喜兵衛申渡、九右衛門等兩人に立會、夫々勘定仕、諸事拂方爲見届申候。

一、金山惣職人共之内相煩申時分、他国者等大勢之儀に御座候故、若急病等在之候而茂、元來山入に而、小松等に醫師中申遣候而者急点に合不申、其上他國者多、一家等茂無御座者共に而、遠方より醫師抔相招申儀茂不得仕、彼是指支申に付、小松出生岡本春庵与申醫師、少

々之扶持方を以召抱置、右様養爲仕申候。

附ゝ、山神宮守護人者、小松五穀寺最初より相賴置申に付、春秋祭禮等之時分登山之上、

右山神宮四つ留番繕仕候得共、遠方故平日宮守無之、當時者右春塲迄帶爲仕置申候。

右今般不爲山御手當山之振を以、於春塲兵臨鍛等職主附就被爲成候、山法御臨方等之儀私主附被仰渡候期、前々ゟ懸案心付之趣帳面等を以御達申上置候得共、今般御紙面を以委細被仰渡之趣奉畏、則是以後御山法御臨方等之趣、任被仰渡帳面に記奉差候、右條々御聞屆之上、御掛札又者御觸書を以成共御入御渡被爲下候樣奉願上候、此外相洩申儀者、追々御達可奉申上候、以上。

天明八年申二月　　金山主附　澤村源次

水原五左衛門殿

右帳面金山主附於當場兵臨ゟ相達候處、御聞屆相濟候由に而、村札印章在之、帳者返被相渡候條、自今右之通可被相心得候、以上。

申三月　　水原五左衛門

澤村源次

三月六日。前田治脩金澤を發して江戸に向ふ。

〔政隣記〕

三月六日快天之所巳之刻より陰、折々微雨、夜雨降續。自分儀今朝六時前出宅、御城へ御供に相揃。但六時過御供揃也。五時過御發駕、年寄衆等前々之通被罷出、敎千代樣御式臺階下迄御送、今日御近習騎馬本役御使番久能吉太夫・御大小將御番頭自分・御横目由比陸太夫、御玄關前より歩御供仕、河北御門之外より夫々騎馬所へ乘入、津幡御中休迄御供仕候事。

但、津幡御中休より御近習騎馬御歩頭河地才記・御横目前田甚八郎代合、此後繰々半日宛勤之。附、今一人御表より加り人御臺所奉行富田勝右衛門、才記は明日より繰々勤之。御發駕・御着府は本役御近習頭より勤之。自分儀者一人役に付、御發駕・御着府・城下・御關所迄騎馬、其外欠成与先達而被仰渡有之。

一、御先御筒支配久世平助大組頭、御弓支配團多太夫御先手、御長柄支配村爲大御表小將。

一、御馬に而御發駕之所、津幡少手前より御駕籠に被爲召、御小休は森下・倶利伽羅・今石動・福岡、夜五時前高岡御着之事。

三月十八日。前田治脩江戸に着す。

〔政隣記〕

三月十八日辰之刻より微雨、巳刻より霽晴朗夜。今曉七時前御發駕、蕨御中休、御下邸御立寄。四時過追分口御門より奥之口通御着殿。自分蕨より本役騎馬所御供に而參着、旅裝束之

發駕は浦和なり

儘御家老衆席へ出恐悅申述、一先御小屋へ退支度、追付出、夜四時過御小屋へ歸。
一、御着後御老中方御廻勤、御供同役田邊長左衛門罷出候事。
一、今日御待受之御客衆等并御使者御料理出候儀等、都而前々之通に付記略。

三月廿八日。德川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞せしむ。

〔政隣記〕

三月廿八日、今度就御參勤、上使御老中牧野備後守殿、九時過御出、於御大書院御懇之上意御拜領、於御小書院御饗應、萬端御前例之通被爲濟候。御當番御目付衆より、御小人目付を以爲御知申來候上、一統熨斗目・上下着用、上使御退出後押付御供揃に而御老中方御勤、御供自分罷出候事。

四月朔日。町廻の大小將等、その職務執行に關し上申す。

〔政隣記〕

四月朔日於金澤、御大小將町廻二番組當番左之五人、於廻先寺西九左衛門寺懸合一件に付、御小將頭御用番堀小平太へ被指出候紙面左之通。

今朔日私共町廻當番之處、廻先大手前於御城端、駕籠致乘用候者罷越候に付、足輕共町廻之旨申入候處、行成駕籠之戸少々明ケ、私共見分不仕内直に閉罷通候に付、人躰も見受不申、

改方指支候。元來町廻之儀は、重き御定茂有之儀。乘用仕候者にも不限、人躰顯不申者は、都而急度相改申候。前々より駕籠致乘用候者も、町廻与見受候得ば、彼方より下乘有之候。尤私共より下乘之儀申入候に而は無之候得共、重き御縮方に付、依時宜候得ば駕籠より出し改申儀も有之候。乍然駕籠を居戸を明け作法能扣罷在、人躰も得与分り、改方に指支候儀も無之候得ば、無構相通申候。然所今般右於御城端出合候者之儀は其儀無之、前段に相調候族に而、駕籠を早め罷通候に付、不案内にも有之候哉与、駕籠指留候樣足輕を以申入候得共不致承知、難心得に付再往足輕を以申遣候處、一向不致承知、步之者迄も駕籠へ懸り、彌駕籠早め候に付難心得、私共立歸、直に懸合可申候間駕籠下し候樣重而申入候處、下乘も無之不及應答に茂候に付、足輕共へ申入、幾重にも駕籠指留め候樣申入候得共、大勢駕籠へ懸り、彼是混雜仕候內、無理に寺西九左衛門內へ入、甚不埒至極之致方に付、無是非私共右玄關迄罷越見受候處、九左衛門に而御座候に付、私共申入候は、町廻御縮方之儀前々重き御定も有之候處、甚不作法之致方、町廻御用儀に附申入候處聞入無之、如何相心得候哉、甚不屆与存候段申入候處、九左衛門儀は、前々より駕籠致乘用候共下乘不致候格合与申聞候に付、九左衛門に限り左樣之趣一圓合點不參に付、段々相糺候處、自分切左樣相心得居申旨。其上兼而身當り組頭より、下乘等仕候樣申談も無之旨申聞候に付、最前出合町廻之段申入候節、御作

法も不存發方不作法之儀は不案内ヶ申に付て、御用之儀懸合可申間混亂下し候樣申入候に下乘不仕、大勢混亂へ懸り無理に門內へ入候處、重々羅心得奉存候段申入候得ば、九左衛門よりも身當り組頭へ相達、追而可及詮議旨申聞候間、勝手次第可相達旨申入、尤私共よりも夫々可相達旨申入置候、已來ヶ樣不屆成儀有之候而ニ、第一御館方も不相立儀に御座候間、急度夫々被仰達候樣仕度奉存候、以上

四月朔日

野村順九郎 判　高田昌太夫 判
齋藤忠太夫 判　宮川只右衛門 判
高田牛之助 判

堤 平馬樣

十月廿二日御小將頭御用番大屋武右衛門殿宅、左之人々ゟ左之紙面を以申達有之、高田牛之助ニ在江戸に付、於彼地多田逸角申達之

野村順九郎　高田昌太夫
齋藤忠太夫　宮川只右衛門
高田牛之助

各儀、四月朔日町廻之節、尾坂之下に而寺西九左衛門へ被出合候處、九左衛門下乘等も無之、

彼是被取合候趣意、其御紙面も被指出、委曲奉達御聽候處、畢竟勤方之筋違失之躰被思召候。子細は怪敷品有之候はゞ、誰々不依急度可相咎儀勿論に候得共、九左衛門儀分限相應之行粧に而罷通候事に候得ば、敢而怪敷可存謂れも有之間敷、駕籠之戸開不申儀を怪敷被存被相咎候儀に候得ば、心得違に而候。町廻之人々は誰々に而も出合候節、是非駕籠之戸開又は下乘可有之御定も無之事に候得ば、强而此儀を於途中騷ヶ敷相咎可被申儀に而も無之候。御縮方嚴重に被相心得候儀は尤に候得共、咎申間敷儀を被咎候而は役筋致相違、且はがさつにも相見得、御縮方却而輕々敷成行候。此處甚以心得可有事に候間、以來無油斷勘辨有之、尤歷々之面々にても怪敷品有之候得ば、急度可被相咎儀。專御定書之大意嚴重被相心得候樣可申渡旨、以御書立拙者共ゟ被仰出之趣有之候條、猶以勤方心得等以來能々勘辨有之可被相勤候事。

戊申十月

四月朔日。前田治脩柳營に登り參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

四月朔日朝六時不遲御供揃に而、同刻過御登城。御下り御老中方御勤、御用番に而者御立歸、積御禮被仰述、四時過御歸殿。御供自分罷出。今日御客等多御間ヶ敷に付、暫御小屋に而休

是之上御殿へ罷出。且左之通於御廉、頭分以上へ土佐守殿御演達、拜領之一巣而於竹之間御暇ニ付、爲其申上候事。

當廿八日上使牧野備後守殿を以被蒙上意、今日御參勤御禮於御黑書院被仰上、御鷹之被爲蒙上意、土佐守・綠部御目見被仰付、重疊難有被思召候。此段何茂可申聞旨御意に候。

〔續徳川實紀〕

四月朔日、月次拜賀例のごとし。松平加賀守治脩參覲す。

四月三日。本日より金澤城橋爪門續の櫓臺を修繕するを以て通行を禁ず。

〔天明八年御觸并御返書留〕

別紙之趣夫々可申談旨、御城代又兵衞殿被仰聞候條、御承知被成、御同席御傳達可被成候、以上。

三月廿五日　　御横目

人持衆中

付札、御横目より

橋爪御門續御櫓臺御石垣御普請有之候に付、來月三日より往來指留候間、二之御丸へ罷出候人々、鶴之丸通埋御門より往來之筈に候條、此段夫々不相洩樣可被申談候事。

但、三之御丸御番所左右入口より、供之人數二之御丸之通召連可申事。

三月廿四日

四月六日。富山侯前田利謙本郷邸に前田治脩を訪ふ。

［政隣記］

四月六日出雲守樣始而御對顏之御振に而御招請。從御表式臺より御出、物頭二人敷付へ出、一先御定席へ御誘引仕、御茶等御大小將出之。無程御近習頭松原元右衛門罷出、御居間書院ニ御誘引仕、御對顏之上二汁六菜御料理等。御相伴齋藤三六殿。且御盃事も相濟、御定席へ被爲入、御客方組頭多田逸角へ御禮之御口上被仰述、表御式臺より御歸。其節逸角御先立仕。但從大御門外御立戻、其節敷付へ久世平助罷出、御定席へ御誘引仕候處、同人に御禮之御口上被仰述、裏御式臺より御退出之事。

右攜候頭分幷御給事御小將布上下着用、其外者何も常服。將又今朝以御使者鯛一折、御目錄副被上之。尤御受納之事。

四月七日。前田治脩、會津藩邸に保科容詮夫人頴姬を訪ふ。

［政隣記］

四月七日五半時御供揃に而四時前御出。增上寺惣御靈屋御參詣、方丈御勤、池德院御立寄暫

胞衣儀式に參會の子供ら役所の侍と大人の居る所

御休息、增上寺門前より御馬上に而之御廣式へ被爲入、夜九時過御歸殿。但於右御廣式御步以上壹御膳・御酒・御肴、夜にえ御湯漬被下之。三二十人小頭以下ゟ壹御膳、夜御湯漬被下之。

一、御庭拜見被仰付、大概左之通。

富士見御亭等五ヶ所、并御馬場・御馬見所、御物見二ヶ所、（内一ヶ所は濱之御物見と云、若年より見え、御舍壁錦に備る。）小山數ヶ所、大森燈數十株、景所十二ヶ所、（皆一景宛有名題之札立。）洲崎に杜若・河骨等多く、島數ヶ所、外海より潮之指引有之、洞邊々に而有之。鯉・鮒・鯔・鯔・沙魚等夥數（其外雜魚多く有之。）。館舘一覽、其外箭打射等數十ヶ有。委曲ニ記錄不能、筆未竟事。

四月十一日。此夜天象に異變を見る。

〔文獻雜日記〕

一、天明八年四月十一日夜六半時頃ひから物出る。京都・江戸皆同刻限なりと云。其之異變也。公儀天文方吉田靱負殿考左之通。

天狗狀。如大奔星。色黃有聲。其止地類狗。所墜望之如火光。炎炎冲天。上鋭下圓。如數頃田處。謂之天狗星。或赤氣如血。從上墜下。或從濁升于中天者天狗也。或曰。有如火流星。從濁升上。即落或往步時。或歸到而墜者天狗也。或曰。有如大流星。赤色光照地。行六七丈。尊而落者天狗也。

李淳風曰。天狗出入濁閒。不出入列星。墜地者天狗。不墜地者流星也。天狗者五星之氣。出西南。金火氣合而爲天狗。見則兵起。大戰。天下饑。人相食。天狗所下。必有大戰。破軍殺將。伏尸流血。天狗下食之。不出三年。所下之國當之。天狗下則四方相射。其君失道兵大起。國易政。戒守禦。

四月十七日、前田治脩。徳川家齊の紅葉山參詣に豫參す。

〔三守御譜〕

四月十七日紅葉山御豫參あり。此後御豫參下見當。寛政四年には四月朔日御參府の御禮前御上。此時留不見え、猶可考。其餘は四月十七日御在府にても、或は曠發御出もなり。されば決して、なし、安永二年より以上三度なり。此御豫參は御直重なり。

〔政隣記〕

四月十七日六時前御供揃、御裝束御狩衣に而同刻過御出、紅葉山へ御豫參。自分御供、且御步小頭以上熨斗目、新番等縮紗・袷上下、御手廻御中間・御傘持等白丁着用。組頭・聞番・御使番・御表小將・御先詰之分布衣着用。御下乘所坂下御門之外。橋爪外之方御下り之節、御乘用ニ橋之内御門際也。四時頃御歸館。

但、御乘用之道殊之外込合、御先供新番之内脇指鞘共拔落、早速拾ひ取帶し候得共、追而誰ニ候哉不相知。自分懷中之煙草管押折候族也。

未行云々本のまゝ

五月四日。十村等改作奉行の諮問に答へ、桑栽培の非なることを上申す。

〔岡部舊記〕

御郡之野毛・空地等、桑苗植被仰付差支候趣意之儀、詮議仕委細申上候様被仰渡、奉存其意候。平里之分は田畦・畑畔成は田畑に相成不申稍十場等、少々空地御座候而も夫々用向之無地に而、桑苗植仕候而は村々支相成申候。山方幷川筋流路之分にも、草付等之分も山役・野役相立申所は猶更に御座候。併野山之内桂畠相立申所之役銀御指除、桑開被仰付候儀は格別に奉存候得共、於村方には草苅場等桑開に相成候而は、縦令於村々厳付相減申に付、不勝手之筋に御座候。

一、前々より者百姓、永々業に改作方を違に申者多、近年別而諸物等高直に相成、耕作方餘分相劣候故歟、渡世ニも仕宜、商に取組申者町方の羅出、自然と農人不足仕、乃至一人八反計も作り申者、一町茂作申様に相成、村々によし組懸り・五ヶ村懸に仕、我改作候様に成行、並手入油斷不仕儀に御座候得共、行届兼申候。假令町・在に混在候改作之間に合不申者も、桑苗植被仰付候而も農人に入交り候而は、當時之世風利方而已に心を用ひ、色々存付候儀も可奉行難仕、却而害に成申事も難不申、一躰不宜風俗にも押移可申哉之、御郡々において御扶持人十村詮議仕候村、小紙を以申上候、以上。

申五月四日　　　　　　　　　　澤村源次等

　　御改作御奉行所　　　　　　　諸郡連名

五月十一日。物價高直なるを以て江戸詰の諸士に扶持方代を繰り上げ貸與す。

〔政隣記〕

五月十一日諸物高直、詰人一統難澁に付、六月渡御扶持方代之內、一ヶ月分程繰上御貸渡之旨、今日土佐守殿被仰渡、則十五日印章小札を以、會所小拂所へ家來指出受取之。金高別記す。且同月廿八日、右之分六月渡御扶持方に而被遂指引筈に候得共、夫に而者一統可爲難澁候間、六月・九月・十二月三度に一歩宛返上仕旨、土佐守殿被仰渡。但一人扶持に三步宛御貸渡に付、一人扶持に而一歩宛三度に返上也。

五月廿三日。丁銀の通用を圓滑にすべき幕府の令を傳ふ。

〔政隣記〕

五月廿四日於金澤。

付札、大目付江

此度二朱判吹方指止、丁銀吹方被仰付、勿論二朱判永代通用之積被仰出候。將又諸直段正路ニ相守、最下直ニ候樣、江戸・京・大坂町々江相觸候。且只今迄、遠國等ニ而ハ二朱判通用不致場所も有之哉ニ相聞候。以來永代通用之事ニ候得ハ、少しも無指支樣可致通用候。右之趣御料者御代官、私領ハ領主・地頭より、并寺社領共不洩樣可被相觸候。

四月

松平越中守殿御渡候御書付寫一通、相達之候間、被得其意、寄之儀ハ山田肥後守方へ可被申聞候、以上。

四月廿四日　　大目付

御名殿　留守居中

本文於金澤、今月廿三日安房守殿・大隅守殿より御觸有之。

六月二日、前田綱紀の子久丸の百回忌を寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

六月於金澤御用番被仰渡候旨ニ而、前月□日御横目廻狀出。

性容院樣百回御忌御茶湯、今月二日一朝於寶圓寺御執行。右ニ付御寺近之外者普請・鳴物不

及遠慮候事。

六月九日。金澤に地震あり。

〔政隣記〕

六月九日暮より翌十日曉迄に金澤地震六度有之。併不强、大損所無之。

六月十二日。前田重教の三回忌法會を江戸廣德寺及び金澤寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

五月廿三日、來月十二日於廣德寺、泰雲院樣御三回忌に付御茶湯御執行、依之十日より十二日迄普請・鳴物遠慮、且拜禮之儀等前々之通觸有之。於金澤も右御法事觸、都而去年御一周忌之節御同事。

〔政隣記〕

六月十二日、昨今於金澤寶圓寺泰雲院樣三回御忌御法事御執行。御奉行長大隅守。敎千代樣今十二日御參詣。

右諸事、去年五月ヘ御取越御一周忌御法事御執行之節同斷に付記略す。

同日於江戸廣德寺も御茶湯御執行、御寺詰前田土佐守殿、組頭多田逸角、御横目由比陸太夫。御香奠員許等御大小將四人。其外前々御茶湯之節同斷。且六年時御供揃に而御參詣、讀經等

御出開、四時頃御歸館。御席御平生室之に付、增上寺へ御祥月之御參詣無御座候事。

附、晝後自分廣德寺へ參拜罷越。

六月十三日。金澤城橋爪門櫓臺の修理成るを以て通行を許す。

〔天明八年御觸并御觸返書留〕

別紙之趣夫々可申談旨、御城代安房守殿被仰聞候條、御承知被成、御同席御傳達可被成候、以上。

六月五日

人持衆中

付札、御横目江

橋爪御門臺御精奉御石垣御修覆出來に付、當十三日より橋爪御門往來之筈に候條、此段不相洩樣夫々可被申談候事。

但、右御櫓御普請中、御門內外足代等有之候よし候條、往來之人々指障不申樣、家來末々迄可申渡候。

六月四日

六月十八日。金澤城內の泊番大小將森久五郎の脇指等前夜盜難に罹る。

六月十八日、昨夜泊番取次御大小將森久五郎儀、今曉七時頃目覺厠へ罷越、無程罷歸、枕元に如最前脇指・鼻紙袋等指置、重而眠休、朝六時過起候處、右脇指・鼻紙紛失之躰に而無之に付、段々穿鑿有之候得共、彌無之に付、同廿日届書付出之候事。

但、右脇指者銘備州住三原正盛、鼻紙袋之内二朱判二ツ・印判等品々。

右に付同月廿六日東御門續饗應所へ、御横目前田甚八郎・由比陸太夫出座、久五郎若黨德山早太、相泊中孫十郎若黨長田市右衞門兩人共、十八日早朝髮爲撫付等用、御殿へ罷越候者に付、呼出吟味之上、早太儀は無構旨。市右衞門儀は申分不明に付、主人孫十郎へ御預之事。

但、於御館之紛失に付、本文之通御横目御吟味被仰付、且朝五時過より御吟味に取懸り、廿七日朝六時過相濟候事。

右一件、表向御吟味就被仰渡候、七月四日朝五時より、割場吟味所へ御先手園多太夫・御横目由比陸太夫出座、早太・市右衞門呼出吟味之上、早太儀は無構暮頃相返、市右衞門儀は疑敷、牢揚屋に被入置、夜四時前相濟候事。

但、御先手兩人出座之御格に候得共、御先手岡田友左衞門就病氣、多太夫一人出座之事。

同月廿六日多太夫・陸太夫右同所へ出座、再吟味之處、右市右衞門盜取候段及白狀、脇指者

樋上下ニ而金二歩ニ賣拂、右紙袋ニ御小屋前井戸へ沈メ候旨申出。依之同日より禁牢。

六月、領內の御扶持人十村等待遇の改善に關して要求す。

〔眞館諸書物留〕

一、慶長九年御郡奉行御取立、微妙院様御代御郡方為御締、私共先祖御扶持高被下、御時服并御馬御馬具等品々拜領。續被下候人々は、村還之爲指引申旨被仰出、今以由緒帳に書上候者も御座候。且御改作方被召出、御改作方御用等重く家御立、御印物等頂戴仕、并而御目見之節御紹頭御絹傳に而被仰付、御料理被下候節者、今以是程給仕被仰付。尤私共御扶持之儀も、町人等に被下候御扶持方与違、御印物被成下、且去時上も知御代官へ附渡、彼是結構に被仰付、難有大切之極之儀に付、末々迄冥加を難有奉仕。御郡方取捨仕儀に御座候。夫に村次第に時代も相おくれ、私共役品相劣申候。御先代様之節御役列之趣に御意御座候由、猶さ留にも有之。他國御用等相勤候砌は、別而御引上け被下候儀も御座候。當時は人氣も敷者多、設に御郡方より御城下等は百姓之二・三男等奉公に罷出候者共、在所に居申内申分等有之、十村見到之上壽着申渡候者共、自分之非義をも不顧、却而含意恨、無實之惡評等申為、一向遠慮氣遣も不仕。無言者成事共も御座候得共、一人々々之詮議も難仕、村方迄其風押移、御縮方立兼申儀も御座候間、已來御扶持人并十村之分何扁与敷組柄迄及御極被下、尤是迄村名迄

に而何村誰与相唱來候得共、同村之同名之者も有之、旁村名迄に而は唱難相分、不分明成物に御座候間、以後何村何之誰与苗字相唱候様被仰付可被下候。只今迄之振に而は、畢竟取治之所於私無覺束奉存候。

一、私共三州之内往來之砌、宿々人馬近年に商人荷物同事に相心得、過分之駄賃を貪り、往來爲指支候。人足之儀、自郡は指出候得ども、他支配幷他郡之内には難指出等申候而、甚指支申候。既享保十一年私共御用に付、他郡等に通行仕候節、御扶持方路銀等之儀被達御聽候上、御席より御算用場に御書立之趣も御座候間、御定駄賃を以無滯指出候様、宿々問屋等に急度被仰渡可被下候。

右之趣、私共身分之儀申立候様にも可有御座与、是迄申上兼候得ども、役品之儀は私不成趣、畢竟御締方に拘申儀に御座候間、別紙を以申上候。何分御勘考被下候様奉願上候、以上。

申六月　　澤村源次

其外諸郡御扶持人連名

御改作御奉行所

右之通連名に而御扣共二通宛、諸郡々御郡奉行所に上る。

七月十三日。江戸詰人に再び扶持方代を繰上げ貸與す。

奧泉幸助は前田重靖の生母善良院の弟なるを以て召出されたるもの

〔政隣記〕

七月十三日諸人一統諸物高直に而難儀に付、九月渡御扶持方代之内、一人扶持に金三歩宛縦上御貸渡之段、一昨日被仰渡有之。今日例之通印章小札を以會所小拂所へ使者指出受取之。

七月十五日。金澤針屋町に火災あり。

〔政隣記〕

七月十五日夜五時、金澤神明後針屋町より出火、廿六軒燒失、年寄衆等登城有之。

八月十六日。御馬廻組奧泉幸助等亂行を以て處罰せらる。

〔政隣記〕

八月十六日於金澤、左之通被仰付。

付札、青木與左衛門に

定番御馬廻　唯今迄十人扶持也　奧泉幸助

幸助儀、當二月十九日於山岸十左衛門宅亂行之致方、侍に不似合儀體之義躰に被思召候。諸士慣之儀、近年より度數被仰出候。就中幸助儀不行狀に付久々御咎被仰付置、御免被成候而、未年月も立不申内、右躰之族別而不屆至極に被思召候。急度可被仰付候得共、思召有之御宥免、五人扶持被下、永々一類へ御預被成候旨被仰出候條、可被申渡候事。

八月十六日

右に付寶兒石川太郎左衛門方へ引取。

付札、青木與左衛門に

加藤與兵衛　大村直記
杉岡爲五郎　脇本乙次郎

右四人共、當二月十九日於由岸十左衛門宅亂行之致形、侍に不似合微隨之爲躰に被思召候。諸士愼之儀に付、近年も嚴敷被仰出候處、沙汰之限に被思召候。依之閉門被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

八月十六日

八月十六日。京都の桂姫、本郷邸を訪ふ。

〔政隣記〕

八月十六日晝御廣式へ桂姫十三歲參上、御饗應有之。――依而爲介副先桂姫隱居母も參上、三十歲之由。兩人共美質与云々。右桂姫は神功皇后異國御退治御途出之節、御兜を本爲召候桂姫之子孫に而、京都に居住、尤女主に而、代々地方五百石を領し、公邊就御代替出府。依之前格之通御三家様・此方様へ參上、供廻行粧數多、薙刀等爲持之、勿論乘物に而參上。於

此方様御會釋宜、給仕御中通勤之。且代々女主に付男を召仕ひ、懐孕出生之上女子に候得ば跡を譲り、嫡子に立之、男子に候得ば他人養子に遣すと云々。

寛政元年二月十日の條參照

九月十日。馬廻組沖辰右衛門、石川郡粟ヶ崎に至り暴かに死す。

〔政隣記〕

九月十日御馬廻組頭二百五十石沖辰右衛門儀、粟ヶ崎に爲行歩罷越、於途中頓出氣當に而歸宅之處に付、色々風說共有之。頭武田喜左衛門末期御禮爲請、右辰右衛門宅に罷越候所、様子有之に付退出、相頭江守小馬同道帶而右宅に罷越、御禮受之。且家來共口上書も取受之。

附、本文武田等謂候得共、退而承候處頭者江守に候得共、同人氣滯役引に付、相頭武田爲御禮請疾參、于時世上風說も區々有之、其上武田より申聞之趣も有之に付、江守押而出勤、本文之通罷越。且辰右衛門月代之内摺疵躰、并脇上に青く打付躰之疵有之。是卒中風に而倒に候節、自身に傷の候歟すと云々。世上に者相手有之彼是殺候与風說有之。

一、沖辰右衛門一類中より取立有之紙面左之通。

沖辰右衛門儀、當月十日粟ヶ崎へ養生に罷越、於彼地同夜暁頃頓出、翌十一日晝八時頃駕籠に而罷歸候段、小森真右衛門方へ及案内候に付、卽刻真右衛門罷越、辰右衛門様子見受候處、病氣之躰に、其上言語調不申候に付、追々御醫師等申遣、無油斷療養相加申候。頓出之様子等、

召連候家來伊藤彌太夫、幷粟ヶ崎宿主相川屋又助呼出委曲相尋、尤口書取立置申儀等、先達而御屆置申通に御座候。段々病氣指重り、御醫師等相招、轉藥も仕候得共、大切に罷成候に付、昨十五日喜左衛門殿御見廻、末期御禮申上候。然處昨夕世上風聞之趣も御聞被成、辰右衛門儀於粟ヶ崎相手有之旣付候樣成取沙汰御聞被成、先達而喜左衛門殿御見受被成候處、左樣成疑敷旣之樣子者無之候得共、乍世評不輕儀に付、重而今夕平馬殿にも御出御見分、喜左衛門殿にも御出御再見分被成候。猶更先達而御醫師中療養之次第、藥劑等之儀ゝ重而御尋、私共手前ゝ再往御尋被成承知仕候。先達而も御達申候通、聊疑敷儀無御座候。併猶又今日被御聞候儀に付、行歩先召連候家來彌太夫手前、幷相川屋又助儀も呼出し、再往精誠遂僉議候處、兩人共口書之通少ゝ相違不仕旨申聞候。家來彌太夫手前は、各樣にも御呼出御聞請被成候通、於彼地少も口論ヶ間敷儀無之旨申聞候。則兩人之口書兩通御達申候。乍世評不輕儀に付、各樣にゝ難被成御聞捨、段々被入御念御尋之儀に付、彌太夫・又助手前ゝ打返種々遂吟味候處、聊疑敷儀ゝ無之候に付、私共儀ゝ存寄之儀ゝ無御座候に付、重而以紙面御達申上候、以上。

申九月十六日

安井左太夫　　高崎平左衛門

三浦重右衛門　　西村善左衛門

明石源太夫　櫻井金兵衛
小森貞右衛門

江守平馬様
武田喜左衛門様

九月十八日。當年本納遺所米の半額を御召米とすべきことを命ず。

〔御觸幷御返書留〕

御家中人持組より以下、當本納遺所米之内半分御召米被仰付候。依而上米高組切に帳面に相調、切手より一紙に當廿二日より同廿七日迄之内、偶日奇日共御召米所江可被指出候。則案帳一冊幷切手案文共相達之申候。且替地米之人々も、本納當之内半分可指上候。

一、米高石詰に而可指上候。直段之儀者追而可申談候。且又差上候儀望に無之人々は、外賣之儀勝手次第候。指上米高之内少々不足有之候而も不指支、過米之儀者相成不申候。猶更賣上方之儀者、御召米方役所承合可被申候事。

右之趣一統申觸候付被成御承知、御組・御支配之面々江可被仰談候。尤御組等之内在詰有之面々江、其支配より不相洩樣可被仰談候。則案帳一冊幷切手案文共上之申候、以上。

九月十八日　佐藤勘兵衛

追啓、達磨等之八々者指除候事。

九月廿一日。切金・輕目金の通用方に關する幕令を傳ふ。

〔政隣記〕

九月廿一日左之寫に、本多安房殿・長大隅守殿以御添紙面御觸有之、尤御請御取立之事。

切金・輕目金通用方之儀、先年より數度相觸候處、上納金包方之節、後藤庄三郎方に而少々之疵金に彼是申候に付、おのづから兩替屋共其外に而も通用滯、或相對を以歩合等受取候に付、武家幷在・町共取遣指支之趣相聞候間、上納金包方彌前々之通相心得、通用可成分無指支包方可致旨、庄三郎へ申渡候間、世上通用無指滯筋に候條、兩替屋共其旨を存、前々之通堅相守、五歩迄之切金、四厘迄之輕目金歩判之儀も右に准じ、少々之輕目共無滯通用可致旨、尤形かけ損穴明候類は、五歩内之切疵、四厘内之輕目に而も、金座へ指出、定法之通直させ可申候。若通用可成分取遣指滯、又者歩合銀取候趣等於有之者、吟味之上急度咎可申付候。

右之趣安永七戊年相觸候處、又々切金・輕目金通用差滯候趣相聞候。彌安永七戊年相觸候通堅相守可申候。

右之通武家幷向々不相洩樣、御領者御代官、私領者領主・地頭より寺社領共可觸知者也。

右之趣可被相糺候。松平越中守殿御渡候御書付寫一通相達候。被得其意、寺之儀者大屋遠江守方へ可被申談候。以上。

八月十九日　　　　大　目　付

御名前　留守居中

天明七年十二月晦日の條參照

九月廿五日。大小將太田彌兵衞の弟吉岡吉太夫出奔す。

〔政隣記〕

九月廿九日御大小將組御馬奉行太田彌兵衞實弟吉岡吉太夫儀、彌兵衞方に致厄介罷在候處、今月廿五日湯涌へ罷越候由にて他行、直に不罷歸出奔之躰に付、彌兵衞在江戶故、代判小杉喜左衞門より斷書付出之。

九月廿七日。大聖寺侯前田利物江戸に於いて卒し未だ喪を發せず。

〔政隣記〕

九月廿一日先頃已來美濃守樣、御顏氣滯御癇持之御症にて御難澁之所、頃日餘程御指引有之、御奧表より御見舞使毎度被遣之、廿七日被遣之。廿七日夕方より御指引御不出來、（實者今廿七日夕御卒去、）（但御藥ハ御在國之節御用被成候御醫師有之、大岡氏孫御用之樣之訳也。）依之連日毎日御見廻使被遣之。御療醫に養安院（曲直瀨）法印也。十月に至候而者、此方樣御近詰御醫師を代々被遣之。

十月九日。諸士に御召米の代價を仕拂ふべきことを告ぐ。

〔天明八年御觸幷御返書留〕

別紙御算用場奉行紙面之寫相達候條、可被得其意候、以上。

十月九日　　長　大隅守

御名殿

御相組中殿

猶以受取切手調方等、御召米所承合可被申候、以上。

先達而相觸置候御召米代銀、當朔日より三日迄之内平均直段を以、一統人別に相渡候、當十七日四時より八時迄之内、印形之切手を以、御召米所ゟ受取罷出候様可被申渡候。且受取人指出候儀候者、勝手次第に候。ヶ所分け直段等之儀者、當十日より十五日迄之内、偶日・奇日共四時より九時迄之内、右役所承合可被申候。且又先達而請取置候御召米切手印形引合候間、請取之印形其心得可有之候。但、家來名前切手に主人奥書印形に而指出置候面々も、主人印形引合候而相渡候間、其心得可有之候。

右之趣一統申觸候に付、御承知被成、御組・御支配之面々ゟ可被仰談候。御組等之内裁許有之面々は、其支配ゟも不相洩様可被仰談候、以上。

十月九日

長大隅守様　　　江守半馬

[illegible]

十一月五日。大聖寺侯前田利物の卒去を發表す。

[政隣記]

十月十六日御在所大聖寺より、御家老野口兵部早打に而參着。于時十一月二日、段々被加養候得共不御宜旨公邊御届有之。翌三日七時頃御指重り之段御使者來候に付、急御供揃被仰出、前々之通御供人呼候に付、各奥口へ相渡候所、無程御出、美濃守様御邸へ被爲入、暫被成御座御歸殿。自分御供之所、御茶御試仕候様になど御役人申聞候に付御試仕。翌四日御跡目之儀備後守様御子勇之助様御願書、建部内匠頭殿の倉橋二右衛門殿御指出へ、御用番御老中へ御指出之處、無御滯御受取。同日暮頃最早被及御大切候段御使者來。依之物頭代々御附、（二種御料人に御代り合相勤、請取内一汁五菜・御酒・御吸物之御酒肴被出）使者相勤、翌日五日曉丑中剋御卒去、普請等鳴物遠慮、日數者追而可相觸旨從御横目所小屋觸有之。同夕方御横目中廻狀に而、普請・鳴物等、明後七日迄日數三日遠慮之段申來。

一、十一月六日八時御供揃に而、右御邸へ被爲入、暫被成御座御歸、同役御供相勤。

一、美濃守様御法號覺成院殿。

一、同十一日於廣徳寺御中陰御法事御執行、御代香御家老役津田修理殿、御香奠持參御使中孫十郎（御大小將）之事。

一、同十七日曉寅上刻御發棺、覺成院樣御遺骸御在所大聖寺へ御越に付、爲御附使者御先手團多太夫右御邸へ參上、御先手中川平膳爲警固此方樣御門前へ罷出。

一、俊姫樣より、美濃守樣御大切に付御見舞之早打御使、御馬廻組二御丸御廣式御用達井上太郎兵衞、十一月十二日金澤發之處、道中人足支等に而遅々、十八日晝江戸參着。翌十九日晝過早打に而罷歸候事。

十一月十二日。大聖寺侯前田利物卒去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

十一月十二日於金澤、美濃守樣去五日於江戸御卒去之儀、今日告來に付、諸殺生・普請・鳴物等今日より明後十四日迄三日遠慮之旨、御用番より御觸出。

十一月十七日。大聖寺侯前田利物の遺骸江戸を發す。

〔政隣記〕

十一月十七日曉寅上刻御發棺、覺成院樣御遺骸御在所大聖寺へ御越に付、爲御附御使者御先手團多太夫右御邸へ參上、御先手中川平膳爲警固此方御門前へ罷出。

十一月廿六日。廣島侯淺野重晟本郷邸を訪ふ。

〔政隣記〕

十一月廿六日、安藝守様今度御參勤後、今日五時御供揃御見廻䮕り之趣に而御出。敷付へ組頭・物頭四人罷出、組頭多田裏角御先立仕、御小書院へ御誘引仕、御對顔。御料理着先達而御膳に付、御餅菓子・御吸物・御酒。御重引者御前御持參、御意事有之。御茶請後御菓子等出之。御給事御表小將等勤之。九時前御退出。其節御式臺御杉戸外迄御前御送。御取持倉橋三左衛門等兼役ニ而御詰、土佐守等敷附迄被罷出、組頭等敷付際ニ罷在、其外前々之通。

一、右ハ今度御參勤後御見廻䮕り之趣に付、頭分以上幷御給事布上下着用、其外當服也。此儀區々致議有之、今日御客衆ニも申上、以後右之通相極候事。

十二月十日。金澤卯辰八幡宮燒失す。

〔政隣記〕

十二月十日夜九時頃、金澤卯辰八幡宮社內より燒出、燒失。

十二月十七日。馬廻組中川善五郎等金澤城內の勤番を懈るを以て處罰せらる。

〔政隣記〕

九月廿日金城土橋御門泊御番御馬廻組中川善五郎等五人、十月〔 〕日より先自分指扣被仰渡置候處、十二月十七日左之通被仰付。

御馬廻組頭二百石

遠嶋配所へ被遣候迄一類へ御預　中川善五郎

但、土橋御門泊番之節御番所を明、三之御丸御番所に罷越、大石彌三郎与咄合候趣、彼是不届之儀に付如斯被仰出。

閉門　笠間新左衛門

但、同断之節、善五郎儀御番所を明け他番所へ罷越候節、可指留所、其儀無之に付如此被仰出。

逼塞　大石彌三郎

但、三之御丸泊番之節、中川善五郎逢に罷越致對話候趣等、彼是不届に付如此被仰出。

遠慮　大河原助丞

高山才記

但、同断之節、善五郎儀彌三郎へ逢に參候節、心付候趣に申入候由に候得共、翌日頭等へ

本年七月十三日の條參照

し不相濟、不都合不少之趣に付如斯被仰出。

十二月十七日。物價高直なるを以て江戸詰の諸士に扶持方代銀を割増貸與す。

〔政隣記〕

十二月十七日、春來諸物高直に而諸人一統難澁に付、銀四十五匁宛被下之。當七月十五日より一人扶持に二分八厘計之割増に候間、追々今右之者右割合を以當春被下之候段、今日前田土佐守殿被仰渡有之。

十二月廿一日。猪を捕へたるものに褒美米を給することを告ぐ。

〔觸井奧記〕

尚々耳迄に而、尾は爲出之におよび不申候。尤一疋分二つ宛。

近年猪多相成田畑荒及候由及承候。依而安永年中御仕法之趣を以、御算用場え相達候處、頭之通御川番御年寄衆聞届相濟候條、是以後猪狩捕候はゞ、一疋に米一斗宛爲御褒美被下候條、狩捕次第爲檢耳を爲持出、夫々福者共え可相達候。尤猪大小に不依狩捕候得者、右之通被下候條、隨分出情狩捕候樣可申渡候、以上。

中十二月廿一日

奥村左大夫
金森彌二郎
松野多助
齋藤小左衛門

能州四郡十村中

十二月廿二日。徳川家齊、本郷邸の廣式に歳暮の祝儀を贈る。

〔政隣記〕

十二月廿二日朝、御廣式ゟ歳暮爲御祝儀、從公方樣上使御廣式番之頭岡本傳兵衛殿を以、如御例紅白縮緬二卷御拜領、上意拜聽寺川斧右衛門、紀州樣より之御附頭也。御請者大女﨟を以被仰上、二汁六菜御料理等出。御前にも御出御挨拶被遊、御都合能相濟。且右爲御禮御用番之御老中へ御勤可被遊候處、少々御勝れ不被遊候に付、御名代前田安房守殿ゟ御賴也。

寺川幸右衛門は前田重教夫人附頭なり

十二月廿七日。大聖寺侯前田利考就封を命ぜらる。

〔政隣記〕

十二月廿七日故美濃守樣御養子に御願置被成候、備後守樣御實子勇之助樣、今月七日御着府之處、今日御願之通御家督御相續被仰付。但いまだ御忌中に候處、昨晚御老中方御連名御奉

四品は四位にして大聖寺侯は新保藩五位なり

書到來ニ付、今日御用番松平伊豆守殿御宅へ、御名代御指出被成候樣申來。則建部内匠頭殿へ御頼有之、御出之處御家督之儀被仰出。

附、十萬石以下ニ、四品之歸ニ而無之而者、急中之家督無之御格ニ候得共、此方樣御威光故右之通也。四分具に不記候事。

是歳。變地の場所を良田に回復すべきことを命ず。

〔御用大綱抜書〕

一、天明八年ニ變地場所御仕法被仰渡、三ケ年季引免、五ケ年季・七ケ年季、十ケ年季引免ニ而爲立歸可申、川筋ニ而大石入、或岸崩等ニ而年季御請難仕場所、何れ茂一部切合帳ににて上聞樣被仰渡、敷面に仕立上。

是歳。能美郡一針の農重兵衞孝行を以て賞せらる。

〔加能越良民傳〕

能美郡一鍼邑農重兵衞。以誠實謹敏見重于群邑、蓋長而降。世居本邑。父祖相襲稱重兵衞。父有至性。年十二亡父。乃竭孝母。母性下急。少有過差。輙至答扶流血。猶能趨和承意。愈倍謹厚。重兵衞亦能□父。孝義最厚。十四歲父亡。以其莫了田事不可執治農政。乃佃田之半借人。及二十二歲。乃復受耕之。一鍼之爲田也。往取糞於小松城下。重兵衞常先明而往。是以比衆

夫出邑。重兵衛既已歸來。凡郡邑修橋道淪溝渠之事。諸邑通力爲之。以其壯丁雜糅無一人任責。僉相猜相懈也。特重兵衛朴忠而力。其就事也每先衆。其休止也每後衆。其尤爲惰倦力者。懇々諭告令悛勵也。凡所處畫。常慮謹備。除元日之外。朝暮食息之間。或綯索或捆屨。田事畢則整飭農器。耒耜錘叉之屬罔不該備。而間有求假者。亦喜其適于人用。輙借與無難色。及其還也。或缺壞損敗。亦不少見顏面。但有求繩索薫薦之屬。亦雖假與。而言其人常無備虞之心。規戒之。自親戚隣鄉。或苦於租稅。難於歲役者。力之所及。必盡其力。雖貸金錢。亦不收其息。及期不得償者。乃緩其限。重兵衛自奉極儉薄。非力田不食粳飯。衣不過麤布。唯歲首拜年。新棉衣。首用膏油。其餘蓬頭麻絲約髻而已。雖有儲蓄。不爲利糶米穀。天明癸卯年穀不登。甲辰郡國饑荒。米價升騰。至石錢十千。隣鄉之人皆勸以善價時沽之。重兵衛不可曰。庶舉謀利商賈之事也。農家不及見年之成。則不可虛儲糧也。至秋穀較豐。價隨賤。乃以其所贏盡糶之。人莫不嘆稱其志行也。天明八年。州府優賞。與錢若干。

附録年表

安永四年　乙未　　皇紀二四三五

正月　○朔日前田治脩登城して年頭の禮を行ふ。(一)
○六日老臣長九郎左衛門を致仕せしめたる後金澤に歸す。(二)
○七日前田治脩登城して七草の賀儀を行ふ。(六)
○廿四日能美郡國府村の十村源次、自然藥種等の取扱を自由にすべき意見を上申す。(八)
○金澤の町人木屋藤左衛門、藩の財政整理に關する意見を上申す。(一〇)

二月　○朔日前田重教、治脩と共に本年初めて射を行ふ。(一七)
○八日前田治脩の生母壽清院の二十五回忌法會を營み觀音院に修す。(一八)
○十五日前田重教泰雲院重熙年忌を修す。(二〇)
○十六日先に幕府が羽咋郡千路村の百姓邑知潟の新開を出願したるを以て、是日以降加賀藩に諸岸の肝煎等を置き川井鐵彌守の取調を命ず。(二六)
○二十日能登所口町奉行、十村等の改方奉行に兼して命す。(二七)
○二十日能登所口町奉行、郡内の藍製改方奉行に兼して命す。(二八)
○廿三日前田重教本願寺に於いて法要を營ましむ。(二九)
○廿四日溝八郎進利を宥免せらる。(三一)
○領内の寺社に命じて徳川家治の爲に厄拂の祈禱を行はしむ。(三二)

三月　○三日金澤寶林坊より出火し壯猶坊内に及ぶ。(三三)
○十二日前田重教寶城の大火の罹災者を賑下ぼしむ。(三四)
○十五日前田治脩登營して將軍代人を勤む。(三五)
○十六日能登の漁民が獲たる海獸は見て之を所口の鰹屋清五郎に賣渡すべきことを告ぐ。(三六)
○羽咋・鹿島二郡に嚴に鐵砲を製造販賣するを禁ず。(三七)

四月　○十三日前田治脩就封の暇を受く。(三八)
○十五日前田治脩登營して就封の辭見す。(三九)
○廿一日前田治脩江戸を發し歸國の途に上る。(四〇)
○廿九日前田吉德の女嬌姫、名を結仙院と改む。(四一)

五月　○二日中川善五郎途上に於いて過言したる小者を殺害す。(四四)

○四日前田治脩金澤城に着す。(四五)

○五日前田治脩寶圓寺及び天德院に參詣す。(四五)

○十五日前田治脩金澤城外大豆田に放鷹す。(四五)

○廿三日前田重教湯治の爲歸國の許可を得んことを幕府に出願す。(四五)

○廿七日德川家治使を遣はして前田重教の歸國を許す。(四六)

六月　○朔日前田重教登營して歸國の辭見す。(四六)

○七日重外組の番頭等その軍役に關して伺書を差出す。(四六)

○八日前田治脩、重教の歸國許可を幕府に謝する爲使者を金澤より發せしむ。(五〇)

○十日野村藤兵衞發狂して隣人を傷け直に自殺す。(五一)

○十一日金澤に於いて諸士に前田重教が湯治の爲歸國を許可されたることを告ぐ。(五一)

○廿二日今日以後諸役人を召し前年に引續き借知上納を諸士に慫慂せしむ。(五二)

○定火消青山將監、金谷御殿附近の消防に關する心得を定む。(五三)

七月　○十一日在江戶の諸士に對し借知上納を免除すべきことを告ぐ。(五六)

八月　○二日前田重教、佃久太夫に指扣を命ず。(五七)

○二日前田治脩石川郡宮腰に行歩を試む。(五七)

○廿一日金谷御殿七十間門內に伴ふ從者の數を城內二ノ丸の制に准ぜしむ。(五八)

○廿三日前田重教江戶を發して歸國の途に上る。(五八)

○廿六日長大隅守の家臣宮田吉郞兵衞、御馬廻組田邊忠左衞門を殺害す。(五八)

○町・在に對して借銀を行ふべきことを告ぐ。(五九)

○石川・河北兩郡內に於いて遊獵の爲雉子を捕獲することを禁ず。(六〇)

九月　○五日前田重教金澤に着し金谷御殿に入る。(六一)

○十三日前田重教・治脩相伴うて金澤城內新丸の諸室を觀る。(六二)

○十三日本年借知上納を請ひたる諸士以下に賞詞を賜ふ。(六二)

○十五日長大隅守その家臣の罪により指扣を命ぜらる。(六三)

○廿三日前田重教十一月上旬を以て江戶に赴かんとすることを告げ、次いで之を延ぶ。(六六)

○廿八日鎗奉行の職を復し有澤才右衞門を之に補す。(六六)

○大聖寺藩へ儀目として篠原勘左衛門を派遣す。(六八)

十　月　○新田開發を獎するの慣習を五十村肝煎役以上の[illegible]に復せしむ。(六九)

十一月　○晦日能登の十村等に百姓の行狀に關し諭すべき條目を示す。(七〇)

○十一日前田重教巡察を行ふ爲越中に赴く。(七九)

十二月　○六日藩侯旅館の際城下の商店に簾風を建て、敬意を表する等のことなからしむ。(八一)

○七日足輕の貸羽織着用に關する規程を定む。(八二)

○廿六日御扶持人十村及び十村の席列を定む。(八三)

○十村等に命じ百姓の耕作を勵むべきことを諭さしむ。(八四)

閏十二月　○八日郡方に對する藩の支拂を停止することを告ぐ。(八五)

○十日表方坊主小島清久、金澤城二ノ丸の納戸の黄金を竊みたることを自訴す。(八六)

○十五日金澤城に煤拂及び追儺の儀を行ふ。(八七)

○十八日前田重教明年年頭の賀を受けざることを告ぐ。(八七)

○十八日[illegible]すべきことを命ず。(八八)

○二十日菜種不作なるを以て木實油を輸入販賣せしむべきことを告ぐ。(八八)

是　歲　○木偶狂言所々に行はる。(八九)

安永五年　丙申　（皇紀二四三六）

正　月　○二日年頭御禮人の序列に關し新例を開く。(九〇)

○二日前田重教金谷御殿に於いて乘馬初の儀を行はしむ。(九〇)

○二十日前田重教御供人の作法に關して諭す。(九一)

○給米の算用並に管理に關して十村等に諭す。(九二)

○百姓をして農事に精勵せしめ、その監督を手代等に一任することなかるべきを十村等に諭す。(九三)

二　月　○六日前田重教百歳以上の男女調査を命じ、尋いで小者又市を召し見る。(九五)

○十二日小松城に於ける時鐘をこの日以後寺院に撞くことゝす。(九五)

○十三日前田重教[illegible]ことを豫告し次いでこれを延期す。(九六)

○十五日前田重教[illegible]小松に至り十八日金澤に歸る。(九七)

○十六日六ケ年前養父定吾御馬廻中吉次郎兵衛を殺害の上[illegible]に生胴の刑を宣告す。(九八)

○廿九日藩の財政窮乏するを以て、藩士に借知上納を命ず。(一〇一)

○百姓の手上高を奬勵し及び切高の方法を誤らしめざるべきことを十村等に諭す。(一〇三)
○藩の財政困難なるを以て百姓等の益耕作に精勵すべきことを告ぐ。(一〇五)
○前田重教刑罰執行に關する諸藩の實況を徴す。(一〇五)

三月 ○三日德川家治の日光社參中に於ける下街道の旅行に關し注意を與ふ。(一〇七)
○三日量器檢査の爲桿屋藤左衛門の手代を巡回せしむべき幕府の通牒を受く。(一〇八)
○六日御郡奉行及び改作奉行に兩役の事務を兼ねしめ毎郡二人を派遣して農事を監督せしむ。(一〇九)
○十二日能美郡に於ける百姓持山及び垣根の七木伐採は御郡奉行にて許可することを許す。(一一一)
○廿八日諸士古借の會所銀を帳消にすることを廢す。(一一四)

四月 ○四日德川家治の日光社參中、下街道を經て發遣する荷物に關し注意を與ふ。(一一四)
○十一日江戸詰の諸士以下に給する扶持方及び人數を減少すべきことを豫告す。(一一五)
○十五日前田治脩本年参覲の期を豫告す。(一一七)
○十五日表小將辻織人不屆を以て在鄕を命ぜらる。(一一七)
○十九日儉約の實行に關する前令を勵行すべきことを告ぐ。(一一七)
○廿一日前田重教越中に放鷹す。(一二一)
○廿八日後桃園天皇の麻疹御平癒を賀する爲幕府に發遣すべき使者を命ず。(一二一)
○廿九日前田治脩及び重教、德川家治の日光社參終れるを祝し使者を金澤より發せしむ。(一二二)
○百姓の風俗を質素にし及び物價を低廉ならしむべきことを郡方に命す。(一二三)

五月 ○十一日前田治脩金澤を發して江戸に向ひ、その從者麻疹に罹るもの多し。(一二三)

六月 ○八日前田重教營業者にあらざる者の淺野川及び犀川にて漁撈するを禁ぜしむ。(一二四)
○十二日大小將組の諸士儉約の實行を約す。(一二五)
○廿八日前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。(一二六)
○廿八日御郡奉行兼改作奉行に役用の金子を支給することを定む。(一二六)
○この頃又所々に木遣狂言流行す。(一二七)
○金澤卯辰八幡社内の角力禁止せらる。(一二八)

九月 ○廿一日前田重教越中に放鷹す。(一二九)

十月 ○七日狩獵の方法に關する從來の禁令を守るべきことを告ぐ。(一二九)
○能美郡の十村等猪・鹿を驅逐せんが爲鐵炮の貸與

を陳願す。（一三〇）

十二月　〇六日領内に於いて猪を捕獲するものに米を賞賜す。（一三一）

〇十一日前田重教手組の者を金沢に移住することとなす。（一三二）

〇能美郡長野村等に於いて新平村高の家柄に定まるまで普請にあらざるものゝ宮籠を禁止す。（一三三）

是歳　〇能美郡尾小屋銅山を開掘す。（一三四）

安永六年　丁酉　皇紀二四三七

正月　〇十五日金沢堀川町の町人等石川郡粟ヶ崎藤右衛門の家に集り銀子分割を強請す。（一三六）

〇十八日當時在江戸の大小將は藩侯の歸國に供奉するものゝ外出遠慮たるべきことを命ず。（一三七）

〇廿二日百姓・町人の子にして盲人たるものゝ支配に關する藩府の令を傳ふ。（一三八）

〇廿四日中村永之助その小者を殺害す。（一三九）

二月　〇廿一日前田重教歸國在江戸を發し二十五日を以て歸着す。（一四〇）

三月　〇十日犀川・浅野川の漁撈禁止を七月晦日まで解除す。（一四一）

〇十三日西永治兵衛江戸より野郎を伴ひ歸りたるを以て縱預に處せらる。（一四二）

〇廿五日前田治脩執政の職を受く。（一四三）

〇廿五日浅野川静明寺火災に罹る。（一四三）

〇廿八日改作奉行と郡奉行とを兼務し毎郡二人出張改作する制を廢して舊制に復す。（一四四）

〇廿九日金沢に於いて夢想によりて得たりと稱する薬劑を製賣せしむるものあるを以て之を禁止す。（一四四）

四月　朔日前田治脩登營して襲封の謁見す。（一四五）

〇六日御郡奉行兼改作奉行たりし木梨助三郎その職務を罷むるを以て自分指控を行ふ。（一四五）

〇六日金沢城西町口門外に落状を貼布するものあり。（一四六）

〇十日前田治脩江戸を發し、襲封の謝に上る。（一四六）

〇十一日前田重熙の二十五回忌法會を金沢寶圓寺に執行す。（一四七）

〇廿二日前田治脩金沢城に着す。（一四八）

五月　〇十二日前田吉徳の三十三回忌法會を寶圓寺に行ふ。（一四八）

〇十四日家老松平大貳、同役と不和なるを以てその役儀を除かる。（一四八）

〇十五日組外組の者組等作りその事務に關して願書を提出す。（一四九）

〇十六日能美郡長野村等に於ける宮籠禁止を解除す。（一五一）

○廿七日年寄中の藩侯と對談する際の作法に就きて諭す。(一五二)
○木遣狂言金澤卯辰八幡社内に行はる。(一五二)

六月 ○五日前田治脩、老臣の政務に關して謁見する際筆硯を持參すべきことを告ぐ。(一五三)

七月 ○三日前田治脩、歸國の際供奉に精勤したる諸士を賞す。(一五三)
○晦日犀川・淺野川等の漁撈を禁止す。(一五三)

八月 ○三日前田重教の生母實成院の十七回忌法會を實成寺に行ふ。(一五四)
○五日前田治脩老臣に命じて博奕を爲したる諸士の處置に關し議せしむ。(一五四)

九月 ○十二日藩侯祖先の法會を執行する際鳴物等を遠慮せしむる件に關して議す。(一五五)
○十九日前田重教越中に放鷹せんとすることを豫告し、次いで之を延期す。(一五六)
○廿一日新田畑開發に關する幕府の令を傳ふ。(一五六)
○廿九日御馬番小瀬甫元、公事場奉行より預けられたる小者を逃走せしめたるを以て遠慮を命ぜらる。(一五八)
○小作等、地主に對し非分の申懸を爲すを禁す。(一五九)
○幕府より米價向上したるを以て圍穀を貯すべき命を受く。(一六〇)

十月 ○五日昨今兩日金澤天德院に於いて前田重靖の二十五回忌法會を修す。(一六〇)
○八日奉公人出替の期を終冬に於いてすべきことを命ず。(一六〇)
○十一日能美郡今江潟・木場潟等に於いて諸士の漁撈を行ふを禁ず。(一六一)
○廿八日能登に於いて風俗淳樸なる諸村を調査上申せしむ。(一六二)
○廿九日江戸に於いて大小將石黒佐七郎等無刀にて木挽町の芝居を觀覽したるを以てその罪を議せらる。(一六二)
○侍代官の沿革を調査して諮問に應ふ。(一六三)

十一月 ○十四日本年四月福井藩より交渉せられたる越中境關所通行の件に關し回答の覺書を江戸の吏に發送す。(一六五)
○二十日十村等隱田及び餘田の意義に關する諮問に答ふ。(一七三)
○廿五日石川郡本吉に火災あり。(一七四)

十二月 ○十五日中村九右衛門知行を加增し人持組末席に列せらる。(一七四)
○十七日老臣前田三左衛門・奥村助右衛門貶黜せらる。(一七六)

○十九日徳川家治が前田治脩に贈れる鶴を澤に献す。(一七六)
○廿四日郡方の者は十村等の證狀あるに非ざれば町方に居住又は奉公し得ざることを告ぐ。(一七六)
○前田重教、築場に鶴形の的を置かしむ。(一七七)

安永七年　戊戌　皇紀二四三八

正月　○四日本郷邸附近の火災に加賀藩の火消役等大に活動す。(一七七)
○五日出役者の年頭拜賀に着用する衣服に就いて令す。(一七八)
○八日謡初の儀式を二の丸御殿に行ふ。(一八〇)
○九日大乘寺住職前田利道の女俊姫の葬儀に預るを以て、之を罰せらる。(一八〇)

二月　○五日前田治脩参覲の期を令し、後これを延ぶ。(一八〇)
○十八日指扣を命ぜられたる十村の鍬手米及び代官口米の支給手續に就いて令す。(一八〇)
○十村等にその職分に關する心得を諭す。(一八〇)
○新開見分又は地改檢地の際田地の面積を隱蔽するを禁ず。(一八〇)

三月　○朔日前田治脩出仕の時宿に隨ひたる諸士の登城を許さず。(一八九)
○晦日江戸に於いて大小將谷猪左衛門出奔し、尋いで組外組に加へらる。(一九一)
○五日前田治脩再び参覲の期を定め後之を延ぶ。(一九二)
○十四日大小將組林左平次金谷御殿に於いて小姓を試驗せられ、翌日御膳奉行を命ぜらる。(一九三)
○能登の十村大澤村内藏等自他國境の材木を調査したる結果を上申す。(一九三)

四月　○六日前田重教痔疾ある近侍の士に一日の遠慮を命ず。(一九四)
○十三日前田治脩重ねて参覲の期を延ぶべきことを告ぐ。(一九五)
○十九日前田治脩参覲の期を定む。(一九五)
○廿四日前田治脩留守居等を其職事に奉呼す。(二〇〇)
○廿五日前田治脩参覲延期に付隨從の士に扶持方の中縮を發議すべきことを令す。(二〇〇)
○廿七日年寄村井又兵衛長穹山林の産物請方主附を命ぜらる。(二〇〇)

五月　○朔日前田治脩金澤を發して参覲の途に就く。(一九六)
○十四日前田治脩板橋に着す。(一九八)
○廿五日徳川家治使を遣はして前田治脩の参覲を勞せしむ。(一九八)
○是月若年寄酒井石見守牧野備後守、大阪の奉行に與へたる書狀の不都合を詰責せらる。(一九九)

六月　○朔日前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。（二〇〇）

七月　○四日割場奉行駒井左左衞門非行あるを以て減知逼塞を命ぜらる。（二〇〇）

閏七月　○十九日仙石内匠の子右門先に肩衣を用ひて金谷御殿に登りたるを以て之を停止せらる。（二〇一）

○廿五日村方に於いて請酒を營業とすることを禁す。（二〇二）

○廿五日前田治脩、重教の男兒を擧ぐる時は之を世嗣とするの意あることを告ぐ。（二〇三）

九月　○九日前田治脩江戸表の經費缺乏を會所奉行に告げたる書金澤に達す。（二〇四）

○十三日前田重教の子齊敬金澤に生る。（二〇四）

○十五日赤尾本平父の仇を復す。（二〇四）

○十九日前田重教の女藤姫金澤に生る。（二一三）

○廿七日赤尾本平の人相書を町奉行に提出す。（二一三）

○廿八日頭分以上の士に前田重教の子齊敬の出生せしことを告ぐ。（二一四）

十月　○四日赤尾本平脱走せるを以て捕縛を命す。（二一四）

○十九日穢多非人の取締に關する幕府の令を受く。（二一四）

○廿七日前田治脩、老臣に書を與へて齊敬を世嗣とすることの同意を重教に求めしむ。（二一六）

○廿七日前田治脩、老臣等に齊敬を世嗣とすべく幕府に出願せんとすることを告ぐ。（二一七）

十一月　○七日前田齊敬を樣付にすべきことを命す。（二一九）

○十二日前田宗辰の三十三回忌法會を執行す。（二一九）

○十五日前田治脩、齊敬を世嗣とするの請を容れられたることを重教に謝せしむ。（二一九）

○廿二日與力小石喜左衞門父子の流刑を宥免す。（二三〇）

○廿五日原田吉郎兵衞病死の後流刑を赦免せらる。（二三一）

○金澤堅町に魚鳥市場を設く。（二三三）

十二月　○七日前田重教の子齊敬の生誕を幕府に屆出てその年齡を増して三歳とす。（二三四）

○十八日前田治脩、重教の子齊敬を世嗣とすべき幕府の許可を得。（二三五）

○廿二日郡方に令して婚禮の家に石礫を投ずることを禁す。（二三五）

○廿五日博奕を爲したる諸士等處刑せらる。（二三六）

是歲　○前田重教、諸士・與吏を召してその演能を觀覽せしむ。（二三二）

是歲　○鳳至郡内保村の肝煎宗次郎の子、父に代りて入牢を請ひたるを賞しその罪を免す。（二三三）

安永八年　己亥　皇紀二四三九

正月　○三日前田治脩、齊敬を養子とする願の許可せられ

たることを諸士に告ぐ。(二三三)

○八日前田齊敬松平氏を冒すことを告ぐ。(二三四)

○八日陪臣神戸平次を斬りたる伊崎與一兵衛の處分に關して衆議す。(二三四)

○十三日浪人澤井忠平劍術の技を以て御大工並に召抱へらる。(二三五)

○廿〇日御馬廻頭平士の御國目付へ問議する者の音物謝絶等の方法を議せんことを求む。(二三六)

○廿二日徳川家治、前田治脩に鶴を贈る。(二三八)

○廿五日徳川家治、前田治脩が齊敬を世嗣としたるを以て祝儀を贈る。(二三八)

○廿七日高辻胤長の使者金澤に來り前田齊敬に近習內縁の女を嫁約せしむべき希望を述ぶ。(二三九)

○廿八日前田治脩登營し、齊敬を世嗣とするの許可を得たることを諭す。(二四〇)

二月

○六日前田治脩、齊敬を世嗣としたるを以て徳川家治等の物を給ひたることを諸士に告ぐ。(二四二)

○十日前田齊敬病むを以て治脩より紅葉山の火番を金澤に告ぐ。(二四一)

○十五日前田齊敬の臣に俸祿を分與せしむ。(二四三)

○二十日武藏府中に於て社僧の新田を開くものを許さず。(二四三)

○廿一日前田重教、徳川家治より贈られたる鷹者を披露す。(二四四)

○廿一日江戸在府の御大小將組番頭・同御横目を詰番とすべきことを告ぐ。(二四七)

○廿八日早手傳馬を賞し奉る爲使者を金澤より發せしむ。(二四七)

○廿八日前田治脩江戸發駕の期を定め次いで之を延期す。(二四七)

○晦日徳川家基薨去の報金澤に達す。(二四八)

三月

○三日前田重教金澤より使者を發して徳川家基の薨去を弔せしむ。(二四九)

○八日前田重教諸藝に精しきものを召して之を觀る。(二四九)

○十一日前田重教諸藝に秀でたるものにその技を演ぜしめ、又坊主に命じて乘馬せしむ。(二五〇)

○二十日前田重教能を演じ天德院及び寶圓寺の住僧をして觀覽せしむ。(二五〇)

○廿二日前田齊敬眼病に罹る。(二五〇)

○廿四日山村吾安を前田齊敬の侍醫と定む。(二五一)

○廿七日前田重教石川郡宮腰に放鷹す。(二五一)

春

○山村に火を發すること多し。(二五一)

四月

○二日小松城下車持町に出火す。(二五二)

○四日前田重教能を演じ天德院及び寶圓寺の雲水をして之を觀覽せしむ。(二五三)

○十二日前田重教能を演じ桃雲寺の住僧をして之を觀覽せしむ。(二五二)
○十三日前田重教石川郡粟ヶ崎に放鷹を行ふ。(二五三)
○十四日前田治脩、德川家基の遺物を受く。(二五三)
○十六日前田重教金澤郊外淺野筋及び大豆田筋に放鷹を行ふ。(二五三)
○十八日前田治脩就封の暇を受く。(二五四)
○十九日前田重教金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。(二五四)
○廿一日前田治脩登營して就國の辭見す。(二五四)
○廿二日前田治脩江戸を發して就封の途に上る。(二五四)
○廿五日前田重教金澤大豆田筋及び淺野筋に放鷹を行ふ。(二五五)
○寺庵にして施物・寄進を貪るものあるを戒む。(二五五)

五月

朔日本日以降前田齊敬の爲城内に建つる幟を拜觀せしむ。(二五六)
○二日前田重教金澤郊外千日町附近に放鷹を行ふ。(二五八)
○四日前田重教金澤郊外七ツ屋口に放鷹を行ふ。(二五八)
○六日前田治脩金澤に着す。(二五九)
○九日大聖寺侯前田利精金澤に登る。(二五九)
○十三日前田重教金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。(二六〇)
○十六日前田治脩、重教を二ノ丸御殿に招請し能を興行す。(二六〇)
○十六日前田重教金澤郊外千日町附近に放鷹を行ふ。(二六一)
○十九日前田重教石川郡宮腰に放鷹を行ふ。(二六一)
○廿七日前田重教幼年の男子の將棋を指す者及び女子の碁を圍む者を求む。(二六一)

六月

○四日定番御歩三田村太右衛門、同組中尾半左衛門を傷く。(二六二)
○七日前田重教金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。(二六二)
○廿三日前田齊敬初めて金澤城二ノ丸に入る。(二六三)
○廿五日金澤高道より火を失す。(二六三)

七月

○六日前田齊敬に對する作法に就いて令す。(二六三)
○十二日前田治脩寶圓寺・天德院等に詣づ。(二六四)
○十三日諸士の子弟等頗る不行狀を以て處分せらる。(二六四)
○十五日堀樗庵、前田重教の御醫師として、召出さる。(二六八)
○十八日前田重教、その子齊敬を紀州侯德川重倫の

女と婚約することを許す。(二六九)

○廿一日藩の財政困難なるを以て、江戸・京・大阪の諸人に借銀を命す。(二六九)

□前田重教及び治脩の喪服と越中井波の寺院の僧に於ける作法に關し令す。(二七〇)

八月 □四日前田利常の女の百五十回忌法會を寺に營む。(二七一)

□十九日前田宗辰の生母浄珠院江戸前田邸に卒す。(二七一)

□廿二日前田吉徳の追善法會を延期すべきことを議す。(二七一)

○廿八日小將組の士藤田孫六郎行を召放さる。(二七二)

○本年の秋稲に對し百姓等の異議を挾むべからざるを命ず。(二七二)

九月 □十八日前田重教及び治脩の母金澤觀音院に宮參を行ふ。(二七三)

十月 ○十七日前田吉徳の女結城院雜司ヶ谷の會式に詣づ。(二七四)

○金澤城櫻坂門通行の規程を遵守すべきことを命す。(二七五)

□十四日十村等の肝煎料米を止めんとの五ヶ年前の請願を許可す。(二七六)

□翌廿四日より朴精・寺庵者の為に要する衣服の下附を禁む。(二七六)

十一月 ○十三日後桃園天皇崩御の報江戸に達す。(二七七)

○十三日小將有隣、禁止區域に於いて鳥構場を設けたるを以て戒飭せらる。(二七八)

○十六日本郷邸前の葉見を戒告す。(二七九)

○廿一日後桃園天皇崩御し給へるを以て、本日以降領内の殺生・普請・鳴物の停止を命す。(二七九)

十二月 □八日前田治脩金澤より書を贈りて後桃園天皇の崩御を弔し奉らしむ。(二八〇)

□九日前田治脩及び重教、諒闇に就き使者を禁闕に遣はしむ。(二八〇)

○十六日領に明年より五ヶ年間の儉約を命す。(二八一)

○廿一日本日以降二ノ丸御殿に修繕を行ふ。(二八三)

○廿八日儉約に付來年頭の諸儀式を簡單にすべきことを告ぐ。(二八三)

○本日儉約に付年頭暑寒等の書狀往復を省くべきことを告ぐ。(二八四)

○前田重教明年初老に達するを以て私に之を祝す。(二八四)

○金澤に於いて追剥流行す。(二八五)

安永九年 庚子 皇紀二四四〇

正月 □朔日前田治脩金澤城に於いて年頭の賀を受け、諸士をして年上下を用ひしむ。(二八五)

○朔日前田治脩使者を柳營に派して太刀を獻上せしむ。(二八六)
○二日前田重教使者を柳營に派して太刀馬代を獻上す。(二八六)
○十三日十村等を召して吉祝の儀を行ふ。(二八七)
○十四日大小將大島門十郎、前田治脩の寶圓寺參詣に供奉したる途上急死す。(二八八)
○十六日百姓等の賭の諸勝負を爲すことを禁ず。(二九〇)
○十九日鏡餠直の祝儀に每年の例を省略す。(二九〇)
○廿二日前田齊敬疾むを以て河北郡倶利伽羅長樂寺に命じて祈禱を行はしむ。(二九一)
○廿四日諸役人の言上紙面に直紙を用ふべきことを命ず。(二九一)
○廿八日郡方の眞宗道場にして本山に寺院の許可を出願するものあるを停めしむ。(二九二)
○廿九日諸士の遺書を提出する際先祖由緒一類附を添付し又は添付を要せざる場合の規程を改む。(二九四)
○郡方に於いて開發したる新田の免合を增徵する方法を講ずべきことを命ず。(二九四)

二月

○朔日御馬廻頭等上書して儉約の勵行に關し更に嚴令を發せんことを求む。(二九五)
○八日中村萬右衞門、高田善藏の爲に殺害せられる。(二九七)
○八日前田重教、金谷御殿に於ける能を延期す。(三一一)
○十二日領國等の繪圖修繕の件に關して通牒す。(三一二)
○十四日高田善藏明日切腹を命ぜらるべきを以てその遺體の受取方に關し一類に通牒す。(三一三)
○十五日高田善藏切腹を命ぜらる。(三一四)
○十五日高田善藏の家財をその老母に與ふ。(三二一)
○十八日前田重教夫人江戸上野眞如院等に參詣す。(三二二)
○廿一日昨今兩日大乘寺に於いて高田善藏の追弔法會を執行す。(三二三)
○廿四日金澤城內の御作事所燒失す。(三二三)
○廿五日前田治脩發駕の期を三月下旬と定め、尋いで之を延ぶ。(三二五)
○廿七日江戸に於いて諸士に綿衣を用ふべきこと等を諭す。(三二五)
○木綿の價を騰貴せしむることなく且つ他國產物の輸入を禁ずべきこと等を告ぐ。(三二六)
○諸士の人馬數積を提出すべき規程を更定す。(三二六)
○組頭等、儉約を申渡すべき條文に就いて諮問せられたるを以てその意見を上申す。(三二七)

〇自今江戸・京・大坂の諸人を二年半交代とすべきことを告ぐ。(三三〇)
〇今次の參覲に供奉する諸士の行裝を簡易にすべきことを告ぐ。(三三〇)

三月
〇二日諸士に饗應すべき食事類の類等に關し令す。(三三一)
〇六日前田利常の生母壽福院の百五十回忌法會を金澤經王寺に執行す。(三三二)
〇九日前田重教夫人、紀伊侯の第邸を訪ふ。(三三三)
〇十九日前田治脩參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。(三三三)
〇廿二日前田綱紀の女節姫の百回忌法會を江戸廣德寺に執行す。(三三四)
〇この後前田重教屢々放鷹を行ひ、又近臣をして武技を習はしむ。(三三四)
〇金澤に於いて櫻の花見をなすこと流行す。(三三四)

四月
〇四日普請奉行淺加平八郎不行を以て、役儀を除かる。(三三五)
〇四日人持組奧村中務能登島に配流を命ぜらる。(三三六)
〇十五日前田治脩使を發して參覲の期を延べんことを幕府に請ふ。(三三七)
〇十六日前田宗辰の生母淨珠院江戸兩國・淺草に行歩を行ふ。(三三八)
〇前田興業ヶ嶋村淺右衛門東本願寺に自讚八十貫目を許諾す。(三三八)

五月
〇二日前田治脩再び參覲の延期を請はしむ。(三三八)
〇十五日前田治脩月次出仕の諸役人を召し、儉約の趣旨を遵奉すべきことをその支配に告げしむ。(三三九)
〇十五日婚禮の家に石を投じ、又は異体の風俗にて夜行する等のことを禁ず。(三四〇)
〇十六日組頭・物頭等を召集して二様方を作調する者を戒めしむ。(三四一)
〇廿六日前田吉德の生母心蓮院の五十回忌法會を江戸妙亮寺に執行す。(三四二)
〇廿八日百姓等農業を專らとし古來の風俗を失はざるべきことを諭す。(三四三)
〇物頭等の歸方に出づる時の待遇を定む。(三四三)

六月
〇二日前田治脩重ねて參覲延期を幕府に告げしむ。(三四四)
〇十八日前田重教初めて鶴を射留めたるを以て、翌日祝儀の贈答を行はしむ。(三四五)
〇廿七日前田重教高岡附近に放鷹す。(三四五)

七月
〇九日國所の證書に竪立紙を用ふる件を照會す。(三四六)

○十一日江戸邸の貸小屋に窓を穿つべからざることを告ぐ。(三四七)
○十五日前田重教、父吉徳の廟参に關する件を告ぐ。(三四七)
○廿三日伴源太兵衛緝子の白小袖を所持したるを以て警告せらる。(三四七)
○虫害により米價大に騰貴す。(三四七)

八月 ○九日前田利家夫人芳春院の祥月忌日等に爾後殺生の遠慮を要せざることを告ぐ。(三四九)
○十村等に命じ嚴に百姓をして粗服を用ひしむ。(三四九)

九月 ○二日同時に三子を生みたる者に扶持を給するの例を開く。(三五〇)
○十日前田治脩更に參覲の期を延ぶべきことを告ぐ。(三五一)
○十一日前田治脩、徳川家治轉任の祝儀を受く。(三五二)
○十三日前田斉敬、藤姫と共に髪置の儀を行ふ。(三五三)

十月 ○同日前田重教故舊の爲に越中に出奔す。(三五三)
○十一日前田治脩更に參覲の期を延ぶることを請ふの使を發す。(三五四)
○廿八日年寄村井又兵衛、産物取調の事務に精勤すべきことを命ぜらる。(三五四)

十一月 ○十日光格天皇御即位・御元服奉祝の爲の使者を成瀬主計に命す。(三五四)
○十一日前田治脩又參覲の期を延べんとすることを請はしむ。(三五五)
○十九日牧野金蔵役銀・出銀上納の期に遅れたる等の理由を以て閉門を命ぜらる。(三五五)
○廿六日光格天皇の御即位を賀し奉る爲、前田治脩・重教使者を江戸に派遣す。(三五七)
○大聖寺藩不作なるを以て百姓等蜂起して減租を請はんとす。(三五八)

十二月 ○九日前田治脩病を以て參覲を延べたるが故に明年の年頭拜賀を受けざること等を告ぐ。(三六四)
○十八日前田治脩來年頭の謁禮等を廢することを告ぐ。(三六六)
○十八日他國に使するものに金銀を與ふることを廢す。(三六六)
○廿三日小松御馬廻喜多關傳藏を流刑に處す。(三六六)

天明元年　辛丑　皇紀二四四一

正月 ○晦日前田治脩金澤城に於いて病むを以て年頭の賀謁を廢す。(三六八)
○朔日前田治脩使を柳營に遣はして太刀馬代を獻る。(三六八)

○二日前田重教使者を治脩に遣はして年頭を賀す。（三六六）
○十四日前大聖寺侯前田利道卒す。（三六八）
○十六日諸役所の經費を從來の三分の二に減ずべきことを告ぐ。（三六九）
○廿二日前大聖寺侯前田利道卒去の報金澤に達す。（三七〇）
○廿二日前大聖寺侯前田利道の訃江戸を發す。（三七〇）
○廿四日徳川秀忠百五十回忌法會を金澤如來寺に執行す。（三七〇）

二月

○朔日前田治脩三月中を以て參覲すべきことを告ぐ。（三七一）
○十二日前田治脩及び重教の使者禁裡に上りて光格天皇の元服を賀し奉る。（三七二）
○二十日會計局の前借は之を請はれたる例を廢し自今年賦返納すべきを命ず。（三七二）
○廿五日越國諸士の扶持方代及び馬役人馬の定數を減ずべきことを告ぐ。（三七三）
○廿五日前田治脩三月廿三日を以て參覲の途に就くべきことを告ぐ。（三七三）
○廿七日光格天皇の御即位を賀する爲金澤より使者を京都に派遣す。（三七四）
○廿八日參覲供奉の諸士に旅行の用意等を簡約すべきことを告ぐ。（三七七）
○諸臣に藩の財政窮迫の状を告げ、儉素に努めしむ。（三七九）

三月

○二日前田治脩參覲の期遷延したるも供奉の士に扶持方を增加給附せざることを告ぐ。（三八一）
○十三日前田重教金澤を發して江戸に向ふ。（三八二）
○廿三日前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。（三八三）
○廿五日前田重教江戸に着す。（三八三）
○廿七日前田重教の近習新番兵藤右衛門切腹に處せらる。（三八四）
○廿八日淺野川及び犀川の漁撈に就いて令す。（三八五）
○廿九日徳川家治使を遣して前田重教出府を勞せしむ。（三八五）

四月

○朔日前田治脩出府の報金澤に達し祝儀を行ふ。（三八六）
朔日前田重教殿中に上りて出府の禮を行ふ。（三八六）
○五日廿三ケ年間入牢存命したる者の赦免に關して議す。（三八七）
○六日前田治脩江戸に着す。（三八八）
○十一日金澤に於いて諸士に前田重教著府の顛末を告ぐ。（三八八）
○廿一日前田治脩殿中に上りて參覲の禮を行ふ。（三八九）

五月　○四日城門の番人に命じ嚴に物品の搬出を取調べしむ。（三九〇）
○九日前田治脩郡奉行等に命じ要脚調達の督促を怠らざらしむ。（三九一）
○十三日大聖寺侯前田利精歸邑の途金澤に宿泊す。（三九二）
○十八日本郷邸呉服所に於いて納布及び絹紛失す。（三九三）
○廿三日前田重教附の士佐々木孫兵衞知行を增し人持組末席に列せらる。（三九三）
○廿三日幕府前田重教の女穎姫を會津侯世嗣松平容詮に嫁せしむることを許す。（三九三）
○廿三日先に刑せられたる堤輪德右衞門の同類佐伯直七等三人刎首に處せらる。（三九四）
○廿六日大小將組細井彌一郞不埒を以て組外組に列し指扣を命ぜらる。（三九五）
○廿八日金澤に於いて諸士に前田治脩明年まで在府を請ひたるを許可せられたることを告ぐ。（三九六）
○財政困難なるを以て川除普請の經費を減じ百姓をして自から修理せしむべきことを告ぐ。（三九六）

閏五月　○廿二日前田治脩上書して德川家治の養世嗣を定めたるを賀す。（三九七）
○廿二日能美郡串天村等四ヶ所を御林仕立山とすべきことを定む。（三九八）
○廿三日大小將組脇田伊織不埒を以て組外組に列し指扣を命ぜらる。（三九九）
○廿六日江戸詰の諸士にその生活を質素にすべきことを諭す。（四〇〇）
○廿七日御馬廻組茨木源五左衞門の母若黨と出奔し、後河北郡俵等村の山中に捕へらる。（四〇一）
○廿九日金澤犀川の水暴溢す。（四〇二）
○廿九日堂形前に大豆を耕種することを許す。（四〇二）

六月　○四日割場附足輕小頭藤澤宗左衞門茶湯を好むを以て扶持を減ぜらる。（四〇三）
○廿四日金澤小立野に火災あり。（四〇四）
○廿七日京師の寺院又は公卿の用銀を借用せる諸士の返濟方法を改む。（四〇四）
○鹿島郡和倉溫泉の事情を下問せられしに答ふ。（四〇五）
○能美郡粟津溫泉の事情を下問せられしに答ふ。（四〇六）
○江沼郡山代及び山中溫泉の事情を下問せられしに答ふ。（四〇七）

七月　○六日前田利紀の養女完姫逝去す。（四〇八）
○九日德川家治使を遣はして完姫の逝去を弔はしむ。（四〇九）

八月
○二十日金澤城異式の普請に着手す。(四〇九)
○諸士勤務の年限を要約すべきことを令す。(四一〇)
○本組頭内に騎乘等に就き二札乙する事を令す。(四一〇)
○廿五日前田治脩、徳川家治が調子を定めたる祝賀能を觀ん爲登營す。(四一一)
○町人百姓の間の諸勝負に關する禁令を發することをせり。(四一二)

九月
○十五日前田重教世嗣として藩國の繼承す。(四一四)
○十六日前田村太夫長家の臣富永伊右衞門を殺害して自殺す。(四一四)
○廿四日金澤大工町に火災あり。(四一五)
○廿七日金澤に於いて諸士に前田重教歸國願の許されたるを告ぐ。(四一五)

十月
○十二日領國の富籤札を取扱ふべからざることを諭す。(四一六)
○十二日[illegible]の如き奢侈品を賣買するを禁ず。(四一六)
○十六日郡方の諸商業に就いて御用所以外よりの取調に應ずべからざることを告ぐ。(四一七)

十一月
○十五日金澤城異式の修理成るを以て移轉す。(四一八)
○十八日領内の漆は之を特に指定の商人等に賣渡すべきことを令す。(四一八)
○十九日前田重教歸國の期を延ばさんことを幕府に請ふ。(四一九)

十二月
○十三日金澤[illegible]を禁す。(四一九)
○十九日前田宗辰の母淨珠院逝去す。(四二〇)
○二十日他國諸の者が旅行中親族の訃音に接したる場合の忌引に關して定む。(四二〇)
○廿五日徳川家治、前田重教の重服に鯛を贈る。(四二一)
○廿六日前田宗辰の生母淨珠院の葬儀を江戸廣德寺に行ふ。(四二一)
○廿八日前田重教の生母淨珠院逝去の報金澤に達す。(四二一)
○今年より定作食米を年賦返上すべきことを命す。(四二二)

天明二年　壬寅　皇紀二四四二

正月
○十五日[illegible]の要求する夫銀借上の命に應ずる者より江戸へ上申す。(四二七)
○廿四日加賀藩の火消役江戸に於いて水戸邸の火災に出動す。(四二七)
○町方・宿方に遠慮して百姓の家屋を建築するを禁ず。(四二七)

二月
○三日金澤に大風あり。(四二八)
○五日金澤晴天にして雨降る。(四二八)
○六日前田宗辰の生母淨珠院の忌日を改む。(四二八)

○廿五日江戸邸に於いて大銀所保管の金子紛失し、次いで奉行等指扣を命ぜらる。(四二九)

○江戸留守居請及び他國に使する者の行粧を質素にすることを諭す。(四三〇)

○江戸に於いて博労を業とする者の數を制限すべきを告ぐ。(四三〇)

○中仙道諸驛の人馬供給を圓滑ならしめんことを交渉す。(四三一)

三月

○朔日藩の金融に盡力せる江戸の町人等に扶持す。(四三二)

○九日前田重教の金谷殿歸着後は金谷門・七十間門内を二ノ丸に准ずべきことを告ぐ。(四三三)

○十一日前田重教江戸を發し廿三日金澤に歸る。(四三四)

○廿六日會津侯松平肥後守父子等本郷邸に前田治脩を訪ふ。(四三四)

○廿七日前田治脩就封の暇を受く。(四三五)

四月

○朔日今明日例に依り金澤觀音院の神事能を行ふ。(四三五)

○同日前田治脩柳營に上りて就封の辭見す。(四三六)

○二日前田治脩就封の途に就く。(四三七)

○七日金澤竪町に火災あり。(四三七)

○十三日前田治脩金澤に着す。(四三七)

○十三日德川家齊元服の禮を行ひたる報金澤に達し、その祝賀の爲派遣せらるゝ使者柄に就いて御馬廻組頭と御小將頭と爭論す。(四三八)

○十五日德川家齊使を本郷邸に遣はしてその元服せる祝儀を贈る。(四四一)

○二十日金澤に地震あり。(四四二)

○二十日前田重教自ら火災を巡見する際に於ける諸士の作法を令す。(四四二)

○廿一日此の日以後大聖寺藩の老臣等頻に金澤城に登る。(四四三)

○廿八日前田治脩及び重教の歸國を謝する爲、使者神尾伊兵衛・前田内藏助登營す。(四四四)

○米穀の賣買に關する規程を定む。(四四四)

五月

○三日前田治脩使を大聖寺に遣はして前田利精を籠居せしむ。(四四六)

○十一日德川家齊の元服任官を祝する爲前田治脩及び重教の使者登營す。(四四七)

○十八日自今三ケ年禁牢以上の刑に處せらるゝ者は藩侯の決裁を經べきことを定む。(四四八)

○廿三日幕府へ派遣せらるゝ使者柄に關し相爭へる御馬廻頭及び御小將頭を罷免せらる。(四四八)

○廿三日諸士旅行に際し荷物の重量に關する規程を守るべきことを告ぐ。(四五〇)

○廿五日御先手物頭佐久間與左衞門等大乘寺籠の御横目を命ぜらる。(四六二)
○同新の番守手て人番守を命す。(四六二)

六月 ○廿四日馬廻組頭鳥居平膳等を金澤城西之門外にて執行す。(四六三)

七月 二日前田治脩、前田利政の百五十回忌なるを以て香奠を贈る。(四六三)
○三日原五郎左衞門不念を以て戒飭せらる。(四六三)
○六日前田治脩、七夕の祝儀として帷子を德川家治に献る。(四六二)
○六日金澤よりの書江戸に着し、次いで大乘寺僧前田利精隱居のことを議す。(四六二)
○八日諸士に命じ新たに先祖由緒一類附帳を提出せしむ。(四六三)
○九日前田重教、家臣田中源五左衞門の馬術を觀る。(四六四)
○十二日本多修理の子誕生す。(四六五)
○十五日夜今暁江戸及び金澤に地震あり、本郷邸に損害を見る。(四六五)
○廿六日役者に課せられたる者の直書に三紙を用ふることを命す。(四六五)
○廿八日前田重教の子齊廣金澤に生る。(四六六)
○十村の使用する手代の行狀等に就いて論す。(四六六)

八月 ○六日大乘寺僧前田利精の調利物金澤城に登る。(四六七)
○十五日富士に前田齊廣の出生せしことを告ぐ。(四六八)
○十八日大乘寺僧前田利精の調利物江戸に着す。(四六八)
○十八日前田治脩海雲及び鹹鯛を德川家治に献る。(四六八)
○十九日前田治脩、東叡山寛永寺の爲に要する材木を寄進す。(四六九)
○廿一日大乘寺僧前田利精隱居を命ぜられ利物その他を受く。(四六九)
○廿一日本郷邸以下江戸の藩邸風害を受く。(四七〇)
○廿二日前田重教、馬廻組山崎五郎右衞門の武技を觀す。(四七一)
○廿七日前田重教、近侍四郎兵衞に一腰を與へ其の職務を以て近侍す。(四七一)
○藩邸、新田手餘村の治罰により邑端に於いて本組頭へ組一を触する旨を論す。(四七一)
○十村手代の家に鄉下村役人を宿泊せしむるを禁す。(四七〇)

九月 ○二日前田治脩重陽の祝儀を德川家治に献る。(四七一)
○五日大番頭寺尾に富山侯前田利久に對する待遇

を誤るを以て戒飭せらる。（四九一）

○九日前田重教、近習佐々木孫兵衞の知行を加增す。（四九三）

○九日前田重教三十三間の距離に於いて大的を射る。（四九四）

○十三日前田齊敬着袴の儀を行ふ。（四九五）

十月 ○朔日河北郡袋村に火災あり。（四九五）

○三日前田治脩、徳川家治及び家齊に初鮭を献る。（四九五）

○五日本郷邸外の棄兒を收容す。（四九六）

○五日羽咋郡邑知潟に於ける加賀藩領と幕府との爭論決したるを以て勘定奉行等に物を贈る。（四九七）

○十三日前田治脩、徳川家治に鱈を献る。（四九七）

○十八日前田重教、人持組戸田與一郎に蟄居を命ず。（四九七）

○廿二日前田治脩、徳川家治に手綱を献る。（四九八）

○御判物・御印物を頂戴する作法に關して令す。（四九八）

十一月 ○朔日前田重教、醫師内山覺順の投藥效を奏したるを以て知行を增加す。（五〇〇）

○二日人持組戸田與一郎に流刑を命ず。（五〇一）

○五日富春徳川家治の前田治脩に賜はりたる鷹本鄉邸に達さる。（五〇二）

十二月 ○十五日江戸町人宮田屋久兵衞藩債の事務に勵精するを以て扶持を與へらる。（五〇三）

○十八日前田宗辰の生母淨珠院の一周忌法會を江戸廣德寺に行ふ。（五〇三）

○廿三日物價高値なるを以て江戸詰の士に與ふる扶持の割合を改む。（五〇四）

○廿五日前田治脩、歳末の祝儀を徳川家治及び家齊に献る。（五〇五）

○百姓の垣根及び持山の七木を郡奉行の許可を經ずして伐採することを禁ず。（五〇五）

天明三年　癸卯　皇紀二四四三

正月 ○朔日前田治脩病むを以て年頭の禮を廢す。（五〇七）

○朔日前田治脩の使者例により太刀等を徳川家治に献る。（五〇七）

○二日前田重教の使者太刀等を徳川家治に献る。（五〇七）

○七日前田治脩、徳川家治に若菜の祝儀を献る。（五〇八）

○十七日戸田與一郎の流刑に處せられたる後二十人扶持を給することを定む。（五〇八）

○十八日前田治脩、徳川家治及び家齊に鹽鱈及び烏賊の黒作を献る。（五〇九）

○廿八日前田重教大的を射、諸士をして之を觀覽せ

しむ。(五〇九)

二 月 ○二日德川家治、前田治脩に贈りたる鶴金澤に着す。(五〇九)

○五日金澤中三ヶ寺に火災あり。(五一〇)

○上旬御步及び足輕の襟を低くすべきことを令す。(五一〇)

○十七日前田重教、近習の士駒井平學に自刃を命ぜらる。(五一一)

○十九日三輪主殿等五人に本多安房守が橋爪御門通過の際を合はさりしを以て處罰せらる。(五一一)

○廿四日道中御供人の携ふる錢の數を改定す。(五一二)

○廿六日前田重教諸士に幕の紋服着用の件に關し令す。(五一三)

三 月 ○朔日石野主殿助人持組末席に列し、前田重教附屬を命ぜらる。(五一三)

○二日金澤十間川町に火災あり。(五一四)

○七日前田治脩、人持組富田外記の知行を加增せしむ。(五一四)

○七日前田重教宮腰寺町觀音院に參詣す。(五一五)

○九日羽咋郡七海村肝煎九兵衞等精勤を以て賞せらる。(五一五)

○十一日前田重教附坊主山本養雪閉門に處せらる。(五一五)

○十四日米價高値なるを以て江戸諸人等の扶持方代を改む。(五一六)

○十五日前田治脩金澤を發し參覲の途に上る。(五一七)

○十六日前田治脩、使を幕府に遣して重教が在國の期を延べんことを請ふ。(五一八)

○十九日前田治脩の使者登營して德川家治に串海鼠を獻る。(五一八)

○廿一日前田重教の女頴姫金澤を發して江戸に向ふ。(五一九)

○廿二日金澤田井新町に火災あり。(五二一)

○廿六日前田治脩江戸に着す。(五二一)

○廿八日德川家治使を前田治脩に遣はしてその出府を勞せしむ。(五二一)

米價高値なるを以て失業者匡救の法を講ぜしむ。(五二二)

四 月 ○朔日前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。(五二三)

○上旬町方にて浪人體の者を宿泊せしむるを禁す。(五二三)

○十一日前田重教の女頴姫江戸に着す。(五二三)

○十七日前田治脩、德川家治の紅葉山參詣に扈從す。(五二四)

○二十日大小將組原宗兵衞の弟重藏出奔す。(五二四)

○廿三日前田重教附屬の徒士失火したる者を獎賞す。(五

二四）

○廿七日來月朔日より前田齊廣の爲に建つる幟の觀覽を許さるべきことを告ぐ。（五二六）

○廿九日幕府前田重教の在國延期の請を許す。（五二七）

○浪人横田秀幸不義を以て禁錮せらる。（五二七）

五月

○朔日先に流刑に處せられたる戸田與一郎の子傳太郎を赦す。（五二八）

○三日前田重教の近習井上松之助・小瀬卓磨多金谷御殿に於いて傷を負ふ。（五二九）

○十日前田重教放鷹の際大小將の士を先角に隨從せしむることを告ぐ。（五三〇）

○十八日金澤城大手先なる前田大炊邸の長屋より失火す。（五三〇）

○廿一日流刑に處せられたる戸田與一郎を能登島の向田に送る。（五三一）

○前田重教屢々放鷹を試む。（五三一）

六月

○十二日前田治脩、徳川家治の増上寺參詣に豫參し、次いで又上野に豫參す。（五三二）

○十二日金澤如來寺に於いて徳川家重の二十三回忌法會を執行す。（五三二）

○十七日前田重教先代綱紀の謄讀等を有する者あらば供覽すべきことを命ず。（五三二）

○二十日金澤神護寺に於いて徳川吉宗の三十三回忌法會を執行す。（五三三）

○廿九日是日以後淺間山爆發の音金澤に聞ゆ。（五三三）

○婚儀を擧ぐる家に礫を投ずる者を捕縛すべきことを令す。（五三七）

○火災の際無用の者の現場に集合することを禁ず。（五三七）

七月

○五日前田重教來九月・十月中に出府のことを告ぐ。（五三八）

○十一日金澤犀川・淺野川の水暴溢す。（五三九）

○十三日財政處理の途を誤りたるを以て御算用場奉行等に指扣を命ず。（五四二）

○十四日洪水により犀川・淺野川の大橋流失したるを以て盆中野田山の廟參を延期せしむ。（五四四）

○十五日前田重教淺野川を巡見す。（五四五）

○十八日犀川・淺野川の船橋出來したるを以て諸士に廿一日以降野田山の廟に參詣すべきを告ぐ。（五四五）

○廿九日前田重教這次の出府に東海道を取るべきことを告ぐ。（五四六）

○前田重教山鴨等の異變あるを以て大に注意すべきことを諭す。（五四六）

八月

○四日大雨の爲犀川・淺野川の水漲溢す。（五四七）

○六日前田重教出府の行程を定む。（五四七）

○八日村肝煎の老年に及び悴之に代はる場合の手續

を定む。(五四〇)

〇上旬前田重教騎射を行ひ諸頭をしてこれを觀覽せしむ。(五四九)

〇十一日前田重教の命により脇田哲九郎・近藤小守二人閉門に處せらる。(五五〇)

〇十五日和田長週閉門を命ぜらる。(五五一)

〇十九日日蓮宗妙久寺・宗榮寺女犯により吟味せらる。(五五二)

〇廿三日石川郡宮腰の商家暴徒の爲に破壞せらる。(五五三)

〇廿五日前田主殿、武藝諸兵法等の秘記を獻じ知行加増を命ず。(五五三)

〇廿七日右江次右衛門高風の結髮したるを以て戒飭せらる。(五五四)

〇廿八日前田重教の近習大平秋太夫、越中五ヶ山に流さる。(五五五)

九月 〇九日家臣の放蕩に耽る者ある諸士をして登城を遠慮せしむ。(五五六)

〇十一日前田重教金澤を發し出府の途に就く。(五五六)

〇廿五日前田重教江戸に著す。(五五七)

〇晦日能登所口奉行、珠洲郡雲津村の百姓四郎右衛門兄弟の孝行を賞す。(五五七)

十月 〇七日江戸に赴くものは當分甲州街道を取るべきを告ぐ。(五五八)

〇七日領内不作の狀を見分する爲奉行を諸郡に發遣す。(五五八)

〇七日鳳至郡輪島の商家暴徒の爲に破壞せらる。(五六三)

〇九日大小將吉田宇右衛門江戸邸より出奔し次いで舊見歸國を命ぜらる。(五六五)

〇十五日新番頭山本伊右衛門江戸に於いて出奔す。(五六六)

〇十五日金澤に於いて諸士に前田重教江戸到着以後に於ける儀式を告ぐ。(五六三)

〇前田諸臣及び重教近習の士をして帶佩を習はしむ。(五六七)

十一月 〇朔日前田重教の出府に供奉したる諸士に扶持方の一部返上を命ず。(五六八)

〇上旬先の洪水に拾得したる流れ物の處分を定む。(五六八)

〇十八日前田宗辰の生母淨珠院の三回忌法會を江戸廣德寺に行ふ。(五六九)

〇廿二日不作の爲引免を許したるを以て給人知引足米附與の手續を令す。(五六九)

〇廿三日前田重教の女訓姬、會津藩世嗣松平容詮に嫁せんとするを以て結納を送る。(五七〇)

〇晦日米作佳良ならざるを以て納租の吟味を寛にすべきを命ず。(五七一)

十二月　〇四日前田重教近習の士井上松之助出奔す。(五七二)

〇七日是日以後穎姫の嫁具を會津侯世嗣松平容詮の邸に送る。(五七三)

〇十二日町人に酒を勸めたるを以て諸士も亦食物の消費に注意すべきを告ぐ。(五七三)

〇十三日百姓の食物に關して諭す。(五七四)

〇十五日前田重教の女穎姫松平容詮に入輿す。(五七五)

〇廿四日藩の收納減損したるを以て調達引當米及び拂米の借上を命ず。(五七六)

〇堀樗庵の末期養子に扶持を給することに就いて議す。(五七八)

〇百姓金澤に出で、家財を賣り又は食をこふものあり。(五七九)

〇領内の米作損耗高を幕府に上申す。(五八〇)

是歳　〇石川郡日御子村の手取清水に愚民集來す。(五八二)

天明四年　甲辰　皇紀二四四四

正月　〇十六日江戸下谷茅町の火災に加賀藩の足輕等町火消と爭鬪す。(五八三)

〇十八日大聖寺詰の士の扶持方代等を增加支給することを定む。(五八六)

〇廿九日御算用者坂井善太夫の子直三が先に町人と爭ひたる件に關し裁決す。(五八七)

金澤に於ける米價大に騰貴す。(五八八)

閏正月　〇三日徳川家治、前田治脩及び重教に鶴を贈る。(五八九)

〇五日前田重教、治脩の婚禮を封國に於いて擧ぐるの許可を得んことを議す。(五八九)

〇十一日前田重教先に近習使番駒井平學に流刑を宣告せるも之を免除す。(五九一)

〇十九日前田重教歸國の暇を受く。(五九二)

〇廿七日大小將吉田彦兵衛江戸に於いて火災見分に出張し落馬負傷す。(五九三)

〇廿七日前田治脩の婚約せる大聖寺侯前田利道の女倭姫を金澤に移さんことを請うて許さる。(五九三)

〇物價高直なるを以て江戸詰の士を減員す。(五九四)

〇江戸より歸國する者の土產物を齎すを禁ず。(五九四)

〇凶年に處する爲御郡所より煎粉の製法を示す。(五九六)

〇百姓等飢饉に瀕する者の互助を命ず。(五九七)

二月　〇七日金澤に於いて諸士に前田重教が歸國を請ひて許されたることを告ぐ。(五九八)

〇八日前田治脩の婚約せる大聖寺侯前田利道の女倭姫が金澤に移ることの許可を得たる報金澤に達す。(五九八)

○九日前田重教江戸護淨寺前に散策す。(五九九)
○十四日去年引免の爲不足したる家中の知行に對する貸米を本年の收穫にて返納すべきことを告ぐ。(六〇〇)
○十五日江戸に於ける諸士の行狀に關して諭す。(六〇一)
○十七日米價高直なるを以て諸士の食料に注意すべきことを諭す。(六〇二)
○廿三日金澤に於いて米價高直の際特に諸士の行裝を簡易にすべきを諭す。(六〇三)
○晦日頭分以上の士に藩の財政窮乏の狀を告ぐ。(六〇四)
○藩士關東調達の用金等、已に二十ヶ年賦に定めたる返濟延滯したるを以て、調達を命ぜらる。(六〇五)
○諸士の儉約等に關する前令に違失すべからざることを告ぐ。(六〇六)

三月

○六日能登奧郡鹽硝役長計の職務を明年以降宇出津山奉行に兼ねしむべきことを定む。(六〇七)
○六日前田重教江戸を發して歸國の途に上る。(六〇七)
○十三日前田治脩就封の暇を受く。(六〇七)
○十五日前田治脩發して就封の首途す。(六〇八)
○十五日前田重教金澤に著す。(六〇八)
○十六日前田重教今日以後大に騎射を行ふ。(六〇九)

○十八日[illegible]地理左衛門等酒宴に招かれ亂行したるを以て閉門を命ぜらる。(六一〇)
○十九日前田治脩江戸を發して就封の途に上る。(六一一)
○廿九日前田重教金澤郊外大豆田に放鷹す。(六一二)
○能登に於ける幕府領の百姓に夫食に當つる爲救助金を與ふ。(六一三)

四月

○朔日前田治脩金澤に歸著す。(六一三)
○朔日前田重教近習の士をして騎射を行はしむ。(六一三)
○九日定番頭藤江道太夫金谷御殿に於いて急死す。(六一三)
○十五日前田重教[illegible]に於いて、五十騎の騎射を行はしむ。(六一四)
○廿七日能美郡小松に於いて[illegible]を行ふ。(六一四)
○廿八日來月朔日以後前田齊廣の爲に建つる[illegible]の觀覽を許すべきことを告ぐ。(六一五)

五月

○前田重教直待の士をして[illegible]を試みしむ。(六一六)
○是月以降領内に疫病大に流行す。(六一七)
○五日前田重教直臣の乘馬を試みしむ。(六一六)
○六日前田重教自ら二十騎をして乘馬せしむ。(六一八)
○十日[illegible]に登る。(六一八)
○前田齊廣の[illegible]を祝む。(六一九)

○前田重教諸士と將棋を試む。（六一九）

○米價益騰貴して飢民を出す。（六二一）

○領國內の驛馬を使用する者は家中侍の荷物といへども駄賃を徴することを告ぐ。（六二三）

六月 ○十一日前田重教騎射の用を勤めたる野村傳兵衛等に賞賜す。（六二三）

○廿七日前田治脩及び重教、歩士の水練を犀川に観る。（六二四）

○廿九日石川郡粟ケ崎藤右衛門に名字帶刀を許す。（六二四）

○廿九日石川郡本吉の町人吉酒屋四郎兵衛等三人の扶持を增賜す。（六二六）

七月 ○十三日御勝手方主附前田土佐守・村井又兵衛等藩の財政を整理し得ざるを以て進退の指揮を求む。（六二六）

○十四日米價日に下落し諸士益節季の仕拂を延期するもの多し。（六二七）

○十七日前田治脩婚姻の期を延ぶべきことを告ぐ。（六二八）

○藩の財政困難なるを以て益前諸拂を停止すべきことを告ぐ。（六二八）

○江戸在住の與力池田綱十郎幕府の測量方助手を命ぜらる。（六二九）

八月 ○朔日石川郡粟ヶ崎村の粟崎藤右衛門登城して、先に優遇を得たるを謝す。（六二九）

○五日前田重教の近習小瀬卓广多流刑に處せらる。（六二九）

○六日田伏重三郎出合宿にて鯖部儀太夫の爲に刺殺せらる。（六三一）

○十三日前田重教曲馬師の演藝を觀る。（六三六）

○廿二日御小將頭等、御小將に會所銀返納の義務を完くすべきことを命ず。（六三六）

○廿七日前田重教鐵炮を放ち組頭をして之を觀しむ。（六三八）

○廿七日儉約の爲に前田治脩行列の從士を減ずべきを命ず。（六三九）

○火消役の勤務に關する覺書を定む。（六四〇）

九月 ○六日御小將頭江守平馬等役儀を除き遠慮を命ぜらる。（六四七）

○十一日御小將等先に役儀を除かれたる組頭の寃を訴へ、自分指扣を行ふべきことを稟申す。（六四八）

○十三日江戸下谷茅町火災の際に於ける喧嘩事件落着す。（六五〇）

○十七日吉田宇右衛門江戸に於いて不都合の行爲ありたるを以て知行を召放さる。（六五三）

○廿一日前田重教狂言師八田屋萬藏に賞賜す。（六五五）

〇廿八日幕府の命により加賀藩の江戸火消にその奉勤を勵ましむべきことを告ぐ。(六五四)

〇廿八日前田重教、若年寄女中の閾子高島清太夫に[illegible]を給す。(六五五)

十月　〇十二日幕府前田治脩が明年の參覲を緩めんとする請を許す。(六五六)

〇前田重教近習の士をして細獄を作せしむ。(六五七)

十一月　〇朔日領国の士を召して、前田治脩が參覲の期を明後年に延期せんとの請を許されたることを告ぐ。(六五八)

〇十日大小將横目木村三蔵、木村重成所持の兜を前田治脩に献ぐ。(六五九)

〇十五日前田齊廣髪置の儀を行ふ。(六六〇)

十二月　〇朔日前田治脩と婚約したる倹姫の金澤に移徙の期定りたることを告ぐ。(六六一)

〇十六日安永九年以降五ヶ年の儉約は本年を以て終るといへども更に五ヶ年を延ぶべきことを命ず。(六六二)

〇廿三日前田齊廣の病癒えたるを以て、醫師等に酒食を賜ふ。(六六三)

天明五年　乙巳　皇紀二四四五

正月　〇朔日前田重教乘馬初の儀を行ふ。(六六四)

〇四日前田重教寶圓寺の隱居にその騎射を觀覽せしむ。(六六五)

二月　〇十一日前田齊敬、大小將中村九兵衛等に命じて繪を描かしむ。(六六六)

〇十五日前田治脩と婚約せる大聖寺侯前田利道の女倹姫金澤城二ノ丸の廣式に移る。(六六七)

〇二十日石川郡栗ヶ崎に繋留する蕃舶の修繕を許す。(六六八)

三月　〇廿二日前田重教、能樂を催す。(六六九)

〇廿四日妙法寺に於いて徳川家基の第七回忌法會を執行す。(六七〇)

〇十二日越中新川郡の境が町なりや村なりやに就いて確定せんことを求む。(六七一)

〇廿二日大聖寺侯前田利物始めて金澤城に登る。(六七二)

〇時疫大に流行す。(六七三)

〇諸士の家來にして欠落・取逃等の罪を犯したるものを捜索する手續を改む。(六七四)

五月　〇朔日本月以後前田齊廣の為に殺生を禁ず。(六七五)

〇朔日中村十兵衛の養子を斬罪に處す。(六七六)

〇七日前田治脩、金澤大豆田口に放鷹す。(六七七)

〇七日前田重教、御先手三輪藤兵衛等をして一調を奏せしむ。(六七八)

○廿四日定番馬廻組鷹生新四郎流刑に處せらる。(六七八)

○廿七日諸士の他國に使者として出張したる際藩より借用したる小拂金銀返納の法を定む。(六七九)

六月

○十五日諸士に博奕を行ふことなかるべきを諭す。(六七九)

○前田重教諸士の行狀を戒む。(六八〇)

○妄を抱へ人集めすることを禁ず。(六八二)

○時疫流行するを以て郡方の請求により調藥を給することを告ぐ。(六八二)

七月

○朔日組頭等に藩の財政窮乏の狀を告ぐ。(六八三)

○十一日金澤城本丸の番士、その保管の鍵を紛失せしめたるを以て遠慮を命ぜらる。(六八四)

○十二日疫疾流行に付藥法を郡方に傳ふ。(六八五)

○廿一日道中筋の人馬賃錢を割増することに關する幕令を傳ふ。(六八六)

○羽咋郡・鹿島郡の百姓等が食用に供する物の品種を上申す。(六八七)

八月

○廿二日前田重教自ら藩の財政整理の任に當るを以てその吏を命ず。(六八九)

九月

○八日金澤の質商の營業を停止し、質物を本主に返して三ヶ年賦の債務とすべきことを命ず。(六九一)

○九日町奉行片岡孫兵衞・中實給合頭割出屋久兵衞以下役儀不相應を以て處罰せらる。(六九二)

○十一日産物方を廢しその事務を改作奉行の所管に復す。(六九三)

○十一日勝手方御用を前田土佐守一人に處理せしむ。(六九三)

○十二日勝手向諸役所の事務を調査しその役人を交迭せしむ。(六九三)

○十二日家中の諸士以下に質物の受出し及び債務に對する證文交附等の手續を告ぐ。(六九四)

○十二日金澤堂形の畑を廢し舊の如く明地と爲さしむ。(六九五)

○十五日前田重教農事に就いて注意すべき事項を令す。(六九五)

○十五日諸士の借銀は凡て永年賦として返濟すべきを命ず。(六九七)

○十八日前田重教政務を監するを以て小吏の任命にもその同意を經べきことを定む。(六九九)

○十九日御馬廻組頭原五郎左衞門知行を加增し人持末席に列せらる。(六九九)

○廿五日諫簡箱を公事場門前に出しその投書を前田重教に呈せしむ。(七〇〇)

○廿九日盲人の支配に關する幕府の令を領內に傳達す。(七〇〇)

○同日能登に於ける御領地の百姓に對しその取締を嚴にすべきことを命ず。(七〇一)
○同日儉約所を廢し、御用所に於いてその事務を執らしむ。(七〇二)
○諸所町方等の質屋に取質、請質凡て從前の如くなるべきを告ぐ。(七〇三)
○藩の町方に對する八月以前の買上物代銀支拂は當分之を延期すべきことを告ぐ。(七〇三)
○百姓の天明四年以前に係る借用證文にして書替へざるものは効力を消滅せしむ。(七〇四)
○足輕・小者等にその分限を守るべきを諭す。(七〇四)

十月

○五日天德院に於いて前田重晴の三十三回忌法會を執行す。(七〇五)
○五日石川郡粟ケ崎村木屋藤右衞門の帶刀をその願に依りて停止す。(七〇六)
○六日諸方に於ける變死人檢視の爲出張したる足輕に食糧を供給する件に關し令す。(七〇七)
○六日醫師・醫師手より醫術並に醫書の修行し永年試究講すべきことを命ず。(七〇八)
○七日金澤卯辰日蓮宗妙國寺等の住持交替を命ぜらる。(七〇九)
○八日讃州の士關田伊織・村上鷹三郎と共に出奔す。(七〇九)
○九日諸場役人等音物を受けて依怙贔屓の沙汰を爲すを戒む。(七〇九)
○十一日金澤城二ノ丸菱櫓の普請を命ず。(七一〇)
○十三日諸寺庵の出家に對しその不埒の行爲あるを戒む。(七一〇)
○十五日前田重教足輕の下人を伴ひて帶刀するを禁ず。(七一一)
○十九日前田重教諸役所に命じて日々の用務は當日中に處理せしむ。(七一三)
○廿二日前田重教足輕の町並の家屋に居住するを禁ず。(七一三)
○廿二日金澤の上下鄕端に於いて梟刑を行はる。(七一四)
○廿七日前田治脩引續き明年の全額を缺き明後年に出精返濟を許されたることを告ぐ。(七一五)
○廿七日新に藏宿により借銀せんとする諸士に融通を計るべきを諭す。(七一六)
○同日前田重教足輕の組數等を定めしむ。(七一七)
○同日百姓等の難澁を上聞する方法に關して告ぐ。(七一八)
○前田重教、鷹匠及び餌指の地方に出張するもの不法の行爲あるを戒む。(七一九)
○前田重教、諸士の子弟を陪臣の養子たらしめ又は

陪臣の娘と婚するを禁す。(七二二)

○借銀返濟の保證として交附したる米切手を債權者より米仲買に賣渡すを禁す。(七二三)

○前田重敎、小將組の士の勤務に關して諭す。(七二三)

○能登に於ける幕府領一部を加賀藩領と交換することを許可せらる。(七二五)

十一月

○朔日前田治脩、幕府が來春の參覲を廢するの請を許したることを諸士の頭分に告ぐ。(七二九)

○二日明年より儉約勵行以前の例に復し年頭拜賀の際長袴の着用を命す。(七二九)

○三日戸田與一郎の流刑を赦免す。(七三〇)

○五日明年より諸士互に新年を祝するの儀禮を行はしむ。(七三一)

○十日前田重敎諸士の子女に書道を學ぶべきことを諭す。(七三二)

○十二日前田重敎諸士に親類と緣類との用語の相違を示す。(七三二)

○十九日定番御馬廻小野木左門遠島に處せらるべきことを知り出奔す。(七三三)

○廿一日前田重敎諸組・支配の行狀に付善惡共直に書上すべきを命す。(七三三)

○告違の罪を犯したる者はその輕重に拘らず出牢の際入墨を施すべきことを令す。(七三四)

○前田重敎の命は單に被仰出といひ治脩の命には特にその名を書せしむ。(七三五)

○諸士の緣組は豫め内意を伺ふことを要せず直に前田重敎に願書を提出すべきを命す。(七三六)

○前田重敎頭分の士その職を辭するときは嫡子を馬廻組に列せしむべきことを告ぐ。(七三六)

○前田重敎江戸に於ける消防夫の器具服裝等給與方を嚴重にすべきを告ぐ。(七三七)

○日蓮宗宗榮寺・妙久寺破却を命ぜられたるを以てその檀那を同宗内の他寺に轉ぜしむべきことを諭す。(七三八)

十二月

○朔日年寄奥村主水を能登島配流に處す。(七三九)

○三日江戸に於いて年頭諸禮式都べて舊に復することを告ぐ。(七四〇)

○十一日前田重敎亦來年頭の諸初を復舊すべきことを命す。(七四〇)

○十一日前田重敎諸士の希望により銀子を貸與すべきことを告ぐ。(七四一)

○十六日大聖寺藩に横目として派遣せられたる御先手物頭小川七左衞門不埒を以て閉門に處せらる。(七四二)

○廿一日原五郎左衞門知行を増し人持組に編入せられ、若年寄に補せらる。(七四二)

〇廿二日前田重教年頭に於いて頭分以上の拜賀を受くべきことを告ぐ。(七四三)
〇廿七日諸士の由緒書上は之を前田重教に提出すべきを命ず。(七四三)
〇廿八日諸士の改名には舊名の一字を用ふべきを諭す。(七四四)
〇廿八日是日以後諸士の心得に關し誓文を徴す。(七四四)
〇先に闕所に處せられたる妙成寺及び妙乘寺の寺號を還續することを許す。(七四六)
〇從死人等の極使の爲出張する者の心得を諭す。(七四七)
〇割場附足輕の寫行を大槻內藏允の施政以前に復す。(七四八)
〇横井元泰等三人に、醫師を統べてその學術を授くべきことを命ず。(七四九)

天明六年　丙午　皇紀二四四六

正月　〇朔日前田治脩年頭の賀を二ノ丸御殿に受く。(七五〇)
〇朔日前田重教金谷御殿に於いて年頭の賀を受く。(七五〇)
〇二日前田重教年頭の祝儀として太刀を治脩に贈る。(七五一)
〇二日二ノ丸御殿に於いて松囃子の儀を行ふ。(七五一)
〇四日射初・打初・乘馬初の儀を行ふ。(七五一)
〇十一日前田重教割場足輕に砲術及び和儀を學ぶべきことを命ず。(七五二)
〇十二日前田重教城中にて御扶持人・十村・新田裁許・山廻等の足袋及び下駄を用ふるを許す。(七五二)
〇十四日前田治脩諸寺參詣及び鷹野等の行列を舊に復することを告ぐ。(七五三)
〇十八日前田治脩參覲の際の供奉を命じ次いで之を延期す。(七五四)
〇十九日前力貸高平故禁獵止の所にて狩獵したるを以て藤內の籍に編ぜらる。(七五四)
〇廿二日江戶深川なる藩の米廩類燒に罹る。(七五四)
〇廿六日金谷御殿に於いて今後經書の講釋を行はしむべきを告ぐ。(七五五)
〇廿七日八百石以上の知行を食むものに自今その役料を支給せざることを令す。(七五六)
〇廿八日奧村主水隆眞能登島に向ひて出發せしめらる。(七五六)
〇廿九日捕網子禁止の令を發す。(七五六)
〇前田重教諸士の家督を相續する者に實際の生年をその組頭に屆出づべきことを告ぐ。(七五七)
〇諸藩の射力にして藩情に兼通あるもの、則是を用捨すべきことを命ず。(七五八)

○十村等、隱田・餘田の告訴を要する法令を不可としその職務を辭せんことを請ふ。(七五九)

二月

○朔日前田治脩病むを以て遠所在住等の年頭拜賀を受けず。(七六〇)

○十日犯罪の種類により、首錢・過怠銀を徴して之を贖はしむべきことを令す。(七六〇)

○廿四日金澤森下町に火災あり。(七六一)

○廿四日前田重教の夫人上野護國院等に參詣す。(七六一)

○廿六日一季居奉公人の給銀を定む。(七六一)

○廿六日前田重教能美郡に放鷹す。(七六四)

○廿八日前大聖寺侯前田利精を金澤に移さんとするを以て豫め近習の士を選定す。(七六五)

三月

○七日金澤城造營の爲諸士の上納する人夫賃銀を減額す。(七六六)

○九日前田重教夫人平尾邸に赴く。(七六七)

○十二日年寄中の邸内に於いて鐵炮を練習し得べき期日を定む。(七六七)

○十五日前田治脩當年秋季に參覲せんとの請を許されたることを告ぐ(七六八)

○廿三日二ノ丸御殿實檢の間に於いて初めて經書を講ぜしむ。(七六九)

○廿四日前大聖寺侯前田利精を金澤に移らしむる爲從行の諸士を命ず。(七六九)

○廿八日前大聖寺侯前田利精金澤に移住の後附屬すべき諸士を確定す。(七七〇)

○諸士の借用したる會所銀返納の法を改む。(七七一)

四月

○六日前田治脩參覲の際の行裝は凡て天明元年省略以前の格に復せしむ。(七七三)

○十三日諸士の借銀を年賦返濟とすべき去秋の令を勵行すべきことを告ぐ。(七七三)

○十四日前大聖寺侯前田利精金澤の假館に移る。(七七四)

○十四日前田重教の夫人江戸青山千壽院に參詣す。(七七五)

○廿一日前田重教、その下賜したる親翰の箱を返上すべき形式に就いて諭す。(七七六)

○廿五日大聖寺侯前田利物江戸より歸邑の途に上る。(七七七)

○廿五日前田重教、小將組牛田牛兵衛に流刑を命ず。(七七七)

○廿八日能登七ッ島にて巢鷹を捕へ得たることを報告す。(七七八)

○前田重教、御小將組野村傳兵衛等の亂行を處罰す。(七七八)

○去秋の令により質物による貸借の整理方法を議

す。(七八〇)

五月 ○罪児の者を死刑に處すべきを命ず。(七八一)

○六日前田重教その子齊敬と共に金澤郊外大豆田に放鷹す。(七八二)

○七日大聖寺侯前田利精金澤城に登る。(七八三)

○十三日前田重教轎中に放鷹す。(七八四)

○廿七日大小將横目原宗右衛門火災の爲出張の際落馬して死す。(七八五)

○廿七日前田重教火災を報ずる太鼓の打方を改むべきことを命ず。(七八六)

六月 ○六日鹿島郡角島の漁民朝鮮に漂着す。(七八六)

○七日前田重教病むを以て治脩自ら政務を見るべきことを告ぐ。(七八七)

○十二日前田重教卒す。(七九〇)

○前田重教行狀。(七九一)

○十七日前田重教危篤の報江戸邸に達す。(八〇一)

○十八日富芳月堂の謡書を中止すべきことを告ぐ。(八〇二)

○十九日徳川家治、老中の奉書を以て前田重教の病を問はしめ又醫師隆庵を派遣す。(八〇三)

○二十日前田重教の病危篤なることを幕府に屆出づ。(八〇三)

○廿一日徳川家治、前田重教の病を問ふ爲に使者を登せしむ。(八〇三)

○廿一日前田重教夫人壽光院使者を登せて重教の病を問はしむ。(八〇四)

○廿二日前田重教卒去を江戸に於いて發表す。(八〇四)

○廿二日前田重教卒去せしを以て幕府の鳴物七日及び普請を停むる旨江戸より使者を發す。(八〇四)

○廿三日前田重教の葬儀に供奉する者の心得を命す。(八〇五)

○廿四日江戸に於いて前田重教の喪中の心得を諸士に示す。(八〇七)

○廿五日徳川家治の使者に前田重教の病を問ふ爲に發したる宿繼奉書金澤に着す。(八〇八)

○廿五日前田治脩、重教の葬禮の爲に奉行を寶圓寺に遣はして檢分せしむ。(八〇九)

○廿六日徳川家治使を本郷邸に遣はして前田重教の卒去を弔はしむ。(八〇九)

○廿六日前田重教の葬儀を寶圓寺に行ふ。(八一〇)

○晦日是日以降寶圓寺に於いて前田重教の法會を營む。(八一一)

七月 ○三日公事場に於いて罪囚を恩赦す。(八一三)

○四日前田重教の寶圓寺位牌所及び野田山廟所に參拜の件に關して告ぐ。(八一二)

○四日本郷邸に於ける類燒罹災者、塩梅所より一角

を詐取して直に出奔す。(八一四)
○八日昨今兩日江戸廣德寺に於いて前田重教の法會を執行す。(八一五)
○十日家中諸士に從前の諸法度を嚴守すべきことを告ぐ。(八一六)
○十一日前田重教の三十五日以後の法會に關して告ぐ。(八一六)
○十三日奥付御歩横目等の月代を剃り得べき時期を定む。(八一八)
○十六日前田重教の卒去に對し幕府より與へられたる禮遇を謝する爲の使者を命ず。(八一八)
○十七日前田重教卒去後三十五日の法會を寶圓寺に營む。(八一九)
○廿四日前田重教卒去後四十九日の法會を寶圓寺に執行す。(八一九)
○廿六日前田治脩當秋參覲の期を定む。(八二〇)
○廿七日稲花の候なるを以て河北・石川兩郡に放鷹するを禁ず。(八二一)
○前田重教の施行したる改法を錄上せしむ。(八二二)
○百姓等に貸借の決濟を嚴にし又小作料の納附を怠ることなからしむ。(八二二)
○領内の御扶持人等、改作奉行及び御郡奉行に對し十村の待遇改善を要求す。(八二三)

八月

○二日前田重教卒去後百ヶ日の法會を寶圓寺に執行す。(八二六)
○三日前田治脩、重教の施行せる改法を嚴守すべきことを命ず。(八二七)
○八日前田治脩參覲の行程を定む。(八二七)
○十五日前田治脩政務を親らすべき決意を老臣に告ぐ。(八二八)
○十八日前田治脩、從來加賀守と呼ばしめたるを止め自今中將と稱せしむ。(八二九)
○廿一日前田治脩參覲發駕の期を延ぶべきことを告ぐ。(八三〇)
○廿一日池田忠左衞門を入牢せしめ富田彦左衞門を逮捕すべきことを命ず。(八三〇)
○廿四日前田治脩參覲の際の行粧を省略すべきことを命ず。(八三六)
○廿八日石川郡粟ヶ崎の富豪木屋藤右衞門その父貞幹と共に入牢を命ぜらる。(八三七)

九月

○二日前田治脩更めてその參覲發駕の期を定む。(八三八)
○六日財政の收支を整ふる爲諸場の費用の削減を命ず。(八三八)
○七日富田彦左衞門大阪より檻致せられて禁牢に處し後五ヶ山に流さる。(八三九)

○八日德川家の愛妾したるを以て江戸邸に於ける諸士の心得を命ず。(八四〇)
○十二日前田治脩、實圓寺及び野田山の祖廟に詣づ。(八四〇)
○十三日前田治脩、天德院の祖廟に詣づ。(八四一)
○前田治脩、諸士の風俗を正しくし先侯重教の遺志に從ふべきことを告ぐ。(八四二)
○十四日德川家治の喪去の報金澤に達す。(八四四)
○十五日德川家治儀去せしを以て金澤に於いて殺生・鳴物等の遠慮を命ず。(八四五)
○十五日前田治脩金澤を發して參覲の途に就く。(八四六)
○十六日當分要方の用務なきを以て會所前の番所に勤務せしむ。(八四六)
○十八日德川家治儀去に付普請・殺生等遠慮の日限を定む。(八四六)
○二十日當豐に對する重箱品の一部を加賀藩器との交換を許す。(八四八)
○廿七日前田斉廣金澤觀音院に寄進を行ふ。(八五二)
○廿七日前田治脩江戸に着す。(八五二)

十月

○三日德川家斉年少なるを以て前田治脩の參覲を寄せしむ。(八五二)
○十六日前田治脩、德川家治の遺物を受く。(八五〇)
○十七日金澤に於いて諸士に前田治脩參覲の状況を告ぐ。(八五三)
○十八日德川家治の葬後なるを以て菲狩遊山をなすものを禁む。(八五三)
○廿五日前田斉敬の金谷御殿に移らんとするを告ぐ。(八五四)
○廿九日越中五ヶ山に流刑を命ぜられたる半田半兵衞金澤を要す。(八五四)
○十村等の行狀を慎み質素を專らとすべきを論す。(八五四)

閏十月

○六日前田治脩參觀せしを以て物を幕府に上る。(八五七)
○十三日前田治脩腳疾を病むを以て柳營に杖を用ふるを許さる。(八五七)
○十五日前田治脩參覲の後初めて柳營に登る。(八五八)
○諸士出仕の際は遲滯なく列居すべきことを命ず。(八五八)

十一月

○四日德川家斉、家を繼ぐを以て前田治脩物を上つる。(八五九)
○同日諸士の河北・石川兩門外にて下馬下乘すべき位置に就いて論す。(八五九)
○七日金澤に强震あり。(八六〇)
○十三日前田治脩腳疾に罹るを以て、德川家斉に謁見

を上る爲の登營を辭す。(八六〇)

十二月　○六日寺院の祠堂銀を借用したる諸士にその返濟方法を改めたることを告ぐ。(八六一)

○廿八日頭並堀平左衛門家政困難の故を以て出奔す。(八四六)

是歳　○造酒の石高を半減すべきことを命ず。(八六六)

○鹿島郡金丸村及び小島村の民、七ッ島にて胡獱を獵するを許さる。(八六七)

天明七年　丁未　皇紀二四四七

正月　○朔日前田治脩柳營に上りて新正を賀す。(八六七)

○四日金澤城二ノ丸御殿に火を失せんとして發見せらる。(八六八)

○七日前田治脩、德川家齊に若葉の祝儀を上る。(八六九)

○十四日本鄉邸に於いて福引を行ふ。(八六九)

○十五日米價高直なるを以て諸士にその用を節すべきを告ぐ。(八六九)

○廿四日安永九年以降早打使者に貸與したる金子の年賦返納を命ず。(八七〇)

○廿六日前田治脩、公儀代替に付德川家齊に誓詞を上る。(八七一)

○十村等に農事の勸奬に關して示諭す。(八七一)

○越中戸出村の十村又右衛門等、作食米及び夫食米の沿革に關する諮問に答ふ。(八七五)

二月　○朔日御馬廻奥村左郎左衛門養子市右衛門その下女を刺して自殺す。(八七六)

○二日石川郡富樫に火災あり。(八七七)

○二日火災の際無用の者の附近に群集することを禁ず。(八七八)

○四日本鄉邸の家老席等に猿若の所業を爲せることを發見す。(八七八)

○七日本鄉邸に於いて御領地奉行遠藤次左衛門の若黨出入商人を殺害す。(八七八)

○十六日前田治脩、重教夫人壽光院の爲に狂言を演ぜしむ。(八七九)

○十八日前田治脩の脚痛稍々癒ゆ。(八七九)

○廿四日前田齊廣金澤觀音院に宮參を行ふ。(八八〇)

○御作事方役人の出張したる際、町村に失費なからしむべきことを命ぜしむ。(八八〇)

○煙草口錢の徵收方に關して郡方に命す。(八八一)

三月　○四日前田治脩將に就封せんとするを以て道中の作法に關し告ぐ。(八八二)

○八日前田治脩就封の際の供人に旅費の增額貸與を許す。(八九〇)

○九日本鄉邸に洗馬の儀式を行ひ、且消防の練習を爲さしむ。(八九〇)

○十三日前田治脩就封の暇を受く。(八九〇)
○十五日前田治脩柳營に上りて徳川家齊に就封の辭見す。(八九一)
○十八日前田重教夫人壽光院西ヶ原の牡丹を觀る。(八九二)
○廿五日諸東香山路甚左衞門、大寨嶋に於ける横山山城守配下の行爲に對して抗議す。(八九三)
○廿六日前田治脩江戸を發して就封の途に上る。(八九四)
○前田治脩、在江戸の養母疾病の際親族よりの屆出によりて出府すべき許可を求む。(八九四)

四月
○九日前田治脩金澤城に着す。(八九五)
○十九日 江戸下谷廣徳寺に對し寶供米を増加寄進す。(八九六)
○廿三日前田治脩、徳川家齊より將軍宣下の賀儀を受く。(八九七)
○廿五日金澤城石川御門を修繕の爲河北御門より通行せしむ。(八九八)
○廿七日 富田庄左衞門・池田忠左衞門 越中五ヶ山に流刑を命ぜらる。(八九八)
○廿八日鷹巣村下田助等、前田治脩より鶴頭の贈遺を受け次いでこれを返却す。(八九九)

五月
○廿九日前田治脩、藩臣等よりの獻納等を領掌すべきことを命ず。(九〇三)
○廿六日前田治脩石川郡宮腰に行歩を行ふ。(九〇四)

六月
○四日本郷邸に前富山藩前田利與の行状に關し訴状を投ずる者あり。(九〇四)
○十三日前田治脩、増上寺に於ける徳川家重の法會に香奠を上る。(九〇五)
○廿八日役料知の支給を改法以前の状に復す。(九〇六)
○諸士たるもの、儉約を守るべきも武道を怠るべからずとの幕令を傳達す。(九〇七)
○十村等に百姓の奢侈を戒むべきを諭す。(九〇八)
○郡内各郡より村毎の田地の高を上申す。(九一〇)

七月
○朔日前田治脩石川郡出清水に行歩を行ふ。(九一一)
○六日人持組前田兵部の家來山本平藏その情婦を殺す。(九一二)
○十六日本日より河北・石川兩郡に於ける殺生を禁す。(九一三)
○廿六日大聖寺侯前田利物金澤城に上る。(九一四)
○廿八日江戸に於いて御歩中村甚藏歸邸の時刻に遲れ、後處罰せらる。(九一四)

八月
○十日富山侯前田利久の病危篤なるを以て使者を金澤より發せしむ。(九一五)
○十三日富山侯前田利久の卒去を弔する爲使者を江戸に出發せしむ。(九一六)

〇十七日前田治脩犀川に於いて御歩の水練を見る。(九一六)

九月 〇廿二日金澤城の菱櫓成るを以て祝酒を賜ふ。(九一七)

〇十日前田齊廣等金澤春日山に遊ぶ。(九一七)

〇廿八日徳川家齊、代替の爲新たに法度を頒つを以て受領の爲に發する使者を命ず。(九一八)

十月 〇十二日大小將吉田孫右衛門、前田治脩が邸前を通行する際その門を閉ぢざりしを以て處分を請ふ。(九一八)

〇十九日天德院表門通より火を失す。(九一九)

十一月 〇十四日石川御門の普請竣れるを以て本日より通行を許さる。(九一九)

〇十八日前田宗辰生母淨珠院の三回忌法會を江戸廣德寺に執行す。(九二〇)

〇領内風邪大に流行す。(九二〇)

十二月 〇十五日廣島侯淺野宗恒の訃金澤に達し次いで使を遣はして之を弔せしむ。(九二〇)

〇十八日永原半左衛門等先に城中に於いて塗笠を着用したるを以て遠慮を命ぜらる。(九二一)

〇廿八日馬廻組新三左衛門不行狀を以て知行を召放さる。(九二三)

〇廿八日火事に際し雨天なるも城内にて塗笠を用ふべからざるを告ぐ。(九二五)

〇晦日御異風豐島左門に新知を給し豐島流砲術を兩家に分つ。(九二五)

〇晦日御歩寺岡吉太夫不埒を以て知行を召放され、藤田嘉右衛門等十六人減祿を命ぜらる。(九二六)

〇晦日前田齊敬の童名の唱へ方を定む。(九二八)

天明八年　戊申　皇紀二四四八

正月 〇朔日前田治脩金澤城に於いて年頭の禮を受く。(九二九)

〇二日松囃子の儀を行ふ。(九三〇)

〇三日前田治脩、寶圓寺・天德院に參詣す。(九三〇)

〇四日射初・乘馬初及び打初の儀を行ふ。(九三〇)

〇十三日石川郡宮腰に火災あり。(九三一)

〇十六日領内の需要終了するまで干鰯等の屎物を輸出するを嚴禁す。(九三一)

〇二十日雨天火災の際は城中にて手笠等を用ふべきことを告ぐ。(九三二)

〇廿八日徳川家齊の前田治脩に贈れる鶴金澤に着す。(九三三)

〇晦日京都に於ける加賀藩邸類燒の難に罹る。(九三三)

二月 〇五日城中諸役所の火防を嚴にすべきことを命ず。(九三五)

〇六日前田齊敬、弓初及び具足着初の式を行ふ。(九三六)

〇十一日先に徳川家齊より贈られたる鶴を披露

す。(九三七)
○十八日薩島侯僕野重陳の使者金澤城に登る。(九三八)
○廿八日前田治脩金澤城内を巡見す。(九三八)
○廿九日前田治脩石川郡大野村より粟ヶ崎を巡遊す。(九三八)
○前田治脩、天德院に於ける豐安院殿の歸葬を指すべきを命ず。(九三九)
○篠生郡不動山の採鑛を禁止し、その仕法を議せしむ。(九四〇)

三　月　○六日前田治脩金澤を發して江戸に向ふ。(九四七)
○十八日前田治脩江戸に着す。(九四八)
○廿八日德川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞せしむ。(九四九)

四　月　○朔日町奉の大小將等、その職務執行に關し上申す。(九四九)
○朔日前田治脩登營に登りて歸國の禮を行ふ。(九五〇)
○三日本日より金澤城橋爪門續の修築を修繕するを以て通行を禁ず。(九五一)
○六日堀田侯前田利謙本藩邸に前田治脩を訪ふ。(九五四)
○七日前田治脩、會津藩邸に保科容頌夫人逗姫を訪ふ。(九五四)
○十一日此貴天皇に見舞を上る。(九五五)

○十七日前田治脩、德川家齊の紅葉山參詣に豫參す。(九五六)

五　月　○朔日十村等收作奉行の諮問に答へ、免稟膳の事を示して上申す。(九五七)
○十一日物價高直なるを以て江戸詰の諸士に扶持方代を繰り上げ貸與す。(九五八)
○廿三日丁銀の通用を圓滑にすべき幕府の令を傳ふ。(九五九)

六　月　○二日前田綱紀の子久丸の百回忌を寶圓寺に行ふ。(九六〇)
○九日金澤に地震あり。(九六〇)
○十二日前田重教の三回忌法會を江戸廣德寺及び金澤寶圓寺に行ふ。(九六〇)
○十三日金澤城橋爪門續等の修理成るを以て通行を許す。(九六一)
○十八日金澤城内の治番に小將組又五郎の與組等相當職に補す。(九六二)
○國内の田地持入十村肝煎等の收奪に關して要求す。(九六三)

七　月　○十三日江戸詰人に再び扶持方代を繰上げ貸與す。(九六四)
○十五日金澤針屋町に火災あり。(九六五)

八　月　○十六日薩島屋重兵衞菊亭助等執行を以て處罰す。

る。(九六五)

九月 ○十六日京都の桂姫、本郷邸を訪ふ。(九六六)

○十日馬廻組沖長右衛門、石川郡粟ヶ崎に至り暴かに死す。(九六七)

○十八日當年本納遠所米の半額を御召米とすべきことを命ず。(九六九)

○廿一日切金・輕目金の通用方に關する幕令を傳ふ。(九七〇)

○廿五日大小將太田彌兵衛の弟吉岡吉太夫出奔す。(九七一)

○廿七日大聖寺侯前田利物江戸に於いて卒し未だ喪を發せず。(九七二)

十月 ○九日諸士に御召米の代價を仕拂ふべきことを告ぐ。(九七二)

十一月 ○五日大聖寺侯前田利物の卒去を發表す。(九七三)

○十二日大聖寺侯前田利物卒去の報金澤に達す。(九七四)

○十七日大聖寺侯前田利物の遺骸江戸を發す。(九七四)

○廿六日廣島侯淺野重晟本郷邸を訪ふ。(九七五)

十二月 ○十日金澤卯辰八幡宮燒失す。(九七五)

○十七日馬廻組中川善五郎等金澤城内の勤番を懈るを以て處罰せらる。(九七五)

○十七日物價高直なるを以て江戸詰の諸士に扶持方代銀を割増支給す。(九七七)

○廿一日猪を捕へたるものに褒美米を給することを告ぐ。(九七七)

○廿二日德川家齊、前田治脩の廣式に歳暮の祝儀を贈る。(九七八)

是歳 ○廿七日大聖寺侯前田利考就封を命ぜらる。(九七八)

○變地の場所を良田に回復すべきことを命ず。(九七九)

○能美郡一針の農重兵衛孝行を以て賞せらる。(九七九)

就業 侯爵前田家囑託 日置謙

昭和十一年四月五日印刷
昭和十一年四月十日發行

【非賣品】

著作者 侯爵前田家編輯部
[illegible]

發行者 石黒文吉
[illegible]

印刷者 高橋壹吉
[illegible]

印刷所 明治印刷株式會社



